

Fate/reselect

Fate/reselect出張所

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Pixivにて四津谷案山子氏(@Yotutani_kakashii)執筆、キャラクターデザインをちとせ氏(@shiba_greene)担当、広報担当ワタクシ出張所ことカワセミ(@kawasemig1)、により連載中の作品『fate／reselect』のハーメルン投稿版です。投稿者≠四津谷案山子ですが、内容はPixiv版と変わりありません。代理投稿です。

追記：事情により投稿者がカワセミから四津谷案山子になりました。事実上、投稿者＝執筆者に・・・(2020/8/1)。

注意書

・大まかには、Fate／Apocryphaの世界観設定（冬木の第三次聖杯戦争により世界中に聖杯戦争が拡散等）を踏襲していますが、同一ではありません（今作の世界では聖杯大戦は発生していない等）

・また、Fate／Apocrypha以外のFateシリーズ作品、及びTYPE－MOON作品の設定も踏襲しています。一部では原作登場人物も出番があります。

・他方、独自解釈による設定もあります

・と、長々連ねましたが、基本的にシリーズ未経験の方にも楽しめるように作られているのでご安心ください。

- ・回せ、回転数が全てだ。
- ・感想などは我々製作陣が跳ねて喜びます。
- ・現在、p i x i vにて公開済みの最新話まで更新されています。以降は基本的に同時更新です。
- ・最新話以降はp i x i vとほぼ同時・ひと月に一話公開で更新されると思います。

目次

プロローグ『激動のセレモニー』	1
第一話『三騎士』	20
サーヴァントデータ集『第1話時点』	33
第二話『取引と信用』	38
第三話『襲撃』	52
第四話『ドッグファイト』	64
第五話『歯と舌』	75
第六話『魔女と魔獣』	83
第七話『英霊七騎』	95
第八話『策謀』	111
第九話『フルフェイス』	126
第十話『セフィロトの樹』	137
第十一話『ルーツ』	155
第十二話『獅子の相貌』	166
サーヴァントデータ集『第13話時点』	179
第十三話『途切れた繋がりの中で』	190
第十四話『ダーティプレー』	204
第十五話『師の流儀、弟子の流儀』	214
第十六話『シューティングスター』	234
第十七話『忌むべき物語』	245
サーヴァントデータ集『第17話時点』	257
第十八話『戦いの後に』	268
第十九話『ここから』	280
第二十話『熱い血』	293

Fate／r e s e l e c t 番外『ドラゴン学校』一学期	311
第二十一話『ボーダーランド』	321
第二十二話『故郷』	335
第二十三話『龍の守護者』	346
第二十四話『美学』	358
第二十五話『魔女狩り』	373
第二十六話『違法者』	392
Fate／r e s e l e c t 番外『ドラゴン学校』二学期	407
第二十七話『リビングレジェンド』	424
サーヴァントデータ集『第27話時点』	445
第二十八話『旅路の交差点』	456
第二十九話『最初の選択』	472
第三十話『日坂聖杯戦争』	484
マスターデータ集『第30話時点』	496
第三十一話『斯くして来たれり』	503
第三十二話『盾の矜持』	516
サーヴァントデータ集『第32話時点』	537
第三十三話『震え』	549
第三十四話『攻撃性』	563
第三十五話『魔剣』	576
第三十六話『抑止力』	585
第三十七話『閃光』	602
第三十八話『裏切り』	621
第三十九話『連鎖』	633
第四十話『ブラックアウト』	654

F a t e / r e s e l e c t

番外『ドラゴン学校』三学期

|

678

プロローグ 『激動のセレモニー』

チエックインした時から不快だと思っていた換気扇の音が、暗がりの中でまた気になりだした。

軸の金属部分が錆びているのだろうか、金属をこすり合わせた音が、一定のリズムで部屋に響く。もう慣れて眠りにつけたはずなのに、一度それに囚われると抜け出せなくなる。

暗闇の中で、決して忘れさすまいと鳴り続ける不快な音。キィ、と音が鳴り、そして次にその音が鳴るまでの数秒間の静寂。

繰り返されるそのリズムに、頭痛を覚え始めた頃だ。

——すぐに逃げろ！ 竜也たつや！

換気扇の音に引き出されるように、声が頭の中で響き渡る。

それは合間にあつた静寂に食い込み、絶え間なく金属音と声が脳内をかき乱していく。

——これを持っていきなさい！ 父さんも母さんもすぐに追いつく！

——鏡宮さんの所へ向いなさい……早くっ！

——聖堂教会……奴ら投降した人間も殺すのかよ！

これは昔の記憶、俺……読水竜也よみみずたつやを読水竜也よみみずたつやたらしめる言葉、トラウマだ。

——この光景を忘れるな、小僧。二人の苦しみを理解できるのはお前だけだ。

——竜也君、十年……十年、待っていないさい。絶対に二人を連れ戻せる奇跡を用意してあげよう。

——人のままくたばるか、外道になって生き抜くか……道は一つだ。

もう良い。俺は唸りながら身を起こしている。もう充分だ。

聞こえなくても分かっている。忘れてはいないし、忘れることなどできなかつた。

目を開くと、カーテンの隙間から溢れた日の光が乱暴に俺の目に飛

び込んできた。まどろんでいた脳内を光が乱雑にかき回し、覚醒していく。微かな頭痛に伴い、呼び起こされていた声が遠のいていった。

俺はカーテンに近づき、ヨロヨロとカーテンを開けていく。

見ればまだ日も出て間もないが、もう準備を済ませ、この部屋を出よう。俺は窓に背を向け、部屋のベッドの隣に置いていた革製のアタッシュケースをベッドの上に乗せる。

身支度を整え、椅子に掛けていたガンホルダーを身に付けた後、上着に袖を通す。ここブラジルでの仕事も既に終えたが、用心に越したことはないだろう。

そして最後に、机の上に置いておいた銀製のロケットペンダントを手取る。

俺はペンダントを開けてみる。親指の爪ほどの小さな木片が納められた父の遺品。由縁は未だ分からないが、別れ際に貰ったこれは父の遺品でもあり、誓いを揺るがぬものとする依代でもある。

もう少しいだ。俺はペンダントを閉じ、首に掛けた。四日後の今頃は日本に戻り、魔術師の家系の当主として聖杯戦争に参加することになる。運び屋として過ごしたこの十年の雌伏の時が報われる、そのチャンスを手に行うことができる。

部屋から出て、目だけで軽く人気がないかを確認する。周囲の安全を確認し、俺は後ろ手でドアを閉じようとしたが、ふと部屋の様子が気になり、振り返った。

滞在したのは三日ばかりだったか。雑誌が部屋の隅に束ねてあるだけの、殺風景な部屋。思えば十年間の合間に過ごした部屋の多くは、こんな感じだった。

もう二度と戻ることはあるまい。俺は必ず戻ると誓ったあの地に、帰るんだ。そう決意すると、俺はこの部屋の景色を静かに覆い隠した。

始まりはシスターからの一声だった。

「シユウジ神父。貴方宛のお手紙を預かっております」

この孤児院に着いてから一通り施設を見回り、事務所に戻ると、こ

の施設に務めるシスターが私に封筒を差し出した。

「ああ、ありがとうございます」

と、礼を言つて、受け取った封筒に視線を落とす。封蝋に押された印から、手紙は聖堂教会からのものとすぐに分かった。

私はふと顔を上げた。シスターが黙ったまま、私を心配そうに見ていたからだ。よほど難しい顔でもしていたのだろうか。

「……ああ、大丈夫。世話になった方からですから、別に大した要件は書いておりませんよ」

私はヒラヒラと封筒を振つてみせた。

「子供達も元気な様で安心しました。では、次の施設を見て回らないと行けないので……」

そう言つて頭を下げ、シスターの脇を通り過ぎて部屋を出る。

歴史ある修道院を改装して作られたこの孤児院は、現代的な施設を備えても外装は尚も荘厳さを失っていない。私はお喋りに興じながら歩く子供達の前で表情を崩さぬよう気をつけながら、この孤児院を出る。

駐車場に停めていた車に戻り、車体に背を預けながら固まった封蝋を無造作に割った。そして封筒の中に入った手紙を覗む。バンパアの歪んだ中古車だが、こうして背を預けると悲鳴を上げるように軋んだ音を立てる。

届け主は神父、マリオ・アルバーニ。私の養父であり、かつての上司。そして今尚聖堂教会、第八秘蹟会に身を置く男。

紙に反射する西日に苦しめられるが、私は目を手紙から離すことはできなかった。ただただ、そして何度も、手紙に書かれた内容を頭の中に反芻させる。

「……………」

手紙を読み終えた私は、ため息を着きながら顔を上げた。

夕日で影になってしまっているが、遠くにサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂が見える。ここフィレンツェに住んで四年経つが、いつでも行けると思つてしまい、そして終ぞ行くことがなかったな。そんなことを思いながら、手紙を指で折り畳んだ。

そして再び日本、それも故郷である忌まわしき日坂市に思いを馳せる。あそこで起きた悲劇、私の人生を大きく変えた一日を。

もう二度と戻ることはないと思っていたあの土地に私は、二度と復職することはないと思っていた代行者として帰ることになる。

私は目を閉じて、美しいと何度も見惚れたフィレンツェの夕焼けを心から追いやる。そしてあの頃の冷たさを取り戻し、手紙をポケットに押し込んだ。

この物語は、失ったものを拾い直す物語だった。
私にとって、そして彼らにとって。

それは必ずしも、幸福や栄光を得る物語ではなかったかも知れない。
い。

しかし私はもう、決して後悔することはない。

正月気分が抜け去り、寒さばかりが目立つ一月の半ば。

一人の男が日坂市の街に帰ってきた。

二十代前半の、痩せた体を着古したハンティングジャケットで包んだ男だ。荒れた生活を送っていたのか、髪はパサついており、垂れ目だが顔もどこか張り詰めたような雰囲気がある。

男の名前は読水竜也。かつてこの街に居を構えていた魔術師の家系であり、運び屋として十年間、世界中を飛び回ってきた男である。

そんな読水は日本に着いてからというもの、流れに身を任せるがままだった。

仕専用のアタッシュケースを回収し、電話の指示通りに日坂市に向かい、用意されたホテルで一泊する。

いつでも殺せる身だな、そう思わずにはいられなかった。しかしそれも、もう少しで終わる。聖杯戦争が始まれば、否が応にもあの男とは敵対することになる。

読水はホテルから出ると、このホテルを用意した人物……この街の有権者にて聖杯戦争の主催者、かがみやとる鏡宮悟に電話をした。

彼はたった二回のコールで電話に出た。

「やあ、良く眠れたかな？ 竜也君」

「おはようございます、鏡宮さん。たった今用意していただいたホテルを出たところです。これから儀式の準備に入るので、今のうちにご挨拶をしようとする……」

なるほど。と、鏡宮は察したように呟いた。

「……つまり、ここから戦争が終わるまでは敵同士になる訳だね」

「はい……貴方には返し切れない程の恩がありますが、俺にも叶えなきゃならない願いがある」

「そうだね……もう令呪は宿ったのかい？」

「ええ」

読水はチラリと自分の右手の甲を見た。波紋のような形の紋章。これは証。これから起こる戦争へ召喚者、マスターとして選ばれた証だ

「日坂に着いて、すぐに」

「ならば聖杯は君を、有資格者として認めたと。おめでどう……触媒はちゃんと用意できてるのかな？」

「流石にこればかりは、敵になる貴方の世話になれませんから……ええ、十年のうちに用意しておきました」

それから暫く、二人は無言であった。腹の中の探り合い、と呼べるものではない。読水はすぐに電話を切るべきとも思ったが、これを切れば次の瞬間には電話先の男が全力で自分を殺しにかかることになる。それが恐ろしかった。

次に言葉を発したのは、やはりというべきか、鏡宮の方だった。

「……じゃあ、そろそろ準備に入ると良い。協定を結びはしたが、これ以上連絡を取り合うような真似はしない方が良いだろう」

「はい……それでは」

電話はどちらが先という訳でもなく、切られた。

聖杯戦争。

二百年も昔、アインツベルン、間桐、遠坂の三家の魔術師が構築した、あらゆる願望を叶える聖杯を召喚させる儀式。

その儀式の歴史は血に濡れている。聖杯を手に入れるには、聖杯に認められた七人の魔術師は使い魔であるサーヴァントと共に、ただ一組になるまで戦い勝ち残り残らねばならないからだ。

七人の魔術師は聖杯に三画の令呪を与えられる。そして聖杯の力を借り、この世界に名を残した存在、英霊をサーヴァントとして召喚することができる。サーヴァントはそれぞれにクラスを持ち、他のクラスを持つ六組と覇を競うことになる。

剣士のクラス、セイバー。

弓兵のクラス、アーチャー。

槍兵のクラス、ランサー。

騎兵のクラス、ライダー。

魔術師のクラス、キャスター。

暗殺者のクラス、アサシン。

狂戦士のクラス、バーサーカー。

つまり聖杯戦争は、異なる時代に名を馳せた英霊七騎が現界し、聖杯を求めて戦う殺し合いなのである。

アインツベルンら三家は、日本、冬木市に満ちた霊脈を基に、過去数度に渡ってこの聖杯戦争を行った。そのシステムは回数を重ねる中で他の魔術師に評価され、今ではそのシステムは真に優秀であると認められた。

血を血で洗うような闘争の中でそのシステムは盗まれ、そして現在では世界中で三家が構築したシステムを模倣され、規模も質も様々な亜種聖杯戦争が執り行われている。

サーヴァントを召喚する場所は、この地に来る前より複数用意していた。

読水は他のマスター達に儀式を妨害されることを恐れ、読水は何人もの人間を雇いマンションの部屋や貸し倉庫などを借りている。もちろん、その多くはブラフ、そして本命の場所も状況に応じて変える気だった。

この日坂の地を離れて十年、読水は魔術礼装や魔導書等の希少品を

魔術師へ届ける運び屋として生きた。その運び屋としての勘は、後に敵となる鏡宮の厚意さえ警戒したが、読水は彼が自分をどのように扱うか探る為に敢えて彼が用意したホテルに泊まった。

結果として、鏡宮は彼に危害を加えることもなく袂を分かつことになった。マスターを一人減らす以上に効果のある策でも用意しているのか、あるいは本当に十年前の協定、最後の二組になるまで互いに交戦をしないという約束を守っているのだろうか。

どちらにせよ、これで自分が何重にも用意していた対策は徒労に終わった。読水は眠たい体に鞭打って、景色の変わった、かつて住んだ街を歩く。

今の所、追跡されている雰囲気はない。そう確認しながら、それでも念の為に遠回りを繰り返しながらサーヴァントを召喚する予定の貸し倉庫を目指す。

次第に雨が降り始めた。小雨だが一月の真冬だ、無視して雨晒しになれば風邪でも引きかねない。読水は舌打ちして近くのコンビニに寄り、ビニール傘を購入した。

引き続き目的地を目指そうと、コンビニを出た。

その時だ。視界の片隅に、黒いキャソックスを着た長身の男が見えたのは。

シュウジ・アルバーニに与えられた任務は、拍子抜けするほど簡単なものであった。

任務は魔術師、読水竜也が身に付けているペンダントを手段を問わず回収すること。そして任務に付いた時点で、代行者として復帰したものとする。

ペンダントの詳細は聞かされていないものの、第八秘蹟会からの命令である以上、何らかの聖遺物、あるいは聖遺物の可能性があるものと見て良いだろう。

対象を所有する魔術師の情報も与えられたが、以前に代行者として戦ってきた吸血鬼や異端者に比べれば、取るに足らない魔術師であった。

読水竜也。魔術師であるが、運び屋として世界中を飛び回っている男だ。魔術も多少は扱えるようだが、実戦的な魔術を扱う訳ではないということだ。

しかし……何より工房さえ持たない魔術師だということが問題だと、シユウジは彼の情報を確認し思った。魔術の探求をする者のほとんどは拠点とする工房を構え、その工房に強固なセキュリティを用意するものだ。隠れ潜まず、備えもない魔術師など恐れるに値しない。

そう、つい先程までは思っていた。

シユウジは読水を待ち構えるように、コンビニの前に置かれた灰皿の前で立っていた。読水はシユウジの横を通り過ぎる瞬間、その瞬間だけは目を見開いたように見えたが、そのまま歩き去った。

神父の格好をしたシユウジは、ここ日本では目立つだろう。当然、読水もシユウジを目で捉えたものとシユウジは判断した。しかし彼は振り返ることなく、どころか歩く速度さえ変わらないまま立ち去ろうとしている。

気づかれた、シユウジはそう感じた。隠れて尾行しているうちは気づかなかったようだが、一度シユウジを視界に入れた途端に彼は自分が追われていると悟ったようだ。

あるいは、聖堂教会に追われた過去でもあるのだろうか。シユウジは読水の背を目で追いながら、彼への理解を深めようと思いを巡らす。回収対象のペンダントを彼がいつから持っているか、情報にはなかった。第八秘蹟会が他の人間を使って回収を試み、そして失敗しているのなら、元代行者である自分を指名したのに納得がいく。

どちらにせよ、一筋縄ではいかないようだ。シユウジは口角を上げると、読水を追う為、傘を差さずにコンビニの屋根から出た。どれほどの実力があるか分からないが、気づかぬフリを決め込むなら、こちらには逆に大っぴらに追ってやろうと決め込んだのである。

数分の間、前方の読水は無反応に歩き続けた。やがて彼は駅前のデパートへ入って行った。

これが人混みに紛れようと講じた策なら、それは失敗だろう。いく

らデパートとて、視界から読水が消えるほどに人がいる訳ではない。シユウジはそう判断するが、それでも距離を離すことはないよう気をつけながら彼を追う。

読水はふと何か見つけたように、ゲームセンターの中へと入って行った。そしてクレイニングゲームが並ぶ狭い道を進んでいく。

人混みと騒音に紛れ、逃げようとしても企んでいるのか。魔術師としては俗な真似をするのだなど、シユウジは拍子抜けしながらも気を抜くことなく追跡を続ける。

この時点でシユウジは二つ、読水の思惑を看破できていなかった。一つ目は彼が、この状況では追跡してくるシユウジを撒くことなどできないことを承知していたこと。

そして二つ目は、彼がゲームセンターへ逃げ込んだのは、周囲の騒々しきで詠唱を聞こえなくさせる為だったことだ。

近くのクレイニングゲームのウィンドウが割れ、大きな音を立てた。そしてすぐ傍にあった格闘ゲームの画面、照明と、次々と物が破壊されていく。その異様な状況に、ゲームで遊んでいたものらが悲鳴を上げ、その場から逃げ始めた。

シユウジは見た。小さく素早い、鳥のような姿をした使い魔が、飛散する破片に紛れて素早く動き、破壊できそうなものに片っ端からぶつかり、叩き割っているのを。

何のつもりだ。シユウジの顔から血の気が引いた。

既に読水の姿が消えているのを確認すると、シユウジは出口へと走る客を押し退け、出口に急ぐ。しかし着いた頃には、読水の姿はなかった。

近場の客から周囲の客へと混乱と恐怖は伝染し、ゲームセンター内に限らずこの階層は一時騒然となる。この混乱に乗じて逃げるつもりなのか。

しかしシユウジが不気味に感じたのは、そんな表面的なことではない。

魔術師は世界の法とは異なる法をもって生きている。その第一に挙げられるのが、神秘の秘匿というものだ。

魔術とは常人には理解できぬ神秘であり、そして神秘であるからこそ魔術は魔術足り得る。シユウジもまた魔術を扱うが、魔術を使う際は人払いを行うなどして人を極力排除するのが常だ。神秘の秘匿という思想こそ、全ての魔術師が共通に持つ不文律なのである。

読水はその不文律を、容易く切り捨てた。

人払いを行うこともなく、公衆の面前で使い魔を操り状況を打破する。シユウジはこの行動の裏に隠れた、読水竜也という男の根幹に激情が沸き起こるのを拳を握って堪えた。この男は、魔術師としての矜持は持ち合わせていないのか。

デパートから抜け出た読水は裏通りに入り、壁に背を預けて喘ぐように呼吸を繰り返した。そして煩わしそうに、顔に貼り付けていた御札を剥がす。

『摩利支天の偽装符』、高値で買い取った魔術礼装だけある。またこれに助けられたか。

摩利支天の真言が書かれているこの格式高い札は、貼られている場所がどこであれ貼られていることに違和感を与えず、また貼られている対象の印象を薄くする。

魅了魔術の一種だが、効果は通常イメージされるものとは真逆の魔術。普段はハンティングジャケットの内側のガンホルダーに貼つてあるのだが、読水は指輪を媒介に使い魔を操って混乱を作り、そしてこの偽装符を顔に貼ることで、シユウジに顔を認識させなくさせ、周囲に溶け込んだのだ。

シユウジがすぐに出入り口に走ったのは想定外だったが、読水は彼のすぐ脇を通り過ぎて、そのままデパートから出てきた。

しかし、一か八かだったのは否定できない。もしシユウジが読水をアタツシケースを持つ男と認識していたり、服装からある程度当たりをつけて探してきたらバレてしまっていただろう。

読水は額の汗を拭い、震え始めた右手を包むように左手で握りながら、その場でしゃがみこむ。

何者だ、あの男は。読水は深呼吸を繰り返して昂ぶった精神を落ち

着かせつつ、今必要な情報を吟味する。自分と同じ、マスターなのか。気になるのはあの服装、神父……まさか、聖堂教会の人間か。

ただ一つ分かることは、あれが自分以上の実力を持つ者だということだ。ひよつとしたらあれが代行者、聖堂教会が抱える殺し屋かもしれない。だとすれば、自分の生還は絶望的とみて良いだろう。吸血鬼や異端者を相手取る連中に、一介の運び屋風情が太刀打ちできるはずもない。

……冗談じゃない。読水はアタツシユケースを掴んで立ち上がった。あと一步のところまで来たのに、こんなところで殺されてたまるか。

読水は裏通りを進み、人気のない場所を探す。打開策は一つ、一刻も早くサーヴァントを召喚することだ。幸い、用意した触媒は一級品だ。これなら自分が予測しているサーヴァントが確実に召喚されるだろうし、そのサーヴァントなら代行者にも、他のサーヴァントにも遅れを取ったりはしない。

読水はトタン屋根の倉庫らしき建物を発見し、ドアに警報装置がないのを一瞥して確認してからドアを蹴破った。

どうやら自動車の修理工場のようだが、人はいないようだ。念の為、人払いの結界を簡単に張る。

そして雨で濡れた髪を掻き上げながら、工場内を神経質に見渡していき、やがてよし、と頷く。ここなら召喚の儀式ができるだろう。

読水は唸り声を上げながら、儀式に必要なスペースを確保する為に置かれていた資材や工具を押し退け、投げ捨て、蹴散らす。そしてようやく魔法陣を引けるだけの広さを確保し、アタツシユケースから水銀が入った瓶を取り出す。

消却の中に退去、退去の陣を四つ結んで召喚の陣で囲む……十数分掛けて水銀で引いた陣を数歩離れて確認し、読水は空になった瓶を脇に投げ捨てた。

次に読水は、アタツシユケースから触媒を取り出した。

それは樫で作られた箱に納められた、古い本だった。命懸けで得た触媒も、全てはこの時の為にあつた。読水は慎重にその本を箱から取

り出し、魔法陣の中に置いた。

「良し……さあ、始めるぞ」

読水は再度距離を置いて、魔法陣の出来栄を確認する。急ごしらえだが、充分だと思えるものだった。後は、詠唱を唱えさえすれば令呪と聖杯の魔力が英霊を呼び寄せる。

読水は息を整え、魔法陣の前に立つ。そして令呪が宿った右手を、捧げるように魔法陣へと突き出す。

その時だ。

バン、と音を立てて自分が蹴破ったドアが開かれ、工場内へとシュウジが飛び込んできた。

「あつ……クソッ！」

神父を確認した読水は、そう叫びながら右手をジャケットの中に滑らし、拳銃を引き抜いた。

拳銃には『摩利支天の偽装符』が貼られているが、その挙動を見たシュウジは、舌打ちして腕を顔の前で交差させた。そして姿勢を低くし、読水の左側に回り込もうと駆け出した。

速い。読水は両手で銃を構える余裕すらなく、獣のように低い姿勢で駆け寄ってくるシュウジに向けて、片手で何度も引き金を引く。

銃声と着弾した弾丸が弾ける音が、工場内に何度も響き渡る。都合、三発。うち一発が神父の脇腹に当たった。

脇腹に銃弾を受けたシュウジは横殴りに倒れて地面を転がり、体をクレーンを支える柱に打ち付けた。

しかし、それだけで倒れる代行者ではなかった。シュウジはすぐに両手を地面に着けて飛び起き、屈伸した姿勢から何かを投げるように振るった。

それが何か、咄嗟に反応した読水は当初気づかなかった。自分の身を守ろうと拳銃の銃身で受け、掠めて火花を散らしたその剣のような何か黒鍵、聖書のページで作られる、代行者が得物に使う概念武装であることは後に気づいた。

「おわ……ッ!?!」

投げつけられたその剣に読水は怯むが、すぐさま手にした拳銃で反

撃する。シユウジは既に二本目の黒鍵を生成していたが、投げる間もなく次の銃撃が彼の腕を叩いた。銃弾を腕でガードしたシユウジは衝撃で背後の柱へと叩きつけられる。

無理だ。柱に磔にしたシユウジへと断続的に銃弾を送りながら、読水はアタツシユケースを掴んだ。銃弾を浴びて生きている人間に、致命傷を与えられる武器を読水は持たない。それに読水が握っている拳銃はリボルバーだ、微かに優位に立てているこの状況も、すぐに弾切れによって瓦解する。

工場の正面口に飛びつき、鍵を開けた読水は、脇目もふらずに逃げ出した。

「……奴め、いよいよ魔術師か疑わしくなった」

工場に残されたシユウジはそう毒づき、読水が落とした『摩利支天の偽装符』を踏みつけた。

「……クソッ」

袖を捲つて、銃弾を受けた腕の傷を確認する。腕はまだ使えるものの、撃たれた場所は青痣になっている。

シユウジは強化という魔術を使う。刃物に使えばより斬れる刃物に、腕に使えばより強靱な腕にと多様性に富んだ魔術だが、あの時はただの拳銃程度ならこの魔術で身体を強化するも、こうして突破されてしまった。

シユウジは知る由もないことだが、読水が使っていた拳銃はコルト・ローマンと言うリボルバーだ。銃自体は小さく作られているが、使用する弾は、357マグナム弾、鹿程度の中型の獣を狩猟するのにも使われている弾だ。一般的な拳銃弾として知られるものとは、威力の面で頭一つ飛び抜けている。

そしてもう一点、シユウジにとって想定外のことだが、今起こっていた。

袖を捲った際、ふと目についた手の甲の痣。よくよく見てみれば、それがまるで紋章のような形を象っていたのだ。

「……で、これか」

と、シユウジは顔を上げ、読水が残した儀式の後を見た。中央に残された古い本と、魔法陣の形、そして自身についた紋様……これが意味するところを、彼は口に出した。

「……聖杯戦争」

それは今や、聖堂教会の人間ならば知らないものはいないほどに知れ渡ったシステムだ。

聖杯戦争で奪い合う聖杯は、本物の聖遺物ではないとは言え、聖杯という名を冠する。その為、冬木の聖杯戦争では聖堂教会は監督役を派遣し、聖杯戦争での被害やマスターの保護といった仕事を行っていた。故に形式的なものになりつつあるが、亜種聖杯戦争においても聖堂教会は監督役としての立場を魔術師達から求められ、今や聖杯戦争をどの組織よりも把握していると言って良い状況にある。

しかし、少なくともシユウジはこの日坂市で聖杯戦争があること、そしてあの読水が聖杯戦争に参加するマスターであることを知らされてはいなかった。

ただの復職の為のセレモニーと想っていた任務が、途端にきな臭いものになってきたことに、シユウジは顔をしかめる。

そして一番の問題は、シユウジ自身にも聖杯戦争への参加資格である令呪が宿ってしまったことだ。

「……………」

恐らく聖杯戦争が開かれ、それが聖堂教会も認可したものとなれば、マスターである読水に代行者として手を出すことはできなくなるであろう。

しかし、今のシユウジはこの聖杯戦争の参加者として、公然と読水と戦うことが許されている。

シユウジはジツと令呪を見つめる。聖杯、魔術師の作った願望機などに興味はない。しかし、このタイミングで聖遺物の回収として派遣された意味、故郷で非公式と思われる聖杯戦争が開かれた背景、そしてもう手にする機会はないと思われた、十年前の理不尽な悲劇の理由、それらをシユウジを強く求めた……。

「……………」

シユウジは黙って、魔法陣の前に立った。

一方、読水はフラフラと歩きながら、心に降り積もった感情を時折壁を蹴ったり叩いたりしながら晴らしていた。

どうして触媒を回収できなかったのか、どうして『摩利支天の偽装符』を落としてしまったのか。

どうして代行者に自分が襲われなきゃならないのか。

どうして十年前、自分の家が聖堂教会に襲撃されなくてはならなかったのか。

「ちくしょう……ちくしょう……ちくしょう！」

どれだけ口に出しても、当たり前散らしても、何も変わらない。

それでも変わりたいから、こうして命を賭けて聖杯戦争に望んだのに、この様は何だ。

「……………」

視界がすーっと暗くなり、思わず読水は電柱に体を預ける。

まるで酔っ払いだな。と、読水は自嘲してしまう。気がつけば、すっかり日は落ちてしまっている。工場から逃げてから、どれだけ走ったかさえ、もう思い出せない。

……このまま国外に逃げるより、いつそ戻ってあの神父に殺された方が楽になるかもしれない。

そんなことを考えながら、読水は踊るように翻って塀に背を押し付け、顔を上げて……………」

そして、気づいた。背を預けた塀、そしてその壁の向こうにある建物がかつての自分の家だということに。

「……………嘘だろ」

バツと体を離し、屋根瓦を付けたその塀を見る。そして塀を伝うように正門へ。何かに取り憑かれたように向かうその脚は、徐々に速度を早め、そして終いには走りだす。

正門には錠がされていたが、構わず読水は脇の塀をよじ登る。そして塀の向こうを見た読水は。

「……………はは。まあ、そりゃそうさ」

と、乾いた笑い声を上げた。

焼けた屋敷は既に影も形もない。考えてみれば、この敷地は今も鏡宮が管理していると聞いている。焼け落ちた屋敷なんて残せるはずもない、解体してしまったのだから。

あれだけ走り回って遊んだ屋敷も、庭の木々も、もう残されていない。十年前の悪夢と共に、きつと他の者には過去のものとして葬られたのだろう。

しかし、一つだけ残っているものがあつた。正門から見て、敷地の一番奥に配置された土蔵。あれだけは火災から逃れ、残っているみたいだ。

確かあそこは、降霊術で来歴不明の品を調べ、保留あるいは不明と評価されたものを保管していた蔵だ。

その時、読水の脳裏に電流が走つた。触媒を失つたなら、また探せば良いと。

「そうだ……」

読水は扉から降り、土蔵へと走る。魔術を使つて土蔵にある物の由縁を調べていけば、ひよつとしたら英霊を召喚するに足るものが見つかるかもしれない。

土蔵は錠が取り付けられていたが、読水は思いつき引つ張つて錠前自体を扉から引き剥がした。

スライド式の扉を背で押すように開け、月明かりを頼りに周囲を見渡す。

緑に手入れもされてないのだろう。埃っぽい蔵の中には、陶器や刀剣、絵画や本に至るまで、あらゆる骨董品が雑多に積まれていた。

すぐに始めよう。と、読水は跪き、顔の左半分を左手で覆つた、そして右手で手近にあつた日本刀に振れる。

こうすることで、読水は覆つた左目で対象の過去を遡つて知覚することができる。『てんせきしゆつ辿跡術』と家では呼んでいたが、一般的にはサイコメトリーと呼ばれるもの、読水の一族が丹念に練り上げ、魔術刻印で子々孫々に伝えてきた家伝の魔術だ。

魔術師は親から子へ、魔術刻印を継承させることでその探求成果を

引き継がせ、発展させていく。そして読水家の当主として魔術刻印を引き継いだ読水は、一族が最期に残した品を掻き集め、未来を切り開こうと藻掻いていた。

読水の辿跡術は、対象の物に残された残留思念が多いほど読み解くのに時間が掛かる。外を走る車の音も聞こえなくなった頃、読水は疲労と焦燥感で視界が定まらなくなってきた。それでも希望を捨て切れず、手が届く範囲の物を調べ終わると、読水は柵の高所に置かれた物に手を伸ばして漁り始める。

次第に集中力も切れ、読水はまともな降霊術はおろか顔を上げることもできなくなってきた。手探りで柵の高所をまさぐり、掴んだ物からメチャメチャなやり方で起源を辿って見る。

柵から陶器が幾つも零れ落ちていき、読水の足元で割れていく。陶器が飛散する音を聞く度、ハツと神経が引き締められるように集中力を生み、また弛緩する。そんなことを繰り返していると、読水は足元の物に躓き、仰向けに倒れてしまった。

痛みに呻きながら目を開けると、柵から小物が落ちてくるのが見えた。

それを読水は手に取ろうとは思っていなかった。しかし、咄嗟に顔に当たらぬよう防御した右手に、それはすっぽり収まった。

その時、読水の脳裏に、ある光景が見えた。それは読水がかつて調べたどんな物より、迅速で強烈なイメージだった。

それは和装の女性だった。木枯らし吹き荒ぶ中、槍を手に下げて晴天を仰ぐ一人の……。

その凜とした強い瞳、傷だらけの十字槍。そして彼女が見上げる空には、一匹の龍が天に登っていた。

汚い天井を仰ぎ大の字になっている自分の姿にすら気づかず、少しの間、読水はその光景に見惚れていた。

「……………」

そつと、読水は右手に握られた物を見てみる。それは小さなお猪口だった。

「……………」

「誓いを此処に。われは常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

これが本当に正しいことなのか、シユウジには分からない。

しかし、かつての自分、沢尻周路さわじりしゅうじとしての人生を全て失ったこの土地の霊脈を吸って作られた聖杯に選ばれたというのなら、その意味を、あの理不尽の答えを、何としてもシユウジは知りたかった。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

私は、その光景を決して忘れることはないだろう。

私を殺そうとした男と、私の前に吹き荒れた暴風と、眩い光の渦。そしてそこから現れた、彼の笑みを。

「……どうやら、俺を呼んだのはあんたみたいだな」

彼はそう言うと、足元にいつの間にか描かれていた魔法陣から歩み出て、私を見下ろした。

「一応聞いておこうか？ あんたが俺の、マスターか……ってな？」
そう。

この物語は、失ったものを拾い直す物語だった。

私にとって、そして彼らにとって。

それは必ずしも、幸福や栄光を得る物語ではなかったかも知れない。
い。

しかし私はもう、決して後悔することはない。

第一話『三騎士』

サーヴァントを召喚させたシュウジは、真っ先に教会へと向かった。

シュウジを保護してくれた、かつての居場所。既に深夜と言える時間だが、シュウジの勘が当たっていれば、彼はまだ起きているはずだ。

戸は叩かれるより早く開かれた。扉を開けた、顔に深い皺と傷を刻んだ初老の男が、すっと影のように扉の前に歩み出た。

「……先生」

「任務完了の報告ではなさそうだ……入りなさい」

男はそう言うと、シュウジを聖堂に招き入れた。

マリオ・アルバーニ。シュウジの養父であり、上司であり、師でもあった男だ。聖堂の中ほどまで来てからマリオは鋭い切れ目を柔らかに細めて、口を紡いでいたシュウジを見た。

「……さて、まあ察しはしているが、どのような要件か」

シュウジは黙って右手を、描かれた令呪を見せた。

「ここで聖杯戦争をやるなどと、聞いておりませんでした」

なぜ、黙っていたのですか。と、シュウジはマリオを睨む。その剣幕に怯むことなく、マリオは聖堂を軽く見回す。

「……サーヴァントは、もう召喚したのか」

「……セイバー」

シュウジが合図を送ると、二人の背後、聖堂の入り口のそばの壁に背を預けた男が実体化した。

三十代ほどの、大柄な偉丈夫だ。肩に届くほどに伸びた茶髪に、貫禄のある笑みを浮かべた髭面。チェニツクの上に鎖帷子を着た大きな体を赤いマントで包むその姿は、往年の騎士を彷彿とさせる。

ほう。と、マリオはその姿を見て声を上げる。

「最優と評されるセイバーを引き当てたか」

「なぜ、黙っていたのですか」

シユウジは改めて言った。

「ここで聖杯戦争をするなど、任務に着く際に聞いていませんでした。あの男がマスターであることも」

「この地で開かれた聖杯戦争には異例なことが多い。私も君に指令を出した後、唐突に監督役に命じられたくらいだ」

マリオはそう言うと、横顎に刻まれた傷を撫でた。

「しかし……お前に令呪が宿るのは想定外だったが、こうなると指令も更新せざるをえんな」

「と、言う……？」

シユウジが促すと、マリオはシユウジに向き直った。

「読水竜也への任務は引き続き継続。それとは別に、お前は聖杯戦争に参加するマスターとしてやってもらいたいことがある」

マリオはそう言うと、ポケットからUSBメモリーを取り出し、シユウジに渡した。

「今回の聖杯戦争は直前まで聖堂教会に対し、秘密裏に準備されていた。そしてその参加者も、公に他の亜種聖杯戦争に参加できない者が多いらしい」

能力や経歴、家柄の都合でな。マリオはそう付け足し。

「そのデータには、聖杯戦争の直前にこの日坂市に来た、聖杯を手に入れるに相応しくない魔術師の情報が入れている。もしデータにある魔術師が令呪を宿しているのなら、優先的に打ち倒せ」

「……先生、聖杯は魔術師が作った紛い物です」

USBメモリーを見つめながら、シユウジは口を開いた。

「我ら聖堂教会の人間にとって、そんな紛い物を得るに相応しいものもないのでは……？」

「そのデータには、人を殺すことを何とも思わぬ者や、禁忌と指定された魔術を好んで研究するどうしようもない連中が記録されている。そんな者らに、奇跡の願望機を渡させる訳にはいかんよ」

「なるほど」

シユウジは頷き、USBメモリーをポケットに入れた。そしてマリオに向かって、深くお辞儀をする。

「ならば代行者としてこの任、謹んでお受け致します」

「うむ。靈器板……ああ、各クラスが召喚されたかを把握する品なのだが、それによれば、未だランサーのみ現界しておらん。急げば、相手がサーヴァントを召喚する前に手を出せるかも知れぬな」

そして。と、マリオはこう付け足す。

「すまんが以後、私は監督役として、君は聖杯戦争に参加するマスターとして動くことになる。当然、これ以降の援助はないものと思え」

マリオはそう呟くと、聖堂の中央を飾ってある十字架を見た。

「……なあ、シウウジ。聖杯には意思があり、聖杯を望む者を優先的に選別して令呪を与えるという」

マリオはそう言って振り返り、シウウジを見た。

「君が聖杯に選ばれたのは……悪しき者に聖杯を掴ませるなど言う、主のご意思のように感じないか？」

「……………」

シウウジはその言葉に、目を伏せ。

「私には、主のご意思など図れません。私は敵を、ただ全て切り払うのみです」

失礼。と、シウウジは頭を下げると、退出していった。

セイバーもそれを見送ると、シウウジに続く。しかし、ふと振り返り、セイバーはマリオを見た。

「……どうした？ 貴様のマスターが行ってしまっぞ？」

「別に、ただ変わらぬものだ、そう思ったただけだ」

セイバーはそう告げて肩をすくめると、マントを翻して霊体化してしまった。

その様子に、マリオは顔をしかめたが、セイバーが消えると溜息をつき、改めて十字架を見つめた。

「主のご意思、か……」

軽率な言葉であったな。マリオは一人、そう呟いた。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

読水は土蔵の中で、サーヴァントを召喚するべく詠唱を行っていた。

「誓いを此処に。われは常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

読水の詠唱がアクセルとなつていいのか、魔法陣から吹き荒れる風と光は、その強さを増していく。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よー」
読水が詠唱を終えた、その時だ。陣の中心に捧げた触媒であるお猪口が、真つ二つに割れた。

そして溜めた物を吹き出すように、一気に光が溢れ出す。それが収まった時には、周囲は土蔵の埃で満ちていた。しかも風のせいも、物がガラガラと落ちる音も聞こえる。

「……最悪だな」

これじゃあ成功したかも分からない。仮に成功しても、英霊がその汚さに拗ねかねない。そんなことを思った読水は咳き込み、本能的に新鮮な空気を求める。

そうして出入り口へと振り返った読水の瞳に、黒鍵の閃きが写った。

読水が何か反応をする前に、その剣は弾き落とされた。見れば、読水の顔のすぐ脇から槍が伸びていた。

その十字に広がった穂の部分、そして長い柄の根本へと、伝うように読水の視線が動いていく。そして槍の操者へ、自らが召喚したサーヴァントを、読水は見た。

それはお猪口に手を触れた時に見た、彼女だった。癖のある黒の総髪に、中性的な顔、凜とした力強さを持つ瞳。上は茜色の着物、下は黒の袴姿で、腰には脇差を差していた。

「……ランサー」

彼女を見て、読水はポツリと呟いた。

彼女は槍を突き出したまま、その声に反応してパツチリとした釣り眼を読水に向け。

「……ケホッ」

と、咳き込んだ。

そして次の瞬間、二の矢、三の矢と飛び込んでくる黒鍵。ランサーは読水の肩を掴んで自分の背に引き寄せ、槍でそれらを弾き落とす。落した。

「おいおい……またあいつかつ?!」

黒鍵を見て喚き、読水は拳銃を抜いた。ランサーはマスターである読水の盾になるように移動し。

「自己紹介は後に、マスター……今はこの場を切り抜けましょう」

「分かってる！ 行ってこいランサーッ！」

読水の叫びに応え、ランサーは土蔵の出入り口へと駆ける。

しかし、その出入り口を塞ぐように、大柄な男が実体化した。

獅子のような風貌に、奥底に光るものを感じる切れ長の目。そして鎖帷子にマントという出で立ちに、読水の顔が凍りつく。

「……ようサムライ」

男は右肩を戸口に預け、槍を構えるランサーを覗き込む。

「やろうか……ッ！」

そう言うと、男——セイバーは足を前に滑らせ、壁で隠していた右手の剣を、壁を突き破りながらランサーに振るう。

ランサーはそれを左右に伸びた十字の刃で冷静に受け止めるも、力負けしているのか、片足を後方にスライドさせた。

しかし、それで何とか踏み止まったランサーは受け止めた剣を、槍先を回して捌め取るように下方へ導く。そして姿勢を崩したセイバーの延髄目掛け、槍を引いた。

鎌のように首へ迫る十字槍を、セイバーは見もせずには剣で弾いた。そして、ならばと突き出された槍を後方へ跳び回避。そのまま土蔵の外まで一飛びで下がった。ランサーはそれを追い、同じく土倉から飛び出る。

読水も咳き込みながら、入り口へと駆け寄った。見ればセイバーの背後に、こちらを睨む、あの代行者がいる。

ヤバイ。読水は油断なく槍を中段に構えるランサーへと叫んだ。

「ランサー！」

「出ないでマスター！ 危険ですので、そこにおいて下さい！」
そうじゃない。読水は改めてセイバーを見た。

マスターはサーヴァントを見ることによって、その能力をある程度把握することができる。無論、サーヴァントの切り札とも言える宝具までは看破できないが、敵サーヴァントでも筋力や耐久性など、基本的なステータスなら確認できる。そのステータスから判断して、彼我の差は圧倒的だ。

それだけじゃない。セイバーの風貌や、手にしているロングソード、そして事の経緯から、彼の真名を読水は知っていた。

「奴はエル・シドだ！ お前が正面から戦って勝てる相手じゃあない！」

エル・シド——本名をロドリゴ・ディアスという。

十一世紀、スペインで行われたレコンキスタでその名を轟かせたカステイリヤ王国の貴族であり、多くの者に戦場の勇者を意味するカンペアードルと謳われた騎士でもあった。

時の王アルフォンソ六世との確執より、二度の追放をされても尚、彼は多くの兵士に慕われ、イスラム教徒が治めていたバレンシアを征服し統治した。

彼の死後、バレンシアは再びイスラム教徒に奪還されることになるが、彼の伝説的活躍は彼の生前より歌われ、現在は『わがシッドの歌』という叙事詩が残されている。その叙事詩と共にスペインでは、官公を恐れぬ家族愛や情熱を持つという国民性を象徴する英雄として、今尚も愛されている。

そんな国民的英雄を相手取る、このランサーは何者か。自分が十年掛けて用意したアレに、果てして勝てるのか。

疑惑と恐怖ばかりが頭に浮かぶ読水。そんな彼に、ランサーは振り返り。

「……大丈夫！ 信じて下さい、マスター」

と、口角を上げて言ってみせた。

「……と、言うは簡単だが？ ランサーよ」

セイバーは剣を肩に乗せ、顎を上げる。

「勝てる気でのいるのか？ この俺に」

「腕相撲でなければな、セイバー」

ランサーは槍を握り直し、セイバーに向き直る。

「案ずるな。お前に見合うだけの技を持つこと、今から思い知らせる」

ふん。と、セイバーは笑い、振り返る。

「おいマスター、今は手を出さんでくれよ。気持ちには分かるが、まずは真っ向から試合おうじゃないか」

その言葉にセイバーの後方にいたシユウジは溜息をつき、腕を組んで応えた。

その様子を見て、セイバーは申し訳なさそうに笑みを浮かべ、剣を振り下ろす。肩に乗せていた剣を、下に振り下ろす。それだけで彼のマントが舞い上がり、遠くに立つ読水の頬にまで風を感じさせた。

「良し……参れ」

その言葉を口火に、ランサーが前に飛び出した。

顔面、胴、肩口、そしてまた胴、都合四度の連撃。それをセイバーは、全て片手で持った剣で弾いて防ぐ。

五度目の突きは足元、それをセイバーは姿勢を低くし、剣で止める。しかしランサーは手の内の操作で槍先を回し、左右に伸びた刃でセイバーの剣を上弾く。

その技に、セイバーの体勢が大きく崩れた。ランサーはこの機を逃さず、彼の股目掛け、槍を振り上げた。

セイバーはその奇襲に、難なく対応した。彼は仰け反るように崩した体勢を腹筋のバネで戻しつつ、槍の柄を踏み付けて股への攻撃を抑え込んでしまう。

「それはさつき見せて貰った」

芸のない。セイバーはそう呟くと、踏み付けていた柄を横に蹴りつけて、ランサーに肉薄した。

剣に対する槍の優位性は、間合いの差と動作の細かさにある。その為には槍先を操作する柄の内側に入られると、自身を守る物がなくなってしまう。

しかし、それは高速で槍を操る手捌きより、その遥かに大きく重い

体が早ければ叶う話だ。

「……つと」

セイバーは声を上げて静止し、引き寄せられるどころか、そこから再び突き出された槍を剣で受け止めた。

続く乱打に舌を巻き、セイバーは槍を堅実に捌き、突風のように突発的に後方に飛び跳ねた。

「なるほど」

セイバーは距離を取ると、剣の切っ先でランサー、そして伝うように槍を指していく。

「槍を操作は小さく細かく……だから俺の動きより先んじ、制することができる。そしてその十字の槍、軽く躲せば左右に伸びる刃で裂かれる。受けるか大きく体を崩して躲すしかない」

良く出来ている。セイバーはそう評し、讃える。

「確かに良い……だがなランサー、それは槍の技としては、というだけだ。これは「rb:競技」>「ジヨスト」ではないぞ」

セイバーはそう言いながら、剣を下げたままランサーに歩み寄る。セイバーは左腕を肩の高さまで挙げると、もう一振りのロングソードを実体化させた。

「二刀……」

「覚えておけ。そういう小技の及ばぬところに、強者は君臨している」
ランサーの間合いにセイバーが何の構えもなく踏み入る。ランサーは躊躇なく、槍を突きこんだ。

セイバーはそれを右手の剣で薙ぎ、ランサーの体ごと宙に弾き飛ばした。

どっしりと構えていたランサーの体が槍に引っ張られ、両足は地に離れる。そして次の瞬間には、セイバーはランサーの真横にいた。

体を浮かせたランサーに、セイバーは左手の剣を振り下ろした。ランサーは身を捻って槍の柄でそれを受けたが、そのまま地面に強かに叩きつけられる。

地面を揺るがす程の衝撃に、再度ランサーの体は地面から浮き上がる。セイバーは足を上げ、そんな彼女の腹部を蹴り飛ばした。

ランサーは身を丸くしながら地面を信じられない速度で転がり、数度のバウンドを経て敷地を囲う壁に激突する。

瓦が浮き上がり、ランサーの周囲に落下するほどの衝撃。しかし彼女は、壁に激突した次の瞬間には体を起こし、セイバーに飛び掛かっていった。

「……激情家だな」

セイバーは渾身の力を込めたその突きを、難なく受け止め、ランサーの喉を狙った。

ランサーはそれを上体を反らして躲すと、そのままコマのように体を回転させ、彼の頭部目掛けて槍を繰り出した。セイバーはそれも片手で弾き、残る片方の剣で押し潰すように迎え撃つ。

ギロチンのようなセイバーの剣撃。ランサーはそれを、弾かれた衝撃を利用し、獣じみた動きで躲した。そして転がるように、セイバーと距離を置く。

そうして奮然と彼女は立ち上がったが。

「……ぐっ……ゲホッ」

と、苦しげに身を丸めると、痙攣するように咳き込む。その口からは、血が零れ出ており、額からも一筋の血が伝っていた。

あれだけのダメージを押して、反撃をしてきたのか。と、セイバーはその姿に敵ながら感心した。蹴りつけられて、そこで動かなくなってしまうのは付け込まれると踏んでの行動だとしたら、破滅的だが、英断と言えよう。

「ランサーッー！」

叫ぶ読水に、ランサーは手を挙げて応えた。まだ、大丈夫であると。「……なるほど、どうしようもない。力と速さ、そのどれもが私より遙かに上回っているが為に、通るはずの技も抑え込まれている」

まるで子供と大人の戦いだ。ランサーはそう評価すると、構えを解いて棒立ちになる。

「失礼した。確かに貴方は、私よりずっと強い」

「……分かってくれたかな？」

余裕の表現か、そっぽを向いて悠然と応じるセイバーに。

「故に……っ！」

と、ランサーは鋭く叫ぶ。

「小細工を使わせて貰います……っ！」

ランサーはそう言うのと、柄を掴んでいた右手を離す。そして人差し指と中指を突き出した握り拳を作る。

ガンドの類か。後方から見ていたシユウジは警戒する。相手を指差すことで呪う北欧の呪術だが、その最上級のものはフィンの一撃と呼ばれ、物質的な破壊力さえ有する。極めるのは難しいが、使い勝手の良さからか、過去多くの敵からシユウジは指差されてきた。

しかし、ランサーのそれはガンドではなかった。

彼女は自分の後方を、振り返ることなく指し示す。そこにあるのは、衝突の衝撃で瓦が落ちた壁だ。

彼女は後方を差した手を、何かを投げつけるように勢い良く振った。

すると、後ろに転がっていた瓦が飛び上がり、ランサーの指に引つ張られるように弧を描き、セイバーに迫る。

セイバーはそれを、両の剣で払い落とす。

それを確認したランサーは、セイバーを睨んだまま、間を置かずに指で土蔵を指し示す。すると、今度は屋根に敷き詰められた瓦が一斉に音を立て、宙に巻き上がる。

ランサーの指は指揮者のように動き、それに伴って宙に浮いた瓦が飛来し、上空から真下のセイバーへと振り下ろされる。

「鬱陶しいー！」

セイバーは降り注ぐ瓦を前方に駆け抜けて避け、そのままランサーに迫る。

ランサーは舌打ちし、槍を両手に握る。そして一撃、二撃と繰り出されるセイバーの剣撃を、体勢を崩しながらも受け流していき。

「マスターッ！ 蔵の中へ！」

そう叫ぶと、ランサーは身を投げ出すように後ろに飛び込んだ。

それを追ってセイバーも前に出たが、後方から飛来してきた何十もの瓦が直撃し、思わず怯んでしまう。

その瞬間をランサーは逃さなかった。彼女は足を地面に滑らせながら体勢を整え、槍を逆手に持ち構えると、一息にセイバーに投げつけた。

そしてセイバーがそれを弾いている間に、ランサーは先程の印を両手で結び、一本背負いでも行うかのように土蔵を指差すと。

「づあああああッ!!」

叫び、全身を使って思い切り引き抜いた。

土蔵は屋根を引っぱられ、セイバーが破壊した壁を中心にくの字に折れ倒壊を始めた。

面食らうセイバーに背を向け、ランサーは崩れる土蔵の中へと全力で駆け込む。その真意に気づき、セイバーが駆け出そうとした瞬間には、屋根はセイバーの前で地面に激突し、凄まじい音と粉塵を上げた。

「……クソ。マスター! 無事かッ!」

セイバーは歯噛みし、振り返る。

「問題ない! それよりセイバー、まだやれるか!」

「どこもやられちゃあいない!」

そう答えているうちに、シュウジはセイバーの横に駆け寄る。その手には、既に黒鍵が握られていた。

「よし……なら追え、もう手合わせは充分だろう!」

セイバーは息を整えるように一息つき、そんな彼を見るが。

「……いや、それは下策だぞマスター」

と、顔を上げ、顎でシュウジにそちらの方を見るように示した。

シュウジもそれに従い、彼が示した方向を見た。

「あやつに背を向け、ランサーらを追うのは、流石に御免被りたい」

セイバーが指し示した先には、電柱の上に青年が立っていた。

引き締まった体を黒い衣装で包み、その上に黄色の漢服を片肌脱ぎに着崩している。艶のある黒髪は後方に撫で付けられており、そして一番印象的な、不遜をそのまま顔に貼り付けたような笑みを湛えている。

彼はシュウジ達をジット見下ろしていた。そして彼は隠すことな

く、その手に赤い弓を持っている。

「……おう、マスターよ」

「ああ、アーチャーだ。気を抜くな」

「無論だ」

二人はそう確認し終わると。

「……で小僧、こんな夜更けに一体何の用だ？」

と、セイバーが電柱に立つその青年——アーチャーに剣を突き付けて問うた。

「別に用という訳じゃあないが……」

アーチャーはそう言って、肩をすくめてみせる。

「ただお前こそ、この夜更けにあれだけ派手に暴れたんだ。一体何事だと、気にならない方がおかしいだろう」

「ほほう。なら、お前さんも少し遊んでくか？」

そう煽るセイバーを制し、シユウジが前に出た。

シユウジは思考を巡らす。何も手当たり次第にサーヴァントを討っていく必要はない。要は任務さえ遂行できれば、シユウジにとつては何も問題ないのだ。

先程の戦いを、どれだけの魔術師達が見ていたかは知らない。しかし、少なくとも目の前のアーチャーのマスターだけは、エル・シドの強さを認知したはずだ。それならば……。

「貴様のマスターは？」

「さて、答える義理はないな」

そう言うな。と、シユウジは黒鍵を柄だけの状態に戻して服の中へと仕舞う。

「お前のマスターに伝える。セイバーのマスターが、直接会って貴公と取引したいと申し出ていると」

一方、アタツシユケースを抱えたランサーと、それを追う読水は、月明かりの下でフラフラと走っていた。

「いてて……いやー、セイバーは強敵でしたね」

「もう二度と……良いか？ もう二度とだ。てめえの指図は受けない

と、俺は決めたからな」

とりあえず、隠れる場所を探そう。と、読水達は日坂市の街明かりへと消えていった。

サーヴァントデータ集 『第1話時点』

クラス：セイバー

【真名】：エル・シド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）

【アライメント】：秩序・中庸

【性別】：男性

【身長・体重】：182cm・90kg

【ステータス】

筋力：B＋ 耐久：B 敏捷：A 魔力：D 幸運：C 宝具：A

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【保有スキル】

・カリスマ：C＋

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

レコンキスタの英雄でされながらも、異教徒の者とも親交を持つカリスマ性を生前に示した。

・軍略：C＋

多人数を動員した戦場における戦術的直感能力。自らの対軍宝具行使や、逆に相手の対軍宝具への対処に有利な補正がつく。

・カンペアードール：A－

ランク：C+ 種別：対軍宝具

レンジ：― 最大捕捉：100人

■■■■での逸話を具現化させた常時発動型の宝具。

周囲の物体を念動力によって総動させ、防衛に用いる。飛来する物体に魔力的能力はなく、あくまで防衛の為の宝具である。また宝具を発動している際は、片手で印を結ぶ必要がある。

第二話 『取引と信用』

「……つまりだ、ランサー。お前は俺に、真名を明かす気はないということか？」

「いえ、その判断の為、少しだけ時間を頂きたく……」

椅子に座る読水の前で両膝を合わせ、頭を床に付けたまま口籠るランサー。東洋人だとは思っていたが、この所作やこの言動は間違いなく日本人だろうなあ。そんな予想を脳裏によぎらせながら、読水は溜息をついた。

事の発端は、三時間程前。セイバーと代行者から逃げ切った読水達は、聖杯戦争前に借りていたマンションの一室に逃げ込み、ようやく一息つくことができた。

安全を確認した読水は、そこで正午まで力尽きたように眠り込んだ。そして起きるなり、警護をしていたランサーと向き合う。

「……すまん。状況が不味かったから聞く暇もなかったが、まずは真名を教えてもらえるか？」

「……え？ 知らないまま呼んだんですか？」

怪訝さ半分、驚き半分といった顔をするランサー。

実はな。と、読水は気まずさはあつたものの、これまでの経緯、元々先程戦ったセイバー、エル・シドを召喚する予定だったこと、それをあの代行者に奪われ、ランサーの触媒を魔術で探り当てたことを説明した。

「魔術で……？」

「ああ、辿跡術……サイコメトリーって言って、分かるのか」

「召喚の際、現代の知識を聖杯から与えられますので」

そう言って、ランサーは頷く。

「そうか。と言つても、漠然としたイメージだった。蔵にあつたお猪口を手にした時、お前と……天に昇る竜を見た」

その言葉が不味かったらしい。それを聞くなり、彼女の顔は青くなり、口をつぐんでしまった。

話を聞くに、その龍は後世に伝えられてはならないものだったらしい

い。真名を明かすことで、その竜と自身の関係を悟られることを恐れているのだという。

「俺達魔術師で言う、神秘の秘匿みたいなものか？ 要するに俺がその情報を悪用しない男と信用できるまで、真名は明かせられないと……」

「マスターに対し、無礼とは思いますが……どうか」

「んー、なんなら令呪を使っても良いんだが……」

「嗚呼それだけは！ それだけはご勘弁を！」

冗談だよ。と告げながら、読水は自身の令呪を見る。マスターに与えられる令呪は三画。特段悪意があるような英霊には見えないし、こんな無駄遣いは避けるべきだろう。

「もういい。顔上げてくれ……もう一つ、セイバーについてだ」

「はっ」

「エル・シド……スペインの大英雄。奴と戦ってみて、どうだった」

「……」

ランサーはゆっくりと顔を上げた。その顔は、悔しげに眉間に皺を寄せていた。

「……まともに打ち合えば、まず負けるでしょう。小細工を弄しても、逃げに回るのが精一杯です」

面目ない。と、彼女は再び顔を伏せたが、読水はその言動を好意的に受け止め、頷いた。やはりこのサーヴァント、馬鹿じゃあない。その事実が、何より読水を安心させた。元々逃げ回ってばかりの生活だった読水には、虚勢も張らずに逃げを選べるこのサーヴァントとは相性が良いと思えたのだ。

「もう一つ……どうにも私の能力が、著しく落ちているようでした……」

「ん？ 俺からの魔力が足りてないってことか」

「い、いえ！ そうではなく！」

彼女は慌てて顔を横に振った。

「というより私本来の能力が、そもそも制限されているようなのです。呪いの類ではないと思うのですが……」

何か心当たりは？ そう尋ねるランサー。読水は腕を組んで瞼を閉じ、これまでの出来事を頭の中で思い起こしてみた。幸い、家伝の魔術のお陰で記憶力には自信があるのだ。

「……あ」

「おお、何か覚えがありますか……?!」

「そう言えば、召喚の直前に触媒が真つ二つになってたな……」

「えっ」

「いや、おい、ちよつと待て、別に召喚に問題はなかったはず……いや、待て待て待て」

そう弁明する読水に対し、割れたのですか、とランサーは悲しげな顔をする。

「でも、だ。でもだぞ？ そもそもお前が蔵をぶち壊さなきゃなあ、触媒だって回収できたんだ」

「嗚呼……何ということ。いや、しかしマスター待って下さい、それと能力の件とは……」

「ハイ、この話やめやめ……ッ！ 今さつき、連絡が入ったから……ッ！」

と、読水は椅子から立ち上がり、ケータイを見た。

話を逸らす作法は、昔も今も変わらぬものですね。そう言つてむくれたランサーはそつとカーテンの端を持ち上げて、外の景色を眺める。

……やはり、日本人だ。読水はケータイの画面を確認しながら、そんな彼女を観察していた。ならば尚更、あの時見た光景を彼女が隠そうとするのも納得がいくというものだ。幻想種の頂点とされる竜種など、そう容易く現世に現れる存在ではない。

「よし……ランサー、出かける前に言っておくぞ」

と、読水はケータイをポケットに入れ、改めて向き直った。その様子を見て取り、ランサーも片膝をついて控える。

「あの代行者の目的は分からないが、今後も俺達を狙ってくるはずだ」「はっ」

「だが勝てない以上、俺達は逃げに徹するしかない。お前のランサー

としてのプライドを傷つけるかもしれないが、ここは堪えろ」

これは言うべきか、どうか。一度読水は次の言葉を続けるべきか迷ったが、今しつかりと言うべきと、こう続けた。

「潔く戦って死のうなんて思うな。とにかく生き続けることを考えろ」

「……分かりました」

その言葉を黙って聞いていたランサーは顔を上げ、ニツと笑みを浮かべた。

「……私は、良きマスターに恵まれました」

そう顔をほころばせると、顔を伏せて言った。

「今は名も名乗れぬ身ながら、お誓い致します……我が主は貴方であり、私は貴方の守護者たらんことを、ここに」

その言葉を聞き受けた読水は、頷いた。

「分かった。じゃあ、出かけるぞ」

「マスター、どちらへ向かうのですか？」

「買い物だ」

「買い物……ほう？」

首を傾げるランサーを笑い、読水はテーブルに置いていた拳銃をガンホルダーに納め、上着を着た。

「そう、アダムに会う……ついでに、お前の服も買わないとな」

シユウジは、日坂市郊外を歩いていた。肌を切りつけるような風の中に、他の人の気配はない。

しかし無論、一人ではない。シユウジは念話で、霊体化しているセイバーを確認する。

“セイバー”

“問題なしだ、マスター……前方のアーチャー以外な”

そうか。と、シユウジは深呼吸し、前方を見据えた。まだ遠いが、目的の洋館……鏡宮の邸宅は、既に見えている。

古い邸宅が、充分な間を空けて建てられている付近の環境は逃げ場がない。アーチャーにとっては、自分を狙うことなど容易いだろう。

昨夜、傍観していたアーチャーに交渉を持ちかけたところ、現在向かう先の鏡宮邸を交渉場所に指定された。

鏡宮悟という魔術師のことは、ここに来る前に調べはつけてある。この日坂市の有力者であり、この亜種聖杯戦争の開催者。ならばシユウジが持ちかける交渉を、無視はできないはずだ。しかし……。

“頼んだぞ、セイバー。流石に英霊と張り合う自信はない”

“ああ……しかし、かの代行者様が随分と弱気だな”

“当然……見たか？ あの自信に満ちた顔”

“おうとも、あのニヤケ面、余程自信があるのだろうか”

虚勢でなければ良いがな。そう言つてセイバーは苦笑し。

“あのランサーとは対象的だな。彼奴は驕りも、卑下することもしない。自分の実力を、そのままに理解していた”

“……そのランサーだが”

と、シユウジはセイバーに切り出した。

“終始圧倒していたように見えたが、何か感じるものはあったか？

真名が分かる切っ掛けでもあれば、尚のこと良いんだが”

“……そうだな”

と、セイバーは声を潜め、記憶に言葉を浸すように切れ切れに話し始めた。

“俺より弱く、遅く、だが討ち取れなかった……勘は良いな、それに女だてらに槍の腕は騎士顔負けだ”

サムライのようだったしな。と、セイバーは面白そうに加え、言葉を繋げていく。

“厄介なのは二つ。あの槍の技巧と、奴が小細工と呼んでいた、物を宙に浮かせて飛来させるアレだ”

アレか。と、シユウジは顔をしかめる。

正面から勝てないとみるや、ランサーが使い始めた能力。修験道のように右手で印を結んでいたが、ただの魔術には見えなかった。恐らく固有のスキルか、宝具なのだろう。

“セイバー、でもアレは……”

“フフ……そう、片手になる”

その通りだとも。セイバーの声に、笑いがこもっている。それは弱点を看破している喜びか、マスターである自分がそれを見抜いていたのを喜んでいたのか、シュウジには分からなかった。

“あの術を行うには、槍から片手を離さなければならぬ。つまり槍とあの不可思議な技は両立しない……で、あるなら、対応するのは容易い。次は討ち取れるさ”

そう言っただけで笑うセイバー。それに対し、なるほどな、とシュウジは口元に笑みを浮かべた。

“スペインの大英雄、エル・シド。戦場の勇者と呼ばれた貴方の實力は、やはり本物だ。”

“だが今はただのサーヴァント、お前の使い魔に過ぎない。それに……”

俺は英雄じゃあなかった。と、セイバーは自嘲したように言った。

“……どういう意味だ?”

“お前も神に仕える剣だ。直に分かる”

そら、そろそろ目的地だ。セイバーはそう話を濁しながら、再度ランサーとの戦いを思い起こしていく。

マスターであるシュウジは言わなかったこと、言えなかったことがある。槍とアレ、二つの厄介を扱うランサーの、もう一つの厄介。それは扉まで蹴りつけた直後に見せた、あの不気味な激情だ。

怯むべき時に怯まず、場の流れを崩す狂乱。本来であれば取るに足らない、女ならではの直情などと片付けければ良い。しかしあのランサーの激情の中には、反撃を躲すだけの理性も、勘も、技量も残っている。だからこそ厄介なのだ。

この国で侍、武士と呼ばれた連中の存在は、聖杯に与えられた知識で掴んでいる。もはやこれまでと、起死回生の一撃を試みる、あるいは自ら腹を切る……彼女からは、そんな潔さを感じない。

彼女からは見られるのは、むしろその逆。命を捨てるのではなく、命を拾う為に破滅の淵まで身を躍らせてチャンスを掴む。そんな危うさをモノにしている。

ひよっとしたら、武士ですらなかったのかもしれないな。そうセイ

バーは思い、彼女について結論をつけるのを控えた。彼女をただ能力だけで計ると、あの激情に食われかねない。

今はランサーの真逆と評した、アーチャーの狩場の前だ。この若いマスターを守る為、警戒しなければならぬ。セイバーは改めて身を引き締めた。

鏡宮の邸宅は、古い洋館であった。

鉄柵で設けられた門を通ると、洋館との間に庭園が広がっていた。庭園はひどく澄んだ円状の池が中心になっており、名は分からないが、色彩豊かな花々の合間にミントが生えていた。またここからでは見にくい、洋館の横には小さな温室も見える。あちらはきつと、魔術師として必要な野草等を栽培しているのだろう。

洋館はフィレンツェで見た建物とは様式が異なるように見えるが、相応に古いものに見える。こうして洋館などを見ると、十年近くフィレンツェに滞在していたのに何も学んでいなかったのだと悔やまれる。

洋館の基礎は庭から一段高い位置に建てられており、アーチャーが柵越しにこちらを見下ろしていた。シユウジはアーチャーから視線を外さずに庭園を通り。

「約束通りに来た……そちらに行っても？」

その問いにアーチャーは、どうぞ、と言うように片手を挙げた。シユウジは頷き左右に広がる階段を登り、洋館の玄関前に到着する。

「マスターは館内か？」

「そうだ。だが、セイバーはここに居てもらおうか」

と、アーチャーは口端を上げて言った。

「安心しろ、館に罠はない」

「どうか……？」

シユウジはそう呟きながら、念話でセイバーを呼びかける。

「セイバー、どう考える？」

「魔術師という奴は、昔も今も信用できん。連中の工房ともなれば、尚更のことだ」

“それでも、今ここで引き下がる訳にはいかない。虎穴に入らざれば虎子を得ず、だ”

“急いで結婚すればゆっくりと後悔が募る、と俺の国では言うがな”

“……それでも妻を愛するが、君達スペイン人だろうか？”

勿論だとも。そう言ってスペインの国民的英雄は、シユウジの横で実体化した。

「ここでお前と待っていれば良いのか？ アーチャー」

セイバーが悠然と笑みを浮かべて問うと、アーチャーは頷き。

「俺のマスターは、入って正面の応接間で待っている」

とのことだ。そう言ってセイバーは、どうぞ、と先程のアーチャーのように片手を挙げる。

シユウジはその仕草に溜息をつき、二人が下らない喧嘩を起こさぬよう祈りながら洋館に入ってしまった。

洋館内の落ち着いた雰囲気の調度品に目をやりながら、それでも警戒を怠ることなくシユウジは応接間に入った。

鏡宮は対面するソファーに腰掛け、組んだ両手の上に顎を乗せていた。シユウジが見た感じだと、五十半ばの中年の男だ。深いほうれい線や疲れたような顔付きは年相応のものだが、入室したシユウジを見上げたその目は、身を包んでいる黒のタートルネックと相まってカラスのような不気味な印象を与えた。

「自己紹介の必要はないだろう……少し玄関口で揉めていたようだね。気に障ったのなら申し訳ない。あれは少々、人を食ったような性格をしているから……」

立ち尽くすシユウジに鏡宮は低い声でそう言い、立ち上がり歓迎するように両腕を広げた。

「さあ、中に……それで代行者殿、私に何か話したいことがあると聞いているが……？」

「ええ」

シユウジは頷き、鏡宮に招かれるままにソファーの手前まで歩み出る。

「長居するつもりはないので、こうして話させて頂く。鏡宮さん、私がこうして貴方の前に立ったのは、貴方とはこの聖杯戦争で何も争う必要はないと判断した為です」

鏡宮はその言葉を聞き、先程座っていたソファアに座り直した。

「……続けて」

「私はただ、代行者として追わなければならない者がこの聖杯戦争に参加している為、このセイバーを召喚し、この聖杯戦争にマスターとして参加しましたに過ぎません」

「聖堂教会がそちらの事情で、聖杯戦争の参加者を排除すると?」

「おかしいなど言いたげに鏡宮はソファアの背に上半身を預け、笑った。

「聖堂教会には、既に話は通しているはずだ。なのに君達は、私が開催しているこの聖杯戦争に横槍を入れると……?」

シュウジは黙って腕を挙げ、令呪を示した。

「私も参加者だ。マスターが他のマスターと争うのは、何もおかしくはないはずだ」

「……なるほど。つまり、そのお尋ね者の中に私が入っていないから、君と同盟を結べと?」

「貴方に助力を求めている訳ではない。ただ、我々の邪魔をしないだけで良い」

「互いに不干渉であれば良いと言うことか。こちらにとっては、競う相手が減るだけで不都合はないと」

「目的さえ果たせば、セイバーは令呪で自害させる。そちらには何の不利はないだろう」

「……ふむ」

鏡宮は顔を伏せて熟考し、やがて顔を上げて言った。

「ちなみに、君が狙う者の名は?」

「言う必要はないはずだ。もし貴方がその目的の相手と戦っていた途中であっても、こちらの登場に合わせて退けば良い」

「協定を結んでいると、他の参加者に勘ぐられないかな?」

「最優のセイバーを前に退いたとして、違和感があるとも思えない」

結構だ。と、鏡宮は両手をポンと合わせた。

「受けよう、その不戦協定。ただし条件として、君は他の者とはこの協定を結ばず、また口外しない……それでどうだね？」

シユウジは鏡宮の条件を聞き、少しの間その意図について考えたが。

「分かった」

シユウジは鏡宮の条件を承諾することにした。既に監督者であるマリオオから、正式な聖杯戦争の開催が宣言されたと連絡を受けている為、他のマスターと接触する予定はなかった。

「ありがとう……口頭だけでの協定だ、確認しておこうか」

鏡宮はそう言うのとソファから立ち上がり、指で数えながら協定内容を唱え始める。

「一、君と私は戦わない。二、君が私の前に現れた時はこちらが身を引く。三、君は目的を果たし次第令呪でサーヴァントを自害させる。四、君はこの協定を他のマスターと結ばず、また誰にも口外しない……間違いはないね」

ああ。と、シユウジは頷き。

「じゃあ、私はこれで……そろそろ戻らないと、サーヴァント達が勝手に協定を破りかねない」

そう言うつてシユウジは頭を下げ、退出した。その背に、鏡宮のカラーのような視線を感じながら。

無印良品の店に向かうと、ランサーは霊体のまま手早く読水に買うものを指定してきた。

チエツクのシャツに、スキニーパンツ。スニーカーを履き、出来ればこれもとベースボールキャップもねだってきた。

「……すげえな」

女性用の衣服を一式買うことに結構な抵抗があった読水だが、着替えてきたランサーを見て、思わずそう呟いた。

「聖杯から与えられる知識には、現代のファッションセンスも含まれるのか？」

「流石にそこまでは……これは道行く女性らの格好を見て学んだので
す。季節の割には、少々薄着かも知れませんが……」

「似合いますか？」と笑うランサーに、読水は頬を掻く。

「少なくとも、昔の人間とは思われないだろうな」

「それは良かった」

「そんなお前に朗報だ」

持ちましようか。と、気を良くして読水の持つアタッシユケースに
手を伸ばしたランサーを払いつつ、読水は河川敷を進む。

「これから会うアダムに、もう少し服のバリエーションを増やして貰
おうと思う。ここからは、ひたすら逃げ隠れする訳だからな」

「なるほど、承知しました。その、アダムという男はどのような者なの
でしょうか？」

「……さあ？ 俺も本人には直接会ったことない」

「……ど、どういう意味でしょうか？」

直ぐに分かる。そう言っ読水は、川沿いに建てられた小さな町工
場の看板と、手にしたケータイの画面を交互に見る。

「ここだな」

読水は確認すると、工場へと入っていく。ランサーも訝しげに、そ
れに続いた。

取引相手のアダムは既に、工場にあったパイプ椅子に腰掛け読水達
を待っていた。その姿を見て、ランサーの顔は更に怪訝なものになっ
た。アダムは、人ではなかったのだ。

厳密には、アダムは人の形をしている。バイクに乗っている訳でも
ないのにライディンググウェアに身を包み、フルフェイスヘルメットを
付けている。しかし、それも当然、その衣服の中には人ならざる人形
が入っていることを、ランサーは感じ取っていた。

「……マスター」

「ゴーレム……カバラの術で作る土塊人形だ。あれが姿を見せないア
ダムの、交渉の窓口ってだけだよ」

読水は呆気からんと言うと、周りをキョロキョロと見渡しながらそ
のゴーレムに近づく。

「この工場の間人は？」

「暗示をかけている。問題はないよ」

と、ゴーレム——アダムはフルフェイス越しのくぐもった声で言った。その声は以外にも、女性のものであった。

「しかし、良くもまあ……こんなアジアの片隅にまで出張させたもんだ。お蔭で密輸ルートを開拓するだけで幾ら掛かったと思ってる？」「愚痴を聞きに来たんじゃあないぞ、アダム。頼んだ品は？」

アダムは首を回し、傍にあった作業台……より正確には、作業台の上の木箱を見た。

読水は警戒しといってくれ、とランサーに伝え、木箱を開け、その中身——銃弾が入ったケースや薬品を確認しては自分のアタツシケースに放り込んでいく。

「連絡した、強化使いを倒せる拳銃は……？」

「底にあるだろう」

「これか」

と、読水は木箱からガチャガチャとケースを引っ張り出し、開けた。

「……拳銃って、言ったんだけど」

「……マグナム弾で殺せない魔術師に対して、何で拳銃で戦うんだ。小銃カービンを使え、小銃を」

「だから嫌だって、前々から言ってるだろ」

そう口を尖らせてケースを戻す読水に、アダムはまるで人間のよう
に嘆息した。

「お前は慕う師を間違えたよ……そうリボルバーに拘ったところでお前じゃあ、あいつのようには成れないんだぞ？」

「……うるせえよ」

そう呟く読水に、仕方ないな、とでも言うようにアダムは肩をすくめた。

「一応、そう言うと思ってマグナム弾を三点バーストで撃てるゲテモノ自動拳銃も……」

「ぎげんな」

読水はそう毒づくくと、木箱にあった残りの物をアタツシケースに

流し込む。

「アダム、支払いはまだ先払い分で足りてるか？」

「十二分にな」

「なら、また頼まれてくれ。そこの奴の服を何点か、頼む」

読水の言葉に、グリツとアダムの首がランサーの方に向けられる。その不気味さに、ランサーは思わず飛び上がりそうになった。

「……これが例のサーヴァントか。思ったより、可愛いじゃあないか」「黙れアダム。もう一つ、少々危険だが……良いか」

「一流の私を心配するなんて、偉くなつたね半人前の運び屋」

黙って聞こうじゃあないか。そう笑うアダムに、本当に嫌な奴だよ、と読水はイライラと目頭と抑える。

「この日坂市に潜伏する魔術師を、可能な限り調べてほしい」

「聖杯戦争に参加している奴と、それに協力してそうな連中をつて話だろう？ 結構な重労働だ」

高いぞ。とアダムは脅すが。

「構わない……と言っても、あんたが捕まったら元も子もないから、無理する必要は……」

「……一流の私を心配するなんて」

「だからそれはもう良いって！」

怒鳴る読水を、カカカと笑ってアダムは両手を挙げた。

「今現在分かっているのは、もう何年もこの地に根ざしていた魔術師だけだ」

そう言つて、アダムはヘルメットの隙間に手を入れて紙切れを引き出し、読水に向かって差し出した。

「鏡宮と、ミローネ……そして、お前だ。読水」

「……どうも」

読水はその紙を引つたくり、踵を返した。

「行くぞランサー……アダム、あんたも隠れた方が良い。もうすぐ、日が暮れるぞ」

「そつちこそ気を付け給えよ、青年……つと、そこの」

「は、はい……！」

アダムに急に呼び掛けられ、読水の後を追おうとしていたランサーは、パツとその土塊人形の方へ向き直った。

「……………」

アダムはそんなランサーをじつと見ていたが、やがてグツとサムズアップを試みせた。

妙な魔術師だが、言いたいことは理解できた。

ランサーは、アダムに深々と頭を下げ、読水の後を追った。

日坂市で最も賑やかな駅前で、一人の女子高生がケータイを片手に、どこへ向かうでもなく立っていた。

背の高い女だ。一七〇センチを超える背丈に、スポーツでもやっているのか、妙に体格が良い。しかしどこかボンヤリとした雰囲気のある彼女は、学校帰りに友人と遊び、そして先程別れた。

駅前で彼女は、ボブカットにしてある、ボリュームのある癖毛の毛先を気にしながらケータイを弄っている。その画面には、ある百科事典に書かれた人物の伝説が映っていた。

“ねえ。調べてみたけど、やっぱり貴方有名じゃなくない?”

念話である。彼女の言葉に、一人の男が応えた。

“そんなはずはないんだがなあ。本当にちゃんと調べてる?”

色々書いてあんだろ? 俺の武勇伝”

“えー……何か、貴方の周りが凄いだけ、みたいなあ”

“ねえ、酷くね?”

彼女はそんな彼の反応に笑っていたが、ふと時刻を見ると、日が落ちようとしている西の空を見上げた。

“ねえ、そろそろだよね……?”

“ああ。そろそろ気を引き締めてくれよ。魔術師って奴らは、お嬢ちゃん相手でも容赦しないからな”

そっか。と、彼女はケータイを鞆に入れ、ググツと背伸びをする。

“んん……じゃあ、そろそろ行こうか……イオラオス”

第三話 『襲撃』

日坂市の中心である日坂駅、駅周囲に立ち並ぶオフィスビルの屋上の縁に、一人の男が片足を乗せて立っていた。

外国人である。目鼻のくつきりとした顔立ち、浅黒い肌はインド人やネパール人のように見える。ジップアップパーカーとカーゴパンツを着ているので分かり辛いが、衣服に包まれた五体は筋肉の肥大化さえ許さないほどに引き絞られ、鍛えられていた。

また男は日本刀を刀袋に入れ、紐で括って背負っていた。彼は冷たい夜風に晒されながらも、むしろ涼しげな顔で下方に広がる街並みを眺めている。

そんな彼の背後、貯水槽の影が僅かに光った。英霊の実体化だ。

「ウイリアム君」

と、声を掛けられ、男——ウイリアムは振り返った。

「ああ……もう、準備が出来ましたか」

ウイリアムは貯水槽に歩み寄りながら、貯水槽の基礎に腰掛ける男に聞いた。

「何人でした？」

「二十三人」

「……想定より、ずっと多いな」

ウイリアムは困ったように腕を組み、夜景の方を向いて考え込む。

そんな彼に、影に潜むサーヴァントは言った。

「しかしだ、ウイリアム君。我々はその全てを同時に襲える。暗殺ながらもつと計画を練るべきだが、目的は混乱と威力偵察……この中に残り六騎のサーヴァントがいれば、問題はない」

「それは……んーフツフツ……いや、でもなあ……」

サーヴァントの言葉を聞いても、ウイリアムは困ったように笑って辺りをうろついていたが。

「じゃあ、こうしましょう」

と、彼は片手を挙げ、サーヴァントに向き直った。

「とりあえず、殺しはなし。とは言っても聖杯戦争が始まったと知って尚も残る連中なんて、マスターか、その協力者以外にありえない……死なない程度には痛めつけてやってください。撃退されたら、それまでつてことで」

「あくまで目的はサーヴァントと、そのマスターと言うことかな？」

「手段を選べるうちは、フェアな手を選びますよ」

「甘いですかね？」と、ウイリアムは頬を掻く。その様子を見て、ふっとサーヴァントは笑った。

「……相手がマスターと分かった場合は？」

「マスター狙いで、第二波、第三波と絶え間なく攻めましょう」

先程の迷いとは打って変わって、きっぱりとウイリアムは言った。

「片手間で仕留められるなら、それに越したことはない……で、良いですかね？」

「ふむ……そうだね、異論はないよ」

「ありがとうございます」

なら……。と、そうウイリアムは下に広がる街並みを見る。背後でサーヴァントも腰を上げた。

「昨日のうちにセイバーとランサーが交戦していたみたいですが……これが正式に認められた初戦になる」

この聖杯戦争の火蓋を、我々が切りましょう。

そう言つて、ウイリアムは口元に薄く笑みを浮かべた。

「すまないな、マスター」

一方、シユウジ達は大通りに面した小さなスペイン料理店の店内で、次の料理を待っていた。

「本来なら、あの神父から渡されたりリストをホテルで確認するべきなんだろうが……こうして懐かしい香りを嗅いでしまうと、どうもな……つい、無理を言ってしまった」

そう言つて謝罪するセイバーは、スーツを着ている。店で食事を取る以上、実体化する必要がある。その為に急遽、用意したものだ。とは言え体格の良く野性味さえ感じられるセイバーがスーツを着ると、

まるでスポーツ選手のような着こなしとなっていた。

「気にしなくて良い……その気持ちは良く分かる」

サーヴァントは使い魔だ、食事も睡眠も必要はない。しかし、英雄とは得てして私の強いものであり、またそうでなければ歴史に名を残すこともない。サーヴァントとして召喚された者の中には、現代の酒や食事、睡眠や娯楽に興じたいと思う者も多い。

彼にとっては九百年ぶりの、故郷の味と言って良い。そんな奇跡的な再開を邪魔するほどシュウジは非道ではないし、日本を出たシュウジにとっても、そういう気持ちは十分に理解できるものだった。

それに、これを機に聞きたいこともあった。

「……一つ、聞いて良いか？」

「む、何だ？ 急に改まって」

「昼間に言っていた、英雄じゃあなかったという言葉についてだ」

セイバーはシュウジの様子に何かを察し、座り直した。

「セイバー……貴方はかつて数度の追放を受けても尚も武勲を立て、イスラム勢力と戦い、カステイリーリヤ王国の国土回復に大きく貢献した」

セイバーはその言葉に苦笑し、顔を伏せた。そんな彼に、シュウジは言った。

「これが英雄でなくてなんだ。バレンシアは貴方が死んだ後に一旦は奪われたが、それでも貴方は騎士として十分な働きをしたはずだ」

「……俺がエル・シドと呼ばれるようになったのは、国を追われてタイファ……イスラム教徒達の下で剣を振るっていた時だ」

セイバー——エル・シドは顔を上げないまま、寂しげな顔を浮かべて話し始めた。

カステイリーリヤ王国の王、サンチョ二世の右腕として戦っていたセイバー、ロドリゴ・ディアスの戦いの人生は、サンチョ二世の暗殺によって大きく狂うこととなる。

王の死後、王位を継いだ弟のアルフォンソ六世は彼を疎ましく思い、彼もまたアルフォンソ六世を暗殺の首謀者として疑ったことから、その不仲は最終的に彼の国外追放という形にまで発展した。

サンチョ二世が在命の時は親衛隊長にまで登り詰めたロドリゴ・ディアスは国を追われ、僅か六十騎程の仲間と野に下った。そして彼は傭兵として、人種も宗教も違う者達と肩を並べて戦うこととなる。

傭兵時代のロドリゴ・ディアスの指揮下にあつた兵士は、同じように国を追われた者、土地を失い傭兵家業に身を落とした者、そんな連中ばかりだった。彼らには理想も、正義も、信仰もない、ただ自身の為には戦っていた。そこでの仲間達が自分達の指揮官である彼に付けた呼び名が、エル・シドだった。

そうして戦場を駆け巡っていくうちに、彼の名は戦場で知れ渡るようになった。そしてエル・シドが二度目の追放を受けた時には、キリスト教圏の騎士、戦場の勇者としてバレンシア攻略の為に乗り出した。

エル・シドが率いる軍は強く、進行を止められるものは誰もいなかった。

そして意気軒昂に辿り着いたバレンシアで、彼は見た。門の前に捨て駒同然に並べられた傭兵達の顔を。

それはかつて、彼をエル・シドと呼んだ、かつての仲間達だった。「……俺達は金で買われる傭兵だった。理想、正義、信仰の違いで、戦う相手を選ばなかった」

だから俺達は、バレンシアで向かい合うことになった。そう、セイバーは自嘲した。押し黙ってセイバーの話を聞いていたシュウジは、口を開いた。

「……戦つたのか。その、かつての仲間と」

「そうだ。並列した兵達に矢を浴びせ、騎兵をなだれ込ませた」

セイバーはそう言い、こう加えた。

「それが戦いにおける理だ。戦場で敵として相まみえた以上、容赦はできない……しかし、傭兵なんて良い加減なもんだ。果たして何人が俺と戦つて死んだと理解していたか」

ともあれ。と、セイバーは顔を上げて、シュウジを見た。

「そうやって俺はバレンシアを征服し、見事に王から許しを得て妻や子供達と再会……バレンシアの領主となった訳だ」

「……………」

「故郷にも帰れた、家族にも会えた……だがそれでも、心の奥底に潜む、例えようもない孤独は拭えなかった」

そう言うのと、セイバーはシュウジに笑いかけた。

「分かったらう？ 俺は英雄なんかじゃあない。英雄と煽てられ、仲間を斬り捨ててしまった馬鹿な男だ」

だからシュウジ。と、セイバーはこう続けた。

「お前は正直に、最後は令呪で自害させる気なのだと言っていたが……それでもお前は、良く考えろ。自分の中にある正義と、他人から与えられた使命……どちらを貫くかはお前自身が決めるんだ。何を言い訳しようと、結果に苦しむのは、お前自身だ」

そう告げるセイバー。自害を命じる者のことさえも案じる彼を見て、シュウジは悟った。

スペインの英雄。戦場の勇者と呼ばれた、一人の騎士。

彼は戦場を駆ける英雄としては、致命的なまでに人を愛する男だった。故にそれだけ心に、多くの傷を抱えた。

しかし、だからこそ彼は周りから慕われた。国も宗教の境もなく、多くの兵士が彼を『我が主人』、エル・シドと呼んだのだと。

読水達はマンションに戻ると、途中で寄ったコンビニで買い込んだ食料を床に広げ、各々で食べ始めた。

床で胡座をかいてカップ麺を啜る読水の対面し、同じように座っておにぎりを頬張るランサー。彼女の横には、カップ酒が置かれていた。

「……戦いの最中とは、分かっているのですが」

カップ酒に注がれる読水の視線に気づき、ランサーは恥ずかしげに頭を垂れた。

「面目ない。つい、懐かしさが勝り……」

「そう言えば、お前の触媒もお猪口だったか……酒、好きなのか？」

「生前は、よく飲んでおりましたね」

懐かしげに言うのと、ランサーは思いついたように顔を上げ、カップ

酒を手を取った。

「マスターも飲まれますか？ マスターを守るはずの私だけが飲むというのも、気が引けますので」

そう提案するランサーを、読水は手で制した。

「気にしないで良いって……酒は飲まないんだ」

「む……下戸なのですか」

「というより、飲む機会がなかった」

残ったスープに視線を落とし、読水は説明する。

「ガキのうちから飲まなかったし、十八の時から運び屋として一人で生きてきたからな。前後不覚のままに襲われることを恐れて、飲もうとも思えなかった」

「アダムが言っていました、師とは一緒ではなかったのですか？」

「運び屋になってから別れた。俺の育ててくれた恩人だが、今はどこにいるのか……生きているのかさえも知らん」

そう溜息をつく読水に、ランサーは不思議そうに顔をしかめた。

「育ての親、ですか……？」

「ああ。いつもソファァーで寝そべり、酒を飲みながらつまらなそうにエロ本を眺めていた……ロクでなしだったが、俺がガキのうちは酒やタバコ、ドラッグ……銃だって握らせようとしなかった」

懐かしげに読水は言って、首に掛けたロケットペンダントを握った。

「言われてみれば、まあ……あいつのことを引きずって銃は拘っちゃいるが、酒の飲み方は知らないままだな」

「……………」

ランサーは黙ってカップ酒を開け、煽るように飲んだ。

「つて、おい、聞いて……………」

「なら、最初の酒は私が飲ませます」

と、一息ついたランサーは、熱っぽく言った。

「こんな埃っぽい所でなく、もっと美味しく、良い……そう、聖杯で一杯やりましょう……………」

「…………サーヴァントって、酔うもんなのか？」

「酔ってなど……ッ！」

強く宣言するランサーに、読水は嘆息した。

「やる気があるのは結構だが、分かっているよな？　ここから先は待ちの構えで行くんだからな。真つ向から戦うには、俺達は実力がなさすぎる」

「分かっています！」

そう言って、勇ましく頷くランサー。その様子を読水は笑い、カップ麺のスープを啜る。

しかし次の瞬間、ビクリと肩を震わせたかと思うや否や、ランサーは槍を実体化させて立ち上がった。

読水は、思わず体を縮ませるが。

「マスター、敵が来ます……ッ！」

小さく、しかし鋭く告げるランサーの剣幕に、事態を察した読水は手にしていたカップ麺のケースを置いて立ち上がる。

明かりを。ランサーはそう言いながらカーテンをカーテンレールから勢い良く引き抜き、外を確認し始める。読水が部屋の照明を消すと、部屋内は窓から差し込む明かりだけとなった。

読水が部屋の隅に置いていたアタッシュケースを掴み、ランサーが窓から離れ、手にしたカーテンを槍先に上から被せた時だ。玄関の鍵が蹴り壊され、扉が開け放たれた。

玄関から殺到したのは三人。霊体のようだが、いずれも同じ羽織を着て、日本刀を手に構えた……浅葱色に淡く光る半透明の侍のようだった。

「新選組……!?」

その服装を見て、思わず声を上げる読水。確かに部屋に押し入ってきた者達は、誰もがテレビや小説で知る、あの新選組の姿に酷似していた。

拳銃を抜く読水を背に隠し、油断なく槍を構えながら後ろ手で発砲を制すランサー。新選組の隊士を彷彿とさせるその襲撃者達は、狭い廊下から部屋の前まで侵入し、二人が左右に広がり、もう一人は未だ二人の背後でつかえていた。

「マスター……動かないでください」

ランサーは視線を三人に向けたまま、静かに言う。

そして……鋭く息を吐きながら腰を深く落とした次の瞬間、左側の隊士を槍で突いた。隊士はその突きに反応できず、胴を刺し貫かれた。

武に疎い読水には分からなかったが、隊士が反応できなかったのは訳があった。

ランサーは槍の穂にカーテンを被せ、そして窓からの明かりを背に構えていた。これにより、隊士達にはランサーの姿は影となり構えも、手にしている槍も見え辛くなっていった。加えてカーテンを被せられていた為に、穂が光に煌めくことも一切ない。

これらにより、ランサーの鋭い突きに反応できるだけの情報が乏しくなり、まともに槍を受けてしまったのだ。

腹を刺され、後方へたたらを踏んで倒れる隊士。先手を取られた隣の隊士が袈裟斬りに掛かるが、ランサーは槍先を振り上げてそれを弾いた。

結果、槍から離れて浮き上がるカーテン。その布地越しにランサーは、隊士の太ももを正確に突き刺した。そして前に踏み込み、渾身の力で姿勢を崩した隊士の胴を突き抜く。

その時だ。突き刺された者の背後にいた隊士が、前方の仲間の肩に手を置き、刀を逆手に持って身を乗り出した。

投げる気だ。そして狙いは間違はなく、マスターである読水だろう。それに対してアタッシュケースを持ち上げ、読水はそれを防御しようとしたが。

「オオオオッ！」

ランサーは咆哮しながら隊士の懐に潜り込み、そして腰を入れて槍を突き上げる。背後にいた隊士は、抜き出た槍先に串刺しにされ、二人はまとめて天井に縫い付けられてしまった。

「……………」

隊士達から刀が零れ落ち反応が消えたことを確認すると、ランサーは一息に槍を引き抜く。倒された隊士達は、蒸発するように音もなく

消え始めた。

十秒と経たずに繰り広げられた、ランサーの圧倒。ランサーが後ずさって行くのを確認すると、読水も窓の方へと銃を向ける。

こうして背中合わせになると、ランサーが叫んだ。

「マスターッ！ 今のは!?!」

「サーヴァントじゃあなかった！ マスターかサーヴァントの使い魔だと思う！ だが待て、新選組!? セイバーでもランサーでもない、新選組だとッ!?!」

「アサシンだつて考えられます！ どちらにせよ、まだまだ来る気配がある……ここはマズい！ 退きましよう！」

「どうせ包囲されてる！ そう、落ち着け……だから、脱出経路は……」

読水が言葉を言い切るより早く、新選組の第二波が、扉を蹴り飛ばして入り込んできた。

「ああくソつたれ！ ランサーッ！ 時間を稼げ！」

「応っ！」

ランサーは力強く応えて飛び出し、狭い通路と槍の長さを利用して第二波を押し留めにかかる。

その喧騒の中、読水は窓からも見えない暗がりにも身を潜ませ、アタッシュケースを開ける。

敵の正体は未だ掴めないが、とにかく今は身を守ることが最優先だ。しかし、それには追撃を払うだけの戦力と、敵から逃げる為の逃げ口が必要になる。

上等だ。読水は汗をケース内に垂らしながら、表情を歪める。これまで逃げ続けた俺だ、これから逃げないなどと言えるか。

まずは敵の位置を割り出してやる。と、読水はアタッシュケース内にある品——この十年のうちに集めた、逃走用の礼装を引っ張り出した。

「美味しいものには国も、信仰も、敵も味方もない」

同時刻。セイバーは椅子に背を預け、リラックスした様子で目の前

の料理を前に語る。

「それを食う我々が、同じ人間だからだ。バレンシアで生まれたこのパエリアは、故に俺なんかよりずっと世界に知れ渡っているのさ」

そう語るセイバー。シユウジは口に運んだパエリアの、その独特のスパイスの風味にスプーンを止めるも。

「……パエリアっていうのは、貝なんかを使う海鮮料理だと思っただが」

そう頷いては、黄色く染められた米と一緒に鶏肉を口に運ぶ。

「本場は違うんだな」

「本場というより、元祖は、だな。バレンシアのパエリアって言えば、山の幸を使う」

「山の幸」

「おう。兎や鶏肉……蝸牛なんかも美味しいな」

「蝸牛か」

「日本じゃあ食わないんだってな？ 今度試してみると良い」

「流石に道端ので試す気はないな……」

シユウジはそう言いながら、テーブルの隅に置かれたタバスコの瓶を手に取り、自分の皿に盛られたパエリアの上で上下に振り始めた。

「……」

「とりあえずこれを食い終わったら、ホテルに戻って先生から貰ったデータを確認しよう。最優先で叩くべき相手も、今日中に分かりたい」

「そんなことより、おい、ちよつと振り過ぎじゃあないか……？」

セイバーは上ずった声でそう指摘した。

その指摘通り、シユウジはタバスコの瓶を皿の上でマラスカのように振り続け、その赤い液体をパエリアに満遍なく染み込ませていった。

「というか、何だそれは……？ 美味しいのか？」

その言葉に、シユウジは瓶の口をセイバーの皿へと寄せる。

「待て、何をしている？」

「美味しいぞ」

「……そうか」

「そうかって……掛けてみるよ」

「いや……俺は良い」

「美味しいものには国も、信仰も、敵も味方もないんだろ？」

「……」

どうぞ、とセイバーがジエスチャーするや否や、シュウジは皿の上でタバスコの瓶を振り始めた。鮮血のような液体が、セイバーの皿の上から降り注ぐ。

「いや何でそんなに一心不乱に振る……!？」

「こうしないと、中々出ないんだ」

それは調味料を作った者の、慈悲深き配慮ではないのか。そう思うセイバーであったが、その配慮も虚しくセイバーのパエリアに鮮血のような液体が、何度も滴り落ちては米の中に染み込んでいく。

「こんなものか……さあ、セイバー」

シュウジは満足気に頷き、瓶の口を閉めて食事を再開した。

「……」

何事もなかったように、そのパエリアを食べ始めるシュウジ。それを見ていたセイバーは毒ではないと理解し、スプーンでパエリアを掬って恐る恐る口に含み。

「……エホッ」

と、咳き込んだ。

スペインの大英雄、エル・シド。歴史を切り開いたその剣の冴えと戦いへの理解は、この亜種聖杯戦争においても多くのサーヴァントを畏怖させるであろう。そんな彼は聖杯戦争の初日、英霊の座に置いてきたとさえ思われた汗をここで噴出させた。

テーブルの料理がなくなつて一息入れた頃、セイバーは口内の違和感に顔をしかめながら口を開いた。

「ところでだ、シュウジ。表に迎えても呼んだか？」

そう言つてきな臭そうに出口を見るセイバー。思えば、良い加減テーブル上の皿を下げてても良い頃合いだろうに、店主をしばらくの間

見えていない。

シユウジは何かを探るように天を仰ぎ、目を閉じる。そして――。
「魔術師お得意の、人払いの結界。それに表と、裏にも伏兵……人じゃあなさそうだが」

「おう、だが強い気を感じるな。幽き亡霊のそれじゃあない……人を殺し慣れた、人斬りのものだ」

面白い。と、セイバーは椅子から立ち上がる。

「店に押し込んでこない辺りは紳士的だが、正々堂々という手合じやあなさそうだ。表に四人、裏に三人……だがもつと用意してあるだろう。話し合うだけの余地は……まあ、ないだろうな」

セイバーは鎧と剣を実体化させ、身に纏って笑みを浮かべる。

「どうだシユウジ？　ここは正面から迎えて、向こうの実力を計るといのは」

好戦的な姿勢を取るセイバーに、シユウジは嘆息するも。

「忘れるなよセイバー、最優先事項は読水竜也が持つペンダントの回収だ」

そう言つて立ち上がり、財布を取り出して一万円札をテーブルに置き、タバスコの瓶を重し代わりに載せた。

「私が出ると出る」

シユウジはきつぱりと言うと、右腕を振り付ける。すると袖から黒鍵の柄が飛び出し、刃も即座に生成された。

シユウジが手にした黒鍵は、今まで使用したものとは異なる。投擲用のものとは違い片刃になった、斬りつけることを目的にした特別仕様の概念武装だ。

「セイバーは奇襲に備えつつ、襲撃者本人を探してくれ」

それを見たセイバーは、フツと笑い。

「承知した。我がマスターの代行者としての技、見せてもらおうじやあないか」

二人はそうして、各々が剣を握つて表へ……武装した新選組の霊体達の前に歩み出た。

第四話 『ドツグファイト』

三ヶ月前の秋。イギリス、ロンドンにて。

ウイリアム・シンは魔術協会の総本山と名高い『時計塔』本部の廊下を、一介の講師として歩いていた。

世界の隠者であるはずの魔術師の多くが大願成就の近道として所属する研究機関だが、決して隠者を思わせるような薄暗さは見られない。ウイリアムが歩いている廊下は外の日光が差して暖かな陽気が入り込んでいるし、すれ違う『時計塔』の学生達は皆、ウイリアムを見てはすれ違い際に会釈をし、笑顔で手を振る。

無論、それは表の顔。外面だ。この時計塔も古くからある廊下へと向かえば、そこは光の差さぬ暗さが根付いている。自分とて、その暗がりに関わる人間だ。それは良く知っている。

しかし……。と、ウイリアムは振り返って通り過ぎた学生の背を見る。あの学生達も、ウイリアムの家系については噂として聞いているはずだ。それでもあのように接してくれる若者達には、感謝の念しかない。

しかし、それも終わりか。と、ウイリアムはとある部屋の前で立ち止まり、佇む。彼らにとつては酷い裏切りに映るかもしれない。しかし、ウイリアムが選んだ選択な以上、いずれ出てくる非難や失望もまた甘んじて受け入れねばならないだろう。

降霊科学部長代理、ロッコ・ベルフェバンの部屋。数日後にはロンドンを去る以上、極力他人との接触は避けたいが、ウイリアムは彼にだけはと思ひ、ネクタイを締め直し、掛けていた眼鏡をしまった。

ノックすると、返事はすぐに帰ってきた。

入れ。という声に従い、入室する。ベルフェバンは部屋の奥のデスクに腰を落ち着け、まるでウイリアムの訪問を知っていたかのように頷いた。

「魔術刻印を娘に移植したと聞いた時から、何かあるだろうと思っていたよ」

「……そう、ですか」

気恥ずかしそうに、ウィリアムは俯いた。それと同時に、その振る舞いの裏で素早く視線を巡らす。いつも通り、陳列棚に収まり切らない貴重な巻物やホルマリン漬け等が無造作に床に置かれた部屋。仕掛けてくる気配は、見受けられない。

「そう構えんでくれ」

ベルフェバンはそうやって机の上で両の指を合わせ、笑みを浮かべる。

「それで……君がアポ無しとは珍しい。急な用かね？」

来ると分かっていた癖に。その白々しい言葉に、ウィリアムは今度こそ本当に苦笑してしまう。やはり、ここに来ておいて正解だったようだ。

ロッコ・ベルフェバン。ウィリアムが学生の頃より老体であったが背は曲がっておらず、色眼鏡を付けているが底のないような瞳の輝きは隠そうとしない。木彫りの置物なのではないかと思つた頃もあったが、彼は背後を取ろうとしたウィリアムをダッシュで追つてきたものだ。

この男とはしつかり話を付けねば、後々に、そして絶対に厄介なことになる。そうウィリアムは確信した。

「お察しの通りですよ、学部長。辞職願は僕の机の引き出しに入れてあります。時が来たら、わざとらしく見つけてください」

あつげらかんと告げられた部下の言葉に、ベルフェバンは溜息をついた。

「それはまた、大事件だな」

「貴方や次期学部長であるソフィアリ講師……そして娘にも非難が及ばぬよう、失踪という形でいかせてもらいます。ここの会話も、なかつたことにしていただければ……」

「無論だ……で、ソフィアリ講師には？」

「もちろん、言ってます」

「安心した」

直情的な男だ。言つて数時間後には、聖杯要らずで戦争が始まりか

ねない。そこはお互いの共通認識だったようだ。

「君が亜種聖杯戦争に参加しようとしている。そんな噂を最初に聞いた時には鼻で笑ったものだが……どこのだね？」

「非公開のもので。ただ始まってしまえば、このロードの耳には必ず入る……そして古い教室にも。到底隠蔽しきれない規模になるくらいには、暴れる所存ですよ」

「分からんな」

と、ベルフェバンは息を吐き、かつての教え子を嗜めるようにこう続けた。

「君の家系は時計塔の歴史の中でも異例だ。封印指定を受けながらも君の娘で四代、魔術刻印の継承を許容され、それどころか講師としての地位まで得ている……もつとも刻印で継承した魔術の使用、研究は認められてはいないがね」

それでもこれ以上、聖杯に何を望むのかね。そう、ベルフェバンはウイリアムに問う。

「継承さえ許されど、これ以上の研究は許されない。まあ、それに不服はないですよ。ただ……ね」

ウイリアムは頬を掻きながら、こう続けた。

「僕らがホルマリン漬けにされてないのは、単純に強行するより飼いか殺しの方がリスクはないと時計塔が判断したからでしょう？ その判断から二百年……黒い噂も耳にしています。ここらで僕らが未だ家畜になっていないことを、改めて認知させておく必要がある」

「……ウイリアム。娘に刻印を継承したはずじゃが、アレはまだ使えるのかね？」

「一部、刻印をこちらに残してあります。あまりやりたくはありませんでした……」

その言葉を聞いたベルフェバンは押し黙り、やがて背後の窓をから外の景色を伺って、呟いた。

「秘儀裁示局へのパフォーマンスの為に、サーヴァント相手に戦う……どの勢力に対しても問題にならない相手として、サーヴァントが適任と判断したのか」

ウイリアムは、ええ、と肯定した。

秘儀裁示局・天文台カリオン。封印指定を発令する、時計塔最古の教室だ。希少な能力の保護の為と、能力を持った魔術師を保存する彼らを再度沈黙させるには、自身の命をもって二百年前の騒動——時計塔が和解を選んだ、先祖の戦いぶりを再現するしかない。

「もつとも時計塔に戻るのには愚か、生き残ることも難しいでしょうね。それでもこの任、娘にやらせようとは思えない訳で」

娘が可愛すぎてねえ。わざとらしく声を上ずらせるウイリアムに、ベルフェバンは目を瞑って溜息をつく。

「良いのかね？　時計塔を敵に回すことになるぞ？　サーヴァントを呼ぶよりも早く、対処されかねん」

「だから貴方に会いに来ました」

連中にこう言つてやってください。と、ウイリアムはこう言った。

「そちらこそ良いのか？　このウイリアム・シンを敵に回すことになるが……つてね」

この言葉はもちろん、ベルフェバンに対しても向けられた言葉だ。さあ、どう返すか。そう見つめるウイリアムに、彼は肩をすくめた。

「その言葉があれば、時計塔の野心家達の大多数は黙るじやろう」

好きにしろ。というベルフェバンの言葉に、ウイリアムは頭を下げた。

「ウイリアム君」

目を開けて顔を上げると、和装に身を包んだ老人——自身のサーヴァント、キャスターがハンチング帽とマフラーの隙間からこちらを見下ろしていた。

「ああ、すみません。ちょっと昔のことを思い出してて……」

ウイリアムはそう言つて頭を下げ、慌ててビルの縁から腰を上げた。

「状況はどうです？」

「鏡宮邸へ向かわせた隊士は全滅。正確無比な矢により、敷居を跨ぐことさえ叶わなんだ」

「なら、アーチャーのクラス……で、しょうかね？」

ウィリアムはそう言ってから、腕を組んで唸りだした。弓の名手といっても、騎乗して矢を放つライダーということも、陰に潜み毒矢を打ち込むアサシンということも考えられる。

マスターである自分が直に確認できれば、クラスやステータスは確認できるが、近づくこともままならない状況を、鏡宮は既に構築してしまっている。

「周囲に障害もないあの館に、アーチャーのサーヴァントですか……流石は開催者って感じですね。これ以上戦力を割いても無駄でしょう」

その言葉に、キャスターも同意し頷く。

「それとウィリアム君。サーヴァントが他にも見つかった」

「おや」

朗報だ。ウィリアムは笑みを浮かべた。

「君が言っていた、ミローネ、という家を襲撃した隊士が一蹴された」「没落し、この地に移った一族ですから。必ず参加していると思っていました。クラスは？」

「恐らくバーサーカー。かなりの巨体で、斧を手にしていた。戦い方も、御世辞にも優美とは言い難い。しかも隊士を打ち払った後、すぐに移動を始めた」

「マスターを置いてですか？」

「逃げる際、脇に娘を抱えていた」

「金髪で小つこい、髪をこう……巻いた？」

ウィリアムが両耳の手前で指を回すと、キャスターは、それだ、と指を立てた。

ミローネ家の現当主、レオポルディーネ・ミローネだ。ウィリアムは確信した。

調べた限りでは、ミローネ家はルーン魔術を研究していた一族だったはずだ。何かに刻むことで効果を発揮する、言ってしまうえば迎撃に向いた魔術の使い手が工房から出ていくとは……。

「行方は？ まだ、追えていますか？」

「逃げ回っているランサーの方へ、まっすぐ向かっている」

「ん……探索のルーン、あるいは地元ならではの準備をされてたんで
しよつかね……」

「どうするかね？ ウィリアム君」

どうしましよつかね。ウィリアムはそう呟きながら、周りを歩き回
る。

バーサーカーがランサー陣営へと向かっている。

この展開は予想外だが、こちらに不利に働く訳じゃあない。むしろ
隊士達をぶつけるより多くの情報が望めるだろうし、場合によっては
どちらかが脱落する可能性も期待できる。

「ランサーとセイバーは、まだ襲撃中でしたよね？」

「うむ。もつともランサーらは逃げ続けているし、セイバーの方はマ
スター自身が戦っている」

「なら、バーサーカーとランサーをぶつけましよう。バーサーカーの
追撃はなし、二陣営の衝突後、ランサーへの攻撃も休止を」

「承知した」

ウィリアムはキャスターに頷き。

「残る問題は、未だ二騎のサーヴァントが見つかっていないのと……」

そして、ふと踵を返し、上空を睥んだ。上空には街の夜灯に照らさ
れた薄雲をコントラストに、何かが飛行しているのが微かに見える。

「空を飛び交う、あの使い魔達でしよつかね」

キャスターはウィリアムの隣に立ち、腕を組んだ。

「ふむ……一度こちらに近づいてきたものを撃ち落としていたが、全
てそうする訳にはいかんのかね？」

「結構な数を運用しているみたいですので、全部はちよつと……しか
し、こちらがせっかく集めている情報を、どこぞの誰かに盗み見られ
ているのは癪ですな」

ウィリアムはそう言うのと、深い溜息をつく。リスクは高いが、キャ
スターが他の面々に掛かりきりになっている以上、仕方がない。

ウィリアムは背負っていた刀袋をそつと地面に置き、パーカーの
ジッパを下ろした。パーカーの下は何も着ておらず、ウィリアムは

パーカーを脱いで手早く腰に巻いた。

「ほう……」

露わになったウイリアムの上半身を見て、キャスターは感嘆の声を上げた。

肥大化することさえ許されないほどに、引き絞られた筋肉。しなやかな五体。それは河の上流から流された、大岩を連想させた。大きな才能を抱えた大岩は川底を転がる度に体を削られ、そして長い時を経て角のない、硬く艶のある石に変貌する。

ウイリアムの五体は、彼一人で作られたものではない。彼の先祖の長きに渡る研究や鍛錬が、魔術刻印だけでなく血や肉をもって継がれ……ウイリアム・シンという男の体を通じて露わになっているに過ぎない。

「キャスター、こちらは貴方に任せます」

ウイリアムは地面に置いていた刀袋を手にし、言った。

「使い魔の方は、僕がやりましょう」

聖杯戦争の序盤は、魔術師による諜報合戦だ。そうウイリアムは考えている。参加した魔術師の誰もが他六騎の真名や弱点を探るべく尻尾を追っかけ、あわよくば噛み付こうと駆け回っている。

しかしこの日坂の亜種聖杯戦争、そのドッグファイトを制するのは我々だ。

ウイリアムはそう心のうちで決意するや否や駆け出し、ビルの屋上から猿のように飛び跳ねた。

シユウジの剣技は、人間業ではなかった。

敵を踏み台に飛び跳ねつつ、踏み台の顎を跳ね切る。地上スレスレを駆けてすれ違い、振り返り際に膝裏へと刃を滑り込ませる。懐に飛び込んだと思ったら、次の瞬間には敵の背に剣を突き入れ、脇腹を一息に切り裂く。

とにかく居着かない。構えない。待たない。セイバーの目には既にシユウジの剣先の相手、彼がこれまで戦っていた敵の姿が見えていた。それは人間という生命の延長線にあって、それでいて人間の域を

超え出た存在。

死徒、怪物や異端者。それらを代行者として戦ってきたシユウジが自ずと作り上げてきたスタイル。それが今、セイバーが目になっているものなのだろう。

大変なものだな。と、セイバーは嘆息した。

いつの時代でも、敵より格下だと足を使わざるを得なくなるようだ。

そんなことを考えていると、新選組の隊士が三人、より近いセイバーを無視し、シユウジの方へ駆けつけているのが見えた。

「……やれやれ」

セイバーは肩をすくめ、地面を強く蹴りつける。そして次の瞬間には、三人とシユウジの間に割って入り。

「ぬあッ！」

割り込みに反応する隊士達に構わず、剣を左から右へ、横一文字に薙いだ。

防ごうと刀を構える、避けようと体を引く、先に打ち込もうと飛び掛かる、隊士達のそれらの反応を、セイバーは一々気にしない。気にする必要もない。それらをより早い速度で、より強い力で、まとめて両断してしまう。

それが周辺にいた隊士達の、最後の戦力であった。

ちょうど敵を斬り伏せ、背後に迫っていた三人に気づいたシユウジであったが。その鮮烈な光景に、思わず息を呑んだ。

「ふむ……こんなもんだな」

「流石……」

「ありがとう、マイマスター」

隊士が全て霧散したことを確認し、セイバーは剣を地面に振り付けてから、霊体化させる。

「さてシユウジ、敵の本体の位置だが……」

「分かったか？」

「いや……だが、こいつは威力偵察だ。こちらの情報を少しでも掠め取ろう、あわよくばマスターを討ち取ろうという」

となれば。セイバーは顔を上げ、頭上にある幾つかのビルの上部を見回した。

「他の陣営にも、こいつらは送られているはずだ。それを利用してやろう」

「この新選組が向かう先に、この聖杯戦争の参加者がいるということか」

「おう。それに……俺達が襲われたんだ。昨夜、大立ち回りをやったランサー達も居場所が割れているだろう」

なるほど。シユウジはセイバーの提案に頷く。単に強いだけじゃない。軍を指揮していただけあって、こういった機転が利くが故に、彼は英霊にまでなったのだろうと改めて実感する。

「そうなれば、シユウジよ」

セイバーは振り返り、こちらへと駆け寄ってきている隊士達の二波目を見据える。

「まずは我らを追う者の目から、逃れねばな」

「頼めるか、セイバー？」

「任せろ」

二人は迫りくる隊士達に背を向け、薄暗い裏道へ駆け込んだ。

一方、読水とランサーは襲撃から逃れようと夜道を駆け回っていた。

元々日坂市の中心である日坂中央駅の隣駅であるからと、ねじ込むように建てられたマンション。ベランダから脱出して少し走れば、街の賑わいからは大きく離れることになる。

そうなると、新選組の亡霊達の襲撃はより一層苛烈になった。しかし、ランサーはそれを制し続けている。

高速道路路橋の下、薄暗がりの中で鈍い音が響いた。

呻き声も漏らさず、隊士が地面に倒れ霧散する。ランサーは一息つきながら、左手で印を結ぶ。すると、隊士の顔面にめり込ませたマンションの蓋が飛来し、彼女の脇で静止する。

マンションを抜けてから、かれこれ四度目の襲撃。ランサーはそれ

らの襲撃を、このマンホールと槍で防ぎ切っている。

襲撃者の正体は掴めてはいないが、物理的な攻撃も効果があると知れたのは幸運だった。ランサーは囲む隊士らを槍で突破し、投げ付けられた手槍をマンホールの蓋で防ぎ、そして返す刀で蓋を投げ付けた。

しかしそれでも、未だ彼らの包囲からは突破できていない。

「マスター！ 次は……」

「ちよつと待ってって」

焦りからか、読水は声を荒げつつ、右手に持った物を周囲に向けていく。

それは、蠟状になった人間の右手であった。

ハンス・オラ・ゲローリ
栄光の右手。罪人の右手を屍蠟化させたもので、門前で使えば家の住人は眠ってしまうと伝えられる——魔術礼装としては、ありふれた代物である。

読水が持つ物は、とある死霊術師から買い取った特別製の。

屍蠟化した右手に火が点いている限り、この礼装の先へは微弱な眠りの呪いが送られている。正常な状態にある一般人でも難なく抵抗できるその呪いは、逆に抵抗されると火の勢いが弱まってしまう。この火の強弱によって礼装の持ち主は、右手の先に何かがいるかどうかをレーダーのように判断できる。

これを手に入れるのに、読水はその死霊術師から大金をふんだくられはしたが、これによって読水は何度も敵の追跡を掻い潜っている。

読水は上下左右、あらゆる所に栄光の右手で示すが、火の勢いが弱まる箇所はない。

「よし、どこにもいない。ランサー、この間に逃げ切るぞ」

そう言って、読水は橋の下から抜けようと歩き出した。

その時だ。読水が向かおうとした先で、何かをアスファルトの地面に叩きつけたような、破裂音が響き渡った。

咄嗟に読水は立ち止まり、音の方向に栄光の右手を向けた。

その瞬間、右手に灯っていた火は掻き消えた。

「……ッ!？」

ありふれているとはいえ、魔術礼装だ。風でそうそう消える炎ではない。そして炎を消すほどの抵抗力を持つ存在など、今の日坂市には敵以外しかないだろう。

たたらを踏んで後方に下がる読水。読水と、『炎を消すほどの魔術抵抗を持つ何者か』、二つの間に緊迫した面持ちのランサーが入った。そして橋下へ差し込んでいた街灯の光を遮る、巨大な影が横合いから現れた。

影となつて良くは見えないが、読水にもその男が二メートル近い長身であること、肩に戦斧を担いでいること。

そして、バーサーカーのクラスのサーヴァントであることを、マスターである読水は正確に読み取った。そしてそうでなくとも、肌伝わるほどに直接的な威圧感、目眩を感じるほどに溢れ出た暴力性は、彼が狂戦士と呼ばれる存在であることを悟らせた。

「……ランサー」

ランサーは読水の言葉に、静かに頷いて応えた。

印を結んでいた左手は、ゆつくりと槍の柄に添えられる。印を解かれたマンホールの蓋は地面に落下し、ガランと大きな音を響かせた。

その音にバーサーカーはゆつくりとこちらに向き直り、斧を地面の方へと下ろした。

第五話 『歯と舌』

狂戦士のクラス、バーサーカー。

今や世界中で行われている亜種聖杯戦争において、このサーヴァントほど召喚者であるマスターから敬遠されるクラスはない。

『狂化』のスキルをもって、理性と引き換えにステータスの強化を図る。なるほど聞こえは良い。しかしそれは英霊の優秀な知性を奪い、それに基づいた能力や技術を捨ててまで、パワーやスピードと言った有り触れたスペックを求めすることに他ならない。

加えて、得られたスペックを維持するにはエネルギー、つまり魔力が必要になる。バーサーカーは格の低い英霊の能力を底上げするのに適すると評する者もいるが、底上げた分の魔力はマスターである魔術師に求められる。バーサーカーは二流でも構わないが、魔力供給を行うマスターが同じ二流では魔力切れによる自滅が起きるのだ。

理性の喪失と、魔力供給の増大。二つのデメリットを克服できるのは、一人で全ての状況に対応できる理性を持ち、そしてバーサーカーを最後まで戦わせられるほどの魔力供給が行えるシステムを構築できるマスターだけだ。しかし大概のマスターはこれらマイナスをゼロにできず、日を重ねるごとに積み重なるマイナスから自滅していくことになる。

バーサーカーのクラスは、聖杯戦争を勝ち残るには適さない。それが多くのマスターの見解だ。

しかし、同時にこういういった考えも浮上する。

序盤におけるバーサーカーは、他のサーヴァントを殺すに足る爆発力がある。

すなわち、バーサーカーの最初の相手にだけは絶対になるな——という、バーサーカーの危険性への理解に至るのである。

順調に地雷を踏んでいるな。と、読水は自身の不運に感心してしま

う。

初っ端から最優と称されるセイバーを相手取ることとなった。続いてクラスさえ確認できぬ謎の亡霊に追い回された。そして今、序盤にあつて最も会いたくないクラスであるバーサーカーを前にしている。

いい加減気が狂いそうだ。今すぐこの現実から目を背けたい。何なら拳銃を引き抜いて、頭を撃ち抜いてしまおうか。そんな錯綜する思ひは、ランサーがマンホールの蓋を落とした音で、パツと立ち消えた。

“マスター、如何しましょう？”

油断なく槍を中段に構えたランサーが念話で、読水に指示を促した。読水も手にしていた栄光の右手を鞆にしまいながら、思考を巡らせていく。

“確認した、バーサーカーだ。あの亡霊達が来なくなっただってことは、こいつとの接触を避けたか……下手したら、共闘している可能性もある”

“バーサーカーが新選組を操っていた可能性は？”

“ないだろ。戦斧担いだ新選組なんて、聞いたことがない”

“ごもつともです”

流石マスター。と、ランサーは自然に読水を持ち上げた時だ。

「そろそろ良いか？ 待つのは嫌いなんだ」

そう言つて、バーサーカーが歩み出た。その声を聞き、思わず読水の肩が跳ね上がった。

怪物じみている。歩み出たバーサーカーの姿を改めて見て、そう読水は思った。バーサーカーと言うよりは、モンスター。それもオーガやトロールといった類の怪物に近い。

二メートル近い長身、右肩で止めたマントの隙間から伸びる右腕は太くも長い。そして顔、犬歯の先を覗かせたその顔は恐ろしげで醜悪だ。そんな顔の上にある髪のはげは後退気味で、灰色の短い髪がピンと後方に跳ねている。

そんな怪傑が、狂化のスキルで理性を喪失したバーサーカーが、こ

ちらに声を投げかけている。その不気味さに、読水の肩が震えたのだ。

「随分と走らされたぜ？ てめえらを捕まえるのによお？」

そう凄んでみせて、バーサーカーは歩みを止める。ランサーとバーサーカーの間には、既に数歩分の距離しか置かれていない。互いに、あと一步でも踏み入ったら即座に攻撃を繰り出せる。否、繰り出さざるを得ないような距離の中で、彼はただ肩をそびやかしている。

“……マスター”

“狂化のスキルが低い。敏捷なら、お前の方が上だ”

“ありがとうございます”

読水は既に、敵のステータスは読み取っている。ランサーはその問答を聞き受け、すつと構えを下段に移した。

「正直な話だ」

そんなランサーを見下ろしながら、バーサーカーが口を開いた。

「てめえらの相手は、さっさと終わらせたいんだ。マスターが五月蠅いもんで渋々付き合ってるものの、他に潰してえ相手がいる」

「……ほう？」

それを聞いたランサーは、興味深そうに肩を傾げる。

「それでは、どうする？」

決まってる。と、バーサーカーは笑みを浮かべた。

「今、ここで殺すッ！ てめえらはここで終わりだァッ！」

バーサーカーは叫び、ランサーとの間合いを躊躇なく踏み潰した。同時にランサーも、鋭く前に足を送る。

ボールでも投げつけるように、バーサーカーは斧をランサーの頭上目掛けて振り付ける。そのフォームには、防御の考慮は一切ない。例え腹を穿たれようが、足を貫かれようが、こっちは頭を叩き割れば勝つだろうという極めて単純で暴力的な思想が滲み出ている。

対するランサーは、その打ち込みに付き合わなかった。踏み出した足で、地面を後方へと蹴り込む。バックステップで斧を躲しつつ、下がり際に穂の横刃でバーサーカーの太ももを引き裂いた。

踏み込んだ、最も体重を載せた脚を斬られたバーサーカーはバラ

スを崩す。そこに、ランサーは今度こそ飛び込んだ。反射的に、バーサーカーは左腕で心臓と顔面をカバーする。そこに容赦なくランサーの槍が腹、右胸を穿つ。

仰け反り、たたらを踏むバーサーカー。それに追い打ちしようとするランサーは、更に前へと踏み込んだ。

しかし。

「kanoo!」

その瞬間、斧の刃は松明を何重にも重ねたような、巨大な炎を纏った。

バーサーカーの眩きに応じて発火したような、炎の塊。それをバーサーカーはランサーを牽制するように振り上げる。不意に吹き上げ、更には自分の手前を掠める炎にランサーは思わず顔を背け、後ろへと下がってしまった。

パツと槍先をバーサーカーに向けるランサー。彼女は念話で読水に叫んだ。

「今のは!?!」

「分からない……いや、ランサー、声だ。奴の声に注意しろ」

読水には思い当たる節があった。しかし、これは……。

「……痛ってえな」

体勢を整えたバーサーカー。裂かれた脚を一瞥し、そしてランサーを睨んだ。その手に持つ斧の刃には未だ炎が灯されており、脚の傷もどこかに潜むマスターの治癒魔法によって回復していく。

一步、バーサーカーはランサーに踏み入る。対するランサーは一步、下がる。

「……ハッ、先程の一連の槍捌き、大したもんだなランサーよ」

その様子を見て、バーサーカーは口端を釣り上げらせて言った。爛々と輝く炎に照らされて、彼の口から覗く鋭い犬歯の先が輝いているのが見える。

「鋭くも正確な前後の動き、トンボのような女だ。ならば殺すより、撃ち落とすが先か」

そう言うと、バーサーカーは前に飛び出し、斧を片手で一気に振り

上げた。それに伴って尾を引く炎の熱と光、そして炎への本能的な恐れと好奇。これらによってランサーにはバーサーカーの姿が視認し難くなった。

そこを、狙われた。

「hagaalaz」

バーサーカーが握っていた左手を開き、後方に下がっていたランサーに向けて振り付ける。するとバーサーカー手前の炎の壁を突き破り、何かが複数、ランサーへと飛来した。

それは、散弾のような勢いで飛ぶ氷の塊だった。ランサーは顔面への被弾を槍で防ぐも腹部に氷が当たり、脚を縛れさせて後方の壁に背中を打ち付けた。そこを見逃さず、バーサーカーは炎を突進で散らしながら迫る。

ランサーの対応は早かった。素早く屈むと、地面を蹴って真横に跳ね跳んだ。バーサーカーの大振りの一撃はランサーの頭上をすり抜け、コンクリートの壁を砕き割った。大振りを躲し、バーサーカーの真横を取ったランサーはステップで更に背後へと回り込む。

「お……っ！」

バーサーカーはその速度に声を上げる。振り向きざまに横に薙いだ蹴りをランサーは低い姿勢で掻い潜り、腰を据えて白兵戦に持ち込む。

斧と槍、力と速度、獣じみた攻撃性と研鑽された型の応酬。狂戦士と槍兵の戦いは、激化の一途を辿った。

間違いない。と、読水は二人の戦いを見守りながら確信した。ルーン魔術だ。バーサーカーの詠唱のような単語は、全てルーン文字の読み的一种だ。

松明を意味する炎のルーン、kano。雹を意味する氷のルーン、hagalaz。最初から分かっていた。しかし、異常極まるその魔術に信じられなかっただけだ。

ルーン魔術。一度は廃れたが、ある天才魔術師が再生を果たした魔術系統だ。北欧神話における最高神オーディンが世界樹で首を吊ることで見出したとされるその文字は、石や木などに刻むことで神秘を

発現させる。

そう、刻むことだ。その理に例外はないはず。ならば、これがバーサーカーの真名に行き着くヒントとなるはず……そう。

「……アイスランドのヴァイキングであり、スカルド詩人。アイスランド・サガを代表する、ルーンの使い手」

読水の言葉に、バーサーカーの動きが止まる。読水は構わず続けた。

「エギル・スカラグリームソン。バーサーカー、お前の真名だ」

「……おやおや」

バーサーカーは口笛を吹き、読水の方へ顔を向けた。

「ついつい忘れちゃってたが……随分とお利口な魔術師じゃあねえか」

「……………」

「それがどうしたって話だよ。勝てるのか？ それで？ ああ？」

バーサーカーはそう言っ、歯をむき出しにして笑ってみせた。

その時、読水は見た。彼の歯の表面に、びっしりとルーン文字が刻まれているのを。

ガルドルという言葉がある。歌うという意味の『galdra』を語源とし、ルーン魔術の祖であるオーディンがもたらしたとされる。神秘の言葉を歌い上げることでの効果を求める——言うならば北歐における呪文そのものを指す。

三歳でスカルド詩を歌い、七歳には斧によって最初の殺害を犯した、ベルセルクの血を引く戦士。後にノルウェーの血の斧を持つヴァイキング王と争い続けることになった男、エギル・スカラグリームソン。

彼はその卓越したスカルド詩人としての才能をもって、己のルーン魔術を宝具として変質させた。それが彼の宝具『スカルド・サガ歯と舌』、ルーン魔術を呪文のように扱うという異才の魔術である。

「やることあ変わらねえ、自己紹介する手間が省けただけだ……てめえらの死体の上に、殺害者の名を刻んだ記念碑を置いてやるよ」

俺の名を忘れねえようにな。バーサーカーはそう告げると斧を両

手で握り締め、改めてランサーに向き直った。

その時だ。近くの脇道から騒音と、無秩序に宙を舞う新選組の亡霊を伴い、セイバーとそのマスター、シユウジが飛び出した。

ランサーらとバーサーカーの衝突。

バーサーカーの宝具と、真名の露呈。

セイバーらの介入。

それら全てを、この女は見ていた。否、もっとそれ以前、この亜種聖杯戦争における戦いの全てを。

炎のように揺らめいた赤髪が印象的な長身の女だ。黒のワンピースの上にトレンチコートを着たその女はビルの縁に立ち、読水達が戦っている橋の下を遠目に見ている。

彼女は使い魔を大量に放ち、繰り広げられる戦いをあらゆる角度から観察していた。全てはこの聖杯戦争における情報戦、尻尾の追い合い、ドッグファイトを制す為だ。そして事実として、彼女は現段階において全ての陣営に勝っていた。

しかし――。

「淑女が、こんな時間に……いくら治安の良い日本でも、これは紳士として見過ごせないですね」

そう、先程から首筋で感じ取っていた気配。背後からの奇襲という好機を捨てて戯ける男の声に、女は溜息をついた。

「キャスターのマスターかしら？」

「高い所から失礼。お察しの通り、使い魔でご覧になっていた通りです」

男――ウイリアムは、塔屋の上に屈み込み彼女を見下ろしていた。

「しかし、先程の言葉……貴方には無粋でしたか？ 魔女ならこんな時間こそ、相応しいと」

その言葉に、女はくすりと笑う。そして長い赤髪をなびかせて、振り返る。

そして同時に、右手で赤黒い光弾をウイリアムに向けて撃ち込んだ。

ウイリアムは曲げていた脚をバネのように駆動させ、宙返りで軽くその光弾を飛び越える。そして颯爽と塔屋から女が立つ地に降り立つ。

「マスター相手にはどうかと思ったが、君相手なら全てを出したって良いだろう……」

ウイリアムはそう呟いて、ゆっくりと立ち上がる。

「そうだろうか？ アレクシア・ブロッケン。悪魔と契約するブロッケンの魔女、その最悪の生き残り」

その言葉に彼女——アレクシア・ブロッケンは赤髪から覗く切れ目を更に細くして、唇の端を舌でチロリと舐めた。そしてパチンと、指を鳴らす。

それを合図に、上空を旋回していた使い魔の鳥が順に翼を畳み、ウイリアムへと次々に襲いかかった。

第六話 『魔女と魔獣』

ウィリアム・シン。イギリス人、三十六歳。

二十五歳から時計塔、降霊科の二級講師を務める。その柔軟さとフランクさから生徒からの人気は高い。時計塔での階級は第三位の『典位』ブライドながら、社会的地位は全く上がることのない男だ。

そして、その正体は封印指定を受けた魔術を継ぐ、血統を重視する『貴族主義派』が秘蔵する逸材だ。先祖が起こした事件により出世もせず、かといってその血統の重要性から野放しにもされない。まさに籠の中の鳥といった魔術師。

「教授、何でウィリアム教授のプロファイルなんて読んでいるんです？」

と、そこまで資料を読み返した時、声を掛けられた。

時計塔の魔術師、長い黒髪と不機嫌そうな顔を携えた現代魔術学部長、ロード・エルメロイⅡ世はそのしかめっ面を上げた。

「人が読んでいる資料を覗き見るなど、何度も言っているはずだが……」

へへへ。と笑うその青年の名はフラット・エスカルドル。エルメロイⅡ世が抱える生徒の中でも最古参に当たる天才児である。

「ウィリアム教授が封印指定を受けているって噂、やっぱり本当のことだったんですね！」

「……そうだ。彼の家系が所有する魔術刻印は、その希少性から封印指定を受けている代物だ」

どうせ、黙っていても付き纏われるだけだ。そう判断したエルメロイⅡ世は、溜息を付きながら資料をテーブルに放る。フラットはその資料に、餌を与えられた子犬のように飛びついた。

「へえ、獣性魔術ですか。というと……」

「そう。スヴィンと同じ、体内の獣性を引き出し、獣の神秘を纏うことができる……使い手の少ない魔術だ」

だが。と、エルメロイⅡ世は続けて、こう付け足した。

「彼の獣性魔術は、他の追隨を許さぬ完成度を誇る。古代インドから育まれてきたヨガの魔術基盤は、体外にある獣性を取り込む段階までに至っている」

「それってつまり、誰でもル・シアンくんになれるってことですか!?!」
目を輝かせるフラットに、エルメロイⅡ世は溜息をつき、首を振った。

「理論上はそうなる。しかし、彼らはその道を切り拓くるのに最低でも千年以上かかっている。しかも、あの領域に踏み入れることができたのはウィリアム・シンの血統だけだ」

呼吸法によって身体の生命力に留まらず、世界に満たされた生命力と繋がり、最終的に根源へと至る……彼らヨガの実践者の言葉では、プラーナヤーマというらしい。紀元前から脈々と受け継がれてきたこの道は、ウィリアム・シンの一族が得た獣性魔術という一つの到達点を得た。

「だから、封印指定を受けてる……!」

フラットの納得したような言葉に、エルメロイⅡ世は首肯する。

「彼は魔術刻印に刻まれたものならば、どんな獣性だって纏える。スヴィンのような人狼だけでなく、虎や獅子、ハヤブサ、それこそ蛇や魚といったものの神秘まで自在だ。……彼の先祖はその力でイギリスの植民地政策に抵抗し、時計塔を巻き込む大混乱を引き起こしている。それほどまでに、彼の魔術は強力だ」

その結果として、時計塔の管理下に置かれることになったが。と、エルメロイⅡ世は目を閉じる。

以降、ウィリアムの一族は『貴族主義派』の子飼いと言って良い。しかし時計塔は彼らの牙を恐れ、未だにホルマリン漬けを試みることを躊躇っている始末だ。

そんな彼が、その立ち位置を維持し続けんと職を辞し、出奔に近い形で日本で行われる亜種聖杯戦争に参加した。その事実を聞いた時は、エルメロイⅡ世の戦慄が走った。

しかし……こうして彼の略歴を見ると、思うものがある。彼なら

ば、あるいは五体満足のままに聖杯を時計塔に持ち帰るのではないかという思いだ。

無論、エルメロイⅡ世は聖杯戦争の恐ろしさは実感している。理解しているつもりでも、聞き及んでいなくてもない、実感しているのだ。それでも、彼ならばひよつとしたら……。

「……あれ、でも教授。ここ……ほら、おかしくないですか？」

と、暫し資料を熟読していたフラットは、そう言っただけ資料をエルメロイⅡ世に示す。

「そんなに珍しい魔術を使うなら、階位は教授と同じ四階級の『祭位』^{フェス}じゃあないんですか？」

時計塔における階位とは、魔術師の能力に応じて格付けされている。しかし第四位の『祭位』は特殊で、エルメロイⅡ世のように功績が認められた者や、能力とは別に評価される技能を有する者に与えられる階位となっている。その為に『祭位』の階位の者の中には、第二階位の『色位』^{ブランド}として十分な能力を持つ者もいる。

それか……。と、エルメロイⅡ世は眉間に皺に寄せる。つくづく、嫌なところに気付く男だと。

「封印指定を受けた魔術だ。噂になるまで知られているとは言え、それを階位の査定に入れることはできない」

「じゃあ、この『典位』って……」

「そういうことだ」

能力としては第五階位の『開位』^{コース}の下位でありながらも、優秀な生徒を育てたことで四階級の『祭位』にまで漕ぎ着けた男、エルメロイⅡ世。彼は何とも不機嫌そうに、顔をしかめた。

「彼は一族の魔術を抜きにしても、『典位』になるだけの实力がある」
そう言っただけだから天才というやつは嫌いなんだ、と言った目でフラットを見る。

そのジトツとした視線を受けて、時計塔史上でもトップクラスの才能を持つと言われる青年、フラットはその意図が分からずに笑って首を傾げた。

魔女、アレクシアの合図で、空を飛び交うカラス達は次々にウイリアムへと飛来した。

ウイリアムは顔を上げ、カラス達それぞれに鋭く視線を移していったが。

「なるほど」

と、何か納得したように呟く。それから視線を落として体を横に曲げながら、両手でカーゴパンツのポケットから何かを引っ張り出した。そして彼は、そのCDほどの直径の円盤を一度後方に振りかぶってから躊躇なくカラス達に投げ付ける。

その瞬間、円盤は強い光を放ち、光の尾を退きながらカラス達の群れを引き裂いた。

切断され、焦げた羽毛と血肉を空中に散らすカラス達。その様に舌打ちをしたアレクシアが両手を挙げると、光る円盤から運良く逃れたカラス達は、二つの群れに分かれた。

しかし光の円盤は緩やかなカーブを描きながら、それでも高速で、何度も執拗にカラス達を切り裂いていき、焼き焦がす。ウイリアムへと飛来したカラス達は、ものの十数秒で全て地面へと撃墜されてしまった。

「……………」

「支配を受けてない野生のカラスなら、もつと避けられたらうね」

上げていた腕を下ろし、押し黙るアレクシア。そんな彼女にそう意見を述べながら、ウイリアムは自身のもとへ帰ってきた円盤を掴む。彼は未だ燃え盛る炎の円盤、その中心にある穴に指を入れてクルクルと回し始めた。

「…………チャクラム」

アレクシアは呟く。チャクラム、それは投げ輪の外側に刃を付けた、古代インドの投擲武器だ。

「に、見せ掛けた、形ばかりの何かだよ」

しかし、ウイリアムはそう言って苦笑する。頭上に掲げた右手、その指先に引っ掛けたチャクラムの回転は次第に上がっていき、それに応じて先程以上の光を湛え始める。

「さ、覚悟はできているかな？ ブロツケンの魔女様」

そう告げるウイリアムに、アレクシアは黙って両手を上げた。

「……………ここに来て、降参はないんじゃないかな？」

「アマチュアが」

その行為を降伏と見た彼に、アレクシアは嘲笑を吐き捨てた。そしてパチンと、腕を交差させる勢いで一度、両手を叩き合わせた。

その瞬間、このビルの屋上にも堕ちていたカラスの死骸から羽毛が、まるで風に舞い上げられたように浮き上がった。

それにウイリアムは身を強張らせるが、対応が遅かった。黒の羽毛はウイリアムへと集まり、全身にベタベタと張り付き始める。

「……………ッー」

呪いか。体に流れ込むものの感覚より悟ったウイリアムだが、その効果は早かった。

既に手足は痺れ、回していたチャクラムは足元に落としてしまった。筋肉の強張りからみて、ウイリアムはこのまま行けば肺か心臓が止まって死ぬだろうと予測した。しかし、呪具が全身に張り付くカラスの羽全てとなると……………。

アレクシアは黙って、無数の羽を貼り付けたウイリアムを見ている。その顔には一切の嘲りも驕りもない、恐らく彼女も気づいているのだろう。ウイリアムはまだ、彼女に飛び掛かれるだけの余力を残していることを。

このまま呪いで殺すか、術者への攻撃に合わせてトドメを刺す。そこまでが彼女の作戦なのだろう。手慣れたもんだと、ウイリアムは舌を巻いた。

ただ、対処できない問題でもない。

「……………」

ウイリアムは小さく、しかし素早く口を動かさし言葉を紡いでいく。唱えるは呪いへの抵抗を上げる魔術。細かく長い儀式が必要な術式を端折り、震える指先の僅かな動作と言葉で効果だけを引き出していく。

立ち尽くしながらブツブツと何かを唱え続けるその様子に、アレク

シアも事態を察した。

アレクシアは手をウイリアムへと突き出し、魔力による光弾を撃ち込もうとする。しかしこのまま撃てば、ウイリアムに纏わり付いた羽が吹き飛ばされる。そうなれば、呪いがこれ以上ウイリアムへ流れ込むことがなくなってしまう。

「…………ふん」

ならば、羽の上から更に強力な呪いを付け足せば良い。そう判断したアレクシアは、手を突き出したままウイリアムへと歩み寄った。直接手で触れ、魔女の呪いを心臓に注ぎ込む。それで終わりだ。

アレクシアの指先が、陽炎のように歪み始める。歪みを見せるほどの濃密な呪いを携えた指先は、ジツと彼女を見つめるウイリアムの胸へと伸ばされていく。既にカラス羽の呪いは、彼から反撃の余力を奪ったことは分かっている。アレクシアは笑みを浮かべ、指先をウイリアムの左胸へと伸ばし…………。

「Prana shift—were—snake」

その時だ。アレクシアの耳に、予想外の言葉が入ってきた。先程のまですとは全く違う系統の詠唱を、ウイリアムが唱えたのだ。

何かヤバイ。そう予感し脚を一步引いたアレクシアだったが、ウイリアムへて伸ばしていた右手が捕まった。

右手を捕らえたもの、それは腕に絡みつく二匹の蛇だった。辿ってみれば、それはウイリアムの両腕へと繋がっている。

「せっかくだ魔術使い、学ぶと良い」

皮膚の表面に鱗を浮き上がらせていくウイリアムは、痺れた唇で囁いた。その体からは、カラスの羽が次々に地面へと剥がれ落ちていつていた。

「カラスの呪いじゃ、蛇の毒性には勝てない」

その言葉に意を返さず、アレクシアは次のアクションを起こそうとしたが。

「ぐっ…………ガッ！」

と、アレクシアは呻き、体をくの字に曲げた。その顔は、激痛と驚愕に歪んでいる。

異貌と化したウイリアムだが、それ自体は問題ではなかった。問題は右腕に絡みついた二匹の蛇の、締め付けだ。

絞め技、という言葉がある。しかし現代において絞め技とは、その狙いを首に限定したものと見える。相手の腕にダメージを与えろとすれば、腕ひしぎに代表されるアームロック、即ち関節狙いこそ最も効率が良い。

人体を効率良く破壊することを旨とする最新の格闘技において、腕への絞め技などありえない。しかし――。

「~~~~ッ！」

反撃はおろか、叫ぶこともできない。筋肉が内側に潰れ、骨が軋む。圧迫には、相手から思考を奪うに足る激痛と恐怖がある。

それでも尚、アレクシアは激痛の中からジワジワと意識を取り戻していく。そして脚を広げ、蛇を巻き付かせたままに右腕をウイリアムへと伸ばしていく。

しかし、その腕が不意にへし折れた。

圧迫されていた骨が折れたことよって生まれた、微かな空間、自由を魔女は見逃さなかった。アレクシアは左の貫手をウイリアムの喉へと突き上げた。

ウイリアムは怯み、彼女への拘束を緩めてしまう。互いに下がることで、アレクシアの右腕はスルリと蛇から抜けていった。

痛みの中での行動。次のアクションは、アレクシアの方が速かった。彼女はトレンチコートの内側へと手を滑らせ、布に巻かれた棒状のものを取り出す。そして布の端を噛み、布を剥ぎ取る。

それは読水が使用していた礼装と同じ、ハンス・オブ・グロリー栄光の右手であった。

その礼装に気づいたウイリアムは間合いを詰め、左腕の蛇、より正確には蛇の神秘を纏った左腕でアレクシアに殴りかかった。

「時を固めし罪人よ、我が腕となって死を払え」

しかし、アレクシアの方が一手先を行った。彼女は呪文を唱えると、栄光の右手を手放した。しかし、その屍蟻の手は炎を伴って膨れ上がり、ウイリアムの拳は平手で防いだ。

ウイリアムは深く追うようなことはせず、ふらつきながらも地面を

蹴って距離を取っていく。既に栄光の右手の端はアレクシアの肩甲骨の辺りへと炎のラインで繋がり、節くれ立った巨大な手は盾のように前方へと突き出されている。

「……ふふ、流石黒魔術。けったいな物を使ってくる」

「獣性魔術を使う、天然記念物には言われたくはないわ」

息を整えながら、二人は口々にそう毒づく。二人の距離が詰められ、激突するのにはそう時間は掛からなかった。

「prana shift——were—monkey」

ウイリアムの上半身から短い毛が生え、指先には鋭い爪が生えていく。アレクシアの目には確かに恐ろしい猿人、インド神話のハヌマーンを代表するヴァナラへと彼は姿を変えていった。

そして次の瞬間には、ウイリアムの足は地面のタイルを砕き割っていた。そして獣の神秘を得た五体が凶器となつて、アレクシアを襲う。

飛び掛かり、振り上げた五指を振り下ろす。夜風を切り裂くその一打は、アレクシアの栄光の右手が一人でに動いて受け止めた。

アレクシアが礼装として使う栄光の右手は、読水のもののように呪いを用いた探知機のような応用をしているが、それだけに留まっていない。彼女の栄光の右手は、相手の動きを感知し、自動で敵の攻撃を防ぐことこそを目的としている。

彼女はこれまで、この礼装によってあらゆる攻撃を防いできた。それと同時に、防御に思考を裂かないことで一方的な攻撃を敵に加えていった。

そう、これまではそうだった。これまでは、こんな速度と破壊力を併せ持つ怪物相手にこの礼装を使うことはなかったのだ。

手、足だけに留まらず、それこそ全身でもって攻撃を繰り出すウイリアムの猛攻は、型破り故の乱雑さと速度でアレクシアを襲う。アレクシアはその猛攻を、栄光の右手だけでは防ぎ切れず、左手でも魔力防壁を作り防いでいた。

「くっ……」

アレクシアは乱雑さから生まれる攻撃の隙を突いて、空を飛び交う

使い魔に指示を飛ばした。

空を飛び交う使い魔のカラスが数匹飛来し、ウイリアムの頭上から魔力で作られた光線を放つ。しかし、ウイリアムはそれを跳び上がった回避。同時に脚を振るってカラス達を蹴り殺した。

そして着地したと同時に地面を蹴りつけ、またもアレクシアへと襲いかかる。

キリがない。そしてこのまま続けられ、押し込まれる。

ウイリアムの猛攻を何とか捌きながら、アレクシアは次の対処を考える。自分が隠し持つ魔術の数々、そのどれを、どこまで使うべきかを推し量る。

すでに彼女は気づいていた。ウイリアムの身体が、未だ最初にやったカラスの呪いに犯されていること。そしてそれが、段々と解呪されてきていること。

このままウイリアムの痺れが治れば、自分は必ず殺される。そう確信していた。

しかし。

「……ふう、こんな所ですかね」

ウイリアムは乱打の速度を落とす、やがて完全に静止すると呟いた。

「……何の真似？」

殺気立つアレクシアを他所に、ウイリアムは額の汗を拭いながら背を向けた。

「今日は何も、貴方を倒すことが目的じゃあなかった。左手の令呪を見てもマスターなのは確かなのに、未だサーヴァントを見せようともしないし……これじゃ、バチバチやっけていても意味がない」

「……………」

「だから、そろそろお暇しようかなー……つと、思いましたね？」

「ここまできて、逃げると？」

そう言っただけウイリアムの背に腕を向けるアレクシアに、彼は落ちていたチャクラムを拾いながら笑った。

「大丈夫。アレクシア・ブロッケン、貴方がこの聖杯戦争に参加したと

分かった以上、今後は積極的に狙わざるを得ない」

「あら？ どこかで会ったかしら？」

「僕は時計塔の人間だ。君らブロッケン魔女を根絶やしにする理由は、幾らでもある」

「……そう」

彼女は納得したように目を伏せ、ウイリアムに向けていた腕を下ろす。

「なら、尚更ここで殺す必要があるわね」

と、彼女はそう言うや否や、指を鳴らして周囲の使い魔に指示を飛ばした。

複数箇所から伸びる光線で、ウイリアムが立つ場所は爆発のような破壊に満たされた。しかしながら、粉塵が消える頃には、そこにウイリアムの姿はなかった。

「そういう所ですよ。穢れた魔術使い」

そしてアレクシアの周囲から、彼の声だけが方向性もなく響き渡る。

「また会いましょう……次は、必ず仕留める」

その言葉を最後に、アレクシアの周囲からウイリアムの気配は消えた。アレクシアはそれを確認し終えると、静かに右肩から供給していた魔力を立ち、栄光の右手を地面に下ろした。続けて治癒魔法を折れた右腕にかけ、痛みを麻痺させていく。

「……………」

アレクシアは治癒を続けながら、周囲を見渡した。ビルの上は、今や酷い有様だった。取り分け目につくのが、使い魔に光線の跡と、ウイリアムが踏み砕いたと思わしきタイルの破碎か。

タイルを砕くほどの踏み込みに、あの速度だ。あのまま続けていれば、こんな骨折で済む相手ではなかったろう。それがどうしてか、向こうから引いて、自分がこうして立っている。

「……ハハッ」

その事実が意味するところに、魔女は一人、笑いを零した。

やはり魔術師という奴は、どこまでいってもアマチュアだ……と。

「キヤスター、聞こえますか？」

「うむ……討ち損ねたようだな」

「面目ない……」

アレクシアから逃走して数分、ウィリアムは腰に巻いていたパーカーを羽織り、道の脇に設置されていた自動販売機のそばで腰を下ろしていた。心の中で謝罪しながら、紐で身体に括っていた刀袋もそばに立て掛けている。

「それより、魔力供給はまだできていますよね？」

「若干弱まりつつあるが、隊士を使う分には問題ない」

良かった。と、ウィリアムは胸を撫で下ろす。戦っている最中では、こうして念話をするこゝも、魔力供給の状態を確認するだけの余裕がなかったのだ。

「ウィリアム君、こちらは妙な運びになった……聞く余裕はあるかね？」

「厳しいですね……切りが良いところで、撤収しましょう。報告はそれからで」

「承知した」

あ、僕の回収もお願いします。と、ウィリアムはそう付け加えてから、念話を切った。

ウィリアムは改めて一息つく。汗と動悸が一向に引かない。それだけ攻め立てても、あの魔女はサーヴァントを見せなかった。ならば、情報という尻尾を追い合うドッグファイトでは彼女が一枚上手だったかもしれない。

しかし、こちらの収穫も大きい。今はそれで、これくらいで満足すべきだ。ウィリアムはそう納得すると、ふと空を見上げた。

ウィリアムの鋭い聴覚は、未だ火花を散らす英霊達の戦いの音を捉えた。

「……良い音だ」

ウィリアムはそう呟くと、子供のように微笑んだ。

ひよっとしたら今夜は、自分もアレの一部になれたかもしれない。

そう思うと、微笑まzにはいられなかつた。

第七話 『英霊七騎』

数分前。

シユウジ達はセイバーの読みを頼りに、新選組の亡霊の追撃を振り切ろうとしていた。

「新選組と言ったか？ 中々に追うのが上手い」

セイバーは亡霊を通り抜け際に斬り飛ばし、人気のないマンションの階段を駆け上りながらそう感心した。

「連携が取れている上に、周囲の地形を良く理解している。高所に兵を置いている上に、行かせたい方へと追い込もうとしてくる」

まるで猟犬だな。と、彼は立ち止まり、こちらを囲もうと横に広がる亡霊達を踊り場から見下ろす。追いついたシユウジは一息つきながら、彼に聞いた。

「……それで、いつになつたら脱出できる？」

「もう少しだ。さつき斬った奴が最後、偵察兵はいなくなった……見ろ、下で連中がぞくぞく集まっているが、誰一人階段を登ろうとしない。包囲して、他の偵察が追いつくまでの時間を稼ぎたいのさ」

つまり、その程度という訳だ。セイバーは敵の陣営に対し、そう結論づけた。聖杯に与えられた知識によれば、新選組とは都の治安維持の為に組織された剣客集団であつたらしい。優れた猟犬ではあるが、二の手、三の手を用意するような策略家じゃあないのだ。

「……なら、ここを振り切れれば終わりか」

「まあ待て、まだ周囲の者共が集まり切ってない」

ジツと下を静観するセイバーの言葉に溜息をつき、シユウジも彼に倣った。

しかし。二人はパツと顔を上げて、向かい側に立つビル……その向こう側を睨んだ。

「……セイバー、聞こえたか？」

「刃を打ち合わせる音……サーヴァント同士が戦っているな」

セイバーは探るように目を細めたが、やがて口端を上げた。

「この音の間隔、槍だ。恐らくは、あの……」

「向かうぞッ！」

その言葉を聞き、シユウジは躊躇なく踊り場から地上へと飛び降りた。そして斬り掛かってくる亡霊を強引に突破していく。

「おうおう……仕事熱心なマスターだ」

セイバーは眩き、ヒョイと落下防止の鉄柵を飛び越えた。

新選組の亡霊らを文字通り蹴散らしながら、セイバーとシユウジが読水達のいる橋下へと飛び込んで来た。

読水の姿を目で捉えたシユウジは、間髪入れずに黒鍵を投擲した。読水は頭を下げてそれを避けようとしたが、彼のもとへ来るより前に、黒鍵はランサーの十字槍に叩き落とされた。

読水を守るべく、身を投げ出したランサーは素早く地面を転がり、片膝のまま槍を構える。明らかな隙を見せたランサーだが、バーサーカーはそれに構うことなく斧を下げ、青筋を立てて振り返った。

「誰だ……てめえら？」

殺気立つバーサーカーに、シユウジは身構えながら答える。

「セイバーと、そのマスターだ。お前には……」

「そうか」

聞いてないな。と、バーサーカーは一転してシユウジへと襲いかかる。狂っているとはいえ、戦士として、横入れをしてきた男を彼は許さなかった。

駆け寄るバーサーカーの前に、セイバーが割って入る。狂戦士たる故か、怒りの矛先を変え、一切の逡巡なくセイバーに斧を振り下ろす。セイバーはそれを剣で受け止め、下方に押し流して身をぶつけあう。

十センチほどの身長差を物ともせず、セイバーは吠えるバーサーカーに語りかけた。

「デカイ割に、少々軽いな。鎧も……なしか」

「てめえ……ッ」

「ぬん……ッ！」

セイバーは腰を落とし、掛け声と共に肩口でバーサーカーを押し上げた。バーサーカーの両足は地面から剥がれ、五メートルもセイバーから押し飛ばされてしまった。

「悪いが、連中に手を付けたのはこちらが先だ」

ここは引いて貰おう。そう告げて、セイバーは剣先をバーサーカーへ向けた。

バーサーカーはそんな彼と、そのマスターを見る。そして背後のランサー達に意識を巡らせ。

「上等だよ……」

と、両腕を広げ、腰を落とした。斧こそ手にしているが、それはレスリングの構えにも見えた。

「てめえからブツ潰す……正面からだ」

セイバーはその剣幕に怯むことなく、剣を構え直した。

「……付き合おう。おう、シュウジ」

「……話もできそうにないしな」

事を急いだ自分のミスからだ。そうシュウジは自分を納得させ、状況を確認する。バーサーカーのステータス、ランサーとシュウジ付近の状況、そして気になっていた新選組の亡霊達は、後方でこちらを遠巻きに見ているだけだ。

……これなら、やりようはあるか。と、シュウジは右腕を振りつける。斬撃用の黒鍵を袖から出し、刃を生成しながらセイバーに告げた。

「バーサーカーを急いでやってくれ。二人はこっちで捕まえておく」

読水は、自分の血の気が引くのを感じた。

自分がランサーと、そのマスターを相手取る。その宣言は、マスターという役割の許容を超えたものだった。しかし、何の緊張もなく言つてのけるこの代行者が、こんな場面でジョークを言う人間でないのは分かっている。

シュウジはセイバーとバーサーカーを結ぶ直線から離れ、大回りに読水達に歩み寄ってくる。その姿は読水にとって、ゆつくりと歩み

寄ってくる死神そのものだ。

しかしこの展開、チャンスではある。サーヴァントと現代の魔術師の力量差は、どう工夫しようが大きい。それは事実なのだ。

「ランサー」

“……少し、待ってください”

念話の呼びかけに、ランサーは迷いを見せた。油断なく槍を構えるばかりで、前に出るのを躊躇っている。

「……………」

先に動いたのは、シユウジだった。左手で生成した黒鍵を三本、まとめて読水に向けて投げつけた。

ランサーは読水の前に移ってそれを槍で弾き、即座に右手で印を結んだ。そして先程まで使っていたマンホールの蓋を、浮かび上がらせる。

だが、できたのはそこまでだった。それを見るや否や、シユウジは一気に間合いを詰め、ランサーに右手の黒鍵で斬り掛かった。

不意な攻めに息を呑んだランサーだが、即座に右手で槍を握り直し、シユウジの剣を槍で受けた。反撃とランサーが槍を突き出すと、シユウジは上体を反らしながら、辛くもその一撃を黒鍵で防ぎ、続く二撃目、三撃目を捌きながら後退する。

そして横にステップし、読水に向けてまた黒鍵を投げた。

間違いない。ランサーは槍でその投擲を打ち払いながら、先程からの予感を確信へと変えた。この男は、昨日の戦いで自分の戦法を攻略している。

印を結べば、槍術の使えないランサーに迫り剣で相手取る。槍でもって近づけば、読水を投擲武器で狙ってランサーに守らせる。

読水を守るランサーはシユウジに向かえず、しかし守りに徹したランサーをシユウジが討てるはずもない。結果として、膠着状態を迎える。捕まえておくと宣言した通りの状況を作り出されたことに、ランサーは歯噛みした。

いつそ読水を守りつつ、ここから離れるか。しかし可能か。そう、ランサーが考えた時だ。ランサーの横を飛び抜けた銃弾が、黒鍵を投

擲しようとしていたシュウジの腹部を叩いた。

見れば読水は腰だめに拳銃を構え、ゆつくりと煙立つ銃口をシュウジへと突き出していった。

そうか。ランサーは、衝撃に堪え苦い顔をするシュウジに向き直った。読水を狙おうと位置を横に移せば当然、読水にだって彼への射線が通る。

「残り五発だ、ランサー」

読水はランサーに念話で告げた。

「残り五発、俺への攻撃は俺で凌ぐ。その間にケリを付けてくれ」

「承知しました、マスター！」

ランサーは頷き、シュウジとの間合いを一気に詰めた。

その時だ。シュウジの背後にいた新選組の亡霊達が、大挙して押し寄せてきた。

「……ッ!？」

シュウジは迫りくる者達に気づき、黒鍵を投げながら二勢力から距離を置こうとする。しかし、亡霊達はシュウジを無視して、ランサーと読水達に襲いかかる。

マズい。ランサーは槍で迎撃に掛かるが、意識をシュウジへ向けようと足掻く。亡霊達の意図は分からないが、ここでシュウジにまで来られれば、読水を守るのに手が回らなくなる。

しかし、当のシュウジは突然押し掛けてきた亡霊達に対して距離を取り、その意を探るように周囲を見回していた。

向こうにとっても予想外なのか。ランサーはそう理解するや否や、意識を目の前の亡霊に向けた。そして急速に槍の回転を上げ、敵の殲滅に掛かった。

力の差は歴然であった。

剣と斧を強く打ち合わせるセイバーとバーサーカー。打ち合わせれば最後はバーサーカーの姿勢が崩され、その度にセイバーは間合いを詰め攻めに回る。

速さが違う、腕力が違う。それでもバーサーカーが未だ健在なの

は、防御に回らずに終始攻め手に回ろうとしているからだろう。

事実、セイバーはやりにくさを感じていた。バーサーカーは縮こまらない、ふらつこうがセイバーの殺傷を第一に考えるその破滅的な気性は、この戦いを一つのステップとしか見ていないセイバーの勢いを削ぐ。結果的に、セイバーの一瞬の攻勢は浅くに留まる。

加えて、鎧も着込んでいないのにバーサーカーは頑強だった。浅く斬り裂いた程度では怯みもせず、マスターの治癒魔術であつと言う間に回復してしまう。

しかし、不安定だ。そうセイバーは戦いながら結論づけていた。バーサーカー故か、技量にランサーのような軸がない。自身の暴力性を振り回しているだけで、土台がないのだ。ならば、どこかで致命的な隙が生まれるはずだ。そこを突く。

そう思い、高を括っていたセイバーだったが。

「ぎっけんじゃねえぞ、テメエツ！」

引き際、浅傷にバーサーカーを斬り裂いた時だ。数度目になるその一撃に激昂したバーサーカーが、セイバーへと迫った。

薙がれる斧。先程より、ずっと速い。それでもセイバーは問題なく剣で受ける。しかしその衝撃は凄まじく、セイバーは後方へとたたらを踏んでしまった。

さっきの彼の腕力じゃない。何か、ヤバイ。そう悟ったセイバーだったが、バーサーカーは更に追撃を加えた。

「uruz！」

そう叫んだバーサーカーは、宝具『歯と舌』の力を開放。uruzのルーン……すなわち、雄牛の強靱性を得たバーサーカーは斧を手に提げたまま、頭からセイバーに突進する。それを見たセイバーは、剣の背に左の手甲をあてがって固定し、その突進を受け止めめに掛かる。そして、バーサーカーの額とセイバーの剣が衝突する。遠くにまで響き渡ったその音は肉と鉄というよりむしろ、重厚な鋼同士の衝突音に似ていた。

後方に押し出されたのは、セイバーだった。しかし、まだ終わっていない。額から血を溢れさせながら、バーサーカーは更にセイバーを壁

に押し込んでいく。セイバーの顔面に、自身が持つ剣の背がゆつくりと迫ってきていた。

ジワジワと追い込まれていたセイバー。しかし不意に彼は屈み、剣をテコの原理で押し上げる。柄頭でバーサーカーの顎を跳ね上げ、その一瞬の隙を突いてセイバーは横へと飛び下がって逃げきった。

「セイバー！」

バーサーカーとセイバーの衝突に、シュウジは念話で呼びかける。シュウジの呼びかけに、セイバーは後頭部をさすりながら応えた。

「大丈夫だ、シュウジ……それより、あのバーサーカーのステータスをもう一度確認してくれ」

「分かっ……クソツ、厄介な相手だな」

その感想に、セイバーもやはり、と頷いた。

バーサーカーのステータスは、先程確認しておいた。しかし彼のクラス別スキルである『狂化』がEからEへと更新され、それに伴ってステータスも上がっていた。

「狂化と、ステータスが上がっている！ このサーヴァント、好きのように狂化スキルを上下させるのか……！」

「自由自在かどうかは判別できないが、更に上る可能性は高いな。……クク、こいつは手強そうだぞシュウジ」

セイバーは笑いを零し、剣を下へと振り付ける。そして、改めてバーサーカーを見据えた。

そんな彼にバーサーカーは唸りながら、姿勢を低くしていく。まるで引き絞られていく弓のような緊張がある、またあの突進を行うつもりだろう。

それを棒立ちで睨みながら、セイバーが口を開いた。

「……俺の故郷じゃあ、闘牛が盛んでな」

「……」

「当時は猛牛相手に騎士が馬鹿やるんだが、俺はやったことがなくてな。やらせてくれて言っても皆が危険だ、何だのと止めてくる……」

「……uruz」

バーサーカーは問答無用に飛び込んできた。

しかし同時に、セイバーもまた大きく左足を前へと踏み出していった。

衝突部位は左拳と、頬。抉り込むようなセイバーの左フックに、バーサーカーの突進と意識は横に弾き飛ばされる。

「ありがとうよ、バーサーカー」

地面を頭から滑っていくバーサーカーに、振り返りながらセイバーは言った。

「長年の夢が叶った」

「てん……めえッ!」

「来いよ、バーサーカー」

荒い息を吐きながら、それでも奮然と立ち上がるバーサーカーに、セイバーは手招きをする。

「宣告した通り、正面からだ」

その言葉に、狂戦士は咆哮を重ねて前に飛び出した。

激突するセイバーとバーサーカー。

猛攻を加える新選組の亡霊。それを迎撃するランサーと、そのマスター。

そして、亡霊のお陰でフリーになったセイバーのマスター。

……頃合いだろう。

読水達より数キロ離れた所で電柱に身を預けた、その背の高い女学生は頷く。そして声に出して己のサーヴァントに告げた。

「そろそろ行こう、ライダー」

それは、夜に響き渡る甲高い排気音からやってきた。

まだ何か来るのか。読水はそう嘆きながら音源を探す。音は次第に大きく、近くなってくる。

そして、来た。

その軽トラは大通りの方角から急カーブを決めながら現れ、けたたましい音を立てながらこちらへと走ってくる。突拍子のない、そして

予想さえしていなかった現代の乗り物の乱入に、この場にいた全ての者がその乱入者に注目してしまう。

そんな中、軽トラを運転していた者が窓から上体を出す。それからハンドルを切って道路脇の境界ブロックに乗り上げると、そのまま片輪走行になり勢い良くこちらへと迫ってきた。顔を見せたその運転手が凶暴な笑みを浮かべているのは、目の錯覚だろうか。

「う、う、嘘だろッ!？」

「マスター、下がって!」

ランサーは読水の肩を掴み、車から遠ざかるよう亡霊達を相手取りながら走らせる。

運転手は軽トラから、宙へと身を投げ出した。そして車の速度そのままに、軌道上にいたバーサーカーに手にした得物を打点とした体当たりをきめた。それは体勢をほとんど横に倒した状態での、車の速度と全身を利用したリアアットであった。

その突拍子のない攻撃に、バーサーカーは避けることも叶わなかった。斧で受けはしたものの衝撃に堪えられず、地面に背中から叩きつけられる。同時に運転手を失った軽トラは、ガードレールに力なくぶつかり、停車した。

運転手はバーサーカーを地面に叩きつけた後、地面を転がって衝撃を緩和させる。

そして運転手——ライダーは膝立ちに、この戦いの場に躍り出た。

鳶色の巻き毛、上半身に獅子の刺繍を施したウールの外套を直接纏った優男だ。その右手に持つ短剣には麻縄が鞘と柄巻の代わりに巻きつけられており、その麻縄は今、バーサーカーとの戦いで解けて宙を舞う。

ライダーはその場で立ち上がりはしなかった。左手で宙に舞う麻縄を掴むと、膝立ちの姿勢からセイバーへと駆け出す。

ほう。と、セイバーは少しだけ驚いたように顔を綻ばせ、剣の切っ先をライダーへと向けた。それはセイバーなりの、敵意の表示であった。

ライダーは走りながら、右手の短剣を振りかぶり、そして手放す。

手放すや否や、左腕を勢い良く振りつける。

麻縄は短剣の柄頭に引っ掛けるように結び付けられており、ライダーは短剣を縄の操作で横殴りに叩きつけようとしていた。

しかし、振りの大きいこの一撃を受けてやるほどセイバーはノロマではない。顔面に叩きつけられようとしている短剣を、彼は剣を手元に引き戻しながら弾き上げる。続けて迫るライダーに向けて、返す刀で左から右へ、横薙ぎに剣を振るう。

胴へと食い込み、両断しようとするセイバーの刃。ライダーはそれをセイバーの懐……どころか足元へとスライディングして掻い潜った。そしてセイバーの膝に手を掛けて体を半回転させ、一瞬で真後ろへと滑り込んだ。

普通の闘技とは明らかに異なる、ライダーの身のこなし。加えて膝に横からの力を加えられたセイバーは姿勢を僅かに崩し、対応に遅れた。

それが、致命的な痛手に繋がった。

ライダーはセイバーの肩に手をかけ、一瞬で彼の背に飛びつく。そして縄を引いて短剣を引き寄せ、全体重を乗せてセイバーの左肩口に短剣を突き下ろす。

狙うはサーヴァントの急所、頭と心臓にそれぞれある霊核だ。セイバーは体を傾け、ドスンと倒れ込むように尻もちをついた。それと同時に、ライダーが逆手に持った短剣が閃き、彼の肩口へと消える。

ガキリ。と、痛々しい音が橋の下でくぐもった反響音を響かせる。

やられたか。と、それを見た多くの者はセイバーの死を予感した。しかし……。

「——ガアッ！」

セイバーは吠え、ぐるりと身を翻すと右手の剣をライダーに叩きつける。

ライダーは逆手に持った短剣でそれを防ぐも、弾き飛ばされ、地面を転がされる。

しかし後転して立ち上がり、短剣を順手に構え直して素早く身構えるライダー。対してセイバーは、ゆっくりとした動作で立ち上がって

いく。

セイバーの左腕は、だらりと力なく垂れ、地面へと血を滴らせていた。

「……セイバー」

シュウジは思わず彼を呼び掛けたが、セイバーはその呼び掛けに応えない。ただ真つ直ぐに、前傾姿勢のままライダーを見ている。

そんな余裕がないのだ。シュウジも、今さつき目の前で繰り広げられた攻防に目を見張っているのだ。

常識外れなライダーの攻め。左肩筋から心臓を狙う剣先を、セイバーは咄嗟に姿勢をズラして肩当てで受けた。

一歩も違えれば、即死もあり得た。それをセイバーは凌いでみせたものの、代償に左腕に深手を負った。その傷の深さは、急ぎ治療魔術を行うシュウジには良く分かる。

しかしシュウジにとって何より衝撃だったのは、セイバーが出会って始めて深手を負い、余裕を失ったことだった。そして、それだけの相手が今、唐突に目の前に現れたことだった。

今にも飛び掛かりそうな気配を重厚に漂わせながら、しかし動かないセイバー。それに対しライダーもジツと身構えていたが、やがてゆっくり口を開き。

「……今のうちに」

逃げろ。と、彼は言おうとしたのだろう。

その言葉より先に、彼が乗っていた軽トラがエンジンを吹かし、この場から離れようと走り出した。

見れば、荷台にはランサーが片膝立ちで乗っている。読水達はこの混乱の隙に、逃げ遂せるつもりらしい。

シュウジは黒鍵を生成したが、そこで腕は止まる。今、治療魔術をやめる訳にもいかないし、このライダーを無視できる余裕はない。見逃す他ないことを知り、彼は舌打ちをした。

「……ははっ」

その様子に取り残された皆が呆気にとられ、ライダーも吹き出し肩をすくめた。そしてこの場を後にしようと身を翻した時、セイバーが

口を開いた。

「どこに行く？ ライダー」

「……………」

「せっかく聖杯戦争に参加したんだ。三騎士の一角のセイバーと、もう少し遊んでいったらどうだ？」

「…………強がるな」

セイバーを一瞥もくれないまま、ライダーは低い声で言った。

「その左腕はまだ使えないはずだ」

その言葉をセイバーは笑い飛ばし、剣を肩に担ぎ歩み寄っていく。

「右手一本でもお前を斬ることはできるさ。それに……………」

強がっているのは、お前もだろう。と、セイバーは続けてこう言った。

「さつさと剣を左に持ち替えろ。負傷した手で剣を握る者に、斬り掛からせるつもりか」

「……………」

バレていたか。というようにライダーは笑みを浮かべ、カールした鳶色の髪をワシワシと搔く。

セイバーの起死回生の一撃を、ライダーは逆手に持った剣で受けた。結果、ライダーの腕はS字に曲がった状態で衝撃を受けてしまい、衝撃は手首に吸収されてしまった。

「片手と片手、条件は同じだが…………なあ、ライダー」

セイバーは首を傾げ、剣を下へと振るった。その剣速は風を生み、鋭い音を立てる。

「お前の、その細腕は、俺を殺せるだけの力と技があるのか？」

「…………逃げよっ」

セイバーの指摘にされると、ライダーはそう呟き、読水達が消えた方向へ駆け出した。

その様子にセイバーは高らかに笑い。逃げ去ろうとするライダーの背に叫んだ。

「貴様のマスターに伝えろっ！俺達に貴様らを狙う道理はないと！」

その言葉にライダーは振り返ることもなく、素早く霊体化して逃げ失せた。

そして訪れる静寂に、セイバーとシュウジは肩を下ろす。そして改めてバーサーカーの方を見た。読水達を追ったのだろうか、気がつけば新選組の亡霊達も見えなくなっている。

「……それで、バーサーカー。そちらはどうする？」

胡座をかいて地面に座り込み、不服そうにこちらを見ているバーサーカーに、シュウジは語りかけた。

「ライダーにも言った通りだ。私らはお前とここで戦う理由がない」
「……………」

その言葉に、バーサーカーは項垂れ、肩を戦慄させる。

「……………ダアッ！ わあったよ！」

そして、そう叫ぶと立ち上がり、シュウジ達の方へ拳大の物を投げつけた。それは、ルーンが刻まれた自然石だった。

刻まれた *s o w e i u* の文字、望む効果は強い光。その効果に従い自然石は眩い閃光を放ち、その間にバーサーカーは何か捨て台詞を吐きながら飛び出した。

バーサーカーは高くジャンプすると一度付近の路地へと跳び、それからまた闇夜へと跳んでいく。シュウジが薄目に確認できたのは、バーサーカーの脇に抱えられて暴れている、小さな女性の姿だった。

思ったより、近くに潜んでいたのか。シュウジは溜息をつく。ならばバーサーカーの最後の言葉はこちらに向けたものでなく、マスターに対してのものだろう。

周囲を見渡し、他に危険はないかシュウジは確認する。そして危険はないと判断し、ふうと頭を垂れた。

「やれやれ、だな。シュウジよ」

セイバーは肩口に手をやりながら、シュウジのもとへと戻りながら言った。

「またも連中らを逃してしまった……………それに思った以上に、俺達の任是多難なようだ」

「ああ……………ああ、そうらしいな……………」

シユウジは深い溜息を吐くと、ポケットからケータイを取り出した。

とりあえずは、ここまで荒らしてしまった現場の後処理を監督役のマリオに伝えねばならない。

状況は良く分からないが、分からないままに何とか逃げ切ってみせた。

読水は人気のない道を選びながら、軽トラを走らせていた。

新選組の亡霊の正体、セイバーとバーサーカーの対策、ライダーの思惑、分からないことは多いが、とは言え今は逃げの一手しかない。サーヴァント五騎が絡んでいる場など、どんな戦場、災害地帯よりも危険と言える。

この軽トラも、どう処分したものか。そんなことを考えていると、荷台に乗っていたランサーが突然叫んだ。

「マスターッ！ 正面にライダーがいますー！」

どうしろと言うのだ。読水がブレーキを踏み、車を止める。すると真正面に、ライダーが実体化して現れた。

「つと、待ってくれ！ 話がしたいんだ！」

軽トラの前に飛び降りたランサーにライダーはそう言うと、敵意のなさを示すように両手を挙げてみせた。ランサーはそれでも警戒するように槍を構えながら、読水の指示を待っている。

「……ライダー、一体何の用だ？」

拳銃を抜いて、油断なく読水は車から降りる。ライダーは愛想笑いを浮かべながら、読水の質問に答えた。

「同盟の申し出だ。俺のマスターと、会って欲しい」

「……同盟？ 最後は戦うしかない相手に、同盟を求めるのか？」

「色々と込み入った事情があつてね。そつちだつて、一時でも誰かの助力が欲しい身だろ？」

「……………」

押し黙る読水に、ライダーは決まりだ、と笑った。

「どうだい？ うちのお姫様と、会ってはくれないかな？」

一方、ウイリアムとの戦いを後、アレクシアはビルを下り、電灯が点滅している寂れたコインパーキングのブロック塀に腰掛けていた。一人、ではない。折られた腕の治癒を行う彼女のそば、電灯の光が差し込まない暗がりには彼女のサーヴァント、アサシンがいた。

「そう……ライダーも姿を現したか」

これで、ほぼ全てのサーヴァントが出揃った。彼女は今夜に得た情報を分析しながら、次の一手に必要な、足りない情報を洗い出す。

今最も足りないのは、この聖杯戦争の主催者である鏡宮のサーヴァントの情報だろう。ここまで情報から消去法でアーチャークラスだと予想できるが、主催者のサーヴァントだ、万全の用意をもって召喚された一級の英霊なのは間違いない。

次に探るべきは、最後の最後に盤面をひっくり返したライダーだ。ウイリアムが行った魔術師への襲撃をすり抜け、且つあのセイバーに深手を負わせた陣営……まるで得体が知れない。

「……マスター」

考えを巡らすアレクシアに、アサシンが掠れた声で告げた。

「あの者……ライダーの真名、私が存じております」

その言葉に、アレクシアの動きが止まる。

「……おや？」

彼女は腕の治癒を中断し、ゆっくりと首を傾けてアサシンを見た。

「教える代わりに……って、何か条件でも言いたげね？」

その問いにアサシンは暫く黙っていたが、やがてこう答えた。

「……あの男は、私の手で殺させて頂きたい」

「……ふうん」

憎しみを隠し切れないその声に、アレクシアは口角を釣り上げた。

かくして時計塔の魔術師が仕掛けたことで始まった、聖杯戦争の一夜目は明けた。

それぞれの思惑を以って七騎の陣営全てが動いた夜は終わり、魔術師とその使い魔は次の戦いに向けて刃を研ぎ、毒を盛る。

しかし、この先の夜には七騎全てが揃うことはない。
次の聖杯戦争の夜、七騎の英霊のうち、いずれかが欠けることにな
る。

第八話 『策謀』

私——佐藤真波は、これまで挫折のない人生を送ってきた。

これまで大した努力もしくとも、勉強やスポーツではそれなりの成績をおさめられたし、両親は出張で離れてしまっているが、それなりに裕福な家庭なんだと思っている。定期的に家に来てくれるハウスキーパーとも、それなりに仲良しだ。

でも、そんなことは挫折とはあまり関係がない。そう、私は思っている。

真剣にならないければ、出た結果に激しい感情は抱けない。私がこの十七年の人生で一度も挫折を感じなかったのは、真剣になれるもの、夢がなかったからだ。

打ち込めるものがなかった。夢中になれるものが見つけれなかった。それなりの感情の起伏だけで、それなりに恵まれた人生を過ごしている。

傍から見たらどう思うかは、私にとっては関係ない。私は、私が送るこの人生に、見つける手立てのない何かを求めている。そして、それを得られていないからこそ、どこか焦っている。

だからだろう。知らぬ間に左手の甲に浮かんだ奇怪な痣を、自分だけの秘密にしようとしたのは。

痣は、明らかに自然にできたものではない。それは、何かを意味する模様としか見えなかった。私は一見入れ墨のようにも見えるそれに、密かに、子供のような夢想を思い描いた。この刻印の謎めいた意味に、思いを馳せていたのだ。

だがしかし、その痣は私が思った以上に危険なものだった。

下校の途中、道端で急に胸が苦しくなったと思ってからすぐ、私の意識は静かに遠ざかり、暗闇へと途切れた。

それから次に見たものは、夜空を背に立つ外国人の姿。そして次に感じたものは、私を縛る手足の縄のきつきだった。

これから死んでもらうが、君は何も悪くない。その男は山間の駐車場の上に儀式めいた装飾を施しながら、慣れてないであろう日本語で私に告げた。

ただ、その令呪を君なんかが宿したのが問題なんだよ。と。

その時は、その男を言葉のほとんどを理解できなかった。しかし、私はここで死ぬんだな、ということは理解できた。

堪らなく悔しかった。悔しさというのが、どういものか分かった。

根拠もなく恵まれた存在だと、漫画で見た主人公のようにいつかは何を成し遂げられると高を括っていた自分が、その実、何一つ理解のできないままに殺されるということに、強い無力感を感じた。

だが、このままじゃあ次なんてない。そう思った時、私の胸を誰かが叩いた。

それは、どん、どんと内側から私を叩く、胸の鼓動だった。ガチガチと歯を鳴らし、冷たくなっていく体。その冷たさを心臓から送り出される血潮が溶かしていくのを感じる。

それは、私に『動け』と言っていた。

私はゆっくりと、男の前で立ち上がった。真正面から男を睨み、抵抗の意思を示す。男は驚いた様子で、私を黙って見つめた。

うん、これで良い。私は心の中で頷いた。急速に死に近づいた様な気もするが、このまま無抵抗に転がされていても最後には死ぬのだ。それなら、この心臓や血が求めるままに動いた方が、生きているって気がする。

「……………」

やがて男が何かを呟くと私の膝は折れ、冷たいアスファルトに膝を強く打ちつけてしまった。そして、それから痺れたように動けなくなってしまう。

まるで魔法だ。そう思うと、更に悔しさが心の奥底から溢れてきた。こんなことができるんだと知ったのが、よりによって死ぬ間際なんて……………。

冗談じゃあない。

と、頭の中で叫んだ時だ。

私にも魔法が起こせた。

私は、その光景を決して忘れることはないだろう。

私を殺そうとした男と、私の前に吹き荒れた暴風と、眩い光の渦。

そしてそこから現れた、彼の笑みを。

「……どうやら、俺を呼んだのはあんたみたいだな」

彼はそう言うと、足元にいつの間にか描かれていた魔法陣から歩み出て、私を見下ろした。

「一応聞いておこうか？ あんたが俺の、マスターか……ってな？」

そう言って笑う彼に、外国人の男は素っ頓狂な声を上げた。それから英語と思わしき言葉で、彼に何か捲し立てている。

彼は男を一瞥し、それから地面に描かれた魔法陣を見ると、苦笑した。

「……悪いが、あんたの持つてる触媒は関係ねえよ。俺を呼ぶ縁になつたのも、マスターも、この子みたいだぜ」

その言葉に、男はたじろぐ。それからゆつくりとこつちを見て。

そして私へ伸ばした右腕を、宙へ飛ばしてしまった。

顔をしかめ、押し殺した絶叫を上げる男。彼はいつの間にか短剣を手にしていて、刃に付いた血を払い落とした。

「魔術師風情が、サーヴァント相手に速さで勝負するか」

彼は斬り落とした腕を拾い上げ、駐車場脇の山坂へ放り捨てる。男は呻きながら、床に置いていた巾着を拾う。

「諦めが悪いな……つと」

ライダーは溜息をつき、私を背にするように立ち塞がる。翻った彼のマント、その背には雄獅子の刺繍が施されていた。

「すぐに済む。十秒で良いから、目を閉じてな」

少し振り返って、こちらへと笑いかける彼。私は不思議とその言葉を信じ、目を閉じた。

あれから、もう三日経つ。

私は彼——ライダーに、事の経緯を聞いた。

手に宿った令呪。サーヴァントとの契約。そして、聖杯戦争。何なら令呪で自害させ、降りても構わない。そう告げたライダーに、私は首を横に振ったのだった。

私達は、勝ち残る為の戦略を練った。そして……。

下校後、部屋で手に宿る令呪を眺め、これまでのことを回想していると、ライダーがそばで実体化して言った。

「お嬢ちゃん、そろそろだぜ」

「……うん、分かっている」

私は頷き、時刻を確認しながら文机から立ち上がる。

「じゃあ、ランサー達と同盟を結びに行こう」

聖杯戦争における、同盟関係。

それ自体は有り得ないものではないと、読水は聞いている。それどころか、割と一般的なものだ。

触媒の用意や魔力供給のシステム、根回しや緊急時のバックアップ要員……魔術師とサーヴァントの一組で、聖杯戦争は生き残れない。そもそも読水もこの日坂市を出てからの十年、運び屋として幾つかの聖杯戦争に間接的ながら関わっている。

そして今、読水自身もアダムという魔術師を雇い、住処や銃器の提供、情報の収集をさせている。この聖杯戦争の主権者である鏡宮だつて、その財力や影響力をフルに使って大量のバックアップ要員と使い魔を手足のように使っているはずだ。弱者だから群れるのではない、強者だからこそ群れを作れるのだ。

しかし、そうは言っても昨夜の申し出は、サーヴァントを持つマスター同士での同盟という話だ。

聖杯を得られるのは、生き残った一組のみ。同盟を結んでも、関係は最後には必ず破綻する。そんな同盟に背中を預けられるほど、読水の肝は大きくない。

ましてや、アレだ。

夕方。ライダーに待ち合わせ場所に指定された喫茶店を、読水は反対側のビルの上階にあったハンバーガーのチェーン店から覗き見て

いた。

外のテラスに座り、コーヒを啜るジャンパー姿のライダー。その隣に座る女がマスターであるなら……問題だろう。

見るからに、学校帰りの女子高生だ。

「……ランサー、どう思う？」

「どう……と、申されましたも」

失礼。と、ポテトを摘みながら、ランサーは唸った。

「マスターの心配は分かりますが……どうやらあの娘、天賦の才があるように思えます」

「なに？」

予想外の答えに、読水はランサーの顔を見やる。ランサーはジツと彼女を見下ろしながら、言葉を選ぶように切れ切れに続けた。

「まず身長が高い、力も……然程鍛えていないようですが、骨格からしてこちらの女性とは違うように思えます」

読水は改めて彼女を見る。魔術師の研究は代を重ねることを前提としていく、その為一族によつては一般人以上の体格や精神構造を持つものを少なくはない。しかし、この距離、角度では身長さえ確かではないのだが。

「もし彼女が武の道を歩んだのなら、剣であれ槍であれ、間違いなく名の知れた使い手になる……そんな天性を感じます」

「……何か、嬉しそうだな」

すみません。と、ランサーは照れ臭そうに笑った。

「武人として、あそこまでの恵体が自分には備わらなかったの……同じ女の身としては、先が楽しみで……」

なるほど。読水は溜息をついた。自分から見たら、ただの高校生にしか見えない。しかし、仮にも英霊であるランサーにそこまで言わせる存在となれば、余程のものだろう。何の情報もない彼女が魔術師として無名であっても、聖杯戦争に参加するだけ素質があるようだ。

「……よし、なら会って話を聞いてみるか」

承知しました。ランサーはそう言いつつも、容器に一本だけポテト

が残っていることに気づき、慌てて口に入れた。

彼女、佐藤真波と顔を合わせた時、読水もまた佐藤真波という人間に興味を湧いた。

170を優に超える長身、フワフワと重力に逆らう癖毛、好奇心が強そうどこか油断ならない瞳、そして妙な落ち着いた雰囲気は彼女を纏っていた。確かに感じる普通でなさ、読水はランサーの褒めつづりを納得した。

聞けば、彼女は魔術師ですらないらしい。数日前に令呪を宿らせ、触媒も儀式もなしにライダーを召喚したというのだ。

「……ありえるのか？ そんなこと」

「実際召喚してしまったから、同盟を求めてるんです」

佐藤はそう告げ、こう続けた。

「私は読水さんのような魔術師ではありませんので、魔力供給も上手くできませんし、長期戦になるほど不利になってきます」

それでも凄い話なんだぜ。と、ライダーはその言葉に補足を入れた。

「偶々……僅かながらも魔術回路を持っていたとは言え、ほんの一日の練習で魔力供給はできちゃまっているし、実体化も戦闘も可能だ」

そう言ってライダーは、自分がその証明だと言うように両手を広げてみせた。その様子を見て、読水は溜息をついた。

「……まあ、昨夜の大立ち回りを見ればそれは分かる。でも、長くは保たないって話だろ？」

はい。と、佐藤は神妙な面持ちで頷いた。

「だから、経験豊富な読水さん達がディフェンス、私達がオフエンスという形で同盟を組めれば、お互いに利益あるんじゃないかって」

「……なるほど？」

「単純にサーヴァントが二騎になりますし、読水さん達が敵を引き付け、私達が奇襲でトドメを刺すのが現状の理想だと思うんです……最後の二騎になった時は、恨みっこなし、ということ」

なるほど。読水はもう一度、合点がいったと頷いた。

しかし、内心は震えが走っていた。流石に、無感情ではいられない。だが、焦るな。読水は必死に自身を律していた。この二人には、あまりにも謎が多い。十年間続けてきたいつものやり方で感情を殺し、情報を可能な限り盗め。

「……ライダーはどの程度、戦い続けることができる?」

「……えーっと」

佐藤は困ったようにライダーを見ると、ライダーは肩をすくめ、代わりに説明を始めた。

「宝具は……ま、ほぼ使えないと思ってくれ。あと、バチバチ打ち合い続けるのも厳しいな」

「昨夜、セイバーやバーサーカーに行った奇襲が限界ってことか」

ライダーは含み笑いを隠すように、顔を伏せた。その振る舞いが肯定か否定かを問う前に、ライダーはこう告げた。

「イオラオスだ」

「何だって?」

「俺の真名だよ。イオラオス……ヘラクレスの従者って言った方が、聞こえは良いか?」

無論、読水は知っている。しかし、向こうから真名を伝えられるとは思わなかったし、何よりその名が問題だ。

イオラオス。彼の言うように、かのギリシャ神話の大英雄、ヘラクレスの甥であり従者だった男だ。

イオラオスはヘラクレスの罪滅ぼしの旅に同行し、ヒュドラ退治の際には切り落とした首が再生するヒュドラに対し、傷口を松明で焼くことで再生を防いだという。

さらにヘラクレスの死後、エウリュステウス王による迫害を受ける彼の子供達を導き、アテナイでの戦いでは奮戦、敗走するエウリュステウス王を戦車で死へと追い詰めた。

また彼はヘラクレスと同様にアルゴ船での旅に参加した英雄の一人として数えられたり、数々の戦車競技で優勝したりと多くの功績が記されている。

そんな伝説の戦士が今、自分の目の前にいる。

「……………」

「ほら、嬢ちゃん。これが本来するべき反応だつて」

絶句する読水にライダーは機嫌を良くし、佐藤の方へと視線を向けた。佐藤は溜息をつき。

「はいはい、無知で悪うございました……それは私がタイミングを見計らつて言うつて、話だったじゃん」

と、不機嫌そうにライダーをなじった。そんな彼女に、ライダーはクククと笑う。

「ギリシヤ屈指の大英雄、その功績を陰で支えた戦士に会えるとは……………」

その様子を見ていたランサーは、思わずといったようにポツリと言葉を漏らした。それは最初の挨拶以降は黙秘していた彼女の、二度目の言葉だった。

「聖杯戦争とは、本当に面白いものですね」

「お前も真名を明かせとは言わないが……その槍捌き、立ち振舞いから、大した武人であったことは分かるぜ」

感心したように言うランサーに、ライダーは苦笑し、カップに注がれた液体に視線を落とした。

「名も地位も隠し、仕える者を選ぶ自由もない……見つともない英雄の末路さ……それでも異なる地、異なる時代に生きた英雄と相見えることができる。この出会いが、俺達に共通する慰めだな」

「……………」

「だが戦つてみたい、なんて思わないでくれよ」

「無論です。マスターの命令なしに、貴方に槍を向けようとは思いませんよ」

「そりやどうも……で？」

と、ライダーは読水の方を見た。

「そんな伝説譚の裏方である俺だが、どうよ？ あのセイバーやバーサーカー相手には、ちよつと役不足か？」

どの口が言うか。読水は含み笑いを浮かべる。いい加減、期待を隠し切れなくなってきた。

セイバー——国土回復の英傑、エル・シド。

バーサーカー——鬼才のベルセルク、エギル・スカラグリーンムスン。

共に強く、倒し難い怪物だが、このイオラオスであれば制限があっても十二分に張り合える。それだけの能力と伝説が、彼にはある。

おそらく、この申し出が最後にして最大の、形勢逆転のチャンスだ……しかし。

「……答えは少し、時間を貰ってからでも良いか？」

読水はそう答え、背後を見やった。西の空を照らす夕焼けは、直に地平線へと姿を消すだろう。

「このままじゃ、夜になっちまう。ここで他のサーヴァントに襲われるのは、あんたらも嫌だろう？」

そう言いくるめると、読水は佐藤と連絡先だけ交換し、別れることにした。

「……つと、佐藤さん。最後にちよつと聞いて良いか？」

「はい？」

別れ際、読水は振り返り、佐藤に質問を投げた。

「あんたは聖杯を手に入れて、どうする気だ？」

佐藤は面食らったように固まり、それから考えるように目を泳がせる。そして、こう答えた。

「聖杯に選ばれた以上、できる限りのことはしたいなって……思っています。その結果、聖杯を手に入れたのなら、どう使うかはその時考えます」

「……」

そっか。と、読水は感謝を述べ、今度こそ別れることにした。

帰り道、ランサーは周囲に気を配りながら読水に聞いた。

「マスター。こちらにとっても有益な話に聞こえましたが……どうされますか？」

「あそこで真つ向からぶつかっても、ぶつ殺されるのは俺達だろうか……同盟を組むのは当然としても、まずは情報を集めたい」

「……つまり、最後にライダーを倒す為の……ということですか」
当たり前だと、読水は頷く。

聖杯戦争で魔術の心得もない一般人がマスターになるというイレギュラー。しかし前例がない訳じゃあない。そしてサーヴァントに欠点のない以上、この辺りから弱点を分析するしかないのだ。

「しかし、それは向こうも先刻承知なはず。隙はあるでしょうか？」
「……勝てるさ」

その問いへの答えか、あるいは自分に言い聞かせた言葉か。読水は口からそんな言葉を漏らしてしまった。

しかし、本心であった。何が、恨みつこなしだ。

どんな秘密があるか知らないが、あんなスポーツ感覚の子供に、自分が負けるはずがない。負けて、良いはずがない。

「……必ず勝つ」

再び読水は呟き、アタッシュケースを持つ手に力を込めた。

すでに西の空に光はなく、革で覆われた取っ手は冷たかった。

封印指定を受けた時計塔の魔術師、ウイリアム・レイ。

彼はホテルの一室で、ベッドに体を横たえていた。ベッドカバーの上を身を投げ出し、天井をぼんやりと見上げるその姿はとても気怠そうであった。

ほとんど丸一日、ウイリアムはベッドに突っ伏していた。昨夜の魔女アレクシア・ブロッケンとの戦いにより疲弊し、こうして緑に身動きも取れない状態になってしまっていたのだ。

試験的に獣性魔術の解放は行っていた。しかし、実戦での使用ではここまでの負担になるとは、ウイリアムにとって予想外だった。取り分け複数の能力を短時間に使い回したのが大きかったのだろう。肉体的疲労や魔力切れより、自分が自分でなくなっていくような神経の摩耗が酷い。

ウイリアムは横の椅子に座り、昨夜に得られた情報を報告するキャスターを見やった。相も変わらずハンチング帽とマフラーを取ることがないが、ウイリアムは出会って一日目でその質問をしているの

で、今更といった様子だ。

つくづく、自分のサーヴァントが彼で良かったと思う。ウイリアムは溜息をついた。キャスタークラスでありながら魔術師でない彼は、新選組の亡霊を用いる際の魔力消費が普通の使い魔の使役に比べ格違いに少なく済む。彼でなかったら、自分と亡霊の同時運用は不可能だったろう。

「……ウイリアム君、報告は以上だ」

「っと、失礼。うん……そうですか。ライダー、厄介そうな相手ですね」

報告を聞き終えたウイリアムは、ゆっくりと上体を起こす。

「ところでキャスター。なぜセイバーのマスターではなく、ランサーのマスターを狙ったのですか」

代行者のマスターと、高いステータスを誇るセイバー。ウイリアムの見立てでは、単純な実力ではセイバー陣営がこの亜種聖杯戦争の最高峰だ。片や現段階では逃げに徹しているランサー陣営。昨夜この二つを狙える際に、キャスターはランサー陣営を落とそうとしたのだ。

キャスターはその質問に、こう回答した。

「ウイリアム君。セイバー達は真っ向勝負を好むだろうか？ 逆にラン

サーは、槍に拘らず手癖の悪さが目に付く」

「そう見えますね」

「なら、私にとって脅威なのはランサーだ」

その断言に、ウイリアムは目を丸くする。構わずキャスターはこう続けた。

「どちらかのマスターを狙えた、あの状況……だからランサーのマスターを狙ってみた」

「……なるほど」

ウイリアムはそう言うと、腕を組んで黙り込んだ。

「……キャスター」

言うか否か迷ったが、ウイリアムはゆっくりとキャスターの顔を見る。

「貴方なら……もし一対一の状況を作れるなら、セイバーを討つことは可能ですか？」

「……………」

キャスターは考えるように静かに目を閉じたが、やがてウィリアムの方を見て、頷いた。

「宝具が未だ分からんが、それが剣によるものなら何とでもなるだろう」

その異様なまでの自信に、ウィリアムはごくりと唾を飲み込んだ。

予感があった。ウィリアムは視線を落とし、キャスターの肯定によって生まれた可能性から、頭の中で組み立てていた先々の計画を高速に修正していく。

セイバーとキャスターのステータス差は歴然だ。しかし、ひよつとしたら……キャスターならセイバーを真正面から叩き伏せることができるかもしれないと、密かに予感していたのだ。

「なら……いや、しかしそれでも最初に狙うべきは、あの魔女でしょうね」

「……なぜあの魔女に拘る」

欲張っちゃあいけない。と、笑って自分を戒めるウィリアムに、キャスターは言った。

「確かに情報を盗まれていたのは痛手だが、他に狙えるであろう敵はいると思うがね」

「我々の難敵が手癖の悪い奴らなら、アレがずば抜けているからです」
ウィリアムは、はつきりとそう告げた。

「稀にあるという番外的なクラスを無視すれば、あの魔女のサーヴァントは消去法でアーチャーか、アサシンとなります。なら尚更、放っておくのはマズい相手です。時間を上げればそれだけ、あの魔女は厄介な相手になる」

当然、時計塔の魔術師としての私怨もある。しかしそれを抜きにしても、あの魔女は危険過ぎる。チャンスがあれば、あの魔女も自分と同様招待したのかと主催者に抗議したいほどだ。

あの魔女はどんな手だって使う、下手すればこの街の無関係な住民

にも被害が及びかねない。ウィリアムもまた一般人からかけ離れた『人でなし』であるという自覚はある。しかし、だからこそ人道から外れぬよう意識して生きている。

「だからキャスター。この体がもう少しマシンになったら、改めてあの魔女を狙っていきましょう。大丈夫、今度は二人がかりです。必ず仕留められます」

「ところでセイバー。今、私らは何騎のサーヴァントに出会った？」

「突然何だ、シユウジ」

夕食、激辛の麻婆麺を食べていたシユウジは、唐突にセイバーにそう聞いた。セイバーはチャーシュー麺の丼に箸を置き、指折り数える。

「ランサー、アーチャー、バーサーカー、ライダー……まだ確認できてない亡霊を使う正体不明のサーヴァントは、キャスターかアサシンってところだろうか」

「そうだな。そしてセイバーを入れて、六騎までは把握してるって訳だ」

「……そうなるな？」

多すぎる。と、シユウジはそう言って、顔をしかめた。

「聖杯戦争のシステムは世界中に拡散されているが、その成功率は低い。仮に儀式に成功し亜種聖杯戦争を執り行えたとしても、召喚されるサーヴァントは精々が五騎……それでも能力が制限されて召喚されたという実例さえある」

「……そんな様子はないな」

自身の手を握り締めたり、開いたりするセイバー。その様子を見て、シユウジは頷いた。

「現状把握できたサーヴァントは六騎、そのどれもが驚異的な力を振るってみせている」

「……つまり、なんだ、この聖杯戦争は出来が良すぎるってことか？」

「私にはそう見える。もし七騎完全に揃っているなら、冬木の聖杯戦争に匹敵する規模だ」

しかし、そんなことがありえるのだろうか。シユウジはジツと井に視線を落とし、考える。直前まで聖堂協会に伝達しなかった、非公式の聖杯戦争。その主催者である鏡宮悟、あの男は何者だ。なぜ聖堂協会はこうも静観している。

ひよつとしたら。

この聖杯戦争は、十年前のアレと関わりがあるのか。

「……シユウジよ」

「ん……なに」

「麺が伸びているぞ」

それだけ言うと、セイバーはサツと自分の井に顔を向けてしまう。

どれだけ物思いに耽っていたのだろうか。見れば、すでに麺がスープから顔を出すほどに膨れ上がっていた。

鏡宮悟は一人、自室の窓から月夜を見上げていた。

冷たく澄んだ冬空の月を、手にした煙草の煙が覆っていく。煙は上へと広がり薄れていくが、鏡宮にはいつまで立っても月が濁って見えなかった。

啓示はとつくの昔に見えていた。そろそろ、動き出さねばならない。そう分かっているも、これで良いのかと考えてしまう。

この地に古くから居を構える鏡宮の一族。彼らは起源を辿れば、占いを得意とした一族だった。そして後に株分けによって生まれた読水家は過去視を得意とした魔術師になり、鏡宮家は対するように未来視を専門としていった。

すでに魔術刻印は息子に譲った鏡宮だが、この聖杯戦争の未来もまた数年も前に占っている。

結果は——『裏切りによって死ぬ』。

何度やり直しても変わらぬ、最悪の結果だった。

しかし、そんな結果如きで尻込みはしてられない。危険を乗り越えてこそ、繁栄が手に入る。占い、危険を支配し、より良い未来へと修正していく。そうすることで、鏡宮家は栄えてきたのだ。

そう、裏切りは見つけて必ず殺す。

読水竜也。十年前に滅ぼされた読水家の、たった一人の生き残り。裏切りを恐れ仲間にはしなかったが、彼にはもう少し長く夢を見させてやりたかった。そもそも聖杯を手に入る権利、それは我々だけにあるのだから。

しかし彼がセイバー、エル・シドを召喚できなかった時点で、利用価値はなくなっていた。読水が手に入れた珠玉の触媒、あれも元は鏡宮が手を回し、彼に掴ませた代物。彼にはセイバーでもって、終盤まで暴れてもらう予定だったのだ。

その目論見は外れたが、その役目はセイバーを召喚したあの代行者がやってくれるだろう。そうなるように、代行者とは約定を結んでおいた。

鏡宮はそこに、裏切りの可能性を見出した。そもそも、あの事情も知らなさそうな若い代行者に、読水を渡す気など毛頭ない。

急がねばならない。もし聖堂協会に彼が持つ『欠片』が奪われれば、それで形勢は逆転してしまう。

迷いはまだある、だがもう時間はないのだ。

意を決した鏡宮はケータイを操作し、ある者に連絡を入れた。

「……夜分遅くに申し訳ない。鏡宮ですが、レオポルディーネさんに繋いでもらいたい……ええ、前に出した指示について、少し確認を」

竜也君、許せよ。

せめて同じマスター相手に、狂戦士相手に立派に戦って、華々しく死んでくれ。

そう心の中で呟き、鏡宮は煙草の火を灰皿で揉み消した。

第九話 『フルフェイス』

一ツ目聖夜が鏡宮悟のバックアップ要員になったのは、先の見えな
い日々の研究に焦りを感じたからだった。

広がる亜種聖杯戦争の渦は、召喚の触媒となる品々の高騰を生ん
だ。鏡宮は触媒の譲渡や斡旋を餌に、外部の魔術師を多く従えている
という。聞けば、出会った他の魔術師も大体は自身の亜種聖杯戦争の
為だった。

そう、目的は皆同じだった。

生死を分けたのは、一ツ目がまだ高校生で、周りからの信用が低
かったからだ。

定員オーバーだから、追って明け方には合流してくれ。と命じら
れ、発進しようとする車を見送っていた時、それは起こった。

まず、運転席にいた石川がフロントガラスを突き破って入ってきた
男に串刺しにされて死んだ。残りの者は、車内に溢れ出たガスのよう
なものを吸って死んだ。

そして、皆を殺した……フェイスマスクとフードで顔を隠したその
男が、車から降りようとドアを蹴破った。

そこまですを把握した時点で、一ツ目は逃げ出した。

それは日坂聖杯戦争が公に開催を宣言された、翌日のことだった。

読水は隠れ家の一つで、外の自販機で買ったコーヒーを啜りながら
ケータイ画面を睨んでいた。画面には、アダムから送られてきた日坂
市に潜伏している魔術師のデータが映っている。

「酷いな」

「えっ」

「いや、こっちの話」

後ろでアダムから送られてきた服を選別していたランサーに補足
を入れ、読水は改めて画面を見る。

時計塔の魔術師、『典位』のウィリアム・レイ。

“加工屋”の名で知られる、死霊術師ステイブ・フォスター。数年前から日坂市に移り住んでいるイタリアのルーン魔術師、レオポルド・ディーネ・ミローネ。

陰で多くの暗殺に関わっているという支配魔術師、石川秀貴。

そして何より目に付くのは、リストのトップを飾るアレクシア・ブロッケンの名だ。

「……アダム、アレクシア・ブロッケンが日坂にいるっていうのは確かなのか？」

「間違いない」

通話状態にされているケータイに尋ねると、アダムはそう断言した。

「オマケにもう一人、無名のブロッケンの魔女がいる……ここまで露骨に尻尾を見せているんだから、十中八九、マスターとして参加しているだろうね」

その回答に、読水は眉間に皺を寄せてうなだれた。

ブロッケンの魔女、その生き残りにして最大の一族。彼女の悪名高さは、読水も耳にしている。

中世紀末、ヨーロッパでは悪魔との契約によって魔力を得る術が広まっていた。

彼女らの恐れるべき点は、彼女らが魔術師の家系ではないという、ただ一点だ。悪魔に身を売る彼女らの理念は破滅的であり、私欲、復讐心にまみれていた。魔術師としての常識を欠き、当時のモラルさえも捨てた彼女らによって振るわれた魔力は、凄惨な爪痕を表の世界に残している。

彼女らの多くは聖堂教会によって殲滅されるも、隣人が悪魔の手先かも知れぬという恐怖は民衆にまで広まり、結果、『魔女狩り』という狂気を生んでしまうほどであった。

ブロッケン山に住まう悪魔と契約を結んだ存在——ブロッケンの魔女も、そんな悪魔との取引によって力を得た一角だった。

彼女らもまた他の魔女と同様、当時の聖堂教会によって駆逐されて

いった。しかし彼女らは世界中に散って陰を潜め、契約の術を連綿と伝えることで現代も尚、生き延びている。

アレクシアはそんなブロッケン魔法の一人、そして契約した当事者から三代目となる女だという。

魔法協会の一角、アトラス院の地下迷宮へと忍び込んだ祖母と、時計塔の講師と生徒を悪魔に貢物にした母を持つ。共に逃げ延びる間もなく処刑されるも、未だ血を途絶えさせない悪名高き魔法の一族。それが今、この日坂市に潜伏している。

「……今なら、逃走ルートを手配してやれるけど?」
「……………」

冗談だろ。と、読水はアダムの提案を一蹴した。

下手をすれば、外部からの介入で聖杯戦争自体の崩壊になり得ない存在だ。だがそんなことは、主催者の鏡宮も、読水も許さない。許すものか。

「そつちこそ、仕事が終わらさつさところから離れろよ」

「おうおう、一丁前に人の心配かあ? ま、確かに例の新選組にぶつた斬られて、一体消費させたんだけどね」

やだやだ。と、アダムはわざとらしく溜息をつく。この様子では、ちつとも懲りてなさそうだ。

「もう一点、報告だ……リストにも載ってるステイブ・フォスターが、一昨日の襲撃を脱した魔法師を片っ端に殺してるらしい」

「奴のサーヴァントでなく、加工屋」本人が……? あれは商売人というか、技術屋だろ?」

直接会ったことはないが、あのアメリカ人はヴードウの呪いの一面だけを利用し、作成した呪具を売っていると聞き及んでいる。金の為に動く所謂魔法使いであり、本人が表立って動くこともないと思っていたが。

「殺した現場を見てきた。あいつの呪具で殺ってるのは、間違いないね……どんな心境の変化か知らないけど、もう結構な人数が殺されてるみたいだ。あんたにやサーヴァントがいるけど、私も嫌な予感がしてるからね……一応気を付けな」

「なら、尚の事さつさと離れるよ」

「……一丁前に、人の心配かあ？」

「お前……」

呆れる読水に、アダムはへらへらと笑う。

「まあ……依頼を全て終えたら、さつさと離れるさ。お前も逃げたくなったら、また一流の私に連絡しな、半人前」

「……依頼？」

じゃあな。と、読水が問いただすより前に、アダムは電話を切ってしまった。

読水は怪訝な顔でケータイを見つめた。相変わらず食えない奴だが、実力は本物だ。滅多なことは起きないだろう。

“加工屋”の行動は普段のそれと矛盾しているが、この熱狂の中で起きていることの全てが、言葉で説明できる訳じゃあない。それに、危険視すべき相手は他にいくらでもいる。雑魚にかまけている暇などはない。

そう結論付けると、読水はケータイをポケットに仕舞って上着を着た。

とにかく、今は少しでも情報がほしい。一昨日に起きた戦いの現場なら、自分の辿跡術で何かしら掴めるかもしれない。そしてそれが、相手のサーヴァントの真名、弱点に繋がるかもしれない。

だから休むな。後悔したくないなら、動け。

そう自分に言い聞かせながら、読水は動き出す。そんな彼の手は無自覚のうちに。首に下げたペンダントを握っていた。

報告の後に続く、この長い沈黙が嫌いだ。

バーサーカーのマスター——レオポルディーネ・ミローネは、場の雰囲気から逃れるように視線を彷徨させた。壁際に置かれた白磁の壺。誰が作ったか知らぬが、きつと……どうせ高いのだろう。

対面する鏡宮はそんな彼女をそのままに、報告の内容を黙考している。ソファアに深く腰掛け、指の腹を合わせて目を閉じる。その姿に、お前はシャイロック・ホームズか、とレオポルディーネは毒づく。

「……分かった。ご苦労だったね」

ようやく、そう口を開いた鏡宮。そして、こう続けた。

「当面、君はランサーを狙い続けて欲しい。どうやら、君も見たセイバーのマスター……聖堂教会の人間も、アレを狙っているみたいだからね」

「……………」

また、その破片とやらか。

レオポルディーネは、破片の正体を教えられている訳ではない。重要なものと鏡宮は言うが、万能の願望機を求めたこの聖杯戦争の中で、それがどれほどの価値があるというのだろうか。

それにもう一つ、疑問点があった。

「…………あの、他の者が次々とやられていると聞いていますが…………」

レオポルディーネが知っている限りでも、彼の部下は二十名はいた。その何人かは例の新選組に重傷を負わされたようだが、その手際、痕跡の消し方、被害を当事者のみに限定する徹底さは、一流のものだと聞いている。

対して、今起きている殺しは雑だった。現場に残る呪いと毒、そこに居合わせた者も皆殺しにするスタイルは、前の者とは対照的だ。だからこそ、放置できる相手じゃあない。

「…………ああ、そうだね。ライダーのマスターか、その仲間…………あるいはアレクシア・ブロッケン仲間だろう」

鏡宮の感情を伺うのは難しい。疲れたような表情を変えることなく、そう予想を口にする。レオポルディーネは続けた。

「ならばサーカーを使って、敵を撃退した方が…………」

「いや、そちらは良い」

彼はきっぱりと言いつつ切った。

「……………」

「君は、読水竜也とランサー…………二人を追うことだけに注力すれば良い」

その物言いに、反論は許されそうにないと悟ったレオポルディーネは、黙って頷くことしかできなかった。

レオポルディーネは縦に巻いた髪を左右に振りながら、玄関口へと小さな体を進ませている。

先ほどまで矯正していた猫背も鏡宮の目から逃れるなり元に戻し、睨むような眼差しと、への字の口を露わにしている。その姿は大きめのファーコートも相まって、不機嫌な猫のようだった。

「……バーサーカーっ！ 帰るわよ！」

外に出て、強めの日差しに顔を伏せながら叫ぶ。すると玄関前に座り込んでいたバーサーカーは、のそりと立ち上がった。

「……おや、お帰りか？ バーサーカー」

と、上から呼び掛けられた。見れば、バルコニーの手すりに腰を下ろしたアーチャーがこちらを見下ろしていた。

「嬉しいだろ？ 今日も命拾いできて……お前のマスターが従順なだけ、お前は生き延びられるって訳だ。最後の二騎になるまではな」

相変わらず、嫌味なサーヴァントだ。レオポルディーネは顔をしかめながらも、無視して帰ろうと背を向けた。しかし、足早に立ち去ろうとするレオポルディーネの頭に手を載せて、バーサーカーはそれを留めた。

「そらあ良い利害関係だ、特に最後の二騎になるまでってのが笑える……はっ、そんなに保たねえよボケ」

「真名が何ていうか、その手すりにメモっつけ。後で俺が行って、ちゃんと墓石に掘ってやるよ」

バーサーカー。と、レオポルディーネはバーサーカーを嗜める。彼は謝る素振りもなく、手をレオポルディーネの背に回して急かした。

レオポルディーネは背後から矢が飛んでくるのではないかと、時々背後を見ながら邸宅から離れる。それに飄々と付いていくバーサーカー。その姿にどんと苛立ちを募らせていくが、最初に口を開いたのは彼の方だった。

「……それでレオ、いつ裏切るんだ？」

「愛称で呼ばないで。それに呼ぶのならミローネの方が、マスターっ

「言いなさい」

「あつそ？ で、いつ裏切る？」

「裏切らない！」

レオポルディーネは立ち止まり、叫んだ。

「だいたい、何であの時セイバーに仕掛けたのよ!? ランサーだけやれば良いって言ったでしょ！ あいつらに敵だと思われるようになったらどうするの!？」

「あそこで出なきや、場を仕切られた……それに目的がこっちに向いてないうちに、セイバーの実力は見とかなきやならねえ」

彼はそう言つて、腕を組む。きつと、あの夜を思い出しているのだろう。恐ろしげな風貌に付けられた目が、爛々とギラつきだした。

「お前はやたら関係が悪くなるのを気にするが……互いに聖杯を手にできる立場上、誰だつて敵だよ。セイバーも、アーチャーもな」

「だから、同盟関係だつて言ってるでしょ。まだ七騎も残ってるんだし、最後の二騎になるまでは……」

「裏切りつてのは、不意を付けるから有利な立場になれるんだ」

レオポルディーネの言葉を、バーサーカーはそう一蹴した。

「あのいけ好かない野郎にも言ったが、最後の二騎になった時点で敵対関係になったことは明白だ……関係は、それより先に破綻する。破綻させなきやあならねえ」

「……………」

笑みを浮かべて、裏切ることの利点を語るバーサーカーの横顔を、レオポルディーネはジッと観察する。

バーサーカーは、まるで理性的な判断、理論があつて行動をしているかのように振る舞っている。しかし、レオポルディーネは知っている。彼はランサーやライダーが立ち去った後も、まだ撤退を拒み戦おうとしていたのを。

バーサーカー——真名、エギル・スカラグリームスソン。彼の生前は、そんな蛮行に彩られている。詩の才能や機知の傍ら、一時の感情や狂気によってノルウェーの血斧王エイリークとその妻を中心にくの敵を作っている。彼自身がどう言い繕うが、この不安定さこそが

彼がバーサーカーたる所以なのだ。

それにバーサーカーは、所詮は仮の生を得ているに過ぎない。勝っても負けても、聖杯戦争が終われば座へと還る気楽な身だ。

自分は違う。勝っても負けても、そこで終わりじゃあない。衰退した一族を再興するという、使命がある。それには、鏡宮の下に付くのが一番安全で確実な手なのだ。

「……とにかく、今は命令通りに動く。分かった!？」

レオポルディーネはそう言いながら、そつと令呪を確認した。

聖杯によって与えられた令呪は三画、それはバーサーカーを制御できる回数と言って良い。

あのセイバーとの戦いで実証されたように、彼の狂化スキルは彼自身のベルセルクとしての血筋によって安定していない。しかも、Cランク以上になれば令呪なしには下がることがないときている。

もしCランクを超えた時に令呪が残っていなければ、狂化スキルの増加によって際限なく増えていく魔力消費を止める術はない。そうなれば、マスターである自分は間違いないで死ぬ。

誰がこんな奴と心中するものか。そんなに裏切って欲しければ、最後の令呪一画でお前を裏切ってやる。

そう考えるレオポルディーネを、数十センチ上からバーサーカーは見下ろしていた。その視線に気づいたレオポルディーネは慌てて令呪の宿った右手をコートのポケットに押し込む。

そこで、あつと声を上げた。

「しまった。庭にミントを撒いてやるのを忘れた」

ミントは生命力が強く、抜いた草を地面の上に撒くだけで大繁殖する。レオポルディーネは頭ごなしに命令を下す鏡宮への意趣返しとして、庭園の管理人がいなくなっていることを良いことに、密かに庭園にミントを撒いているのだ。

「……その反骨精神が、もう少し陰湿な方向から抜け出りゃあ良いんだがな」

ミントを指でクルクルと転がすレオポルディーネ。そんな様子を見ながら、どこか期待するようにバーサーカーは呟いた。

襲われてから、丸一日になろうとしている。そろそろケータイのバッテリーも尽きようとしている。そうなれば、この郊外に建てられた廃工場は完全な闇に包まれる。

仲間への連絡は繋がらない。鏡宮は部下を送ると言っていたが、それも二十時間も前だ。何度も電話を掛けたが、もう繋がることはない。

一ツ目は、元は包装工場だったこの暗がり、自分が捨て石にされたことを悟った。

「……サーヴァントを寄越せば、何とでもなるだろ……ちくしょうッ！」

一ツ目は苛立ちを抑えきれず、道中コンビニで買っておいた最後のおにぎりを投げた。廊下に面した窓、そこに打ちつけられたベニヤ板におにぎりは当たり、米粒は幾つもの塊を維持したまま飛散する。その姿に自分の行く末を予感し、先ほど湧き上がった激情が一気に冷めていく。

「……クソッ」

神秘の秘匿を考慮し人気のない場所へと逃げていったが、こんなことなら繁華街にでも逃げれば良かった。

いや……まだ間に合う。どうせ、このまま暗がりの待つくらいなら、行動しろ。

そう決意し、一ツ目は椅子にしていたパレットから身を起こし、出口へと駆け出す。数歩は四足で、それからは壁伝いに。それこそ息苦しい水中から水面に出るかのように、外の微かな明かり目掛けて藻掻き進む。

しかし、出入り口への廊下に差し掛かった時だった。急に背後に光が灯った。

驚いて見れば、先ほどまでいた作業場の照明が付いている。それから奥の部屋が、続いて廊下へと、次々に照明が息を吹き返していく。

そして、最後に付いた出入り口の照明の下に、あの男がいた。思考は停止した。しかし、一ツ目の体は生を求めた。窓に打ちつけ

られたベニヤ板に手を添え、男との視線を外さずに作業場へと逃げていく。

危険なものから距離を置くという、極めて原始的な本能行動。対して出入り口に立つ男もまた、ゆつくりとした足取りで一ツ目との距離を詰めていく。

壁から離れ、作業部屋の奥へと逃げ込んでいく。足元に転がったダンボールやパレットに足を取られそうになりながらも、それでも背中から倒れることのない自分に一ツ目は疑問さえ覚えた。

作業場へ入ってくる男。彼から臭い立つ、むせ返るような死臭。血に濡れた衣服。右手には麻布を被せた凶器が握られており、形状からして鉋か、ノコギリに見える。しかしその禍々しさからして、ただの刃物とも思えない。

一ツ目は浅い呼吸を繰り返しながら、ちらりと非常口を見る。ここを通れば裏庭の方へ逃げられるが、ドアの手前に積まれたダンボールの山をどけるのに、何秒必要だろうか。少なくとも、目の前の男は待つてくれないだろう。

つまり、追い込まれた形になっているのか。一ツ目は深呼吸を繰り返しながら、僅かに両腕を前方へと持ち上げ、身構える。相手は恐らく、死霊術師が作った死肉の人形だろう……サーヴァントじゃないなら、まだ抵抗の余地はある。

身構えた一ツ目に男は一瞬動きを止めたが、すぐにまた距離を詰めていく。当然だ、使い捨ての人形に恐怖などない。

「……………ッ」

こちらへとゆつくりと迫るその焦れつたさに、一ツ目は堪え切れなくなつた。こちらから行こうと、両手を前に突き出した。

その時だった。裏庭に面した窓が大きな音を立てて割れ、破片が作業部屋の方へと飛び散つた。

そして、分厚い磨りガラスの窓を叩き割つた鈍器だろう、外から一ツ目達の間丸いものが投げ込まれた。

それは、黒いフルフェイスヘルメットだった。

「あーあー……間一髪じゃあないか。歴史ある一ツ目の当主が情けな

い」

静まり返った中、そんな気の抜けた言葉を発した、そのライダースーツの女——アダムは、手にしたポンプアクション式のショットガンを窓枠に突っ込んで残ったガラスを割っていく。

「で、死体野郎……ステイプだったかね？ その腐った鼓膜で、良く聞け……よつと」

アダムはそう言いながら、身を縮めて工場内へと踊り込んだ。それから上体を起こし、口から犬歯を覗かせながらショットガンの銃身に弾を送り込んだ。

「てめえはもうコンティニューできないよう、完膚なきまでにブチ壊してやる」

第十話 『セフィロトの樹』

アダム。

本名、国籍、一切が不明。確かなのは、彼女が優れたゴーレム使いであることのみ。

しかし、それでも噂程度の逸話は囁かれる。

かつて、彼女は欧州に住む魔術師の家系だったという。どの魔術協会にも所属せず、より人間に近づこうとゴーレムを作り続けたカバラの一族。彼女はそこで生まれた、天才児であったと。

彼女は一族の期待を背負って魔術刻印を継ぎ、一族の研究を何十年、何百年分も進展させた。彼女の作るゴーレムは精工で、外見は人と全く区別がつかない領域に達していたという。

そして、彼女の研究はある結論に至った。それは、自分達の研究では根源に辿り着けないという、絶望的なものだった。

一族の限界を悟った彼女は、次代に研究を継がせることを拒絶した。以降は衰退するだけ、自分が一族の絶頂であるなら、今現在が一族の終着点とすべきだ。見苦しく足掻いて、何になるだろうか。

彼女は自分の才能と一族の知識を元に、あるものを作成した。

それは、彼女自身と一族の魔術刻印を溶け合わせて結晶化した魔術礼装。彼女は今もその魔術礼装から、ゴーレムを生み続けている。アダムと名乗る武器商人のゴーレムが、それだというのだ。

その魔術礼装は噂で、セフィロトの樹、と呼ばれている。

薄暗がりの中、アダムは悠々と『加工屋』ステイプと一ツ目の間に割って入って行った。

背後で震えている一ツ目の小倅と、油断なくこちらを見下ろすステイプ。ステイプは無言で右手の武器にかけていた布を剥ぎ取る。

それは人間大の背骨だった。椎骨にそれぞれある突起部分は研が

れているのか、異様に鋭い。おそらく、この研がれた部分を使いノコギリのように引き裂こうという趣旨の刃物だろう。

だが、肝心要なのは切れ味でなく、その効果だ。グードウーの死霊術師であるこの男が、こんな奇抜な武器に何も仕込んでないはずもない。それに……どうしてあんな体になっているかは知らないが、あの加工された肉体にも何かしら仕込みがあるに違いない。

アダムがそんなことを考えていると、ステイブは先ほど剥ぎ取った布を、不意に顔面に投げつけてきた。

血で濡れた麻布で、顔を覆われるアダム。咄嗟のことに後方にアダムはたじろぐも、隙を逃さずにステイブは飛びかかる……飛びかかっているのだろう。アダムは迫るステイブを想像し、笑った。カビ臭いテクニックだ。

アダムは銃口を地面に下げたまま、ショットガンの引き金を引いた。瞬間、着弾した地面から凄まじい閃光と音が部屋に満たされた。

閃光と破裂音は一瞬で終わる。しかし射撃の衝撃で払い落とされた麻布をアダムが踏みつける頃にも、未だステイブは体を丸めていた。

フラッシュバン弾。閃光と爆音で対象を行動不能にする兵器だ。例え死体の体であろうと、目と耳で外界を認識しているのなら、効果は充分にあるらしい。

「ステイブう……今時の目潰しは、こうやるんだよ」

まあ、聞こえないか。この部屋内で唯一自由な身となったアダムはそう言うと、容赦なくショットガンをステイブに向け、腰だめに発射した。

途端、アダムの方へ向けられていたステイブの背中肉が弾け飛び、彼は突き飛ばされたように前に突っ伏した。

アダムが手にしている銃器は、厳密にはショットガンではない。K S—23Mという、暴動鎮圧用の多目的カービン銃だ。ロシアで作られたこの特異な銃からは散弾だけでなく、ゴム弾、催涙弾、先ほど使用したフラッシュバン弾など、多くの特殊弾を発射することができる。

そして対空砲の砲身を流用して作られた銃身の口径は、対人用が一般的に12ゲージ(18.5ミリ)とされるのに対し、こちらは6ゲージ(23ミリ)である。

常軌を逸した大口徑から発射された散弾は、魔術によって強化された人間の肉体であつても容易く破壊した。

「グツ……ガアアツ！」

「逃がすかオラアツ！」

血肉を撒き散らしながら立ち上がり、駆け出すステイブ。アダムは叫んで銃を肩越しに構え、火を吹かせた。

散弾はステイブの両足に命中し、脚は銃撃に碎ける。ステイブは叫び声を上げながら、ひっくり返るように倒れてしまった。

アダムはその様子を観察しながら、ジャケツトから予備弾を取り出して銃に装填していく。ここで畳み掛ければ最高なのだが、そう上手くいかない。この銃は思い上がった魔術師をぶつ倒すのに充分な性能があるが、弾が三発しか弾倉に入らないのが難点なのだ。

アダムは弾を込め終わると、ステイブの所まで歩きながらポンプアクションで弾を銃身に送り込む。そしてステイブの頭を両足で跨ぎ。

「なあ。頭がなくなれば、流石に死んでくれるよな？」

と、ステイブの顔面に銃口を突きつけた。

それをステイブは、黙って見つめていたが。

「……血を流せ」

そう呟くと、彼の左腕がずるりと音を立てて伸びた。見れば皮膚は所々に破れ、そこから肉と骨だけの腕が幾つも生えている。おそらく折り畳み傘のように器用に小さくまとめていたのであろう。血に塗れたそれらの腕は、先ほどまでにステイブの左腕に収納されていたものだ。

何かヤバい。そう判断したアダムは、引き金に掛けられた人差し指に力を込める。しかし、そうしようとした時になって初めてアダムは、自分が膝を折ってステイブの胸に腰を下ろしていることに気がついた。

全身に力が入らない。口や目から体液が流れ出し、思考能力も大きく損なわれている。これが左腕から湯水のように流れる黒い血による呪いであることも、今のアダムには分からなくなってきた。だが、やるべきことは分かっている。

まず、この体に取り付けられた思考機能を放棄、次いで身体に張り巡らされた神経を通じて、たった二つの行動だけできるよう、指示を順序立てて残した。

そして、アダムは自死した。

あの閃光と音が、ようやく頭の内側から消えてきた。

突然現れたライダースーツの女と、死体男の戦い。一ツ目は悪態を付きながら、何とかといった様子でそれを見守っていた。

しかし、それも最終段階のようだ。男の左腕から溢れ出た呪いによって、女が膝を下り今にも死のうとしている。助けるべきだろうが、近づけば自分もあの呪いの餌食になるのは目に見えている。

この隙に逃げるべきだろうか。一ツ目が葛藤していると、女の方が動いた。

彼女は痙攣を起こした腕を動かし、ジャケットから円筒形の物を取り出す。そして、それを両手で包み込み胸に抱いた。

「……カ、ソウ」

そして彼女は、掠れた声で呟いた。

「ノ……ジ、カ」

何を言おうとしたかは定かではないが、彼女は言葉は途切れ、どつと男の上で倒れた。

その一瞬の後、女と男が閃光に包まれた。

その光に、一ツ目は反射的に顔を背ける。花火のような火花を飛ばしながら、二人が燃えている。

テルミットだ。錬金術、冶金技術を学ぶ一ツ目は、この光を知っていた。

アルミニウムと金属酸化物によって引き起こされる、酸化還元反応。この科学反応には強烈な光と熱が発生する。鉄さえ熔解できる

熱は、付着すれば骨まで容易く焼き焦がしていく。

男は怪物じみた叫び声を上げるが、脱出することができないようだ。如何にあの男が化物だからとて、その部品は人間由来だ。耐えられるはずもない。

「……………」

一ツ目は、ただ黙ってその光景を見ていた。何者か分からない女に助けられ、そして目の前で死なせた事実から、その場から動けずにいるのだ。

その手を、突然掴む者が現れた。

「おい小僧、さっさと逃げるぞ」

驚いて見れば、スポーツバックを肩に背負ったヨーロッパ系の女が、一ツ目をこの場から引き離そうと手を引っ張っている。

「ああ、さっきのは良いから」

「ちよつと待て、一体あんた……………」

「良いから付いてこいって」

有無を言わず一ツ目は部屋の外に連れていかれる。先ほどの閃光の影響か、電灯は点いているのに廊下は真っ暗に見えた。その暗さに難儀しながら、一ツ目は叫ぶ。

「一体何なんだ!?! さっきの女の仲間か!?!」

「本人だよ」

「はあっ!?!」

「まあ付いてこいって」

女はそう言つて一ツ目を廃工場から連れ出し、眠った町へと走り続ける。

しばらくはお互い無言で走り続けたが、女は線路沿いの道に辿り着くと立ち止まり、周囲を油断なく見渡した。

「奴は……………来ないな。で、何から聞きたい?」

「……………あんた、ひよつとしてアダムか?」

お。と、女——アダムは嬉しそうに頬を緩ませる。

「名前くらいは聞いていたかな? お前の親父さんから助けてやってほしいと頼まれた。ここから逃げるぞ」

冗談じゃない。一ツ目はアダムの手を振り払った。父親が作った魔術礼装を売り捌いた女だ、知らないはずがない。

「お前のお陰で、俺の親父は家から縁を切られたんだぞ……ッ！ 誰がお前なんかと……」

「そのお陰で、一族を再興できるだけの資金を得たんだろ」

その言葉に、一ツ目は声を詰まらせる。

「なのに、次の代で聖杯戦争に関わるとはねえ……」

アダムは一ツ目を見る、その顔は呆れ果てたと言わんばかりだ。

一ツ目の一族は錬金術を魔術系統としているが、お世辞にも名家とは言えない。それでいて錬金術の探求は多くの貴金属や薬品を扱う。一言で言えば、金食い虫だ。

父親はその為、自分の研究成果をアダムに売って資金を調達した。魔術師としては、最もやってはならないことだ。老人達が決めた絶縁の処遇は一ツ目自身も妥当とは思いますが、得られたその金と当主の座を継いだ身としては思うところもある。

「……俺は、俺の親父が作った資金で、一番手っ取り早い道を選んだだけだ」

「……そいつが邪道だって言ってるのさ、小僧」

「なに？」

「おつとと、来たぞ」

アダムはそう言うと、向こうからやってくる貨物列車を見やった。それから立てた人差し指に息を吹きかけ、黒色の燐光を指先に灯す。

「BinahはSherriruthへ、お前は何も解さない」

彼女はそう呟きながら、指先で複雑な図を空中で描いた。そして貨物列車が脇を通り過ぎると、燐光を握り締める。

「……よし、あれに乗るぞ」

「人払いか」

「それじゃ誰が列車を運転するのさ？ ちよいと、おバカさんになつてもらっただけだよ」

アダムはそう笑いながら、スポーツバックの重さに苦慮しながら線路と一般道を区切っていた柵を乗り越えた。

貨物列車は、人を運ぶ為の電車よりずっと遅い。乗り込むのは造作もなかった。

コンテナの上に腰を落ち着かせ、一ツ目は長い逃亡で溜まった疲労を吐き出すように体を落ち着かせた。寒風が吹く中、揺れる冷たい鉄板の上に腰を下ろす。最低の環境だが、命を脅かされていた先ほどに比べたらずっとマシだ。

一息つく一ツ目、その様子に、アダムはナハハと笑う。

「お疲れだな」

「丸一日、あんなのから逃げ回ってたんだ。当然だろ……で、これからどうすんだ」

「ここから離れて安全を確保したら、鏡宮に全滅したって連絡しろ」

それから。と、アダムは言葉が続けようとしたが、ハツと顔を強張らせ、列車の先頭方向を睨む。まだ何かあるのかと、反射的に一ツ目も同じ方向を見た。

暗がりの先頭車両。リズムカルに差し込まれる照明に照らされて見えるのは、車両の上に立つ薄着の女だ。まだ一月だと言うのにダメージジーンズを履いた左足は完全に露出しており、照明の下で光を反射させている。その距離は、五十メートルほどか。

女は腰に手を当てながら、ふんぞり返るようにこちらを見ている。一体何をしてくるのか、一ツ目も目を離せずに彼女を見つめている。アダムはそんな中で、拳銃を発砲した。

腰に挿していた小型の拳銃を抜くと、躊躇なく女に向かって撃ち始めるアダム。女は慌てて背後へ飛び込み、車両にある僅かな傾斜の後ろへと隠れてしまった。

「死霊術の類じゃあ……ん、なさそうだ」

その様子に、銃撃に度肝を抜かれた一ツ目は恨めしそうにアダムを見る。

「……また敵か」

「バックアップってところだろうね……ちつ、追ってきた」

と、アダムは列車後方に銃口を向ける。見ると、薄暗くて良くは分

からないが、先ほどの死体男と思わしき者が列車の横合いからコンテナの上へよじ登ろうとしているのが見えた。

アダムは男に向かって、片手撃ちで数発拳銃弾を撃ち込む。一発は頭に当たり、突き飛ばされたように体を仰け反らせたのを確認した。しかし、それでも男は構わずコンテナを登ろうとしている。

「……頑丈だな。小僧、時間稼げ。速攻であつちを倒してくる」

アダムはそう言いながら担いでいたスポーツバックを足元に捨て、拳銃の弾倉を交換し始める。

「お、おい……ッ！」

「あと、こつちは見るな。太ももの入れ墨……あれ、魅了魔術が掛けられているからね！」

アダムはそう叫び、先頭車両へと駆け出した。

マジか。と、一ツ目は彼女の方を見て確認しようとしたが、自分がまだ魅了魔術の影響を軽く受けていると悟り、慌てて後方の男へと意識を集中させた。

アダムは不安定に揺れる車両の上を、全速力で駆け抜けた。

先頭車両にいる女は斜面から這い出て、こちらを睨みながら立ち上がる。向こうも誰を相手にすべきか、分かったようだ。

女はポケットから何かを取り出し、口に含んだ。そしてそれを二本の指で取り出すと、こちらに放り投げる。

アダムは立ち止まり、自分の視力を魔術で強化させながら投げられた物を拳銃で狙う。しかし、投擲物——唾液の付いた飴玉は、途端に泡立って煙を上げる。撃ち落とす間もなかった。

「……ッ！」

考えられるのは用途は煙幕か、毒煙だ。面倒くせえ。と、アダムは銃を下ろし駆け出す。車両の上では、迫りながら広がる煙から逃げる手もない。ならば、攻めた方が良い。

アダムは顔の前で両腕をクロスさせながら、青色の煙に頭から突っ込んだ。

アダムに対して、毒はさほど驚異ではない。神秘を持った、魔術で

作られた毒なら話は別だ。毒気に足を纏れさせ、アダムはコンテナの上に強かに膝を打ちつけてしまう。

しかし、煙は列車の速度によって後方へと飛び散っていく。煙が晴れた瞬間、アダムは再度駆け出しながら銃口を女へと向け、引き金を引いた。

アダムの拳銃の構え方は、模範的と言える代物ではない。しかし蛇のように腕全体をくねらせ、銃口は執拗に標的へと向けられる。

乱れ撃ってくる銃弾に身を低くしながら、次の飴玉を女は口に含む。この間に少しでも距離を縮めようと、アダムは散発的に銃を撃ちながら走る。

「この……うつぜえんだよッ！」

女が叫びながら、飴玉を投げてきた。しかし距離を詰めた分、気化するまでに時間がかかる。

「よっし、インターセプト……ッ！」

アダムは宙へと跳ねた。そして足の甲で泡立つ飴玉を捉え、上空へとすくい上げた。

上空で無為に煙となっていく武器に、女は気を取られた。その隙を突き、アダムはどんどんと互いの間を詰めていった。

「うわっ、ちよ……っ！」

ほんの数メートルまでに距離を縮めたアダムは、慌てる女に銃を撃つ。女は魔術で何とかその一撃を防ぐも、次いで飛びかかったアダムによって、地面に抑え込まれてしまった。

後頭部を鉄板に打ちつけ、女は怯む。このまま頭にも銃弾を叩き込めれば最高だったのに、とアダムは考える。しかし、愛用しているマカロフPMは八発しか弾が入らない。先ほどの一発で、もう弾切れだ。

故にここからは古式、伝統ある肉弾戦だ。

「汚い言葉を吐くな、お嬢さん。お仕置きだ」

アダムは馬乗りになって、女の顔面に拳銃を横にして押さえつける。そして残る手で、彼女の頬を思いつきり殴りつけた。

アダム達より後方の車両にて、一ツ目はよじ登ってきた死体男——アダムはステイブと言っていたその男と対面していた。

例の禍々しい武器を持った、死体人形。テルミットで焼かれたその胴体と左腕は、ほとんど炭化している。幸運なことに、あの左腕の呪物も使い物にならなそうさ。

対して散弾で抉られたはずの脚は、特別動きが鈍っているようには見えない。治癒魔術、あるいは再生の類か。どちらにせよ、一ツ目が持つ手札ではこの男を倒すのは無理だと分かる。

だが足止めくらいなら、やりようはある。一ツ目は両腕を敵前方へと持ち上げた。あの骨製の剣だけならば、恐らく、何とか……。

身構えた一ツ目に、ステイブは何一つ考慮なく手にした武器を天高く掲げ、一気に振り落とす。一ツ目は覚悟を決め、それを受け止めるべく右腕を振り上げた。

骨で作られた剣が、一ツ目の腕に直撃する。瞬間、硬い音と共にステイブの剣が弾かれた。

「……………」

驚いたようにこちらを見下ろすステイブ。とりあえず危惧していた結果にはならなかったと息を吐いた一ツ目は、こう言った。

「あんた、俺を舐めすぎだろ」

一ツ目は腕を勢い良く右に振りつけ、ステイブの剣を横に払う。そして体勢を崩したステイブに、アッパーのように右腕を振りつけた。

右拳、否。一ツ目の手から赤黒い棒が高速で生成され、ステイブの顎を打ちつける。

血金。一ツ目が作った、とっておきの魔術礼装。使い手の皮膚表面に貼りつき、複雑な操作や自動化はできないものの、体から分離しない限りは自在に移動、成形できる硬軟自在の金属だ。

一ツ目は自分用に調節した血金を八キロ分、この日坂市にいる間は上半身の表面に纏わりつかせている。ステイブの武器がどれほど強力な呪いを持つ剣であろうと、骨の剣では鋼と同程度の強度を持つ血金を破壊することはできない。

顎を叩かれ、よろめくステイブ。その姿を見送りながら、一ツ目は体に纏う血金全てを右手の棒へと集めた。パーカーの袖からほとんどと右手の金棒に集まり、全て集まった時の長さはおよそ一二〇センチにもなった。これなら……。

「せい……のおー!」

一ツ目は血金で成形した金棒を横に振り被り、横薙ぎに大きく振るった。

軌道はステイブの右肘へ、狙うは彼の武器破壊。読み通りステイブは咄嗟に剣で金棒を受け止め、剣は真つ二つに押し折れた。

このまま畳み掛ける。と、血が興奮で熱くなる。一ツ目は金棒を手元に引き寄せ、槍を扱うように先端をステイブの顔面に突き出した。

直撃。顎を打たれた時のように、ふらついている。しかし一ツ目の快進撃は、続けて放った二度目の突きを掴まれたところで止まった。

「なッ……クソッ」

単純な膂力では、向こうの方が圧倒的に上だ。掴まれて反射的に身を強張らせた体を、ズルズルと引き寄せていくステイブに恐怖し、一ツ目はステイブが掴んでいる付近の血金の硬度を下げた。

ドロドロの粘土のようになった血金によって、掴まれていた金棒は簡単に抜き取れた。しかし見れば、金棒は一メートルにも満たない長さになってしまった。

ステイブの足元で広がっている血金は、遠隔での操作は叶わない。直接接触れば回収はできるが、彼がそんな時間を許してくれるはずもない。

「……………」

ステイブは無言で、一歩ずつ前に出てくる。それに合わせるように一ツ目も、一歩、また一歩と下がってしまう。

しかし、思わぬ誤算があった。

突然、引いた脚が何かに引っかかった。それが何か知るよりも早く、体は呆気なく仰向けに倒れ込んでしまう。

手足をバタつかせて、一ツ目は上体を起こす。そこでようやく、自

分がアダムが置いていったスポーツバックに躓いて転んだのだと気づいた。

そして当然、この機が見逃されるはずがない。

大きく前に踏み込み、握り拳を振りかぶるステイプ。一ツ目は金棒で防ごうとするも、半端に長く、重い金属の塊を思うように動かせずにいる。

そして一ツ目の顔面に向かって飛んでくる、ステイプの拳。

思わず息を呑んだ一ツ目だが、その拳は一ツ目の顔に到達するよりも早くに、ビタリと止まった。

「……………？」

一ツ目は金棒から手離し、バタバタと後退りながら状況を確認する。良く見ると、二人の間にあつたスポーツバックから腕が飛び出し、ステイプの右手首を正確に掴み取っていた。

スポーツバックはビリビリと音を立てながら引き裂かれる。中から出てきたのは、褐色の肌をした、スポーツインナー姿の少女だった。

「……………ッ」

「また会えたね」

少女はギリギリとステイプの右腕を締め上げながら、そう嘯いた。

間違いない、アダムだ。

少女——アダムはパツとバネのように体を跳ね上げさせると、両足でステイプの顔面を蹴りつけた。

強烈なドロップキックを顔面に食らったステイプ。彼は痛々しい音と共に後方に跳ね跳び、そのまま貨物列車の横合いから落下してしまった。

その様を確認し終えたアダムは、腰に手をやって一息つき、こちらへと振り返った。

「頑張ったじゃあないか、小僧」

「……………前の体は？」

「あの辺の田んぼで、あの小娘と泥遊びしてるよ」
「やたら粘られてね。と、アダムは溜息をついた。」

「近場に置いておいた予備は、もうこれだけだ。奴らの大将がこっちに来る前に、早々に隠れないとキツイぞ」

そこだ。一ツ目は乱れた息を深呼吸で整えながら、こう言った。
「奴ら、一体どこの勢力だよ。マスターじゃあないだろ」

「あの加工屋だけじゃあ、私も何とも言えなかったけどね。さっきの小娘と戦って、やっと分かった」

敵は……。と、アダムが言いかけたところで、急に足元の方で金属を擦り合わせた音が響き、体が列車前方へと倒れそうになる。

「……つとと、何だ？」

「……急停止、しているな」
確かに、周囲を見回すと貨物列車が速度をドンドンと落としていつているのが分かる。

「……まだ、何か来るのかよ」
「……」

アダムは、何の軽口も飛ばしてこなかった。黙り込んで、前方を睨んでいる。

「……なあ、向こうにいるのか？」
「……小僧、ここにいろ」

と、アダムは振り返って一ツ目に言った。その顔は、有無を言わさぬほどに真面目な顔つきだった。

「それで、何も見るな、聞くな」
「お、おい……何が」

「良いから、何があってもだ……そうすれば、守ってやる」
アダムはそう告げると、完全に停止した列車から飛び降りてしまった。

アダムは停車している列車に沿って、ゆつくりと歩を進める。

その前で悠然と待っているのは、炎のように揺らめいた赤髪を持つ、長身の女——アレクシア・ブロッケンだ。

アダムは足を止めないよう気をつけながら、視線を巡らせる。魔術での戦いは、得られた情報から相手ができることを予測することから

始まる。より多くの情報と経験から裏打ちされた想像力が、勝率を高めるのだ。

サーヴァントの気配はない。魔女の右腰からは炎を纏った大きな右腕、栄光の右手が伸びている。そして周囲の電線には、使い魔のクラスが何匹もこちらを見下ろしている。それに時間が経てば、先ほどの二人も追いついてくるだろう。

状況は向こうの方が圧倒的に有利。一ツ目が生き延びる手があるとすれば、自分が相打つてでもアレクシアを即座に無力化することだけだ。

「……状況は、理解してくれたかしら？」

そう声をかけるアレクシア。アダムは苦笑し、アレクシアとの距離を十メートルほど詰めた所で足を止めた。

「……まさか、あんたが直接出向いてくるとは思わなかったよ」

「あの二人じゃ、お前の相手は荷が重いのと思ってね」

アレクシアはそう言って腕を組んだ。

「悪いけど……ここでお前は殺す。お前は野放しにしておくには、少しばかり有能過ぎる」

その言葉に、アダムはクツクツと笑ってみせた。

「……そうかい」

その言葉を機にアダムはグツと体勢を下げ、アレクシアに向かって飛び掛かった。

話に付き合っている間はない。アダムは弾丸のような速度でアレクシアへと向かい、対するアレクシアは片手を上げ、頭上の使い魔達に合図した。

途端、クラス達はアダムへと紫色の光線を放つ。しかし信じられない速度で突貫するアダムはそれらを全て後方へと置いていつてしまふ。現在アダムが使っているゴーレムは、前の二体とはスペックが違うのだ。近接戦闘用に特化したこのゴーレムは、十メートルの距離なら瞬きする間に肉薄できる。

前へと突き進みながら、アレクシアへと右の拳を突き出していく。拳の軌道上に栄光の右手が入り込む。

ここまで、予想通りだった。

「……………ッ！」

アダムは身を捻りながら、踏み込んだ足で跳ねた。スケートのアクセルジャンプのように時計回りにスピンをしながら、フェイントとして出した右拳を横に流し、左手で栄光の右手を払う。

アダムの突進の勢いは、ジャンプしたところで止まらない。障壁となっていた栄光の右手を払い除けたアダムは体当たりをするように、右の肘鉄をアレクシアの額に叩き込んだ。

アレクシアの額から、パツと血が舞う。そのまま魔女は地面を転がり、大の字になって倒れた。

アダムは、息を整えながらアレクシアを睨む。

ここまでは、予想通りだった。あの使い魔が遠隔での攻撃に特化していることも、アレクシアの額を打つことができることも、彼女が強化魔術で全身を守っていたことも。

そして攻撃する瞬間に、アレクシアもカウンターを決めてくることも。

「……………貫手、ね」

アダムは腹部に開いた穴を触りながら、ポツリと呟く。

「ブロッケン of 魔女としては、少々お優しいんじゃないかな？」

「……………ぐっ、フフ……………そうでもないわ」

アレクシアは流れ出る額の血を手で拭いながら、身を起こした。

「アダム、お前は見る目のない魔術師連中からゴーレム使いと言われるているみたいだが……………実際のところ、お前の本質はカバラだ」

「あ？」

「セフィロトの樹。不死身じみたお前の、本体の話よ」

アダムは最初こそ怪訝な顔をするが、その言葉に目を見開き、先ほどの攻防を理解し始める。

「カバラでは、全ての魂はセフィロトの樹から流出し、死後はそこに還るといふ。ここに居るお前は、遠隔操作されたゴーレムじゃあない。魔術礼装に保存されたアダムという名の精神を、泥人形のゴーレムに送り込まれた……………限りなく人間に近い化物だ」

「……………」

「大したシステムね。アダムと名乗る前からどれほど変質したかは知らないけど、自分用に調節したゴーレムに精神を移動させ、体が壊れれば自動で保管された魔術礼装に転送されるんだから」

だが、それも終わりだ。と、アレクシアは唇の端を釣り上げた。

「その精神に、ちよつとした爆弾を残した。もしそのゴーレムが壊れ、精神がセフィロトの樹に戻れば……………」

そうなれば……………。その先の言葉を濁し、サディステイックな笑みを浮かべるアレクシア。アダムはそれを睨みつけながら、自身の置かれた状況を何度も確認した。

ここで死ねば、アダムの精神は別所に隠した魔術礼装『セフィロトの樹』に戻ってしまう。そうなれば、彼女の言う所の爆弾が、魔術礼装を破壊する。これは実質、アダムという存在の死を意味する。他に用意したゴーレムが何体であろうと、それを操る精神と転送装置が駄目になれば、何の意味もないのだ。

そうか。アダムは目を閉じ、理解した。

ようやく、終わりが見えたのか。

「……………降伏しなさい」

アレクシアは、俯くアダムに言った。

「お前は魔術使いとして、私達よりずっと先を行っている……………お前が全てを投げ売って作った魔術礼装は、無駄に代を繋ぐそこいらの魔術師より余程価値がある」

「……………何が言いたい?」

「こんな所で死ぬ必要はない。あんな雑魚一匹に命を賭け死ぬことに、どれほどの価値があるのかしら?」

「……………価値、か」

言いたいことは理解できる。しかし、この魔女は分かっている。いや、分からないのだ。

アダムは……………いや、アダムになる前の、かつての自分は、確かに根源を目指す魔術師だった。それが夢破れ、こんな姿に成り果てた。

だが夢を見ていた事実と意味を、否定する気はない。

夢を追ったことのある者は、同じ夢を見る者をコケにしたりはしない。先達者だからこそ、彼の未熟さ、若さというものの価値が理解できる。

アダムは目を開け、魔術使い、アレクシアを見据えた。

「価値はある。枯れ木のようなこの命を賭けて、アレクシア・ブロッケン……お前という芽が摘めるならな」

その言葉に、アレクシアの笑みは消えた。それからゆっくりと、失望したように冷めた顔に変わっていく。

「そうか……お前も所詮、魔術師という訳ね」

彼女はそう呟くと、パチリと指を鳴らした。すると、頭上を照らしていた電灯が、魔女の頭上にあつたものを起点として次々に消えていく。

さあ、最期の時だ。アダムは吠え、前に進もうと重心を倒していく。しかしそこで、アダムの最期の抵抗は終わってしまった。

ズブリと、背後からきた衝撃。途端に視界は揺れ、暗く濁っていく。力なく下へ落ちる視界に、ゴーレムの動力源となっていた宝石が転がり落ちるのが見えた。

アレクシアの攻撃、ではない。彼女は腕を組み、つまらなそうに見下ろしているだけだ。なら……。

「てめえ、サーヴァントか……」

「……ねえ、アダム」

アレクシアは溜息混じりに、こう言った。

「これ以上、私がお前の勝負に付き合う必要があるかしら？」

「……はっ、最低だよ、あんた……」

そう吐き捨て、アダムは自分の胸を貫通している、サーヴァントの得物に触れた。

そして、気づいた。なるほど、これならアレクシアがサーヴァントを見せないように努めるのも理解できる。

「アダムッー！」

背後から、声がする。あの小僧、一ツ目だ。マズい……。

「来るな小僧お！」

アダムは死力を尽くし叫んだ。一ツ目は今、アレクシアのサーヴァントの背を見ているのだろうか。もしアダムの正面に突き立つコレを見たら、アレクシアは確実に一ツ目を殺すだろう。

「絶対に、来るんじゃないぞ……ッ！」

そう叫ぶと、アダムはアレクシアを睨んだ。

「あの小僧は見逃せ……何なら、残ったゴーレムをくれてやっても良い……」

ほう。と、アレクシアの顔がほころんだ。

「で、そのゴーレムはどこにあるのかしら？」

「私が死んだら、この体を調べろ。そうすれば、すぐに分かる」

「……良いだろう、考えとくわ」

アレクシアは頷くと、自分の首を指で撫でた。

「殺せ、アサシン」

次の瞬間、アダムの意識は暗がり落ちていった。

大した恐怖はないが、心残りは幾つも残ってしまった。

せめて、あのサーヴァントの真名を読水に伝えたかった……が、あれなら自分が死にさえすれば何とでもなるだろう。

それより、一ツ目の小僧だ。どうにか、彼の命だけは守ってやりたいもんだ。

そんなことを漠然と思いながら、アダムの意識は完全に途絶えた。

第十一話『ルーツ』

ふと気がつく、佐藤は見慣れぬ神殿の前で立ち尽くしていた。太く堅牢な柱が並び立つその神殿を見上げる、空は雲ひとつなく、ギラつく太陽は柱をより白く輝かせていた。

佐藤は突然鳴り響いた背後の轟きに肩を浮き上がらせ、振り返った。神殿の前にはテレビでしか見たことのない石造りの都市、地鳴りのような音はその遙か向こうの地平線からだと思われた。

佐藤は何となく、この景色が古代のギリシヤのものであることを理解した。そして、間もなく壮絶な戦いが始まるのだらうということも、確証もないままに理解できる。

佐藤はジツと、敵が来るであろう地平線を見つめていた。すると、その横を一人の少女が通り過ぎていった。少女は、背後に迫る敵を他所に決然とした振る舞いで神殿内へと歩を進めていく。

「……マカリア」

その言葉、彼女の名前を自分で言ったのだと、佐藤は言葉の後に気がついた。佐藤は振り返り、その美しい少女を呼び止める。

「何も、そなたである必要はないんだ。神託では生贄は女性というだけで、君を名指ししている訳ではなかった」

「ならば、私であっても良いはずです。他の……この都市に住まう、罪のない娘達でなくとも」

少女——マカリアはゆっくりとこちらへと振り返り、苦しげに言った。

「これ以上他の誰かを犠牲にするのが、私には耐えられない……」

「マカリア……」

「私は兄上達のような力はありません。しかし力及ばずとも、困難に挑む権利は誰にでもあるはずです。例えばこの身を捧げることであっても、力なき私にとつては崇高な戦いなのです」

馬鹿者め。佐藤は呟いた。マカリアは、続けてこう告げる。

神々の思惑によつて始まった戦いに勝つ為に、冥府の神への生贄に

自ら名乗り出る。それでは、まるであの男のようではないか。神々に翻弄された彼女の父、あの非の打ち所のない大英雄の人生と……。

だが、彼女の勇気を否定する訳にはいかない。否、したくはない。

「……ならば私を、そなたの犠牲をもって誓いを立てようマカリア」

佐藤はマカリアのそばまで歩み寄り、跪いた。

「我が心は永劫に、そなたと同じ血が流れる者の味方だ。例えこの身に何があろうとも、私はその者らを守る為に力を尽くそう」

その言葉にマカリアは少し顔を緩ませ、頭を下げた。

「皆を頼みます……我らの導き手」

イオラオス。

その言葉を聞き遂げ、佐藤の視界は揺れ、暗がりへと落ちていった。

佐藤はゆつくりと、目を開けた。すでに正午まで寝過ぎていることが、身体の調子から分かる。

寝すぎのせいか、若干の頭痛に呻きながらベッドから佐藤は身を起こした。はだけたパジャマを直していると、ライダーが静かに実体化してきた。

「おはよう、嬢ちゃん」

「ライダー……ごめん、休みだからって寝すぎた」

「戦争中にそれだけ眠れば大したもんさ」

「そう……かな」

そう言って笑うライダー……真名、イオラオス。

あの夢は、彼と関わりのあるものだったのだろうか。マカリアがこちらに向かつてイオラオスと呼んだ以上、あの時の私がイオラオスだったのだろうか。

彼の経歴はネットで軽くは調べた、彼は英雄ヘラクレスと共に多くの戦争や困難を乗り越えている。あの光景も、そのうちの一つなのかもしれない。しかし、なぜ自分がそんな光景を夢に見たか、それが分からない。

聖杯戦争、伝説に生きた英雄を現世に召喚し最後の一組になるまで戦う儀式。その勝者には、あらゆる願望を叶えられる聖杯が与えられる

る。

そんな戦いに不意に参加することになった佐藤には、未だ勝った後のビジョンも、願いも思い描けていない。強いて言えば、自分に何ができるか、何がしたいかを探していると見える。

しかし、その相棒たる彼はどのようなのだろう？

「……ライダー、ちよつと聞いて良い？」

「ん？ 何だ、急に」

「貴方は聖杯を手にしたら、何を願うの？」

その言葉に、ライダーは面食らったように目を開いた。しかし、考えるように首を曲げると。

「大した願いはねえかな……」

勝つてから考えるさ。と、笑い飛ばす。

その回答に、佐藤は嘆息した。夢のように、彼は素直ではない。この様子では、夢の内容を話してもはぐらかされるのがオチだろう。英雄の本心を見抜くには、私はまだまだ小娘といったところか。

「……今日の嬢ちゃんは、何だか哲学者だな」

嘆息する佐藤に、ライダーはぽつりと呟いた。

誰のせいだと思っているのだろう。佐藤は脱いだパジャマをライダーの顔面へと投げつけた。

「言われて？ ちよいとこつち専念して？ それでランサー達が見つかりやあ苦労しねえっての」

アホくさ。と、バーサーカーは鼻で笑う。その態度にムカつき、レオポルディーネは彼の脛を蹴り飛ばした。

「うっさい！ そう上手くいくなんて……お、思ってたわよー！」
「はー、はー、そうかよ、ふーん」

大して痛がる様子もないバーサーカーはそう流し、缶ビールを片手にぼんやりと空を見上げる。その様子に毒気を抜かれ、レオポルディーネも視線を駅前を行き交う通行人に戻した。

レオポルディーネとバーサーカーは、日坂駅の前でランサーとそのマスターの姿を探していた。はたから見れば、小柄で上等な衣装を纏

うイタリア人と、野暮つたいジャージとサングラスを引っ掛けた二メートル近い大男だ。その格差も相まって酷く目立っていることだろう。

鏡宮から命じられ、ランサーのマスターが持つ『欠片』とやらを追って二十四時間が経過していた。すでにバーサーカーは今の仕事に飽き、レオポルデイナーもまた、この探索が不毛だという感情に囚われつつある。

「だいたい、この街にや人間が何人いるんだよ。増えすぎだろ人類、アホか。千年間ずっとお盛んしてたのか」

「人類の繁栄に、なんてケチを……でも、駅前には張り込んで見つかるような相手でもないのは、身をもって分かった」

「なあ？ 俺の言った通りじゃねえか」

バーサーカーの言い草に苛立ちを覚えたが、全くもってその通りだったのでレオポルデイナーは脛を蹴りつけない気持ちでグツと堪えた。

ランサーのマスター、読水竜也の経歴は確認してある。

世界中に広がる亜種聖杯戦争の渦により、秘密裏に、そして確実に、魔術礼装や触媒を自身の工房に取り寄せることへの需要が高まった。それにより半ば必然的に生まれたのが、運び屋という存在だった。

敵は世界中の魔術師の目で、情報の漏洩を防ぐ為に雇い主にさえ殺されかねない。読水という男は、そんな死と隣り合わせの世界で五年間も生きていくという。魔術師としては二流、三流であっても、隠れること、逃げることに関しては一流のプロだ。

片や自分、レオポルデイナーはどうだ？ そんな一流を見つけれられる手段を持ち合わせているのか。答えはNOだ。

「……探知用のルーンは街中に配置しているんだ。連中が大きな動きを見せたら即座に察知し、追うことはできる」

聖杯戦争が正式に始まったのは、三日前のことだ。しかし戦争の準備はそれより以前に為されている。

この日坂市に拠点を置いたレオポルデイナーは、この街のいたる所に探知用のルーンを刻んだ。ランサーと交戦した時も、ルーンの一つ

が彼らの戦闘を察知したからこそ工房から抜け出たのだった。

「レオよお、それまでは寝て待とうぜ？」

「レオって呼ぶな」

そう噛みつきレオポルディーネは唇に指を当て、バーサーカーの提案について考慮してみる。しかし、すぐに首を振った。

「……ダメね。仮にそれで探知できるとしても、向こうが動くって保証がないもの」

「それでもねえ。俺達を含め、いい加減あつちこつちで動きが出てくる頃合いだ」

バーサーカーの言葉に、レオポルディーネは怪訝な顔をする。

「そう上手くいくものかしら」

「新選組、つったか？ あのサムライ共は良い仕事したぜ。あれが口火になった……上手くも下手もねえ、もう誰にも止められねえんだ」

バーサーカーはそう言って、顔を伏せる。その口端は釣り上がり、犬歯を覗かせていた。掛けたサングラスであつても隠せない戦いへの愉悦と狂気が、そこから伺いしれた。

「欲をかく、本性を表す、方針や信念を揺らがせていく……人間は混沌とした戦いの中で口当たりの良い台詞を吐いて、身を狂わせていくものだ」

「……読水竜也も、そうするってこと？」

「野郎の顔を、俺はこの目で見ている。奴は恥も外聞もなく逃げる野郎だが、誰より聖杯を求めている……貝みたいに、籠ってはいられねえはずだ」

そういうものか。レオポルディーネは一瞬納得しかけ、慌てて首を振った。戦場で身を狂わせる、その最もたる存在はこのバーサーカーじゃあないか。

もつともらしい言葉で人を駆り立てつつ、そんな理性も一度戦いが始まるとボロボロとメッキのように剥がれていく。それがこの英霊だ。

ならばこそ、自我をしっかりと保たねばならない。手綱を握るのは、マスターである自分であるべきなんだ。

「じゃあ、私達も動くに越したことはないじゃない」

「じゃあ帰って、どう鏡宮の鼻っ面へし折るか検討し……」

「そうじゃない！ 鏡宮にサボっていると思われないう、せめてこうやって出回るって言ってるの！」

そうかよ。と、バーサーカーは面倒臭そうに溜息をつき、歩き出す。

「あー……聖杯が寄越した知識にや、そういう保身はサラリーマン根性って……」

「保身!? 上等でしょッ！ こちとら現代人だ、この中世人ッ！」

レオポルディーネはそう叫ぶとバーサーカーを追いかけ、その背中を殴った。その硬さに手首が内側へと曲がり、激痛で彼女は泣き叫ぶ。

その光景は、駅で何よりも目立っていた。

夕刻、シユウジは山の麓に来ていた。

山に沿うように作られた道路。都市部の方へは住宅地が広がるが、その逆、シユウジが見つめている山の方面には何も建てられてはいない。生い茂った草や石ばかりが転がる、空き地となっている。

人の住まう土地と、放置された土地を隔てるアスファルトの道路。それはどこか、境界線を思わせた。

「……ここか、シユウジ」

シユウジの横でセイバーが実体化し、聞いた。

「お前が言う、始まりの場所というのは」

シユウジは静かに頷き、空き地へと足を踏み入れる。

「ここらにも、本当は住宅が何軒も建っていた。私の家も、そのうちの一つだった」

だが十年前、それらが土砂で潰された。

シユウジはそう言うのと、屈み込んで土を手で掬い上げた。

「ちようど、これくらいの時間だったな。部活帰り、幼馴染の子と何の心配もなく帰路についていたのに……突然地面が揺れたんだ。物凄い音がして、目の前が真っ暗になった……」

「……シユウジ」

「気がつくくと、グチャグチャになった木切れの上に横たわっていた。何が起きたか分からなかった……もう空は真っ暗で、土砂から煙と炎が出てきて、なぜか泥塗れの幼馴染が抱きついてるんだ」

シュウジは無感情に言葉を重ねていたが、やがて顔を歪め、掬った土を握り締め、せきを切ったように声を荒げる。セイバーは止めようとしたが、その剣幕に言葉を詰まらせた。

「……俺、あいつが守ってくれたんだって、土砂崩れが起きたんだって分かった……周りに聞こえるんだ、助けて、怖いって小さな声や悲鳴が、足元や地面の中から……ッ！ あいつ、まだ息をした！ でもどんどん息が弱くなっていくんだ！ 何とか助けようとした！ 必死に声をかけながら、あいつを抱えて這い回って……！ でも、助けてくれる人も、あいつの下半身も……どうしても見つからなかった……」

助けられなかった。シュウジは絞り出すようにそう締めくくると、握り締めて固まった土を足元に落とす。

「……それから、奇跡の子扱いされた。少しして、病院に聖堂協会が来た。俺が神から力を授かったとか、後天的な魔術回路だとか……奴らは何を知ってるんだッ!? なあッ!?」

シュウジは振り返り、噛みつくようにセイバーへと詰め寄った。

「奴らはいつが何もせずとも、俺が助かったって言いたいのか?!」
「……………」

シュウジは荒い呼吸を続けていたが、やがて黙り込むセイバーから顔を晒し、深呼吸をして自身を落ち着かせていった。

「すまん……どうかしていた」

「気にするな」

セイバーはそう言うと、彼が冷静さを取り戻すのを待った。人の営みによる音も遠い山の麓、二人の間に静かな時間が流れていた。

「……聖堂協会が言うには、私の体には後天的な魔術回路が埋め込まれているらしい。それは正に、神からの贈り物だと」

シュウジはゆっくりと、そう切り出した。事故の後、沢尻周路としての人生を捨てて代行者となったシュウジは、それが現在の魔術では

ありえない、それこそ魔法と呼ばれるような現象であることを知った。

「俺は聖堂協会に言われるままに、代行者になった……だが私はそもそも、神を信仰してはいなかったんだ」

だから、偶に信じられなくなる。シユウジはそう言っただけの手ひらを、浮かび上がった令呪を見つめた。

「本当にこのままで良いのか……私がやっていることは、創造主が私に力を与えたのは、本当に正しいことなのか……？」

「……………」

「教えてくれセイバー……レコンキスタの騎士、エル・シド。私達が神に仕える剣なら、その騎士道とは一体何なんだ？ 騎士道や信仰に縛られて、戦って、本当にそこに名誉や栄光があるのか？」

セイバーは顔を伏せ、しばしの間黙ったが。

「神の意思を真に理解できた者など、この世にいない。だから人は、祈ることしかできないんだろうな」

そう告げると、騎士道をこう断言した。

「騎士道とは、戦いを『何でもあり』にさせない為に共有した戒律であり、美学にすぎないさ。名誉や、栄光も、その有り様を讃えたもの……騎士道の本質じゃあない」

その言葉を、シユウジはゆっくりと飲み込んだ。そして、ボソリと口を開いた。

「……じゃあ、なぜそんな重苦しいものを守る必要がある？」

「必要は……ないのだろうな。言ってしまうえばそれは、下らん意地や見栄だ。ただ、覚えておけ」

セイバーはシユウジの肩に手をおき、こう諭した。

「真の強者とは、自身の正義や美学を守ったうえで戦いに勝てる者だ。お前は強い、下らん意地や見栄に悩める自分をもっと誇れ」
「……………」

しばし霊体化している。と、セイバーはマントを翻した。

「前にも言ったが、道はお前自身で考えた方が良い。自分の正義や与えられた使命であれ、その力を奮うのも、結果に苦しむのもお前に他

ならないのだから……」

俺のようになるな。そうセイバーは慈しむように告げた。

「……………ッ」

夕日に煌めき、霊体となつて消えるセイバー。その背中に、シユウジは黙って頭を下げた。それは感謝と言うよりは、自身の信念と思ひ、信仰をもつて剣を握る強者への敬意であつた。

そしてゆつくりと顔をあげたシユウジは、夕日が落ちる時までずっと、赤く照らされた始まりの地を見定めていた。

河川沿いにある、開けた空き地。そこにアレクシア・ブロッケンはいた。

薄着の女——ミア・ブロッケンは歩道から下り、一斗缶を使って火を熾している彼女に小走りで駆け寄る。彼女もミアの存在はすでに気づいているだろう、だが振り返ることはない。彼女はどこから拾ってきたのか、錆びたパイプ椅子に腰掛け、揺らめく炎を見つめている。時折、これをするのだ。ミアは溜息をついた。彼女なりの精神統一、あるいは趣味とでも言うべきものなのだろう。しかし炎が爆ぜる音、そして何より、燃え上がる炎の明かりとは目立つのだ。できれば止めてもらいたい。

「……………ミア、報告は？」

アレクシアは炎を見つめたまま、ミアを促した。横風でチロチロと瞬く光炎に照らされた彼女の横顔を見ながら、ミアは口を開いた。

「学生服から、どこの学校かは特定しました。明日は月曜ですし、私みたいな不良少女でもなければ見つけられると思うっス」

「そう……………アダム、いえ、人形の方は？」

「明日やると難しいですね……………死霊術師に任せちゃってますが、明日やるには時間が足りないかと」

その辺、専門外なんでちよつと……………と頭を下げるミアをよそに、アレクシアは考えるように黙ってしまう。

「あの……………姉さん、アダムが守ろうとしていた、例の三下なんですがね？」

ミアは顔だけを上げてみせ、そんな彼女に言った。

「何か、まだ黙ってるんで……何なら遊ばせてもらっても良いですよ。」
恥ずかしそうな笑みを浮かべて頭を掻くミア、アレクシアはやれやれと首を横に振った。

「死霊術師はいずれ壊れる。その時にはアレと、人形が駒として必要になる。我慢しなさい」

ですかー。と、ミアは頭を垂らした。確かに死霊術師——ステイブ・フォスターをアレクシアが拾ってきた時には驚いたが、今ではその有用性にミア自身助かっている。

聞くところによると彼は聖杯戦争の最初期に失敗し、英霊に斬り殺されたらしい。自身をゾンビ化させ何とか生きているようだが、あのアメリカ人は聖杯の力で生還できると、否、そもそも聖杯の力をアレクシアが微かにでも譲ってくれると本当に思っているのだろうか。ひよっとしたら、体良く利用されているのだと気づける脳味噌さえ、もうないのかもしれない。

ま、あの人形も含め、最期までしっかり使ってやろう。ミアはあつげらかんと、そう結論づける。そしてできればあの少年は、どこかのタイミングで遊びたいもんだと願った。

「……しかし、本当に勝てますかね？」

会話が途切れ、しばしの沈黙を裂いてミアはアレクシアに言った。

「相手は英霊……冗談でなく、マジ者のバケモンですよ？」

「……確証はない。だけど、だからこそやる価値がある」

アレクシアは目を閉じ、ミアの疑問にそう答えた。

「魔術師では英霊には勝てない……魔術師共は、常識のようにそう語る。だからこそ良い、私達が最初の実証者になるという点にこそ、リスクを犯すに勝る価値が……後追いじゃあ、意味がない」

ブツブツと、まるで呪文を唱えるようにそう語るアレクシア。そしてゆっくりと瞼を開いた時の彼女は、地獄に住む悪魔のように、瞳と唇から覗く歯を炎に輝かせていた。

「そう……この聖杯戦争は、奴らは、その犠牲になる……我々がコロンス、奴らは打ち立てられる卵だ」

揺らめく炎でチラつく光と影、そこに垣間見える彼女の野心と渴望。そこにミアは、思わず身を竦ませる。

だが、これなのだ。ミアがアレクシアに付いてきたのは、この恐ろしさにあてられたからに他ならない。

悪魔と契約した時、堀井深秋という名前を捨てた。そしてミア・ブロッケンとなった彼女は更に、ブロッケンの魔女でも最も悪魔的な彼女、アレクシア・ブロッケンに付いていく生き方を選んだ。

碌な教育を受けていないミアであっても、悪魔との契約がいずれ破壊をもたらすことは理解している。ならば行く所まで、堕ちる所まで堕ちてやる。この命を燃やして、私を必要としなかった世界の度肝を抜いてやる。この世界が焼ける様を、地獄に堕ちながら嘲笑ってやる。

「……じゃあ姉さん、次はどうします？」

ミアの期待に満ちた言葉に、アレクシアは令呪の浮かぶ右腕を挙げてみせた。

「夜明けと共に、使い魔の猫を放ちなさい……日が沈む頃合いに、ライダーを血祭りにあげましょう」

やっぱ最高っすわ。アレクシアの宣言に、ミアは無邪気な笑みを浮かべた。やはり、彼女に付いて行って良かった。

これでまた一つ、このクソな世界に仕返しができる。

第十二話 『獅子の相貌』

駅から出てようやく、佐藤は夜空から振る雨粒に気がついた。

学生鞆から小傘を取り出し、広げながら佐藤は今後のことを考える。目下考えねばならないのは、同盟について。ランサーの陣営に申し出て三日経つが、未だ返答は来ていないのだ。

“ライダー”

“ああ、分かってるよ……”

佐藤は念話でライダーを呼びかける。ライダーも、やれやれと言った口ぶりだ。

“こつちも長いこと待つてられはしない。こうなりや、別の連中と組むことも考えなきやあな”

“ん……でも、アテはあるの？”

“前にセイバーが、俺達を狙う道理はないとか言つてたな……ただ、あいつら強すぎるんだ。下手に組むと、奴の敵が俺達を弱点とばかりに狙いかねない”

なるほど、そういう考え方もできるのか。佐藤は一人頷いた。相手が強すぎると主導権を握れないとは思っていたが、戦力を削ぐ為に真つ先に襲われるポジションになりかねないとは思ひもしなかった。

“それに、だ”

また、ライダーはこう続けた。

“人に課せられた運命は、その者に見合うだけのスケールで用意されているものさ。下手に楽をすれば運命は別の試練を用意するし、仲間を作ればそいつの運命に巻き込まれかねない”

“……ふうん？”

その説明に曖昧な返事を返す佐藤。ライダーは聖杯に現代の知識を与えられているとはいえ、その心底には生前の経験や精神が根付いている。古代ギリシヤに生きた彼にとつて、神や運命を踏まえて物事を考えるのは当たり前のことなのかもしれない。

“しかし、他に頼れそうな奴がないのも事実なんだよな……やれやれ、どうしたもんかねー……?”

“……”
しかし、運命に巻き込まれる、という考えをするのであれば……。と、佐藤は人混みをすり抜け帰路につきながら、ライダーの言葉に思いを巡らしてしまう。

もし、そんなことがあるのであれば……苛烈な生涯を送った英霊を呼んでしまったマスターは、私は、一体どんな運命に巻き込まれてしまうのだろうか。

“——嬢ちゃんツ！ 屈めツ！”
その叫びに、体は反射的に動いた。

跳ね上がる雨水、頭上で吹いた風切り音。傘を手放し屈んだ佐藤は、気配を頼りに顔を向けた。

こちらを見ながら遠ざかる、ボロ布を纏った何か。牽制に放った突きの勢いそのままに、それを追うライダー。その光景を見てようやく、佐藤は自分が襲われたのだと理解した。

横薙ぎに振るうライダーの裏拳を、ボロ布は当たるギリギリの距離で躲す。そして姿勢を地面スレスレまで落とし、驚き足を止めたサラリーマンの股下を滑るように潜り抜けた。

突如盾にされた一般人に、追撃が止まるライダー。彼は邪魔だと言うように、サラリーマンを脇へと放り捨て、サラリーマン諸共に狙った光弾を素手で受け止めた。

「……おい、てめえ……ツ」

夜とは言え、一般人を巻き込むどころか盾にさえする襲撃に、ライダーは怒りを露わにする。その怒りを受けながらも構わずに、ボロ布の襲撃者は後方へと高く跳躍していった。

追うべきか、否、追わなければならない。雨水で張り付いた髪を手で払い、立ち上がる佐藤。しかし、横合いから男達が突如、殺気立ってこちらへと走ってきた。

「ライダーツ！」

佐藤は叫んだ。ライダーは振り返り、佐藤が別の男達に襲われよう

としているのに気づく。ライダーは歯ぎしりしながら、腰を沈めて一気に前へと飛び込む。そして突風のような勢いで、佐藤に迫る男達を文字通り蹴散らした。

佐藤とライダーは背中合わせになり、騒然となった周囲に視線を巡らせながら声を荒げた。

「嬢ちゃん、さっきのは……」

「確認できてる、アサシンだった！ それより今襲ってきたのは、ただの、普通の……無関係な人だよね!? 一体何で……」

「薄汚い魔術師のやり口さ！ 人の心を操り、駒にしている！」

「……そんなのっ」

そんなの、有りなのか。そう言おうとした佐藤、しかしそれより先に、佐藤達が立つ数メートル向こうで、突如として煙が吹き出す。

霧散せずに地面へと広がる、チューイングガムのようなシヨッキングピンク色の煙。ライダーが咄嗟に佐藤を庇うが、その隙間から、佐藤は見た。煙に咳き込み、倒れ込む通行人を。

瞬間、佐藤の心臓が大きく鳴った。叩かれたような衝撃の後、熱い血潮が身体の間々まで広がっていくのを、佐藤は確かに感じた。

そして捉える。煙の向こう、魔力を纏った飴玉を掌で転がす、露出度の高い女の姿を。女は佐藤がこちらを見ていることを気づくと、小馬鹿にしたように舌を出して飴玉を舂め、明後日の方向に飴玉を放った。飴玉は地面に落ちるか否かのタイミングで煙を吹き上げる。

その女の右手……飴玉を手にした右手には、手の甲を隠すようにリストグローブが着けられていた。

見つけた。女が傘を翻し逃走を始めたのを見て、佐藤の足が勝手に地面から離れ、重心は前へと傾いていく。しかし、その肩をライダーが掴んだ。

「待てよ嬢ちゃん、あれは罠だ。ああして脅して、俺達に無理にでもここで戦わせようって腹だぞ」

「そんなの分かっている。だからライダーはアサシンを追って、私はあのマスターをやる」

「いや分かっている。相手は魔術師だぞ、嬢ちゃん一人じゃどうにも

……」

「分かってないのは、ライダーの方だ！」

佐藤はライダーの手を払い、睨みつけた。

「今ならアサシンを追えるし、そのマスターだって狙える！ このチャンスは、今考えられるどのリスクよりも大きい！」

「嬢ちゃん……」

「いつかは倒さなきゃあならない相手だ！ 相手がアレなら……絶対
に、早いうちの方が良いはず！」

佐藤の言葉にライダーは少しの間、押し黙る。そして佐藤の目を見
つめ、こう返した。

「ヤバくなったら令呪で呼び戻しな。本命はサーヴァントだ、無理は
するなよ」

「分かってる……ありがとう、ライダー」

そっちも、無理はしないでね。そう言うと、佐藤は真っ直ぐに薄着
の女を追っていった。

その背中を見守ったライダーは、意識をアサシンの方に切り替え、
ビルの壁へと飛び移っていった。

「ほう……二手に分かれたか」

アレクシアは意外そうに眩くと、何かを探るように、くつと空を見
上げた。

佐藤とライダーが分かれた駅の付近にある、細い裏路地。その暗が
りに彼女はいた。降り注ぐ雨に対し、なんの雨具を持たない彼女はず
ぶ濡れだが、長身の彼女ではそれが逆に野生の獣のような迫力を滲ま
せていた。

アレクシアは今回の攻撃を受けて、佐藤達は迷わず偽のマスター
……ミアを狙うだろうと思っていた。ミアには悪いが、彼女はここで
殺されても仕方のない囷として使ったのだ。

しかし、実際にとった行動は二手に分かれての個別対処。アサシン
に後ろから狙われるリスクを廃して、それでもマスターを狙う選択を
取った。

ただの女学生じゃあない、そうアレクシアは確信した。少なくとも、自分を戦力に数えられなければ、こんな一手は打たないはずだ。しかし、そちらがそうするのであれば、こちらはこうするだけ。アレクシアはポケットから黒い薄手の手袋を取り出すと、手を手袋の口へと滑り込ませていった。佐藤達が二手に分かれる場合も、すでに想定内だ。

臨機応変、その場しのぎじゃあない。アレクシアはすでに、自身の企てにおける対応を考え抜いてある。

そして後は、実行に移すだけだ。アレクシアは手袋を着け終えると、さつと路地から出ていった。それに追従すべく、その頭上のビルから彼女のクラス達もまた、一斉に飛び立った。

地上を滑るように駆け抜けるアサシン、それを屋上から屋上へと飛んで追うライダー。互いに常軌を逸した速度と軌道で街を駆け抜け、周囲の人間には雨風にその姿は追うことさえ叶わないだろう。

しかし、中々追いつけぬ状況にライダーは苛立っていた。足の速さにはそれなりに自信のあるライダーだったが、二人の脚の速さはここまでの違いはなさそうだ。それに人目を気にし上空を飛び交うライダーより、地面を駆けるアサシンの方が加速やルートの変更が多彩な分、有利だった。

それが、ほんの数分前の話だ。

「オラオラ、アサシンツ！ そろそろ追いつきそうだぜー！」

曇天の空に低く唸りを響かせる、モーターの排気音。雨を後方へと弾き飛ばすスクリーン——ライダーは今、ホンダ社製の大型二輪、CBR1100XX スーパーブラックバードを駆り、アサシンを追い回していた。

アサシンの敏捷はライダーと同様、Bクラスはある。舗装された一本道での速度なら兎も角、本来であれば街中を縦横無尽に走るアサシンをオートバイで追うことなど不可能だ。

しかし、事実としてライダーは逃げ回るアサシンをバイクで追い、通ることがままならない路地や屋上を使われれば迂回、あるいは超人

的なテクニクで強引に通り返してしまおう。

これらを可能にしているのがライダーの追撃者としての勘の良さ、そして常時発動型の宝具『大獅子らの運び手』である。乗り物を宝具化させると言っても過言ではないこの宝具は、あらゆる乗り物を持ちこなし、その性能を最大限に発揮させる。

そう、この追走は人が図りし得ない奇跡ではない。名車スーパーブラックバードの走行性と加速力をスペックの限界まで引き出し、最上の運転によって実現しているに過ぎない。

「バイクか……良い、本当に良い拾い物だ」

覚えておこう。と、ライダーは口角を上げて跨ったマシンと、今頃警察に通報を入れているであろう男に感謝をした。この性能なら、あの人も満足させ……否、このバイクでは小さすぎるか。

アサシンが団地の屋上から飛び跳ね、高速道沿いの川を渡る橋へと降り立った時だ。ライダーはここで勝負に出ようと一気に加速し、アサシンに迫っていた。

しかしそんなライダーへと、魔力で作られた光線が空より次々に襲いかかってきた。

「……ッ!？」

咄嗟にハンドルを切り、次々にくる光線を回避するライダー。そして光線が止むとブレーキを掛け、橋の端に止めた。

そして鋭く視線を巡らせ、状況を確認する。すでにアサシンは姿を消していなくなり、代わるように長身の女が立っていた。

「……なるほど、なぜ街を離れずグルグルと逃げ回っていたか、なぜこんな大きな通りに誰もいないか……今、分かった」

ライダーは納得したように頷く。彼はセンタースタンドを出してバイクを止め、本来の姿、ウールの外套を着た姿へと戻った。そして腕を横に振りつけて短剣を実体化させ、鞆代わりの縄を解きながら橋の中央へと歩いていく。

「こうなると、さっきの女が本当にマスターか、怪しくなってきたな。なあ、実際のところ、どうなんだい?」

「私も、少し腑に落ちないところがある」

長身の女——アレクシアは一步前に出て、こう言った。

「この局面で、あのマスターを信用するとは思わなかった。まさか、本当に魔術師相手にあの小娘が渡り合えると？」

「……ああ、確証はないが」

その可能性に、賭けている。そうきつぱりとライダーは言った。その豪胆さと自信に、アレクシアは眉をひそませた。

「気に入らないか。だが、あんたには分かりやしないだろうさ」

そう、ライダー自身驚いているのだ。

駅前では、恐怖より怒りを露わにした佐藤。しかしその実、合理的な決断をライダーに提案した。それも、チャンスを得る為に自分の命を危険に晒すという決断をである。

そして、その時の相貌。敵を背さえ見抜かんとする冷ややかな瞳に、敵を食い殺さんばかりに戦慄いた口元。激情家であるが、頭は常に冷ややか……間違いない。

あれは獅子として、今まさに覚醒しようとしている。

「ま、それだけ俺は、あの子の才能に惚れているってことだ」

アレクシア達を前に、ライダーはそう笑った。そして、腕をだらりと前に投げ出し、腰を落として身構えた。

それは、レスリングの構え、あるいはバスケットボールのドリブル姿勢や卓球の基本姿勢といったスポーツでの構えに近いものであった。

構えには、その者の戦いへの流儀、思想が伺える。

ライダーのそれは、現代に残る剣術や格闘技の構えのように腕や剣で牽制したり、急所を守ってはいない。むしろ構えの時点では、絶対の急所である頭が腕より前に差し出されている。

しかし隙あらば飛び掛からんとし、逆に相手には致命打を取らせない。そう、この前傾姿勢は誓っている……今の『静の状態』での安定性を捨て、次の『動の状態』での速度を求める。負けを受けない構えではない、勝ちに奪う流儀なのだ。

「質問には答えたぞ……で、こっちの質問には答えてくれるんだよね？」

ライダーは構えながら、アレクシアにそう聞く。

アレクシアは何か思案するように顔を伏せたが、両手に取り付けた手袋の指先を噛み、ゆっくりとした動作で手から引き抜いた。

「こんな感じかしらね？」

アレクシアはそう言つて、口にした両の手袋を令呪が宿った右手で掴み取ると、ライダーに向けて投げつけた。

「充分だ」

ライダーはそう答え、投げつけられた手袋を短剣で四つに切り分けた。そしてアレクシアへと一気に飛び掛かっていく。

アサシンの気配は、未だにライダーの周囲に残っている。ずっとライダーを狙い続ける故か、あるいは気配遮断のランクが元々低いのだろう。

とにかく、サーヴァントとマスターの二つは、自分の刃の届く範囲にいる。後は迅速且つ確実に、これらを排除することだ。

対するアレクシアは、何も隠しごとはないと示すように、両腕を肩の高さに開き白々しい微笑みを浮かべる。

そして、頭上を旋回していたカラス達が一斉に光線を放ち始めたのを合図に、戦いの火蓋は切つて落とされた。

ライダーとアレクシア達の戦いが始まる中、佐藤もまたすぐ近くにある団地の敷地内でミアと戦っていた。

とはいえ、今や追う者と追われる者の立場は逆転している。周囲を建物に囲われた敷地内なら奇襲はなかりうと、薄着の女——ミアは反転し攻勢に出た。そして佐藤は現在、投げつけられる毒煙や呪いを走り回ることでも辛くも回避している。

想像以上に、戦い辛い相手だ。それがミアに対する、佐藤の率直な感想だった。

立ち込める毒煙、人を支配する呪い……のようなもの、それらは魔術の素人である佐藤にとっては酷く曖昧で、どこまでが危険領域か、判別しにくいものだった。肉を切らせて骨を断つ、と昔の武士が言つたそうだが、今の佐藤はどこまで踏み入れば命が切られるのか、見分

けがつかないのだ。

「ああもう！ 何無駄に粘ってんスカ、このガキイツ！」

苛立ち、声を荒げて飴を投擲するミア。佐藤はその様子から、ある覚悟を決めた。平地で近寄れないなら、高低差で距離を誤魔化せば良い。

佐藤は向きを変え、団地の中へと入っていった。雨で滑る床に一度は膝を付いて転ぶも、急ぎ外壁に突き出た形で取り付けてある階段へと駆け込む。

「逃がすと思ってるのかあ！ ボンボンのお嬢ちゃんツ!?!」

ミアも佐藤を追い掛けたのが、背後の反響音で分かる。上々だ。

佐藤は螺旋状に伸びる階段を駆け上がりながら、途中、踊り場の手すりに傘が掛けられているのを見つけ、拾い上げる。それから階段を上りながら、追いかけてくるミアとの距離を探り、傘の状態を確認する。

そして、自分が四階の廊下へと辿り着き、ミアがすぐ下の踊り場から階段に足を掛けた時だ。

佐藤は開いた傘を、ミアの視界を覆うように放り落とした。

階段という、幅の狭い通路を塞ぎながら落ちてくる傘。ミアは咄嗟にそれを手で受け止めた。

「この野郎、生意気なま……っ」

「リアッ！」

ミアが何かを言おうとしたが、そこに次いで、佐藤の両足が傘越しから飛び込んでいった。

傘の生地で隠した、不意打ちのドロップキック。それに加え、階段からの飛び降りたことでの落下エネルギー。如何に魔術を使う身とは言え、体のサイズ自体は佐藤に劣るミアだ。その衝撃には為す術もなく、彼女は後方の手すりに背中を叩きつけてしまった。その拍子に手すりは軋み、コンクリートの壁から格子の支えが外れかける。

そのチャンスを、佐藤は見逃さなかった。傘を横に放って呻くミアに、佐藤は立ち上がり際に体当たりを決める。手すりと佐藤に挟まれ、口から息を漏らすミア。そして次の瞬間には、メキメキと音を立

てて手すりの支えが壁から抜け落ちた。

「ゲホッ……えっ、わっ……ッ!？」

手すりに体重を預けていたミアは、格子と共に宙へと飛び出した。やったか。と、体当たりの衝撃で床に倒れてしまった佐藤は這い、悲鳴を上げて落下したミアの姿を追う。しかし彼女は、佐藤のすぐ下の踊り場の手すりに手を掛け、何とか四階からの落下を凌いでいた。

「……くそ」

無茶をしたが為に痛みを覚える体に鞭打ち、佐藤は立ち上がる。そして息を切らしながら手すりにしがみつき、何とか這い上がるようにしているミアを見下ろす。

彼女を落とすには、もう一押し、必要だ。

「……………」

「……エツ」

佐藤の冷やかな視線に、ミアも気づいた。

「ちよ……よし、話し合いましたよ」

佐藤はミアの提案を無視し、体を一八〇度、くるりと振り返るように回しながら縁から身を躍らせた。

落下する佐藤の体。そしてミアの肩を踏んで落とし、彼女が掴んでいた手すりを入れ替わるように掴む。結果として佐藤は一段下の手すりにぶら下がり、ミアは佐藤へ地面へと蹴落とされた。

ミアの悲鳴が下へと遠ざかり、ドスンと言う音と共に消える。それを聞くことで勝敗が決したことを確信した佐藤は、苦戦しながらも踊り場へと這い上がった。

そして踊り場で身を横たえ、佐藤は荒い息を整えていった。感じるのは、体内を熱くさせる震えと苦しみ、そして高揚だった。

これが、戦い。そして、勝利か。

何とかなった。勝った。その事実が、佐藤の脳髓に甘い喜びを分泌させる。吐き出す息に、笑い声が微かに漏れる。

しかし、その余韻もすぐに止んだ。壁に手を付け立ち上がった佐藤は、壁が外からの光を反射させたのに気づいた。佐藤はその光で、まだライダーが戦闘中であることを思い出した。

「ライダー……」

フラフラと吸い寄せられるように、佐藤は手すりから身を乗り出し、光源を探す。遠目に見える……川沿いの高速道へと伸びる橋に、紫色の光線が断続的に光っては消えている。ライダーとのラインを通じて感じるのは、彼の徹底した攻撃の意思と、アサシンへの警戒心だ。

まだ予断を許さぬ状況らしい。とにかく、こちらは無事だと念話で報告すべきだろう。佐藤は意識を集中させ、ライダーへと通じるラインに心を移した。

「ライダー大丈夫!? こっち……は……」

その時だ。ようやく、佐藤は気づいた。

令呪の宿った左腕を挟み込んだ、二本の棒状の……いや、これは一対の鋏か。

「……………」

ゆつくりと、佐藤は目を横へと動かす。赤黒く、ギザギザとした二本の鋏の付け根、分厚い甲殻が布切れから微かに覗く。そしてその布切れの切れ目に、光る両眼を見つけた時、それがアサシンであると佐藤は理解した。そして、その真名も……。

ほんの少しの間。佐藤とアサシンは視線を合わせていた。すぐにライダーを呼ばなければならぬ、令呪で、しかし……そんな時間はあるのか、可能なのか。

佐藤は震えでなる歯を噛み締めることで押さえ込み、息を微かに吸い込んだ。彼女には恐怖を乗り越えるだけの勇気が、不運にも備わっていた。

「令呪を以って……」

そこまですごい。その後、続く言葉を、光景を、佐藤は知らない。自身が絶叫を上げたことさえも、理解できてはいなかった。

鋭利とは呼べないその鋏によって腕を押し潰され、千切り落とされていく——その痛みに、彼女の思考は塗り潰されていく。

戦いは、まさに圧倒的と言えるものだった。

死角に回るアサシンの気配を捉えながらも、ライダーはマスターであるアレクシアを追い詰める。アレクシアはそれを、使い魔を盾に辛くも防いでいるばかりであった。

アレクシアは決して弱い相手ではない。悪魔との契約で得た呪いと、使い魔による包囲網、魔術礼装による補填、手駒を使つての囚や連携……相手にとって最悪の相手であれば、何でもやってみせる彼女の執念は確かに脅威だ。

しかしギリシャの大英雄と共に伝説を駆け抜けたライダー相手では分が悪い。その神秘の高さ故か、高い対魔力はアレクシアの魔術を尽く防ぎ、他の絡め手も経験の高さから即座に対応される。アレクシアは今や、全てを駆使し自分の命を繋いでいる。それだけで精一杯となっていた。

だが、それも終わりだ。空から注がれる光線を素手で払い除け、ライダーは短剣と縄で使い魔を撃ち落としながらアレクシアの懐へと飛び込んでいく。

そんな時だった。ライダーはその絶叫を、魔力で繋がるラインと耳、両方で知覚した。

「なっ……バカなッ」

ライダーは立ち止まり、佐藤のいる団地の方へと顔を向けた。ライダーの目は、今まさに佐藤の腕を切断しているアサシンの姿を捉えた。

どうなっている。ライダーは尚も感じ取っているアサシンの気配へと視線を巡らす。アサシンの気配は未だある、雑居ビルの影の、暗がり……佐藤達がいる方向とは真逆だ。

理屈は分からないが、謀れた、その事実だけライダーは理解した。

「ステイプ」

笑みを浮かべるアレクシアが、そう呟いた。すると、橋の柵を飛び越え、いつぞやの死霊術師——ステイプがライダーへと襲いかかった。

「お前は……ッ!?!」

振りつけられた儀礼用の剣をライダーは短剣で受け止めるも、続く

ステイブのタツクルに捕まり、片足が地面から離れてしまった。

「この……クソッ」

ライダーは悪態をつき、ステイブを両腕で抱え、大きく仰け反る。そうやって彼の両足を逆に地面から引き剥がすと、ライダーは後転するようにして、ステイブの長身を後方へと投げ飛ばした。

そして、素早く身を起こし、体勢を整えるライダーだが……。

「令呪を以って顕現せよ。その身を以って牢記せよ——」

彼の両の目が捉えたのは、隙を突いて呪文を詠唱する、アレクシアの姿だった。

「——これに至るは七十二の魔神なり」

その言葉を機に、アレクシアの右手から魔力が溢れ出た。その腕はコートの袖を引き裂くまでに膨れ、一本の醜い肉の触肢となる。

その肉塊には幾つもの裂け目があり、そこから無数の赤黒い目玉が盛り上がり現れる。それはまさに魔神、世界を穢す魔の支柱のようにライダーには見えた。

「何だ……それ……は……っ」

右腕を悍ましく変貌させたアレクシアは、ライダーは事態を把握するよりも先に、最後の呪文を告げた。

「六十四の公爵——焼却式」

途端、右腕の赤い目が輝く。その一瞬の後には、ライダーの体は爆ぜる地面に立ち上がる光柱によって、焼き払われていた。

サーヴァントデータ集 『第13話時点』

クラス：セイバー

【真名】：エル・シッド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）

【アライメント】：秩序・中庸

【性別】：男性

【身長・体重】：182cm・90kg

【ステータス】

筋力：B＋ 耐久：B 敏捷：A 魔力：D 幸運：C 宝具：A

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【保有スキル】

・カリスマ：C＋

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

レコンキスタの英雄でされながらも、異教徒の者とも親交を持つカリスマ性を生前に示した。

・軍略：C＋

多人数を動員した戦場における戦術的直感能力。自らの対軍宝具行使や、逆に相手の対軍宝具への対処に有利な補正がつく。

・カンペアードール：A－

ランク：C＋ 種別：対軍宝具

レンジ：― 最大捕捉：100人

■■■■での逸話を具現化させた常時発動型の宝具。

周囲の物体を念動力によって総動させ、防衛に用いる。飛来する物体に魔力的能力はなく、あくまで防衛の為の宝具である。また宝具を発動している際は、片手で印を結ぶ必要がある。

*

クラス：ライダー

【真名】：イオラオス

【アライメント】：中立・善

【性別】：男性

【身長・体重】：180cm・77kg

【ステータス】

筋力：C 耐久：D 敏捷：B 魔力：D 幸運：B 宝具：A

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：―

騎乗の才能。宝具『大獅子らの運び手』の代償に失われている。

【保有スキル】

・英雄の介添：D

英雄を勝利に導く性質がスキルとなったもの。

魔力を同調させ、対象が行うあらゆる判定にプラス補正を与える。

・勇猛：B

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

・ 友誼の証明：C

敵対サーヴァントが精神汚染スキルを保有していない場合、相手の戦意をある程度抑制し、話し合いに持ち込むことができる。

イオラオスは生前、自身達の正当性をマラトンにて主張し同盟を勝ち取った。

【宝具】

・ 大獅子らの運び手（ヘーロース・チャリオティア）

ランク：B 種別：対人（自身） 宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人

ヘラクレスが達成した12の難行に同行する中で身に付けた操法。

あらゆる乗り物を乗りこなし、宝具等の特異な能力を除き、その性能を最大限に引き出せる常時発動型の宝具。また乗り物に乗っている際は御者への一切の状態異常を防ぐ。

・ 消されぬ功績（レルネー・フロガ）

ランク：A 種別：対人宝具

レンジ：1〜5 最大捕捉：1人

ヘラクレスとのヒュドラ退治で用いた、再生封じの松明。

再生する首を焼くことによつてヒュドラの不死性を封じ、ヘラクレスのヒュドラ退治の功績を支援した。

あらゆる再生や治癒、増殖を焼くことによつて封じることができ。その過程として魔術回路の焼き塞ぐ為、発動状態にない宝具や魔術師の魔術、あるいは幻獣種のブレス等を防ぐことも可能になる。

・ ヘラクレス殺し（ヒュドラー・デイリテイリオ）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人

怪物ヒュドラより取り出され、多くの英雄や神を殺した毒。

イオラオスが生前より持っていた物で、そして一度足りとも使用されず、記録に残らなかった宝具。

解毒方法が未だない毒であり、毒を受けた者はAランク以上の耐久を誇る者でさえ苦痛で悶え苦しむことになる。

【保有スキル】

・無辜の怪物：EX

生前の行いからのイメージによって、後に過去や在り方を捻じ曲げられ能力・姿が変貌してしまった怪物。本人の意思に関係なく、風評によって真相を捻じ曲げられたものの深度を指す。このスキルを外すことは出来ない。

カルキノスの場合、その有名とは裏腹に結果が伴わなかったこと——ろくに敵とも認識されず、ただの一撃で殺害されたイメージが発現している。

自身の真名を看破された時点で、その相手に対し常にステータスのマイナス補正がかかる。

特に筋力は自身の放つあらゆる攻撃に毎に判定を行い、失敗した場合ダメージ判定において100%のダメージ削減がかけられてしまう。

耐久に至っては、いかなる攻撃に対してもダメージとは別個に即死判定が働く。

・神性：E

その体に神霊適性を持つかどうか、神性属性があるかないかの判定。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。より肉体的な忍耐力も強くなる。

アサシンは生粋の魔獣であるが、死後その勇気を称えられ、最高位の女神によって天に召上げられたことで低ランクながら発現した。

・気配操作：A

アサシンの唯一と言ってもよい名譽的なエピソード——かのギリシャ神話の大英雄ヘラクレスに対し、奇襲攻撃を与えてみせた逸話によるユニークスキル。

アサシンの持つ気配遮断の効果を変質させ、気配を消すだけでなくアサシンの存在しない場所にその気配を投影する。敵対者は例えアサシンを真正面に捉えていたとしても、背後や上空と言った死角に存在する感覚を打ち払えない。

第十三話 『途切れた繋がりの中で』

雨は、未だ止まない。

ライダーは瞼を打つ雨粒の感触に、左右に揺れる意識をゆったりと立ち直していく。

寢床から起き上がるような緩慢とした動きの中で、ライダーは自分と、周囲に起こった事態について考える。

七十二の魔神、あの魔女——アレクシアは確かにそう言った。魔術にさほど詳しくライダーでも、その言葉から予想できる存在がある。七十二柱の悪魔。ソロモン王の伝説……いや、そんなことがあるのだろうか。

しかし、それでも周囲の損害、基礎が折れ崩落した橋が川を横断している光景を見るに、アレの本質が只事ではないものと理解させる。

それに聖杯に与えられた知識が、アレを何物と断定せぬまま、『今すぐにも打ち倒さねばならない、危険な存在である』と警鐘を鳴らしている。学者肌でもないライダーには、それだけ分かれば充分だった。

「……なるほど、ねえ」

ライダーはそう呟き、崩落した橋の爆心地で両膝を地に着けたまま上体を起こした。その顔の右半分は爆発によって大きく破壊され、血によって塗り潰されていた。

そんなライダーのもとへ、アレクシアが歩み寄ってくる。アレクシアはライダーの手前で足を止め、右腕を不気味な肉塊に宙にくゆらせたまま、空を仰いだ。

「……感じる。私の奥へと入り込んでくる、これを」

私はもう、魔女でさええない。と、アレクシアは誰に言うでもなく、そう呟く。そして両腕を空へと広げた。

「世界は今、私を中心に回ろうと……」

「……させるかよ。馬鹿野郎が」

ライダーの言葉に、頬を引き裂くような笑みを浮かべるアレクシア。ゆつくりとライダーを見下ろすその形相に、ライダーは引きつった笑みを返した。今や、立場は完全に逆転した。

まずは……いや、せめて佐藤だけでもこの場から逃がせられないものか。ライダーはグラついた意識の中で思うが、すでに佐藤とのライオンは絶たれ、彼女の安否すら定かではない。

ならば、目の前の化物を討ち取るか。しかし可能か。満身創痍にして魔力供給も絶たれた、瀕死の己に。

ライダーは自身が間もなく現世に留まれないことを理解していた。ならば最期、微かに残ったこの力で、ライダーはどう動けば良いのか。ライダーは、それを決めかねていた。

「若獅子の導き手、イオラオス……」

アレクシアは、そんなライダーを見下ろしながら口を開いた。

「お前のミスは一つだ、仕えたマスターを誤った、それだけ……あんな小娘じゃあなければ、あのセイバーにも遅れを取らない強敵だったろうな」

「……何度も言うが、俺はあのお嬢ちゃんの才能に惚れてんだ」

ライダーは顔の怪我に手をやりながら、こう答えた。

「どうせ一度死んでる身だ。だからこの生は全部、未来の為に使いたい」

「……そう」

アレクシアは溜息をつき、その右腕をライダーへと突き出した。

「じゃあ光栄に思え。その第二の生、この先の未来を支配するこの力が、華々しく散らしてやる」

「……ありがとよ」

ライダーは跪きながら、その右腕をぼんやりと見ていた……否、見ている。彼はアレクシアの背後、雨の中、ビルとビルの合間を素早く飛ぶ彼女の姿を見ていた。

そう、本当にありがたい。

魔力供給を行う佐藤とのラインが途切れ、向かう相手は聖杯戦争の枠組みから外れた、英霊本来の敵だ。愛しきマスターの方は、彼女と

あの男が何とかしてくれるだろう。

これで、本気を出すことに迷いがなくなった。

「本当に、ありがとよ……ッ！」

ライダーはそう叫ぶと、アレクシアの右膝に飛びつき、膝を内股の方へと曲げた。その崩しによって彼女の姿勢は大きく崩れ、右手から放たれた魔力の波動はあらぬ方向に逸れ、川の土手を抉るに留まる。

ライダーはその余波に乗じて身を半回転させてアレクシアとの位置を変えてから、膝のホールドを離した。アレクシアは舌打ちをしながら、たたらを踏んで距離を取る。

「貴様……ッ」

「散ってやるよ、華々しく……」

睨むアレクシアにそう言うと、ライダーは縄を引きつけて短剣を手元に引き寄せた。

「ただし、お前も道連れだ」

そして、天へ掲げた左腕に実体化させたのは一本の松明——それはヘラクレスの十二の功業が一つ、その立役者たるイオラオスを立役者たらしめる、再生封じの炎だ。

「それは……」

「宝具、『消レルされぬ功績』。俺の真名を知っているなら、説明はいらないな？」

ライダーはそう言って、松明を背後に回すように振りつける。それだけで松明の炎は尾を引き、ライダーの背に大火の壁を残した。それは不転転の意思表示か、あるいは背後にいるマスターへの道を絶つ為か。

どちらにせよ、ライダーはここを死に場所と決めた。

「くたばるまで、戦ってやる……真の英霊の闘争、身をもって味わえ」

彼の松明……あの炎が、橋に立つ者達を覆うのを、アサシンは団地の踊り場で目撃した。アサシンは腕を千切り落とした佐藤から目を離し、遠目に見えるその光景を睨んだ。

「……………」

あの男の最期は、このアサシンの手で……そういった条件でアサシンはアレクシアにライダーの真名を教えたのだが、そんな悠長なことは言っていられないようだ。

しかし、そのこと事態は然程気にしてない。相手はあのイオラオスだ、マスターの策謀は認める所だが、魔女の掌で踊らされるほどあの血筋の戦士は容易くはない。問題はあの男が、マスターを返り討ちにしかねない点だ。

今すぐに戻るべきか、しかし……。と、アサシンは数秒、次の一手を逡巡する。

「……アアアアッガアアッ!!」

その隙を、瀕死の雌獅子が突いてきた。壁に寄りかかるようにして倒れていた佐藤が息を吹き替えし、咆哮と共にアサシンへと殴り掛かった。

しかし、アサシンは振り返るまでもなくそれを躲す。元より、アサシンの視野は人のそれよりずっと広い。背後からの奇襲でも、ましてや素人の拳など、当たるはずもない。

それでもアサシンは、勢い余って柵に体を打ちつける佐藤に、敬意を示したくなかった。例え敵であっても、その不屈の心には称賛すべきものがある。しかし、この鋏を見られた以上、彼女には消えてもらわねばならない。

せめて、一瞬で首を飛ばしてやろう。と、アサシンは鋏を構えた。その時だった。

「——ッ!?!」

アサシンは後方に飛び下がる。直後、アサシンが先程立っていた場所へ、外から銃弾が飛び込み着弾する。そして階段に背を向けたまま駆け上るアサシンを追って、何発もの銃弾が階段を碎き割っていく。

狙撃、それも魔力を纏った銃弾での……アサシンがその襲撃に手を焼いていると、佐藤は息を荒げながら柵に残った右腕を掛け、身を乗り出した。

とうに意識は曖昧だろう。故にそれは狙撃を見てからでなく、殴りかかった時からの算段か。その足掻きとタイミングの合った狙撃に、

アサシンは心の中で毒づき、銃弾を銃で弾きながら階段から飛び、佐藤へと強引に迫った。

そして銃は、佐藤が飛び降りた後の柵をひしゃげさせた。

飛び降りたか。アサシンは身を乗り出し、落下した佐藤を追う。佐藤は落下の勢いに抗いもせず、手足を振り乱して落下していった。

佐藤が地面に激突するのに、二秒もかからない。そして落下の衝撃は、如何に丈夫な佐藤とはいえ死ぬには充分であろう。

しかし、そうはならなかった。佐藤が地面に落ちるより早く、横合いから矢のように飛んできたランサーが彼女を抱き止めたからだ。

「…………ツ」

しくじった。そう悟ったアサシンは、その失態を引き起こした一番の妨害者である銃撃が飛んできた方角へと視線を集中させた。

そして一瞬だが……見つける。団地に面する、橋に繋がる大通りを超えた先の建物の、更に向こう。この団地より高い雑居ビルの屋上から、今まさに撤収をしようとする何者かの背中と、看板の電光で煌めいたりボルバーを。

その者はすでに建物内へと駆け込んでしまい、何者であったかは分からない。しかし、拳銃で二〇〇メートル近い距離から正確に狙ってくる以上、只者ではないだろう。

「…………タイミングから見ると、ランサーの関係者か」

下ではランサーとそのマスターが、佐藤の看護に当たっている。あの拳銃の使い手が何者にせよ、このまま佐藤を逃がす訳にはいかない。

ランサーとの戦闘は……避けられないだろう。アサシンは意を決すると、静かに柵から飛び降りた。

読水達がライダー達との同盟関係になると決めたのは、佐藤の腕が落とされる数時間前だった。

アダムからの定期連絡が途絶えた読水は、明け方より自分の窮地に閉口していた。アダムは容姿をゴレムによって自在に変える、本人との直接の接触をしていない読水にとって、連絡が途絶えることは

バックアップを行ってくれる協力者を失い孤立したことに等しい。

彼女は一流だ。しかし事は聖杯戦争、もしものことも考えられる。そして最悪のケースを考慮するなら、自分はどう動けば良いのか。読水達は一日のうちに三度も拠点を変えながら、次の一手を話し合った。

ランサーはライダー達との同盟を結ぶことを提案し、読水はそれを拒み続けていた。読水はライダーのマスター、佐藤が聖杯戦争とは一切の関わりのない学生であったこと、そして、それが他者から見た見識であることを大きなリスクと考えているのだ。

サーヴァントが誰であれ、そのマスターが素人と悟られれば敵はそこを弱点と考える。その事実を、多くの亜種聖杯戦争に間接的ながら関わってきた読水は知っている。真名と弱点が露呈されたサーヴァントを倒す……そんな華やかなジャイアント・キリングを狙う以上に、陰湿と言われようと隙の多いマスターを狙う方が手っ取り早い。亜種聖杯戦争が勃発した初期の頃、『暗殺者の春』と呼ばれる程にアサシンクラスによる殺しが行われたのにも、そういった事情がある。

強力であるが隙も多いライダー達と結託すれば、そういった事情に巻き込まれるリスクがある。読水は、それを飲み込めないでいた。

そして、そんな悩みの最中だった。読水達が拠点にしていたマンションのすぐ近く、駅の方で騒ぎが起こった。

それにライダー達が関わっていると確認した読水は、ついに判断を下した。

ランサーは佐藤を宙で受け止め、泥濘んだ芝生を滑ることに着地の衝撃を逃していく。読水は多少遅れながらも、二人のもとへ辿り着き佐藤の容態を知った。

「……クソツ、手酷くやられてるな」

そして、令呪を奪われている。と、読水は心の中で毒づいた。マスターとサーヴァントとの契約は、令呪を失っても切れることはない。しかし奪われた令呪で自害を強制されれば、それでライダーは脱落する。それに瀕死に追い込まれた佐藤は、ライダーへの魔力供給を満足

に行えてないはずだ。

「クソ、クソ、クソ！ ……このつ、馬鹿野郎が……ッ」

できれば令呪を回収したい。そうすべきだろう。

だが、佐藤の命が最優先だ。この戦争は読水の、十年來の戦いだ。今になって魔術師ですらない女子高生の命を費やすことなど、これ以上この戦いに犠牲を払うことなど、あつてはならない。

読水は齒軋りしながら、左腕の切断面より少し上、腕の内側にある動脈を押さえて止血に掛かった。

「ランサー、ここで応急処置をする！ お前は周囲を警戒しろッ！」

「……はい」

ランサーは齒切れの悪い、押し殺した声でそう応え、佐藤を読水へと渡した。

そして。

「……相分かりました、マスター！」

と、叫ぶと同時にランサーは槍を実体化させ、振り返ることなく槍の石突……槍の矛とは逆の部分をついに突き上げた。

そして、突き上げられた石突から、風に舞う布切れのように逃れた何か、ランサーの槍の柄を蹴って地面に転がった。それは初め、ただのボロ布のように見えたが……。

「アサシン……ッ!!」

恐らく、上から落ちた佐藤を追って落下してきたのだろう。ついで読水達を狙ったようだが、ランサーはそれを見抜き奇襲を不意打ちで返した。

しかし奇襲を失敗したアサシンは、逃げることなく、未だ低い姿勢のままジツとこちらを見ている。セイバーのような豪胆さも、バーサーカーのような狂暴性も垣間見えない、無機質な視線、読水には、それが堪らなく不気味に思えた。

「……マスター、手練です。彼女のことを頼みますッ！」

ランサーは油断なく槍を構えながら立ち上がると、気合の一声と共に猛然とアサシンに掛かっていった。

読水はその様子を見ながら、鞆から鉄製の水筒を取り出した

水筒の中身はヤシ酒、ヤシの樹液を醗酵させて作った白い醸造酒だ。アフリカで手に入れたものだが、特殊な製法で作られたこの酒にはアフリカの大地から吸い上げたマナが混ざっている。読水は魔力の補充として使っていたが（とはいえ自身のどころか地面から吸い上げた魔力なので、目眩等の副作用はあるが）、譲ってくれたシャーマンの話によれば、水虫から怪我の治癒、解呪にも効果があるらしい。今まで致命的な怪我を負ったことがなく治癒目的で使ったことはなかったが、慣れない治癒魔術の補填には十分な効果があるはずだ。そう信じ、読水は酒を一度地面に撒いてから、ゆっくりと傷口に流し始める。そして、慣れない治癒魔術の詠唱を始めた。

隠すことで敵を殺し得る暗器と、長さでもって戦いを制す槍。誰にも気づかれぬことを旨とする者と、真つ先に前に立つことを旨とする者。

アサシンと、ランサーと……その戦い方は、一見酷く一方的なもののように思えた。

「オオオオオオアツ!!」

気迫に満ちた声を上げながら、ランサーは猛然と槍を奮う。対するアサシンはそれを躲しながらも、位置を左右へ素早く移り槍の先から逃れようとする。

一見、ランサーはアサシンへ攻め立てているように見える。しかしこれが敵に攻めの一手を出させない為の、派手なだけの猛攻だとランサーは理解していた。声も動きも大きく、しかし内心では張り詰めるような警戒心をもってランサーは槍を振るっているのだ。

だが、それにアサシンは惑わされなかった。

上下に狙いを移し、間合いを変え、時には槍の間合いを捨てて懐へ飛び込む……ランサーは間を与えず様々な手でアサシンに掛かるも、アサシンは得物を見せずにそれを躲し、付かず離れず、虎視眈々と背後にいる二人を狙っている。

一方は防衛の為、一方は王手の為、狙いの違いは戦いへの集中を削ぎ、途切れた集中は背後の二人の死を招く。そしてその認識が、更に

ランサーを焦らせる。

おそらく、互いに互いを討とうと戦えば、まだ優位に立てたであろうとランサーは思う。だが、そういった真つ向勝負にアサシンは持ち込まない、だからこそアサシンは他の英霊に勝ち得るのだ。

「……………ッ！」

いつそ、全てを次の一撃に賭けようか。そんな誘惑が、ランサーの武人としての心をくすぐる。しかしそれを律して、ランサーは辛抱強く見せかけの猛攻に徹した。少なくとも、そうしていればマスターが佐藤を救ってくれる。その一心が、ランサーの克己心をより強くしていた。

そしてその粘り強さは、功を奏した。

再び、橋の方で大きな爆音が空気を震わせた。その空気の震えに、アサシンは初めて意識を逸らした。

チャンスか。と、ランサーは思わず前に出そうになったが、アサシンのこれまでの動きに只ならないものを感じ、踏み止まる。

アサシンは数秒、爆発の方へと顔を向けていた。そして。

「……………チッ」

と、舌打ちをした。

やはり、誘っていたか。ランサーは肝を冷やししながら、槍を構え直す。

その様子をジッとアサシンは見ていたが、やがてバツと後方に跳ね跳び、ランサーとの距離を取り始めた。

このまま逃げる気か。ランサーはそれを追うも、進行方向に背を向けたままのアサシンはそれでも素早く、槍が届くまでに追いつくことはできずにいた。

アサシンは、滑るように植木の裏へと回った。そして身を隠しながら、信じられない勢いで幹から枝の方へと駆け上っていく。そんな気配をランサーは察した。

このまま真上からランサーに飛びかかる、あるいは飛び越えてマスター達を狙うのか。と、ランサーは気配の移動に反応し、足を止めて右手を槍から手放した。上空から来るなら、印を結び付近の花壇にあ

るレンガをぶつけようと考えたのだ。

しかし、対応は徒労に終わった。身構えるランサーの予測に反して、アサシンは幹の陰から下がるように姿を見せた。幹を登ってなど、いかなかったのだ。

「……………ッ!?!」

気配を読み違えた、いや、これがあのアサシンの能力か。と、ランサーは印を結んでいた右手を槍の柄に移す。しかし、そんなランサーを嘲笑うかのように、アサシンはそのままランサー達から逃げるように距離を置き、そのまま霊体化していった。

撤退か、そう思わせての奇襲か。ランサーは油断なく槍を中段に構え、周囲の気配を探る。

「ランサー、準備ができた! ……ここから逃げるぞ」

と、読水の声にハツと顔を上げ、それからアサシンのいた方を悔しげに睨んだが。

「……………承知しました、すぐに!」

そう応え、踵を返して二人のもとへ戻っていった。

こうしてランサーと読水は、向こうから届く壮大な戦いの残響を背に、この場を後にしていった。

その頃、崩落した橋の上ではライダーとアレクシアが最後の戦いに臨んでいた。

ライダー——彼は自身の肉体を構成させている魔力を糧に、宝具『消されぬ功績』レルネー・フロガを開放している。そして短剣とヒュドラの再生を封じた松明をもってアレクシアを死の世界へ追い込んでいく。

アレクシア——彼女は二つ目の令呪を消費し、『六十三の侯爵——瞑目』と詠唱して防衛術を構築し、ライダーの特攻に耐えていた。同時に右腕から溢れ出る魔力の波動でもって、ライダーの消滅を早めていく。

消える寸前の炎の瞬きのような激しきを持つ、ライダーの猛攻。悪魔の力で戦うかつてのアレクシアであれば、数秒も保たなかっただろう。これに耐えることができるのは、必要だと躊躇いなく使った

魔神柱の力によるところが多い。アレクシアの身を包むこの魔神柱の防衛用の魔力がなければ、今頃は消し炭になっていたはずだ。

だが、それでも尚、拮抗はしていなかった。

「ガアアアアアアアアツ!!」

鬼の形相で松明を振るい、爆発的に吹き上げる炎をアレクシアに叩きつける。アレクシアはそれを、魔力の障壁で受け止めた。

しかし、完全に受け切れてはいなかった。魔力で何十にも織り込まれた障壁は、チリチリと編み目が焼かれ、複雑且つ強靱な魔術的な構築を焼き崩されていく。

物質的な炎によるものではない。かといって、魔術的な現象とも異なる。

そう、これこそが宝具『消されぬ功績』^{レルネー・フロガ}の真価。ヒュドラの不死性を殺したその神秘の火は、魔術回路を焼き潰すことで伝説を体現させている。故に魔術師の魔術や、発動状態にない宝具でさえ焼き塞ぐ。

この炎には、圧倒的な魔力で作られた障壁も、膨大に積み上げられた紙切れ同然だ。術者のもとへ辿り着くのは、時間の問題だろう。

だが、ライダーはその時間まで待つてはいられない。

彼は炎の中へ飛び込み、逆手に持った短剣をアレクシアの障壁に突き立てた。

手応えがあった。見れば短剣の先端は障壁の内側へと入り込み、魔力の向こうで驚愕に目を見開くアレクシアの顔が伺えた。

間髪入れずライダーは腰を捻り、魔力障壁を横に引き裂いた。それで作られた穴は小さいが、魔力障壁に確かな破れ目ができた。

後は、ブチ込むだけだ。

ライダーは咆哮を上げながら、宝具『消されぬ功績』^{レルネー・フロガ}をアレクシアへと叩きつけた。急ぎ障壁を修復したアレクシアだったが、その烈火の奔流に障壁は壊され、アレクシアは吹き荒れた炎の旋風に体を飛ばされ、橋の外、川の中へと落とされた。

その姿を確認しながら、ライダーは乱れた呼吸に苦しみ膝を折った。顔の半分を濡らしていた血は炎に炙られ、蒸気となっていく。同時に手にしていた松明が霧散し、自身の体もまたこの世界から消滅し

ていつているのを感じた。

時間がない、魔力が尽きかけているのだ。ライダーは川の中で未だ動けないアレクシアを見て、ここが最後のチャンスだと確信した。

「グッ……オオオオアアアアアア!!」

ライダーは短剣を放り捨てるや否や、傷ついていた頭部、こめかみへと手を突き入れた。そして頭部にある霊核を、絶叫と上げながら引き千切った。

ライダーにはすでに宝具を使用するだけの魔力は残されていない。また、このまま消耗した体を酷使したところで霊核は保たなくなる。ならば、霊核そのものを使って、宝具を絞り出すしかない。

頭部から引き抜かれながら形を変えた霊核は、先端が紫色に塗れた槍の姿を取る。

それは、かの大英雄と同時期にイオラオスが得たもので、そして最後まで使わなかったが故に記録にさえ残らなかった切り札。

とある怪物の血により取り出され、数々の英雄や神を殺した必殺の毒。その宝具の名は……。

「宝具——『ヒュドラー・テイリテイリオヘレクレス殺し』……ッ!」

ライダーは立ち上がり、狙いを定める。狙うは川の真ん中で呻いているアレクシアの、あの異形の右腕。当たれば殺せるのであれば、命中後の威力より狙い打つことのみ集中を置くべきだろう。

ライダーは痛みに荒れる意識を研ぎ澄ませ、そして命中への確信を得る。彼は咆哮と共に体を大きく開き、投擲の構えを取った。

そこで、彼の進撃は終わった。

ドスツ。と、ライダーの体が衝撃で揺れ、途端にライダーの体から、振り絞った最期の力が抜け落ちていく。

見れば、自分の胸から二本の……いや、一対の鋏が生えている。

そうか。と、ライダーは確信し、背後で自分を串刺しにしたアサシンを見つめる。

「てめえ……は……」

「その毒で、我がマスターを殺すか……イオラオス」

アサシンは、これまでとは打って変わり感情の籠った声で、ライ

ダーに言った。

「それは、我が友の力だ。彼を死に追いやった貴様が、今度はそれがマスターを討つかイオラオス……ッ！」

「てめえは……あの時の……」

「貴様にそれを使う資格はないッ！」

アサシンはそう叫ぶと、ライダーの胸に残された最後の霊核をズタズタに引き裂きながら鋏を引き抜いた。ライダーはその拍子に、どつと仰向けに引き倒された。

おびただしい血が、自分の体から抜け出ていくのを感じた。

瞳に映る空は暗く、掠れる視界とは裏腹に雨音だけが嫌に耳につく。

ここで終わりか。ライダーは自分が殺されたことを、何千年も掛けた仇討ちによって討たれたことを確信した。

しかしそれ自体には、今更悲観的な感情を抱いたりはしない。長く英傑達と肩を並べてきた身だ、こういう最後は何度も見てきた。

ただ、心残りがある。

「……今一度、神々に願う」

そう告げたライダーに反応し、アサシンは身構えた、しかしそれに構うことなく、ライダーは虚ろなままに言葉を紡いでいく。

「英雄の背は空に瞬く星の如し。それを見上げる若者は育まれ、次代の英雄となる。願わくば、彼の背中に焦がれ従った、あの青春の力を……再び」

ライダーはそつと地面に取り落とした槍に触れる。すると、槍は黒い靄となり、宙へ広がり霧散していく。

「……………」

アサシンはその様子を黙ってみていたが、ゆつくりと構えを解き、ライダーの最期を看取った。

ありがたい。と、ライダーは微笑んだ。これで英霊として、できる限りのことはした。仇として自分を討った彼の分も含めて、この仕事は後の者に任せよう。

佐藤もことも、心配ない。彼女はまだ生きています。生きていればきっと、彼女はこの敗北から学び、強く、苛烈に生きられる。そこに幸せがあれば、尚のこと良い。

そして、願わくば……。と、若獅子の導き手は現世からゆつくりと消滅していきながら、願う。

願わくば、彼女の血に流れる獅子の意思、あの大英雄ヘラクレスの意思を未来に繋いで欲しい。

それが叶えてくれるのであれば、かつてその意思を受け継いだ若獅子らを導いてきた者としては、もはや何も言うことはないだろう。

そして。穏やかな祈りと共に、騎兵のサーヴァントの霊基は消滅した。名残めいた黒靄もまた跡形もなく、宙は曇天に包まれ続ける。

これより聖杯戦争は新たな段階ステージに移る。準備期間は終わり、各々が磨き上げた刃、煮詰められた毒が飛び交う闘争の夜。

その中心となるのは若獅子の導き手イオラオスを斃し、もはや魔人と呼ぶべき領域に踏み込んだ魔術使い、アレクシア・ブロッケン。これより数日間、いやがおうにも彼女にかき乱される盤面に無関係でいられる陣営は存在しない。

遠い空で稲妻が鳴り響いた。雨は、未だ止まない。

第十四話 『ダーティプレー』

敗走者は他者を恐れる。視線を恐れて、光から逃れる。

あらゆる自己肯定は失われ、荒い息と鼓動だけが残る……それだけが苦しみを伴って、自身がまだ生きていることをようやく認めてくれる。

だが、これは読水にとって初めての感覚ではなかった。

「くそっ……おい佐藤、まだ死ぬんじやあないぞ……ッ！」

読水はランサーと共に隠れ家の一つ、郊外の古い一軒家へと逃げ込み、瀕死の佐藤を床に寝かせた。そして鞆を開くと、治癒魔術に使えそうな物を片っ端にそばに並べていく

「薬の類は、ある。後は傷口を……ランサー！ 包帯かシーツか、何でも良いから清潔な布を探してこい！」

「承知しました！」

そう応え部屋を飛び出すランサーを尻目に、読水は寝かせた佐藤を見下ろした。切り下ろされた左腕の傷口は止血できているが、血の流失と、令呪を引き千切られたことによる影響は着実に彼女の体を蝕んでいると見て取れた。

「……ちくしょう！」

長丁場になりそうだと、そう判断した読水は鞆から何かを掴むと、玄関へとノシノシと歩いていった。

そして、手にした物に視線を落とす。それは、装飾豊かな西洋式の古い鍵だった。

『黄金の工房鍵』——読水が持つ魔術礼装の中で、最も高価な代物だ。どんな鍵穴にも差し込めるこの鍵は昔、ヨーロッパを彷徨った錬金術師が作ったものだという。詠唱と共にひねることで、その建物、室内は魔術師の工房のように魔術的な防衛術式が張り巡らされ、外部からの侵入を拒むという。

即席で結界を張り巡らす魔術礼装、その点だけを抜き出せば見栄え

が良い。しかし西洋錬金術で構成された大味な魔術式は、魔術を心得る者には夜に輝くネオンのように見えるだろう……防衛と引き換えに隠密性を廃する、これはそういった魔術礼装なのだ。

できれば最後まで使いたくはなかった。しかし、アサシンをサーヴァントに持つマスターなら、暗殺者の姿を見たかも知れない佐藤を見過ごすはずはない。

せめて『摩利支天の偽装符』さえあれば……、そう思わずにはいられない。貼り付けた対象の存在感を薄くするあの札さえあれば、もつと密かに事を進められただろう。しかし、魔術礼装は代行者と接触した際に落としてしまった。

「ああ、そう……クソつたれ、これしかない。これがベストだ」

読水は一人そう零しながらゆつくりと鍵を摘んだ指に力を入れ、鍵を横に回していった。

これでもう、次の戦いからは逃げられない。そう、覚悟しながら。

「霊器盤によって、ライダーの脱落が確認された」

「……いつ、ですか？」

「半日程、前になる。アレクシア・ブロッケン、奴の仕業だ」

「アサシンのマスター……その、ライダーのマスターは？」

「マスターは重傷を負ったが、駆けつけたランサー達に救出された」

「……二陣営が同盟を？」

「いや、人道的なものかも知れない。それに仮に同盟があったとしても、それも昨夜に破綻したことになる」

「では……今もライダーのマスターは、運び屋が？」

「逃げ込んだ場所も分かっている。……彼とて、負傷したマスターを連れている今ならば君から逃げ切れはしないだろう」

「……はい。例の物は必ず回収します」

「そうしてくれ」

「……ライダーのマスターは、どうしましょう？」

「……好きにすれば良い。最優先は、彼が持っている破片だ」

そう言うと、電話の相手——鏡宮は通話を切った。

「……………」

レオポルディーネは通話を終えたケータイを一瞥し、時刻が午前四時であることを確認する。

「……………んんん……………」

当然寝ていた、寝間着姿のままだった。

「んだあああッ！ もおおおう……………ッ!!」

彼女はそう叫んでソファアーへとケータイを投げつけると、枕に顔をうずめ怒りの声を漏らした。

聖杯戦争開始により皆が屋敷から避難する中、使用人の轟木は令嬢レオポルディーネの世話役として屋敷に残った。

彼は夜間警備に勤めていると、令嬢の部屋から叫び声を聞いた。

轟木は廊下をダイナミックに走り、レオポルディーネの部屋へと駆けつける。しかし、部屋の前にはバーサーカーが立っていた。

「……………」

何かあったのか。と、轟木はジッとバーサーカーを見る。未だレオポルディーネは扉の向こうで、くぐもった叫びを上げている。

バーサーカーは轟木の無言の訴えに、迷ったように視線を泳がす。しかし面倒に思ったのか腕を組み、シツシツと手で追い払うようなサインを送った。

「……………」

問題はなさそうだ。

轟木はバーサーカーに会釈し、黙って詰所へと戻る。

一般庶民としてこの日坂で生まれ育った轟木には、ミローネ家の没落や再興への意地に関して理解しているとは思っていない。しかし、お嬢様をやるのも楽しやあない。というのは、何となく分かったつもりだ。

そんな楽しやあないお嬢様の為に、せめて温かなエスプレッソを淹れてあげよう。

レオポルディーネとの通話を終えた鏡宮は椅子の背もたれを使っ

て仰け反り、目蓋を指圧した。

「……あの娘に、アサシンのマスターについては伝えなくて良いのか？」

「そう言うのは、窓辺に腰掛けたアーチャーだ。」

「あの状態は、ただの魔術師とは言い難いだろう？」

「それは、彼女の仕事には何も関係のない情報だ」

それに……。と、鏡宮は上体を起こしながら続ける。

「それを伝えれば、彼女は当然慎重になる……。最優先すべきは欠片だ。アレさえ手中になれば、最後に笑うのは我々となる」

「……フン」

断固とした鏡宮の言葉に、アーチャーはつまらなそうにそっぽを向く。

「それで、鏡宮……企みごとは良いが、俺の出番はまだなのか？　こうして待つのも、いい加減飽きてきた」

アーチャーはそう言うと、ギリリと鏡宮を睨んだ。その鋭くも奥底に粘つくような黒さが見える視線に、鏡宮は疲れたような視線を合わせた。

アーチャーというクラスは、固有の能力として『単独行動』というスキルを持つ。マスターが不在であっても行動ができる、というこのスキルは、マスターという楔なしでは現世に留まれない英霊の抑制を否定していると言える。

故に、『単独行動』というスキルは裏切りの許可証だ。そう、鏡宮は考える。

個々の英霊がどのような人間性を持っていようと、その気になればマスターなしでも戦える、という状況は英霊の忠誠に邪な考えを抱かせるものだ。

このアーチャーならば尚更だ。だからこそ、彼の牙がこちらに向けられる前に、適当な餌を与える必要がある。

「……いや、そろそろ君にも働いてもらおうだろう」

と、鏡宮は机に設置されたノートパソコンを操作し、動画を再生させた。

動画は監視カメラから撮影されたと思わしき映像で、ライダーとアサシンのマスター——アレクシアが殺し合っている姿が映っている。「ライダーは良い仕事をしてくれた。彼の最期の抵抗は、アサシンの真名をこうして私に伝えてくれた」

鏡宮はそう言うのと、陥落した橋でライダーがアサシンに倒されたところで映像を止めた。そこには、ライダーの胸を貫いたもの……アサシンの腕から生える鍔が、おぼろげながらも捉えられていた。

「……本当に、良い仕事をしてくれた」

鏡宮は、繰り返しそう呟いた。彼は口元を隠すように頬杖をついていたが、その頬は隠せぬほどに釣り上がっていた。

聖杯戦争の序盤は、敵の弱点や真名を探るべく尻尾を追いかけ合う……魔術師達による諜報合戦だ。

魔女はその段階を終わらせたが、手の内を晒した。

「アサシンの真名が割れたのは、あの魔女も理解しているだろう。奴は勝負を急ぐ……無価値となったアサシンを使い潰す気で、マスター殺しを狙ってくるはずだ」

そして彼女は恐らく、私を狙う。

そう、鏡宮は告げた。その言葉にアーチャーは、はばかりことなく冷笑を浮かべる。

「ここからが本番だぞ。アーチャー」

鏡宮は机に置かれていたケータイを手にした。そして再び、どこかへと電話を掛ける。

「使える手は全て使う……綺麗事はなしだ」

そう言っただけは、ケータイを耳元へ寄せる。そんな彼の、そのどこを見ても知れぬ両眼は窓辺に腰掛けるアーチャーと同様、鋭さの奥底に粘ついた黒さを秘めていた。

昨夜から降る雨は、昼になっても小雨となって降り続けていた。

シユウジは昨夜のうちに起きた戦いの跡地へと赴いていた。彼は傘を片手に、ケータイで監督役であるマリオに状況を報告していた。

「はい、はい……そうです、今までの魔術とは毛色が違いすぎます。そ

の力も……いえ、詳細は分かりかねます」

シユウジはそう伝えながら、チラリと崩落した橋を見る。橋の手前で、泥塗れになったバイクがレッカー車に運ばれているのが見える。そばで警察相手に騒ぐ男の様子から見るに、盗まれたものが偶々この崩落に巻き込まれたらしい。

「……先生、この一件の被害はどれくらいになるのでしょうか？」

「……今、部下に調べさせている。ただすでに死者は三名、確認されている」

「そうですか……この一件は、どのように……？」

「まだ確定していないが、橋を通っていたタンクローリーの爆破事故という形で進めている」

「なるほど」

慣れたものだ。そうシユウジは、心の中で呟いた。きつと十年前、シユウジ自身の身に起こった事故も、こうして片付けられていったのだろう。

昨夜のうちに起きた、サーヴァント同士の激突。シユウジが現場へと駆けつけた時には、全てが終わった直後のことだった。

落ちた橋、切り裂かれ溶けたアスファルト、焼け跡を残す土手の枯れ草……歴史に名を刻む者達の戦いだ、こういう爪痕ができることは予測されて然るべきなのだろう。

しかし……。と、シユウジは道の端に鑑識が残したプレートを見る。そこは、橋からの余波によってビルの壁面が砕け、破片が通行人に当たったという事故……その検証現場だ。

「…………ツ」

シユウジは歯噛みした。

セイバー曰く、騎士道とは戦いを『何でもあり』にさせない為に共有した戒律であるという。

魔術師にも、似た戒律がある。神秘の秘匿——如何なる立場の魔術師であれ、根源へ至る為に一般人に魔術を知られぬようにするという不文律。

シユウジには根源への渴望など理解できない。しかし……これは

違う、違うと分かる。これは魔術師のやり方じゃあない。

そこが……この手段を選ばない誇りのなさが、気に入らないのだ。

「……代行者、シユウジ・アルバーニ。任務内容の更新だ」

「……はい」

マリオはシユウジに言い渡したのは、この被害を起こした主犯格、アサシンのマスター——アレクシア・ブロッケン抹殺であった。

彼女の名は元々、マリオから与えられた任務の一つである、聖杯を持つに相応しくないと判断された者達のリストにも挙がっていた。アトラス院に忍び込んだ祖母と、時計塔の魔術師を悪魔への生贄に捧げた母を持ち、そして当代の彼女はライダー陣営を落とす為にここまでのことをやってのける極悪人だ。

「魔女の抹殺……これは読水竜也を追うこと以上に、優先されるのですか？」

そうだ。と、マリオは間を置かずに答えた。

「すでにリストに載っていた多くは脱落している。連絡が取れるマスターにも、魔女のことについては通知してある。君の仕事を邪魔する者は、誰もいないだろう」

「……」

マリオの説明を、シユウジはほとんど聞いてはいなかった。ただ固く目を閉じ、首に掛けた十字架に手を触れている。そうして、自身の倫理や信仰心と、この任務とを照らし合わせていた。

確信ない故にマリオには伝えなかったが、シユウジは感じ取っていた。あの橋を崩落させたであろう力の根底には、世界を否定するような悍ましい何かがあることを。そして、ならば、アレクシア・ブロッケンはその聖杯戦争に勝つ為に発現させたのだということ。

……許されるべきことではない。

答えは得た。

「……謹んで、お受けします」

シユウジはゆっくりと目を開く。思慮に沈めていたシユウジの感覚は浮かび上がり、傘の生地を叩く雨音やマリオの声、周囲の景色が、以前のそれよりも遥かにクリアに感じる。

「魔女、アレクシア・ブロッケン。神に代行し、私が奴を討ちます」
それは、彼が日坂へ来て初めて口から出てきた、代行者としての言葉だった。

ミア・ブロッケン、郊外の工事現場にあつたプレハブへと向かった。そこでは、アレクシアが静かに身を潜ませている。

昨夜の戦闘……危うく女子高生に返り討ちに会うところだったが、結果としてはライダーを討ち取った快進撃。ミアは最初、そう思い浮かれきっていた。

しかし、現実はそう甘くはなかった。

ミアが扉を開けても、アレクシアは身じろぎもしなかった。ただネグリジェだけを着て、隅の暗がり座りシートを頭から被っている。

「照明は付けないで」

ボソリと、アレクシアは言った。

「こいつが、目を覚ます」

「……はあ」

ミアはスイッチへと伸ばしていた手を引っ込めた。そして、満身創痕になっているアレクシアを見下ろす。

そう、満身創痕なのだ。右腕と右頬にはライダーの手による火傷を負い、ガーゼや包帯の下に隠された皮膚は爛れている。治療魔術での治療を行えば良いのだが、ミアは魔女であつて魔術師ではない、話に聞いたサーヴァントの魔力供給の手伝いは愚か、初歩的な治療魔術さえ使つてやれない。

加えて、アレクシアの体内には何か異変が起きている。証拠こそないが、ミアはそう思っている。感じ取っているのだ。

「あの死霊術師はどうなった？」

「あ、ええつと……駄目っスわ」

アレクシアの言葉に我に返ったミアは、そう答えた。

「まだ生きてますが……焼肉の、ほら、網の下に落ちたホルモンみたいになつてますんで……戦わせるのは、無理じゃないかなーって」
「……そう」

「……やっぱアレですねえ！　そもそもが死体じゃないですか、キモいくらいに頑丈というか、しぶと過ぎいって感じで……」

「なら、放置所に放り込みなさい」

アレクシアの反応は、前以上に薄く冷たい。ホルモンのくだりは分かり難かったのか。そう考え取り繕うミアに、アレクシアは指示を下した。

「あの生への執着と死霊術師としての腕があれば、復活するでしょう」
運が良ければね。と、アレクシアは事もなげにそう言う。放置所とは、これまでに殺した魔術師達の死体を投げ込んでいる廃倉庫のことだ。

いよいよもって、扱いが雑になってきたな。カワイソ……。と、ミアはあの死霊術師に対し少しだけ同情してしまう。

「……アサシン」

アレクシアの呼び声に応じ、アサシンはミアの横で実体化する。思わず身を仰け反らせたミアをよそに、アレクシアとアサシンは対面する。

「アサシン……約束通り、ライダーはお前の手で始末されたわ」

「……はい」

アサシンは掠れた声で応える。しかしミアは、アレクシアが彼にライダーを討たせる気など然程なかったことを知っている。しかし当然、それはアサシンもそれは理解しているのだろうか……。

「ただ、あそこには監視カメラがあった。お前が姿を見せ、ライダーを殺したことで……恐らく、真名が鏡宮悟にバレてしまった」

「……」

「あの時、お前がいなければどうなっていたか……そんな仮定の話はしたくはないし、感謝する気もない。問題はアサシン、お前の暗殺者としての価値は、時間が経てば経つほどになくなっていくということよ」

そう喋りながら、アレクシアは頭から被っていたシートを下へと払い落とす。

シートによって隠されていたアレクシアの右腕は、すでに人間のも

のではなかった。

火傷の傷は、それを覆うように肉が膨れている。そして幾つもある肉の裂け目には、人間のものとは明らかに異なる瞳が覗いており、まどろむように焦点が合わないまま空を見つめていた。

思わず、小さな悲鳴がミアの口から漏れる。対するアサシンはたじろぐ様子もなく、その腕をジッと睨んでいた。

「ライダーとの戦いで使った令呪は、二画」

よほど体調が悪いのか、アレクシアは顔に玉のような汗を流しながらも、悪魔のような笑みを浮かべた。

「二画、予定よりも多く使ってしまったけど……それでも、最後の一画が残ったのが幸いだっただけ」

アレクシアはそう言うと、残された令呪が宿る右腕をアサシンへと突き出した。

「アサシン……復讐を終えたばかりで悪いが、お前にはここらで死んでもらう」

第十五話 『師の流儀、弟子の流儀』

読水は眠った佐藤をそのままに、疲れ切った足取りで部屋を後にした。

疲れた。という言葉は何度も使ったことはあるが、人の生き死にを委ねられるというのは、こつも疲れるものなのか。読水は医療に関わるような人種に心の底から畏怖した。本来は尊敬こそしたいが、今の読水には異星人か何かにしかな思えない。

「ランサー、異常は？」

「今のところは……」

と、ランサーは窓から外を見ながら言った。このアジトに逃げ延び、『黄金の工房鍵』を使ってから四時間。追撃があるものと思つたが、未だ何も起きてはいない。

アサシン達の目的はライダーのみだったのか。あるいは捕捉はできているからと、虎視眈々と隙を伺っているのかも知れない。いずれにせよ、警戒を解ける状態でないのは確かだろう。

「佐藤の容態は……まあ、安定したと言つて良いだろ」

ウズウズとこちらを振り返るランサーに気づき、読水はそう答えた。その言葉に、ランサーの顔は僅かに緩み、フウと息を吐いた。

「ただ、ここから動かすのは無理だな。置いてかない限りは、場所がバレてるのを承知で籠城するしかない」

「……マスター、お任せください」

安心させる為だろう。ランサーは笑みを浮かべて頷いた。

「このランサー、相手があのセイバーであっても、必ずやお守り致しますよ」

「……ん。ああ、頼んだぞ」

読水は何とかそれだけ言うと、休むとランサーに伝え、廊下の方へと向かった。

人道から外れた者が潜む、この過酷な世界——俺はこの世界で、一人では生きていけない。そう読水は、心のうちに留めている。

そう悟ったのは、一体いつからだだろうか。はつきりと自覚したのは、最近になってからのようにも思える。

十年前、家族と将来を失った。その時は、あの男——あまい ようじ雨井陽二に助けられた。

五年前、あの男の弟子という立場も失った。それからは運び屋として、一人で生きてきたつもりだった。

とんだ思い違いだったと、今となっては思う。読水はいつだって、一人で困難を切り抜けはできなかった。

思えば、あの時だつてそうだ。

四年前。ギリシャ、シロス島にて行われるはずだった亜種聖杯戦争に運び屋として関わった、あの暑い日も……。

四年前——当時、読水は聖杯戦争に参加するレナードという男にスクラディオ・ファミリーからの荷物を届ける仕事を請け負っていた。三日前から現地に入り、エルムポリという街で取引の日を待った。そして当日、昼食時に観光客向けのレストランでレナードと落ち合った。

レナードは白髪が目立つ、中年のイギリス人だった。彼は時間ぴつたり横の席に座り、読水に親しい友人と再開したように弟子の近況や、最近あった出来事を話し始めた。

「……それで、彼らの贈り物はどんなものかな？」

レナードは弟子の不出来を一通り愚痴に出した後、空のカップに残ったコーヒーの香りを楽しみながらそう切り出した。

正直なところ、さつさと仕事を済ませたかった読水は、黙って鞆から油紙で包装された小包を鞆から取り出し、レナードの前に置いた。

「……素晴らしい」

彼は小包の上に手を置き、満足気に笑みを浮かべた。

「太陽に溶け、エーゲ海に落ちた蠟の翼……その一部が今、エーゲ海に帰ってきた」

「……約束のものは渡した」

読水はそう言い、鞆を閉めてケータイで時刻を確認した。

「後の連絡は、ファミリーの人間とやってくれ」

「お、おい君。ちよつと待て」

それだけ伝え、席を立つ読水をレナードは呼び止めた。

「……若いなあ。ここは先に私からの方が良い。支払うから、君は一杯やっててくれ」

「……酒は飲めない」

「なら、フラツペを御馳走しよう」

彼はそう言うと、異を唱える暇もなく店主に注文すると、紙幣を机に置き小包をウエストポーチにしまった。

「では少年、良い一日を」

彼はそう告げると、さっさと店を出てってしまった。

「……………」

流星に好意を無下にして、同時に出ることもないだろう。そう判断した読水は、席に座り直した。そして、フラツペと呼んでいたか、初めて聞く飲み物に口をつける。

フラツペ……具体的なことは分からないが、どうやらアイスコーヒーのようだ。喉奥が縮まるほど冷やされた甘い飲み物が、暑い昼時のダルさをリフレッシュさせてくれる。

しかし、そんな憩いの時間は外の異音と悲鳴によって、呆気なく切り裂かれた。

読水は思わず立ち上がり、鞆を引つ掴んで店外へと出た。すると悲鳴の原因が、強い陽光と共に一気に目に飛び込んできた。

それは、テラス席で大の字に倒れたレナードと、その傍らに立つ少年の姿だ。少年はパツと顔を上げて店から飛び出た読水を見る。

そうして……今、まさに目が合った。

少年は指の合間に挟んでいたカードと思しきものを、素早く読水へと向ける。少年がカードを振り上げた瞬間、読水の耳に先ほど聞いた、低く汽笛を鳴らしたような音がした。

魔術師か。それだけを理解すると、読水の右腕は反射的に動いていた。少年の詠唱を終えるより遙かに速く、読水は上着で隠したホルダーからコルト・ローマンを抜き取る。そして少年の腹部へと二発、

腰だめにマグナム弾を撃ち放った。

まだ十歳そこそこの少年の両足は、一発目の銃弾を受けて地面から引き離される。続く二発目の銃弾で、少年は地面へと叩きつけられた。

片手打ちでの発砲で残る、射撃反動の痺れ。潮風に吹かれる硝煙の臭いと、周囲のざわめき声。地面に倒れる、レナードと少年の体。

そして——人を撃った、という事実。

それらの情報は脳内で渾然一体としていて、読水は数秒呆けたように立ち尽くしていた。

「…………ツ」

読水は皮膚を突き破らんばかりに鼓動を打つ心臓に気持ち悪さを覚えながら、レナードを見る。心臓部分から赤黒い血を服に染み込ませている彼は、すでに事切れているように見える。

しかし、よくよく見れば、少年の方は血が溢れ出てない。そればかりか、呻き声さえ漏らしている。

まだ死んではいけないようだ。読水はゆっくりと、少年のそばに近づいた。

少年は読水の接近に気づくと、地面に落としたカードに震えた指を掛けた。その動きは鈍い。少年に当てた、357マグナム弾は防衛魔術を突破できなかつたようだが、しかし、その衝撃は彼の小さな体を麻痺させるのには充分役立ったようだ。

「…………よせよ」

読水は油断なく銃口を向けながら、英語で少年に言った。

「言葉は通じているか？ そいつから手を離せ。お前のターゲットは間違はなく死んでる。俺と刺し違える必要はねえだろ」

「……………」

無論、ここで殺しても問題はなかった。いや、レナードを殺すほどの魔術師であるなら、殺せるうちに殺すべきだったろう。

しかし少年の頭に銃口を合わせながらも、引き金に掛けた読水の指は動くのを拒否していた。

「カードから手を離せ…………殺したくないんだ」

ギリシヤ人ではないであろう、浅黒い肌をしたその少年は、ジツと読水を見ていた。しかし何が可笑しかったのか、口元を綻ばせると、降参というように右手を宙に挙げた。

読水は頷き、足でカードを少年から遠ざける。そして踵を返して、レナードの鞆から先ほど渡した触媒をウエストポーチごと急ぎ回収した。

とりあえず、この場から逃げねば。と、読水は周囲を見回した時だ。読水は白い軽バンからぞろぞろと降りる男達を見つけた。

彼らは私服だが各々に小銃等で武装しており、防弾チョッキも着込んでいる。無論、警察ではないだろう。

まだ仲間がいたのか。背筋に寒気を感じながら、レストランの脇にあつた路地へと駆けた。しかし直後に耳にした銃声を耳にした途端、足に触れるはずの地面の感触がなくなり読水は地面に胸を打ちつけた。

読水は無我夢中で地面を這い、遮蔽のつもりか、プラスチック製の椅子の背後に回った。そして恐る恐る、男達の方を見る。

男達はこちらに銃口を向けてはいなかった。彼らは車の周りに伏せたり屈んだりして、明後日の方に発砲していた。

そんな中、一人が読水の姿を見つけ小銃の銃口を向けてきた。しかし銃声が空高く響き渡ると、男の方が横に倒れ込んだ。

間違いない、誰かが男達を逆に撃っている。そう気づいた読水だったが。

「……アッア、ア？　おい、小僧ッ！　いつまで腰抜かしてんだ！」

と、ハウリングを響かせながら、誰かが叫んだ。機械を通しての音声で分かり辛いのが、男の声だ。

「こっちは残業でやってんだい、いつまでも助けてやれねーぞー！」
その言葉に発破をかけられ、読水は足の自由を取り戻した。どうやら、撃たれたりはしていなかったらしい。

そして、声の主の援護射撃で車に火花が散つたのを見るや否や、読水は低い姿勢のまま路地へと逃げ込んだ。

読水の仕事は、レナードに召喚用の触媒を手渡すことだった。

しかし、レナードが死んだ以上、この触媒は彼の関係者に届ける必要がある。

読水はスクラディオ・ファミリーと連絡し、レナードの仮の工房の場所を把握した。どうやら、彼の弟子が受取人として工房に陣取っているらしい。

読水は魔術礼装『摩利支天の偽装札』で襲撃者との接触を避けつつ、現地へと急ぐ。すでに街は銃撃戦の衝撃で騒然としており、到るところで銃声や爆発音といった戦闘音が聞こえてくる。

以前、聞いたことがある。儀式として完成度の低い亜種聖杯戦争は、英霊本来の実力以上に知名度の補正が重要になるのだという。そうなるとう魔術師達は、その地に所縁ある英霊を先に召喚した者が勝ちといった考えに陥る。

そして、こうなる。読水は歯噛みした。英霊が召喚される以前に行われる、触媒の強奪、召喚儀式の妨害、参加者の暗殺——こうなれば、聖杯戦争は儀式としての体裁を失い、本当の戦争に成り下がる。

レナードから回収した触媒も、この亜種聖杯戦争で使われることはないだろう。そう思いながらも読水は、雑居ビルの階段を上り目的の工房の前に着いた。しかしできることなら、一階ロビーのポストに押し込んで終わりにしたかった。

読水はインターホンを押す前に辿跡術——過去視によって周囲で戦闘があつたかを確認する。緊急の為に五感で知覚するほど細部を見なかったが、どうやらこのビルで数時間のうちに大きな騒動はなかったようだ。

弟子の方は無事だ。読水は胸を撫で下ろし、インターホンを押した。

しかし結局、玄関の扉は開かれなかった。それどころか、深緑色の光弾が扉をブチ破り、マシンガンのように廊下へと撃ち込まれる。

読水は廊下の隅に突っ伏し、鞆で頭を守りながらその暴力の嵐をやり過ごした。廊下を跳ね回る光弾の連射は十秒近く続き、止まった頃

には壁の表面をパラパラと砕け、埃が頭上と言わず地面を言わずに舞っていた。

「……馬鹿野郎おツ！」

読水は顔も上げず、開口一番に叫んだ。その怒号に驚いたのか、室内の方から女性の小さな悲鳴が聞こえた。

「レナードの弟子かツ!? 敵じゃあない、俺は運び屋だ！」

「しよ……証拠はっ!？」

「じゃ、ここにブツを置いてくから、後は勝手にしろツ！」

「ま、待ってえ！」

と、情けない声を上げ、ドタドタと室内から読水のもとへ走ってきた。年齢は読水と対して変わらないだろう、ワンピースを着たおさげの少女が室内から飛び出した。

「……あんたが、キャサリンか？」

「はい……その、先生は本当に……」

「俺が確認した……彼の荷物と、依頼されていた物を届けにきた」

そう伝えると、読水は荷物をレナードの弟子——キャサリンに渡した。

「俺はもう逃げるが、あんたもここから離れた方が良く。こう事態が大事になっちゃ、聖杯戦争も中止になると思う」

「で、でも……」

キャサリンは気が弱いと言うか、冷静沈着になれない性分らしい。オドオドとした声で、目尻には涙を浮かべていた。

「まあ……残るって言うなら、別に引き止めやしない。じゃあ、幸運を」

読水はそう別れを告げると、服に付いた埃を払いながら階段の方へと戻る。

しかしエレベーターがこの階に到着した電子音を耳にすると、踵を返してキャサリンの方へ戻った。

キャサリンを工房へと押し戻し、室内に入る瞬間に銃弾が廊下を雨あられと飛んできた。読水は効果がもうあるとも思えない穴だらけの扉を蹴りで閉め、工房の奥へと避難した。

「えっ……び、尾行された？」

「あんたのが原因だろ！ さっきの光弾はッ!？」

「さ、さっきので薬剤が切れ……」

「お前本当に魔術師か!？」

先ほどの魔術の発動に使ったであろう大きな鉄鍋を放置し、二人は部屋の奥へ。流し場と思われる狭い小部屋へ逃げ込んだ。

「クソ……何でも良い、何か手はないか!？」

廊下では、すでに玄関前に到達した気配が穴だらけの壁から伝わる。読水は壁に向かって何発も拳銃を発砲して牽制をしながら、過呼吸を起こしかけているキャサリンに聞く。

「ここに、しよ、しよ、触媒がある……から……召喚さえずつ、すつれば……」

なるほど。と、読水は先ほどいた大部屋を見る。しかし床には英霊を呼ぶのに必要な魔法陣は描かれていない。

逃げ込んだ場所に、魔法陣が偶然描かれているなどという奇跡は期待できない。読水は顔をしかめ、目を閉じた。そしてここを生き延びれたら、英霊召喚は万全の準備をもって行おうと固く誓う。

そして、蹴破られるだろうと思っていた扉が、ゆっくりと開かれるのを読水は見た。読水は舌打ちをすると、背を預けていた壁からずり落ち、床に寝転んだ状態で玄関口を狙った。

部屋に入ってきたのは、麻のシャツを着た男だった。黒い肌とヨーロッパ系の顔立ちを持った背の高い男は、部屋に入るなり敵意はないというように両腕を広げて見せた。

「……………」

少し逡巡したが、読水は構わず胴体を狙い引き金を引いた。

しかし、弾丸は男に当たることはなかった。触れる直前、男の背中から乗り越えるように何か飛び出し、男を守ったのだ。

男は守ったもの、それは煙のように不明瞭で見えにくいのが、爬虫類の頭のように見えた。使い魔の類だろうか。よく見れば、男の首にはくの字に曲がった木製のブーメランが掛けられている。

「…………いきなり撃つなんて。まったく、話もせずに死んだらどうする」

男はふざけたように文句を言う。そして小銃を持った男達が四人、扉の正面に立つ男から左右に広がるが、男は彼らの攻撃を手で制した。

「おい、待て。話し合おう！」

読水は再度隠れ、上着の内ポケットからリボルバーの装填器具を取り出しながら言った。

「この工房の持ち主は死んだ！ レナードって名前だ！ 聖杯戦争に参加する奴は死んだのだから、俺達がここで戦う意味はないはずだッ！」

「……まずは、自己紹介を」

男は首に掛けていたブーメランを手に取り、クルクルと弄びながら言った。ブーメランの表面に、ワニが描かれているのが見える。おそらくアレが、使い魔を召喚する触媒なのだろう。

「私はアーロン・ドリームマン。この聖杯戦争に参加する、魔術師だ。……あつと、君達を襲ったのは、金で雇った。レナードを殺した教子以外は、魔術と縁も所縁もない連中だよ」

「なら、俺がただの運び屋だったのは知ってるだろ！」
「もちろん」

アーロンは楽しげに肯定する。読水は壁に隠れながら、掌にリボルバーの薬莖を落とす。そして音を立てないよう地面に薬莖を置き、スピードローダー装填器具でリボルバーに弾を込めた。

「それに、そこにいる娘がレナードの弟子なことも、聖杯戦争のマスターには役不足なところも知ってるつもりだよ」

ただ、ね。と、男は台詞を一端切り、こう続けた。

「何事にも、万が一、というのが……『皆殺しが一番手っ取り早い』、そう考えるのが魔術師って奴なんだよ」

そうかよ。読水はうなだれ、苛立ち紛れに肘で壁を殴った。こうなれば、何としてでも逃げねばならない。隣でうずくまっていたキャサリンが、壁を殴った時の音で小さな悲鳴を上げる。しかし、もう気にしている余裕は読水にない。

読水は再装填した拳銃を頭の横へと持ち上げ、カラカラに乾いた口

内を舌で舐めた。キャサリンと違い、まだ心は折れてはいない。当然抵抗はするつもりだが、生き残る術、算段が現状まったくくない。

と、そんな時だった。アーロンのいる大部屋の方からパン！と、炸裂音が一回、空気を叩いた。

そして複数の風切り音と、人体を破壊していく生々しい音と共に雇われ兵が次々に細切れにされ、血溜まりに倒れていく。

「……ッ!？」

アーロンは驚いた様子で、高速で宙を飛び交う何かを使い魔で防ぎ、部屋の中央まで下がっていった。

読水は、この音と現象を知っていた。これは銃弾の風切り音。それも複数が、軌道を変えていきながら飛び交う時の、あの男がもたらす異音だ。

アーロンが自身へと向かってくる銃弾を数発叩き落とすと、部屋はまだ生きている三人分の息遣いが聞こえてくるほどに、打って変わって静寂に包まれた。

その静寂の中に足音が混じる。硬い革靴でコツコツと廊下を歩いてきた彼は、コンビニにでも寄ったかのように悠々と部屋に入ってきた。

「……嘘だろうか？」

当時の読水にとつては、信じられない再会だった。

黒を基調にしたフォーマルウェアをクタクタになるまで着潰し、細身で高い上背は黒豹のような獣臭ささえ感じる。普段はソファアーに寝そべり、酒を飲みながらつまらなそうにエロ本を読んでいる癖に、その雰囲気にもまるで隙がない。

魔術師でありながらも古臭いリボルバーで武装し、それでいて裏の世界では『殺し屋』として知られる男。

いずれどこかで巡り合うかとは思っていた。しかし彼と別れて、まだ一年経ったかも怪しい。

そう、彼は……。

「師匠……どうして……」

読水の師——雨井陽二は部屋の隅から顔を出す弟子に、何も答えな

かった。手にしたりリボルバーを右手にぶら提げ、ジツとつまらなそうな目でアーロンと対面している。

「……驚いたな」

ポツリと、アーロンは呟いた。そして弓が引き絞られるように、キリキリと彼の口端が釣り上がっていく。しかしブーメランを持つ右手は、読水の距離から見ても分かるほどに握り固められていた。

「……『殺し屋』、『キッド』……『ミキサー』、『ZIP』。あの有名な雨井陽二に、こんな所で出会ってしまうなんてね」

雨井はタバコを傭兵達の血溜まりに捨ててから、口を開いた。

「お前は標的じゃあない。ここでお前が退いても、俺は構わないが……」

「おや。と、アーロンは首を傾げる。

「てつきり誰かに依頼されたものと思ったが……とすると、あそこの子供達に、知り合いでもいるのかな?」

「だったら、どうするんだ?」

「だったら、後腐れのないように……お前も殺しておくか」

アーロンは、雨井を挑発するように告げる。雨井はそんな彼に苦笑し、肩をすくめた。

「俺も、同意見だ」

「この男、端から逃がす気などなかったらしい。

雨井は吐き捨てるように言うと、拳銃を右手から左手へと投げ渡す。そして流れるような速度で再装填^{ロド}作業に入った。

雨井の持つ銃は、スタームルガー・ブラックホークという、シングルアクションのリボルバーだ。その装填機構は固定式であり、読水が使っているコルト・ローマンのように弾倉^{シンダー}を銃身から横にずらせない。故に排莢も、装填も、一発ずつ行う必要がある。

当然、戦場でその作業工程の遅さは致命的なものだ。事実、雨井は敵を前に無防備に立った状態で、莢莢を地面に落としていき、弾を指で一発ずつ込めている。

「……なるほど」

しかし、アーロンは動かなかった。そればかりか感心したように、

その様子を目を丸くしている。

「その目……『アマチュア』でも、『プロフェッショナル』でもない、『本物』の人殺しの視線というのは、こうも……銃口より、よっぽど怖いじゃあないか」

雨井はその言葉に応えない。アーロンを冷たい眼光で釘付けにしながら、一発ずつ、考え事の合間にしているように、一発ずつ弾を込めていく。

「……もう一発、必要になるか」

六発の弾丸を込めた後、雨井は一人眩いた。そしてポケットから取り出した銃弾を握り、続いて開いた時には手品師のように銃弾を消してしまった。

雨井は拳銃を右手に移すと、腰のガンフォルダーに収めた。そして僅かに左足を前に出し、顎を引く。

正面からの、早撃ちの意思表示。現代戦において全く有効とされない銃で武装し、利口とは言えない行動の数々を平然と行う。だがしかし、常人には理解できない領域こそ魔術師の欲すもの。彼はそんな世界で名の知れた、殺し屋なのだ。

「……後悔しているよ。とても怖い」

アーロンは、目尻を痙攣させながら笑った。そうして彼もまた、構えを取る。前傾姿勢で両手を前へ垂らし、得物であるブーメランは両手で軽く持っている。

「……とても、怖いね」

勝負の時だ。気がつくと読水は立ち上がり、小部屋の出入り口に手を掛けていた。

「……つと、それ以上近づくなよ小僧」

その言葉で、失神寸前のキャサリンの他にもう一人、サングラスを掛けた青年が背後にすることに気づいた。青年は肩紐付きのライフルとメガホンを担ぎながら、今まさに窓から読水達にいる小部屋へと侵入するところだった。

「そこから一歩でも出たら、命の保証はなくなるぜ?」

「その言い様……あんだ、アダムか?」

さあてね。と、青年はニヤけ顔を浮かべた。しかしすぐに真剣な顔立ちに戻り、顎で雨井達を示した。

「目を離さず、良く見ていろよ。命の保証書付きで、あいつの戦いが観戦できる機会なんざそうない」

読水は頷き、視線を雨井達に向けた。思えば、彼が戦う姿をまともに見たことなど、弟子だった時期を数えても一度もなかった。

二人はアダムの侵入にも関わらず、構えや視線を変えることはなかった。二人を結ぶ直線上の世界は殺意に満ち、歪んでいるようにも澄んでいるようにも見える。

「……………」

「……………」

全速力の殺人によってもたらされる、一瞬の決着——その、開始時点。

二人がここに至るまで、生涯に渡って備えてきた魔術、磨いてきた技術は、その瞬間を今か今かと窺っている。

それはまるで、撃鉄に叩かれるのを待つ、銃身に収まった弾丸に似ていた。

そしてここからの目も眩むような高速の展開、攻防は、読水が数年に渡って得た知識と記憶の反芻によって、何とか理解するに至った出来事である。

そう、これから起きた数十秒の出来事は、当時の読水には理解できない水準の戦いであった。

「……………ッー」

先に抑え込んでいたものを解き放ったのは、アーロン・ドリームマンであった。

アーロンは右手でブーメランを振り被る。否、振り被ったように見えたその時には、ブーメランは彼の背中から回り込み、雨井へと迫ってきていた。

腕の柔軟性と、ブーメランの特性を活かした堂々の不意打ち。雨井はほんの数メートル先から投げられたブーメランと、回転するブーメランから煙のように立ち込めるワニを視認した……その後、拳銃を

霞むような速さで抜き、引き金を引いた。

雨井の姿が硝煙に包まれる。

銃声は、一つ。しかし、宙を飛び交う風切り音は複数。雨井の速射は、連射される銃声に切れ目さえ与えなかった。

一発撃つ毎に撃鉄を手動で起こさねばならないシングルアクションの銃は後年、連射速度を人間の力量に委ねるといふオリジナリティへと変異した。

そして、引き金を引いたまま撃鉄を引き続けることで速射を可能にするファニングショットは、達人にもなれば機械式の銃器に優る連射速度を生む。

加えて、雨井が撃った、375マグナム弾は読水の撃つものとは桁違いの凶暴性がある。雨井の魔術は、音速を維持したままその銃弾の弾道を変えろという凶悪なもの。

人間を殺すのに十分なパワーを持つ、375マグナム弾を、風切り音を唸らせながら人体の間を何度でも往復させることで破壊している。それが彼の異名の由来なのである。

雨井が撃った銃弾は銃弾を喰らおうとするワニの牙を避けながら飛来し、ワニが描かれたブーメランそのものを砕き割った。次いで、まだ推進力を残す銃弾はアローンへと次々に襲いかかる。

「グ……ッ！」

アローンの体に、弾丸が何度も食らいついていく。しかし魔術で強化されたブーメランを破壊した後の銃弾では、魔術師は殺せるだけの余力はない。それにアローンはボクサーのように腕で急所を守り、万が一にでもやられまいと考慮していた。

しかし、何より驚異的なのはこのアローンという男。腕の隙間から血走った眼で、ずっと自身を破壊していく弾丸を目で追っている点だ。魔術師としての並外れた生命力にものを言わせて、ずっと反撃の瞬間を窺っていたのだ。

そして、その時がやってきた。アローンは読水にも目で見えるほど低速になった銃弾を、煩わしいというように掴み取った。

銃弾による嵐が止むと、アローンは交差させていた腕でシャツのボ

タンを引き千切り、前を開けた。

その時、僅かな瞬間ではあったものの、読水は確かに見た。彼の開けたシャツから覗く胴体には、何十何百という虫の絵が描かれているのを。

直後、アーロンの体から飛び出したおびただしい数の虫が召喚され、雨井へと飛びかかった。

当時の読水は知らなかったが、その虫はキバハリアリと言う蟻の原始種で、その毒針は現地の者をして『三十箇所以上刺されると死ぬ』と伝えられるほどのものであった。

雨井はそれを見るや否や、覆い被さるように降ってくる蟻に銃を向けた。

そして銃口が蟻に覆われたその時、リボルバーは火を吹いた。その途端、蟻が宙で爆ぜるように四方に飛び散った。

衝撃波だ。銃弾は発射された瞬間、空気を高速で叩き衝撃波を生む。人が携行できる火器ならば衝撃波の影響も大したことはないが、体に纏いつこうとする蟻を払う程度なら充分に可能だ。

そして蟻を吹き飛ばしながら放たれた弾丸は軌道を変え、アーロンの顔面へと直撃する。次の瞬間には、アーロンの顔は左へと弾けるに向けられ、体はピンと痙攣したように宙に跳ねる。そして顔からは、赤い鮮血が吹き出していた。

アーロンは勢い余って倒れ込むも、手を着いて完全なダウンを拒否する。しかしそれでも狙うには充分な隙だ。続く二弾目をと、雨井は頭から降り注ぐ蟻を物ともせず、撃鉄を引き起こす。しかし、銃弾は発射されなかった。

見れば、蟻は真つ先に雨井が右手に持つ銃に群がり、彼の右手は黒い塊のようになってしまっている。

「……………」

銃に集る蟻を手で払う雨井。そんな光景を、アーロンは愉悦極まるといった顔で眺め、立ち上がる。

アーロンの狙いは、これだった。撃鉄の間にも蟻を押し込んだのか、あるいは銃身にでも大量に流し込んだのか、いずれにせよ蟻とい

う異物で銃そのものを封じ、雨井が操る弾丸をゼロにするのが目的だった。

アーロンは口から血と、歯か鉛玉か、固形物を地面に吐き出す。彼の左頬は赤い花が割いたように、内側から爆ぜていた。

これも、彼にとつては必要なことだったのだろう。銃弾が一発でも撃たれていれば、雨井はその銃弾を操って戦うことができる。想定外の一撃ではあったが、その一撃は何としてでも、それこそ歯で噛み砕いてでも止める必要があったのだ。

アーロンは鮮血で汚れた口元を舌で舐め、ズボンとベルトの間から30センチに満たない木片を抜き取った。そして木片に結び付けられた紐を握り、勢い良く木片を頭上で回し始める。

それは投擲具か、呪具の類か。しかし、それがどのような魔術礼装であるにせよ、その効果が発揮されることはなかった。

なぜならアーロンが握っていた紐は、上空から飛来した弾丸によって千切られてしまったからだ。

アーロンはあらゆる方向へ飛んでしまった木片に、信じられないと言った顔をする。それからゆつくりと、彼は雨井を見た。

「……いつ、撃った弾だい？」

「最初に撃った四発のうち、一発を上空で旋回させていた」

雨井の早撃ちは、射撃音の一つにまとめて聞こえさせるほどのものだ。彼は自分が何発撃ったかさえ、情報として敵に与えない。そして彼の魔術を合わせれば、弾丸を伏兵のように扱い奇襲さえ可能とする。

「しかし上を飛んでいたこの一発は、すっかり威力が落ちてしまっている、未だ飛んではいるが、お前を殺せるだけのエネルギーは残っていない」

雨井はそう言うと、降参を示すように両手を肩の高さに挙げた。

ピン。と涼しげな音がした。気がつけば雨井の左手には銃弾が、タバコのように指に挟まっている。

「よって……もう一発、必要だった」

そして雨井は、その銃弾を指で弾き、アーロンの額へと放った。

「……あつと」

それがアーロンの、最期の気づきであつたのだろう。

直後、上空を飛来していた銃弾は弾道を変え、アーロンの額に弾頭を押し当てた銃弾の雷管を撃鉄代わりに叩いた。

これは後に、アダムから聞いた話だ。

雨井陽二という魔術師は『思考分割』、『高速思考』という技能によって音速で飛ぶ複数の弾丸を操っているらしい。これらを得意とするアトラス院の魔術師達は、戦闘時には擬似的な未来視さえやってのけるという。

雨井もまた、その常軌を逸した思考能力によって敵の全てを見透かしているのかも知れない。

そして、あの男はきつと敵を観察し、戦う前より勝利までの道筋を組み立ててしまっているのだろう。そう……一発ずつ、弾丸を銃に込めながら。

「どうして、ここにいる？」

アーロンの死体を確認しながら、雨井は読水に言って寄越した。その声色には、明らかに怒りが混じっている。

「聖杯戦争には、もう関わるなど言つたはずだ」

読水は顔を伏せた。この男は命の恩人で、魔術の師だ。反抗する気にはとてもなれない。

「……俺だつて、言つたはずだ。誰が何と言おうと、俺は何も変わらない」

しかし、言わなきやあいけない。恩師であるこの男にこそ、自分の意思は伝える必要がある。

「あの聖杯戦争に勝つ為に、スクラディオ・ファミリーとの関係がどうしても必要だつたんだ」

「こんな粗雑な戦争も一人じゃ生き残れない……外道に成り切れない運び屋が、本物の聖杯戦争で生き残れるとでも思っているのか？」

「思つてない……だけど、やるんだよ！ 欲しいのは聖杯じゃあない、

決着だッ！」

読水の説明を、雨井はピシヤリと言い伏せた。その物言いが頭にきて、読水は怒鳴った。そして一度堰を切ってしまえば、もう言葉は止まらない。

「確かにあんたは、俺を救ってくれた！ あんたのお陰で、あの地獄から逃げ出せた……けど、そのせいで俺はあそこに、何かを置き去りにした！」

読水は雨井に近づき、噛みつくように言った。

「俺は読水の生き残りとして、それを取りに行く……ッ！」

雨井は、そんな読水から視線を逸らすことはなかった。先ほどのアロンと対峙した時のように、ジツと読水を睨んでいた。

しかし、読水に背を向けるその直前に、その顔が一瞬悲しげに歪んだのを見た気がする。

「……勝手にしろ。そもそも俺とお前じゃあ住む世界、スタイル流儀が違うんだ」

そうじゃなきゃ、お前も今頃は『殺し屋』やってた。と、雨井は呟き、こう続ける。

「まあ、精々頑張れ。今度負け犬になる時は、悔いの残らないようにな」

雨井はそう吐き捨てると、読水のもとから離れていった。

「かつての教え子に、冷たいねえ。それに私の顧客殺しちゃって、まあ……」

取引は済んでいるけど。と、そう言つて雨井にちよつかいを掛けるのは、小部屋から顔を出すアダムだ。雨井は鬱陶しそうに手で追い払う仕草をするが、構わずアダムは言う。

「殺し屋、仕事は？ 誰を殺した？」

「今回の主催者だ。アダム、お前そのメガホンで聖杯戦争が中止になったと触れ回れ。潜伏している連中も、それでここから撤収するだろう」

「はんつ、面倒くせえな……まつ、さっきの見物料として無償でやってやるよ」

「当たり前だ」

雨井はそう言つて嘆息し、さつさと部屋から出てつてしまった。振り返ることもなく。

「……………」

「よう、小僧」

黙つたまま立ち尽くす読水の肩を、アダムはポンポンと叩いた。

「その時がくれば、私を呼びな。あの師匠がいなくてもやれるつてことを、思い知らせてやれ」

「……俺は一人でやりたいんだ」

「そういう台詞は、一人で生きられるくらい強くなつてから言いな。小僧」

そんな奴、私は知らないけどね。アダムはそう付け足し、ヘラつと笑う。

「じゃあ、とりあえずその前払いとして……後ろで放心しちまつてる小娘を島外まで運んでもらおうか？ 三流の運び屋さんよ」

あれから——あのギリシャでの暑い日から、もう四年経つ。

あれ以来、師匠……いや、雨井陽二とは会っていない。悲しく、申し訳なささえ感じるのだが、雨井と自分は進んでいる道が違う。そう、読水は解釈している。きっと彼と過ごした五年間は、偶々道が交差しただけに過ぎないのだろう。

そしてあの日に日坂での聖杯戦争の協力を名乗り出てくれたアダムも、もういない。まだ死んだとは限らないが、アダムが仕事で決めた約束を破つたことはなかった。

電話で言っていた依頼絡みか、余程のことがあつたのだろう。少なくとも、もう頼ることはできない。

結局、恩もロクに返すことなく、別れることになつてしまつたか。そう考えるも、不思議と孤独はない。それはアダムとの不思議な距離感のせい。読水はアダムとの思い出を回想し、ろくなものがないことに気づく。

あるいは……まだ仲間がいるからか。読水はそう苦笑し、窓辺に座

るランサーの背を見る。

アダムと同様、本名さえ知らない彼女であるが……少なくとも、こうしてまだ目の届く所にいるうちは、彼女に恩を返したい。

そして、そのベストな返し方は、やはり聖杯を勝ち得ることなのだろう……。と、読水は決意を新たに強固なものへとしていく。

その為にもこの聖杯戦争、どんなに無様だろうと勝ち残らなければならぬ。彼女をサーヴァントとして召喚した今、もう一人の命ではないのだ。

やっかいな話だ。そう、読水は嘆息した。

人の生き死にを委ねられるのは、本当に嫌いだ。

第十六話 『シューティングスター』

月下。

鏡宮邸へと独り、迷いなく駆ける英霊がいた。

英霊——アサシンは鏡宮邸へ伸びる一本の舗装道を、ただ走る。

マスターより与えられた命令は、鏡宮邸を守るアーチャーの真名を暴くこと。

そして、その中で真名を暴かれた自分自身を処分すること。

「……………」

アサシンは、とうに覚悟をし終えていた。マスターであるアレクシアに利用されることも、自分がここで死ぬことも。

故に、空からの奇襲にも一瞬の動揺さえなかった。アサシンは走る方向を鋭角に変え、上空より飛来した一本の矢を充分な余裕を持って躲す。

しかし、背後へと飛び抜けた矢が道路に当たるや否や、アスファルトを弛め、砕き割るほどの威力を持つことは、アサシンにとっても予想外であった。

アサシンは驚きながらも、振り返ることなくその破壊力を片目で凝視した。高速で飛ぶ矢に、尋常でない魔力が纏われていたのは分かっていた。しかし、それにしただって地面を穿つ大穴を開けるとは……………」

「そこまでだ、日陰者」

前方より、透き通るような声。そして暗闇のボールを剥いでいくように、ゆっくりと若い青年が浮き出てきた。

青年は引き締まった体を黒い衣装で包み、その上に漢服を片肌脱ぎに着崩していた。艶のある長い黒髪は後方に撫で付けられている。

そして印象的なのは、不遜をそのまま顔に貼り付けたような笑みと、手にした赤い弓……………間違いない、アーチャーだ。

青年——アーチャーは街路樹の枝の上に立ち、こちらを見下ろしている。

「気配を消せるか……」

「気配を殺すのは、貴様ら暗殺者の専売特許じゃあない。お前のような気配の投影はできずとも、これ程度はな……」

アサシンの眩きに、アーチャーは馬鹿にするように笑みをたたえる。

「だがそれも、タネは割れている。アサシン……真名、カルキノス。ヘラクレスに踏み潰され星座となった、化け蟹さん」

「……」

アーチャーの言葉に、アサシンは大きな反応は示さない。いや、フードの中に潜む彼には、人間的な表情などそもそもないのだ。

カルキノス——蟹座と表現して良いのならば、世界で最も有名な蟹と言えるだろう。

彼はギリシャ神話にて有名なヒュドラ殺しの伝説、怪物ヒュドラと戦うヘラクレスとその甥イオラオスに忍び寄り、ヘラクレスに踏み潰されたという。彼はヒュドラの友人であるとも女神ヘラの使わされた暗殺者だとも伝えられるが、いずれにせよその勇敢さを讃えられ、女神ヘラによつて天に昇り星座になったのだ。

人ならざる、勇敢なる刺客。それがアサシンの正体である。そして正体が割れてしまえば、その奇異な姿やスキルの背景、弱点だって見えてくる。

「さて……それで、実際どうなんだ？」

アーチャーは自身が絶対優位、余裕たっぷりだと言った様子で、アサシンに聞いた。

「お前は俺の足でも、容易に踏み潰されてくれるのか？」

その言葉を最後まで聞き遂げたか否か、アサシンは突如道路から外れ、脇に広がる畑へと飛び移った。そして躊躇する様子もなく、畑の向こうにある里山へと駆け行く。

「蟹風情が……俺が獲物を逃がすと思うかつ！」

アーチャーはそう叫ぶと街路樹から飛び跳ね、アサシンの背を追う。

畑を疾走する二人。その走法はまるで違うが、その速度はほぼ互角

であった。

それで良い。と、アレクシアは頷いた。

始まったサーヴァント同士の戦いより遙か遠くで、アレクシアはアサシンとのラインによってこれらの様子を知覚していた。そうしてアーチャーの一挙動を逃すことなく、そして舐めるように観察している。

真名が暴かれたアサシンが、真つ向から三騎士と称されるアーチャークラスに勝てるとは思ってない。しかし、逃げに徹せれば時間は稼げよう。

最終的にアサシンが死のうとも、この特攻でアーチャーの真名が引き出せば良い。あのアサシンだって、それを了承している。

昨夜、アレクシアはアサシンに対し、令呪で以ってこの特攻を強制しようとした。しかし、それに対しアサシンはこう告げた。

マスター、私は令呪で操られずともサーヴァントとして使命を果たそう。と、そう言ったのだ。

アレクシアはそれを、時間稼ぎの戯言と最初は疑ったが、すでに復讐を終え未練はない、そう言い切るアサシンを柄にもなく信じることにしたので。

そして、ならば……と、アレクシアはアサシンにこう命じた。

「令呪でなく、復讐の対価で以って我がサーヴァントに命ずる。お前の全てを捧げ、アーチャーの真名を暴け」

アレクシアは項垂れ、改めて彼に伝えた言葉を口にする。そして、触れば切れるような笑みを赤髪の切れ間から覗かせた。

湿って腐りつつある落ち葉を蹴って、アサシンは木々の合間を素早く走る。

背後にアーチャーの姿はない。しかし、アサシンは彼が未だ自分を捕捉しているのを理解している。姿は見せずに、あの強力な矢を放つ機会を窺っているのだろう。

夏とは打って変わって、冬の野山は静寂に包まれる。枯れ葉が落ち

る音にさえ意識をやって、アサシンは走りながらアーチャーを知覚しようとする。

だから、足元にいた無音の狩人に気づけなかった。

不意に、アサシンの脚が宙へ跳ね上がる。天地が逆転し、そのまま上空へと吊り上がっていく。

括り毘だ。この野山にある自然物のみで作った為に、匂いで気づくこともできなかった。

アサシンは脚を括った縄に纏わりつくくと、鋏で縄を素早く切断する。次いで宙に舞い上がった体を器用に蠢かして体勢を整え、アサシンは地面に軽やかに着地した。

そして着地した直後、アサシンは横に滑るように駆ける。そうしてアーチャーによる、上空からの踏みつけを躲した。

アサシンは鋏を振ってアーチャーを牽制し、距離を取る。その様子に対し、アーチャーは余裕の表情でアサシンが退くのを見送っていた。

アサシンは数歩下がりがらしかし、次の一手をどう指すべきか考えていた。

追いやられたような感覚はなかった、獣道などの歩きやすいルートを使っていた訳でもない。なのに、事実として括り毘に引つ掛かった己がいる。

山は危険か。と、アサシンは決断すると、マントを翻して今度は山を一直線に駆け降りた。その選択に、背後のアーチャーは楽しげに笑う。

青い草花のない冬の山の地面は、夏以上に滑りやすくなってしまふ。しかし、その程度のことではアサシンとアーチャーにとって、何の問題にもならない。

マントを頭から被ったアサシンは、端から見れば液体と見間違ふほどに柔らかく体を動かし、斜面や崖に脚を離すことなく山を下っていく。

対するアーチャーは木々や崖を飛び移って、ほとんど地面に足を付けないままアクロバティックにアサシンを追っていた。

「……………」

何者……否、想像し得るのは、何者とだ。と、アサシンは走りながら、これまでのアーチャーの一挙一動より、真名に繋がる情報を戦いながら割り出していく。この男は、これまで何者と戦ってきたのか。

思えばあの娘——ランサーは、己の動きにやり辛さを隠し切れていなかった。如何に槍の名手とて、武術とは詰まるところ対人用、人間の身のこなしに対して備えられた技術なのだ。

しかし、この男——アーチャーは、己の動きに手慣れたような雰囲気さえある。獣を向き合う狩人だからか、それとも己のような怪物と戦った経験があるのか。

いずれにしても、この男の動き。

自分より遥かに強大なものと戦ってきた、あのイオラオスに似る。

そこが、気に入らない。

「捉えたぞ」

その時だ。アサシンのそばで、アーチャーが呟く。

アーチャーはアサシンを追い越した。そして上下で擦れ違う瞬間、アーチャーは振り返り際にそう言っ、腰の矢筒から白い矢を引き抜く。

アサシンはその様子を凝視したまま地面を数度蹴り、勢い付いた体に段階的にブレーキを駆けていく。アーチャーは斜面に対し平行的となる軌道で滑空しながら、矢を弓に鋭い速度で引き絞り、そして解き放った。

途端、矢は光線じみたエネルギーの塊となって林の合間を飛び抜ける。アサシンは真横に身を投げ出し、辛くもそれを避けることには成功した。だが、英霊を殺さんと飛んだ矢は木々に進行を阻まれることなく、野山の斜面を舐めるような軌道で木々を砕き割っていった。

アサシンは身を起こしながら、その冗談のような矢の破壊力を一瞥する。山を削るその威力は、弓の張力では説明がつかない。アーチャーの弓は、明らかに宝具だ。それも、破格の神秘を纏っている。

アーチャーは着地の衝撃を受け身で殺し、上にいるアサシンを見つめて立ち上がる。それからゆつくりとまた矢を一本、矢筒から引き抜

いていった。

しかし、ふとアーチャーの挙動が止まる。

気づいたか。アサシンは低い姿勢を維持したまま、自分の後方から迫る脅威に備えていた。背後ではすでに、雨が降っているかのような音がしている。

アーチャーが先ほど放った矢の一撃は、山の表面を破壊したまま上へと駆け昇っていった。それによって起こってしまった。土壌の崩壊と多数の流木……それらは一体となり、土砂崩れとなって勢い良く山から落ち始めた。

そして今、ここまで到達した。アサシンはタイミングを見計らって宙へと飛び跳ね、寸でのタイミングで土砂に呑まれるのを拒絶した。それをアーチャーは狙い撃とうと弓を引くが、上から流れ落ちる土砂を見て舌打ち、木々へと飛び移った。

そうこうしているうちに、土砂はあつと言う間に二人がいた場所を呑み込み、砂煙を巻き上げながら山を下っていく。

流石にマズいか。と、アーチャーは被害の大きさに口端を曲げた。

白矢の一撃によって引き起こされた、土砂崩れ。これは流石に、放置して良いものではないだろう。

アーチャーは流木から流木へ跳び、飛び石を伝うように流れ落ちる土砂の先端へと移動する。そうして土砂の先端を飛び越え、グルンと体を縦に半回転させて土砂の状態を確認する。

アーチャーは天地が逆さまになった視界に、流木の上に乗ったアサシンを見つけた。しかしアーチャーは取り合わず土砂の前、麓の畑に着地し、弓を引き絞っていく。

狙うは土砂に紛れたアサシン、ではない。その土砂の先端。角度は、土砂の進む方向と真反対になるのが理想だ。

そして矢の威力は土砂の質量より、遥かに上の方が良い。アーチャーは口端に犬歯を覗かせながら、降り注いでくる土砂に矢を放った。

神秘を纏って解き放たれた白矢は、閃光を放ちながら土砂を貫く。

そして土砂の頭を、凄まじい魔力でもって爆散させた。爆発の勢いは土砂が流れ落ちる勢いを殺し、そればかりか土塊や流木を後方へと巻き上げ雨のように山に降らせた。

その光景を目にした者は、麓へと迫る土砂が一瞬閃光として瞬いた巨人の手で押し返されたようにも見えただろう。それは神話のように神秘的で、人智を超えた情景であった。

よく耕された畑に、さざ波のように広がっていく僅かな土砂。その真ん中で、アーチャーはゆっくりと矢筒から矢を抜いた。残っている矢は、手にしたものも含め、六本だ。

「……………ッ!？」

その気配は突如、真正面から弾丸のような速度で迫ってきた。

土煙に紛れ、一気に勝負を決める気か。と、アーチャーは身構え、土煙舞う正面に鏟を合わせた。

しかしアサシンは、そうして身構えたアーチャーの真横の畝から飛び出てきた。

気配を別所に投影させるスキル——気配操作。アサシン唯一の、そして最大の個性^{オリジナル}。アーチャーも理解していたつもりだが、まんまと踊らされた。

アサシンは地面から飛び出ながらマントから鋏を晒し、フックのように振るう。狙うは弓の構えによって空いた左ワキ、すなわち心臓だ。

アーチャーは一瞬驚きはしたものの、その顔は羞恥と怒りへと即座に変貌する。そしてアサシンの攻撃を屈んで躲し、続く振り下ろすような鋏の攻撃も側宙で躲していく。

アサシンはこの機を逃さない。猫のような軽やかさで攻撃を避けていくアーチャーを、彼の影であるかのように追いつがる。

「貴様っ……………しつこいぞー」

アーチャーは苛立ったように叫ぶ。彼はアサシンの攻撃を躲しながら、足の甲に土壌を引っ掛け、すくい上げるようにして土塊をアサシンの顔面へと蹴りつけた。

アサシンはそれを鋏の甲で受け止めたが、その隙をつきアーチャー

は動き回っていた体の勢いを殺すことなく回転させる。そして一回転しきる頃には、すでに矢は弦につがえられていた。

アーチャーは流れるような挙動で、早撃ちに矢を地面へ打ち込む。僅かに引き絞られただけの弓であっても、繰り出された矢の一撃は畑の土壌を吹き飛ばすには十分な威力を備えていた。

緑に狙いも定められずに放たれた矢によつて、二人は爆風によつて隔てられる。アーチャーはアサシンが巻き上がる土壌に飲み込まれたのを確認するや否や、踵を返して歩道の方へと駆け出す。

ここではダメだ。そう、アーチャーは判断した。こんな柔らかい土の上では、あのアサシンの方が有利だ。必要なのはアサシンを見失わない開けた空間と、堅い地面。

すなわち、ここだ。と、アーチャーはアスファルトにて舗装された道路の上で立ち止まり、振り返った。ここなら、地の利はこちらにあるはずだ。

見れば、すでに先ほどいた場所の粉塵は収まりつつある。アサシンの姿は見られないが、先ほどの一撃で死んだとも思えない。アーチャーは僅かに体を弛め、獣じみた臨戦態勢に入る。先立って弓を引くような愚行は、もう起こす気はなかった。

しかし、しばらく身構えてはいるものの、アサシンは一向に襲つてはこない。

何か、企みがあるのか。などという疑念がアーチャーの頭に浮かぶ。そんな時だ、この戦闘を後方の屋敷で見守っていた鏡宮が、念話で話しかけてきた。

“……アーチャー、すぐに屋敷に戻れ”
“止めるな鏡宮ッ！ 奴はここで始末する！”

噛みつくような返答に、鏡宮は溜息を念話にのせてこう続けた。

“そのアサシンが、こちらの方に来ている。マスターの私を殺すのに、狙いを変えたようだ”

その言葉に、アーチャーの顔は一瞬呆然としたものとなった。

相手にされなかった。

また騙された。

コケにされた。

その事實は、これまで敵に触れさせることさえ許さなかった、アーチャー肉体……その奥底にあるもの。

アーチャーという男の、プライドに深く食い込んだ。

「……………ッー」

アーチャーは顔に青筋を立てながら、突風のような速度で屋敷へと駆け出す。

リミッターを振り切った怒りの感情。それは叫ぶでもなく、アサシンを追うという行動によつて立ちどころに示された。

アサシンは助走もなく塀を飛び越え、鏡宮邸へと足を踏み入れた。

目的は無論、アーチャーのマスターの暗殺……に見せかけた、揺さぶりだ。あのアーチャーの真名を暴くのがアサシンの使命だが、やり方はあの青年と戦うだけじゃあないはずだ。

しかし、思ったよりも簡単に忍び込めてしまった。と、アサシンは呆気なさに溜息をこぼした。魔術師、それもこの聖杯戦争の主権者の邸宅、工房だ。侵入を知らせる装置なり、あるものだと思っていたが……いや、やはりその辺りも含めての罠なのだろう。

アサシンは改めて周囲を見回す。鉄柵で作られた門と古い洋館の間には庭園、庭園の中央には澄んだ円形の池がある。洋館や舗道の作りは西洋風で、洋館の基礎は庭園より高い。それに洋館の横にあるのは、温室だろうか。

特別気になる装飾はなさそうだ。と、アサシンはそう判断した。そして思った以上に、隠れられそうな所がある。

しかし何にせよ、すぐに怒りに顔を歪めたアーチャーが来る。どこに潜んでいるとも知れぬマスターの命を取る時間はなからう。であればより良い位置をと、塀の影から庭にあつた花壇の方へと移動する。

そして、アーチャーが花壇に群生したミントの中へと身を潜ませようとした時だ。庭園の中心にあつた池の水が、耳障りな高音を立てて蠢いた。池の水は一本の柱として宙へ上り、それから柱の上に巨大な

球体をかたどっていく。

「……………ッ」

それが何をしてくるか、見守る余地もない。アサシンが体を沈めて駆け出したとほぼ同時、球体となった水は虹色に輝き、何発もの光弾を撃ち込んできた。

アサシンはそれを難なく避け、草花の陰に飛び込む。そして気配を庭の幾つかに投影し、自身も姿を晒さぬよう注意しながら、それでも素早く移動する。

しかし、水の球体による光弾は数秒の停止の後、また正確にアサシン本体へ光弾をバラ撒いていく。

なぜ正確に捕捉できているのか。疑問に感じながらも、それでもアサシンは光弾を躲していき、庭園内を疾走する。

アサシンには知る由もないことだが、鏡宮はアサシンの姿を捉えて光弾を撃っている訳ではない。

彼はただ、アサシンが数秒先にいるであろう位置を予知し、光弾を撃っているに過ぎないのだ。

鏡宮悟。彼の魔術の本質は、未来視にある。占いという形態によって行われるそれは、事前情報があるほど、そしてより近い未来であるほどに高い精度で予知できる。

彼は自室でタバコを燻らせながら、水晶の中にある光景を元にアサシンを相手取っている。だからこそ、アサシンの気配に彼は惑わされない。

厄介だな。と、アサシンは彼の防衛魔術の突破は困難と理解した。そしてここから離れようと、庭園の端へと走る。

だが、アサシンが扉の手前に到着した途端、周囲の石畳、埋め込まれた石材が点々と、眩い光を放ちだした。

見れば、光っている石材ははずれも主に埋め込まれている自然石とは違うものだ。アクセントと思われたが、どうやら魔術的に意味のあるものだったようだ。

特別な模様がある訳でもない為、油断していた。アサシンが逃げ場を求めて上空へと跳躍した直後、石材の光は方向性を得て、サーチラ

イトのように光線を投射し、不規則に動かし始めた。

アサシンはライトに照らされるのを避けるべく、洋館の屋根に飛び乗り上へと駆け上がる。鏡宮邸は、今や脱獄囚が出た刑務所のような物々しい雰囲気となっていた。

アサシンは洋館の一番上に上がり、飛来した光弾を逃れて跳んだ。月夜にそのマント姿を踊らせながら、アサシンは眼下の状況を観察していく。

「アサシンッー！」

下から叫び声。見れば、アーチャーが叫びながら走り寄ってきていた。そして彼は身を屈めたかと思うと跳躍、一瞬でアサシンへと迫る。

アーチャーの跳躍力は凄まじく、あつという間にアサシンを飛び越す。アーチャーはアサシンとすれ違いざまにアーチャーを蹴りつけよう足を振り上げた。アサシンは反射的に身を翻して、それを辛くも躲す。

しかし、その回避でアサシンの姿勢は崩れた。アーチャーは間髪入れず、上半身を捻ってアサシンに向き直り、弓を引いていく。

上体だけをこちらに向けた、弓騎兵のような弓打ち……それも空中でだ。あまりにも精密さに欠けた体勢だが、瞳孔が開いたまま弓を引き絞るアーチャーを見れば、当たるはずがないと高を括ることなどできなない。

マズい。アサシンは崩れた体勢を整えようと、空中で藻掻く。

しかし次の瞬間、必殺の白矢は充分に引き絞られた状態で放たれた。

矢は音さえ振り切り、彗星のような光の尾を引いて闇夜を切り裂く。

その流れ星のような瞬き、そしてその数秒後に続く破裂音は、都市部の方にまで届いたという。

第十七話 『忌むべき物語』

月夜を引き裂く、アーチャーの一撃。

それはアレクシアが潜む廃車置き場からでも、容易に観察することができた。

アレクシアは衝撃波を肌で感じながら、アサシンがまだ生きていることを知覚する。しかし……限界は見えたと言える。

“……アサシン、そろそろ殺しにいけ”

“……御意”

こつちも、忙しくなりそうだと、アレクシアは言葉を付け足す。そして右頬に貼っていたガーゼを剥がしながら、背後を見やった。

そこには、ウイリアム・シン……こちらへと廃車置き場と一般道を区切っていた柵を飛び越え降り立つ、キャスターのマスターの姿があった。

彼はポケットに両手を入れながらも、油断を感じさせない厳しい表情でこちらへと歩み寄っていく。その様子に、アレクシアは火傷で爛れた右頬を痙攣させ、三日月のような笑みを浮かべた。

ああして近づく以上、口上は最早必要ない。アレクシアは一旦ウイリアムに背を向け、羽織っていたコートを脱ぐ。黒のノースリーブから露出した右腕の表皮は火傷により歪んでおり、それを覆うように盛り上がった瘤には切れ目がある。そしてそこから、大小様々な目玉が覗いていた。

アレクシアはウイリアムに向き直り、その肢体を示すようにゆっくりと両腕を広げた。

すると右腕の切れ目は皮膚を裂きながら開かれ、まどろむように焦点があつていなかった目玉は覚醒していく。目玉は獲物を求めるように周囲を見回し、やがて全ての目玉がウイリアムを見つけて凝視する。

「前の続きをしましょう、ウイリアム・シン……時計塔の魔術師」

アレクシアはそう、ウイリアムに微笑みかける。
調べられたか。と、困ったという風にウイリアムは苦笑した。

「でも前とは随分と様子が……ああ、下をズボンにしました？ その手袋も、よくお似合いで……」

そしてウイリアムはそう嘯きながらも、アレクシアとの距離を自らの足で縮めていく。

アーチャーは押し黙ったまま、爆発によって今や骨組みだけとなったビニールハウスに歩を進めた。その顔は険しく、これまでの余裕は感じられない。

爆心地は跡形もなく、クレーターだけがあつた。しかし、アサシンはまだ生きている。ならば周囲に残る、このビニールハウスらに潜んでいるはず。アーチャーはそう考え、自ら一つ一つ確かめているのだ。

そして、その予想は正しかった。

三つ目のビニールハウスに数歩入ったところで、アーチャーの右足首に痛みが走った。

「……………ッ！」

鉄に挟まれたか。アーチャーは歯ぎしりしながら、矢筒から矢を引き抜きつつ痛みの方向へと振り返る。

溢れ出た激情に任せた、身を捻りながらの早打ち。

しかし本能的に矢を射つ構えに入ったアーチャー自身、考えもしなかった。右足首は左手に得物を持ち、照準の基点としている弓手にとって、もつとも狙い辛い位置にあること。

そしてアサシンは、この位置を『弓手殺し』として、虎視眈々と狙っていたことを。アーチャーはこれまでの戦闘で、考えていなさ過ぎた。

反射的に動いたアーチャーに対応し、アサシンは計画的に対処する。身を捻ったアーチャーと動きを合わせ、アサシンの身体的特性である急速な横の動きで背後へと回り込む。

アーチャーは片足を後方に引き寄せられ、姿勢を崩して転倒してし

まった。その横面を湿った土壌に打ちつけ、アーチャーの頬に土塊がこびりつく。

山を打ち崩す、彗星の如き一撃を備えたアーチャーであったが、矢を放てなければその真価も失われる。

そうして彼は、彼にとつて最も忌むべき泥仕合へと放り込まれた。

アレクシア・ブロッケンとウイリアム・シン、二人の戦いは一方的なものとなった。

積み上げられた廃車の上に立ち、魔術礼装『栄光の右手』を起動させて待ちの姿勢でいるアレクシア。それにウイリアムは何度も飛び掛かる、その度に撃ち落とされている。

これほどとは、流石に思わなかった。と、ウイリアムはアレクシアの周囲を高速で回って攪乱しつつ、頬を引きつらせた。

アレクシアとは一戦交えている。そして彼女が、ライダーを脱落した際には新たな能力を見せたことも把握している。しかし、これほどの化物に変貌しているとは思わなかった。

まず、筋力や耐久性といった単純な性能が、六日前の彼女は明らかに違う。あの奇妙な右腕はもちろんのこと、他の部位にしたってサーヴァントと変わらないほどに強化されている。

なによりの問題は、彼女の変貌の副産物に過ぎないであろう点だ。アレクシアは一度も攻勢に出てはこないが、もしあの身体能力の向上が能力を支える為に必要な土台作りであるとすれば、その能力とは一体どれほどの……。

……否。と、ウイリアムは目を閉じ、考えるのを止めた。今はただ動く、動いて……目立てば良い。

「Prana shift——」

ウイリアムは詠唱を行いながら、アレクシアの右側面から一息に飛び掛かった。

アレクシアはそれを予期していたように、即座に反応。異形の右腕をバットのように振り被り、ウイリアムを待ち受ける。

「werehawk」

アレクシアが横殴りに右腕を振るう直前、ウイリアムは自身の左足に猛禽類の神秘が纏う。そして振るわれたアレクシアの右腕を、ウイリアムは空中で身を翻して躲し、そればかりか鷹のように変化した足でもって腕を掴んだ。

アレクシアの右腕は、ウイリアム一人を取りつかれながらも振り抜かれる。ウイリアムはその瞬間に右腕を掴むのを止め、慣性で宙を舞い上がる。

向こうの筋力が高いなら、それに乗つかれば良い。そして狙うは死角からの攻撃、人体の急所を突いての決着だ。ウイリアムは宙へ舞い上がりながら、手の内に隠していたチャクラムをアレクシアの首筋に投げつけた。

回転しながら、アレクシアの首へと正確に向かうチャクラムの刃。しかし、その攻撃はアレクシアの肩甲骨より繋がった魔術礼装『栄光の右手』によって叩き落とされてしまう。

「惜し……くもないか」

溜息をつくウイリアムだが、そんな彼は直後、勢い良く地面に……放置されていた廃車に背中を叩きつけてしまう。

「……この前の戦いで、無理をしても仕留めなかったのは失敗だったな」

うづくまつて動かなくなるウイリアムを見ながら、アレクシアは口を開いた。

「あの時点なら、確かにお前の方が有利だった。しかしあれから六日経つ……すでに立場は逆転した」

「……………」

「怠慢だな、時計塔の魔術師」

ウイリアムは何も答えない。そんな彼に、アレクシアは失望したような冷やかな視線で言った。

「何世代も掛けて、悠長に根源なぞ目指しているからそうなる。さあ、さっさとキャスターを出せ、それともこのまま殺されたいのかしら」

「……………」
そろそろ、か。

ウイリアムはゆつくりと顔を上げ、アレクシアへと笑いかけた。

「別にこの六日間……遊んでいた訳じゃあないですよ？」

そう。と、アレクシアは事も無げに応え。

「黙ってさっさとサーヴァントを出せ」

そして鼻で笑いながら、アレクシアは右腕の目玉から幾つもの光球を浮き出させた。その光球は蛍のようにフワフワと宙を漂ったが、すぐに軌道を変えてウイリアムへと飛ぶ。

初めて見る魔術、湧き上がる死の予感に総毛立つ。ウイリアムは両膝を地面から離し、立ち上がる暇もなく横へと飛び込む。

直撃は回避した。しかし光球は廃車に当たると、周囲を吹き飛ばさざんばかりの爆発を起こし、ウイリアムを飲み込んだ。そして矢継ぎ早に二つ目、三つ目とウイリアムを狙い、飛来し、爆発を引き起こす。「ぐっ……」

ウイリアムは爆発に体の自由を奪われながらも、それでも致命的な一撃をもらうまいと足掻いていた。そして、そんな様子をつまらなそうに見ているアレクシアの視線を、常に意識していた。正直、そんな余裕は全然なかったが……意識しないといけない理由が、ウイリアムにはあるのだ。

アレクシアは爆炎に目を細めながら、そんなウイリアムを油断なく見ていた。しかし、爆発に紛れて急接近するウイリアムとは別の気配に気づいた。

アレクシアは気配の方へと振り返る。

それは、弾丸のように迫ったシユウジ・アルバーニが彼女とすれ違い、アレクシアの礼装『栄光の右腕』を斬り飛ばすのと、ほぼ同時であつた。

驚くアレクシア。しかしそれに意も介さずシユウジは黒鍵の刃を返し、振り向きざまにアレクシアの首へと伸ばした。

ジャイアントスイング——アーチャーの背中から地面の感触が消え、視界が左へと急速に流れる。そして不意に続く左半身への衝撃で、アーチャーは手にしていた矢を取り落してしまった。

力任せにアーチャーを振り回し、アーチャーをビニールハウスの骨組みに叩きつけた。アーチャーは骨組みをくの字に折りながら、再び体を地面へ這わせる。

「てん……めえ……ッ！」

アーチャーは激昂しながら弓の端を持ち、上体を起こしてアサシンへと弓を振り回した。しかしアサシンはそれを避け、ハサミで受け、はたまたアーチャー自身を引き回して翻弄してしまう。

単純な筋力なら、自分の方が上なはずだ。そう、歯噛みするアーチャー。しかし片足が浮き上がった状態で全力を發揮できる訳ではないし、全力を發揮できぬようアサシンは密着せず、常に立ち位置を変えている。

手慣れてやがる。そうアーチャーは感じたが、それもよく考えれば当然のこと。アサシンはカルキノス、古代ギリシャ……否、世界でも有名な化け蟹だ。蟹にとって、獲物を掴む行為は日常の一部に過ぎない。

対して、アーチャーはどうか。弓手とは本来、相手が近づく前に一方的に殺すのが日常だ。接近はおろか、体の自由を奪われるまで掴み掛かられることなどあつてはならない事態だ。

これらの慣れに対する効果は、眼前に見える現実が結果として物語っている。

「……………」

アサシンは、ゆっくりとハサミに力を込めていく。ガツチリとハサミに食い込まれたアーチャーの右足から溢れ出る血が増え、アーチャーの顔も苦痛と焦燥に歪んでいく。

アーチャーは千切り落とされようとしている足の感触が、患部より先が熱さだけになっていくことに気づいた。すでに治癒魔法なしでは使い物にならず、このままでは切り落とされ、動けなくなつたところを殺されることになる。

冗談じゃあない。アーチャーは痛みに呻きながら、視界を横切ろうと動くアサシンを睨んだ。ギリシャ神話の怪物だか何だか知らんが、こんな化け蟹如きにこの俺が討たれて良いはずない。そんなことは、

許されないのだ。

そう、この時。現実の脅威が、アサシンの殺傷性が、ようやくアーチャーの根底にあるもの——自負心に触れた。

「……オアアッ！」

アーチャーは吠え、倒れた姿勢から猫のように跳ねた。アサシンはそれに対し、搦んだ右足を引き込んで姿勢を崩す。

それはすでに何度も試み、崩された脱出方法だった。

だが今回、アーチャーは自身の弓を着地点に突き入れたこと、それだけがこれまでと異なっていた。

結果、アーチャーはアサシンが予想しなかった二度目の跳躍を成す。それは棒高跳びにも似た、弓のしなりを利用したものだ。

アサシンさえ引き寄せんばかりの反発力によって、空中での自由を得たアーチャー。彼は素早く矢筒から矢を一本引き抜き、間髪入れずに矢を放った。

矢が飛んだ先は、アサシンではなく足元。無理な姿勢から射った矢だったが、それでもしっかりと弓で引いた矢は、その常軌を逸した威力を発揮する。

そう、それが矢を放った本人の目の前でも。

矢は閃光を放ち、当たった地面を中心に全てを吹き飛ばし地面を抉っていく。当然、アーチャーとアサシンはその破壊の渦に巻き込まれ、五体の自由は奪われ意識は宙へと投げ出された。

アレクシアは斬り込んできた黒鍵を右手でへし折って、シユウジの十数秒に及んだ連撃を止めた。

続けざまに殴りつけた右腕をシユウジは身を反らして躲し、そのまま後方に、ウイリアムの隣へと退避する。

「……なるほど」

アレクシアは体中に切り傷を負い、血を流しながらも二人を見据えて呟いた。

「なるほど、なるほどなるほどっ！」

そして右手に付着した血を舐め、頷いた。

「確かに六日間、遊んでいた訳じゃあないみたいね」

「……彼を引き入れたのは、ちよつとズルい気もしますが」

そう言い、ウイリアムは肩をすくめて見せた。

「アレクシア・ブロッケン相手に、やり過ぎるということもないかと思
いましてね？」

セイバーのマスター、シユウジ・アルバーニ。彼の名前と肩書は、アレクシアも掴んでいる。聖堂教会、代行者。それら単語は、魔女であるアレクシアにとっては大敵とも言える。

だが、それは時計塔の魔術師であるウイリアムにとつても同じはずだ。魔術協会と聖堂教会は水と油、共闘などありえないと高を括っていた。

しかし、現実はこれだ。ウイリアムはアレクシアを殺す為に相容れない二つの垣根を超え、サーヴァントを失おうとしているアレクシアに現状最強の陣営……最もキツイ相手をぶつけてきた。

なるほど。と、アレクシアはその現実に対し、再度確信を得る。

ウイリアム・シン——やはりこの男が私の……最大の敵だ。

「なるほど……ここは退いた方が良さそうね」

そう言つて背を向けるアレクシア。その背に、シユウジは問答無用に黒鍵を投擲した。

しかし——。

「アダム、 出番だ」

と、アレクシアは指を鳴らすと、投げられた黒鍵がパツと爆ぜ、落下した。同時に鳴り響く銃声に、ウイリアムは周囲を見回し始めた。

「その通りよ、 時計塔の魔術師」

そんな彼に、アレクシアは笑いかけた。その背後には数人の影——魂なきアダムの人形達が、どこからともなく現れ起立する。

「聖杯戦争に、やり過ぎる……なんてことはないわ」

こめかみに杭を押し込まれているような頭痛と、腹部から込み上げる吐き気。それがアーチャーを目覚めへと導いた。

「……………」

とにかく、動け。そう体に鞭打ち、アーチャーは体を動かし、その度に自身の制御を取り戻していく。

どうやら先程の矢による爆発によって一般道の方まで吹き飛ばされ、街路樹に後頭部を強打したようだ。よろよろと顔を上げると、凄惨なことになった農地の跡地が前方に確認できた。

そして、足元。アーチャーの右足には、アサシンのハサミが残されていた。どうやら爆発によってアサシン本体から千切れたようだが、未だアーチャーの肉に食らいついている。

「……………」

途端に抱く、強い嫌悪感。アーチャーは頭痛に苛まれながらそのハサミを引き剥がし、遠くに放り捨てた。

奴はどこにいった。ハサミを捨て、ようやくそのことに思い立ったアーチャーはよろよろと立ち上がった。あの爆発で、もう死んだのだろうか。

そう、眼前からぼんやりとアサシンを探していたアーチャー。しかし――。

――どすつ、という不意に彼の背に走った鈍い衝撃と痛み、彼の意識は完全に覚醒し……直後、理性を振り切った。

掠れた、獣じみた咆哮を上げるアーチャー。

それと同時に彼は、矢筒から矢を逆手に引き抜き、体を半回転させながらそれを振るった。

アーチャーの背中にハサミを突き立てたアサシンは、それを伏せることで回避。続いて放たれた矢も、寸でのところで身を翻して躲すが風圧で姿勢を崩し、後方へとたたらを踏む。

アサシンの後方で吹き飛ばされる、山の斜面。アーチャーとアサシンは、五メートルほどの間隔を開けて睨み合う形となった。

アーチャーは荒い呼吸を繰り返しながら、呼吸のたびに五体の感覚が戻ってくるのを感じた。それと同時に痛みや苦しさも、感覚として復活していく。

同様に、アサシンも満身創痍に見えた。相変わらず全身をマントで覆っているが、そのマントもボロ布同然であり、その一部は体液で濡

れている。

すでに治癒魔術による回復を待てる状況ではない。アーチャーは矢筒に手を伸ばす。ここで決着をつけてやる。

と、そこでアーチャーは気づく。

「……そう、残り一本だ」

アサシンは言った。

アーチャーの矢筒に残された、たった一本の矢。それを見ながら、アサシンは続けた。

「凄まじい破壊力をもたらした貴様の矢だが、それも残るは一本……それが尽きた時、お前は どうする？ 矢を失ったアーチャーは、一体どう戦う？」

アーチャーは押し黙る。あと一本。あと、一回……その事実が、昂ぶっていたアーチャーの体を冷たくしていく。

「…………ツ」

当てれば、殺せる。

それは絶対だ。しかしはたして、それが己にできるだろうか。アーチャーは矢羽の感触を指に感じながら、アサシンを見る。あのアサシンに、この矢を当てる……それを成し得た瞬間が、何故かイメージできないう。そしてそれが出来なかった時、弓兵として決定的な敗北を喫するとう確信もある。

それが、恐ろしい。

「…………よく狙え」

アサシンは一層姿勢を落とし、宣言する。

「外せばこの勝負、私の勝ちだ」

「……………」

——負けたくない。その思いが、心に留めていた何かを切り捨てさせた。

アーチャーはゆっくりと、矢筒から手を離す。

そして腰布に差していた物を、柄に布切れが巻かれただけの質素な木棒を抜き放った。

「遊びは終わりだ……殺してやるよ、カルキノス」

アーチャーはそう言うのと木棒を天へと掲げ、告げた。

「真名解放……それは忌むべき、裏切りの物語」

詠唱が、始まった。アーチャーの抑揚のない言葉に呼応し、木棒は天へと……まるで大木が枝を伸ばすように、枯れた枝を伸ばしていく。

そしてアーチャーの手に握られた木棒は、月夜を覆うほどに急成長を遂げた禍々しい根の渦と化した。

「宝具——『逢蒙殺羿リナウンス・ジ・アーチャー』」

アサシンは身構えたまま、陰った空を見上げていた。しかし、その真名を聞き遂げると。

「そうか……」

そう嘆息し、身構えていたハサミを下ろした。

「ならばそれこそ、私の勝ちだよ。アーチャー……いや、逢蒙よ」

その失望したような言葉に、アーチャーは宝具を振り下ろすことで応えた。

空を覆い尽くしていた根の渦は、アーチャーの前方一面を飲み込むように打ち下ろされ、アサシン諸共、全てを叩き潰していった。

アサシンとのラインが、切れた。

アレクシアは林の中で独り、その事実を受け止めていた。

「……『栄光の右手』と人形の損失は、予想外だったが……ククツ」

アレクシアは震え、堪え切れぬとばかりに木の幹に体を預けた。

「良くやったアサシン……勇敢なる刺客、カルキノス」

逢蒙——弓の名手としては、聞かない名だ。

しかしその名は、中国神話にて九つの太陽を撃ち落とした大英雄、后羿の弟子として……そして、その後羿を桃の木で作られた棍棒にて撲殺した不義の弟子として記録されている。その裏切りは、師を亡き者にすることで天下一の弓手へと繰り上がるという迷妄からだと思えらる。

迷妄の弓手、逢蒙——それが、アーチャーの正体。

「掴んだぞ鏡宮悟！ この戦争、私の勝利だッ！」

アレクシアは、天高く哄笑を上げる。

その空には、潰されたアサシンの亡骸、その名残である光の粒がゆっくりと還っていくのが見える。

アレクシアはサーヴァントを失った。しかし、魔女の哄笑は終わらない。

それを象徴するように彼女の異貌の右腕、シユウジとの戦いで裂けた手袋の切れ目から、未だアサシンとの契約の印——令呪が覗いていた。

死して尚、夜空にその栄光を留める。

それが死ぬまで発現しなかったアサシンの宝具『天空の星影イストリア・カルキノス』の基盤であり、真価と言える。

空に輝く星を介し、未だアサシンが脱落したことを聖杯に把握させない。故にマスターあるいは同盟者が残る限り、アサシンの陣営はサーヴァントを失っても尚、聖杯を得る権利を有している。

だからこそ、魔女は哄笑を続ける。この忌むべき物語は終わらない、とことん聖杯を汚してやれる。

自身が灰となるか、聖杯を掴む……その時まで。

サーヴァントデータ集 『第17話時点』

クラス：セイバー

【真名】：エル・シッド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）

【アライメント】：秩序・中庸

【性別】：男性

【身長・体重】：182cm・90kg

【ステータス】

筋力：B＋ 耐久：B 敏捷：A 魔力：D 幸運：C 宝具：A

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【保有スキル】

・カリスマ：C＋

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

レコンキスタの英雄でありながらも、異教徒の者とも親交を持つカリスマ性を生前に示した。

・軍略：C＋

多人数を動員した戦場における戦術的直感能力。自らの対軍宝具行使や、逆に相手の対軍宝具への対処に有利な補正がつく。

・カンペアードール：A－

・対魔力：C

二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼術法など、大掛かりな魔術は防げない。

・単独行動：A

マスター不在でも行動できる。

ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要。

【保有スキル】

・神々の寵愛：E

神々の寵愛により、幸運を除きランダムにステータスが上昇する。

・千里眼：C+

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

神々の寵愛との重ね合いによって暗闇での狙撃も可能とする。

・反骨の相：C

一つの場所に留まらず、また一つの主君を抱かぬ気性。自らは王者ではなく、自らの王を見つける事ができない流浪の星。同ランクまでのカリスマを無効化する。

【宝具】

・尊射日（リップオフ・フォール・サン）

ランク：C 種別：対軍宝具

レンジ：1～99 最大捕捉：9人

大英雄后羿の射日伝説を模した宝具。

后羿が帝俊より賜った赤い弓と白い矢を蓬蒙が奪い取り、師の伝説を基に九本の矢を射る。

射った矢は流星のような速度で飛び、掠めるだけでも突風により周囲を破壊する驚異的な威力を有する。しかし天賦の才で技を模しているだけに過ぎず、伝説の再現には程遠い。

・逢蒙殺羿（リナウンス・ジ・アーチャー）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：1～50 最大捕捉：1人

大英雄后羿を桃の木の棒で暗殺した際の逸話から具現化した宝具。

后羿が討った多くの魍魎や神獣らの念をもって木の棒を変質させ、大木の枝や根を思わせる高密度の一撃を放つ。一撃は誰かに裏切られた経験を持つ者に対し、致命的な効果をもたらす。

*

クラス：ランサー

【真名】：■■■■

【アライメント】：■■■■

【性別】：女性

【身長・体重】：164cm・58kg

【ステータス】

筋力：D 耐久：D 敏捷：B 魔力：E 幸運：A 宝具：C

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

【保有スキル】

・心眼（真）：C+

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

ランサーの場合、特に誰かを護衛する際にプラス判定が加わり、自身の代わりに護衛対象の防御力を上昇させる。

・仕切り直し：B

戦闘から離脱、あるいは状況をリセットする能力。機を捉え、あるいは作り出す。

また、不利になった戦闘を初期状態へと戻し、技の条件を初期値に

・英雄の介添：D

英雄を勝利に導く性質がスキルとなったもの。

魔力を同調させ、対象が行うあらゆる判定にプラス補正を与える。

・勇猛：B

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

・友誼の証明：C

敵対サーヴァントが精神汚染スキルを保有していない場合、相手の戦意がある程度抑制し、話し合いに持ち込むことができる。

イオラオスは生前、自身達の正当性をマラトンにて主張し同盟を勝ち取った。

【宝具】

・大獅子らの運び手（ヘーロース・チャリオティア）

ランク：B 種別：対人（自身）宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人

ヘラクレスが達成した12の難行に同行する中で身に付けた操法。

あらゆる乗り物を取りこなし、宝具等の特異な能力を除き、その性能を最大限に引き出せる常時発動型の宝具。また乗り物に乗っている際は御者への一切の状態異常を防ぐ。

・消されぬ功績（レルネー・フロガ）

ランク：A 種別：対人宝具

レンジ：1〜5 最大捕捉：1人

ヘラクレスとのヒュドラ退治で用いた、再生封じの松明。

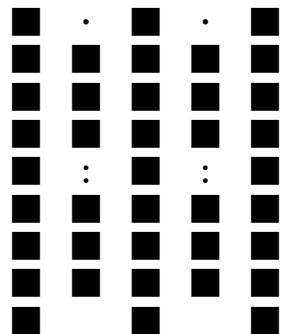
再生する首を焼くことよってヒュドラの不死性を封じ、ヘラクレスのヒュドラ退治の功績を支援した。

あらゆる再生や治癒、増殖を焼くことよって封じることができ
る。その過程として魔術回路の焼き塞ぐ為、発動状態にない宝具や魔
術師の魔術、あるいは幻獣種のブレス等を防ぐことも可能になる。

・ヘラクレス殺し（ヒュドラー・デイリテイリオ）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人



【宝具】

・ ■ ■ ■

ランク： ■ ■ ■ 種別： ■ ■ ■

レンジ： ■ ■ ■ 最大捕捉： ■ ■ ■



・ ■ ■ ■

ランク： ■ ■ ■ 種別： ■ ■ ■

レンジ： ■ ■ ■ 最大捕捉： ■ ■ ■



・ ■ ■ ■

ランク： ■ ■ ■ 種別： ■ ■ ■

レンジ： ■ ■ ■ 最大捕捉： ■ ■ ■

*

クラス：アサシン

【真名】：カルキノス

【アライメント】：混沌・善

【性別】：不明

【身長・体重】：150cm・45kg

【ステータス】

筋力：C | 耐久：E | 敏捷：B 魔力：D 幸運：E 宝具：

C

【クラス別スキル】

・気配遮断：―

保有スキル『気配操作』を得た代償によって失われている。

【保有スキル】

・無辜の怪物：E X

生前の行いからのイメージによって、後に過去や在り方を捻じ曲げられ能力・姿が変貌してしまった怪物。本人の意思に関係なく、風評によって真相を捻じ曲げられたものの深度を指す。このスキルを外すことは出来ない。

カルキノスの場合、その有名とは裏腹に結果が伴わなかったこと――ろくに敵とも認識されず、ただの一撃で殺害されたイメージが発現している。

自身の真名を看破された時点で、その相手に対し常にステータスのマイナス補正がかかる。

特に筋力は自身の放つあらゆる攻撃に毎に判定を行い、失敗した場合ダメージ判定において100%のダメージ削減がかけられてしまう。

耐久に至っては、いかなる攻撃に対してもダメージとは別個に即死判定が働く。

・神性：E

その体に神霊適性を持つかどうか、神性属性があるかないかの判定。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。より肉体的な忍耐力も強くなる。

アサシンは生粋の魔獣であるが、死後その勇気を称えられ、最高位の女神によって天に召上げられたことで低ランクながら発現した。

・気配操作：A

アサシンの唯一と言ってもよい名譽的なエピソード――かのギリシャ神話の大英雄ヘラクレスに対し、奇襲攻撃を与えてみせた逸話によるユニークスキル。

アサシンの持つ気配遮断の効果を変質させ、気配を消すだけでなくアサシンの存在しない場所にその気配を投影する。敵対者は例えアサシンを真正面に捉えていたとしても、背後や上空と言った死角に存在する感覚を打ち払えない。

【宝具】

天空の星影（イストリア・カルキノス）

ランク：C 種別：対人宝具

レンジ：― 最大捕捉：―

カルキノスの死後、星座に召上げられたことで発現した宝具。自身と同一視されるかに座を介して発動する。

カルキノスの消滅後もマスターまたはその同盟者が存在する限り、その脱落が把握されない。この為マスターは令呪をなく奪われず、アサシン陣営として聖杯に認定され続ける。

*

クラス：バーサーカー

【真名】：エギル・スカラグリームソン

【アライメント】：混沌・中庸

【性別】：男

【身長・体重】：195cm・82kg

【ステータス】

筋力：B 耐久：A 敏捷：C 魔力：C 幸運：E 宝具：B

【クラス別スキル】

・狂化：E―A

保有スキル『ベルセルク』により不安定な状態にある。

【保有スキル】

第十八話 『戦いの後に』

何度も、何度も同じ夢を見る。

感じたのは、そこに吸い込まれてしまうかのような圧痛。

見たものは、さざ波のように揺れるアサシンの姿。

聞こえたのは、私の悲鳴……そして私の名を呼ぶ、ライダーの声だった。

それらが、パチンと泡のように消える。

そして、理解する。

——ああ、あのアサシンも、消えたのだな……と。

「……………」

夢を見ていた。何度も、何度も同じ夢を。

しかし、それはどんな夢だったろうか。佐藤はそんなことを考えながら、ぼんやりと目を開けた。

そう……あれは、腕を。

……左腕を。

「……………」

佐藤はパツと身を起こし、左腕に右手を添えた。触れた先、肘より少し先には……何もなかった。

「……………」

右手はそれからゆっくりと肘、肩へと、まるで抱きしめるように左腕全体を撫でていく。佐藤は目を閉じ、そうして失ったものと、まだ残っているものを確認していく。

しかし、想像以上に恐怖も、衝撃も湧き上がらない。

だが、その……ない、という事実が佐藤の全てを包み込んでいった。在って当たり前で、何でも掴めると思っていた——左腕。それが予告もなく、そしてこの先再び取り戻せるはずもない形で、失ってしまった。

何て、呆気ないのだろう。

「……ライダー」

寂しさから、不意に出た言葉だった。しかし、それが佐藤に気づきと覚醒を与える。

「ライダー？　ライダー……!?」

戦いは、彼はどうなった？　令呪は？　私はどのくらい……そもそもここは？　どこかの部屋なのか？

夜なのか、周囲は暗い。佐藤は立ち上がり、手探りで部屋から出ようとする。しかしフラついた体を支えようと壁に伸ばした左腕が短く、側頭部から壁へと強かに打ちつけてしまう。

佐藤はその衝撃に手足の間隔を失い、膝から崩れ落ちそうになる。しかし……。

「……大丈夫ですか？」

と、佐藤は倒れる直前に、前方から抱き止められた。見れば、目の前に凜とした瞳を持つ女性——ランサーが実体化し、その中性的な顔を曇らせて心配そうにこちらの顔を覗き込んでいる。

「ランサー……あの」

「まずはこちらに」

失礼。と、有無を言わず、ランサーは佐藤を先程までいた寢床へと運ぶ。佐藤は自分の脚で立つことも叶わず、されるがままとなってしまう。

「マスターは現在お疲れですので、説明は明日まで待ってください。……あ、何か飲む物をお持ちしましょうか？」

「いや……大丈夫」

そうですか。と、佐藤の答えにランサーは頷き、布団を佐藤に掛けた。

「今は兎に角、お休みください。貴方は自身が思っているよりずっと、弱っているのですよ？」

「……」

良くは分からないが、ともあれ自分は彼女らに助けられたらしい。佐藤はランサーの言葉に、ゆっくりと頷いた。

「では……お大事に」

そう言って頭を下げ、ゆるゆると退室していくランサーだが。

「ランサー……私は、負けたの?」

そう言って、佐藤はそれを呼び止めた。

ランサーはピクツと動きを止め、少しだけ黙っていたが。

「今は戦いを忘れ、御自愛ください」

優しげにそう言って、彼女は静かに霊体化していった。

「……そう」

もう、自分のことだけで良いのか。と、佐藤はぼんやりとその言葉の意味を理解した。それならきつと、ライダーは……もう。

そして目を閉じる。すると、その視界と同様に意識もまた、暗く温かい世界へと沈み込んでいってしまう。

佐藤は意識が暗闇へと沈み切る直前、両の目尻から寢床へと、スツと温かいものが流れたのを……感じた気がした。

もう警戒を解いて良いだろう。と、鑑宮はカーテンを開け放つ。疲れた両目に入り込んだ陽光に顔をしかめた。

「……もう一度聞く、アーチャー」

鑑宮は振り返り、壁を背に地面に座り込んだアーチャーを見やる。

「あの時、お前は確かにアサシンの消滅を確認したんだな?」

「しつこいぞ。鑑宮」

ゆっくりと顔を上げ、アーチャーは乱れた髪の間から鑑宮を睨んだ。しかし、その瞳には以前のような力が感じられない。昨夜での一戦の影響か、アーチャーの自信、覇気は見る影もなく萎えてしまっている。

「奴は俺の宝具で死んだ。お前も俺とのラインで、奴が潰れる手応えを感じたはずだ」

「……ふむ」

鑑宮は嘆息し、机の上に置いてあった煙草の箱に手を伸ばした。

昨夜の襲撃は、アサシンの死を以って危機を脱したと思っていた。しかし霊器盤にてその死を確認したら、彼は未だ脱落していないこととなっていた。

死の擬態、あるいは復活か。勇敢なる刺客、カルキノス——アサシンの真名は把握できている。あれにはそう言った宝具があるとは考えにくい……ともあれ鑑宮は夜を徹して二度目の襲撃に備えたが、アサシンはやってこなかった。

「……なら、考えられるのは生の偽装だな。最期まで見せなかったアサシンの宝具は十中八九、星座に関わる代物だ。奴は本当にアーチャーに殺されたが、星となって今も空に生きている……そんなところだろう」

ふざけた宝具だ。と、アーチャーは吐き捨てた。

「それに、一体何の意味がある？」

「……意味か」

鑑宮は煙草を啜え、火を着けながら思考を深める。そして紫煙と共に、自らの見解をゆるゆると吐いていった。

「暗殺者としての役目を、十全に発揮できる……歴史上、暗殺者は使い捨ての手駒が常だ。それを失った時点で敗れる戦争など、本来はありえない」

「……」

「つまり、サーヴァントを失っただけで……アサシン陣営は負けてない。そのマスター、アレクシア・ブロッケンの息の根を止めるまで、奴らはこの戦争に関わっていることになる。少なくとも、聖杯はそれを許している」

しまったな。と、鑑宮は煙草をくの字に折り、自嘲した。

「我々はマスター殺しのアサシンを排除した代償に、真名を漏出させてしまった訳か……」

あの時、アーチャーが宝具を独断で解放しなければ……そう思わずにはいられないが、悔やんでも仕方がない。それに、あそこでアーチャーが宝具を使わなければ、下手をすればこちらが脱落していた。

「……はっ！ してやられたな、鑑宮……っ！」

アーチャーはそう笑うと、こちらを見やった。

「……で、次はどうするっ！」

鑑宮はその態度に苛つくも、それを隠すように肩をすくめた。そし

て、灰皿に曲げた煙草を放り、次の煙草を吸い始める。

「今、考えている」

……しかし、ここまで使えない奴だったとは。と、鑑宮はアーチャーを一瞥した。落胆し座り込み、アサシンを弓で討てなかったという無力感を引きずっている。

それがどうした。鑑宮はそう思うも、言葉にはしない。それは自分にとって、口にするまでもないことだった。

自分が無力だろうと、現実というものは待つてはくれない。この世は本質的に弱肉強食だ。しかし捕食者にとつて獲物か否かの判断基準は、それ本来の実力でなく動けるか、否かという点だ。

例えどれだけ強かろうと、動けないのならば獅子でも鴉に食われてしまう。それなら動けない英雄より、立っているだけの案山子の方が余程マシというものだ。

そう、いつだつて鑑宮はそう信じてきた。無力感も必死さも、仮面の内側に押し込んで仮面の表側だけを見せつける。だからこそ強大な世界と、分不相応にも戦ってきたのだ。

鑑宮は弱気を煙の中に隠しながら、考えを巡らす。

……アーチャーの弓の腕にはそれほど期待してはいなかったが、真名が割れたとなるとそれに頼ることも必要になるだろう。

しかし、まだ攻勢に出る訳にはいかない。まだ不確定要素である陣営が多すぎる。少なくとも、『欠片』を手中に収めるまでは……。

そう考えていると、ケータイが鳴った。バーサーカーのマスター、レオポルディーネ・ミローネから電話のようだ。

「……おはよう、ミローネ君。何かあつたかな？」

鑑宮は深呼吸をして心を落ち着かせ、電話に出た。

そして彼女からの報告を受ける。

「……そうか。じゃあ、機会があれば今夜にでも仕掛けてくれ」

鑑宮はそう応えて、その悦びを拳で静かに握り潰した。

「今夜に……つて、いや無理でしょ」

通話を切ったケータイをポケットに押し込み、レオポルディーネは

げんなりとした様子で呟く。

夕刻。彼女は郊外にある土手の脇に車を止め、視界いっぱい広がっている住宅の一軒を観察していた。

やる気のないその言葉を、隣にいたバーサーカーが耳聴く拾い上げ。

「無理なのか？」

「無理なの」

「本当に？」

「ほーんとーうにー」

鑑宮から再度『欠片』の回収を指示され、早くも五日経つ。二人は探知用のルーンで魔術的な痕跡を探り、追跡魔術を駆使し、時にはしぶとく隠れ潜んでいた不参加の魔術師と遭遇してしまっただが為に無駄な労力を割いたりもした。

そして今朝方、この郊外で嫌に目立った魔術結界を張った一軒家を見つけたのだが……。

「罨でしょ、こんなの……ねえ、バーサーカー。あれだけ逃げ隠れしていた運び屋が、あんな分かりやすい工房を作ると思う？」

レオポルデイナーネは愛車フィアット500Cの窓から身を乗り出し、指で作った双眼鏡で件の家屋を観察している。傍目から見たら遊んでいるようにも見えるが、これでも魔術でしつかりと望遠機能を作っている。

「どうだろうな……連中、意外と切羽詰まったのかも知れねえぞ」

そう言うバーサーカーは、外された天蓋部分から上半身を飛び立たせ、パンをモソモソと食べながら川辺にいる鴨の群れを眺めている。

「……確かに、ライダーのマスターを助けたって話もあるし、籠城する覚悟を決めたって可能性もあるのよね……」

「この国にはパフィンはいねえのかな……」

「あのペンギンみたいなやつ？　いないわよ……でも、仮に同盟が結ばれていたとしても、ライダーを失ったマスターを助ける義理はないじゃない？　それにキャスターやアサシン陣営の罨って可能性だって当然ある訳でね？」

「おいレオ、あのデカイ鳥は何だ？」

「あれは鷺い……っ！ つていうか、聞けッ！」

それと、ミローネって呼べ！ と、レオポルディーネは身を捻って天井部分に乗り出して怒鳴る。

「そもそも！ 何で私のパン食べてるのよ!?!」

「俺のを食い終わったから」

「あんたには必要ないでしょう、おいこら使い魔あー！」

怒り狂い手を伸ばすレオポルディーネから離れるように、バーサーカーは背を反らしてパンを遠ざける。そして全てのパンを食べ終わってから、口を開いた。

「で？ もう一つの報告は？ 電話じゃ、結構驚いていたじゃあねえか」

「……アーチャーがアサシンを落としたそうよ。宝具か何かで、靈器盤には感知されてないそうだけど」

その情報に、バーサーカーは意外そうに顔をほころばせた。

「俺を他所にあのキザ野郎、楽しんでいるみたいだな」

「何はともあれ、これで残るサーヴァントは五騎。そろそろ私達も、この仕事を終えないといけないわよ」

「そうかい……まあ、あのランサーを誰かにくれてやるのは惜しいな」
よし。と、バーサーカーは結界を張った家屋を見やる。

「明日までに状況が変わらなければ、こっちから仕掛けるぞ」
「ふん……今夜じゃなくて、いいわけ？」

「今回はきつと、どっちかが死ぬまでやり合うんだ。お前も準備があるだろ？ 色々とな」

「……………」

レオポルディーネは、呆気からんと言われたその台詞に言葉を詰まらせた。

数日間、バーサーカーとランサー達の追跡を続けてきたが、それが終わる……そして終わるということは、どちらかが死ぬまでの殺し合いが始まるということだ。

覚悟を決める必要がある。しかしその必要性を、バーサーカーに言

われるまで自覚していただろうか。

レオポルディーネは彼を見上げている。その度に、この怪物のような顔立ちの狂戦士は本当に狂人かどうか、己に問いているような気がするのだ。

「……そうね」

素直にそう言つて、レオポルディーネはそのそと車外に出て、思いつきり伸びをした。

「……それにしても、結局アサシンとは会わなかったわね」

「それなあ……残念だ」

「どんな英霊だったのかしら？」

「アサシンだから、どうせ友達の少ない根暗だ。だが俺様と友達になつてりゃ、もう少し派手に死ねたらうな」

「なにそれ？」

レオポルディーネは川辺に目をやる。その視線に気づいたのか、あるいはそういう時間帯なのか、水鳥達が西の空へと一斉に飛び立った。

夕日に溶けていく八羽の影は美しかったが、レオポルディーネには少し不気味で……何か良くないものを見たような気がした。

如何に根源を目指す魔術師とて、食事は必要である。

ウイリアム・シンは、駅前のデパートで惣菜を買い漁っていた。

「ウイリアム君、昨日の今日で……こんな所で買い物しても良いのかね？」

そう尋ねるのは、霊体化しているキャスターだ。その問いかけに対し、ウイリアムは柔和な笑みで応える。

「こんな時、だからですよ。こんな所でアレクシア・ブロッケンが襲ってきたら、他の陣営も素早く反応できる。そうなればセイバー達が、彼女を斬り伏せてくれるでしょう」

「その抜け目のなさは買うが……私が言っているのは、君の体調だよ」

嘆息するキャスターの言葉を笑い飛ばし、ウイリアムは目についた

揚げ物を手に取る。そして、溜息と後にこう続けた。

“……しかし、あの魔女をあそこで取り逃がしたのは痛手ですね”
“やはり互いのサーヴァントを使わずに、という協定は足枷でしかなかったかも知れないね”

“そうですね……いえ、だけどそれがなければ、共闘するのさえ難しかったでしょう”

一昨日、ウィリアムはライダーが死んだ現場を調べていたセイバーのマスター——シユウジ・アルバーニと接触し、共にアレクシア・ブルツケンと戦う同盟関係を構築した。

時計塔の魔術師と、聖堂教会の代行者。相容れない組織に属しながら、それでも共闘の関係を結べたのは、一般人を容赦なく聖杯戦争の犠牲者とするような、そんな共通の敵が現れたからに他ならない。

しかし、苦労も当然あった。魔術師であろうと瞬く間に殺せてしまおうだろう最優のセイバーと、聖杯戦争の開戦と同時に襲撃を始めたキャスターが背中を預ける……そんな状況をシユウジの方が許容しなかったのだ。

“苦肉の策として提案した、マスターだけでの共闘戦線……それでも代行者を味方につければ、あの魔女を落とせるだろうと思っていたんですよ”

事実、あの代行者の実力は本物だった。しかし、想定外なことが二つも起こった。それは、アレクシアが想像以上の変貌を遂げていたこと、そして彼女が逃げる際に囮としたゴーレム達だ。

あのゴーレム、使い捨てた割に性能がやたらと高かった。恐らく以前にどこかのゴーレム使いから奪い取ったものだろう。あの魔女がゴーレムを使うなんて話を、時計塔にいた頃には聞いていないし、新たに猛威を奮った異貌の力とも毛色が違う。だから、アレは文字通り使い潰して、終わりだ。ゴーレムの残数がどれほどかは分からないが、増えることはないと言える。

なので、懸念すべきは……あの異貌の力だ。対策は早急に打たねばならない。

“……とは言え、セイバーらが魔女を追ってくれるというのは、ア

レクシア打倒の中で大きな一手でしょう”

ところで、ウイリアムは味噌漬けを物珍しそうに手にしながら、キャスターにこう切り出した。

“そのセイバーですが、直接会ってみてどうでした？”

“……どう、とは？”

“以前、彼に勝てるかと仰ってましたが……”

“……”

ウイリアムの質問に、キャスターからの念話が途絶える。

流石に無作法だったか。どう言い繕うか、ウイリアムは少し慌てた頃。

“熟練の、真の剣士。巨大に成長した樹木のようにだったよ”

そう、キャスターはセイバーについて語り始めた。

“マスターを守る為の立ち振舞い、自然な重心の置き方。醸し出す風格や相貌……一朝一夕で出来るものではない”

“才能有りき、ではないと？”

“そうだ”

そう断言するキャスターだが、いずれ倒すべき敵の能力を評価しているのにも関わらず、その口ぶりは嬉しげであった。

その様子に気づいたウイリアムは、口端を上げる。こんなに嬉しそうなキャスターを、初めて見る。

“勝てますか？ そのセイバーに”

“……そう、だね”

ウイリアムの問いに、キャスターは我に返ったように言葉を詰まらせるも、咳払いをし。

“それが、聖杯を得る為に必要ならば……だが私はキャスターだ。リスクが低い手段が他にあるなら、私はそちらを選ぶよ”

“そう結論づけるキャスター”。

“まあ……貴方がそう言うなら。とにかく、今は魔女に専念しましょうか”

と、ウイリアムは肩をすくめ、再び数日分の惣菜選びに専念した。

「まだ起きているのか」

読水はそう静かに戸を開け、呆れたように佐藤に言った。

佐藤は寝床から体を起こして、今朝からずっと物思いにふけっていた。そしてようやく、その考えが纏まろうとしていた。

「少し、考えてたんです」

と、佐藤は口を開いた。

「あの時、二手に別れたのはやっぱり悪手だったんです。相手がアサシン、察知されることなく敵を殺すプロだと分かっていたのに、いざとなれば令呪でと呼べるからと高を括ってしまっていた」

「……佐藤」

「だからあの時は二人と合流するまで、周囲の人を助ける方向……守りの姿勢が正しかったと思うんです。マスターとアサシン、片方を追っても『気配操作』で逃げられるか、令呪での呼び寄せで奇襲される可能性がありますし……私達が捕捉されている限りは……」

「おい……」

読水は苛立ったように、佐藤の黙らせた。

「分かっているはずだ……反省したって、もうどうにもならない」

「……でも」

「お前は、もう……負けたんだ」

——負けたんだ。

その言葉に、佐藤の目から堰を切ったように涙が溢れた。

佐藤はせめてと、両手で顔を覆いそれを隠す。そして、ゆっくりと頭に浮かんだことを吐露し始める。

「……この数日間、夢を見ていたんです」

震えた声も、抑えようと努力したが収まることはない。それでも、佐藤は続けた。

「寝ている時も、ライダーと一緒にいる時も……でも、それは夢だったんですね」

もう、覚めたんですね。そう、佐藤は言った。

その台詞に、読水は言葉を返さない。どんな顔を、彼はしているのだろうか。佐藤は両手を離し、読水を見た。

彼は顔をしかめ、目を閉じていた。しかし、ゆっくりと被りを振り。「違う」

と、佐藤の言葉を否定した。

「お前が見ていたものも、あのライダーも……夢でも、ましてや幻なんかじゃあなかった……ただ、失っただけだ」

「……………」

「お前は……………」

読水は顔を上げ、何かを言い淀む。そして、佐藤に背を向けた。

「……………とにかく、今は休め」

そう言って、読水は部屋から出た。佐藤はポロポロと溢れる涙を隠すことなく、それを見送る。

分かっている。佐藤は頷いた。

読水が言い淀んだ、台詞の続き。彼はきつと優しいから、言わなかった。だが、その現実はずでに……ようやく、佐藤は気づけた。

——私が見ていたものも、あのライダーも、れっきとした現実だった。

——ただ、失った。

——私が負けたから、奪われたんだ。

それが、敗北、というものなのだろう。

第十九話 『ここから』

血を洗い落としたばかりの、生乾きの制服。やはりというべきか、それは独特の臭いが……獣臭さが鼻をついた。

深夜、制服を着た佐藤は、重い体を引きずって玄関へと向かった。

「ど、どこに行かれるのですか……!? い、今は……」

背後からランサーが駆け寄り、静止を促すも佐藤は止まらない。熱に浮かされたように、フラフラと体を玄関へと倒れ込んでいく。

もうすぐサーヴァントが来る。と、佐藤は読水の言葉を耳聴く聞き目覚めた。ならばその前に……否、もう来ていたとしても。

「……どこへ行く気だ？」

佐藤が土間へと踏み入れようとした時だ。奥に籠もっていたはずの読水が、背中から声を掛けてきた。

「まさか、今から帰る気か？」

「……私はもう、この聖杯戦争から脱落したんです」

佐藤は振り返りもせず、そう答えた。

「助けてくれたのは、本当にありがとうございます。でもこれ以上、迷惑をかけることはできない」

「迷惑になると考えるなら、まだ出るな」

外にサーヴァントを連れだした奴がいる。と、読水はそう告げた。

「お前が負けだと認めても、全員がそう思ってくれる訳じゃないんだ。他のサーヴァントと再契約できる以上、お前が死ぬまで勝ったとは思ってくれないぞ」

「なら敗者は、勝者の言う通りにするのが……筋、というものじゃあ？」

そう言って、佐藤は読水を見やる。読水は佐藤の顔を見ると眉をひそめ、溜息をついた。

「……まあ、気持ちは分かるさ。惨めな自分を晒すくらいなら、もう全部捨て去りたいよな……だけどお前は、ここから勝てるんだよ」

「ここから、勝てる……？」

意味が分からずに呟いた言葉に、読水は頷く。そして佐藤へと、事も無げに歩み寄っていく。

「負けても死ななければ次がある。何度負けても……最後に勝てれば、きつとこの惨めさも乗り越えられるさ」

乗り越えられる。

その言葉に、佐藤は息をのむ。そうしていると、読水が佐藤を追い越し、屈んで靴を履き始める。

佐藤はその背中を、ただ黙って見下していた。説得する為だけじゃない、読水はまた……戦いに行く気なのだ。ここから出ていくのは、こんな自暴自棄な女じゃあない、戦いに行く俺なんだと言わんばかりの、その背中……。

彼の多くを知る訳じゃあない、しかし負けを知らない訳じゃあないのだろう。この聖杯戦争において、彼は決して強くない。なのに、なぜあんな風になれるのか。

佐藤は気がつくつと、ランサーに支えられて部屋へと戻されていった。しかし佐藤は気づかず、ただ読水のその背中を焦がれるように見つめていた。

「先ほどの言葉、感銘を受けました」

読水とランサーは佐藤を残し、郊外の暗い夜道を歩く。ランサーはそう読水に伝え笑いかけるが、対する読水は顔をしかめたままだ。

「……あれは、ほとんど嘘みたいなもんだ。柄にもなく、勝ちとか負けとかべらべらと……」

本当は、あんなことを言うつもりじゃあなかった。ただ適当に慰めるだけでも、何ならランサーに力づくで眠らせても良かったはずなのに……本音で向き合ってしまった。ただの小娘に、肩入れし過ぎだ。「……あいつは勝負すらしていない」

そんな思いとは裏腹に口をついたのは隠すべき、隠したい本音だった。

あの悲壮な泣き顔のせいか。と、読水はもう構わないかと頭を搔

き、最後まで心情を吐露する。

「あいつはただ、この戦争に巻き込まただけだ。何も賭けてない奴がこの戦争に参加する資格はないし、何かを失う必要もなかった」

「……………」

ランサーは読水の言葉に、意外そうに目を丸くさせたが。

「……………左様です」

そう微笑み、頷いた。その笑みがまるで年上に茶化されたようで、読水はフンと鼻を鳴らした。

「……………それに俺は、負ける気はない」

と、読水は告げると、立ち止まる。すでに住宅地から離れ、辿り着いた山沿いの空き地は長いこと工事中のようで、隅に錆びた足場板が積まれていた。

っ。

「俺にはこの戦争が……………最後なんだからな」

そう言つて、読水は目を細め、口端に僅かに釣り上げた。

「マスター、最後にはしませんよ」

ランサーはそう言つて読水の傍に控え、武装を実体化させた。そして槍の柄頭を、ドンと地面に下ろす。

「私が護ります」

読水とランサーは顔を見合わせる。それから読水は顔を伏せ、ランサーは肩をすくめて笑った。

そして——正面の敵を睨む。二人の眼前には、数日前に矛を交えたバーサーカーと、そのマスターである背の低い女性——レオポルディーネ・ミローネがいた。

レオポルディーネ・ミローネ。顔を合わせるのは初めてだが、彼女のことはアダムからの情報で知っている。イタリア出身の、ルーン魔術の使い手。低い背に、派手な金色の巻き髪。組んだ腕の中に差し込んである、植物の蔓が巻き付いた意匠の杖……………これは情報にはなかったが、こんな場に持ってきた以上は一族秘蔵の魔術礼装だろう。

そして、バーサーカー。真名をエギル・スカラグリームソン、鬼才のベルセルク。打ち寄せる高波のように強大で、冬の海のように予

測不能……前回の戦いで真名と手の内を知った以上、対策は可能な限り行ってきた。しかし、それがどこまで通じるかは分からない。

「……………」

ならば……やるなら、あちらか。読水は僅かに膝を曲げ、右手を緊張させる。

「……………人払いは済ませたわ!」

と、読水の思惑を知らぬレオポルディーネは、肩をそびやかして声を張り上げた。

「ランサーのマスター、読水竜也ツ! 貴方とは魔術師同士、正当な決闘を……………」

しかし言えた口上は、それだけだった。

読水はレオポルディーネの口上を隙と見て、彼女を上着で隠した左脇のリボルバーで抜き撃つたのだ。

しかし撃ち込んだ弾丸は、読水の機微を読み取っていたバーサーカーの斧によって払い落とされてしまった。

「何をするかと期待して見守ってみれば、アホか……………んな容易く、終わらせる訳ねーだろ」

そう小馬鹿にするバーサーカーに、読水は舌打つ。また、隣にいたランサーは汗をかきながら、チラリと読水を見る。

「……………魔術師同士、正々堂々では?」

「人払いは確かに済ませてある。なら、やり方で誰かに批判を受けることもない」

「御意」

と、ランサーは理解が半分、わだかまりが半分と言った様子で視線を敵へと戻した。

「な……………な……………」

そして斧の刃の腹で弾かれたとは言え、腹部に弾丸を受けかけたレオポルディーネは信じられないというように口を戦慄かせていた。

「……………ふ、不意打ちでそんな武器を使って、それで魔術師のつもり!? 読水竜也、貴方に魔術師としてのプライドはないの!?!」

読水は黙って、鞆を持った左腕を台座にして拳銃を固定した。何を

言われようとこの戦闘、マスターを狙うのが最も効率が良いと読水は判断した。その不遜な態度に、レオポルディーネは更に激昂する。

しかし、そんな読水にランサーは念話で注意を促した。

「マスター、御注意ください。バーサーカーの視線が……」

「視線……？」

「何か、企んでいます」

何を？ と、読水はバーサーカーを見た。そして、ギョツと肩を浮かせた。

バーサーカーはギョロギョロと視線を忙しなく走らせ、周囲を隈なく見回していた。それに伴って彼の恐ろしげな顔に、意地の悪そうな笑みが浮かび上がっていく。

その様子に、読水も察した。これは、確かに何かを企んでいる顔だ。

「ククッ……ま、これがベストだわな。よし……」

先手を打つべきか。逡巡する読水を他所にバーサーカーは呟く。

そして……彼はレオポルディーネの腰に手を回すと。

「マスター、着地任せたッ！」

そう叫ぶや否や、彼女をボールでも投げるように放り投げた。

「は？」

これには当のマスターも予想外だったようで、意味も分からない様子で彼女は宙へとその小さな体を踊らせ、そして悲鳴を上げながら遠くの建物の陰へと消えていく。

「……………」

呆気にとられる読水とランサーに、バーサーカーは笑みをみせ。

「これで、立場が逆転したな。命を脅かされるのは、お前だ」

暴れまくってやるぜ。と、バーサーカーは斧で読水を指した。

なるほどと、読水は歯噛みした。ランサーの速度と自分の拳銃ならばバーサーカーと戦っている中、マスターを狙えるものと計算していた。しかし、バーサーカーはそれを防ぐばかりか、読水の方をバーサーカーの狂暴に巻き込む方向に話を持っていった。

これがあるから、この男は厄介だ。読水は歯噛みする。この男は、バーサーカーと呼ぶには少々……悪知恵が働きすぎる。

“……マスター”

“作戦変更だ、ランサー”

読水は油断なく拳銃を構えながら、一歩ずつ後ろに下がる。

“俺は向こうのマスターを押さえる。お前はこいつの相手をしろ”

“行かせるかよ……!”

読水の後退に、そう笑って前に歩み出るバーサーカー。

しかしランサーは左手で印を結び、彼我の合間に積まれていた足場板を横合いから飛来させた。網状の足場板は互いにぶつかり合って跳ね回り、耳を塞ぎたくなるような金属質の反響音を立てる。

「マスター、今のうちに!」

「任せたぞ、ランサーツ!」

二人はそう声を掛け合うと、読水は踵を返してレオポルディーネが飛んでいった方向へと駆け出した。

しかし……と、読水は走りながら眉間にシワを寄せる。変則的にマスターを潰せば良いと考えていたプランが、今となつてはサーヴァント対サーヴァント、マスター対マスターと伝統的な展開へと落ち着いてしまった。

だが、やるしかない。読水は決意を固めると、手に馴染んだ鞆を尾のように引きながら、本腰を入れて走り始めた。

読水が立ち去るのを、バーサーカーは気に入らなそうに見送っていたが。

「……ふん、まあ良いさ。こっちはこっちで楽しめば」

そう言つて、バーサーカーは片足を上げ、ランサーとの間に転がった足場板を踏み潰した。

「そろそろやろうか。第二回戦だ、ランサー」

ランサーはその物言いに頷き、槍を構えた。槍自体を手元に引き寄せ、穂先を旗のように立てた……それは五行の構えが一つ、八相の構えに似ている。

対してバーサーカーは斧を両手で持ち、地面と平行に提げる。そし

て僅かに体を上下させながら、肩で呼吸を始める。

息遣いさえ感じさせない、ピシリと張り詰めたランサーの静の構え。今にも飛び出さんばかりの、野性的なバーサーカーの動の構え。

だが戦いの口火を切ったのは二人。それも、同時にであった。

掛け声と咆哮。そして振り下ろされた互いの得物はしかし、横にズレて地面へと落ちる。

速度で優るランサーがバーサーカー初動を抑えた。頭上に叩きこまんとした斧を更になら十字槍で押さえ、軌道を誘導し、打ち下ろしたのだ。

卓越した槍捌き。バーサーカーは間髪入れずに右手を柄から外し、裏拳をランサーに振りつける。ランサーはそれを、身を反らしながら飛び下がって避け、どころかその右腕を下がり際に十字槍の横刃で引き切った。

しかし、それくらいでバーサーカーが止まるはずもない。バーサーカーは左肩から倒れ込むように前に出て、左手一本で鋭く斧を突き出す。ランサーはそれも、パツとしゃがむことで辛くも回避。渾身の突きを頭上で掠らせた。

結果、脇の下……左半身の全てを晒したバーサーカー。心臓さえ狙える絶好の位置に付いたランサーだが、彼女はそれでも踏み込んで槍を突き出すことはしなかった。ただ後ろに下がり、バーサーカーの脇下を引き切る。

脇の下は太い血管が流れる、故に人体の急所であるもの……心臓部と頭部の霊格のみを急所とするサーヴァントにとつては弱点足り得ない。

しかし、吹き出す血による大量の失血は、バーサーカーから体の自由を奪うには充分な効果があった。

バーサーカーの左腕は手にした斧の重さに堪えきれず、力なく下へと垂れる。これまで後方に引いていたランサーは、それを確認するや一転、前へと飛び込み槍でバーサーカーを乱れ突きにする。

ランサーは以前の戦いで学んでいた。前に出ても、いつかは力と体格差で押し潰される。猛進を常とするバーサーカー相手に、踏み止

まっつて槍を奮うも下策。ならば、引いて戦う……敵が攻撃の為に差し出した四肢を十字槍で引き切つて、勝機を待つ。

そして勝機は、つまりこの時だ。

そう判断し、マスターによる治癒魔法で腕が治らぬうちにと猛攻を仕掛けるランサー。バーサーカーは右腕で心臓と頭部を守りしながら、その攻めにただ堪えていた。

「yrr」

バーサーカーがそう叫ぶや否や、彼の左腕から流れていた血が淡い光となって宙に溶けていく。

宝具『歯と舌スカルド・サガ』——叫ぶことで効果を発揮する、バーサーカーの固有のルーン魔術。

ランサーはバーサーカーの叫びにビクリと反応し、後方へと急速に退いた。そしてそれを追うように、彼女が先ほどまでいた空間を斧が切り裂く。

ユルユルと滑るように摺り足で下がり、ランサーはバーサーカーの左腕だけで斧を振り抜いたこと……つまり、傷が完治しているのを確認する。

「お楽しみだったのに、悪いな」

バーサーカーはそう笑い、斧をブンと振りつけた。

「復活しちまったぜ？」

「……yrrユル。イチイの木、死と再生のルーン。マスターの治癒に、自身の回復を上乗せしましたか」

ほう。と、意外そうな声をバーサーカーは上げた。

「お勉強したのかい？」

「ええ……即効性の高い貴方のそれは、私にとってはかなりの脅威でしたので」

ランサーはそう言うと、槍を中段に構え直した。

「先の戦いで使った二種類……貴方のルーツである北欧ルーン十六文字と、共通ルーン二十四文字。合計四十文字、全てこの頭の中に入っています」

宝具『歯と舌』は刻むことで効果を発揮するルーン文字を、叫ぶこ

とで発動する異例のルーン魔術だ。

しかし口にする以上、それは他者にも発動されるルーン文字は何なのかは知れる。それは必殺技を大仰に叫ぶコミックのヒーローと同様……タネが割れていれば、対策も利く。

加えてバーサーカーは、これまでルーン文字を複数合わせて詠唱したことはない。つまり最初の発音さえ聞けば、どのルーンを使うか、引いてはどのような魔術を使うかまで把握できる。

そこまで気づけば、ランサーにとって後は容易い。ただ勉強し、計四十のルーン文字それぞれの対策を個別に練れば良い。

「これで我がマスターがおらずとも、その宝具の出鼻を挫くことができ」

「……なるほど、ああそうかい。これだから、真面目くんは……」

バーサーカーは項垂れ、肩をすくめる。

「ははっ、あー……ちよつとヤバくなってきたか？」

そして彼は微かに、苦笑いを浮かべた。

防御術式を事前に組んでいなければ、本当に死んでた。

とある高校の校庭に着弾したレオポルディーネは、四つん這いになりながら怒りと恐怖に身を震わせていた。

「うえつく……あんのクソサーヴァントおおお……ッ！」

レオポルディーネは叫び、ヨロヨロと座り込んで周囲を見回す。

どうやら、ここは昨日に来た高校のようだった。十年前に在校生の多くを襲った土砂崩れのせいで、廃校の危機に瀕したのを何とか立て直したという……しかし生徒数の激減はどうしようもなく、使われていない教室が多くあった。

だからレオポルディーネは、ここを緊急時に逃げ込める仮拠点の一つにした。夜中警備員にバレないか、日中刻んだルーンが生徒に見つかからないかとヒヤヒヤしたものだが……。

「ふん……まさか、早速役立つなんてね」

バーサーカーはどうやら、ここで勝負しろと言いたいらしい。幾つもの罠を張り巡らしたここなら、敵のマスターよりは優位に戦える

と。

馬鹿にしゃがって。と、レオポルディーネは心の内で毒づいた時だ。すぐそばで、フェンスの金網を揺らす音が聞こえた。

ビクツと音がした方向を見ると、ランサーのマスター——読水竜也が息を切らして金網を掴み、フェンス越しにこちらを睨んでいた。

「……あ、ヤバ……っ」

レオポルディーネはワタワタと、そばにあった杖を掴んで校舎へと走り出す。読水もまた、その様子を見るなり校門の方へと駆け出した。

どうしてこうなった。と、レオポルディーネは走りながら考える。元々、読水竜也が持つ『欠片』を奪い取るのが自分の任務だったはずだ。

それが、気がつけばこちらが追われる側になっている……一体、どこで何を間違った。

だが……構うものか。と、レオポルディーネは昇降口を通り過ぎざまに壁に刻んだ小さなルーンに触れ、時間稼ぎ用の簡易結界を張る。結果として、この手にその『欠片』とやらがあれば良い。それなら、誰にも文句は言わせまい。

それに、こうして罫を多用し逃げていれば、魔力を温存できる。レオポルディーネは廊下の角に身を隠しながら、バーサーカーとのラインで向こうの戦況を確認する。

どうやら、かなり追い込まれているらしい。ならば彼は、バーサーカーとしての本領を發揮していくはずだ。

そうなれば、魔力はそちらの方に供給せざる得なくなる。

「そうよ、ここからよレオポルディーネ・ミローネ……ここから」

下手したら、死ぬかもしれない。レオポルディーネはその恐怖に堪えながら、深呼吸を繰り返して自分に言い聞かす。

「ここからが本番……バーサーカーのマスターとして、辛いところよ」

ランサーとバーサーカーの戦闘は、白熱の一途を辿っていた。

咆哮を上げ、地面を踏み鳴らしながら斧を奮うバーサーカー。それ

に対し、ランサーは距離を正確に見極め、バーサーカーの四肢のみを下がりながら引き切る。

「クガアツ……h a g a l a z ハガラズ！」

バーサーカーは、ランサーが背後に散乱していた足場板を振り返ることなく飛び越えたのを見計らい、宝具『歯と舌』を発動させる。

h a g a l a z ……既に食らった技だ。バーサーカーの握られた右手に現れる、幾つもの氷粒を意識しながら、ランサーは足場板の残骸を蹴ってより後方に飛び跳ね印を結ぶ。

そして、バーサーカーによって投げつけられた氷の礫は、ランサーが宝具によって浮き上がらせた足場板の盾によって次々防がれた。それどころか、ランサーはその浮き上がらせた足場板を次々にバーサーカーへと飛ばしていった。

バーサーカーの腕に、腹に、太ももに、幾つもの金属板が打ち込まれていく。しかしバーサーカーは顔面に飛んできた足場板を払い除け、獣のように吠え狂気を剥き出しにランサーへと向かっていく。

しかし彼の突進に、十字槍の柄頭が合わせられた。ランサーは十字槍を回し、バーサーカーの顎を強打、跳ね上げる。

咆哮が呻きに変わる。しかしランサーはあくまで冷徹に、顎を跳ね上げ上体を反らしたバーサーカーの状態を隙有り、と判断した。

そうして、バーサーカーのこめかみに十字槍の穂が叩きつけられる。

ザクリとした痛々しい音と共に、血飛沫が地面に飛び散った。

「グオツ……ガアアアツ……」

「……………」

あんな一撃を貰っても、未だ倒れないとは。

しかし……ここらが、限界か？ ランサーは槍に付いた血を払い、中段に構える。一方のバーサーカーは苦悶の声を上げながら、立つので精一杯と言った様子で体を痙攣させていた。

「終わりだ、バーサーカー」

ランサーはそう告げると、一気に間合いを詰めた。

狙うは彼の心臓部。一撃でその胸部の筋肉を貫き、霊格を破壊す

る。

そう決めて掛かったランサーだったが、その目論見は途中、自身の直感によって遮られた。

バーサーカーに苦悶の様子が消え、間合いを詰めるランサーを見やった。その眼差しの怪しい光に、ランサーの体は本能的に逃げることを選択したのだ。

地面を蹴りつけ、前に出た体を押し止めに掛かる。しかし勢いは死なず、ランサーの体はそのままバーサーカーの方へと、槍は彼の心臓部に突き刺さってしまう。

しかし、貫けない。刃は僅かにバーサーカーの胸に食い込むばかりで、そこを支えに、ランサーの突進までも止めてしまった。

「……………ッ!?!」

槍に伝わる手応えで分かる。皮膚の硬さ、筋肉の弾み……………それらが以前とはまるで違う。

一体何が……………と、ランサーは前を見る。そしてバーサーカーがゆつくりと右拳を握り締めているのを見るや否や、彼女は後方に夢中で飛び下がった。

振り上げられた、狂戦士の鉄拳。それをランサーは槍の柄で受ける。しかしランサーの体は容易く宙を舞い、ランサーは肩が外れたと思うほどの衝撃に体の自由を奪われていた。

ランサーは受け身を取って、地面を転がる。そして痺れる体に鞭打って膝立ちの状態で槍を構えた。バーサーカーは棒立ちの状態で、顔を伏せたままであった。しかしその体から、尋常でないほどの湯気が立ち上っているのが見て取れた。

体温の上昇……………いや、アレか。ランサーは確信した。

かつての戦いで、割って入ったセイバーを一瞬ながらも追い詰めた彼のもう一つの特質——狂化の上昇だ。

先ほどの、拳での一撃は普段のバーサーカーの膂力を凌駕していた。マスター権を持つ読水がない為、正確には分からないが……………彼は今、狂化スキルと共にステータスの幾つかが格段に上昇しているはずだ。

「終わり……ではない。ここからか……」

ランサーは白い息を吐きながら、槍を支えに立ち上がった。

ここからが本当のバーサーカー戦。前の戦いでは辿り着けなかった境地だ。そして生前を含めても初めて、ランサーは西ヨーロッパを支配した狂戦士というものを相手取ることになる。

バーサーカーは、月夜に向かって吠える。

ビリビリと空気を震わせて咆哮を上げるその様は、まさに獣のものだ。それに良く見れば、その体は以前よりも大きくなっていくようにすら見える。

「……」

ランサーは口元を手甲でぐしぐしと拭い、穢れを払うように槍を振るった。

相手にとつて、不足なし——しかしこれはマスターの手前、流石に口に出せまいよ。

「……ごやい」

ランサーはただ一言、そう呟く。そして十字槍を上段に構えた。

第二十話『熱い血』

バーサーカー——今日では狂戦士を意味するこの言葉は、北欧にて語られた戦士達を語源とする。

敵味方の区別ができぬほどに我を忘れ、獣のように戦う異能の者達。人は彼らをベルセルクと呼び、恐れを以って語り継いできた。

日坂の亜種聖杯戦争に、英霊として呼ばれた男——スカラグリームの息子、エギル。彼もまた、ベルセルクと呼ばれた一人である。

極寒の地アイスランドに生まれた彼は、日が暮れると豹変するが為に『宵の狼』と呼ばれた男を祖父に持つ。エギルを幾度も凶行に駆り立てたその血は、神話に語られる巨人の血によるものだとも伝えられている。

そう、彼は中世に生まれながらも、幻創種である巨人の血を、その神秘を発現させていたのだ。その血は、英霊の座に昇った彼の体内に尚も残っている。

そして……彼の狂気が鬼才の詩人としての彼を呑み込んだ時、その血は宝具『狂狼の魔剣』として結晶化される。

どこからか、狼の遠吠えのような音が聞こえてくる。

バーサーカーから流れ落ちていた血は、今や意思を持ったように地面から遡って彼の得物である斧へと集まっていく。斧を血で覆い固めていくそれは、ランサーには禍々しい形状の剣であるように見えた。

ランサーは槍を上段に構えながら、油断なくその経過を観察していた。しかし一糸乱れぬその構えとは裏腹に、異貌へと変化していくその有様に彼女の心はざわめいていた。

不意に、バーサーカーは右腕に歪にこびり付いた長剣を振るった。それによつて、まだ凝固していない血がランサーの方へと飛び散る。それは空中で、ガラスのように鋭く結晶化した。

「……………ッ!?!」

ランサーは驚くも、自身に迫った結晶を槍で叩き落とす。そうして身を守った後、周囲の地面に突き刺さったその血を横目で見つめた。

……ここからが、本当のバーサーカー戦——などと、思い上がった戯言だった。そう、ランサーは自嘲した。今や彼の表情からは感情が消え、しかし一層恐ろしげに変貌していく……あれのどこが狂戦士だ。

……私は一体、なにと戦っている？

バーサーカーが地鳴りのような雄叫びを上げた。それは殺意となつてビリビリとランサーの肌に当たり、周辺一帯を揺らす。

ランサーは戦慄するも、しかし一歩も下がらずに槍を中段に構え直す。

それに、バーサーカーは応えた。彼は僅かに膝を曲げると一息に、そして真っ向からランサーに飛びかかった。

バーサーカーの巨体がランサーへと覆い被さろうとする。しかし、それをランサーの槍がバーサーカーの喉を突き刺し、つかえ棒のように食い止める。しかしバーサーカーの勢いを殺せず、ランサーの両脚は地面を後方へと滑らせていく。

喉に槍が突き立ったバーサーカーは死ぬことはおろか、前進を止めることすらしなかった。彼はランサーを凄まじい形相で睨みながら、右腕の魔剣を振り上げる。

その一撃に気づくや否や、ランサーは身を沈めて彼の懐に潜り込む。

「オッラァァアアッ!!」

気合一閃。ランサーは全身と槍とを一体にしならせ、バーサーカーを真下から突き上げた。そして一息に地面へと振り落とす。

槍を用いての一本背負い——喉に突き刺さった槍を支点に、バーサーカーの体がランサーを飛び越え、頭から勢い良く地面へと落ちる。

そうしてバーサーカーは、喉からおびただしい血を吹き出しながら地面をバウンドし転がる。その姿は誰が見ても絶命の瞬間と思える

だろうが、ランサーは彼を既に人と見ていなかった。彼女は隙有りとして、一息つくこともなく転がるバーサーカーの背に襲いかかる。

最早、人に非ず。

ランサーの、この読みは的中していた。ただ、その人外っぷりは彼女の予想を遥かに上回っていた。

バーサーカーは唸り声を上げ、転がる体を宙へと強引に跳ね上げた。そして身を捻り、背中から心臓を突かんと伸びていたランサーの槍を、宙返りしながら魔剣にて弾いた。

常軌を逸した挙動にて槍を弾かれ、ランサーの姿勢が前のめりに崩れる。バーサーカーはアクロバティックに体勢を変え、打って変わって彼女に魔剣を振るう。ランサーもまた逃げられぬと判断し、槍で応酬する。

槍と狂剣。英霊同士の壮絶な打ち合いが始まる。

しかし、どちらが優勢かは明白だった。

ランサーの腰を据えた正確無比な槍捌きと対象的に、バーサーカーの重量や体格を無視した動きはブレイクダンスのような激しさに溢れている。それでいてその速度も一撃の威力も、ランサーのそれらを上回っていた。

「……………くそっ」

圧倒的な身体能力の差に、ランサーは毒づく。直後、頭上の振り下ろされる魔剣を、彼女は真横へと身を投げ出して躲した。

ランサーは受け身を取って地面を転がり、片膝立ちになった顔を上げた。見上げたその目の前にはもう、バーサーカーが体を回転させ、魔剣を円盤投げのような勢いあるフォームで斬りつけようとしている。

だが、それは読んでいた。ランサーもまた身を翻し、足と膝を器用に使って回転。バーサーカーの踏み込む足のそばへと、膝立ちのまま鋭く滑り込んだ。そして回転の勢いで、彼のアキレス腱を十字槍の横刃で切り裂く。

踏み込んだ足に力が入らず、バーサーカーは四つん這いに倒れ込む。それを見るやランサーは立ち上がり、距離を開けるべく跳び下

がった。

しかし、ガクンとランサーの動きが止まる。

それは、まるで何かに縫い留められたかのようなだった。

見れば……バーサーカーは四つん這いのまま首だけランサーへと向け、彼女の右の振り袖を獣のように噛んでいた。

「しま……ッ」

思わず口を付いた言葉はしかし、最後まで続かなかった。

グイツと、ランサーはバーサーカーの元へと引き戻される。バーサーカーは立ち上がりながら目と鼻の先に引き寄せた彼女に、魔剣を振りつけた。

ランサーは反射的に槍を手放し、それを手甲で受け止めた。

手甲に禍々しい血の刃が食い込み、衝撃で骨が軋む。ランサーは呻いた。

しかし、その一撃だけで終わるはずがない。バーサーカーは再度ランサーを口で振り回し、二度目の攻撃を加えた。

得物を振るって斬るには、あまりにも肉薄した距離。それでもお構いなく、バーサーカーはランサーの体を力任せに振り回し、剣の根本でランサーをズタズタに切り刻み始める。ランサーは必死にその一撃一撃を手甲で受け止め致命打を防ぐも、周囲の地面には彼女の血が飛び散る。

一撃、二撃……十、二十と続いていく地獄のような猛打は、三十を届かずに終わりを告げた。

ランサーの右袖が引き裂け、ランサーの体が勢い良く飛んだ。その体は糸が切れた操り人形のように手足を回しながら、遠く地面へと落下した。しかしバーサーカーはそれに気づかず、しばらくは夢中で魔剣を振り回していた。

ランサーはうつ伏せに倒れたまま、血に沈んだまま立ち上がらない。

そんな彼女を視認し、バーサーカーはようやく彼女を捕らえていない事実気づく。

バーサーカーは啞えていた着物の袖を吐き捨てて吠える。そして

彼女にトドメを刺すべく、地面を踏み鳴らして走り出した。

しかし、その行進は後方より飛来した十字槍によつて止められてしまった。

十字槍は回転して飛来し、バーサーカーの癒える直前だったアキレス腱を再度切り裂く。予想だにしていなかった攻撃にバーサーカーは姿勢を崩し、先ほどと同様、前のめりに倒れ込んだ。

十字槍はそのままランサーのすぐそばの地面に突き刺さる。

彼女は……右手を前に突き出し、印を結んでいた。

「……落ち着けよ、バーサーカー」

ランサーはそう言つて、右手を叩くような勢いで地面に着ける。そして腕に力を込め、ゆっくりと体を起こしていく。

バーサーカーは顔を上げ、四足のまま唸り声を上げる。

「そうだとも……バーサーカー、こんなもので私が終わるか」

まだまだ……ここからだ。

そう、ランサーは頬を自身の血で濡らしたまま、笑みを返した。

バーサーカーは足から流れた血で魔剣を更に禍々しく変え、咆哮と共に前へと飛び出した。

それに応え、ランサーも手元の十字槍を引つ掴み、気合と共に立ち上がる。

その拍子に、ランサーのズタズタになった右の手甲が外れて地面へと落ちる。戦闘時は常に隠されていた彼女の手の甲——そこには何かが輝いていた。

それは、龍を象つた紋章のようにも見えた。

「ひ……干からびそう」

バーサーカーへの魔力供給で疲労困憊となったレオポルディーネは、息も絶え絶えにそう呟いた。

宝具『狂狼の魔剣』による狂化、ステータスの急激な上昇に加え、その宝具自体が血を媒介にしているが為に治癒魔術の分の魔力も別途必要となる。その魔力消費量は、平時のバーサーカーの比ではない。

レオポルディーネは校内を逃げ回り、読水とギリギリの戦いを繰り

広げていた。

廊下からレオポルディーネのいる教室へと、拳銃を立て続けに撃ちながら攻め入ろうとしている読水。レオポルディーネはそれを、戸口からルーンを刻んだ金属片を手榴弾のように投げつけて牽制していた。ルーンは宙で光線の束となって読水を襲うも、彼はそれをやり過ぎして距離を縮めてくる。

ルーン魔術。それが魔力消費にリソースの多くを割いているレオポルディーネが、それでも健闘できている理由である。

レオポルディーネは学校の各所に仕掛けたルーン、そして一家伝来の『オセルトネリコ』を利用することで、この戦闘での魔力消費を極限まで抑えていた。

『オセルトネリコ』——ミローネ家に伝わる杖だ。トネリコの“支柱”に、細い金属製の“若木”が巻かれたこの魔術礼装には、“若木”に幾つもの“閉じた葉”が取り付けてある。これは、その“葉”を詠唱によって開き、ミローネ家の魔術師に代々伝えるべきルーンを葉の内側に刻み保管する代物だ。

この杖を一家から無断で持ち出したレオポルディーネは、それらの葉を杖からもぎ取って手榴弾のように放り投げている訳だが……。

「ああもう！　これ重いし、長い……ッ！　まったく、そういう所まで頭が回らなかつたの？　私のご先祖様は!?!」

小柄な彼女はそう愚痴り、杖の取り回しの悪さに嫌気を示す。

しかし、この魔術礼装本来の目的はその名前、『継承する世界樹』が示す通りルーン文字の保存だ。このように運用されることこそ、そもそも想定されていない。

そうこうしているうちに、読水が目前にまで迫ってきた。背を預けている壁の角を小さな壺から機関銃のように飛び出す光弾が削り飛ばし、レオポルディーネは思わず身を縮ませる。これでは花卉を投げることさえできない。

準備の差……いや、それ以上に経験の差が出ているわね。と、レオポルディーネは歯噛みしながらポケットからハンカチを取り出す。そして額の汗を拭き、ついでに肩に付いた壁の破片を払った。

多様に富むルーン文字だが、その一つ一つは事前に準備されたものであり……罫として受動的にレオポルディーネに使用されていた。対して読水が靴から取り出す魔術礼装は、その多くがミローネ家秘蔵のルーンに見劣りするものの、彼自身がその使い方を心得ており……何よりそれを効率良く扱える状況に追い込んでくる。

それが為せるのは、単に経験の差だ。

魔術師とは『根源の渦を目指す探求者』。必要とあれば殺しも厭わないものが、殺し合いは極力避ける傾向にある。

そんな連中が一世一代の野心を燃やし、挑むのが世界中に普及した亜種聖杯戦争だ。そして彼は、そんな戦場で五年間も運び屋として生きている……質はどうであれ、量のついでには彼はこの亜種聖杯戦争の魔術師としてはトップクラスの経験値を持つ。

正面切つて魔術で勝負しても、優勢にはなれないか。そうレオポルディーネは判断し、息を整える。

そして、意を決して廊下から飛び出し——レオポルディーネは読水に背を向け、階段の方へと逃走する。

当然だ。正面切つて戦い勝てないなら、背を向けて逃げるのが良いに決まっている。命を賭けた奇策を打つより、その方がずっと健全だ。

しかしそんな彼女の背に、読水のマグナム弾が命中する。弾丸が肉に食い込むのは防御魔術で防いだが、その衝撃でレオポルディーネは身をくの字に反らしたまま階段へと飛び出る。

そして踊り場の壁をボールのようにバウンドし、レオポルディーネは二階の廊下へと一気に転がり出る。

「うえ……こんな目に合うなら、弾力で衝撃を押し返すような術式を採用するんじゃないやなかつた……」

そう呻きながら、レオポルディーネは身を起こす。とは言え、これがレオポルディーネにできる。375マグナム弾を受けるのに最も効率的な術式だったのも事実だ。その証拠に、撃たれた彼女の皮膚には少しばかりの痛みが残るばかりでダメージというダメージはない。

そんなことを考えていると、読水が踊り場に一息に飛び降り発砲し

てくる。それを見るや、レオポルディーネは慌てて手近な教室に逃げ込む。

レオポルディーネは教室の戸を閉め、息を切らしながら腰に収めていた短剣で戸に結界用のルーンを刻む。

しかし、こんなものは大した時間稼ぎにならない。読水は結界を布切れのように切り裂く小刀を持っており、今まさに、その魔術礼装を戸の隙間に突き刺し始める。火花を散らしながら結界を破壊するその刃は、まるで溶接用のバーナーのようだ。

どうしたものか。と、レオポルディーネは後退りしながら周囲を見回す。しかし、自身で張った結界のせいで逃げ場も失っている事実には彼女は気づく。

「……………うだあ！ 落ち着け、私いッ！」

頭を掻きむしり、レオポルディーネは状況を打破する術を見つけれないまま『オセルトネリコ』から葉を引き千切り、教室の四方に投げつけた。

その直後、戸が勢い良く開け放たれる。そして数秒、間を置いてから読水が鞆を捨てた身軽な姿で踊り込んでくる。

「……………ッ」

反射的にレオポルディーネは身軽な左腕を突き出し、魔弾を放つた。

ガンド——撃たれた者の体調を悪くする程度の呪術だが、相手は指すだけで済む一工程の魔術はこういう時に便利だ。

放たれたガンドは読水へと飛来し、その体に直撃する。

やった。とレオポルディーネが顔を輝かせたのも束の間、ガンドが当たった読水の像が歪み、小さな鳥の使い魔になってしまう。その鳥は数度羽ばたいて宙に静止していたが、ひらりと廊下へと逃げて行ってしまう。

そして——。

「場所は分かった」

と、廊下越しに読水が呟く。それと同時にカチャリと、何か金属質な音をレオポルディーネは耳にした。

直後、炸裂音と共に廊下と教室を隔てる壁を銃弾が貫き、そのままレオポルディーネの体を叩く。

「ぐっ……ブッ！」

レオポルディーネの小さな体は、防衛用の魔術の影響で後方に跳ね跳ぶ。そして窓際の柱に身を打ちつけて、そのまま壁に挟まれるように四発の弾丸を胴体に受けてしまう。逃げ場のない衝撃に、レオポルディーネの口から空気が漏れ出て、視界が点滅する。

壁抜き。さっきの使い魔は、その為に正確な位置を掴む為の囷だったのか。

そう理解しながら、レオポルディーネは壁を背にしたまま、ズルズルと地面にずり落ちていく。度重なる魔力消費に、このダメージ。既に彼女の疲労は限界であった。

読水はそんな彼女の姿を知覚しながらも、教室に入らない。ただ黙ってリボルバーの再装填音だけを、朦朧と尻もちをつくばかりのレオポルディーネは聴いていた。

「……自害させろ」

そう、読水は廊下越しにレオポルディーネに言った。

「……は？」

「令呪を全て使い、バーサーカーを自害させろ。そうしたら、命は助けてやる」

レオポルディーネは喘ぎながらも、その言葉に顔をしかめてみせた。

慈悲深くも忠告か、馬鹿にしゃがって。そう心で毒づいた直後には、彼女は無意識に短剣の柄に手を添えていた。

「……あんたこそ、さっさと『欠片』を超越しなさい」

「……カケラ？」

「その首に提げてるやつよ」

そう言いながら、レオポルディーネは短剣を抜き、背を預けた壁にルーン文字を刻み始める。

「……誰に頼まれた？」

「さあ？」

読水は訝しみ、壁に開けられた穴から教室を覗く。しかし、それに意に返さず、レオポルデイーネはルーンを一文字、壁に刻みつけた。「これはアンサズ……意味は、『思い知れ』よ」

彼女は刻んだルーンの名を呼び、短剣と杖を放り捨てて床に伏せる。

「おま……バカヤロツ!」

その効果を悟った読水は叫び、踵を返して逃げ出す。

教室の四方に設置された『空白のルーン』は、壁に刻まれたアンサズのルーンに共鳴し、同様の効果を発揮する。

そして教室の中央の空間から火球が膨れ上がり、窓と言わず廊下の壁と言わず、全てを吹き飛ばす爆発へと変わった。

魔術師レオポルデイーネ・ミローネは、この聖杯戦争に自分の意志で参加した訳ではない。

全ては、一族存続の策略——新しい地に根を下ろす為、六年前に父親が鏡宮悟と結んだ盟約に因るものだ。

——この聖杯戦争の後、長子レオポルデイーネに当主の座と魔術刻印を委譲する……父はそんなことを言っていた。

その話を聞いた頃の、十四歳の少女にだって見え透かれていた。父は少女の弟を当主に据える気で、少女は盟約を守る為の人柱に過ぎないことを。

しかし、レオポルデイーネは最後までその意向に意義を唱えず、こうして聖杯戦争に参加してしまった。

流された……そう言われても反論できない、無様なことだ。バーサーカーと共にしている今なら、その自己犠牲に隠れた矮小さが酷く腹立たしく思えてくる。

そう、バーサーカーは召還した直後から、レオポルデイーネのそんな背景を見透かしていた。

——お前が本気で聖杯を得ようと考えたら、付き合っても良い……鏡宮の手駒になる旨を聞いた彼は、マスターであるレオポルデイーネにそう言った。

その言葉に、レオポルディーネは面と向かって返答していない。

そして今、感覚として残っているのは、サーヴァントとのラインを通じて分かる情報だけだ。バーサーカーはその凶暴性を存分に発揮し、ランサーを追い詰めている。

……ここで、令呪を使って魔力消費を補っていけば、バーサーカーは確実にランサーを仕留められるだろう。サーヴァントさえ脱落させれば、次いで読水から『欠片』を奪うのだから容易い。

令呪が一画となった時点で、バーサーカーは自決させるしかない。そうして彼を使い潰し、『欠片』を鏡宮に渡せば、レオポルディーネの任務は終わる。晴れて次期当主となるのだ。

……本当に、それで良いのだろうか。

……本当に、それが自分の望みだろうか。

……なら、この沸き立つ熱い血は何なのだろうか。

皮膚に伝うスプリンクラーの水と、鼓膜を震わす警報機の音。

そしてフツフツと体内を沸かせる、熱い血の音。

それら全てを知覚して、レオポルディーネは目を覚ました。

「……気に入らないわ」

レオポルディーネは仰向けに倒れた体を起こし、そう呟いた。

「私をただ利用しようとする連中も、それに甘んじていた……自分自身も」

全部、ぶっ殺してやる。と、レオポルディーネは顔を歪め、吐き捨てた。その言葉は、警報機とスプリンクラーの音に紛れて、誰にも届かない。

その直後だ。咳の音を聞き、レオポルディーネは読水の姿を捉えた。今や教室と廊下を隔てていた壁は砕け、残骸だけが残っている。彼の姿を見た途端、フウツとレオポルディーネの体が膨らんだ。そうして煤まみれの体に酸素を溜め込み、疲労しきった体に力を溜め込む。

そして、彼女は息を殺して屈む。そうしてそばに転がっていた『オセルトネリコ』すら持たないまま、ゆっくりと中腰で廊下へと進む。

そして、その姿に読水が気づいたのを確認するや否や、廊下へと頭から飛び込む。

水浸しになった廊下を滑るレオポルディーネ。彼女が忍び寄っていたのにいち早く気づいた読水だったが、レオポルディーネが一気先んじた。彼女は素早く右腕で読水を指し示し、ガンドを彼に撃ち当てる。

「グッ……オ!？」

直撃したガンドの光弾に、読水は驚きの声を上げる。しかし、それだけだ。読水は後方に数歩たじろいだくらいで、ダメージというダメージは負ってない。

しかし、レオポルディーネに向き直った彼は、そのままグラグラと姿勢を崩し、尻もちをついた。

読水はそれでもと、拳銃を突き出す。その拳銃の銃口は定まらず、右に左にと揺れている。

「視界は揺らぎ、耳鳴りは平衡感覚を狂わせる」

「…………ツ」

「まともに、狙えないでしょう」

レオポルディーネは息を切らせて立ち上がりながら、読水に語りかける。

「私のガンドは精々……人の体調を悪くさせるくらいよ。でも五感に狂いが生じれば、その道具は使い物にならない」

「…………てめえ」

「これが魔術師、生粋の魔術師の戦い方よ。半端者の運び屋」

「てめえ!」

読水は激昂し、拳銃を連射した。しかし、その弾丸は小さなレオポルディーネを掠めて周囲を破壊するばかりだ。

行かなくちや。と、レオポルディーネから読水に背を向け、外へと歩き出す。このまま彼と戦うには、あまりにも彼女は消耗していた。ここは引くべきだ。

そうして手すりに縋りつくように階段を降りながら、レオポルディーネは右手の甲を見つめた。

「……………」

この使い方は、きつとレオポルディーネを手駒にしてきた連中にとつては最低のものだろう。彼女自身にとつても、この襲撃が結果を残さず、無駄に損耗しただけになったことを意味する。

しかし、必要な犠牲だと彼女は感じていた——これまで唯々諾々と進んできた道を、選び直すのに。

「令呪を以って命ず、バーサーカー……正気に戻りなさい！」

弾き飛ばされた衝撃で、ランサーは両足で地面を滑る。

印を結び、ランサーは周囲に散っていた足場板、その全てを浮き上がらせる。

そして、投げつける。バーサーカーは咆哮しながらそれを魔剣で斬り飛ばし、弾いていく。その度に火花が散り、魔剣を構成する血の結晶も部分部分に砕けて地に落ちる。

飛んできた足場板を全て破壊すると、バーサーカーは前に駆け出した。ランサーも腰を落として槍を下段に構え、それに応える。

直後、魔剣がランサーの頭上を掠めた。

ランサーは魔剣の一突きを潜り抜け、低い姿勢のままバーサーカーの腹部に機関銃のような連撃を放つ。

次いで、魔剣の薙ぎ払うような一撃。それを跳び避け、ランサーは落下の勢いで彼の額に槍を叩きつけ膝を折らせた。

しかし、それでも……ここまでやっても、バーサーカーは死なない。それどころか、額から吹き出た血を空中で結晶化させ、それを平手で受け止めるとランサーへと勢い良く振りつける。

ニメートルほどもない距離での、バーサーカーの投擲。それに反応できず、ランサーは血の結晶を頬で受ける。その威力に体を勢い良く仰け反らせ、彼女は後方へと倒れ込んだ。

しかし、ランサーはその直後には体に力を入れて再起する。そうして力を奮って身構えたが、来るべきバーサーカーの追撃が来ない。

見れば、あれだけ大暴れしていたバーサーカーが静止している。そして右手の斧に結晶として固着していた血が、細かく砕けてボソボソ

と地面に落ちていつている。

何が起きている。と、これまでと様子の違うバーサーカーに、ランサーはその場で身構えた。新しい形態か、あるいは魔力切れ等による影響によるものか。

「……クソつたれ、レオの野郎。日和りやがったか」

しかし、そんなランサーの警戒を他所にバーサーカーが口にしたのは、自身のマスターへと不服だった。

「……バーサーカー」

「やめだ、ランサー……今日のところはな」

「は……？」

そう告げ、バーサーカーはランサーに背を向けた。その姿は、ランサーを追い詰めていた直前のそれとは明らかに異なっている。その変貌ぶりに、ランサーの方は戸惑いを見せる。

「先に、ぶん殴りたい奴ができちゃった」

「……貴様、ここまでやっておいて逃がすと思うか!？」

ランサーは叫び、ずいっと前へ出た。その顔は先ほどの戸惑いから、侮辱への怒りへと変わっていく。

「……フン」

鼻を鳴らし、それを一瞥するバーサーカーだが。

「でも逃げる」

と、そう言うや否や、ランサーの方へと振り向きざまに何かを放った。

それはどこで拾っていたのか、拳に収まるほどの小石だった。ランサーは反射的に槍でそれを弾くが、小石は弾かれたと同時に大量の煙を吹き出した。

ルーン魔術か。魔剣を奮っていた時は使ってこなかった手法にハメられ、ランサーは煙から逃れるべく後方に飛び退く。

そうして距離を取って槍を中段に構えた頃には、バーサーカーはすでに霊体化して姿をくらませている。

「……やられた」

呆れたように肩を落とすランサー。しかしすぐに我に返り、念話で

マスターである読水に呼びかける。

“マスター……”

“ああ、見えている”

“申し訳ありません……”

“謝るな……仕留めきれなかったのは、こっちも同じだ”

むしろ、良く堪えた。と、読水は言う。その言葉に、ランサーは肩を震わせて顔を伏せる。

“反省も後だ、ランサー。兎に角、こっちも撤収するぞ”

と、読水は念話でランサーに呼びかけた。

“佐藤の所に戻ろう……こっちは回復に時間が掛かる、回収を頼む”

“

「……承知しました」

ランサーは顔を上げ、敢えて口でそう応えた。

そして周囲を――ボソボソと地面に落ち固まった血と抉れた地面、切り刻まれた資材や壁……そんな、戦いの跡を見回す。

……良くもこれだけ、暴れたものだ。

ランサーはそう溜息をつくとき、気を取り直して学校の方へと視線を移して霊体化。この場を去った。

レオポルディーネが屋敷に運ばれてから、数時間が立った。

「てめえ、あれは一体何のつもりだ?! ああ!?!」

レオポルディーネが回復し意識を取り戻すや否や、バーサーカーはベッドの前に実体化し、そう怒鳴りつけた。

「あのまま戦ってりゃ、ランサーは確実に殺せた! それを……!」

レオ、まさか魔力の枯渇にただビビったんじゃないやねえだろうなアツ!」

その剣幕に、屋敷の管理を任せられている使用人、轟木は無言で二人の間に割って入る。しかしベッドで身を起こしたレオポルディーネは、ゆっくりと被りを振った。

「轟木、下がってなさい」

「しかし、お嬢様……」

「どいつもこいつも、無駄に背が高い……そいつが見えないでしょ」

と、レオポルディーネは轟木を促す。その冷静な言葉に、轟木は彼女を一瞥する。そしてバーサーカーを睨みながら、ゆつくりとその場から退いた。

「……ずいぶんな態度じゃあねえか。ええ、おい？ 我が主様よ？」

轟木が下がると、バーサーカーは更に一步、レオポルディーネに詰め寄った。

「そんだけ平静でいられんなら、俺を納得させるだけの理由があったんだらうな？」

「当たり前でしょ？」

レオポルディーネは唸りながら首を回し、体の調子確かめながら口を開いた。

「あのまま戦っていれば、私の魔力が保たなかった……仮に令呪を使って魔力の補填としても、あんたの正気を取り戻すのもう一画使う」

「じゃあ、それで良いだろうが……！」

「そうなれば、宝具を使った全力での戦闘は最後になるでしょう……なに？ あんた馬鹿なの？」

「その詭弁が！ 戦士の戦いを止める理由になるものかつ！」

「……………」

「てめえでも……例え俺を現世に繋ぎ止めるマスターであろうと、戦士同士の戦いを止めるのは許さねえ!!」

激昂するバーサーカー。気怠げに彼を見上げて説明をしていたレオポルディーネは、その言葉に溜息をつく。

「そう……じゃあ、あそこで死ぬのがお望みだったの？」

「アア？」

「あそこが終わりで良かったかって、そう聞いているのよ！」

レオポルディーネもまた声を荒げ、身を乗り出す。

噛みつくようなレオポルディーネに、バーサーカーは思わず顔を引っ込める。彼女は彼を睨みつけながら、続けてこう言った。

「ねえ、最初に会って計画を話した時、あんた言ったわよね!? 『お前が本気で聖杯を得ようと考えるなら、付き合っても良い』……自分の

吐いた台詞を覚えてないの!？」

「……………ッ」

「あそこで『欠片』を手に入れてしまえば、鏡宮は残った最後の一面であんたを殺せと言いつけて来る！　そこで初めて反抗したって、令呪一面じゃどうにもならない……………そんなの、分かり切ったことじゃない……………ッ！」

その言葉に、バーサーカーは何かを悟ったかのように目を見開く。

「……………もう一度聞いわよ、バーサーカー」

レオポルディーネはベッドから降りて、そんなバーサーカーを見上げながらゆつくりと言った。

「私達は、あそこで終わって良かったの？」

その問いをバーサーカーが受けてから、暫しの沈黙が部屋を覆った。そして――。

「……………へっ」

と、バーサーカーは笑ってレオポルディーネを軽く小突いた。疲弊しているレオポルディーネは、まるで棒きれのように呆気なくベッドへと倒れてしまう。

「ちよつと……………!」

「寝てろよ、マスター。そんなスツカラカンの魔力じゃあ、俺が本気で戦えねえし……………ちゃんと大きくなれねえぞ？」

「んだとコラ、デカブツ……………!」

「轟木、そいつを見張ってろ」

レオポルディーネの怒りに意を返さず、バーサーカーは先ほどの言動に驚きを隠せずにいた轟木に言いつける。

「俺は、こいつが放置しちまった杖を探してくる」

「あ……………」

「……………ま、もう盗まれちまっているかもな」

思い出し声を上げるレオポルディーネにクツクツと笑い、バーサーカーは二人に背を向けて霊体化していく。

そして消える瞬間に、彼は呟く。

「全く……………そういうのは、もつと早くに言え」

その言葉は期待からか、愉快そうに上ずっていた。

F a t e / r e s e l e c t 番外『ドラゴン学校』
一学期

私はどこにでもいる無気力系天才美少女、佐藤真波！

ある日、いつもどおりの日常を送っていると左手に不思議な痣が浮かんだ！

そしてそれは、日常の終わり・・・非日常の、始まりの合図だった！！

それから、私はこの街でとある情報を手に入れる！

亜種聖杯戦争？ 英霊？ 何だか良くわからないけど退屈な日常

とはおさらばね！

だから私は・・・

??? 「今更まだるっこしいわあい!!」バーン!!

佐藤「ヒエ！ お約束のモノローグに口出してきた貴方は一体!」
ビクウ

SS 『ドラゴン学校 くこれで君も亜種聖杯戦争マスターにく』

ドラゴン先生（以降、D先生）「という訳で、これから君に亜種聖杯戦争のなんたるかを教授します」クワー

佐藤「・・・ここ、学校？ 私の教室そっくりだ」キョロキョロ

D先生「ああ、質問は受けつけるから。その時は挙手だよ」

佐藤「というか、貴方誰ですか？ なにその覆面・・・紙袋？」ハ
イ

D先生「今はドラゴン先生とだけ覚えて欲しいかな。というか、随分余裕あるね君」

佐藤「唐突に先生を名乗る和装の覆面さんに学校に拉致されたの

で、ちよつと頭が追いついてないです」

D先生「仕方ないよね・・・でも仕方がなかったんだ」

D先生「このままじゃあ、君は右も左も分からないまま亜種聖杯戦争に巻き込まれ、マシユマロみたいにフワツフワな考えのまま腕ごとその痣を奪われたりするからね」

佐藤「何ですそれ、こわ！　これ、そんなに危ないものだったの!？」
ガタツ

D先生「そうならないよう、突然始まった聖杯戦争から初心者を助けるのがこのドラゴン学校だよ」

佐藤「お、おお・・・一気にやる気が満ちてきた・・・左腕が謎の震えが、これは必要だと訴えてきます」

D先生「じゃあ、早速授業を始めるからねー」

『第一回、亜種聖杯戦争って？　　根源は一つでも、元祖の付くラーメン屋は幾星霜』

D先生「じゃあ、兎にも角にもこれから起ころうとしている亜種聖杯戦争について話そうか」

佐藤「はい・・・あ、亜種ということとは、元祖もあるんですか?」

D先生「うん。これについては、本編のプロローグで簡潔に纏められている・・・よいしょ」ガツタン

聖杯戦争。

二百年も昔、アインツベルン、間桐、遠坂の三家の魔術師が構築した、あらゆる願望を叶える聖杯を召喚させる儀式。

その儀式の歴史は血に濡れている。聖杯を手に入れるには、聖杯に認められた七人の魔術師は使い魔であるサーヴァントと共に、ただ一組になるまで戦い勝ち残らねばならないからだ。

七人の魔術師は聖杯に三画の令呪を与えられる。そして聖杯の力を借り、この世界に名を残した存在、英霊をサーヴァントとして召喚することができる。サーヴァントはそれぞれにクラスを持ち、他のクラスを持つ六組と覇を競うことになる。

剣士のクラス、セイバー。

弓兵のクラス、アーチャー。

槍兵のクラス、ランサー。

騎兵のクラス、ライダー。

魔術師のクラス、キャスター。

暗殺者のクラス、アサシン。

狂戦士のクラス、バーサーカー。

つまり聖杯戦争は、異なる時代に名を馳せた英霊七騎が現界し、聖杯を求めて戦う殺し合いなのである。

アインツベルンら三家は、日本、冬木市に満ちた霊脈を基に、過去数度に渡ってこの聖杯戦争を行った。そのシステムは回数を重ねる中で他の魔術師に評価され、今ではそのシステムは真に優秀であると認められた。

血を血で洗うような闘争の中でそのシステムは盗まれ、そして現在では世界中で三家が構築したシステムを模倣され、規模も質も様々な亜種聖杯戦争が執り行われている。

佐藤「要するに聖杯制作者達の内ゲバ……じゃなかった、聖杯争奪のバトルロイヤルなんですわね」

D先生「そう。冬木市で行われていた原点、通称『冬木の聖杯戦争』は過去の英雄を召還、使役できるといっただけでもシステムだったんだ」

D先生「七人の魔術師に使役された、各クラスに当てはめられた英霊。その戦いの勝者に与えられるのが聖杯だった訳だね」

D先生「だけどそのシステムは、西暦1930頃に行われた第三次聖杯戦争にて参加者の一人、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニアによって盗まれ、世界中に拡散することになるんだ」

佐藤「第二次世界大戦……が、起きるかって辺りですよね？」

D先生「そう、第三次聖杯戦争自体も、ダーニックとナチスドイツによる聖杯強奪事件が起き、有耶無耶になってしまってる」

佐藤「うへえ……国家が絡んだ乱戦になったんですわね」

D先生「うん。『冬木の聖杯戦争』は第二次大戦のゴタゴタで今や聖杯の所在さえ分からず、伝説のものになってしまってるよ」

D先生「まあ、つまり亜種聖杯戦争の始まりは『大体ロン毛のおじ様のせい』で説明がつくんだ」カツカツ

「最期のヤケ糞テンション、凄かったね」

佐藤「一気にブツチャケましたね：あと、その黒板の字は一体：」

D先生「何となくね・・・ああ、そんな彼は確か、二人の聖人と英雄らに袋叩きにされたって話だから」

佐藤「結構な天罰当たってんじやあないですか!？」

『第一回、亜種聖杯戦争って？　く集まれ！ウジ虫共!!く』

D先生「次は本題、その拡散されたシステムを基に発展した亜種聖杯戦争についてだよ」

D先生「第二次大戦、冷戦と世界各地での紛争によって後押しされながら、世界中の魔術師達によって多くの亜種聖杯戦争が起こったんだ」

D先生「それらは当初、『冬木の聖杯戦争』と比較してもあまりにも陳腐な出来だった」

D先生「英霊の数が二、三騎だったなんてのはまだ成功の部類で、その英霊がまともに戦えない状態だったり、暴走したり・・・」

D先生「多くは聖杯どころか、勝利者への報酬と呼べるものさえなかったんだ」

佐藤「そんな状態なのに・・・魔術師達は亜種聖杯戦争を続けましたんでしょうか？」ハイッ

D先生「やつぱり、万能の願望機つてのがそれだけ眩しかったんだろうね。根源を目指す彼らには」

D先生「魔術師とは、世代を跨いで万物の根源を求める求道者：とは言え、近道のチャンスがチラつければそれに飛びつく連中もいるさ」

D先生「事実、亜種聖杯戦争の最初期の参加者は、魔術師として衰退しつつある家系だったり、直系でない魔術師だった場合が多かった

そうだよ」

佐藤「ダメ元のドリームチャンス、って感じだったんですね・・・」
D先生「それに、第二次大戦や冷戦を通じて急速に進化していく科学技術に、焦りを拭えなかつた者も少なくなかつただろうね」

D先生「そうやって後のない連中が命がけで積み上げていった失敗によって、亜種聖杯戦争は精錬されより完成度の高いものに昇華していったんだ」

佐藤「あいつの屍を超えていけ！って感じなんですね」

D先生「それでも準備だけで半世紀以上掛けてた『冬木の聖杯戦争』と比較しちゃ、やっぱりお粗末なものなんだけどね」

佐藤「半世紀・・・!? スケールが違い過ぎない!?」

D先生「そんな感じで、話を現在に戻そうか」

D先生「現代、亜種聖杯戦争は原点の聖杯戦争と比べて、より戦争としての側面を強めたものとなっている」

佐藤「戦争としての側面・・・?」

D先生「本来の聖杯戦争は、マスターと英霊をセットにして一つの陣営だった。けど、今やその陣営により多くの人間が関わることになった」

D先生「それと同時に、英霊が召喚される前の情報戦や資源の確保が重要視されていったんだ」

D先生「想像してみると分かるよ。自分の知らない場所で聖杯戦争にマスターとして参加する時、何が必要か」

佐藤「えつと・・・まず、拠点となる隠れ家に、敵の情報に・・・」
佐藤「・・・あ、そっか。サポート役がいる」

D先生「そう、英霊を召還する為の触媒の提供、開戦後に拠点とするべき場所の確保、英霊を戦わせる為に必要な魔力確保、敵の情報収集・・・」

D先生「英霊に戦闘を代行させるとは言え、マスターがやるべきことは意外に多いんだ」

D先生「だから、その補佐として誰かを同行させる。そうしている

うちに、陣営は大きくなる」

D先生「とは言え、そこは用心深い魔術師。リスクを考えて、多くの魔術師は雇っても数人だろうけどね」

D先生「・・・ほら、弱った隙を突かれて、指を押し折られながらマスター権の譲渡を迫られたら・・・嫌だろう？」カツカツ

「美しきホクロ——それは自陣営を飲み込むブラックホール」

佐藤「何ですか？ その具体的な例・・・」

D先生「・・・ダツシユ線って何だか、きのこの香りがするよね」ウンウン

佐藤「なに言ってるんだ、この紙袋？」

佐藤「でもサポート役なんて、『冬木の聖杯戦争』でも必要だったんじゃない・・・」

D先生「確かに、『冬木の聖杯戦争』においてもサポート役として聖杯戦争に関わった人は多いよ」

D先生「ただ、当時の聖杯戦争は高水準であり、魔術師の界限から見てもそこまでの知名度もなく行われていた秘儀だったんだ」

D先生「一流の魔術師は暗示によって一般人を騙したりできるし、拠点となる工房を得る資金やコネも潤沢」

D先生「『冬木の聖杯戦争』の参加者の魔術師達は、一人である程度のことは賄えてしまっていたんだ」

佐藤「えっと・・・それが全世界に普及し、水準を落とした聖杯戦争だと出来なくなった」

佐藤「それは全体の質が落ちてしまったのと、準備に時間を掛けられなくなったから・・・ということなんですかね？」

D先生「うーん、100点」グツ

D先生「あと、普及したが為に、そういうサポートを生業にする連中が出てきたことを予想すれば、もう300点」

D先生「周知されてしまったシステムが為に、情報線がモノを言う為にマスターへの監視が強くなってしまったことを挙げれば100点だったよ」

佐藤「あの・・・何点満点の、100点だったか聞いても良いですか・・・？」

D先生「本編でも、この亜種聖杯戦争の普及に伴って増えた職業が登場しているよ」

D先生「物資や情報を売る、『商人』のアダム。それに本作ではマスターとして参加しているけど、読水竜也も『運び屋』もこれだね」

佐藤「『運び屋』：商人つてのは何となく分かりますが、『運び屋』というのは随分とぎつくりとした名前ですよ」

D先生「『運び屋』は、亜種聖杯戦争においてはマスターの切り札足り得る重要な物資の輸送・・・特に英霊召還の際に使う触媒の運び手としてそう呼ばれるね」

D先生「触媒は、召喚する英霊の縁のある代物・・・触媒が分かれば、英霊の真名もある程度は特定できてしまうって訳さ」

佐藤「だから調達するにしても、人目につかないようにプロに任せるって訳ですね」

D先生「触媒の調達をする『古物商』、そして聖杯参加者にそれを届ける『運び屋』。二つは亜種聖杯戦争で、最も需要が増えた存在だろうね」

佐藤「でも、自分で用意した方が安全じゃあないんですか？」

D先生「もちろん、そういう考え方もできるね。ただ、魔術師だって研究を次代に継ぎながら栄えていった連中だから、家宝として触媒にできそうな代物を持っている一家は多い」

D先生「ただ、そうなると必然、その触媒は一族の研究に則したものになる。ルーン魔術を研究する一族は、英雄が刻んだ古いルーン碑石とかね」

D先生「秘蔵の触媒がブリテンの騎士王だったり、ギリシヤの大英雄だったり、はたまた極東の聖人や、この世全ての悪だったり・・・」

D先生「そんな『何でもあり』は、聖杯戦争の御三家であるアインツベルンくらいしか出来ない真似だろうね」

佐藤「じゃあ、英霊が誰であるかを隠す為にも、他所から秘密裏に

仕入れるのが重要になる……」

D先生「そして、それを極秘にマスターの手元につてのが、読水ら『運び屋』つてことだね」

佐藤「なるほど……」パラッ

佐藤「その『運び屋』が、本編では自分が参加する聖杯戦争で触媒を盗まれてるんですけど……」パラパラ

D先生「……悲しい、事件だったね……」カツカツ

“セイバーの触媒を用意できた所は評価したげて”

佐藤「他にはどんな仕事が増えたんですか？」

D先生「有名どこだと、死霊術師がこの亜種聖杯戦争で活発に動き回っているね」

佐藤「死霊術師？ 何だか体がムズムズしますが……それつて、死体を操ったりする奴ですか？」

D先生「大体そんなイメージで良いけど……彼らはこの亜種聖杯戦争に対し、魔術師として最も好意的な反応を見せてる連中だ」

D先生「なんて言つたつて、滅多に得られない魔術師の死体を手早く手に入るチャンスだしね。上手く行けば、殺す手間どころか追手の心配さえ戦争のゴタゴタで省ける」

佐藤「ただのハゲタカじゃあないですか……」

D先生「もちろん、そういう『死体漁り』が出てくればこそその職業もある」

D先生「つまり、死んだ一族の死体を解析され、魔術刻印……一族の研究成果を盗まれないよう死体を回収するのを請け負う魔術師もいる」

D先生「もちろん、その多くは死体に精通した死霊術師つて話だ」

佐藤「それつて、マッチポンプじゃあ……」

D先生「需要と供給は、商売の基本だからねえ……」

D先生「他には……魔術師ですらないこともあるけど、マスターや英霊を殺す『殺し屋』つてのもいるかな」

佐藤「出来るんですか、それ……？」

D先生「マスターを殺すのが最も手っ取り早いというのは、亜種聖杯戦争の初期からの通説だよ」

D先生「それに亜種聖杯戦争の英霊だって、必ずしも十全に戦える絶対強者とは限らない。弱点さえつけば、勝ち目はあるだろうね」

D先生「とは言え、英霊殺しは相当レアなケースだろうね。それこそ、亜種聖杯戦争の収集がつきそうもなく暴走して『監督役』が要請を出したとか……」

佐藤「『監督役』？」

D先生「その話はまた今度ね……」カツカツ

「香辛料と時間が足りないよ」

『第一回、亜種聖杯戦争って？　〜放課後〜』

キーン　コーン　カーン　コーン

D先生「じゃあ、今回はここまで」

D先生「次回も遅れずに来てね」

佐藤「えっ、次回もあるんですか？　というか拉致された訳ですが……」

佐藤「……いや、まあ良いや。とにかく、やらなきゃならないことは分かりました」

佐藤「令呪を宿した素人の私は、まずは仲間を集める必要があるんですね！」ガタツ

佐藤「まずは街にいる胡散臭い連中に、片っ端から魔術師ですかつて聞いてきます！」パタパタ

D先生「え……えっ、ちよつと……」

D先生「……行っちゃったね。……ん？」

……あ、死霊術師？　えっ、令呪？　持ってますよ。
……あれ？　すっごい胸が苦しく……きゆう。

D先生「……」

D先生「よし、助けに行こうか」ガタツ

次回に続く・・・？

第二十一話 『ボーダーランド』

最初は、気配だった。

気配が、眠っていた佐藤の頬を叩いたのだ。

そして覚醒していく五感は、次に玄関から廊下へと流れる外気を、こちらへとやって来る足音を、順に感じ始めていく。

ああ、読水さんが帰ってきたんだな。と、佐藤は思い、上半身を布団から起こした。いつの間にか布団で寝かせられていた自分を恥じたが、それはそれ。ここを守ってくれたのであろう二人に、まずは感謝しなければならぬ。

そして、見た。廊下から見せた、その姿を。

炎のように揺らめいた赤髪が印象的な女だ。細く長い体のラインを損なわない黒衣を纏い、その上にトレンチコートを着ている。

彼女は靴も脱がずに佐藤が寝床へと上がり込み、その赤髪から覗く切れ目を細め……微笑った。

「……………」

——アサシンの、マスターだ。

それを理解したことが、『スイッチ』となった。

「——ッ！」

手元にあつた枕を引つ掴み、彼女の顔面へと投げつける。そして視界を遮るように放られた枕が彼女が手で払い落とされた時には、佐藤の攻撃はすでに届いていた。

クラウチング・スタートのような、ほぼ水平に近い状態からの駆け出し。佐藤は枕を投げてから布団から駆け出し、先に投げた枕に追いつくほどの速度で肉薄した。そして枕を手で払う瞬間——彼女の意識が枕へと移った瞬間を突いて、彼女の眼球に拳を叩き込んだのだ。

水面を平手で叩いたような、高い音。佐藤の拳に伝わる、柔らかな感触。

しかし潰れない、それどころか怯みもしない。

「……その重傷で、今の私の……この目に、一撃入れるなんて」

アサシンのマスター——アレクシア・ブロッケン
は直立したまま、避けること叶わなかった先の一撃を咀嚼するよう
に思考を巡らせ……その全貌を暴いていた。佐藤は構わ
ず、さらに深く腰を捻って眼孔に拳を押し込
もうとしていた。

「……ククツ、流石」

と、アレクシアは呟く。そうして驚きで見開
いていた左目を細め、眼下の佐藤を見下ろした。

そして、改めてもう一度、呟く。

「——流石、ヘラクレイダイ。憎たらしいほどの才能を、覚醒させた訳か」

ヘラクレイダイ——ギリシャの大英雄ヘラクレスの子孫を意味する言葉。

その意味するところを、頭に血が昇っている佐藤が理解するはずもない。

そんなことはどうでも良い。無理な動きで靭帯が悲鳴を上げてい
るのも、今は気にしていられない。

今の佐藤はただ、自分の腕を切り落とし、ライダーを殺した彼女を叩きのめすだけだ。溢れ出す怒りの望むままにこいつを傷つけ、壊し、ぶっ殺してやるだけだ。

だからこそ、彼女が平然と語りだす事実が気に入らなかった。

佐藤は呻きながら叩きつけていた拳をズラし、アレクシアの背に回す。それから彼女の長髪を掴み、力任せに引っ張った。そうすることでアレクシアの姿勢を前屈みに崩し、その首筋を露出させた。

噛み切ってやる。と、佐藤の顔が、アレクシアの首筋に迫る。しかし、その顔と首筋の間に、アレクシアの手が割って入った。

蛇のように滑り込んだ魔女の手が、佐藤の顔を覆う。視界を閉ざされたはずなのに、なぜか佐藤はアレクシアと目が合い動きを止めてしま
う。

「アマチュアが」

アレクシアの、嘲りの声が聞こえる。目の前の瞳は大きく、禍々し

く、まるで……。

佐藤の意識は、その瞳を最後に途絶えた。

「マスター。あの杖は放置して良いのですか」

ランサーは佐藤の待つ隠れ家に撤収中、読水にそう聞いた。

「回収しないなら、せめて破壊するのも策略かと思うのですが……」

「……気持ちは分かる」

学校での戦いの影響で体をふらつかせ、それに舌打ちをしていた読水。彼はぶつきら棒に、その疑問に答えた。

「……アレには、一族の人間以外には触らせないよう防衛機能があった。下手に触って、痛い目を見るのはこっちだ」

並の魔術師以上に手強く、厄介な呪いや防衛魔術が施された杖——レオポルディーネ・ミローネが持ち出したあの杖は、一朝一夕で作られた魔術礼装とは思えない。恐らく、彼女の一族秘蔵の代物なのだろう。そんなものに、迂闊な真似はできない。

目的は果たしたのだ。今は佐藤のところに戻って、ボロボロな現状を立て直す必要がある。読水とランサーがそんな話をしていると、すぐに隠れ家の前へと戻ることができた。

しかし、そこでようやく二人は気づく——隠れ家に施した『黄金の工房鍵』による結界が、破られている。

「……ッ!? マスター……ッ!」

「……ああ。俺も今、気づいた」

「気配がします。ライダーが落ちた時に感じた、あの嫌な……っ!」
ランサーは隠れ家の玄関を睨みながら、そう呟く。クソつたれ。と、読水は毒づき、人払いの結界を手早く張る。そして魔術を行ったその手で、拳銃を素早く引き抜いた。

「だとしても、あいつを放っておく訳にはいかない……ランサー!」
「はい……っ!」

読水の言葉の期に、ランサーは心のうちに巣食った不安の一切を切り捨てる。そして槍を実体化しながら玄関へと駆け、屋内へと迷いなく飛び込んでいった。読水は銃を掲げながら、その様子を後方から用

心深く見守る。

だが、ランサーが隠れ家に突入して数秒後、ランサーは玄関の引き戸を破りながら外へと転がり出てきた。

「……………ッ!？」

何が起こったのか。一瞬のことであった為、読水にはランサーとの因果線を通じてさえ知覚できなかった。ただランサーが敷地を飛び超え、表通りまで勢い良く転がり出たことから、その生半ではない事態を察することはできた。

そして、その答えは向こうから、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「ランサー……………この目で直接見るのは、初めてになるわね」

そう言っつて、一人の長身の女が割れたガラス片を踏み割りながら外へと出てきた。その背後、玄関口には佐藤を抱えた露出の高い女もいる。読水は、恐らくはランサーを外へと吹き飛ばしたのであろうその長身の女を見るや否や、全身の血が音を立てて引くのを感じた。

その顔と名前、そして彼女がこの日坂市に潜伏しているという情報は、アダムから知らされていた。だが正直、最後まで出会いたくはなかった。

アレクシア・ブロッケン——ブロッケンの魔女の生き残りにして、現存する中では最も悪名高い一族の三代目。この魔女とだけは、絶対に敵対したくはなかった。

「マスター、あいつがライダーを……………彼女が、アサシンのマスターです」

「……………そう、らしいな」

しかし彼女との因縁は、佐藤を助けた時点で始まっていたらしい。ならば、やむを得ない。ここでケリをつける。なぜライダーを失った佐藤を殺さず攫おうとしているか、頭の片隅に湧いた疑問もここで終わらせてしまえば答えを得る必要もない。

「ランサー、一瞬で終わらせろ。お前の速さを、あいつに見せてやれ」

アサシンが今どこに隠れ潜んでいようと、マスターさえ先に討てばこちらの勝利だ。読水は油断なくアサシンの気配を探しながら、ラン

サーに最速最短での決着の指示を念話で送った。

……実際のところ、アサシンはすでに脱落している。しかしライダーが脱落した直後から結界内に籠城していた読水達は、その事実を監督役より知らされる機会さえ遮断していたのだった。

読水の指示に、ランサーはパツと立ち上がる。その姿を冷ややかな目線で見っていたアレクシアは、背後にいる女——ミアを向き直り、口を開く。

「裏口から出なさい」

敵に背を向けた。その愚行を、ランサーが逃すはずもなかった。

ランサーは前へと、矢のようにアレクシアへと飛び出す。

アレクシアへと飛び掛かったランサー。対してアレクシアは、その反応を待っていたように冷笑し、振り返る……振り返りながら、敷地を囲うブロック塀を手で払った。その瞬間、彼女の手元から石片の散弾が現れた。

「……………ッ!?!」

振り返り際に手で払う。ただそれだけでアレクシアはブロック塀を砕き、破片を散弾のようにランサーへと飛ばしたのか。ランサーは驚愕するも、その破片には構わず、一直線にアレクシアへと突っ込む。

「……………ぶぁラッ!」

そして充分な速度を維持したまま、掛け声と共に槍を彼女へと繰り出した。

尋常ならざる英霊の速度、その一点に集中された最速の一刺し。魔術師であってもそれは不可避、必殺の一撃となるはずだった。

それを、アレクシアは事もなげに躲す左手で受け止める。槍を刺す……どころか貫通、串刺しにせん。そう考えていたランサーは、その思わぬ衝撃に前へとつんのめってしまう。

「……………つと。ハハ……………ッ」

アレクシアはその様子に笑い、槍の穂先を強く握り締めてしまう。その左腕から大小様々な瞳がコート破れ目から覗いており、それらは覚醒したようにギョロギョロと動き、それぞれがランサーの姿を捉

え凝視する。

しかし、それだけではない。先程の戦闘、手応え、そこから湧き上がるイメージ……ランサーはこの瞬間にも、多くのことを感じ取っていた。

そして、悟る。

今の自分では勝てない、と。

「……マスターッ！」

故に、やるべきことは一つだ。ランサーはアレクシアに背を向け、背後の読水へと叫ぶ。

「すぐに逃げてくださいッ！」

身を捨てた、決死の進言だった。

その代償は高くついた。

笑いながら、アレクシアはその異様に長い腕を振るい、ランサーを横に薙ぎ払った。ランサーは反応すらできずに弾き飛ばされ、敷地を囲うブロック塀の一部を突き破って隣の空き地へと転がり出る。

「くっ……あつ」

ランサーは地面に右手を付け、立ち上がろうとする。しかし、そこでランサーは自身の左腕が動かないことに気づいた。

左肩が、先程の衝撃で外れている。ランサーは歯噛みし、地に這いつくばったまま必死に声を張り上げた。

「マスターッ！ 早く……急いでッ！」

バーサーカーとの死闘に加えて、先程の打撃。ランサーはすでに限界に近かずにいた。だからこそ、せめてマスターだけでも、この仮初の命に替えても逃さねばならない。

「どうした、ランサー……さっさと立ちなさい。もう少しだけ、遊んであげるわよ？」

アレクシアはそう言いながらゆっくりと瓦礫を乗り越え、そんなランサーへと近づく。

「もっとケダモノのように喚け、見苦しく暴れてみせなさい。あのライダーのように、そのマスターの小娘のように……カビの生えた、英雄共」

彼女の口元は笑みを隠し切れていない。それは明らかにランサーのダメージを理解したうえで、嗜虐的な悦びによるものだった。

しかし、そこに読水は割って入った。

読水が撃ち放った弾丸はアレクシアの側頭部に命中し、魔女の頭が横へと弾かれる。着弾の瞬間、彼女の頭からは火花が散り、跳弾が明後日の方向へと飛んでいくのをランサーは見た。

衝撃でたたらを踏んだアレクシア。顔を強張らせた読水は、そこへ二発、三発と続けざまに弾丸を撃ち込むが、それらを彼女は顔を伏せたまま、片腕を鞭のようにしならせ弾き飛ばしてしまう。

「……三下が」

アレクシアはゆっくりと顔を上げ、ランサーの忠告を無視して邪魔立てをした読水を憎々しげに睨む。

「令呪の前に、その頭からもぎ取ってやる……」

そう言うと、アレクシアは下げていた方の右腕を、肩の高さまで持ち上げた。すると、その腕から無数の光球が蛍火のように浮かび上がる。

それを光弾の妖しさに、ランサーの全身に鳥肌が立つ。

ランサーは地面を蹴って読水のもとへと駆け出したのと、その無数の光球が読水へと迫ったのは、同時だった。そして、速度で勝ったランサーが読水を抱き締めて逃げるように地面に伏せた直後、光球は二人を周囲ごと爆発に飲み込んだ。

人気がない表通りは爆煙に包まれ、空からアスファルトの雨を降らせていた。

そんな惨状を生み出した張本人であるアレクシアは、その煙の中に潜むランサー達の気配を探っていたが……。

「ふん……やっぱり、逃げ足だけは早い」

そう肩をすくめる。アサシンがライダーのマスターを殺し切れなかった場面を含めると、あの二人に逃げられるのはこれで二回目となる。

しかしここまで派手に暴れた以上、呑気に雑魚を追い回していられ

ない。アレクシアは踵を返すと、パツと月夜に飛び上がった。そして屋根伝いに跳び、先に行かせたミアと合流しようと、ここから急ぎ離脱していく。

夜空へ引つ張り上げられるような飛翔、一瞬の浮遊感、そして魔女によつて蹂躪されるべく広がる地上へと柔らかく落ちる。その感触を楽しみながら、アレクシア・ブロッケンは今後の計画を企てる。

すでに利用価値はなくなった……しゃぶり尽くしてやったと思つていたライダーと、そのマスター。そこから誰も予想さえしていなかったであろう、ヘラクレスの末裔という、天然記念物を手に入れることができた。

根源を目指す魔術師でないアレクシアにとっては、その古い血統には何の魅力も興味もない。しかし、その利用価値は見出させる。

否、打算で見出さずとも、彼女は必要だ。そう、アレクシアの体内に宿る『これら』が言っている。アレクシアの中で、ヘラクレスの末裔に復讐をしろと、あの血筋を穢せと、囁いているのだ。

良いだろう。と、アレクシアは頬を吊り上げて笑う。

私は強い、そう強くなつたのだ。魔術師も、聖職者も、悪魔だつてもう私を止められない。手に入れたこの力で、私を拒んだ世界の未来も、過去の栄華だつて踏みにじつてやる。

「……ふっ、はは……っ！」

なんて愉快なんだろう。と、アレクシアの口から笑みが溢れる。

こんな面白いこと、何で今まで誰もやろうとしなかつたんだろうか。本当に、不思議でならない。

やり方さえ選ばなかつたなら、全てを支配してしまえば……この腐つた世界でも、こんなに輝いて見えると言うのに。

笑いながら地上を見下ろすアレクシアの細められた両の目は、幼子のように純粹で、残酷な悦びに輝いていた。

そして、夜空と地上とを上下しながら輝くそんな瞳が——不意に見開かれた。

背中を叩いた気配。アレクシアは反射的に気配の方を向くも、次の瞬間、彼女の首に衝撃が走り身体の自由を奪われる。

アレクシアはバランスを崩し、空から落ちる。落下の中で、アレクシアは猛禽類のように変貌させた足で自身の首を掴んでいるウイリアムの姿を見つけた。

「ぎげんよう」

空中で、自身の更に上空から首に飛び付かれたアレクシア。地面へと落下する中、ウイリアムは囁く。

「う、ウイリア……ッ！」

「少しでも辛抱を。すぐに着きますので」

ほら。と、ウイリアムが言うや否や、アレクシアは後頭部から落下……神社の本殿の屋根瓦を破碎させながら、屋根の斜面に沿って地面へと滑り落ちた。ウイリアムはその間もアレクシアの首を放さず、それどころか着地面に押し付けるようにしながら、足元の魔女をスキ―板のようにして共に滑り落ちる。

二人は屋根瓦を滑り落ち、境内へと落ちた。数秒の後、アレクシアは背中に残る鈍痛が喉元へと込み上げ、喉を圧迫するような感覚を覚える。そして――。

「ガッ……ハ……ッ」

「あーあー……吐血は喉を痛めますよ？　詠唱したいなら、喉は大切にした方が良い」

ウイリアムはそう嘯きながら、無感情に片手を上げる。すると二人を囲うように浅葱色の淡い光の像が複数、揺らぎながら現れる。それはすぐに刀、槍などで武装された新選組の隊士の姿を取っていく。

「……ッ!?!」

「お待ちせしました。ここが、到着地ですよ」

ウイリアムは抑揚のない声でそう呟くと、挙げていた手を下ろし合図する。それを機に、隊士の霊体達はそれぞれの武器を構え、動けないアレクシアへと迫った。

高所からの落下による衝撃、それを喉元一点へのダメージへと集中させて攻撃。さらにこのまま押さえ付け、キャスターが召喚する隊士達で八つ裂きにする気か。アレクシアは口内へと溢れる血によって声さえ上げられない中、ウイリアムの思惑を理解する。

しかし、そんなもので止められるものか。

「……ゴアツガッ！」

溢れる血から吹きこぼす、魔女の咆哮。それと同時にアレクシアは、何かを掴み取るように左腕を天へと掲げた。

そして、その柱のように天へと伸びた腕を中心に、術式の描かれていない、赤い円だけのシンプルな魔法陣が浮かび上がる。

次の瞬間には、ウイリアムは後方へと跳び下がっていた。そして彼が下がった直後、夥しい魔力量の光柱が魔法陣から爆発的に噴出し、残された隊士達を消し飛ばした。

その圧倒的な破壊を生み出す光の柱の中で、アレクシアはゆっくりと身を起こす。それからゆっくりと、後方に飛び降りたウイリアムへと歩いていく。

「……なるほど」

と、ウイリアムは頷きながら、緊迫した体を落ち着かせるように一息つく。

「その膨大な魔力と神秘。それらはその……異形と化した腕を起点にしている」

そしてもう一つ。と、ウイリアムは言葉を繋げた。

「貴方の人としての体は、腕に秘められた『何か』に合わせるように変貌しつつある……まだ、その最中なんですよ」

「……」

聞くに値しない。アレクシアは口内に残る血を吐き捨て、砕かれた地面を蹴ってウイリアムへと駆け出した。

魔術も神秘もない。飛び掛かり、掴み、蹂躪するというシンプルなまでの暴力性。ウイリアムはその突進を力で押さえ込まずに、体を丸め自分から後方へ倒れ込む。そして二人の間に足を差し入れ、アレクシアを後方へと蹴り上げた——柔道で言うところの、巴投げである。掴み掛かるつもりが、宙へと投げ出されたアレクシアは宙で体勢を整え、そのまま神社境内と境外の境目、鳥居へとフワリと着地した。

「……そう、その鳥居のようだ」

地面に伏せたウイリアムは、アレクシアを睨みながら慎重に立ち上

がる。そうして、先程の説明を続行した。

「魔女と異形の境界点、そこに貴方は立っている……今ならまだ、私でも殺せるということですよ」

「……やってみろよ、魔術師」

すでに先程のダメージを回復しつつあるアレクシアは、憎々しげにそう呟いた。そして腕を宙に振りつけ、蛍火のような光球を残す。

「魔術師らしい、その机上の空論……私が覆してやる」

「ええ。証明してあげますよ、魔術使い」

ウィリアムはそう言いながら着ていたパーカーを脱ぎ、鍛え上げられた上半身を冬夜に晒された。彼の左右にはすでに、新たに隊士達が召喚され刀を抜いていた。

「私は『時計塔』の講師だ。証明するのは……得意なんだ」

ウィリアムはギュツとパーカーの袖を腰へと結び、それからアレクシアを睨んだ。

周囲に張り詰められる、殺意と恐怖で満ちた緊張感。

しかしその緊張感を破つたのは、この二人ではなかった。

境内に響き渡る、自動車の排気音。それに気づいた二人の横合い、自動車用に開かれた坂道から白の軽バンが飛び出た。その車の助手席には、ランサーが槍を手にしながら箱乗りしていた。

本殿の正面に建てられた鳥居とは違い、現代の事情に合わせられ作られた横道。そこから運び屋とランサーは現れ、激突しようとしていた二人の戦いに乱入を果たしたのだ。

「……ちっ」

アレクシアは舌打ちをする。

ここでランサー陣営とキャスター陣営、二つを纏めて相手をしてやっても良い。しかし以前にアーチャー陣営を襲撃した際、ウィリアムがセイバーのマスターと共闘していたのが頭にチラつく。

……もしここに、あのセイバーと代行者が参戦したのなら、状況は一気に悪くなる。

こちらを最優先に狙ってくるキャスター陣営……否、ウィリアム・シンとはいずれ決着をつける必要がある。しかしサーヴァントを

失った今、ここで無理して相手取る必要はない。

ここは引くのが最善手だ。そう判断したアレクシアは、宙を舞う光球を眼下一帯へとバラ撒いた。

光球によって爆発する境内。読水の合図によって、ランサーは箱乗りした状態から宙返りをするように降車した。それと時を同じくして、ウイリアムは光球を掻い潜り、地面を強く蹴ってアレクシアの目の前へと飛び上がる。

「prana shift—were—frog」

ウイリアムは空中で詠唱、獣性魔術によって得た蛙の神秘——獲物に向かって素早く伸びる舌によって魔女を捉えようとする。

アレクシアの顔面へと伸びる、柔らかで鋭いその蛙の舌をアレクシアは左手で掴み取った。受けた衝撃は先程のマグナム弾を超えるものの、今のアレクシアにとっては取るに足りないパワーだった。

問題は、その舌がありえないほどの粘性を持っていたことだ。

ウイリアムは身を捻り、アレクシアの腕を自身の方へと引き寄せ、腕を引っ張られたアレクシアは、反射的に腕を手元へと曲げて力を込め、その牽引力に抵抗した。

その瞬間——舌の引き寄せに抵抗すべく、アレクシアがその場に留まって力を込めた瞬間を、ランサーは逃さなかった。

未だ左肩が万全でないランサーは、槍を宙へと放るようにして逆手に持ち替える。

そして気合一閃、ランサーは倒れ込むような勢いで十字槍を投擲した。

弾丸のように、魔女の心臓へと飛来する槍。アレクシアは一瞬遅れたものの、それを右腕で受けた。

自動車同士の交通事故のような、重量感のある衝突音が光球の爆発音を弾き飛ばすように響き渡る。そして打ち込まれた十字槍は、魔女の右腕に刺さったまま止まってしまふ。

魔女は嗤う。しかし見れば、その槍は異形の腕を貫通していた。それどころか、その刃の先端はアレクシアの左胸に届いていた。

「……………ッ」

想像を超えた威力とダメージに、魔女の釣り上がっていた口元から血が流れ出す。驚愕に見開かれたアレクシアの両目だったが、すぐに歪み引き締められ、瞳の奥底に宿る悪意を取り戻す。

アレクシアは突き刺さった十字槍をそのままに、鳥居周辺の木の幹に貼りついていたウイリアムに右手を向けた。直後、彼女の掌から眼球が飛び出し、光線が放たれる。

ウイリアムはピンと引き絞られた舌を離し、林の方へ飛んで光線を躲す。そうして自由になった左腕でアレクシアは右腕に刺さった十字槍を抜きつつ、その光線をランサーにも向ける。ランサーはその光線を、猫のように軽やかな体躯で危なげなく躲していく。

今のうちか。アレクシアは光線を撃ち終えると、鳥居を蹴って宙へと飛んだ。そしてそのまま、闇夜から人の灯火ある方へ、郊外から街の方へと逃げていった。

やはりというか、結局逃げられてしまったか。

ウイリアムは溜息をつきながら、林から境内へと抜け出る。

アレクシアの想定外の発見に、勇んで攻め入ったは良いものの……これでは罫が明かない。やはり今の彼女を討つには、もっとしつかりした計画と準備が必要なのだろう。

つまり、彼らだ。と、ウイリアムは視線を上げ、殺気立つランサーを見つめた。

「……とりあえず、まずは話し合しましょうよ。ねえ……?」

ウイリアムは敵意がないことを示すべく両腕を上げて前へと進み、ランサーと自分の間で身構えていた隊士達の刃先に手を掛けて地面へ下ろさせた。そして、遠くで煙を上げる白の軽バンに向かって声を投げかける。

「互いに聖杯戦争の参加者としても、魔術師として先に倒すべき宿敵は同じだと思いませんか?」

「……なに言ってるんだ、お前」

ランサーのマスター——読水は半壊した車に体重を預けながら、油断なく拳銃をウイリアムへと向けていた。

「キャスターのマスター……まさか、こんなタイミングで遭遇するとは思ってなかった」

「僕だって別に会いたかなかったですよ。でも、こうなれば呉越同舟……って、やつですよ」

「はあ？」

「手を組みませんか？」

訝しむ読水に、ウイリアムは油断なく微笑ってみせる。

そう、さっきの戦いで分かった。

『時計塔』の魔術師でもない。

『聖堂教会』の代行者でもない。

魔術師と呼ぶには型破りで、普通人と呼ぶには魔術に精通し過ぎている——あの魔女と異形の境界点ポードーランドに立つ彼女を追い詰めるには、こんなどっちつかずの『運び屋』が必要なのだろう。

「私の標的はあの魔女です。そして貴方達は……あの子を追っているんでしょう？　なら、ここは互いに協力しませんか？」

「……………」

「会わせたい男がいます。彼らが味方になると分かれば、貴方達にも利益があると納得するはずですよ」

ウイリアムはそう告げながら、腰に巻いていたパーカーを羽織った。

そして……ニヤツと悪戯っ子のように笑う。

「……まあ、貴方達にとってはあまり会いたくない方達でしょうが……………」

第二十二話 『故郷』

五年前。

代行者であるカレル神父、シスター・セレネントーラ、そしてシュウジ・アルバーニは、聖堂教会が長年に渡り追っていた死徒『灰羽のニペラ』討伐の任を与えられていた。

当初、任務は順調に進行していた。十二月の初め、シスター・セレネントーラは『灰羽のニペラ』の潜伏先を特定、三人はシベリアの小さな集落へと向かった。

しかし、そこは『灰羽のニペラ』の故郷であり、彼の支配下にあった。事前に住民の全てを配下へと変えていた彼は一転、反撃に打って出たのだ。

吹雪の夜、住民に包囲されながらも三人は応戦により『灰羽のニペラ』を撃退する。しかし不測の戦闘によってカレル神父は戦死、シスター・セレネントーラも片目を失う重傷を負う結果となった。

この報告を受け、聖堂教会は『灰羽のニペラ』討伐の任務は失敗と判断、部隊の撤収を命じた。

しかしこの撤収命令を、一人の若き代行者は無視した。

先の戦闘により装備を使い果たしていたシュウジ・アルバーニは、カレル神父が使用していた概念武装『教会剣』を持ち、単独にて『灰羽のニペラ』を追跡した。全長二メートルに及ぶツヴァイヘンダーである『教会剣』を手に、吹雪くシベリアの森を丸一日歩いて死徒を廃墟の集会所へと追い詰めたのだ。

そうして、シュウジ・アルバーニは『灰羽のニペラ』と戦闘、使徒討伐を果たした。しかしこの戦闘により、元々周囲を厳格な教会とする為のシンボルとして使われていた『教会剣』は概念武装としての能力を失ってしまう。

この後、シュウジ・アルバーニは命令違反と概念武装の損失の責任を問われ、代行者の任を解かれる。

シユウジ・アルバーニは代行者解任後も聖堂教会に身を置くこととなるが……彼が代行者として復職するのに、それから五年の歳月を費やすことになる。

協力者ができたので、郊外の神社に来て欲しい。そんなウイリアムの連絡を受けたのは、まだ日も昇っていない早朝のことであった。規則正しい生活を心がけているシユウジが、それでも間も置かずには反応ができたのは、この聖杯戦争という特殊な環境故だろう。

しかしそんなシユウジでも、集合先にランサーと、そのマスター――読水竜也がウイリアムの隣にいる事実には呆気を取られてしまった。

「……おい、聞いてねえぞ。何でお前なんだ」

読水の疲弊しきった顔は、日の出を背にしているが為に一層暗く、やつれて見える。その血走った両目は、恨めしそうにシユウジを睨んでいた。その背後には、ランサーが僅かに四肢を曲げて臨戦態勢を整え、油断なくこちらを見ている。

「……その言葉、そっくりそのまま返してやる」

シユウジは読水にそれだけ言い返すと、説明を求め、ウイリアムの方を一瞥した。彼はその視線に肩をすくめる。

「連絡の通りです。彼らがその、協力者」

「誰が協力するって言ったんだよ」

ウイリアムの言葉に、読水は噛みつく。

「それに……こいつらと手を組まなきゃならないってんなら、尚更だ。冗談じゃねえ」

「……私にも、任務がある」

シユウジはそう言葉を付け加え、殺気立つ読水を正面から見据えた。それを合図に、シユウジの隣にセイバーが実体化する。

「ウイリアム、貴方には悪いが……ここで当初の目的を果たさせてもらおう」

「ま、ま、ま……」

ウイリアムは宥めるようにシユウジ達の間を割って入り。

「まずは説明させてください。本当にこれは、お二人にとっても利益になる話ですので」

柔和な顔でウィリアムはそう説明する。しかしそんな態度とは裏腹に、新選組隊士の霊体が周囲を囲むように現れる。このままセイバーをけしかけようものなら、囲んでいる隊士達は一斉にこちらに斬り掛かってくるだろう。

油断も隙もない。互いに第三者の介入によって動けず睨み合っている中、中央のウィリアムだけが口端を上げた。

「状況を理解してくれて、助かります。これで一悶着起こさずに、説明ができる」

ウィリアムはそう言うと、説明を始めた。

「……分かった。ライダーを失い脱落したマスターの救出なら、協力しよう」

ウィリアムからこれまで経緯、そして読水からの補足と訂正を聞き、シュウジは腕を組みそう答えた。

「脱落したマスターの保護は、聖堂教会の管轄だ。それが事情も知らずに巻き込まれた人間なら、なおのこと保護すべきだろう」

その言葉に、ウィリアムはしたり顔でピースサインをしてみせた。「では、以前にお話した通り……アレクシア・ブロッケン打倒まで、我々は情報を共有しつつも……互いの接触、共闘は極力避けるということだ」

澁々と、シュウジは頷いた。これは聖杯戦争という体裁を保つ為であり、そしてサーヴァントによるマスター殺害を警戒せず戦えるように取り決めたものだ。

以前、アレクシアに奇襲を行った際には、サーヴァントを遠ざけることでウィリアムに背中を預けることができた。しかし、それが為にアレクシアを取り逃がしてしまった。この反省からシュウジとウィリアムは、やはり完全に信じ合えない仲であるのなら、やはり戦力は陣営ごとに分けた方が良くと結論づけた。

しかし。

「おい、いつから俺が組むって……話がまとまったんだ？」

そう言うのは、読水だ。その低い声色に、ウィリアムはやれやれと肩をすくめる。

「ダメですか？」

「……………」

「もう、いくいじゃないですかあ」

笑いかけながら近づくとウィリアムに対し、読水は黙って脇下のホルスターから拳銃を抜いた。その拒絶の姿勢に、ウィリアムは苦笑しながら両手を上げた。

「ウィリアム・レイ、お前は利害関係さえ一致すれば、例えば聖堂教会とだって組めるんだろう。けど……………」

読水は銃口をウィリアムからシユウジへと順に向け、憎々しげにこう続ける。

「俺にとっては、こいつらと組むのは絶対にダメだ。それで聖杯に近づけるのだとしても、それだけはできない……………」

そう告げる読水の顔を、シユウジは黙って見つめていた。彼の疲れ果てた目の底に強い感情、怨念とも言うべき炎がチラついているのを感じたからだ。

「…………随分な物言いだな」

シユウジがそう呟くと、読水の体が一瞬震えた。構わず、シユウジは言葉を重ねる。

「聖堂教会と魔術師との溝は深い。それに私はお前を襲った上、触媒を奪った。怒って当然だろうが……………」

「そんなことはどうでも良い…………ツ！」

読水はシユウジが言い切るより早く、そう怒鳴りつけた。

「十年前に、この街で！ 俺の家族を殺しておいて…………よくもそんな口が利けたな…………ツ!？」

「…………十年前だと？」

「てめえ、とぼけんのか…………ツ！」

詰め寄ろうとする読水を、ランサーが慌てた様子で抑え込んだ。

「マスター、落ち着いてください！ ……ここは話を聞いた方が……………」

「ランサー……てめえ離せッ！」

「すいません、すいません！」と、ランサーは必死に謝罪しながら怒り狂った読水を羽交い締めに行っている。そんなランサーに加勢するように、ウイリアムも二人に近づいていく。

しかし、シユウジはそれどころではなかった。

「……十年前」

シユウジは再び、口に出した。

そう、同じ十年前だ。この土地で、シユウジが聖堂教会に拾われることになった、あの忌々しい土砂災害に見舞われたのは。しかしそれは、あくまで事故。自然災害の一つとしてシユウジは受け止めていた。

しかし、同じ十年前に読水は聖堂教会に家族を奪われたと言っている。その意味するところは……。

「……………」

頭痛がする。脳に血だか酸素だかが足りなくなっていると、シユウジは感じた。

体の芯が震える。何か途轍もないことに辿り着きそうなのだと、その震えが教えてくれる。

しかし、その答えを見出すことはできなかった。故に動悸は身体をいつまでも巡り続ける。

その後のことを、シユウジはほとんど覚えてない。

ただウイリアムから、読水も協力してくれるようです。

ので以後よろしく……といった旨を聞き、上の空で了承したのだけは覚えている。

その後は各自解散することになったのだが、読水とランサー、それからウイリアムが立ち去るまでシユウジとセイバーはその場に留まり、最後はセイバーの言葉に誘導されるような形で、シユウジは帰路につくこととなった。

キャスター陣営とセイバー陣営。二陣営との協力体制を築いた後、読水はアジトの一つであるアパートの一室へと戻った。

そして読水は今——椅子に座る読水の前で両膝を合わせ、頭を床に付けているランサーを見下ろす羽目になっている。

「……………」

「……………全くもって、申し訳なく」

「……………」

「ご、ごめんなさい……………」

黙り続ける読水に、ランサーは一心に謝り続けていた。

「もう良い……………良いって、兎に角もう……………もう寝かせろ」

もう疲れた。読水はそう言うと言ち上がり、フラフラとベッドへと倒れ込む。そしてその直後、何とか保っていた意識を暗がりの向こうへと手放した。

事の発端は、三時間前。読水がシユウジの態度に我を忘れた直後のことだ。

「もし協力してくれるなら、ランサーの真名を口外しないことを誓いましょう」

耳打ちされたウィリアムの言葉は、読水の正気を取り戻すには充分なインパクトがあった。

「なに……………?」

「おや? キヤスターが使う霊体が真選組だという時点で、その可能性は予想できたのでは?」

「……………」

読水は押し黙る。そして顔を伏せ、ランサーと念話を繋ぐ。

“……………ランサー。はったりと思うか”

“マスター……………すみません”

念話上でのランサーの声は、酷くか細いものだった。

“キヤスターが私の真名を知っている可能性は、確かにあります”

そうか。と、読水は歯噛みした。不測の事態により、急遽召喚したランサー。その真名を、この男とキヤスターは知っているのか。マスターである、自分を差し置いて……………

「この情報、もし我々に協力しないのであれば、貴方達は聖杯戦争上の敵という関係のままな訳ですので……………ねえ?」

悪い話じゃないはずですよ。と、ウィリアムは笑みを浮かべ、手を差し伸ばす。しかし――。

「おいおい……顔が割れてるのは、お前らだって同じはずだろう？」
そう言ったのは、これまでの会話に混ざらず、遠巻きに眺めていたセイバーだ。

「賢しらに自分が優勢だと偽っちゃいるが……なあ？ キャスターがこの場に現れないのは、ランサーに顔を見られたくないからだろう？」

セイバーの指摘に、ウィリアムは手を引つ込めてから顔をセイバーへと向ける。セイバーはそんな彼にニヤリと笑ってみせた。

「マスターのあんたが敢えて身を危険に晒し、姿を見せないよう努めるほどの英霊だ。よほど真名を知られるのは、都合が悪いんだろうな」

「……本当に、優秀なサーヴァントですね。貴方は……」

ウィリアムは苦笑し、肩をすくめる。そして咳払いを一つし、読水へと向き直った。

「さて、どうでしょう？ 何でしたら……セルフ・ギアス・スクロール自己強制証明で、契約しても構いませんが……」

セルフ・ギアス・スクロール自己強制証明。魔術刻印を介した、魔術師にとって絶対的とも言える呪術契約だ。それほどにウィリアムは、読水達を味方に付けたいということなのだろう。

セイバーの指摘は的確なものだったが、しかし、やはり自分が把握さえしていない真名をバラされるのはリスクが高い。

「……はん。時計塔の教員相手に、呪術契約で出し抜けるとは思っていない」

読水は鼻を鳴らし、腕を組んだ。そして少しの間、項垂れてそっぽを向く。

「……ま、いいや」

と、読水は呟き、ウィリアムへと向き直る。そして声を絞り出すように低く、こう告げた。

「口約束だけで充分だ……いつでも裏切れる」

そうして読水は、とりあえず、という言い訳を残しながらも二人と協力しアレクシア・ブロッケンを追う約束をすることになったのだ。今更ながら、あの取り決めはこちらの完敗だった——そう、読水は夢うつつの中で反省する。

しかし、佐藤を救う手立てと同時に、あの魔女を討つ切っ掛けを得たのは、読水にとっても僥倖と言える。

例え聖杯戦争が終わった後も、あの魔女がいる限りはこの地に平和は訪れない。きっと聖堂教会や魔術協会の連中が彼女を抹殺しようと、大挙して押し寄せるはずだ。

読水の故郷を、これ以上穢させる訳にはいかない。外部が干渉し難い、この聖杯戦争のうちに、全ての決着をつける必要があるのだ。

神社から皆と別れた後、シユウジは都心へと徒歩で戻っていった。しかし途中、疲れを感じて目についた公園へとフラフラと入り、冷たいベンチに腰を下ろした。

まだ早朝のせいか、あるいは寒さのせいか、周囲には誰もいない。シユウジはボンヤリと空を眺めていたが、ふと思いついたように視線を下げ、財布から一枚の写真を取り出した。

「……写真か？」

隣で缶コーヒーを飲んでいたセイバーが、そう声を投げかけた。シユウジは二つ折りにしていた写真を開き、それを眺める。

「前に組んでいた、聖堂教会の仲間だ。リーダーがアナログな人間で、お前も持つておくと財布に入れられてしまったんだ」

ローマの『スペイン階段』を背後に撮った、カレル神父、シスター・セレネントーラ、それと自分が写った集合写真だ。奥にはトリニタ・デイ・モンテイ教会も見える。

「……この頃の私に、こうして故郷で聖杯戦争に参加していると話しても……絶対に信じないだろうな」

シユウジの呟きに、セイバーは返事をしない。ただ黙って公園の端に置かれた遊具を見ながらコーヒーを啜っている。

シユウジは写真を見ながら、当時のことを想起していく。

確か、写真を撮ったこの時にはジェラートを食べたはずだが、三人共が辛党なので微妙な顔を浮かべていた。

三人で計四人の死徒を討伐した。セレネントーラはこんなの当たり前だろうという態度で正確な情報を集めてくれたし、カレル神父は聖堂教会に入った頃から誰よりも頼りにしていた。

そして……最後に思い起こすのは、決まってあのロシア——吹雪で
の一夜だ。

あの時の独断専行で、シュウジは一度、代行者の任を解かれている。そして今、また同じ過ちを犯そうとしていることになる。

「……悩んでいるな」

セイバーは言った。シュウジは目を伏せ、写真を畳んだ。

「いや、もう答えは出ている。今はただ、彼らに謝っているだけだ」

魔女を抹殺せよ。と上層部から指示された、それは読水が持つペンダント以上に優先されることだという。もう決して、道草を食える状況ではなくなっている。ましてや、十年の事件など追っている余裕など……。

しかし……。シュウジは立ち上がって、先程いた神社の方向を見た。あそこはあの土砂崩れの現場から、そう遠くはない。

「ここ数日、手がかりすら掴めなかった十年前の真相。その糸口をこ
うもあつさりと得た……呼ばれた気がするんだ。それがこの地にか、
神の采配というやつか……」

あるいは、これが運命というものか——。

シュウジはそう呟き、首から提げていた十字架を握り締めた。

シュウジは胸の奥底から、五年前の夜に感じたあの衝動が沸き立つていくのを感じた。実際、シュウジは左遷されはしたものの、あの行動が間違っていたとは思っていない。

「セイバー、すまない。お前にとっては余計なものを、共に背負っても
らうことになる」

シュウジは自身のサーヴァントに向き直り、言った。

「十年前、この土地で何が起こっていたのか。それから目を背けるのは……例え聖堂教会が許しても、俺の背負った十字架が許さない」

セイバーはその言葉を受け、ジツとシユウジを見つめた。そして言葉を選んだように、ゆつくりと口を開いた。

「……道を、選び直すか」

「いや、俺はどの道も捨てない。あの魔女の行いは代行者として許さないし、聖堂教会が隠している真実も……この地に生まれた男として、必ず暴いてみせる」

ほう。と、間髪入れずに答えたシユウジに、セイバーは眉を上げる。

「ははっ、そいつは中々にキツイ道だな。だが、そんな道を進む大馬鹿者を、人は英雄と呼ぶのさ」

騎士として、心が躍るな。そう応えて缶コーヒートをシユウジに掲げた後、セイバーはそれを一息に呷った。

「……そうですか。ウイリアム・シンが、彼までも味方につけましたか……」

「うむ。流石は時計塔、貴族主義派の秘蔵っ子と言ったところか……中々に頭が切れるらしい」

「……しかし、彼らがアレクシアを追うというのは、私にとっては好都合です。暫くは、この屋敷で事の経緯を見守っています」

「それが良いだろう……我々も、魔女のせいで聖杯戦争を破綻させたくはない。もし、必要とあらば……」

「必要があるなら、主催者である私があの子を殺します。貴方達が動く必要はない」

「……………」

「これは聖杯戦争だ。魔女討伐の主体は、あくまで我々……参加者のマスターであるべきだ。あのイカれた女を口実に部隊を寄越し、計画の実権を握ろうとしても無駄です」

「……では我々に、あの得体の知れない怪物を黙って見ていろと言うのかね？」

「当然だ。忘れないで頂きたい、我々は同じ共通の目的を持っているだけで、決して仲間じゃあない。……この計画が破綻すれば、私はサーヴァントを使って即座に貴方を殺す。十年前に貴方達がやった

ことを、私も彼も、一日だって忘れたことはないんだ」

「……………」

「…………失礼。今日は少々、話し過ぎましたね」

「そのようだ。伝えるべきことは伝えた、そろそろ切らせて貰うよ」

「ええ、それでは——」

「——第八秘跡会。日坂亜種聖杯戦争監督役、マリオ・アルバーニ神父」

第二十三話 『龍の守護者』

嵐の前触れのような、風吹く曇天の空。

山の木々はすっかり葉を捨て、地面に枯葉を散らしていた。

そんな中へ、彼女は一本に束ねた後ろ髪を揺らしながら一人踏み入っていく。

手には素槍、腰には大小の刀。旅支度に道中合羽と編笠を身に着けているが、槍の鞘は既に外されていた。

迷う素振りもなく、彼女は山の奥深くへと踏み入っていく。そうすると、山の様相は一変する。木々は所々に薙ぎ倒され、地面は巨大な鞭を打ったように削れている。

その有様に顔をしかめながら、彼女は更に山の深く、惨状の中心部へと歩を進めていった。

荒らされた森の中心。倒れた木々で寝床を拵え、それは長く大きな体を丸めていた。

それは、光を吸っているかのように黒く、長く巨大な体であった。

それは、墨汁のような液体を湛え、双眸は溶鉄のように赤光していた。

それは、一匹の蛟みずちであった。

「……探しましたよ」

彼女は蛟に声を掛ける。蛟は薄く開けた目で彼女を見下ろすが、その態度からは彼女に対する興味は薄いように感じられる。

「もう暴れるのは止め、私と一緒に来てもらいます」

構わず、彼女は続けた。蛟は身じろぎさえ返さず、言葉が届いていくかさえ定かではない。その態度に、彼女は口端を曲げた。

空に遠雷が響き渡る。その音に彼女は緊張した素振りで振り返り、麓の方を見やった。それが雷の音だと知ると胸を撫で下ろし、それから業を煮やしたかのように蛟を急ぎ立てる。

「良いですか、新しい時代はもうすぐそこまで来ています。その新時

代に、貴方の居場所はないんです。他の誰でもない、時代が、貴方の存在を許さない……ッ」

蛟はその言葉に、目を更に細める。それは焦る彼女への嘲笑か、あるいは破滅的な将来への自嘲か。

説得ではどうにもならないか。彼女は歯噛みし、被っていた編笠を脇へと捨てて言った。

「悪いですが、首に鎖を付けてでも連れて帰ります……これは、彼の遺志に因るものだ」

彼の遺志に因るもの。その言葉に、蛟は目を丸く見開く。彼女は道中合羽を脱ぎ捨て、槍を中段に構えた。

「これは彼の遺言です。自分にもしものことがあれば、貴方のことを……」

彼女の言葉は、途中で途切れた。

横合いから予告もなく振るわれた蛟の尾に、彼女の体は真横に飛ぶ。彼女は木の枝を押し折り、最後には切り立った小さな崖の端に肩を打ちつけ、崖を乗り越えるように地面へと転がり落ちた。

「……怒る気も分かります」

それでも、彼女は話を続けた。彼女は崖の壁面に手を掛け、血と脂汗に濡れた体をゆつくりと起こす。

「貴方はその力で、彼を多くの敵から守ってきたつもりだったのでしよう。でも彼は、貴方を時代という怪物から守っていた」

蛟は予備動作もなく前へと滑り出て、崖の向こうにいる彼女へと頭から飛び掛かった。

巨大な蛟の突進。彼女はその気配を察知し、斜面を跳び降りる。その直後、彼女を隠していた崖は蛟によって叩き割られた。

彼女は山道に着地し、素早く身構える。そんな彼女の上からは、蛟から飛び散った墨汁のような液体が雨のように降り注ぎ、足元には崖を形作っていた土砂が滑り落ちてくる。

そして、彼女に再度狙いを付けた蛟は、身をくねらせながら彼女へと迫った。

蛟が大口を開け、まさに彼女を丸呑みにしようとする。

その瞬間だった。

彼女が僅かに前へと踏み込み、素槍が四本の光と煌めく。

次に確認できたのは、結果だけだった。空気が数度爆ぜたような音と共に、蛟は身を仰け反らせる。その事実だけが、五感で感知できる結果であった。

突進を遮られ、身を天へと反らした蛟。そこに彼女は鬼のような形相で肉薄する。そして、蛟の横面を槍の柄頭で殴り飛ばした。

彼女に強かに打たれた蛟。その巨体は力なくしなり、木々を折りながらゆっくりと倒れ伏す。

「……私だって、怒っている。歯痒い気持ちは、私も同じだあッ！」

黒い雨の降る中、彼女は倒れた蛟に吠えた。

「だが私は今度こそ、守ってみせる……っ！」

しかし彼女は、槍の柄を壊さんばかりに握り締めて怒りを抑え込み、こう続けた。

「彼の恩義に報いる為、私は今度こそ……っ！」

——龍の守護者に、なってみせる。

彼女はそう呟き、槍を構え直す。

正面には、すでに体勢を整えて彼女を睨む蛟の双眸が、曇天の暗さの中で輝いていた。

そして……そこで読水は、夢から目覚めた。

読水がランサーに夢の内容を伝えると、彼女は食べていたカップそばを嘔き出した。

それは遅めの昼食時。ウィリアム達と同盟を結んでから丸一日が経った後、アダムによって用意された安アパートの一室でのことだった。

「お前が真名を隠そうとするのは、あの蛟の存在を隠す為だな？」

閑話休題。読水は嘔き出された蕎麦を片付けながら、台所の方で咳き込むランサーに追求する。

「お前がキャスターと同時期の英雄だとしたら、その時代は幕末か明治初期……そんなつい最近まで、あんな幻想種がこの世界に残ってい

ること自体、奇跡的なことだ」

「ぐつふう……マスターの、あの魔術を使われれば隠し通せないと、アレには常に警戒しておりましたが……」

ランサーは口を水でゆすいだから、そう呻いた。

「しかし、まさかマスターとサーヴァントの繋がり、夢……ただの夢で、こうも呆気なく看破されてしまうとは……」

「……悪かったな、自分の個性さえ活かせないような不出来で、怠慢な魔術師で……」

気の抜けた読水の言葉に、ランサーは苦笑した。

「ランサー、あの戦いの結果は……」

「私と出会う前に、マスターが見た通りです」

完敗でしたよ。と、ランサーは窓から天を仰ぎ呟いた。

「それからは、自分の半生は『彼女』の存在を歴史から隠す為に使いました。多くの歴史的資料を焼き、改竄し、自分の日記すら書き直して……公には知られぬよう、細心の注意を払って……」

「……」

「この宝具も、彼女の神秘を借りているに過ぎません」

ランサーはそう言って、手を空へと伸ばす。

「宝具として昇華された私の逸話。その功績は、彼女の助力なしには成し得なかったもの……私という英霊は、マスター、貴方が夢で見た女一人では生まれることのなかった紛い物です」

英霊とは、実在した一人の英雄と同一ではない。人に語られ、祀られ、伝説と残された肖像が英霊と呼ばれるのだ。それが真実であるか否かは、問題ではないのだ。

「聖杯に願う望みも、アレの隠蔽か」

「……さあ、どうでしょう？」

読水の言葉に、自分でも分からないというようにランサーは嘆息した。

「どうもこの時代を見るに、彼女のごとは上手く隠せているように思えますし……聖杯を欲するだけの願いというには、どうも……」

ランサーはぼんやりと窓から外の景色を眺めていたが、そんな景色

に、鳩の群れが空へと飛び立つ姿が横切る。すると、ランサーはぼうつとした顔で口を開いた。

「……ただ、この手で」

「ん？」

「私は、ただ……この槍で、今度こそ誰かを護り切りたいだけなのかもしれない」

「……………」

「ね？」

ランサーはそう言つて、読水へと振り返る。

最後まで守りたい。薄く笑みを浮かべて、そう告げるランサー。その想いに対し応える度量もなく、読水は黙って顔を背けた。

……師匠は、『こういう事態』の対処も俺に教えるべきだった。

読水は一人、かつて師事していた男に不平を零す。しかし、彼とは流儀が違うのだ。きつと聞いていても、真似はできなかつたらう。

「ところで、こんな所でのんびりとしても良いのでしょうか？」

「ん……前の連戦で、こつちやボロボロなんだ。佐藤の場所は、あの猟犬みたいな連中に任せた方がよっぽど効率が良い」

バーサーカー——鬼才のベルセルク、エギル・スカラグリームスン。

バーサーカーのマスター——イタリアのルーン魔術師、レオポルディーネ・ミローネ。

そして、アサシンのマスター——ブロッケン魔女……否、かつて魔女であつた異形の怪物、アレクシア・ブロッケン。

彼らとの戦闘を、読水達は一夜にして乗り切つた。

読水達は連戦を経ても尚、生き残ることができた。しかし代償を支払い、残された——重い肢体、精神の摩耗、装備の消耗、魔力切れ。今はそれらを回復させる為に、少しでも多く休まねばならない。

「それに、こつちにはこつちの仕事があるんだ」

読水はそう言つて、鞆からジップロックを取り出す。封をされたビニール袋には、赤く染まったティッシュが入っていた。

「……奴の、血ですか」

顔をしかめるランサーに、読水は得意気に頷く。

「この血から、あの魔女の化けの皮を剥がす。こういうのが我が家の専門、あいつらより先を行くことができる分野だ」

「あまり気分の良いものではありませんが……マスターが楽しそう
で、何よりです」

「自分の個性は活かすもんだろ？ お前は次の戦いに備えて、できる
だけ休んでおけ」

読水はそう言うと、家伝の魔術、『辿跡術』の準備——顔の左半分を
左手で覆い、右手で血の付いたティッシュに触れる。

「あの二組と同盟を結んだからと言って、他の組……例えばバーサー
カーがまた、俺達を襲ってこないとは限らないんだからな」

そう、そのバーサーカー陣営だ。読水は一昨日の夜のことを思い起
こす。気にかかっているのは、バーサーカーのマスターとの会話だ。

——……あんたこそ、さっさと『欠片』を超越しなさい。

——……カケラ？

——その首に提げてるやつよ。

そう、確かにあの背の低い魔術師は、読水が両親から引き継いだこ
の『欠片』を狙っていた。しかしこの『欠片』の貴重性は、鏡宮と聖
堂教会くらいにしか知られていなかったはずだ。

あの女の正体……それが鏡宮に雇われた使い走りか、聖堂教会の犬
か、あるいは全くの第三陣営かは分からない。

しかし、いずれにしても『欠片』を狙うのであれば、読水にとって
はこの戦争を邪魔する敵でしかない。

正体なぞ、知らなくても良い。だが、奪われる気もない。

次も、その次も、決着をつけるその瞬間まで、凌ぎ切る……その為
にも、あの連戦を潜り抜けたランサーには、今は休んでもらう必要が
あるのだ。

「背中が痛い！」

「お腹が痛い！」

「全身が痛い!!」

レオポルディーネは、ベッドの中で力の限り叫び、バタバタと寝返りをうつ。

ランサー陣営を襲撃した後、体内から湧き出ていた痛み止めも切れ、もう二日も彼女はこうしてベッドで呻いていることになる。

「あく……仰向けも、うつ伏せも痛い……もう楽になりたい」

「そりゃあ、何十発もマグナム弾で撃たれた訳ですから」

そう言つて、ミローネ家の使用人——轟木はベッド脇のテーブルにレモネードを置く。

「むしろ、痛い程度の打ち身で済んでいる方がおかしいのでは？」

「凄いでしょ。もつと褒めて轟木。それでさ、この痛さ、何とかして？」

「……まあ、とはいえ」

と、轟木の横からバーサーカーが実体化し、レモネードを掠め取りながら言葉を挟む。

「まあだお前、回復に時間かかるのか？ 俺に偉そうなこと言っておいて、ここで終わりか？ おい」

「クウアツ……い」

バーサーカーの悪意たつぷりの煽りに、奇声を発しながらレオポルディーネは握り拳を宙に突き出す。そうして元気であると示そうとするが。

「……動けるかあ、こんな痛みでっ！」

と、すぐに泣きが入り、拳はベッドに落ちる。

そんな主人の様子に、英霊と使用人、二人の従者は肩をすくめる。

「一回休み、ですかね？」

「一回休みだなあ……」

そう顔を合わせながら言い、二人はレオポルディーネの私室から退室する。

「……ところで轟木、今日の夕食だが」

「何かご希望が？」

「昼間にテレビでやってたやつ、あのハヤシライスってやつが食いてえ」

「一時間後、ダイニングルームに来てください。私が本当のハヤシライスをご用意しましょう」

「よっしゃあー！」

「……私っ！ カルボナーラが食べたあい！」

そんな会話を背後で聞いていたレオポルディーネは、再び拳を天に突き出す。

しかし一時間後、彼女の元に運ばれたのは薬草たっぷりのお粥であつた。

とあるビジネスホテルの一室にて。

ベッドの上で座禅を組み、体力の回復を図っているウイリアム。キャスターはドレッサーの椅子に腰掛け、そんなマスターに語りかけていた。

セイバー、ランサー陣営らと同盟を組んでからウイリアム達は、アレクシア達を全力で追っていた。

ウイリアムの魔術師としての知識を活かした、魔術的な痕跡を辿つての追跡。そこから割り出した魔女のアジトと考えられる場所を、新選組の霊体を総動員させて制圧していく。

そうすることで、ウイリアム達はこの二日でアレクシア達が使っているアジトを数カ所発見し、それら全てを潰していった。

「……報告は以上だ。すでに君が示した候補の八割を調査済み、調査は予定よりも捗っていると云えるだろう」

「この調子なら、そう日を置かずに彼女の現在地に追いつけるでしょうね」

ウイリアムは満足げにそう頷いた。

「流石キャスター、壬生狼と呼ばれただけのことはある……仕事が早い、まさに狼だ」

「……いや、それも君の読みがあつてこそだ」

キャスターはそう言つて黙つたが、やがて顔を上げると、こう聞い

た。

「君は以前、あの異形の気配を辿って魔女を追っていると言ったが……それが意図的に撒かれているもの、つまり罠であるという可能性は、考えられないのかね？」

「すでに二度、跡を丁寧を追って彼女に追いついています。恐らく彼女自身、召喚させたアレと同化したつあるのでしょうか。そうなればもう隠しようがない。その証拠に、追跡している痕跡は段々と濃く、隠しようがないものになっています」

「……」

ひよつとしたら。と、ウィリアムは瞑っていた目を、ゆつくりと開きながらこう続けた。

「……彼女の行動原理は人知れず、あの異形に支配されているのかも」
「なら、アレの目的は？　なぜ既に脱落したライダーのマスターを攫ったのかね？」

「んー、あまりグロテスクな内容じゃなければ良いのですが……」
そう苦笑いするウィリアムに、キャスターは溜息をつく。

しかし――。

「……っ」

老体であるはずのキャスターが機敏に立ち上がり、廊下の先を睨む。

そこには、一匹の猫がいた。猫はジツと廊下の角から顔を出し、キャスターを見つめている。

しかし、その実像は不意にブレる。そして猫は、電波の悪くなった映像のように消えていった。

「………今のは」

君の使い魔かね。と、キャスターはそう聞こうとしてウィリアムを一瞥して、そこで気づいた。

今まで冗談めかしていたウィリアムが、さっきの猫のようにジツとキャスターを見つめている。その視線は実に冷ややかで、予断を許さないものだった。そしてそれは、やがて悦びによって細められた。

「……ウィリアム君」

「あ……つと、ええ、何でしょう？」

キヤスターは顎を引き、暫し言葉を選ぶ。

「……あれは、君の獣性魔術かね？」

その問い、ウイリアムは悪戯がバレた子供のようにクスクスと笑う。

「……ええ。ま、ちよつとした実験です」

彼はそう説明すると、ベッドから降りて冷蔵庫を開ける。そして冷えた缶コーラを取り出し、微笑む。

「最初は軽い思いつきでしたが……貴方の反応を見るに、これはあのアレクシア・ブロッケンにも使えそうだ」

「……………」

それは、どう意味かね。

そう聞こうと、キヤスターは口を開く。しかし話は終わった、詳細は内緒だよと言わんばかりにウイリアムは缶コーラを開け、飲み始める。

「ふむ……ああ、彼とて魔術師だからな」

そういう人種なのだろう。キヤスターはそう肩をすくめ、へそを曲げたように霊体化してしまう。

人から放棄された建物は、底冷えするような冷たさを帯びていた。廃墟と言って差し支えないような、古い空きビル。佐藤はアレクシアに昏倒させられ、そして気がついた時にはここで軟禁状態となっていた。

「……余計なことはするなよ」

そう告げるのは、佐藤の背後に立つ青年だ。

「余計なことをしても、あいつ相手じゃ死ぬだけだぞ」

一ツ目と名乗ったこの青年は、聞くところによると、佐藤と同様あの女に捕まっている身分らしい。しかし彼は条件付き、という形であるの女に手を貸しているのだという。

一体どんな事情があるかは知らないが、佐藤からすれば、彼は佐藤を見張る看守である。そして今、佐藤は一ツ目の指示によって初めて

狭い倉庫から解放され、どこかへと歩かされている。

「……怪我の具合はどうだ」

佐藤の腕を気遣っているのか、一ツ目はボソツとそう聞いてきた。

「……別に。そんなことより、これ、何なの？」

佐藤は振り返りもせず、一ツ目に右手を見せる。佐藤の右手は、黒いハンカチで縛られている。魔術的な要素も孕んだ拘束具の一種だろう、これのお陰で片腕の佐藤は何かを掴むどころか、右手に力を入れることさえままならない。

「魔女の呪具だ。変に触らない方が良さぞ」

触る手がもうない。と、佐藤はぶつきらばうに応える。そうして応えながら、佐藤はアサシンのマスターの傍らにいた女——あの露出の高い女を想起した。きつと、これは奴の仕業なのだろう。

そうこう考えているうちに、佐藤は階段を登り、点滅する電灯が付いた廊下へと連れられる。

廊下の奥、元は休憩所だったであろう空間に、あの女——アレクシア・ブロッケンはいた。

「よう、お嬢様。久しぶりー」

破れたソファアに腰掛け、肩からコートを被るアレクシアの横には、露出の高い女——ミア・ブロッケンが壁を背にしている。佐藤はミアを無視し、まっすぐアレクシアの前へと歩み寄った。

「先に聞いておきたいんだけど。お前がアサシンのマスター……で、間違いない？」

「……ええ」

「良かった」

アレクシアの肯定を確認すると、佐藤は歩きながら右手のハンカチを歯で啜える。

そして、その呪具を一息に噛み千切った。

「勘違いだったら、マズイかなって」

そうしてソファアに座り込むアレクシアの前に、ハンカチを吐き捨てて立つ佐藤。騒ぐ他二人、それに対しアレクシアは口端を上げながら片目を開け、何かを期待するように佐藤を見上げているだけだっ

た。

「……………」

「……それで、何で私を殺さずにいる？　何で、ここに呼んだの？」

「……ククッ」

それで良い。と、アレクシアは顔を伏せ、肩をすくめた。

「事を始める前に、一度お前と話しておきたかった」

「私と話……？」

「次が始まってしまえば、こんな穏やかな夜はもう訪れない。もう、この聖杯戦争が終わるまで止まることはないから……」

「一体、何を……」

何を言いたい。

そう佐藤が聞こうとした時だ。建物全体を揺らす衝撃が、佐藤の口を止めた。

地震か。本能的に顔を上げるが、直後、下層から響く野太い咆哮がこの揺れが自然に因るものではないことを悟らせた。

咆哮は振動が治まってからも、音量の大小はあれど絶え間なく続いている。佐藤はその正体に思考を巡らせていたが、やがてその正体より、それを操る存在へと視線は移っていく。

アレクシアは、佐藤の反応を楽しむように、静かにこちらを見つめていた。

「……一体、何を始める気？」

絞り出したような、佐藤のか細い声。

それが可笑しかったのか、アレクシアは薄い笑みを浮かべた。

第二十四話 『美学』

「……一体、何を始める気？」

絞り出したような、佐藤のか細い声。

それが可笑しかったのか、アレクシアは薄い笑みを浮かべた。

「今やっていることと、何も変わらない」

日坂亜種聖杯戦争。既に開戦から十日余りが過ぎたこの戦争に、アサシンのマスターとして参加し、今や一柱の怪物と化した女は言った。

「戦争——聖杯という大義名分で、何をしても許される……ただの戦争さ」

そのシテイホテルは、西に沈む夕日を背負って大きな影となっていた。

そして今、その影は周囲を遠巻きに囲むパトカーや救急車両の赤色灯によって、赤と黒の斑模様となっていた。

「テロだって……」

「ガス漏れだって聞いたよ？」

「でも銃声っぽい、聞いた」

「でもガス漏れだって、みんな言ってるよ……？」

ホテルを囲む警察官や消防隊、それらを外側から覆う次の膜のように集まった野次馬達。肩を振り腕を伸ばしながらそれら人混みを掻き分けて進んでいくと、そんな言葉が耳に入る。

……テロなら、何で遠巻きに見てるんだ。逃げろよ。

と、そんな考えが読水の頭に横切り、イラついた頭を更に熱くさせる。

人混みを突破し、読水とランサーは両腕が広げられる程度の開放的な空間に飛び出す。すると、目敏い警察官が二人を睨むが。

「お待ちしております！」

やら、こっちはハズレらしい”

“はい……あの濃厚で異質な気配は、ここからは感じません”

“派手な野郎だ。アレクシア本人が来ているならお前が気づかないはずないし、ホテルの人間は今頃皆殺しにされてる”

“それならば……彼女の部下か、使い魔の類でしょうか？ ウィリアム・シンの言葉を信じるなら、アサシンは既に脱落しているのとこのことです”

“どうだろうな。と、読水は眉をひそめた。

あの男の諜報能力を今更疑う気はないが、その発言の全てを信じるには賢すぎる相手だ。

“何にせよ、あの魔女が仕組んだ罠を真つ向から踏んでいくんだ……ランサー、気を抜くなよ”

“承知しました。もう、不覚は取りません”

ランサーの強い返答に、読水は頷く。

そうして二人は、周囲の人間を気にする素振りもなく、真つ直ぐにホテルへと踏み入っていった。

一時間ほど前のことだ。

安アパートの一室で、読水はウィリアムと連絡を取り合っていた。手持ち無沙汰のランサーが、壁を背に座り込む読水の前を横切る。そして小窓が開かれ、入り込んだ風が読水の通信用の魔術礼装——ラピスラズリが嵌め込まれたイヤーフックの装飾を揺らす。

「……ああ、クソっ」

普段、耳に装飾品など付けない読水は、その感触に顔をしかめる。そしてイラついた様子で、耳元から装飾を押さえつける。

「なあ、ウィリアム。何で通信用の礼装がイヤリングなんだよ？ あんたの趣味か？」

その言葉に対するウィリアムの笑い声が、イヤーフックの細やかな振動によって読水の耳に届く。

「同一のデザインや、同じ宝石を割って作ったような装飾品……それらは通信の質や秘匿性を増してくれます。耳飾りなのは、会話での通

信が手つ取り早いからですよ」

こちらの音声をいちいち文字に直したりするのは、コストの無駄でしょう？ と、ウイリアムは言い切り。

「……それで、読水君。状況は理解できましたか？」

「聞いてたよ……まだ、協力するって言った気はないけど」

通信用の魔術礼装にて、ウイリアムが読水に伝えたこと。

それは日坂亜種聖杯戦争の監督役——マリオ・アルバーニからの、聖杯戦争の一時休戦要請、そしてアサシンのマスター——アレクシア・ブロッケンが数十分前より起こしている、テロリズムへの支援要請であった。

元より聖堂教会との連絡など取っていない読水には、監督役からの通達など来るはずもない。アレクシアが数十分前から、この聖杯戦争とは無関係の者を巻き込んだ事件を起こしているという事実も、ウイリアムからの連絡で初めて知ったほどだ。

「というか……こっちの追跡に対する攪乱か、俺らを誘う為の罠だろ」
読水はそう結論づけた。

「その各地で起こっているテロの、どこにアレクシア本人がいるかも分かってないんだろ？ いや、そもそも部下に命じて、自分はまだ隠れている可能性だって高い」

「例えそうだとしても、放っておけば聖杯戦争自体が有耶無耶に成る可能性だってあります。やるしか、ないんですよ」

ウイリアムは溜息混じりにそう言い。

「……ほんと、こういうことに悪さに関しては叶いませんね」

そう、呟いた。

「……………」

ずいぶんと親しげに言う。読水はその言いようが鼻についたが、一々口に出す必要はないと、こう切り出した。

「……で、他の連中は？」

「シユウジ君は既に動いています。バーサーカー陣営は返答がないようで、アーチャー陣営は……要請自体は了承しているようですが、こちらから連絡が取れない今、当てにするのは難しいでしょうね？」

……僕は、僕はね？ 鏡宮氏の連絡先、知らないんですよ」

「……あっそう」

皮肉屋め。読水は舌打ちをした。この男、やはり読水の経歴については調査済みらしい。

しかし、鏡宮については信用ができる。そう、読水は考えている。彼が聖堂教会に唯々諾々と従うとは思えないが、アレクシアの暴挙を、この聖杯戦争を荒らす魔女をこれ以上放置しておくとも思えない。

そして、それは読水にとっても同じことだ。

佐藤の一件然り、この一件然り、これ以上あの魔女にこの戦いを汚されるのは、我慢ならない。

それに……読水にとつて、この聖杯戦争は人生の総決算——十年前からここまで背負ってきたモノ、その全てを精算する為の儀式だ。

例えそれが激動のものだとしても、中止などあってはならない。

身を尽くして求めるのは決着であり……終わりという名の、救いのだから。

「……まあ、奴をやることに変わりはない」

読水はそう呟くと、テーブルに置いておいた拳銃を引つ掴み、脇下のガンホルスターにしまった。その様子にランサーも察し、窓を締めて外出の用意を始める。

「協力する……で、俺達は？ 一旦合流するの？」

「時間が惜しい。各自、近くの現場で事態収束を図るのが良いでしょう。貴方は駅前のシテイホテルへ。私は商店街の方と……ふふっ、山の方にある物流会社の倉庫ですね」

「おい待て、そっちは二つあるの？」

「……ええ。ですので、サーヴァントと分かれて潰していきます」

「……大丈夫なのか？」

「サーヴァントのいない魔術師くらい……片手間で殺せなきや、あのセイバーだって落とせやしませんよ」

呆気からんと、そう豪語するウィリアム。

「お忘れですか？ これは一組だけが勝ち残る聖杯戦争……今はどう

であれ、最後は貴方とも、あのセイバーとだって渡り合わなきやならない」

「……………」

その言葉に読水は口を手で覆い、拭った。そうしないと、何か言葉が溢れ出そうになったからだ。

その言葉の正体は、手で堰き止めてしまった読水にも、もはや分からない。

「……………」

ゆつくりと読水は手を口から離し、現地に向かうべく鞆を掴んだ。

「……その、そのセイバーだ。あいつらは、今どこに行ってる?」

「郊外の化学プラントです」

化学プラント。その言葉に、外へ出ようとしていた読水の足が止まった。そこへ追い打ちをかけるように、ウィリアムはこう続けた。「どうやら、僕らが向かう場所よりよっぽど緊迫した状況みたいですよ?」

人里離れた、県境の化学プラント。

街の喧騒とは無縁であったこの地だったが、今宵この夜に至っては鳴り響くサイレンと走り回る公共車両によって緊迫とした雰囲気張り詰めていた。

照明によって闇夜に浮かび上がるプラント施設は、遠巻きにでも煙突には見えぬ所から煙を上げ、時折何かが軋んだような音を周囲の山にまで轟かし反響させている。

そんな状況を、シュウジは黒塗りの公用車に背を預けて眺めていた。

防護服を来た関係者が叫び、走り回る騒然とした雰囲気の中で静かに指を組み、神父服を纏った長身を折って工場を睨むその姿は、傍から見ればかなり異質な存在であったろう。しかし、そんなシュウジに用もなく話しかけるような、そんな余裕のある者など、既にこの場にはいない。

「シュウジ神父」

呼びかけと、こちらへと走り寄る足音。シユウジは顔を上げ、作業着を来たその中年のエンジニアの顔を確認すると、車両に預けていた腰を上げて直立した。

「作業員の退避は？」

「三名、まだ確認が取れていない。しかし証言から、現地で死亡している可能性が高い」

「施設の損壊はどうですか？」

「まだ確認中だが……現場が現場だ。あまりアレに暴れられると、最悪の事態になりかねない」

「……………」

「既に五キロ圏内の住民の避難は完了。テロの疑いがあるとして、施設周辺からはマスコミや関係者からも撤収させた」

後は、お前が行って片付けるだけだ。と、エンジニアはシユウジを一瞥する。その言葉にシユウジは肩をすくめ、プラント施設の方へと歩き出す。

「……………おい」

そのまま現地へと歩いていこうとするシユウジ。エンジニアは少し逡巡した後、その背後を呼び止める。

「おかえり、代行者……酷いカムバックで悪いが、また頼むぞ」

「……………」

シユウジは振り返り、その中年のエンジニアに一礼する。そして今度こそ、プラント施設の方へと迷いなく歩き出した。

「……………知り合いか？」

念話で、霊体化したセイバーがシユウジへと聞く。シユウジは歩きながら、それに答える。

「顔見知りだ。もつとも、会う時はいつもこんな場面で、碌な話をしたことはない」

「戦場の友、という奴だな……悪くないな」

「そんな荒んだ仲じゃないよ……………つと」

シユウジはふと、立ち止まる。前方で直立不動の姿勢でこちらを待っている、知り合いの存在に気づいたからだ。

着古した修道服、とりわけ頭巾の上に被るベールは古く、灰色に脱色している。灰被りという、彼女のコードネームの元となったその灰色のベールの下には、彫刻のように美しくも冷淡な顔があり、今はその右目に黒い眼帯が巻かれていた。

「シスター……」

シユウジは呟き、彼女——シスター・セレネントーラのもとへと駆け寄る。

「まさか……こちらに来ていたのですか？ 孤児院の方は……？」

「休暇を頂き、こちらに来ました。私の助けが欲しいと言ったのは、シユウジ神父、貴方の方でしょうか？」

それは確かに、その通りだ。シユウジは言葉を詰まらせた。

かつては同じ代行者として、死徒と戦ってきたセレネントーラ。彼女はシユウジと同様五年前に代行者を解任され、現在は聖堂教会が運営している孤児院で働いている。

一昨日、シユウジは諜報戦のプロであるセレネントーラに、十年前に日坂市で起こったこと——聖堂教会が隠している真実について調べて欲しいと連絡をした。彼女はぶつきら棒にそれを了承してくれたが、まさかフィレンツェからこの日坂市まで急行してくれるとは思っていないかった。

「それは……いや、調べて欲しいとは言いましたが、直接来なくても……」

「……」

シユウジの返答が気に入らなかったのか、セレネントーラはパイと顔を背け、プラント施設の方に歩き出す。

性格は相変わらずだな。シユウジはこっそり溜息をつき、それから彼女を追いかける。

「その……シスター、ここへはどうして？ まさか、貴方も代行者に復帰したんですか？」

「元々大阪へ観光という体裁で日本に来ましたが……事態が事態だからと、ここの支部から招集を受けました……これならば、貴方と会う理由を用意する必要がなくなります」

「だからって……！」

それに……。と、セレネントーラは立ち止まり、シユウジの方へと振り返る。

「貴方がここに来たのは、あの手紙が切っ掛けなのでしよう？ 仕方ないこととはいえ、私も多少の責任は感じています」

そう言われてみれば、そうだったか。

思い返してみれば……。もう二週間も前、セレネントーラから受け取ったマリオ神父からの指令によって、シユウジは日坂市に舞い戻った。そして巡り巡って、こうしてセイバーのマスターとして亜種聖杯戦争に参加し、そして代行者としてこの危険極まりない場所へと向かっている。

しかし……。抑揚のない声ながらも、眉をひそませ、面と向かってそう告げるセレネントーラ。それが責務、当たり前だという謙虚な姿に、シユウジは思わず顔を伏せてしまう。純朴と言うのか、諜報戦を得意としておりながらも、こういう生真面目な彼女の性格はどうも苦手だ。

不意に、プラント施設の方から鉄板を叩くような音がこちらへと響き渡る。

こうしてはいられない。シユウジは気を取り直し、咳払いをしてからセレネントーラに言った。

「例の件は後で。私は早急に、あちらを対処する必要がありますので」
では。とシユウジは一礼し、セレネントーラのそばを横切る。

「そうですね」

セレネントーラはそう言うと、大股で歩きながらシユウジを追い越す。

「……何してるんですか？」

「私も応援として招集されたんです。同行は当たり前でしょう？」

「え、しかし……。装備は？」

「非番に灰錠はいじょうを持ち歩く趣味はありません」

「ちよ……。ちよつと待ってください！」

シユウジは慌てて、セレネントーラの前へと回り込む。長身のシユ

ウジに行く道を塞がれたセレネントーラは、ムツとした様子でシユウジを見上げた。

「こんなでも、元代行者です……今は、少しでも戦力があるでしょう？」

「こちらにはサーヴァントもいます。シスター、貴方の手を借りなくても大丈夫……」

「いないじゃないですか……」

「霊体化してるんです……ッ」

シユウジの背後を覗き込んで間の抜けたことを言いつつ、そのままプラント施設に強引に向かおうとするセレネントーラ。それを両手を広げて通せんぼし、シユウジは語気を強めて言葉を返す。

「とにかく！ 前線から退いている貴方を、危険に晒す訳にはいきません！」

「これは、聖堂教会から与えられた任務です……私を言いくるめて、独断専行に走りたいのですか？ 顔が孤児院を回っていた頃から、以前のものに戻っていますよ」

ああ、もう……っ。と、シユウジは頭を抱えた。付き合いは長いが、彼女を口八丁で説得できたことなどない。いや、元よりこんなバカな人間に、諜報戦に長けた彼女を口先でどうこうするなど無理だったのだ。

「……こんなことは、言いたくはありませんが」

シユウジは溜息をつくとき、こう言った。

「装備もなく、ブランクもあり……何より、目を負傷している。シスター、今の貴方は正直に言っ、足手まといです」

「……………ッ」

セレネントーラの隠された皮膚が総毛立ち、灰色のベールに覆われた髪が逆立つ。

代行者セレネントーラのトラウマ、後天性の逆鱗に触れた。その事実、シユウジの体が震える。しかし、それでも必死に本能に逆らい、戦闘態勢を取るのだけは拒絶し続けた。

「だから……ここは私と、セイバーだけで……」

く。シユウジは彼女を、残されていた片手で受け止めた。

「…………ツ」

「…………シスター」

シユウジはポツリと呟く。その声色には、同情の色が隠せていなかった。

「もし…………もし、貴方の拳がちゃんと当たっていたら、片手では受け止め切れずに、私は地面に薙ぎ倒されていたはずです」

片目を失ったことによる、遠近感の障害、視野の狭窄。灰錠はいじょうを武器に肉弾戦を仕掛ける。しかも先程のような大技を主軸に戦ってきたセレネントーラにとって、この障害は致命的であった。

「もう、分かったでしょう…………諦めてください」

「…………」

シユウジの言葉に、セレネントーラの顔が悔しげに歪む。

「…………ごめんなさい、行ってください」

そして、ぽつりと彼女は小さく呟いた。

シユウジは頷き、立ち尽くす彼女をそのままに、踵を返してプラント設備へと向かう。

「…………クソツ」

後味が悪い。

あれで良かったのか。もっと平和的に解決する手段はなかったのだろうか。そんな考えが、戦いを目前にしているのも関わらずにシユウジの頭をいっぱいにする。

「…………今更、言っても仕方ないが」

そんなシユウジの内面を感じ取ったのか、セイバーが念話で語りかけてきた。

「良かったのか？ あの怪我でも、十分な働きを期待できるように見えたが？」

「彼女はもう、代行者じゃない…………最早、守られる側の人間だ」

化物退治は、私達だけでやる。と、シユウジは断言した。

その言葉に、セイバーはクツクツと楽しげに笑った。

「お前さんもだいぶ、騎士道つてもんに染まってきたな」

セイバーはシュウジの隣に実体化する。彼はスーツ姿でなく、既に鎧を身に纏っていた。

その言葉に、シュウジは返事をせずに眼前の建物を――眩いライトに照らされた、轟音が響く戦場を見上げた。

「……ちゃんと切り替えられているな」

セイバーは安堵したように、そう呟く。そして実体化した剣を担ぎ、高らかに言った。

「ならば行くか、我が主よ……戦場が、俺達をお待ちだ」

「……では、我々も行きましょうか」

ウィリアムは背後のキャスターへと振り返り、そう言った。

読水との通話を終えた二人は、古い空きビルの、かつては休憩所であったであろうフロアにいた。全力でもって魔女を追跡した二人は、既に彼女の背中は間近なのだど理解していた。

「……本当に良いのかね？ ウィリアム君」

壁際のくたびれたソファーを見下ろしつつ、キャスターは口を開いた。

「別れて行動するという話だが……君の実力を疑う訳ではないが、せめて数人、隊士を付けた方が良い」

「あの化け物に、数の有利はない……それは前回の奇襲で、分かったじゃあないですか」

ウィリアムは首を横に振り、キャスターの進言を断った。

「それに、貴方は貴方で全力で働いてもらう以上、こちらに余力を割いて頂くのは申し訳ない」

その言葉に、キャスターは肩をすくめる。元々キャスターが召喚する新選組の霊体に関しては、必要な魔力消費量はほとんどない。だからこそウィリアムは戦闘時、自らも全力で戦うことができるのだ。

しかし、微量であつても消費する事実に変わりはない。それは全力とは言えない。ウィリアムはそう言いたいのだろう。

とは言え、マスターはサーヴァントを実体化させているだけである程度の消費を強いられている。実際のところ、全力で戦えないのは寧

ろウイリアムだ。

しかしキヤスターは、その事実を彼に指摘するほど無粋ではない。

「……そうかね。では……確か、私は商店街の方だったかね」

「キヤスター」

踵を返し、霊体化しようとするキヤスター。その背中に声を掛け、ウイリアムは英霊を呼び止める。

そうして振り返ったキヤスターに、ウイリアムは背負っていた刀袋を投げ渡した。

キヤスターは右手で、刀袋をしつかりと掴み取る。その老体とは思えぬ反射的な動作に、ウイリアムはニヤリと笑う。

「言ったでしょう？ 全力で働いてもらうって。だったら、それが必要になるはずですよ」

「……………」

キヤスターは黙ったまま視線を落とし、刀袋の結び目に指を掛けた。

「私がついていても無用の長物ですし、ホテルに置きっぱなしにしても味気ない」

それに……。と、ウイリアムは溜息をつきながら、こう続けた。

「それをただの触媒、貴方を……ただのキヤスターで終わらせてしまうのは、あまりにも——」

——もったいない。

ウイリアムはそう言って、今や緩やかに鞘から刃を覗かせてみせたキヤスターを見つめる。その目は、どこか少年のような、憧憬の念がこめられていた。

「お願いしますよ、キヤスター。時代の流れに吞まれない、そんな御業もあるんだって……僕に見せてください」

キヤスターは顔を上げ、ウイリアムを見つめる。その強い視線に、キヤスターは首をすくめて苦笑する。

キヤスターは何も言わなかった。

彼は刀を腰に差し、スツと踵を返して霊体化してしまう。

その様子を見守っていたウイリアムは、ホッと息を吐いた。どうや

ら、答えはイエスのようだ。

「美しいものは残すべきですよ、キャスター」

そして、ウイリアムは一人つきりになった廃墟で、ボソツと呟く。

「僕の先祖が残した技も、貴方のその……剣の腕もね」

第二十五話 『魔女狩り』

第二十五話 『魔女狩り』

シテイホテルは一階と二階が吹き抜け構造になっており、中央に噴水を設置したロビーを一望できるよう一階や二階にはレストランやバーが並んでいた。

普段は賑やかな会話や控えめなBGMが聞こえてくるであろう、それら店からは今は物音一つとてない。ただ噴水の水音と外から響くサイレンが、この状況が異常事態であることを示してくれている。

読水とランサーは、そんなホテルの内部へと息を殺して侵入し、物陰に身を隠しながらホール脇の階段まで進んでいった。

そうして階段を登った先の、二階のホール。そこに見えたのは惨劇の跡。血の海と転がった幾つもの死体と、その中心で立ったままになっている首のない、それもスポーツインナー姿の少女の死体だった。

「……マスター」

階段を登り切る前にそれを見たランサーはゆっくりと屈んで身を隠し、背後の読水に小声でそれを示す。

読水は因果線^{ライオン}で状況を把握し、ガンホルダーから回転式拳銃——コルトローマンを抜いた。ランサーもそれに習って服装をサーヴァントとしても和装に変え、十字槍を実体化させた。

「周囲の死体には、警官も確認できました」

「……そうか。銃は抜いているか？」

「はい。中央の首無しが元凶と考えられますが、アレは魔女の呪いなのでしょうか？」

「いや……全く分からん」

出たところ勝負だな。と、二人は領き合う。そしてランサーを先頭に、二人は盗賊のように素早くホールへと躍り出た。

「死体を調べる。ランサーは周りを警戒しろ」

「承知しました」

読水達は身を危険に晒しながら、物陰ホール中央の血の海へと早足で近づいていく。近場の死体から死体へと次々に銃口を移していく読水は、奥の方で親子と思われる死体が抱き合っているように倒れているのを見つめる。

「……クソッ」

奇襲の恐怖か怒りか、心臓が強く脈打つのを感ずる。それを一息、二息と深呼吸で制しながら、読水はそれでも惨劇の中心地へと足を踏み入れていく。

「しかし、一体何が……」

読水は眩きながら、死体を観察する。倒れ伏す警察官には、右肩口から右胸にかけて巻き付くような傷が見られた。

鋭利な刃物のものであるものではない。どちらかと言えば……裂傷だ。昔、アラスカでグリズリーに殺された死体を見て吐いたことがあるが、その時に見た傷によく似ている。

「……………」

これだけの傷なら、やられた方も相当な衝撃があつたろう。それに死んだばかりならば、『辿跡術』で経緯を辿るのは容易い。

「ランサー、魔術を使って調べるから警戒を——」

その時だった。

読水は首筋の毛が逆立つような感覚を覚える。魔力の気配、それも目の前の首無し死体の方からその気配を感じたのだ。

首無しの少女は死霊術による爆弾か、あるいはフレッシュユゴレムか。いずれにしても先手を打たれた。

「……………」

屈もうとしていた読水は顔を上げ、左手の鞆で上半身をカバーしつつ、右手の拳銃は腰だめに構えていく。

そんな最中、顔を上げた読水の視界の端に映る。抱き合ったあの親子の死体、その母親の方がガバリと身を起こし、少女の体の下に隠していた武器を引き抜く瞬間を。

やられた。と、圧縮された時間の中で読水は歯噛みする。中央の首無しと、その魔術的な初動は囹、本命はこちらの物理的な奇襲だった

らしい。

母親に擬態していたその人形は、引き抜いた火器——小型の大砲のような擲弾投射機から榴弾を発射する。読水へと迫る、その榴弾の弾速は秒速七六メートル。プロ野球選手の平均的な投球の二倍近い速度を持っていた。

しかしそれも、時には音速を超えた戦闘を繰り広げるサーヴァントの前では、全く問題にならない速さであった。

「マスターッ！」

読水と榴弾の間に、ランサーが割って入る。そして彼女は、手にしていた槍で榴弾を叩き、横合いへと弾き飛ばした。

弾き飛ばされた榴弾は、そのまま壁にぶつかり爆発を起す。

「ランサー、屈めッ！」

爆発の衝撃波は全身を気付けのように叩き、爆発音は読水の思考を単純なものにさせる。読水は声を荒げながら右腕を突き出し、立ち上がろうとしていた人形に向かって拳銃を断続的に発砲した。撃ち出されたマグナム弾の多くは外れたが、うち一発が人形の頭部を掠めた。

しかし、人形は止まらない。衝撃に体をフラつかせはしたものの、すぐに走ってホールから物陰の多い飲食店が並ぶの区画へと逃げ込んだ。

その痛覚のないような挙動、頭部からの出血、そして漏れ出た魔力の性質……それらの情報から読水は確信し、歯噛みした。

「あの野郎、フレッシュゴレムだ……ッ」

それも高精度の、特注品。死体とは言え、人間に擬態できるゴレムなどそう簡単に作れるものではない。

そして、そんなゴレムを使う、ある魔術師を読水は知っている。彼女もまた、目の前のゴレム同様、古臭い銃器を愛する骨董趣味があった。

その魔術師とは現在、現在連絡が取れなくなっている。

「この野郎……この野郎……ッ！ 一体誰の身体を使ってやがるッ!？」

読水は唸りながら右手を振って拳銃のシリンダーを横に振出し、装填器具を使つて再装填に入る。

「マスターツ！」

「ランサー、核だ！　心臓部に宝石で作られた核があるから、そこを……」

「いえ、そうでなく！　一度冷静に……」

ランサーが自身の主を諫めようと、意識が読水に集中する。

その瞬間を突かれた。首無しの死体——スポーツインナー姿の人数が勢い良く駆け出し、低姿勢のままランサーにタックルを決めた。横合いから両足に飛びつかれたランサーは、持ち上げられたまま吹き抜け手前の手すりに叩きつけられる。そして、甲高い音と共に手すりは外れ、二人の体はそのまま空中へと投げ出された。

「ランサーツ!？」

読水が叫ぶ。その瞬間、その横を何かを通り抜けた。見れば、長身のライフルを担いだ人形が新たに現れ、脇目も振らずにランサー達がいる一階ロビーへと飛び降りていた。

またしても、やられたか。読水は呻いた。奇襲の狙いはマスターとサーヴァントの分断、それは向こうの計画通りとなつてしまった。

「……………」

しかし、構うものか。読水は念話でランサーを呼ぶ。

「ランサーツ！　もう一体行つたぞ！　俺はこっちの一体をやるから、そいつらはお前がやれ！」

「ええっ!?　大丈夫なんで……」

心配ごとなど、今は聞いている場合じゃない。読水は踵を返すと、先ほど逃げた人形を追って飲食店の並ぶ区画へと走る。

果たして、己の主人は冷静か。否か。

ランサーは噴水から這い出し、槍を杖に立ち上がった。

目の前には、噴水の彫刻を足場に立つ、首無しの人形——フレツシュゴレムと言うのだったか、何にせよサーヴァントを不意打つほどの運動性能を持った人形だ。

加えて……。と、ランサーは目を細める。噴水の向こう側に降り立った、もう一体の人形。見た目は赤髪を括った西洋人であったが、問題は抱えているモノだ。

一見して鉄パイプだと思っただが……。聖杯から与えられる情報によると、あれは身の丈を超えるライフル銃——単発式の古い対戦車ライフルだということではないか。

無論、そんなものはサーヴァントには効かない。投石だろうがミサイルだろうが、魔力の込められていない物理攻撃ならダメージにはならないのだ。その証拠に、赤髪の人形が今、首無しに投げ渡しているのは禍々しい、背骨のような意匠をした呪い付きの剣である。向こうはサーヴァントを倒す術を心得ている。

「……………」

そう、問題はこの不理解だ。ランサーはどんな攻撃にも対応できるよう、槍を中段に構える。あの対戦車ライフルを己にどう使うか、それをランサーは理解できていない。

つまり、正直、先手を打つての対処法が分からない。

「マスター……。今すぐ助けに行きたいですが」

ランサーは顔を引きつらせながら、呟いた。

「こちらは、少し時間が掛かりそうです」

その言葉に反応してか、首無しの人形は足場にしていた彫刻を蹴りつけ、ランサーへと飛び掛かった。

一方、読水と人形との戦いは、幅の狭い廊下を挟んでの銃撃戦となっていた。

人形はベルトに差していた拳銃を抜き、逃走の合間に読水に向けて乱射する。非正規のカスタム銃なのだろう、明らかに9ミリとは違う強装弾を、人形は常識外のバースト射撃によってバラ撒いてくる。

しかし、そんな滅茶苦茶な銃撃にやられるほど、読水も甘くはない。片手での乱射によって散る照準と意識、そのブレを射止めるように、読水の射撃は人形を確実に追い込んでいく。同じ片手での射撃だが、その性質はまるで違っていた。

だが、読水は訝しんでいた。人形は右手に持つ擲弾投射機を、どうして使わない？ もし使われれば、読水の優勢など一瞬で崩れる。なのに、人形は逃走に専念し、投射機の再装填を試みようとするらしい。逃げた先に、罠でもあるのか。あるいは待ち伏せか。読水は銃弾を装填しながら、壁越しに人形が逃げ込んだバーを睨む。しかし、人形が逃げる先に魔力的な気配は感じられない。

「……………」

あるとすれば、地雷などの物理的な罠か。ならば、と読水は拳銃を一度しまい、窓の下枠に身を隠しながらバーの入り口まで近づく。そして靴から翡翠で作られた腕輪を取り出した。

翡翠鳥の腕輪——これを触媒にした使い魔で、バーに先行させ偵察させる。向こうに隙が生まれたら即座に読水が突入する……いつもの手だ。

そうして腕輪を左手に嵌めた読水は、ゆつくりとバーのドアを開け、素早く飛ぶ小鳥の使い魔を入れさせた。

そして、読水は使い魔の目を通して見た。

バーのカウンターに設置されたドイツ製の汎用機関銃。

そして、それを掴み取ってこちらに銃口を向ける人形の姿を。

「……………ッ!？」

これが狙いか。

読水の反応は速かった。地面を蹴ると、来た道に戻るように全速力で廊下を駆ける。

その次の瞬間、読水がついさつきまで背にしていたバーの入り口が銃声と共に碎け散った。次いで読水を追って、弾の雨が廊下のウインドウを次々に破壊していく。

読水は背中に当たるガラス片や石膏の欠片に死を予感しながら、我武者羅に廊下を走る。途中、使い魔が細切れにされたような感覚が魔術回路を通して伝わったが、今はそれどころではない。乱雑に横薙ぎに連射され、当たったもの全てを粉碎していく様はまさに鉄の雨、死の弾雨だ。

読水は辛くも廊下の角を回った。しかし走る勢いを殺せずに壁に

肩を打ち付け、弾かれるように地面に倒れてしまう。

「クソッ……うわっ！」

その直後、頭上の壁が人形の機関銃によって碎けた。どうやら角の壁を貫通して、ここにまで弾が届いているらしい。

読水は頭を抱えながら、近場の店内へと転がり込む。そしてコンクリート製の柱に背を預けると、忘れていた呼吸を再開し喘いだ。

一方――。

県境の化学プラント、照明に照らし出された敷地内では、この世のものとは思えぬ戦いが繰り広げられていた。

「ゴッ……ガアアアアアアアアアアアッ!!」

照明の外側へ弾き出され、暗がりでも激昂する怪物――アレクシアと己の死霊術によって自らを加工し、今や人間としての面影を捨てた加工屋“ステイブ・フォスター”だ。

彼は既に多くの魔術師の死体を取り込み、ステイブの腰から下は不定形に地に広がる巨大な肉塊となっていた。その下半身は前方部に醜悪な口腔の付いており、必要に応じて皮膚が裂かれ、腐臭のする体液と共に巨大な眼球や腕が現れる。

その肉塊の体長は約二〇メートル。その怪物は既に、不定形に蠢く肉塊が本体か、その上にちよこんと鎮座するステイブが本体か一見して分からない。

そんな……死肉で作られた、形容し難い、醜悪で巨大な怪物。それがステイブの末路だった。

それに相対するのは、たった一人の男。ただ一人の剣士。

しかしこの剣士、スペインで名を轟かせた大英雄であった。

「喚くな化け物……さっさと来い」

セイバーは敷地の中心に立つて、手にしている剣を肩に担いだまま怪物に手招きする。怪物は吠えるも、セイバーの煽りには応じず、先ほど斬り裂かれた傷口の肉を盛り上げらせて塞ぎつつ、その周囲を遠巻きに這って機会を窺っていた。

一対一の戦いでは、いつだって格下が格上の周りを回るもの。

如何なボクサーとて、幼児相手ならフットワークは使わない。

そう、この戦場の主権、この戦いに置ける絶対王者はセイバーであつた。

「グアウガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

怪物は喚き、体の側面の皮膚から何かを噴出させる。それは夥しい体液を出したまま、宙へと撓るように伸びていく。

筋繊維で作られた、長大な鞭。大きく横薙ぎに振るわれ、顔面へと迫るそれを、セイバーは手隙だった左腕を顔の高さまで挙げただけで防御した。

空気が叩かれ、銃声にも似た音が施設内に響き渡る。衝撃と空圧はセイバーの体を飛び抜け、反対側へと届く。

しかし、セイバーの体は微動だにしない。自身の体重より遥かに重い攻撃を受けて尚、彼は足さえ滑らせることはなかった。それどころか、掌で受けたその筋繊維の鞭をその常軌を逸した握力で鷲掴みにしてしまっていた。

そして見れば、その鞭の先端——セイバーが掴んでいるその部分には、猛禽類のような鉤状の手があつた。凶らずしも、セイバーと怪物はお互いの手を掴み合っていたのだつた。

怪物はその鞭のような腕を引き戻そうとする、しかしセイバーはそれを許さず、不敵に笑いながら怪物の腕を掴み続けた。

一〇トンはあるであろう巨体からの一撃を、真つ向から受け止める。更にはその体の一部を掴み、捕らえてしまう。それは、一般的な物理法則ではまず考えられない。

しかし、それをやつてのけるからこそ、彼は戦場という理外な暴力渦巻く混沌の中で畏怖され、英雄と称されたのだ。

怪物は半狂乱になって叫び、それならばと腕を伸ばした場所とは反対の側面から鞭状の腕を噴出。セイバーの右側面へと振るつた。

それを確認したセイバーは剣を肩から下ろし、前へと踏み込んだ。

「ぬあッー」

セイバーは地面を力強く踏みつけ、剣を左から右へと、半円を描くように振り抜いた。

剣先は空気を裂き、掴み捕らえていた左側の腕、そして迫りくる右側の腕を同時に切断する。そして直後に続く超音速による風圧が、両断したそれら腕の先を何処かへと吹き飛ばした。

絶叫を上げ、たたらを踏む怪物。切り飛ばされた腕の傷はすぐに盛り上がりつつ塞がるが、その衝撃は怪物とて、凄まじいものだったのだろう。

そして、そんな隙を、セイバーが見逃すはずがなかった。

セイバーは間髪入れず、怪物のもとへと駆け出す。彼は地面を蹴り、三段跳びのようなステップで怪物の側面に回り込みながら、手にした剣を両手で握り、上段に構え肉薄する。

それを見た怪物は、只々後ずさり、未だ再生中のしなやかな両腕を手前で交差させ防御の姿勢を取るだけだった。

「阿呆が……っ！」

セイバーは小馬鹿にしたようにそう吐き捨て、体勢を深く沈めると一気に怪物へと突っ込んだ。しかし彼は、剣を振るわない。突撃の勢いをそのままに、肩当てを打点に怪物の下半身部に体当たりを決めたのだ。

夥しい死と肉体を掻き集めて、遂に人外の怪物と成り果てた存在。しかし圧倒的な力に追い込まれ、斬られ、怪物は原始的な恐怖をその身に刻まれた。

故に、起こる……否、引きずり出されたと言って良い。

死体によって生まれた我が身を、守る為の防御態勢。継ぎ接ぎで作られた肉体の、ダメージに備えた全身硬直。

しかし、そこに与えられたのは衝突による単純な圧力。後方へ押し飛ばさんとする、体当たりによる衝撃。

結果、怪物は後方に弾き飛ばされ、プラント施設へと体を打ちつける。その衝撃に施設のパイプが数本外れ、蒸気を吹き上げる。

「……こんなものだろう」

セイバーは剣を振るい、残心を取って構えを解く。

全ては作戦であった。

斬れど殴れど、歪ながらも身体を再生させていく怪物を相手だ。圧

倒しているとは言え、セイバーでは怪物を死に追い込むのは手間が掛かる。

元より、セイバーの仕事は怪物の追い込み役。敵に死を与えんと振り下ろされる剣ではなかった。

「お膳立てはしてやったぞ……なあ？ 代行者よ」

セイバーの言葉に応えるように、怪物の背に大きな影が忍び寄った。誰かが照明の前に立ち、光を遮ったのだ。

そう。

セイバーは行ったタックルによって怪物は壁際に追い込まれ、身に食い込んだパイプと衝撃によって動けなくなっている。

加えて、その位置は。

セイバーのマスター——浄化を旨とする概念武装『黒鍵』を携え、死から蘇った死徒を浄化せんと戦う者。代行者、シユウジ。

彼が潜んでいた屋上の、真下であった。

「さあ、死を……思い出させてやれ！」

そして、剣は舞い降りた。

施設の屋上から飛び降りたシユウジは、逆手に握った斬撃用の黒鍵を、肉塊の上部にあったステイブの上半身の肩口に叩き込んだ。落下速度を利用した黒鍵での攻撃は、黒鍵をステイブの肩口から心臓部にまで食い込む。

途端、怪物は絶叫しながら身を仰け反らせ、右に左に暴れだした。

「く……ッ!？」

宙に投げ出されまいと、シユウジは肉に食い込んだ黒鍵にしがみつく。しがみつきながら、彼は歯噛みした。

黒鍵を心臓部に叩き込んだだけでは、死を与えられなかった。ならば、『聖言』によってこの怪物を浄化する他ない。元よりそれが聖堂教会本来の、死霊に対する戦い方だ。

シユウジは深く息を整えると、整然とした声で詠唱を始めた。

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」

目まぐるしく動く景色。怪物に振り回されながらの詠唱。

シユウジの目に、苦しげに悶えるステイブの上半体が映る。彼は血眼になった目を見開いて、憎々しげにこちらを睨んだ。

「打ち碎かれよ。敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、我を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

ステイブが絶叫を上げながら、シユウジに向かって右手を伸ばしてきた。

シユウジの顔面に迫るその右手を、シユウジは首を振って躲す。

「装うなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」

再度、右手がシユウジを襲う。

シユウジは黒鍵から左手を離し、その右腕を掴んで防いだ。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ与えられる」

シユウジとステイブ。暴れ狂う怪物によって振り回されながら、二人は掴み合っていた。

その様子を、セイバーはただ立ち尽くし見守る。その頬は、自身の主人への期待に緩んでいた。

「許しはここに。受肉した私が誓う」

シユウジは掴んでいたステイブの右腕を、払うようにして離れた。

肩口から裂かれて動かない左腕、そして外へと振り払われた右腕。ステイブを上半体が、開かれる。

シユウジは眉間に力を入れた顔でステイブを睨みながら、振った左手——既に袖から指の間へと滑り込ませた黒鍵の柄を強く握り締め、祝福された三本の刃を生成する。

「この魂に憐れみを」

『聖言』を、唱え終える。

シユウジは右手の黒鍵を手放した同時、身を捻りながら左腕をステイブへと振りつけた。

超至近距離での、概念武装『黒鍵』の投擲。三本の黒鍵はステイブ

ブの顔面、肩口、胸に突き立つ。

その瞬間、ステイブの体はビクリと痙攣し、それから停止する。シウウジは投擲の動作を殺すことなく、くるり半回転しながら怪物の下半身部、肉塊の上へと降り立つ。

怪物は体の隅々から立ち上る白い煙に包まれ、影となる。そしてゆっくりと、ゆっくりと、溶けていくバターのようにその存在を溶かし、重力によって地に沈み広げていった。

ステイブ・フォスターと、この亜種聖杯戦争によって犠牲となり怪物の体を利用された者達。彼らの魂は、本来あるべき場所へと還っていく。

それを告げる狼煙のような煙の中から、代行者——シウウジはゆっくりと歩み出てきた。

その顔には、戦いによる疲労や安堵などは見受けられない。

それはただ、聖職者のように……あるいは騎士のように、厳かで神秘的な面持ちであった。

「くくつ。中々、良い顔をする……おっと」

セイバーはそんなシウウジに笑みを零していたが、思い出したように剣を垂直に立て、聖職者でもある主人に対し仰々しく剣礼を行う。

その様子を目撃したシウウジは鼻を鳴らし、ただ肩をすくめるばかりだった。

——俺は、アダムには勝てない。

読水はコンクリート製の柱に身を預けながら、己に言い聞かせていた。

碎けて舞う石膏、立ち込める硝煙の匂い。吹き出す汗に、鳴り止まない心臓の鼓動。

息を殺し、震える手で読水は手にした拳銃に弾丸を込め直す。弾倉にはまだ幾つか弾が残っているはずだが、乱れ振れる視界ではもうどれが残弾で、どれが空薬莖か分からない。弾倉に残った全てを捨てて、改めて手作業で弾丸を込める。

そんな中、背にしている柱の向こうから、ドアの蹴破る音がした。

「……………」

口から心臓を吐いてしまいそうだ。そんな気分陥りながらも、読水はゆっくりと身を乗り出して、柱の陰から音の方向を見る。

あの人形だ。右手の拳銃を前に突き出し、左手の榴弾投射機を肩に担いで、周辺を警戒しながら部屋内に入ってきている。

万事休す。読水は柱に再度、背を預けて目を閉じた。

魔術的能力——一血統の古き、保有する魔術回路、魔術行使の感性。

武力的能力——使用している火器、現時点での運動能力、戦闘経験。

どれをとつても、読水はアダムに劣る。例え、あの人形にアダムの魂が入っていないとしても、やはり彼女の遺物に読水のような二流魔術師が勝てるとは思えない。

では、サーヴァントの救援を待つか……否、それも難しい。

読水は因果線^{ライオン}から、ランサーの戦闘の様子は把握している。現状を見るに、苦戦とはいかぬも、勝利には未だ遠い。このまま待てば、読水が先に殺されるのは目に見えている。

「……………」

読水はそつと、鞆から鉄製の水筒を取り出した。

中身は特殊な製法で作られた、白いヤシ酒。目眩等の副作用があるが、魔力を即座に補填が出来る。

今や数口分だけ残っていた、その貴重な酒を読水は煽り、一気に飲み干す。そして喉元から胸、そして腹部に巡る熱い感触に気分を悪くさせながら、読水は自分に言い聞かせた。

俺は、アダムには勝てない。

二流三流の魔術師には、この十年ただ逃げているばかりだった半端者には、彼女が残した遺物にさえ歯が立たない。

——悔しいが、認めざるを得ない。

ランサーはホールにて人形二体と交戦しながら、そう感じていた。

ホールでの戦いは、苛烈を極めていた。

首無しの人形は獲物を狙う猿のように、目まぐるしく動きながら呪剣でランサーを攻撃する。呪剣は見た目同様、背骨のように頸椎部で

グニャグニャと刀身を曲げ、鞭のようにしなりつつランサーを襲う。しかし、ランサーとて英霊だ。高性能とはいえ、ゴーレムの攻撃に遅れを取るはずもない。槍を振るってそれに応戦し、そして呪剣を弾いて人形の心臓部——ゴーレムのコアを狙う。

槍の穂先が、胸に刺さる……その直前、ランサーの横腹に衝撃が走った。

一瞬……一瞬だけ、ランサーはホールの隅に潜んでいた対戦車ライフル持ちの人形を一瞥する。人形の持ったライフルの銃口からは、硝煙が出ていた。

やはり……そしてまたしても、あの人形の仕業か。

体をくの字に折り曲げ、両足が宙に浮き……全身に衝撃が伝わっていくのを圧縮された意識の中で感じながら、ランサーはそれでもまた、意識だけを目の前に迫る首無しの人形に向けた。

そうしてランサーは、体を宙に浮き上がらせた状態のまま、首無し人形の呪剣を槍の柄で防ぐ。そして足で地面を捉えたランサーは、二の手を打たせるよりも早く、人形の胸を掌底で突き飛ばし距離を取らせる。

突き飛ばされた首無し人形は、勢い良く地面に倒れた。しかし、後転して数秒も間を置かせずに立ち上がり、再度攻勢に出る。

またも地面を蹴って身を翻し、上空から人離れたした挙動で襲いかかる首無し人形。そして振るわれた呪剣をランサーは槍で受け止めるが、呪剣は蛇のように刀身を曲げ、矛に絡みついてきた。

「……………ッ!?!」

予想外の攻撃に、ランサーは息を呑む。首無し人形は宙で身を翻してランサーの横合いに着地しつつ、槍先を振り回して動きを拘束する。

その拘束に合わせて、後方にいた対戦車ライフルを手にした人形がドスドスと地面を踏み散らしながら、真っ直ぐにランサーへと迫ってきていた。人形はライフルの銃身を両手で握り、身の丈を超える火器を怪力に物を言わせてフルスイング、ランサーの体を叩いた。

対戦車ライフルの銃床が、ランサーの頬を叩く。その衝撃は凄まじ

く、呪剣の拘束も外れてランサーは横殴りに張り倒される。ランサーは歯噛みしながら、そのまま転がり続けて距離を取り、片膝立ちに立て直した。

即座の対応に、人形達は一旦攻勢を止めて様子を窺っていた。立て続きの発砲で熱された銃身を握った人形の手は、煙を上げて焼け爛れていく。しかし無痛覚のゴーレムに、それを気にする必要などなかった。

「……………」

なるほど。と、ランサーは口を拭いながら納得した。

対戦車ライフル。如何にして使うかと思えば、そのまま使うか。そのまま使って、足止めしてくるのか。

ランサーは英霊だ。物理的な攻撃の一切はダメージにならない。

しかし、英霊とて物理現象の全てから解放されている訳ではない。重力には縛られるし、前から押されれば当然、後方によるめく。

ランサーの腕力は人間を素手で破壊できるほどのものだが、体重は六〇キロもない。故に一般人にだって抱え上げること、何のダメージにもならないが、地面に投げつけることだって可能ではある。

対戦車ライフルの役目とは、まさにそれだった。戦車を破壊するほどの衝突力や重量ある銃器そのものでランサーを束縛し、相方の首無し人形の呪剣でダメージを与える。それこそが、向こうの作戦だったのだ。

そして、それは功を奏している。

良くない流れだ。と、ランサーは槍を構え直しながら、冷や汗をかいた。このまま流れに身を任せては、詰みであると予想がつく。未だ呪剣による呪いを受けてはいないものの、すでに二分ほど……時間をたっぷり稼がれている。

こうしてモタついていたら、いずれマスターである読水が討たれてしまう。すでに、その予兆、読水の危機を、彼との「rb・因果線」> ライン」によって感じている。

ランサーは構えを解き、悔しげに顔を伏せて目を瞑った。

その瞬間を好機と見て、首無し人形が駆け込んでくる。しかし、ラ

ンサーは顔を伏せたまま、静かに呟いた。

「……護ると言った手前、認めたくありませんが……」

悔しいが、認めざるを得ない。

アダムによって調整され、アレクシアが仕掛けたこの襲撃。そこからマスターを護り切る術を、ランサーは持たない。

——そう、一人では。

「ッ!!」

読水は意を決し、柱の陰から飛び出した。

鞆を柱の陰に残し、武装は右手で握り締めたりボルバーのみ。

読水は全身に魔力を込め、吹き抜けに面したガラス張りへと矢のようには駆ける。

そんな肉体の加速とは裏腹に、読水の意識は世界をゆっくりと捉えていく。横へとスライドしていく視界に読水は、銃口をこちらへと向けていく人形の姿を見た。

構うものか。あの速度なら、こつちの方が速い。と、読水は意気込んでさらに力強く床を踏み込み、体を前へと送り出す。

「令呪を以って——」

読水は一步、二歩、三歩と地面を蹴りながら口ずさみ、ガラス張りまで目前と言ったタイミングで読水は拳銃を腰だめに発砲、マグナム弾をガラス張りに撃ち込んだ。

高層のガラス張りに使われているガラスなら、強化ガラスが多い。そして強化ガラスは、割れる際は打点を中心に粉々に碎け散るのが特徴だ。

発砲によって、粉々に碎けて落ちていくガラス。それを内側から突き破るように読水が飛び出す。そうして、吹き抜けの空中へと彼は身を投げ出した。

読水の体は勢い余って宙返りとなり、地面に仰向けとなる。しかし自身の体勢に構わず、読水は一息に叫んだ。

「——命ずる！ 我が下へ来いランサーッ！」

御意に。

人形の呪剣が頭上より迫る中、ランサーは歓喜に頬を釣り上げた。そして瞬間、その姿は人形の目の前から消える。

事前に植え込まれた行動指針と、周囲の状況に対する分析によって行動する人形には、本質的には知識と呼べるものはない。

故に、知らなかった。

聖杯によって与えられる三画の令呪は、人間の身でありながら、人智を超えた力を持つ英霊を使役できるほどの膨大な魔力が込められている。それを解放すれば、瞬間転移と言った奇跡さえ、起こすことができることを。

故に、反応ができなかった。

呪剣が振り下ろされる瞬間、ランサーの体は人形を飛び越えて、落下している読水の手前へと転移したことに。

そうして、人形達の行動は遅れに遅れる。ホールにいた人形二体は、これまでの戦闘で蓄積してきた行動過程を一度リセットするように動きを停止させた後、動きを止めてキョロキョロとランサーを索敵する。

それが、読水達の狙いでもあった。

空中にてランサーが抱き止めたと同時に、読水は動きの止まった人形に向けて拳銃を乱射する。

魔力によって極限まで高められた集中により、弾丸には驚異的な精度と殺意が秘められていた。それによって、対戦車ライフルを持つていた人形の心臓部に銃弾は当たり、人形は胸から魔力を炎のように噴き上げながら倒れる。

人形が倒れたと同時に、ランサーと読水は抱き合った状態でホール中央の噴水に着水、砕けたガラス片と共に水飛沫を上げる。そして飛沫が止んだと同時に、ランサーは着地の補助をしたマスターを手放し、水を滴らせながら体を起こしていく。

明らかな隙。それを、呪剣を携えた人形が見逃すはずがなかった。人形は音を立てず、しかし素早くランサーの背後へと回り込んでい

く。

「二の……二の……」

しかし、ランサーは身構えない。濡れた前髪さえ気にせず、彼女は横へと回る人形を目で追っていた。

その右手には、印が結ばれていた。

「……三つ！」

そして、人形が呪剣を手に飛び掛かった瞬間、ランサーは鋭く振り返り、その手を振るう。

その刹那、ランサー達の背後から複数の銃弾が——読水が乱射し、ランサーの宝具によって軌道を操られ、吹き抜け全体を旋回していたマグナム弾が、人形を襲った。

ドン。ドン。ドン。と、人形は銃弾を浴び、最後の一発は胸に受けて前のめりに……ランサー達のすぐ脇に倒れ、池の水に沈む。

「……ぶはっ！ やったか!？」

と、そこでようやく読水は水面から顔を出し、周囲を見回す。

ランサーは、そんなマスターに頷く。その直後、キツと頭上を睨む。上階……読水が先ほどまでいたバーには、未だ人形が残っている。油断は、できない。

見れば、人形は読水がブチ破ったガラス張りから顔を覗かせ、こちらを見下ろしていた。その顔、黒い両目には、人形とは思えないほどの殺意が滲み出していた。

来るか。と、ランサーは槍を池から引き上げ、身構えた。

「……マスター」

「……ああ、お前がやれ」

その言葉が聞こえたのか。人形は行動に移った。

人形は、そのまま宙へと跳んだ。そして空中で体勢を維持したまま拳銃を構え、立て続けに直下の二人に撃ちまくる。

ランサーはその弾雨を槍で的確に弾き、読水を守る。そして数秒後には、射手本人が落下し、それをランサーは槍で突き刺すことで宙に縫い止める。

人形は串刺しになった状態で、四肢をダラリと地面へと垂らす。そ

の心臓部は、槍によつて的確に貫かれていた

「……………」

しかし、人形は動いた。

カタカタと腕を痙攣させながら、左手に持った榴弾投射機を読水達へと向けていく。

榴弾が放たれれば、榴弾は二メートルほど真下の地面か読水達に当たり、人形諸共、爆発に巻き込むだろう。

しかし、それを許すランサーではない。

「ふんッ！」

ランサーは間髪入れずに槍を振るい、人形を横合いに投げる。人形はそれ自体が弾丸のように宙を飛び、壁に大の字に叩きつけられる。その衝撃に胸の傷から体液が漏れ、壁に放射状に撒き散らされた。

そうして、人形の体がズルリと壁から離れ、床に崩れ落ちる……それよりも前にランサーは人形に突進、十字槍の先端を胸に再度突きこむ。

「……………」

終わったか。ランサーは人形から魔力を感じできないことを確認すると、人形の肩に手をかけ、突き刺した槍を抜こうとする。

その時、だった。

「……………サーヴァントと二人がかりで……………ようやく師匠の真似事かい」

「……………え？」

まったく、半人前が。

人形はその言葉を最期に、完全に機能を停止させた。

「……………」

ランサーはしばらくの間、先ほど聞いた言葉を咀嚼していた。しかし、彼女は……………。

「ランサー……………どうした？ やったのか？」

「……………はい」

しかし背後の読水の呼び掛けに応じ、ランサーは槍を抜くと人形を丁寧に地面に下ろす。

そして踵を返すと、読水の下へと迷いなく走っていった。

第二十六話 『違法者』

第二十六話 『違法者』

「戦争とは——」

他の者が廢ビルから移動する準備を進める中、アレクシアはこう切り出した。

「戦争とは、何をしても許される……そして誰の完全な制御も受けないからこそ、戦争は価値がある」

周りの様子からは切り離されているように、佐藤とアレクシアだけは対面したままだった。アレクシアは汚れたソファアに腰掛け、汚れた床に視線を落しながら言葉を続ける。

「例えこの星の覇者になろうとも、人は闘争を止めたりはしない……人間は、失う恐怖より、獲得の期待に酔うように創られている」

覚えがあるだろう。と、アレクシアは佐藤を一瞥する。佐藤は顔を僅かにしかめるが、視線だけは逸らさない。獲物を狙う肉食獣のような目で、アレクシアを見下ろし続ける。

「くくっ……そうして何かを、もっと何かをと奪い合って……馬鹿な人間でもようやく気づく。より多く、より強く、より賢く、より偉く、そんなものでは戦争の勝敗を分ける決定打にはならないのさ。だから弱肉強食、勸善懲惡と、何が優れば勝者かと人間はルールを付けたがる」

守る為じゃない、自分達が勝ち奪い続ける為の規律さ。そう言つてアレクシアは肩をすくめた。

「冗談じゃない……ッ。そんな他人が決めたルールに従つて敗者に甘んじるほど、私は無欲になれなかった。だからルールは破るし、欲しい物は奪う。それが、私が決めた、私が勝てる、戦争のルール……ッ」

世の混沌こそが己の規律。世の悪こそが自身にとつての善。悪魔に魂を売り、そして悪魔を裏切つてこの世のものですらない『なにか』と融合しつつある違法者——アレクシアは歪な両腕で顔を覆い、悶えるように嗤う。彼女の震えに応えるように、地下からの衝撃がビル全

体を揺るがし天井から埃を降らせた。

「けど、私も馬鹿だったよ。違法者になるまで、分からなかった……私を脅かす敵は、この世を牛耳る特権階級じゃあない……ッ！」

そして、アレクシアは抑え切れない衝動に目尻を痙攣させ、震えた声で宣告した。

「そう、私の敵は——」

今や日坂市の経済面での中心となっている、日坂駅周辺の再開発地区。その歴史はこの土地のそれと比較すると、かなり浅い。

対してこの商店街、その起源は楽市・楽座にまで遡れるが、再開発で敷かれた駅からは幾分から外れてしまった……旧市街とも言うべきこの土地は、歴史が深いものの、現在は閑散とした雰囲気だけが漂っている。

狭い道幅と長い一本道、アーチ状の天井、かつては日坂市一番のアーケード商店街であったが、今はシャッター街と呼んでも差し障りがないほどに、衰退の一途を辿っていた。

そんなシャッター街の一角に、ミア・ブロッケンと一ツ目聖夜はいた。閉鎖時間の為、最小限の数だけ点けられた白熱球の下、自販機の隣に設置されたベンチに腰掛け、コンビニで買った夜食を取っている。

「……最後の晩餐って言うんでしたっけ？」

隣にいる存在を無視し、互いに黙々と食事をしていた二人だったが、ミアは餡饅を片手に、おもむろに口を開いた。

「そういうのは、もっと豪華なもんだと思ってましたわ」

「……碌な人生、歩んでなかったからだろ」

「はーん？ ……やっぱ神になるくらいじゃないと、正に絵にもならない飯ってことつスカねえ……ハハッ」

皮肉る一ツ目は食が細いのか、一つだけ買ったおにぎりを食べ終え、既にお茶だけをチビチビと飲んでいる。対してミアはビニール袋一杯に買い込み、今は遊び感覚で餡饅にカラシを塗り込んでいた。

「……ま、ここで死ぬ気はないし」

これマズいわ。と、ミアは眩き、カラシを塗った餡饅を傍にあつた
空き缶用のゴミ箱に突っ込む。

「……………」

そのマナーのなさに辟易した様子で、一ツ目は溜息をつきながら
そっぽを向いて眩く。

「……………」この子、ずつと寝てるけど」

ん。とミアは振り返る。一ツ目の視線の先にいたのは、佐藤だ。残
された右腕を後ろ手に街灯の柱に縛りつけられ、地面に座らせられて
いる。しかしそんな苦しい姿勢にも関わらず、彼女は力なく体を地面
の方に傾けて寝息を立てていた。

「このままで、良いのか……………」

「腕え一本切り落とされて、今まで元気だったのが頭おかしな話だっ
たんだから……………」べーつに良いんじゃない？」

良くはないだろ。と、一ツ目は顔をしかめる。

「別に良いじゃないですか。他人の心配してる場合っスか？ 数合わ
せの魔術師さん」

ミアの指摘に、一ツ目はより一層顔を強張らせる。

その様子に軽く笑いながら、ミアは炭酸が抜けた、ただ甘いだけの
エナジードリンクを煽り飲む。

そう、ヤバいのは寧ろ……………こっちの方。

なにせこれから、自分らはサーヴァントを相手取るのだから。

「ミア、お前はキャスターを相手どれ」

数時間前、廃ビルにて。

アレクシアはボロボロのソファーに座りながら、ミアにそう言って
寄越した。

最初、死ぬと言われたのかと思った。

しかし、彼女が話す勝算と、必ずしもキャスターと衝突する訳では
ないという点……………場合によってはランサー陣営や、最悪セイバー陣営
とも戦うことになるという点を説明されているうちに、ミアもある種
の冷静さ——自我を取り戻していった。

「……それで、勝てますかね？ 私に？」

計画を全て聞いてから、ミアはアレクシアにそう聞いた。アレクシアはソファアーに深々と座りながら、その不安をクツクツと笑う。

「そもそも、お前はライダー達とも相手取ったじゃあない。それに、あのゴーレムマスターのアダムとも戦って、こうして生き残っている」
そうだ。ミアは言われて初めて気づく。一週間前、アレクシア達はミアとアシンを使い、ライダーとそのマスターを分断させることで陣営を撃破した。その時ミアはライダーのマスター——つまり、今こうして捕縛している佐藤を相手取ったが、計画時点ではサーヴァントの方を相手取る可能性も充分あった。

「勝てる、勝てるよ」

子供に言っただけ聞かせるように、アレクシアはそう繰り返す。しかし言葉とは対照的に、その目の光は妖しげで、凶悪なものになりつつあった。

「お前も私と同じで、飢えに飢えている。だから何でもできるし、何も躊躇いもしない……後は実際に、掴み取れるかどうかね」

「……んー」

そんなもんっすかね。と、ミアは納得できないように腕を組んだ。しかし、そんなミア本人以上に、期待と言うより確信に近いものを抱いているアレクシアを前に、異を唱えることはできなかった。

そう、あの人の言う通りだ。

ミアは視線を落としながら、静かに拳を握る。あの時は納得できなかったが、今なら分かる。

この世界に、自分の居場所なんて用意されてなかった。この生命以外、何も与えられなかった。ただただ生暖かく、気持ち悪い世界に放り出された。

だから、憎む。空っぽな自分の全てを使って、世界に満ちた全てを呪い、穢してやる。慣れない敬語と性を強調させた服で大人達に媚を売る、そんな生き方はもう沢山だ。

そうだ。魔女になったあの時から、そう誓ったはずだ。未来なんて

当に捨てているし、リスク重視で世界の間を埋める雑魚ばかり相手取っても仕方ない。英雄一人噛み殺せないで、何が呪いだ。

「……ビビってんなら、手伝わなくても良いよ?」

ミアはそう一ツ目に囁いた。思わず口から出た言葉だった。

なぜこんな言葉が出たのか、自分でも分からなかったが、構わずにミアは言葉が続ける。

「サーヴァントは人形と、私でやるから……あんたはそいつ見張つてよ。……邪魔だから」

「……いまさら、なに言ってるんだ?」

そう返す一ツ目の顔は疑心暗鬼に満ちていて、信じてもらえないことにミアは嘆息する。しかし、これまで散々彼を嬲り、馬鹿にしたのは他ならぬ自分だ。疑いの目を向けられても仕方のないことだろう。

ミアはやれやれと何気なく立ち上がり、顔を上げた。

そこで気づいた。前方、通路沿いに点々と並ぶ照明の下に人影が見える。人影はこちらへとまっすぐ歩いてきており、時折照明の下から暗がりには消えては、また次の照明に照らし出される。

それは、キリリと背筋が伸びた老人——着物にハンチング帽とマフラーという、和洋折衷の格好でありながらも、それ以上にその年齢を感じさせない精悍な立ち振舞が第一印象として突きつけられる、そんな老人だった。

「……………」

初めて見るが、しかし間違いない。一目でそれと分からせる気配が、彼にはある。

キャスター、本人だ。

そして納得する。先ほど口をついた言葉も、何気なく立ち上がったのも、きつと心の奥底で、この真つ向から来る驚異を感じ取つてのとどつたのだろう。

ミアはチラリと横を見る。一ツ目は未だ、手にしたペットボトルに視線を落としている。

しかし佐藤は——先ほどまで昏睡していたはずの彼女は、キツと顔を上げ、キャスターを見つめていた。その顔も疲れ切つたものでな

く、どこことなく覇気さえ感じる。

……なるほど。と、ミアは納得する。聖杯戦争に選ばれた素人と、選ばれなかった魔術師とでは、こころも感覚が違うのか。やはり一ツ目という男は、この日坂亜種戦争では完全に部外者の立ち位置らしい。

「ほら……ねえ、来てるって」

呟いたミアの言葉で、一ツ目はようやく事態を把握する。

「キャスター、ほ、本人か……ッ!? 話と、違うじゃないかっ!」

戸惑うのも無理はない。計画では佐藤と自分達を囮にキャスター本体を探し、隠れ潜んだアダムの人形達が奇襲によつてとどめを刺す……というのが、アレクシアと話していた作戦であったのだ。

それがどういふことか、霊体の新選組も連れず、オマケに腰には一振りの刀さえ差して、正面からこちらへとやってきている。あれのいったいどこが、魔術師のクラスだと言うのか。

「……ふーん?」

ミアは首を傾げながら、ゆっくりと手を上げる。そしてパチンと、指を鳴らした。

途端、キャスターの両脇——左右の裏路地に隠れ潜んでいた人形が二体飛び出し、老人を挟み撃ちの形で襲う。

一方は派手に宙を舞い、キャスターの顔面に死霊術師特製の、呪いが付与された槍を突き込む。一方は低い姿勢のまま突進し、銃身が切り詰められたマスケット銃（これも死霊術師の呪物で、弾頭が人間由来で出来ていると聞く）をキャスターに突きつける。

左右、そして上下での挟撃。突如の奇襲に対し、キャスターは素早く視線を左右に動かす。その後、彼は両腕を振りながら半回転、身を翻した。

顔面へと迫った槍はキャスターの左手で払われ、背後から向けられたマスケット銃は発砲の直前に銃口を右手で払われてしまう。結果として、キャスターは最小の動きで二方向からの奇襲を受け流されてしまう。

そして、前に出る勢いを流されてしまった人形達は、互いに入れ違ふように、キャスターの横を通り抜けた。

姿勢を崩された人形達、だがそれでも踏み止まり、獣のようにキャストに追い継る。

しかし、その時には既に、キャストは腰の刀に手を掛けていた。翻った動きから流れるように、キャストの体が沈む。腰を深く落とした彼は、そのまま右手を刀の柄に添え、左手の親指で鯉口を切った。

鯉口を切った——刹那、太刀筋が横8の字に閃いていた。

キャストの左腰から放たれる眩い閃光。太刀筋という名の、〃斬殺〃の軌跡。

それに触れた人形達は、尚もキャストに迫る……体液を噴き出し、身体を三つに分かたれながら、一瞬前の動きのままに再びキャストの脇を通り過ぎ、地面に転がっていった。

「……………ッ!?!」

血の気が引いた。

決して弱くはない、人間以上の運動性能を持つ人形達。それが瞬く間に斬殺された。それもセイバーやランサーと言った戦士じゃない、刀を手にした……老いた魔術師によってだ。

確かに、捨て駒ではあった。正面から来るキャストの作戦、化けの皮を剥ぐつもりで人形二体に襲わせたのは事実だ。そして、結果として分かった。あの老人は、これまでの盤面を掻き乱していた新選組の霊体を使わずとも、その身で充分に戦えるということ。

「……………ごやい」

キャストは刀に付いた体液を振り払い、ぽつりと呟く。それから刀を右手に提げながら改めてこちらへと向き直り、歩き出す。

「……………」

ミアの片足が、自然と後ずさった。不快にも手足が痺れ、呼吸が荒くなり、やたらと喉が渇く。あれだけ飲み食いしたのに。

「……………へ、へへっ」

しかし、これで良い。

「あはっ！ ははっ、あははははははッ!!」

ミアは吹き出し、大きな、狂ったような笑い声を上げた。そして斜

に構えるように、ポケットに手を入れる。

「そうだ……そうこなくつちやねえ……ッ！」

そう、これで良い。

これは数値を競う競技ではない。相手より強かろうが死んだら負け、ルール無用の殺し合いだ。なら……否、だから覆せる。

それに……作戦。絶対的優位。

そんなものは、今までのミアにはなかったものだ。

それよりは……無策。絶体絶命。

そんな立ち上がりの方が、馴染む。

「こつちが優位なんて、ガラじゃないってね……この、ヒーローの残り滓が！ 偉そうによおッ！」

ミアは吠え散らし、ポケットから飴玉を取り出し、口に押し込む。

対するキャスターは刀を手に歩き続け、残酷なまでに確実に、彼我の距離を縮めていく。

そうして、老いた英霊、対、若き魔女——絶望的な戦力差のある者達による、殺し合いが始まった。

県境の化学プラントにて、暴れ狂う怪物を撃退したシユウジ。彼はシスター・セレネントーラと合流した。

「これ……一体何ですか？」

そう言っつて、セレネントーラは煙を上げて浄化されつつある怪物の巨体を見上げる。

「現役時代でも、これほど大きなものは見たことがない」

「死霊術の類だ」

そう言うのは、シスターと同様、物珍しげに怪物を眺めているセイバーだ。

「昔……生前に戦場で、こういうデカブツを見たことがある」

「二、三メートルくらいなら、ともかく……ここまで大型だと、潜伏生活すら困難ですからね」

その巨体を討伐した代行者——シユウジは彼女の隣に立ち、会話に入る。

「死徒なら、可能であつても避けるサイズでしょう。これが潜伏を目的としない兵器であるという、確かな証拠です」

「なるほど」

「……………」

「……………」

ところで、と、シュウジが切り出そうとしたタイミングで、セレネントーラが咳払いをする。

「……………それで、最近はどうです？　ちゃんと、辛くないものも食べていますっ。」

「……………シスター」

「……………ジョークです」

セレネントーラは俯いて、そう呟く。そして懐からUSBメモリーを取り出す。

「そこに、件の情報が？」

「……………はい。私が掻き集めた情報は、全てここに入っています」

そう言つて、彼女はシュウジにUSBメモリーを差し出した。

黙つてそれを受け取るシュウジ。しかし、セレネントーラは握つたその記録媒体を離そうとせず、綱引きのような状況になってしまう。

「……………えっと、シスター」

「……………本当は、貴方にこれを渡したくない」

貴方はきつと、後悔する。と、セレネントーラはそう呟き、シュウジの目をジツと見つめる。

昔から、口数の少ない女だった。そして何かを訴えかける時は、いつだつて目を合わせてくる。それは、昔と変わらない。

「……………そう、ですか」

そして今、彼女の片方しか残らぬ瞳はゆるゆると震え、とても心配げにこちらを見つめていた。

「しかし、知らなければならぬことです」

しかしシュウジは断固とした決意でもって告げ、彼女の握る手からUSBメモリーを引き抜いた。

そして、その時だった。

「カツ……ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

突如、空気を震わす咆哮。

パツと、顔を怪物の方へ向けるシュウジ。見れば、怪物は全身から煙を立ち上らせ、血を噴き出させながらも、それでも吠え声を上げて身を起こしつつあった。

「…………ツ」

トドメは刺した。それは手を下したシュウジ本人、手応えで確信している。

しかし、相手は死霊術によって造られた怪物。何よりも死と近くにありながら、暴れ狂い死を撒き散らす存在だ。消滅の淵へと滑り落ちる中でも、肉の一片でも残っているうちは未だ終わってはいない。

「な…………」

ブランクによる弊害か、あまりのことに声を漏らして硬直してしまうセレネントーラ。シュウジはそんな彼女を背に庇い、手にしたメモリーデータをポケットにしまう。

怪物は潰れかけた眼球をギョロつかせ、シュウジを見つけるや否や、またもや吠える。シュウジは狙いが自身であることを悟ると、すぐさま横に走って怪物と自身を結ぶ線上にセレネントーラを追いやった。背後でセレネントーラが何か叫んだが、今は振り返る余裕もない。

「セイバーッ！ 彼女を遠くへ！」

シュウジは横ばいにステップしながら、黒鍵の刃を生成した。それと同時に、怪物も唸り声を上げながらこちらへと駆け出す。

目の前に迫る、巨大な肉の塊。正面から切つて落とせる、それだけの膂力を持たないシュウジは、息を吞んで両膝を曲げ、力を込める。

そのまま跳んで突進を躲そうとするシュウジ。しかし、そんなシュウジと怪物の間に、突風のようにセイバーが割つて入った。

シュウジは驚くも、予断許さぬ戦闘の最中だ、文句を言う暇もない。膝に溜めた力を使い、そのまま横へと跳んだ。

主人の指示に従わなかったセイバー。彼はマントをはためかせながら、両手で握ったロングソードを上段へと振り上げた。碌に目も見

えなくなっている怪物は、尚もセイバーへと突進する。

そうして、両者が激突する……その、一瞬前だ。

横合いから流れ星のような光線が飛び、怪物の背を貫いた。

怪物の体が、上空から降り注いだ圧倒的なエネルギーによって押し潰される。その次の瞬間には、二本目、三本目の光線が次々と怪物の体を貫いていた。

結果、背中を爆ぜながら、怪物は光線に圧倒されるように地面に叩きつけられる。

そして……三つの残光が消えた時、怪物の巨躯は動かなくなっていた。そうして、打って変わって沈黙が施設全体を包む。

「な……ん、だ……!?!」

予想外の決着と、吹き散らされたエネルギーに頭の中が真っ白になっってしまうシユウジ。

対し、セイバーは怒りによって歯軋りをし、顔を上げて叫んだ。

「貴様……ッ！ 何の真似だ、アーチャーッ!?!」

アーチャー。その言葉に、シユウジもセイバーの睨む方向を見る。

施設の屋上。月明かりを背負った髪の長い青年の姿が、そこにはあった。

アーチャーは弓を手に、片足を屋上の縁に掛けながらこちらを見下ろしている。セイバーは上段に構えていた剣を振り下ろし、一步前に踏み出る。

「騎士の戦いを邪魔したこと、どう言い繕う？ 助けがいるように見えただか？ それとも、私を狙って三本、外しに外したか？ いずれにせよ……」

戦いを邪魔された怒りでか、アーチャーを挑発するセイバー。それを手で制したシユウジは、一度セレネントーラを一瞥して安否を確認してから、代わってアーチャーへと声を投げかけた。

「……いずれにせよ、何時ぞやの協定違反だ。監督役の休戦要請があったにせよ、そこは変わらない」

「……………」

アーチャーは何も語らない。つまらなそうな顔を浮かべたまま、

ジツとこちらを見ていた。

「シユウジ……どう見る？」

セイバーが、因果線^{ライン}を用いてシユウジに語りかける。

「あの傲慢そうな若造が、戦果や挑発に対してずいぶんな落ち着きようではないか。何かあったと見て、間違いないが……」

まったく……と、シユウジはニヤけそうになる口端を堪えてへの字にする。命令を無視して最善手を打つは、騎士の戦い云々と怒ったと思えば陰で状況を確認する……まったく、この英霊はいつだってクレバーだ。

「場所が場所だ。鏡宮がアーチャーを送るというのも、納得できる……今のは矢か？ あれが、鏡宮邸をアサシンが襲撃していた時に見えた光の正体か？」

「だろうな。極めて強大な神秘だった、俺の生まれた時代よりもずっと古い……それこそ、神話で語られるほどの武器だろう」

「……やれるか？」

「何とでもなる」

そうやって、シユウジ達が相談している途中、アーチャーがゆつくりと立ち上がった。

来る気か。と、二人は身構える。しかしアーチャーは、そのまま何も言わずに霊体化し、姿を消してしまう。

「……立ち去った、ようだな」

セイバーは呟く。その言葉で、シユウジはふうつと息をついた。

「しかし、これだけの事態だ……主催者の鏡宮も、行動せざるを得ないみたいだ」

「……どうだかな」

セイバーは剣を担ぎ、顎髭を撫でる。

「いずれにしても、こっちは片付いた」

シユウジはそう結論づけ、ウィリアムに手渡されていた通信器——ラピスラズリが嵌め込まれたイヤーフックを取り出す。

アサシン陣営の魔女——アレクシア・ブロッケンが仕掛けたテロ攻撃は、ここだけではない。

他の場所へと向かった面々は、今どういった状況か……。

「へえ……そつちも問題なく片付いたか」

読水とランサーは、シテイホテルの手前、未だテープによる通行規制が施されている領内にてシユウジからの報告を受けた。

「……何だ、その……つまらなそうな声は？」

「……別に？ こつちも、ついさつき聖堂教会の後処理を任せたところだ」

読水はそう言つて、チラリとシテイホテルの方を振り返る。ちょうど、ホテルの方は警察に偽装した聖堂教会のエージェントが、これ見よがしに突入を敢行しているところだ。

読水とランサーは、アダムの遺品と思われる人形との戦闘を終えると、すぐにその人形らの魔術的な痕跡を破壊し尽くした上で、ホテルから撤収した。

彼女の遺物を回収できなかったこと……それは読水としても悔いが残ることであつた。しかし、その人形達を聖堂教会に回収され解析されることに比べれば、破壊の方が余程マシに思えたのだ。

「とにかく、これで二つ……残るは、ウイリアムの方の二つか」

「……二つ？」

読水の確認に、シユウジは訝しげな声を出した。

「二つだろ。商店街の方と、運送会社の倉庫……だったか？」

「ちよつと待て……倉庫？」

何を寝ぼけてるんだ。と、読水は顔をしかめる。しかし、次にイヤーフックから返ってきた言葉は、読水にとつても予想外な言葉だつた。

「聖堂教会が把握している現場は、プラント施設とシテイホテル……それと、商店街の三つだけだ」

「……はあ？」

読水は思わず、声を荒げた。

そして、不意に想起される。ウイリアムがこの通信機越しに言った台詞を。

——お忘れですか？ これは一組だけが勝ち残る聖杯戦争……今はどうであれ、最後は貴方とも、あのセイバーとだつて渡り合わなきゃならない。

「……そうか、あの二枚舌つ、そういう腹つもりか」

そう舌打ちする読水。その毒づきに、シュウジは唸る。

「まさか、彼は一人でアレクシアを潰すつもりか？」

「それ以外に、どう考えられる？ 俺に本命の場所を零したのは、自分がやられた時の保険のつもりだろ……俺なら、他の連中と確認する機会もほとんどない」

自分で言っておいて、読水はその事実を腹を立てた。全ては情報源をウイリアム一点に限定させてしまった、自分の落ち度だ。それをウイリアムに見透かさされ、逆手に取られた。

「しかし、あの計算高い彼が、そんな危険な真似をする必要がある？」

「あ？」

「我々と同盟を組んでおいて、結局一人でアレクシアに挑むなんて……そんなリスクを呑むだけの利益も、我々への義理も、彼にはないはずだ」

「……」

その言葉に、読水は頭を抱えた。ここにきて、まだそんなズレたことを言えるのか。

「……神様を信仰している連中は、そういうところも疎くなっちゃうのか？」

「……聞き捨てならない台詞だな？」

うるせえ。と、読水はシュウジに噛みつく。そして、こう捲し立てた。

「あいつは端から、あの魔女を誰にも渡す気はなかったんだ。あの同盟協定自体、俺達の動向を把握する為、自分で真つ先に破る前提のもので、つまり……」

自分で説明しておいて、その事実を苛立ちを募らせていく読水。最後は近くにあったパトカーのボンネットを拳で叩き、声を荒げた。

「……出し抜かれたんだよ！ 俺達は……ッ！」

読水達がウイリアムの思惑に気づく、一時間前。

ウイリアムは運送会社が管理している倉庫、その敷地沿いの街路樹の下で胡座をかき、瞑想していた。

彼は静かに、待っていた。

気が満ちる——体内に潜む魔術回路が最高潮に達する、その瞬間を。

機が満ちる——戦いの火蓋を切るに最も相応しい、その瞬間を。

そして、時は満ちた。

大きな影がウイリアムを包む。片目を開けて前方を確認すれば、フェンスを通して届く、敷地の照明——その手前に、アレクシアがそびえ立っていた。

ウイリアムの頬が緩む。彼は地面に膝頭に手を置き、ゆっくりとした動作で身を起こした。

アレクシアの口端が釣り上がる。その禍々しく変貌した右腕を横に広げ、影を大きく広げた。

そして次の瞬間には、二人は激突している。

地面を踏みしめ、空を切って、避けることもなく両者は前へと駆けて激突。鬼のような形相で額を打ち合わせ、掴み合った。

封印指定された“時計塔”の魔術師——ウイリアム・シン。

異形と化した“ブロッケン”の魔女——アレクシア・ブロッケン。

火花を散らして殺し合う、類稀なる二人の違法者。

これより一時間後、その一方が命を落とすことになる。

F a t e / r e s e l e c t 番外『ドラゴン学校』
二学期

私はどこにでもいる無気力系天才美少女、佐藤真波！

ある日、いつもどおりの日常を送っていると左手に不思議な痣が浮かんだ！

そしてそれは、日常の終わり・・・非日常の、始まりの合図だった！！

それから、私はパチもん臭漂う死霊術師に誘拐され、気がついたら・・・

英 霊 を 召 喚 し て し ま っ て い た !!!

私がこのまま普通の生活を送っていても、また命を狙われ、日坂市の人間にも危害が及ぶ。

何より聖杯に選ばれた以上、できる限りのことはしたいなって思った私は・・・

佐藤「そろそろツッコんでください!!」クワツ

ドラゴン先生(以降、D先生)「ヒエ！ お約束のモノローグを黙って聞いていたのに!?!」

佐藤「こんなネタ、いつまでも保たないでしょ・・・!」

SS 『ドラゴン学校 ぐこれで君も亜種聖杯戦争マスターにぐ』

ドラゴン先生(以降、D先生)「という訳で、また君に亜種聖杯戦争のなんたるかを教授します」クワー

佐藤「・・・二限目ですね。相変わらず、私の教室そっくりだ」キョロキョロ

D先生「君は放っておくと、陣営で一番ヤバい奴に殴りかかったり、噛み付いたりするからね。ここで色々学びなさい」

佐藤「へ？ そんなことしましたっけ・・・?」

佐藤「……あれ？　というか、今日はいつ？　私は……確か……」
フツ

D先生「ハイ、それじゃパパパーツと始めようか。戻っておいでハ
イライト」

『第二回、サーヴァントって？　〜英霊は聖杯戦争の駒に非ず〜』

D先生「この前は聖杯戦争そのものについて喋ったし、今回は聖杯
戦争の花形、英霊について話すよ」

佐藤「英霊……確か、歴史上の英雄を召喚するんですね。七人
も」

D先生「うん。前にも紹介した通りだね……よいしょ」ガツタン

聖杯戦争。

二百年も昔、アインツベルン、間桐、遠坂の三家の魔術師が構築し
た、あらゆる願望を叶える聖杯を召喚させる儀式。

その儀式の歴史は血に濡れている。聖杯を手に入れるには、聖杯に
認められた七人の魔術師は使い魔であるサーヴァントと共に、ただ一
組になるまで戦い勝ち残らねばならないからだ。

七人の魔術師は聖杯に三画の令呪を与えられる。そして聖杯の力
を借り、この世界に名を残した存在、英霊をサーヴァントとして召喚
することができる。サーヴァントはそれぞれにクラスを持ち、他のク
ラスを持つ六組と覇を競うことになる。

剣士のクラス、セイバー。

弓兵のクラス、アーチャー。

槍兵のクラス、ランサー。

騎兵のクラス、ライダー。

魔術師のクラス、キャスター。

暗殺者のクラス、アサシン。

狂戦士のクラス、バーサーカー。

つまり聖杯戦争は、異なる時代に名を馳せた英霊七騎が現界し、聖杯を求めて戦う殺し合いなのである。

アインツベルンら三家は、日本、冬木市に満ちた霊脈を基に、過去数度に渡ってこの聖杯戦争を行った。そのシステムは回数を重ねる中で他の魔術師に評価され、今ではそのシステムは真に優秀であると認められた。

血を血で洗うような闘争の中でそのシステムは盗まれ、そして現在では世界中で三家が構築したシステムを模倣され、規模も質も様々な亜種聖杯戦争が執り行われている。

D先生「・・・厳密に言えば、英霊とサーヴァントは別物。英霊は聖杯戦争で召喚される使い魔ってだけじゃないんだ」

D先生「聖杯戦争で召喚される英霊は、あくまで『冬木の聖杯戦争』で構築されたシステムに則って召喚されているだけ」

D先生「英霊の召喚というのは、本来は人智を超えた存在が執り行う代物なんだよ」

佐藤「人智を超えた・・・というと、神様とか？」

D先生「もっと曖昧なものかな」ハハハ

D先生「例えばこの世界中の人類、その全ての無意識が作り出す、破壊回避の祈り」

D先生「あるいは、この地球そのものの、生命延命の祈り」

D先生「そう言った祈りが生み出す、世界を守護する安全装置・・・

“抑止力”が、英霊を召喚するんだ」

佐藤「抑止力・・・」

D先生「と言っても、『英霊召喚』は“抑止力”の手段の一つだけだね」

D先生「大概は破滅の危機に直面してる『誰かしら』に、世界を救うに足るだけの後押しをするだからね」カツカツ

“いわゆる主人公補正ってやつ？”

佐藤「じゃあ・・・英霊の召喚って言うのは、世界基準で見ても結構なことってことですよ？」

D先生「それはもう、人類史の中から適任と判断した人材が、英霊として召喚される訳だしね」

D先生「で、聖杯戦争で行われるサーヴァントって言うのは、そんな英霊の一側面に過ぎないんだ」

『第二回、サーヴァントって？　～サーヴァントはカットケーキ～』

D先生「じゃあ、次は聖杯戦争における英霊。サーヴァントについて紹介するよ」

佐藤「はい」

D先生「さつきも言ったように、サーヴァントは英霊が聖杯戦争の魔術的なシステムによって召喚される、使い魔の最上とも言える存在だ」

D先生「魔術師が称した名は『境界記録帯』。聖杯の力を借りて、人類史が記録する英霊の膨大な情報の一面を借りて切り取り、自身の使い魔にしてる訳だね」

佐藤「一部しか切り取れないんですか？」

D先生「それだけ、英霊を現世に喚び出すというのは難しいってことだよ」

D先生「でも、召喚されたサーヴァントは『英霊の座』に記録されている存在だから、生前の記憶はまるっとあるうえ、そのクラスにおける最盛期の身体状態で召喚される」

佐藤「へえ、生前の経験全てを持った若い英霊が召喚される訳ですね」

D先生「んー、確かにサーヴァントは若者として召喚されるケースが多いけど・・・そのクラスの最盛期、となると必ずしも若者が良いという訳じゃないんだ」

佐藤「と、言う・・・老人だったり、子供だったりすることもあ

るってことですか？」

D先生「例えば、長い探求の果てに『体質そのものが変貌している術士』だったり、『空想を作品に昇華している芸術家』なんかは、最盛期に運動能力が関わってないだろうか？」カツカツ

『ほとんどキャスタークラスじゃないか』

D先生「あと、サーヴァントと英霊の違いとして、サーヴァントは英霊の一側面でしかない点だね」

D先生「サーヴァントはクラスに応じて召喚されてて、『英霊の座』からそのクラスによって、必要な部分がコピーされているんだ」

佐藤「???」つまり英霊≡サーヴァント じゃないってこと・・・ですよね？」

D先生「そう・・・まあ、分かりやすく言うと」

D先生「盛り付けが均一じゃないケーキがあったとして・・・そのまんまのホールケーキが英霊、カットケーキがサーヴァントって感じだよ」

佐藤「ちよー分かりやすっ」

D先生「例えば作中のセイバーだけど・・・」

D先生「彼はスペイン出身の、レコンキスタの騎士。国土回復の英傑である『エル・シド』をクラス・セイバーとして召喚したサーヴァントだよ」

D先生「セイバーとしての彼は、二振りの名剣に纏わる叙事詩や、語り継がれるその剣の名手としての知名度に由来している訳だけど」

D先生「エル・シドという英雄の記録を紐解けば、彼が多くの騎士を率いて多大なる成果を残した『騎士』・・・つまりライダーの適正がある英雄なのも分かる」

D先生「それに・・・中世ヨーロッパの騎兵である以上、戦場ではランスを用いていただろうから、ランサーの適正もありそうだね」

佐藤「じゃあ、セイバーは英霊エル・シドのカットケーキ・・・じゃ

なかった、〃剣士としてのエル・シド〃なんですわね」

D先生「そういうことだね。逆に言えば、その他の一面・・・例えば、彼の愛馬バビエカを召喚の際に連れていくことは難しくなるってこと」

『第二回、サーヴァントって？　くクラス選びは慎重にく』

D先生「次に、さっきから言っているクラスについて話そうか」

D先生「サーヴァントのクラスは、基本は七種に分類できるんだけど・・・よいしょ」ガツタン

剣士のクラス、セイバー。

弓兵のクラス、アーチャー。

槍兵のクラス、ランサー。

騎兵のクラス、ライダー。

魔術師のクラス、キャスター。

暗殺者のクラス、アサシン。

狂戦士のクラス、バーサーカー。

D先生「一つずつ、簡単に紹介していこうか」

佐藤「よろしくお願いします」

D先生「まず、剣士のクラス、セイバー」

D先生「アーチャー、ランサーの三つで『三騎士』と評され、取り分けセイバークラスは『冬木の聖杯戦争』による活躍から〃最優〃と呼ばれることもある」

佐藤「それだけ、クラスとして優秀なんですか？」

D先生「剣を扱う英雄だけあって戦い馴れしているうえに、基本能力が高く、優秀なんだ」

D先生「特にスキル『対魔力』は一定ランクの魔術に抵抗できる、キャスター泣かせのスキルだよ」

佐藤「伝説の剣士であり、魔術にも耐性が備わっているって・・・

確かに最優って感じが示すね」

D先生「とは言え、欠点もある。その代表として挙げたいのは、セイバーである以上、得物が剣に準ずるものになりがちな点だ」

佐藤「エル・シドの時にも、言っていたやつですな」

D先生「騎士がサーヴァントとして召喚されたとしても、槍や馬を武装として持つていくことは難しい」

D先生「それに英雄と呼ばれるまでに至った剣士である以上、手にしている剣も名の知れた名剣、名刀であることも多い」

D先生「剣って言うのは戦場において他の武器以上に象徴的なものの、名前も記録として残りやすいんだ」

D先生「それを手にして戦う以上、セイバーは〴〵真名がバレやすい〴〵」

佐藤「なるほど．．．流石に、武器を隠した状態で戦うことはできないですもんね．．．」ハハハ

D先生「ウン、ソーダネー．．．」カツカツ

〴〵元祖様はやっぱり凄かった〴〵

D先生「では、作中のセイバーについて解説してはいかがか」

D先生「あ、詳細はサーヴァントデータ集『第17話時点』を見てね」

佐藤「露骨なアクセス稼ぎ」

D先生「作中登場のセイバー、エル・シドは王道を征くセイバークラスと言えるね」

佐藤「高いステータスに、スキルとして『軍略』と『カリスマ』、それにスキル『カンペアドール』で戦闘中はボーナナスも入ってくる」

佐藤「しかも、あれだけ暴れてるのにまだ宝具を二つとも使っていないですね．．．」

D先生「マスター含め、この日坂亜種聖杯戦争、最強の座に君臨している陣営と言えるだろうね」

D先生「変わってる点とすれば、剣を二振り使ってる剣かな？ で

も先の話を思い出せば、その二振りが宝具であろうことはおろか、その能力まで何となく予想できてしまう」

佐藤「どうせビームだ」

D先生「次にアーチャー、弓兵のクラスだ」

D先生「飛び道具を武器としたサーヴァントでセイバーと同様『対魔力』を持ち、何より『単独行動』というスキルを持つのが大きな特徴かな」

佐藤「作中で、『裏切りのライセンス』扱いきれてたのですね」

D先生「これは召喚者であるマスターが傍にいないくても、何なら不在となっても現世に留まって戦えるスキルだよ」

D先生「これによつてマスターはサーヴァントと同行する必要がなくなり、怪物揃いの前線に身を晒す危険を避けられるんだ」

佐藤「え・・・それつて、つまり、他のサーヴァントのマスターは基本的に同行必須なんですか？」

D先生「サーヴァントとマスターは、その距離に近ければ近いほど繋がりが強固になり、魔力の供給もしやすくなるからね」

D先生「如何に陰から陰に移り戦うアサシンでも、その近くにはやっぱりマスターの存在が必要なんだ」

佐藤「・・・そうして見ると、マスターにとつても結構良い能力じゃないですか」

D先生「そうだね。まあ、マスターなんていららない！　つて考えに繋がりがやすいのも否定できないけど」

D先生「あと大きな特徴として、セイバーと違って武器の制限がかなり緩いということがある」

佐藤「あれ、弓兵だから、弓が武器なんじゃあないんですか？」

D先生「飛び道具なら何でも有りだよ」

佐藤「えっ」

D先生「それに白兵戦用の備えを持っていたり、何なら飛び道具として剣を使いつつ、まんま剣として振るうアーチャーもいるよ」

佐藤「えっ」

D先生「……」カツカツ

〃無限の可能性で出来ている〃

D先生「作中のアーチャー、逢蒙は弓を主武装としている世にも珍しいアーチャーだね」

佐藤「矛盾してるようで、矛盾してないコメント」

D先生「彼の強さは、宝具に纏わる神秘の強さに直結している。何と言っても九つの太陽を射落とした大英雄の弓矢と、その大英雄を暗殺した木棒だからね」

佐藤「でもランクで言えば、木棒の宝具の方が高いんですね……この人、アサシンの方が適正あるんじゃない？」

D先生「本人も気にしてる点だから、言わないであげてね？」

D先生「続くは『三騎士』最後の一角、ランサーだ」

佐藤「槍兵ですね。槍は戦場のメインウエポンって、聞いたことがあります」

D先生「このクラスもセイバー同様、戦いに特化した能力を持っている」

D先生「特性として『対魔力』スキルを持ち、何より敏捷性と堅実性が売りのサーヴァントと言えるね」

佐藤「敏捷性は兎も角……堅実性ですか？」

D先生「あくまで傾向の話だけど、セイバーと同様、ランサーは武勇より英霊となった存在が多いんだ」

D先生「だけど常に身に帯びることが出来る為に『武人の象徴』として扱われやすい剣に対して、槍というのは『携帯性』と『槍ならではの特性』が反比例の関係にある」

佐藤「短い槍を持つなら、剣で良いってことですね……正直、私にはピンとこない話ですが」

D先生「さつき佐藤さんも言ったように、つまり槍って言うのは〃

戦いに特化した道具”ってことだよ。そんなものを得物に召喚されるなら、やつぱり常在戦場、百戦錬磨の兵が多いって話さ」

D先生「で、欠点としては・・・セイバーと同様にクラスと武器が直結していることかな」

D先生「武勇で名を馳せている以上、ランサー適正を持つ英霊はセイバーの適正を持つ者が多いけど、槍の宝具と剣の宝具、両方を携えて召喚されるランサーやセイバーはいないと言っていい」

D先生「英霊の中には『二本の槍と、二本の剣を持つ騎士』って言うのがいるけど、彼が槍と剣の両方を持つてセイバーやランサーとして召喚されるのは不可能なんだ」

佐藤「なに、その不憫な英霊・・・かわいそ」

D先生「前回にも言及した英霊なんだけどね・・・」カツカツ

“いつそ武装の格を落としてバーサーカーになれ”

D先生「作中のランサーは、諸事情で弱体化している様子だけど無難にまとまった能力を持つてるね」

佐藤「活路を『見出す心眼(真)』に、『仕切り直し』、防衛用と使い続けるあの・・・念動力？の宝具。物凄く防衛に特化してますよね」

D先生「これまでの激戦をくぐり抜けてこれたのは、本人のステータスに依らない技量と、佐藤さんが指摘した防衛用のスキル、それとランサーに似合わぬ『幸運』Aのお陰」

佐藤「・・・え、ランサーって薄幸なんですか？」

D先生「・・・英霊の中には『二本の槍と、二本の剣を持つ騎士』って言うのがいるけど・・・」

佐藤「あ、もう分かりました」

D先生「次は『四騎士』と称されるクラスで一番騎士らしい騎兵のクラス、ライダーだよ」

佐藤「というか、騎兵なら普通に騎士じゃあ・・・」

D先生「そういうところをツツコンじゃあいけない・・・」

D先生「ライダークラスは文字通り、何かに騎乗した英雄・・・だから英霊としての武器や宝具も多種多様、大掛かりな物であることが多い」

D先生「もちろん何かに乗ってるだけじゃ戦えないから、他にもランスや投擲槍、剣なんかも持っている」

D先生「このことから、ライダークラスは宝具の所持数や有力性を引き合いに語られることが多い。それに三騎士と同様、『対魔力』も持ってる」

佐藤「それだけ聞くと、かなり強力なクラスに聞こえますね」

D先生「そうだね。だけどそれだけに、尖った戦法になるんだ。英霊が変われば、宝具の性質も戦い方もガラリと変わる訳だからね」

佐藤「確かに、船が宝具のサーヴァントもいれば、馬が宝具のサーヴァントもいる訳ですし・・・『三騎士』とは大違いだ」

D先生「オマケに聖杯戦争という『隠蔽された戦争』という性質や真名を隠す為、はたまた戦闘の基本が対人であることから、結局サーヴァント本人も地面に降りて戦うケースも多い」

佐藤「あれ、途端に残念なクラスに・・・？」

D先生「さらには複数の宝具を使う場合、魔力の供給を行うマスターにも多大な負担が強いられる為においそれと宝具全ての運用は・・・」カツカツ

佐藤「やめたげてよお」

〃宝具のご利用は計画的に〃

D先生「作中のライダー、イオラオスはステータスこそパツとしなけれど、保有スキルと宝具は他を圧倒するものがあるね」

D先生「まず高い『対魔力』に加え、宝具『消されぬ功績』で魔術や発動状態にない宝具を潰し、サーヴァントの誰もが持つ再生力も破壊できる魔術師泣かせの側面」

D先生「スキル『英雄の介添』と『友誼の証明』によって味方を作れることも、共戦にも対応できている。状況に合わせて乗り物を変えれ

る宝具も、個人的に好きだよ」

D先生「そして必殺の宝具『ヘラクレス殺し』は、サーヴァントとしては異例の『記録に残ってない宝具』。まさに奥の手って感じだね」

D先生「まとめると隙のない、英雄として完成されたサーヴァントだと思う。現段階でセイバーに唯一深手を負わせた男だし、この聖杯戦争の勝ち残りも狙えるくらいには強いサーヴァントだよ」

D先生「……だから佐藤さん、そろそろ泣き止もう？」

佐藤「……？」グスツ

D先生「さあ気を取り直し、魔術師のクラス、キャスターの紹介だ」

D先生「『陣地作成』と『道具作成』というスキルを保有した、一風変わったクラスだね」

佐藤「『陣地作成』と、『道具作成』……なんか、あまり役に立たなさそうな名前ですね」

D先生「そうでもないよ」

D先生「『陣地作成』とは魔術師にとっても重要な工房を作成するスキル。まあ、ここでは自身に必要な拠点を作るスキルと考えた方が良いかな」

D先生「『道具作成』の方は、場所ではなく道具を作ることが目的としたスキルだね」

D先生「この二つを合わせることによって、キャスターは時間と資材さえあればどんどんと自身の有利な環境や状態を整えることが出来るんだ」

佐藤「なるほど……待ちに徹する感じは、これまでの4クラスとは根本的に違うクラスですね」

D先生「うん。これまで紹介したクラスは、いずれも大なり小なり『対魔力』を持っている。何の用意もなく、魔術だけで戦えば俄然不利なのはキャスターの方だからね」

佐藤「そっか。魔術師として魔術を使うだけじゃ厳しい以上、正々堂々が難しいクラスなんですね」

D先生「それにキャスタークラスに該当するのは、魔術師だけでない。芸術家や文豪・・・果てには思考実験で生み出された架空の悪魔なんかもいるからね」

D先生「戦場で名を残す英傑相手に直接的な戦闘なんて、土台無理な話なんだよ」

佐藤「ああ・・・このクラスもライダー同様、かなりピーキーな・・・」
D先生「欠点と言えるのはやっぱり、短期決戦に持ち込まれるとたちまち不利になることだね」

D先生「それと、いざ決戦と大掛かりな仕掛けを整えると・・・途端に規模が大きくなりがちだから、生き残ってるクラスが団結して襲ってくる例が後を立たない点かな」

佐藤「・・・あれ、このクラス。勝ち目が・・・」

D先生「じゃあ、次行こうか・・・」カツカツ

佐藤「ひ、否定しない・・・」

〃溢れる中ボス感、滲み出るギミックボス感〃

D先生「作中のキャスターは・・・えつと？」

佐藤「先程までの説明が、何一つ当てはまらないんですけど・・・」

D先生「〃新選組の霊体を召喚する能力〃が、スキルか宝具かすら分からない・・・」

佐藤「というか『敏捷』のC+!! やっぱり日本刀持って戦うの予定調和じゃないですかヤダー!!」

D先生「マスターによる隠蔽による隠蔽が、ここに来て滅茶苦茶に活かされている・・・今後の活躍に、目が離せないサーヴァントだね」

D先生「ついに来た、皆大好きアサシンだ!」

佐藤「暗殺者のクラス・・・あれ? 左腕が疼く」ズキズキ

D先生「特徴としてはスキル『気配遮断』による、隠密行動と暗殺。この一点こそ、アサシンが他のクラスと一線を画する部分だよ」

佐藤「疼くなあ・・・疼くなあ・・・」ポリポリ

D先生「さあ、最後のクラス、バーサーカーの紹介だ」

佐藤「・・・狂戦士」

D先生「さっきの佐藤さんみたいだね？」

佐藤「先生が意地悪する」プイ

D先生「はははは・・・さて、バーサーカーの特性は、クラス『狂化』によるステータスの上昇。これに尽きるね」

D先生「それに『狂化』が主軸のクラスなだけあって、適応される英霊も多い。英霊に成り得るのは、いつだって常識から外れた存在ばかりだからね」

D先生「ね、佐藤さん？」

佐藤「先生が意地悪する!!! その被り物噛み千切りますよ!？」バンバン

D先生「ごめん、けど机は叩かないでね？ 噛み千切らないでね？」

D先生「欠点なんかは・・・作中で延々と語ってるので」ガツタン

狂戦士のクラス、バーサーカー。

今や世界中で行われている亜種聖杯戦争において、このサーヴァントほど召喚者であるマスターから敬遠されるクラスはない。

『狂化』のスキルをもって、理性と引き換えにステータスの強化を図る。なるほど聞こえは良い。しかしそれは英霊の優秀な知性を奪い、それに基づいた能力や技術を捨ててまで、パワーやスピードと言った有り触れたスペックを求めすることに他ならない。

加えて、得られたスペックを維持するにはエネルギー、つまり魔力が必要になる。バーサーカーは格の低い英霊の能力を底上げするのに適すると評する者もいるが、底上げた分の魔力はマスターである魔術師に求められる。バーサーカーは二流でも構わないが、魔力供給を行うマスターが同じ二流では魔力切れによる自滅が起きるのだ。

理性の喪失と、魔力供給の増大。二つのデメリットを克服できるのは、一人で全ての状況に対応できる理性を持ち、そしてバーサーカーを最後まで戦わせられるほどの魔力供給が行えるシステムを構築できるマスターだけだ。しかし大概のマスターはこれらマイナスをゼ

口にできず、日を重ねるごとに積み重なるマイナスから自滅していくことになる。

バーサーカーのクラスは、聖杯戦争を勝ち残るには適さない。それが多くのマスターの見解だ。

しかし、同時にこういった考えも浮上する。

序盤におけるバーサーカーは、他のサーヴァントを殺すに足る爆発力がある。

すなわち、バーサーカーの最初の相手にだけは絶対になるな——という、バーサーカーの危険性への理解に至るのである。

D先生「・・・要するに、敵でも味方でも触るな危険なことだね」

佐藤「・・・ちなみに先生が聖杯戦争に参戦する場合、バーサーカー対策はどうします?」

D先生「そうだね・・・バーサーカーが脱落した直後くらいに、ようやく本編に登場するかな?」カツカツ

佐藤「キタナイ!」

“あっちゃ行け、バーサーカー!”

D先生「作中のバーサーカー、エギル・スカラグリムソンは正にスキル『狂化』が基軸のサーヴァントだね」

佐藤「えっと、勝手に上がっていくんですよね? 『狂化』のランクが」

D先生「オマケに『狂化』が低いうちは斧と独特のルーン魔術を中心に戦い、高くなると宝具『狂狼の魔剣』で暴れに暴れてくる」

佐藤「先生、その宝具、データ集に載ってません」パラパラ

D先生「また近いうちに更新するらしいから、それまで待つてね」

D先生「基本ステータスも低くない・・・というか寧ろ高いのに、スキル『ベルセルク』で『狂化』によってが上がり、それに伴ってステータスも上がる」

D先生「最終的には、あのセイバーすら力技で倒せるようになるの

かもしれないね」

D先生「まあ、それもマスターの魔力が保てばの話だけど・・・」

佐藤「やっぱり、そうなりますか・・・」

D先生「セイバーやランサーみたいに安定しない戦闘スタイルは、本人にもそのマスターにも負担になるからね。今後、あのマスターが彼をどう乗りこなしていくかが楽しみだよ」

『第二回、サーヴァントって？ 放課後』

キーン コーン カーン コーン

D先生「じゃあ、今回はここまで」

D先生「次回も遅れずに来てね」

佐藤「まだ次回もあるんですね・・・」

佐藤「・・・というか、よし！ これでサーヴァントについては何か色々分かったような気がしなくもないです！」

佐藤「なので、これから召喚したサーヴァントと一緒に、色々頑張ってみます！」ガタツ

佐藤「まずは序盤を乗り切る為に、同盟を組めそうな人を探してきます！」パタパタ

D先生「・・・うん」

留？
・・・その弱そうな陣営！ 私達と同盟組みませんか!? えっ、保

・・・うわ、別の陣営だ。よし、ここは二手にわか・・・に、やおおうあああああああああ!!!?!

D先生「・・・」

D先生「よし、援護しに行こうか」ガタツ

次回に続く・・・?

第二十七話 『リビングレジェンド』

第二十七話 『リビングレジェンド』

イギリスに、一人の男がいた。

当時最強の国家に牙を剥き、闇に葬られた魔術師の末裔に生まれた。そして生まれながらにして、檻の中の獣であった一人の天才がいた。

男は知っていた。遠くインドの地から脈々と受け継がれた力を、一族を飼い慣らしてきた者達は怖れていることを。

男は手にしていた。受け継いだものではない特別な、彼らの用意した檻の外側にある確かな才能を。

世界に名を知らしめるだけの力が、彼にはあった。

だったら、駆けねばならない——男は、そう思った。

男は決別した、先祖の名誉と子孫の未来を確かなものにする為に——受け継いだ力を年若い娘に託し、檻という秩序ある巢から抜け出る。

そうして男は遠い異国を駆け、その才能を見せつける。

ドイツに、一人の女がいた。

山に住まう悪魔に身を寄せた女の、異端の家系に生まれた。そして生まれながらにして、悪魔との契約を結ばされていた一人の天才がいた。

女は知っていた。悪魔との契約の先には破滅しかなく、三代目となる自分こそ、その静かなる破滅の代に当たると。

女は気づいていた。悪魔の力に魅入られた血より遙か以前、より強大な魔神を使役していた血がその身に流れていることに。

静かに滅ぶ運命を覆すだけの力が、彼女には見えていた。

だから求め、手にしたい——女は、そう思った。

女は切り捨てた、己が満足できる生き方を築く為に——先祖からの契約も英霊との繋がりも、愉悦という主柱の生贄とする。

そうして女は遠い異国に君臨し、その異形を見せつける。

そして遠い異国の地にて、伝説は邂逅する。

二人は、出会ってしまった。

知れば知るほどに己と異なると知り、触れば触れるほどに己の逆鱗に触れる。

男は己の信条から、女は己の未来の為に——あいつの生存は許さない。この手で、確実に殺してやりたい。

二人の男女は柄にもなく、そう思うようになっていた。

封印指定された『時計塔』の魔術師——ウイリアム・シン。

異形と化した『ブロッケン』の魔女——アレクシア・ブロッケン。

二人は運送会社が管理している倉庫に面した道路にて、鬼の形相で掴み合い、額を打ち合わせた。

しかし、それはウイリアムにとつては下策であった。

パツと血飛沫が爆ぜるように月夜へと飛び散る。今や人外の領域へと半身を踏み込ませたアレクシアとの激突に、未だ人間であるウイリアムの額は容易に裂けてしまったのだ。

「……………ッ」

掴み合ったまま、ガクガクと膝を曲げ姿勢を崩すウイリアム。彼の足元には決して少くない血が雫となって垂らし、脳震盪によるものか、伏せた顔からボソボソと言葉を零していた。

「……………今さら正面から、何も工夫もなく、この私に戦うとは」

アマチュアが。そう呟いて嘲笑い、アレクシアはさらに組み合った腕に力を込める。そうして、腕力に物を言わせて、そのままウイリアムを地面にねじ伏せようとする。

しかし、そうしてウイリアムへと向けた力がたちまち空転……否、すり抜けた。

気づけば、アレクシアが掴んでいたウイリアムの両腕は大蛇と姿を変えていた。そして、ずるりとその拘束から逃れて、逆にアレクシアの両腕に巻き付いていた。

獸性魔術——しかも、これは……最初に二人が衝突した時に、彼が真つ先に使用した獸性魔術だ。

アレクシアはハツとして、ウイリアムを見る。彼は既に完全に意識を取り戻して、こちらを覗き込んでいた。その顔は額から流れる血に染まりながらも、白い歯を覗かせている。

直後、アレクシアの両腕を、二匹の蛇が絞めつけに掛かる。かつては呼吸さえできなくなった絞め技だが、アレクシアはかつての貧弱な魔女とは違う。

「舐めるな、魔術師い……ッ！」

アレクシアは激昂し、異形となった右腕に巻き付いた蛇を振り払った。

そして、間髪入れずに右腕でウイリアムを殴りつけようと、全力で拳を突き出す。

そこを、ウイリアムは狙った。

振り払われた、獸性魔術で蛇の韌やかさを得たその左腕を突き出し、アレクシアの異形の右腕の外側から回り込み、内側へと滑り込ませる。

結果、完成する。

クロスカウンター——ボクシングの代表的なカウンター・パンチ、その高等技術が。

完全に意識外からの打ち込まれた攻撃には、体は防衛反応を示せない。身に纏った尋常ならざる耐久性が発揮される間さえなく、今度はアレクシアの方がたたらを踏んだ。

「……………」

ウイリアムは残されていた蛇の拘束を解き、額から顔に流れていた血を拭う。そうして黙ったまま、重心を叩き崩され後方へふらつくアレクシアへと歩を進める。

「Prana shift——were monkey」

二小節の詠唱。その直後、猿人の神秘が蒸気のように溢れてウイリアムの体を纏い、上半身には短い毛が、指先には鋭い爪が伸びる。淡く光り輝くその姿はまるで、インド神話に登場するハヌマーンそのも

のようだった。

ウイリアムは一気に攻勢に出た。

矢のようにアレクシアへと飛び込み、四肢どころか全身の部位で以ってアレクシアを殴打する。その乱撃は長身の彼女を後方へと押し込み、倒れる間さえ与えない。

乱打に次ぐ、乱打。アレクシアが後方に弾け飛ぶ度に、ウイリアムは鋭角に身を掛かり距離を詰める。以前の戦いでは魔術礼装『ハンス・オプ・グロリー栄光の右手』がある程度は防いでくれた猛攻ではあったが、礼装が破壊された今ではそれを防ぐ外部装置はない。

そうしてアレクシアはついに倉庫の敷地内……どころか、倉庫の壁にまで追いやられる。

それでも、ウイリアムは止まらない。息をつく間もなく、嵐のような猛攻を続ける。打ち据えられて狂いが生じたアレクシアの五感には、錯覚として、それこそ何人ものウイリアムが感じ取られていた。そして……ついに施設の壁の方が、アレクシアの背中越しの衝撃に耐えられずに砕けた。

背中から倉庫内に転がり込むアレクシア。ごろごろと転がった末に、大の字に倒れた彼女は身動き一つせず天井を見ていた。

「……と、ここまでが以前の、最初に戦った時の再現……ってね？」
多少の違いがありますが。と、吐息を漏らしながら、崩れて開いた穴の向こうからウイリアムは現れる。

「もっとも、今回は僕の方から撤退はしない」

ウイリアムはそう言うと、纏った獣の神秘を霧散させつつ肩を回し、瓦礫を踏んで倉庫内に踏み入った。

「どことん行く……どうした？ 立てよ、アレクシア・ブロッケン。ここからが本番だろう……僕はお前を殺すまで、もう引き下がったりはしませんよ」

大の字に倒れるアレクシアを見下ろしながら、ウイリアムはそう宣言する。

その言葉を聞き受け、天井を見上げるアレクシアもまた、頬を切り開いたように、薄く笑った。

「ウイリアム・シン。『時計塔』の魔術師……」

と、アレクシアは突如、歩み寄る敵の名を呼ぶ。その呼び掛けに、ウイリアムは歩みを止めた。

『貴族主義派』に所属し、降霊科の二級講師として教鞭を取りながら、同時に封印指定された魔術を継いでいる……常に管理下に置かれる身だ。お前がこの戦争に参加したのも、時計塔の邪魔が入らない空間を望んでのことだろう」

「……………」

「なあ？」

そう笑ってアレクシアは見開いた眼光で、ウイリアムを見据える。ウイリアムは肩をすくめ、腕を組んでそばの資材に寄り掛かった。その反応を確認すると、アレクシアは再び喋り出す。

「歩んできた道は違うが、私とお前は良く似ている。私も、そしてお前も、欲しているものの為に自分を取り巻いてきた世界に爪を立てている」

「……………それで？」

「お前の口から、直接聞きたい」

アレクシアはそう言うと、肥大化した右腕で地面を、コンクリートを鷲掴みにする。パキリという音を立ててコンクリートは割れ、彼女はそのまま右腕でもって自身を一息に引き起こした。

「時計塔によって抑圧されてきた、その魔術……今さら何の為に使う？」

アレクシアの、その問いかけにウイリアムは黙り、やがて観念したように長い溜息をついた。

彼は意を決したように資材から離れ、身に纏っていたパーカーのファスナーを下ろした。パーカーの下には何も着ておらず、刃物のように研ぎ澄まされた浅黒い肉体が覗く。

そして彼が目を瞑ると、彼の肌から——袖から伸びた手までを含む、腰から首にかけて上半身の全てに、幾何学的な模様が浮かんだ。

その神秘的な光にアレクシアは目を細め、呟いた。

「……………魔術、刻印」

「僕が戦うのは……僕の体に刻まれていた、先人達の “これまで” 。
そして娘に託した、 “これから” の為です」

「……………」

「魔術使い、私は貴方とは違う。魔術師は己の、今の為にその力を奮つたりはしません」

「……フツ、全ては親から子へ受け継がれる、根源への探求の為ということか」

アレクシアは、ウイリアムのその回答に肩を震わせる。

「……良くできた、カルトだ。その模様は、どんなやり方でもいずればと……倫理観も、自分自身さえも未来の為に捨ててしまう呪いの印だ」

心底下らないと言うようにそう吐き捨てながら立ち上がって、アレクシアはウイリアムに対し目を剥き、叫ぶ。

「早く気づけ！　そして認めたらどうだ!?　魔術師は魔術使いおまえたちと何も

変わらない！　人でなしで、嘘つきで盲信者だッ!!　叶わない根源への夢を、現実から目を背けるまやかしに使っているに過ぎないのさ
!」

「……貴方こそ、気づくべきだ」

ウイリアムはその言葉を聞くと、怒気を含んだ声で告げた。

「もう語って治まる段階じゃあない。倫理や損得で動けるなら、お互い一人つきりでここには来ないはずだ」

そう捲し立てるとウイリアムはパーカーを脱ぎ、腰に巻いた。以前と変わらない、彼の戦闘スタイルだ。

「その手で直接、殺したかったんでしよう？　僕も同じだ。この手をお前の血で汚さないと……例えば聖杯を手にしても、僕は満たされないと……ッ！」

ウイリアムの、その殺意の籠もった台詞を聞くと、アレクシアは鼻で笑って右腕を振るった。それに伴って、宙に螢火のような魔力の光球が複数浮かぶ。

「やはり、お前と私は似ているよ……来いよ、魔術師。お前の過去も未来も、全て食い物にして私は進む！」

「やってみろよ……アレクシア・ブロッケン！」

ウイリアムは叫ぶと拳を握り、獣の神秘さえ纏わないままアレクシアへと突き進む。アレクシアも両腕から悍ましい眼光を輝かせ、その禍々しい腕を天へと突き上げて魔法陣を展開させた。

「……ッ！ ハッ……ハッ……くそっ……」

一方、寂れた夜の商店街にて。

ミアは荒い呼吸を繰り返し、脚を震わせ……しかし、シャツターの回みに指をかけそれでも地面に膝をつけることだけは拒絶していた。最初にキャスターと遭遇した場所から随分逃げ回ったが、それでも地面に体を下ろすことだけはミアのプライドが許さなかったのだ。

「……ハッ……なんだ、あれ……？」

思わず、口から出た疑問であった。

あそこまでとは、聞いてない。

相手は栄えある英霊。抱えているもののなら、ドス黒きこそがこちらのアドバンテージ……そう考えていた。

なのに、いざ戦ってみればどうだ。ミアは今や歯を鳴らし、震えを抑え切れなくなっている。完全に、目の前の存在に吞まれている。

「……ざっけんなッ！ これのどこが英雄だッ！」

叫び、睨みつけた視線の先——そこにはキャスターが、今まさに最後の人形の体を木っ端のように斬り飛ばしていた。

「……」

ボトボトと、斬り飛ばされた部位の順をなぞるかのように落ちゆく人形の五体。それを他所にキャスターはくると、顔をミアの方へと向けた。

「くっ!？」

咄嗟にミアは、ベルトに差し込んでいた拳銃——人形から回収した装備を引き抜き、キャスターに向けて我武者羅に発砲する。

符呪された銃弾。当たれば幾らかのダメージは期待できる。しかしキャスターはそんな銃弾を自身に当たる分だけ冷静に見極め、対処する。

彼は上体を微かに横に振るだけで二発、銃弾を立て続けに躲し、三発目は突如キヤスターの側面へと軌道を変えて飛んでいった。

見れば、キヤスターは下へとぶら下げていた剣先を持ち上げ、片手で刀を正面に構えている。

「……………ッ」

これだ。

弾切れの拳銃を捨てながらミアは無意識に後退しようとし、シャッターに踵をぶつける。そして、そんな自分に歯噛みする。

この刀の、奇妙な……………刀を正面に構えるや否や、攻撃の全てが弾かれる技。アレに用意していた人形の攻撃も、罨も、全て完封されてしまったのだ。

刃物も、銃弾も、魔術さえ、この技一つでキヤスターは何とでもしてしまう。しかし、何よりミアを苛立たせるのは、それをやる瞬間のキヤスターの動きを目で捉えきれない点。未だに、その技の全貌を理解できていない点だ。

「……………」

何もできない。それどころか、理解さえ……………見ることさえできない。

そこまでのレベルの差が、自分と向こうにはある。

……………いや、あるはずがない。そんなことがあつて、堪るか。いくら何でも、こんなにも……………認めない、認められるか。

沸々と煮えたぎるような、理不尽に対する怒り。

きゆうと身を引き絞るような、絶望に対する恐怖。

二つが心の内で混ざって渦巻き、ミアの身体が震える。

——しかし。

「ハッ……………フフッ！」

カチカチと震える歯を噛み抑え、涙で濡れる視界は目元を引き絞つてクリアにする。ミアは口端を釣り上げ、先ほど手にかけていたシャッターを叩いて自分に活を入れた。

そうしなければならぬ、事情がある。強い者に怯える、か弱い少女にはもう……………戻らない。

強くなくても殺して、支配する。もつと妖しく、激しく、世界に自分という存在を見せつけてやる。

そうなる為に、魔女になったのだから。

「……ホント、化物なんですねえ。あんたらって……」

そうして、冷静を装った口ぶりで店先からスツと離れる。キャスターから視線を外して、メインストリートの中央へと歩いていく。

そして、その体勢のまま——目線すら送ることなく、キャスターにはミアの体で遮られ見えなくなっていた左手で毒煙の飴玉を二つ、用意する。

「けふっ……まったく——」

咳き込んだフリ。それに合わせてミアは左手を口元へ、二つの飴玉を同時に口に含ませ舐める。

「——ふざけんじゃねーぞ、老害がッ！」

吐き捨て、投擲する。指先から離れた飴玉は泡立ち、チューイングガムのような、ショッキングピンク色と青色の毒煙を噴き上げる。

「……………」

キャスターは無反応に、こちらへと迫る飴玉を見る。そして刀の刃先で飴玉を弾き、横合いへと転がす。

そう……きつと、キャスターにとつては既に見た、何てことはない攻撃だろうな。と、ミアはそう思いながら、大胆に露出した太ももへと——そこに刻まれたタトウー手を伸ばす。

だが、本命はこっちだ。

『茨で作られたハートマーク』を象ったタトウーを、ミアは掴んで引き抜いた。

ズルリと染み込んだ皮膚から解き放たれた、黒色の茨の鞭——手の内にさえ突き刺さる、ミアが積もらせた世界への呪いそのもの。

ミアはそれを手に、毒煙へと頭から突っ込んだ。

そう、毒煙なら刀では弾けない。致命打にならない毒煙も、キャスターの視界を奪うだけなら充分に役立つ。

そしてこの呪い鞭なら、防御した刀ごとキャスターに巻きつける。

あとは……自分の呪いが、想いがキャスターに——世界に通じるか

どうかだ。

「うおおあああああああああッ!!」

自身の肺を焦がす毒煙の中、ミアは咆哮した。吠えながら右腕を振りかぶり、大きく横薙ぎに茨の鞭を振るう。

煙る視界の中、キヤスターの胴体へと迫る、ドス黒いミアの呪いが見える。

「……………」

キヤスターはミアの命を賭けた特攻に不意を突かれ、目を見開く。ざまあみろ、とミアは舌を出した。

そして、キヤスターの胴体に茨の鞭が触れる。

——否、触れるか否かの刹那、その鞭の軌道が微かに浮き上がった。その感触を覚えた直後、ミアの体は振りつけた挙動のままに半回転する。

茨の鞭は、ミアの呪いは、空を切った。

ミアは見開いた目で、キヤスターの姿を見た。

その……両足を広げて屈んだ蹲踞の姿勢で、刀を使って茨の鞭を擦り上げて躲す姿を。

例の技……あの距離でも、使えるのか。と、ミアは絶句する。絶句しながらも、次の攻撃を仕掛ける。毒煙を吸った今、もう後には引けない。

ミアは左手で茨の鞭を掴み、宙に空転していた鞭の制御を取り戻す。そして体を半回転、今度は先ほどとは逆の時計回りに身を捻りながら、キヤスターに呪いを振りつける。その途上で左手の内側を鞭が滑り激痛が走るも、気にしている余裕もない。

キヤスターは曲げていた両膝を駆動させ、後方へと飛び跳ねる。

ミアの呪いは、キヤスターの顔面を掠めるようにしなり、またもや空を切った。

「くっ……くっ……ッ！」

ミアは毒つき、腕を振って鞭を手元に引きつける。

そして、そこで終わった。

視界が揺らぐ。勝手にくの字に曲がった体に連れられて見せられ

た地面には、夥しい血が溢れ広がっていた。

その血は、自分の視界の根本から流れ落ちていた。

「……は？」

思わず、左手で口元を拭う。それでも、その口元が乾くことはなかった。絶え間なく口内から溢れ出る血が、それを許さない。

「……………？」

気づけば、ミアは商店街の天蓋を見ていた。仰向けに倒れているのだろうが、倒れたことを、その過程が記憶にない。意識が、連続していない。右手に握っていた鞭は、今、どこにあるのだろうか。

「……………」

死ぬ、のか。

ミアは覚束ない思考の中で、悟った。やるだけはやった、と思う。全てを捧げた、それでもミアの呪いは、キャスターに——世界に届かなかった。

これが、英霊か。ミアは納得する。

そんなことを考えていると、こちらへとキャスターが近づくと気配を感じた。

それで良い。と、ミアは笑いながら体を転がし四つん這いになった。次いで四肢に力を込め、身を起こす。

そう、こなくつちやあ。と、ミアは明暗を繰り返す視界の中で、こちらへと歩み寄ってくるキャスターの姿を捉えた。ここでこのまま、地味に自爆なんて、まっぴら御免だ。

ミアはペタンと座り込みながら、キャスターを見上げる。対してキャスターは、そんなミアをジッと見下ろしていたが。

「その様子なら、毒で死ぬことも、反撃することもない……………か」

と、キャスターは呟く。そして刀を鞘に納め始めた。

その行動に、ミアの弛緩した身体に電撃が走る。

「お……………」

「分かっているはずだ、もう勝負はついている。あの娘……………ライダーのマスターは返して貰う」

それが、ここに来た目的だ。そうキャスターは告げると踵を返し、

ミアに背を向けて歩き出す。

「待って……ちよつと、おい……」

このまま行くつもりか。自分を、このまま置いて。

自分の、ミア・ブロッケンの亜種聖杯戦争は、ここで情けをかけたまま終わると言うのか。多少のダメージを、世界の広さを知った授業料として。

「……待てよオッー！」

ミアは叫んで右足を前に、地面を力強く踏みしめる。

その様子を察して、遠ざかろうとしていたキャスターの足が止まった。その背中に、ミアは叫ぶ。叫びながら、膝に力を入れる。

「ふざけんな……これまで、一体どれだけ……犠牲にしてきたと思ってる……ッー！」

堀井深秋という少女の過去も、ミア・ブロッケンという魔法の未来も、全部賭けた。それだけでは賭金に届かず、多くの命も犠牲にした。

その勝負の結果が、世界の広さを知り、泣いて終わるだけなど。

「シなキレイゴトで、今さら終われるかああああッ!!」

ミアは血反吐を吐きながらも周囲のシャッターを震わせるほどに叫び、ギリギリと体を痙攣させながらも立ち上がった。ただ殺される為に、ただ残酷に斬り殺される為だけに、立ち上がってみせた。

「……………」

その姿に、キャスターはフウと溜息をつく。

「……そう言えば、まだ名を聞いていなかった」

そう言つて、キャスターは振り返る。振り返りながら、腰に納めた刀を抜いた。

「私は元新選組、二番隊組長……永倉新八。ながくらしんぱち若き魔法、お前の名は？」

それはあまりにも唐突な発言で、完璧な不意打ちであった。

真つ白になったミアの脳裏に、その名乗りがグルグルと巡る。永倉新八、学のないミアには、彼が何者かは知らない。しかし、この聖杯戦争で、未だ誰にも知られてはおらぬであろうことは分かる。自分が慕うアレクシア・ブロッケンさえ知らぬキャスターの真名を、彼の口から直接聞いたのだ。

それはつまり、自分を決して生かして帰さぬということ。
そして、自分を敵と認めたということ。

ミアはその恐怖と悦びに震え、涙を流しながら口を開いた。

「ミア……ミア・ブロッケン」

「見事だ」

そこからの光景を、ミアはまともに捉えることができなかった。

感じられたのは、一瞬で肉薄するキャスターの眼光と、自身へと迫る閃光。

次の瞬間には、自分の視界は赤く塗り潰される。

そして倒れる際、何か床に転がっていたのか、変に背中が痛かった。

多階層の巨大な倉庫。その一階は今や破片が舞い、轟音が響き渡る破壊の渦中にあつた。

倉庫の中央に陣取り、数種の魔弾、光線を駆使し盤面を掌握するアレクシア。

対するウイリアムは、その周囲を回る。身に迫る攻撃を躲し、駆け抜け、物を盾に凌ぐ。

思う存分に力を奮うアレクシアと、その対処だけしかできていないウイリアム。傍から見れば、一方的な展開。そして事実、それは一方的な内容であつた。

地力が違う。『得体の知れない何か』と同化しつつあるアレクシアと、獣性魔術で身を削るウイリアムとでは、能力の性質に大きな差がある。雪だるま式に怪物へと成っていくアレクシアに対し、ウイリアムはただ消耗するだけの戦い方をしているのだ。

故に、戦いが長引けば長引くほどにウイリアムは不利になる。ウイリアムとて、そこは理解していた。だからこそセイバー陣営を味方につけるなど、あの手この手を駆使してアレクシアの早期撃破を狙っていたのだ。

そして、今も……ウイリアムは考え続け、工夫を凝らし続ける。
考えること、それが彼の闘法なのだから。

「ハハッ！ どうした、どうしたウイリアム！ もう獣性魔術は使わ

ないのか!？」

そんなウイリアムを、アレクシアは無尽蔵に光弾を放ちながら煽る。

「そんなでは、この私を殺すことなんて到底できねえよおツ！」

アレクシアは哄笑すると、さらに自身の魔術を強化、足元に巨大な魔法陣を構築していく。

「……prana shift——wereicheetah」

その様子を確認するとウイリアムは詠唱、全身に燃え盛るような獣の神秘——地上最速の力を身に纏う。

そして、加速。ウイリアムは一瞬体を弛めるや否や、目にも留まらぬ速さで駆け出した。

「ふん……、な……ツ!？」

一気にトップスピードに入ったウイリアムを、アレクシアは自身の目だけでなく、腕から覗く幾多の目で追う。しかしその速度は最早、アレクシアにすら尾を引く神秘の光を残像として辿ることが精一杯なほどであった。

無論、カラクリがある。先ほどまで獣性魔術を使わなかったのは、アレクシアの目を慣れさせる為だった。それはつまり、ウイリアムの遅いスピードに慣れさせ後の加速で意表を突く為、獣の神秘の燃え上がる炎のような明るさで以ってアレクシアの目を潰す為であった。

アレクシアはそれでも、目で素早く神秘の残光を追っていく。その光は立体的に動いていた。地を駆け、包装された資材に飛び乗り、壁や柱さえを足場に鋭くアレクシアの周囲を巡って——。

——そして、自身の背後に回り込んでいる。

「……………ツ!？」

振り返る間も惜しい。アレクシアは詠唱もなく、背後に魔力防壁を構築する。

しかし、間に合わなかった。ウイリアムは炎を纏った獣の姿で上から、それも弾丸のような速度で飛び掛かり、障壁を突き破ってアレクシアの首筋に齧りつく。

その尋常でない衝撃に、長身のアレクシアさえ難なく地面に抑え込

まれる。組みついた勢いそのままに二人は地面を転がり、置かれていた資材に激突して破壊していった。

「グルウアアッ！」

ウイリアムは獣人の姿のまま、発達した両足で転がるのを踏み止め、首を大きく振り上げる。そうして彼は、啞えたアレクシアは上空へと投げ飛ばした。アレクシアの体は冗談のように回転しながら高い天井を突き破り二階へ、積まれたダンボールを下から突き上げるように飛び抜けた。

「……………」

肩口を庇い、周囲に積もったダンボールを掻き分けてアレクシアは二階の壁際へと歩き、背中を預ける。

そして次の瞬間、背を預けていた壁にウイリアムの右拳が突き刺さる。コンクリート壁には大きな亀裂が入り、アレクシアは一瞬先立って横合いに身を翻していた。

「……………」

いつの間にか『were—monkey』——ハヌマーンのような猿人となっていたウイリアムは、無言でアレクシアを追う。突き刺さった右拳でガリガリと壁を引っ掻きながら、アレクシアへと歩み寄る。そんなウイリアムを、アレクシアは肩口を庇ったまま息を切らしつつ、笑みを浮かべていた。

アレクシアは口端を上げながら、肩口に添えていた左手を離した。そしてゆっくりとその腕を突き出し、ウイリアムに手招きを試みる。

「……………」

次の瞬間、アレクシアの顔面をウイリアムの拳が歪めていた。

魔力壁が間に合わずに頬を打ち抜かれ、地面に叩き伏せられるアレクシア。その直後、それを追ってウイリアムが飛び掛かる。

しかし、そんなウイリアムの体を、何かか塞ぎ止める。気づけば、アレクシアとの間には強固な魔力防壁が張られ、ウイリアムの侵入を防いでいた。

「…………ハハッ」

防壁の向こうで、アレクシアが凶悪な笑みを浮かべる。しかし、その顔は膨大な魔力消費の為か、青白い。ならば、とウイリアムは防壁に乗ったまま、両の拳をメチャクチャに奮う。

十数秒に及ぶ、嵐のような連撃。唸るような轟音と飛び散る火花の中で、防壁はやがてヒビが入り、形を崩していく。

「そうだ、ウイリアム・シン……ッ！」

圧倒的な暴力を身に受けながら、アレクシアは狂乱したように叫んだ。

「もつと、もつと私を追い詰めてみせろッ！ この私を、私が私である部分を、その爪で完全に破壊しろッ！」

世迷い言を。と、ウイリアムはそう心の中で吐き捨てた。ならばお望み通り、このままバラバラに引き裂いてやる。

ウイリアムの乱撃は、ついに防壁を完全に破壊するに至った。トドメとばかりに、組んだ手をハンマーのように振り下ろし、防壁を叩き割る。

そうして足場となっていたものを崩すと、ウイリアムはそのままアレクシアへと落下。足が地面に降り立つよりも先にアレクシアの顔を驚掴みにして地面に押さえつけ、ウイリアムはそのまま乱撃の中で彼女の塵殺を狙う。

その時だった。

破碎し飛び散る魔力さえ止まって見える、圧縮された時の中。ウイリアムは確かに見た。

アレクシアを驚掴みにした右手。その指の隙間から覗く、アレクシアの眼球——異形の腕と同様の赤目となっている彼女の目が異様に肥大化し、その瞳は十字に裂けたような形をしていた。

「なん、だ……これは……ッ!？」

それはあまりにも、悍ましく。

そしてあまりにも、醜悪だった。

思わず、掴んでいた手を緩めてしまうほどに。

全身に駆け巡る恐怖と動揺に、ウイリアムは息を呑む。思わず右手の力が緩められた途端、下からアレクシアの異形の右腕が伸び、ウイ

リアムの顔面を逆に掴んだ。

「……どうした？ 守りは破れたぞ？ 何を呆けている？」

アレクシアはそう言うと、そのまま馬乗りになっていたウイリアムを力任せに押し返し、逆に右腕一本で制圧しながら立ち上がる。

「せっかく、お前のお陰で目覚めたんだ。もう少し……ふふっ、もっと遊ばせろよ」

アレクシアは常軌を逸した、醜悪な赤い眼をギョロつかせながらウイリアムに語りかける。ウイリアムは足掻こうともせず、ただその異様な眼光に射竦められていた。

「それとも……こいらで、華々しく吹っ飛んでみるか？ ウイリアム・シンツ!」

アレクシアがそう言うと、ウイリアムを掴んでいる右手の内側から光が灯り、それはやがて凶悪な閃光へと変わっていった。

マズい。と、ウイリアムは我に返った。ウイリアムは即座に拳を握ると、自身の頭を捕らえているアレクシアの右腕……正確には、その手首を打ち上げる。

そうして、ウイリアムはアレクシアの魔の手から脱出する。そして地に足が着いた途端、ウイリアムはその猿人としての力をフル稼働、アレクシアの顎部、心臓部、肝臓部、鳩尾と、一瞬にして急所四つに打撃を入れた。

しかし、アレクシアはウイリアムの攻撃などお構いなしに異形の右腕を乱暴に振りつけ、ウイリアムに打ちつける。

彼の体はそれだけで両足を地面から引き剥がされ、容易く宙へと吹き飛ばぶ。バットに強打されたボールのように放物線さえ描かず、ウイリアムは荷物棚へと背中から突っ込んだ。

そして。

「死ね、魔術師」

そこに、閃光を放つまでに溜め込まれた魔弾を撃ち込まれた。

瞬間、荷物棚はその莫大な魔力量によって光の渦を生み、その余波によって周囲の資材までも引き裂いていく。

その圧倒的な閃光から影として見える威力に、アレクシアは犬歯を

剥き出しにして笑う。

しかしその笑みは、破壊の渦と化していた光が爆炎によって掻き消えたと同時に、より凶悪なものに変わった。

「Prana shift——were eagle」

その詠唱と共に、アレクシアの魔弾の破壊さえ飲み込む爆炎の中、ウイリアムの影がゆらりと浮き上がる。爆炎はその影を中心に、左右へと走り天井を舐めるように燃え立つ。その様子は、まるでウイリアムが炎の翼を広げているようであった。

「……ク、ハハハッ」

その光景にアレクシアは期待に込めてくれたとばかりに歓喜し、両腕を広げる。

そして、次の瞬間。ウイリアムが弾丸のように飛び出し、アレクシアに迫った。

その姿はまさに、炎を纏って輝く鷲——インド神話にて語られるガルーダそのものであった。

ウイリアムは燃え盛る炎を伴って、灼光する体ごとアレクシアに突撃する。十数メートルしかない距離での、亜音速による突撃はアレクシアの反応を許さず、彼女の体を貫通した。

「……………ッ」

一瞬の衝撃の後、ウイリアムはアレクシアの体の後方へと飛び抜けた。アレクシアは頬を釣り上げたまま、ゆっくりと体をくの字に折り曲げる。

アレクシアの腹部は、横腹から中心に至る部分まで抉られ空洞ができていた。そして抉り取られた周囲の肉からは焦げ臭い煙が上がり、衣服からはチラチラと炎が燃え移っていた。

ウイリアムは両膝に手を添え、息を切らしながらそんな様子を見つめていた。

周囲の魔力を熱に変え、灼光さえ放つほどの熱量で全てを焼き尽くす。ウイリアムが使える獣性魔術の中で、最高の威力を誇る魔術だった。そして、あれなら、腹部に収納されている臓器のほぼ全ては破壊しただろう。

今のアレクシア・ブロッケンは、異形と人間の境界点に立つ存在。もし彼女に人間的な生命活動が必要なのであれば、これで殺せたはずだ。

しかし、彼女は未だ死んではおらず。くの字に折り下へと垂らした赤髪であつても、その笑みを隠し切れずにいた。

「令呪を以つて顕現せよ。その身を以つて牢記せよ——」

そして、アレクシアは口遊む。

かつて、ライダーを瀕死に追いやったあの詠唱を。

彼女自身と令呪によつて、“在らざるべき存在”をこの世界に召喚させる禁断の言葉を。

「——これに至るは七十二の魔神なり」

もちろんウイリアムとて、ただ黙つてそれを見守る義務はない。

詠唱によつて人智を超えた域の魔力が溢れ、これまで以上に醜く膨れ上がつていく右腕。その様子から、ただ事ではない何かが起ころうとしていると悟り、アレクシアへと迫り、胸部に左の貫手を突き込む。

「八の公爵——焼却式」

しかし、それでも彼女は止まらなかった。

眼前にいるアレクシアの肥大化した赤目が輝く。

次の瞬間、ウイリアムの五感は地面から突き立った光柱によつて焼かれ、消し飛ばされた。

輝く光柱は天井と床、両方を突き破つて周囲の荷物や壁が粉碎される。

倉庫二階の床、その全てが抜けて一階へと荷物や瓦礫が降り注ぐ。その中には、糸の切れた操り人形のように四肢を振り乱し落下するウイリアムの姿もあつた。

地面に強かに体を叩きつけ、一度のバウンドを経てウイリアムは倒れる。彼はうつ伏せの状態のままピクリとも動かず、その周囲には瓦礫や壊れた貨物が床へと落下し破碎していった。

「……………」

倉庫全体を震わす崩壊の中、血溜まりを作っていたウイリアムだったが、意識を取り戻すや否や腕を床に滑らせて自身の方へと引き寄

せ、地面を指先にて掴む。そうしてギリギリと体を震わせながら、上半身を地面から引き剥がした。

「……グツ、ゴホ……ッ」

苦痛に身を震わせながら、ウイリアムは気怠そうに立ち上がる。

彼は上空を見上げ、見つける。

アレクシア・ブロッケンはまだ上空に留まっていた。宙に浮いた体はゆっくり、ゆっくりと一階へと降りており、その異形の右腕は下降に合わせてユラユラと蠢いている……まるで悪魔の降臨、伝説伝承をそのまま形にした光景であった。

「……生ける、伝説ってところですかね」

そんな風に嘯きながら、ウイリアムはアレクシアから自身に視線を移し、ズタズタになった身体の状態を確かめる。

……全身に浅い裂傷、及び打撲、複数の神経の麻痺。左肩、上腕骨近位端の完全骨折、左肩甲骨不完全骨折。左腕、上腕部から指先かけ数箇所剥離骨折と完全骨折、肘関節捻挫。腹部、右第八肋骨不完全骨折及び深い裂傷。頭部、右目に結膜下出血、獣性魔術の連続使用による負担も確認できる。

獣性魔術を使っていたお陰で生き残ったものの、ほとんど瀕死と言っている。しかも魔術で受けたが為に、魔術回路の六割近くが損傷し使い物にならなくなってしまっている。

「……」

しかし、充分だ。代償は余りにも大きい、今の一撃で確証は得た。ウイリアムは口内に溜まっていた血を吐き捨て、右拳を握り締め、両脚の関節が曲がることを確認する。まだ……これなら戦える。

魔術回路が四割も残っていれば、[〃]とっておき[〃]には充分。

次いで右腕と両脚が動くなら、まだアレクシアの命に手が届く。

「……さあ、アレクシア・ブロッケン」

決着をつけましょう。

と、ウイリアムは不敵に笑い、アレクシアを睨んだ。

その姿に、アレクシアは哄笑する。

類稀なる二人の殺し合い。
その決着まで、残り一〇分。

サーヴァントデータ集 『第27話時点』

クラス：セイバー

【真名】：エル・シッド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）

【アライメント】：秩序・中庸

【性別】：男性

【身長・体重】：182cm・90kg

【ステータス】

筋力：B+ 耐久：B 敏捷：A 魔力：D 幸運：C 宝具：A

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【保有スキル】

・カリスマ：C+

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

レコンキスタの英雄でされながらも、異教徒の者とも親交を持つカリスマ性を生前に示した。

・軍略：C+

多人数を動員した戦場における戦術的直感能力。自らの対軍宝具行使や、逆に相手の対軍宝具への対処に有利な補正がつく。

・カンペアドール：A-

戦闘時に発生した判定の多くにボーナスを加える。反面、非戦闘時の行動、とりわけ他陣営との交渉などにペナルティがかかる。

数多の武勲を立て、生前から叙事詩を作られるほどの英雄だったエル・シドの固有スキル。ただし、その輝かしい経歴故に付き纏った確執などからペナルティが付き纏う。

・神々の寵愛：E

神々の寵愛により、幸運を除きランダムにステータスが上昇する。

・千里眼：C+

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

神々の寵愛との重ね合いによって暗闇での狙撃も可能とする。

・反骨の相：C

一つの場所に留まらず、また一つの主君を抱かぬ気性。自らは王の器ではなく、自らの王を見つける事ができない流浪の星。同ランクまでのカリスマを無効化する。

【宝具】

・尊射日（リップオフ・フオール・サン）

ランク：C 種別：対軍宝具

レンジ：1～99 最大捕捉：9人

大英雄后羿の射日伝説を模した宝具。

后羿が帝俊より賜った赤い弓と白い矢を蓬蒙が奪い取り、師の伝説を基に九本の矢を射る。

射った矢は流星のような速度で飛び、掠めるだけでも突風により周囲を破壊する驚異的な威力を有する。しかし天賦の才で技を模しているだけに過ぎず、伝説の再現には程遠い。

・逢蒙殺羿（リナウンス・ジ・アーチャー）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：1～50 最大捕捉：1人

大英雄后羿を桃の木の棒で暗殺した際の逸話から具現化した宝具。

后羿が討った多くの魍魎や神獣らの念をもって木の棒を変質させ、大木の枝や根を思わせる高密度の一撃を放つ。一撃は誰かに裏切られた経験を持つ者に対し、致命的な効果をもたらす。

*

クラス：ランサー

【真名】：■■■

【アライメント】：■■■■

【性別】：女性

【身長・体重】：164cm・58kg

【ステータス】

筋力：D 耐久：D 敏捷：B 魔力：E 幸運：A 宝具：C

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

【保有スキル】

・心眼（真）：C+

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

ランサーの場合、特に誰かを護衛する際にプラス判定が加わり、自身の代わりに護衛対象の防御力を上昇させる。

・仕切り直し：B

戦闘から離脱、あるいは状況をリセットする能力。機を捉え、あるいは作り出す。

また、不利になった戦闘を初期状態へと戻し、技の条件を初期値に戻す。同時にバッドステータスの幾つかを強制的に解除する。

【宝具】

・■■■

ランク：■■■ 種別：■■■

レンジ：■■■ 最大捕捉：■■■

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

・■■■

ランク：C+ 種別：対軍宝具

レンジ：― 最大捕捉：100人

■■■■での逸話を具現化させた常時発動型の宝具。

周囲の物体を念動力によって総動させ、防衛に用いる。飛来する物体に魔力的能力はなく、あくまで防衛の為の宝具である。また宝具を発動している際は、片手で印を結ぶ必要がある。

*

クラス：ライダー

【真名】：イオラオス

【アライメント】：中立・善

【性別】：男性

【身長・体重】：180cm・77kg

【ステータス】

筋力：C 耐久：D 敏捷：B 魔力：D 幸運：B 宝具：A

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：―

騎乗の才能。宝具『大獅子らの運び手』の代償に失われている。

【保有スキル】

・英雄の介添：D

英雄を勝利に導く性質がスキルとなったもの。

魔力を同調させ、対象が行うあらゆる判定にプラス補正を与える。

・勇猛：B

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

・友誼の証明：C

敵対サーヴァントが精神汚染スキルを保有していない場合、相手の戦意をある程度抑制し、話し合いに持ち込むことができる。

イオラオスは生前、自身達の正当性をマラトンにて主張し同盟を勝ち取った。

クラス：キャスター

【真名】：永倉新八

【アライメント】：秩序・悪

【性別】：男性

【身長・体重】 174cm・60kg

【ステータス】

筋力：E 耐久：E 敏捷：C+ 魔力：EX 幸運：A 宝具：

B

【クラス別スキル】

・陣地作成：―

本来魔術師ではない為、魔術師の工房は作成できない。

・道具作成：―

本来魔術師ではなく、道具作成の逸話も持たない為このスキルを持ち合わせていない。

【保有スキル】

・心眼(真)：B

修行・鍛錬によつて培つた洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

・勇猛：D

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

永倉新八としての本来のランクは更に上であるが、キャスタークラスとしてランクダウンしている。

・戦闘続行：E+

戦闘を続行する為の能力。決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負つてなお戦闘可能。「往生際の悪さ」あるいは「生還能力」と表現される。

勇猛と同様、現界したクラスからランクダウンしている。

・気配遮断：―

保有スキル 『気配操作』を得た代償によって失われている。

【保有スキル】

・無辜の怪物：EX

生前の行いからのイメージによって、後に過去や在り方を捻じ曲げられ能力・姿が変貌してしまった怪物。本人の意思に関係なく、風評によって真相を捻じ曲げられたものの深度を指す。このスキルを外すことは出来ない。

カルキノスの場合、その有名とは裏腹に結果が伴わなかったこと―
ろくに敵とも認識されず、ただの一撃で殺害されたイメージが発現している。

自身の真名を看破された時点で、その相手に対し常にステータスのマイナス補正がかかる。

特に筋力は自身の放つあらゆる攻撃に毎に判定を行い、失敗した場合ダメージ判定において100%のダメージ削減がかけられてしまう。

耐久に至っては、いかなる攻撃に対してもダメージとは別個に即死判定が働く。

・神性：E

その体に神霊適性を持つかどうか、神性属性があるかないかの判定。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。より肉体的な忍耐力も強くなる。

アサシンは生粋の魔獣であるが、死後その勇気を称えられ、最高位の女神によって天に召上げられたことで低ランクながら発現した。

・気配操作：A

アサシンの唯一と言ってもよい名譽的なエピソード――かのギリシャ神話の大英雄ヘラクレスに対し、奇襲攻撃を与えてみせた逸話によるユニークスキル。

アサシンの持つ気配遮断の効果を変質させ、気配を消すだけでなくアサシンの存在しない場所にその気配を投影する。敵対者は例えアサシンを真正面に捉えていたとしても、背後や上空と言った死角に存

在する感覚を打ち払えない。

【宝具】

天空の星影（イストリア・カルキノス）

ランク：C 種別：対人宝具

レンジ：― 最大捕捉：―

カルキノスの死後、星座に召上げられたことで発現した宝具。自身と同一視されるかに座を介して発動する。

カルキノスの消滅後もマスターまたはその同盟者が存在する限り、その脱落が把握されない。この為マスターは令呪をなく奪われず、アサシン陣営として聖杯に認定され続ける。

*

クラス：バーサーカー

【真名】：エギル・スカラグリームソン

【アライメント】：混沌・中庸

【性別】：男

【身長・体重】：195cm・82kg

【ステータス】

筋力：B 耐久：A 敏捷：C 魔力：C 幸運：E 宝具：B

【クラス別スキル】

・狂化：E―A

保有スキル『ベルセルク』により不安定な状態にある。

【保有スキル】

・ベルセルク：EX

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化、格闘ダメージを向上させる勇猛スキルと、狂化スキルを複合させたスキル。

血筋により得たスキルである為、エギル自身もスキルを掌握できておらず、狂化スキルが変化する原因となっている。

・ルーン魔術：C

北欧の魔術刻印ルーンの所持。ルーンを使い分けることにより、協

力かつ多様な効果を使いこなす。

・黄金律：B

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

エギルは死の直前まで隠し財産を親族に話さず、死の間際にその存在を告白して一時の騒乱を楽しんだ。

【宝具】

・歯と舌（スカルド・サガ）

ランク：B 種別：対人（自身）宝具

レンジ：0～10 最大捕捉：100人

生前のスカルドとしての才能が昇華された宝具。歯の表面にそれぞれ刻まれた先天性のルーン文字を用いた魔術。

文字を刻むことで真価を得るルーン魔術を、詠唱することで発動させることができる。口に出す音で即時発動するルーン魔術である為、事前に用意することが不可能な上に複数のルーンを重ねることが困難になっている。

またこの宝具は、理性が奪われることによつて使用が困難になり、狂化Cランク以上になった場合は一切使用できなくなる。

・狂狼の魔剣（アイツボウク・クヴェルドウールヴ）

ランク：B＋ 種別：対人（自身）宝具

レンジ：― 最大捕捉：―

『宵の狼』と呼ばれた狂戦士の血統そのものを具現化させる宝具。自身の流血を自身の武器を固着させ、自身と一体化した強力な異貌の武器を作り出す。

宝具発動には狂化Cクラス以上の理性の喪失が必要であり、発動後の判定に失敗すると、狂化のランクが際限なく上がっていく。また宝具解除には魔力切れか周囲の破壊対象が一切なくなる必要がある。

バーサーカーの場合は先祖から受け継いだ剣『ドラグヴァンディル』を模した武器を右腕に固定させる。

第二十八話 『旅路の交差点』

第二十八話 『旅路の交差点』

イギリス、ロンドン。

降霊科学部長代理——ロッコ・ベルフェバンの部屋にて、ロード・エルメロイ二世はその強面の眉間に深い皺を寄せ、部屋主の前に直立していた。

「……では、ウイリアム・シンの魔術刻印は、全て娘に？」

「うむ、調べがついた……」

そう言っただけなのは、部屋の主であるロッコだ。彼は机に両肘を乗せ、手を組みながら皮肉そうに笑みを浮かべた。

「一部は自分に残したという、彼が私に言った言葉はつまり……時間を稼ぐ為のブラフだった訳だな。実際は三ヶ月前に、全ての魔術刻印を娘へと移譲している」

「しかし……そうになると、彼は……」

ふむ……。と、エルメロイ二世の言葉に、ロッコは肩をすくめる。

日坂亜種聖杯戦争が始まる三ヶ月前。ウイリアム・シンは恩師であるロッコ・ベルフェバンの部屋へと訪れ、最後の挨拶を述べた。

その際に彼は、噂通り娘に魔術刻印を移したが、一部は自分に残したこと……そして、もし聖杯戦争に横槍を入れるようだったら、先祖が残した能力で以って時計塔を相手取るという忠告を残したのだ。

しかし、その能力——かつて、彼の先祖が当時最強であったイギリスを相手に戦った獣性魔術は、全て娘へと継承されているという。

つまり、彼は本当ならば獣性魔術を使えない状態にあるはずなのだ。

だが確かな事実として、彼が獣性魔術を使っただけで亜種聖杯戦争に参戦していることは、現地へと派遣された者の情報から確認されている。

「……こうなれば、彼が残したその論文が真実であると、認めざるを得ないか」

「……………」

「……君はどう思う？　メリッサ君」

メリッサ。そう呼ばれたのは、二人を他所に部屋の中央にあるソファーに腰掛け、目の前のテーブルに広げられた論文に視線を落とし、た女性だ。

「こ、これ……大発明ですよ」

メリッサ・ヴァン・ダイク——汚れた白衣を纏った、筋金入りの技術屋といった見た目をした彼女は、二人と同様「時計塔」の魔術師である。彼女は手入れのされていない長い黒髪の隙間から覗く顔をニヤけさせ、痩せた脚を神経質に痙攣させながら口を開いた。

「魔術刻印の複製はこれまで不可能とされていた領域です。彼は再現性はないと書いてはいますが、この成果は失われた刻印の再現の可能性す、らっ……し、示している」

彼女は早口にそう捲し立て、最後に至っては息も絶え絶えにそう結論づけた。エルメロイ二世は、そんな彼女の感極まった顔に辟易し、溜息と共に額に手を当てる。

ウィリアム・シンがロツコ宛に送った論文。それは、彼が日坂亜種聖杯戦争で行っている獣性魔術の正体について記されていた。

「体内を範囲とした固有結界で魔術刻印を複写、後は実物と同様に魔力を通せば偽りの魔術刻印を扱える……言っていることは至極単純ですが、その為には魔術刻印に刻まれた全ての構成を理解し完璧に復元する必要がある……ひひっ、そんなこと、今の今まで誰もやろうとはしなかった」

メリッサは論文を爪で搔きながら、ブツブツと呟き意識を内側へのめり込ませていく。

「……………」

●●●●と、エルメロイ二世は心の中で毒づいた。

メリッサの様子に、会話は不可能と判断した彼はロツコに向き直る。

「ともあれ、魔術刻印が移植された以上、封印指定は娘の方へと移りますが……彼女は今どこに？」

「さてな……クリスマスに父親から聖杯戦争に参加すると言うメツ

セージを受け取ったようで、それから三日もしないうちにロンドンを発った。もう一ヶ月も前に、失踪しておるよ」

今頃は陸路で、日本へと向かっているのじゃあないかね。と、ロツコは呆気からんと告げた。

「……まあ、彼女にあの魔術が継承されている以上、追跡さえも慎重にならざるを得ないよ。ロード・エルメロイ」

この言い様だ。エルメロイ二世はロツコを前にして尚も隠そうともせず、顔をしかめてみせた。この口振りなら、彼は事前に娘の失踪を察知していたのだろう。察知していて、その上で逃したのだ。

「何度も言っているが、二世と付けてくれ……貴方の身内鼻根に付き合わされる、こちらの身にもなってもらいたい。私は……」

「娘のことなど、この際どうでも良いじゃあないですかっ！」

と、エルメロイ二世の言葉を遮るように叫んだのは、ソファアから立ち上がったメリツサだ。

「今さら獣性魔術など、どうでも良い！ 今すべきは、日本にいるウイリアム・シンの確保です！ それに獣性魔術ならロード・エルメロイ！ 貴方の教室にもいたでしょう!？」

「……………」

仮にも学部長であるエルメロイ二世に対し、失礼千万な台詞を吐くメリツサ。しかし、その言葉を訂正することさえせずに彼女は目をギラつかせてエルメロイ二世を押し退け、ロツコへと詰め寄る。

「今すぐに日本へ執行者を派遣すべきです……ッ！ ウイリアム・シンの才能は！ 知識は！ 聖杯戦争の協定を犯すだけの価値は充分にあります！ 何なら妻や娘を捕まえて、人質にしても良い！」

昼休み時の学部。その廊下の端にまで響く、彼女の狂った叫び声。ロツコに対し、聖堂教会相手に戦争を仕掛けようと提言するメリツサにエルメロイ二世とロツコは顔を見合わせ、溜息をついた。

ロツコは結局、評議を重ねるべき事案として、この問題の結論を避けた。

その玉虫色の回答に、肩を怒らせて退室したメリツサ。彼女が勢い良くドアを閉めるや否や、エルメロイ二世はロツコに言う。

「……彼女、我々を無視して行動に移りかねませんか？」

「なに、『貴族主義派』だけでは手に余る事案なので、『中立派』にも情報共有したに過ぎんよ」

クツクツと笑うロッコ。その色眼鏡の向こうの両眼は、企み事によつて細められていた。その様子に、エルメロイ二世は溜息を隠そうともしない。

メリツサ・ヴァン・ダイク、またの名を『考古学科のバンシー』。

研究に傾倒し崩壊した彼女の倫理感は、対象が希少と知るや封印指定への査定を上層に提言する悪癖がある。その叫びは大きく、学生や教員にまで叫び女と揶揄されるほどだ。

「情報戦においては声のデカい者ほど、邪魔なものはない。彼女が騒げば騒ぐだけ、ウイリアム・シンに注目が行き、その分、彼の娘への意識が削がれる訳ですな」

エルメロイ二世の言葉に、ロッコは不敵に笑みを浮かべて頷く。

「……なら」

次の言葉を言うべきか悩んでいたが、その顔に確信を得て、ついにエルメロイ二世は口にした。

「……これはご老人、弟子である彼との謀略ですか？」

「……いいや」

ロッコは首を横に振りながら立ち上がると、エルメロイ二世に背を向け、閉ざされていたカーテンを開け放った。

途端、サアつと入り込んでくる日光にエルメロイ二世は思わず目を細める。そんな中で、ロッコはポツリと呟いた。

「美しいものは、残すべきだ……私はただ、彼が残そうと努めたものに対し敬意を払ったに過ぎんよ」

「……そうですか」

「そうだと」

……向こうは今、夜中か。そう、ぽつりと呟くロッコ。

エルメロイ二世は、そんなロッコからテーブルに置かれた論文に視線を落とす。

固有結界。心象風景を現実世界へと具現化するそれはエルメロイ

二世にとつても思い出深い、魔術の最奥とも言うべき秘術だ。

しかし当然、そんな超常の産物は長続きしない。世界からすれば異物とも言える具現化を持続するには魔力が、それこそ英雄を軍勢の如く率い魔力を出し合わせるぐらいの魔力消費が必要となる。

加えて、ウイリアムには獣性魔術による心身の負担もある。

狼の神秘を取り込んだあのスヴェイン・グラシユエートの家系として、スヴェインという天才が現れるまでに多くの廃人を生んだという。あのウイリアム・シンとて、理性を摩耗するリスクは常に背負っているはずだ。

一つだけでも寿命を削る魔術。彼はその二つを合わせ、聖杯戦争に参加しているのだ。非凡極まる命を燃やすことでようやく纏える、唯一無二の神秘……しかし、そんなものを戦いの度に使うのであれば、彼の命は数夜のうちに燃え尽きる。きつと、聖杯戦争が終わる頃には彼の命は灰となっているだろう。

それでも、願わくは……。と、エルメロイ二世は一人、目を閉じる。願わくは……彼の命が燃え尽きるよりも早く、彼の夢に、その手が届くことを。

それがきつと、彼の師である老人の願いでもある。

決着をつけましょう。

崩壊しつつある倉庫の中、満身創痍のウイリアムはそう言って不敵に笑う。

「……いや」

宙からゆつくりと地面に降りるアレクシアは、そんなウイリアムを見て、目を細めた。そして、ゆつくりと異形の右腕を煙のようにくゆらせ、彼へと歩み寄る。

近づくアレクシアに、壊れた左腕を庇ったまま立ち尽くすウイリアム。二人の距離はあつという間に狭まり、ついには互いの手が届く距離で睨み合う。

「もう、終わってるや」

アレクシアはそう告げると、右腕を撓らせ、裏拳気味にウイリアム

へと振りつける。

そうして、絶対的な破壊力を秘めた異形の腕がウイリアムの頭部へと迫り、数瞬の後にその頭を千切り取ろうとしていた。

その、瞬間であった。

死に体であったウイリアムの体が駆動する。

折れたはず左腕が持ち上がり、腋へと引き寄せられる。同時、砕けていた手は握られ瞬時に拳という名の武器へと変わる。

右足を前へ、ウイリアムは彼女の懐へと踏み込み、咆哮と共に腰を捻る。

横薙ぎの一撃に対し、一直線に対象を打ち抜かんと伸びるウイリアムの左ストレートは、アレクシアの速度より遙かに勝った。

そして、その威力もまた、死んではない。

不意打ちにより深々と突き刺さった拳に、アレクシアの顔が歪む。ウイリアムが勢い良くその拳を引き抜いた時、彼女の体勢は大きく後方へと崩れる。

「……………」

アレクシアは呼吸を整えながら、怪訝な顔でウイリアムを睨む。

「…………治療魔術じゃ、間に合わなかった」

玉のような汗で顔に付いた血を流しながら、ウイリアムは更に破壊された左手を見せる。

「しかし、ただ動かすだけなら死霊術で事足りる」

パキパキと、痛々しい音と共にウイリアムの脱臼していた左手の指が正位置に戻っていく。

「お前……………」

「それじゃ…………まずは、輸血からいきましようか」

アレクシアの反応を意に介さず、ウイリアムは右手を心臓部に添える。

その途端、ドクンという大きな脈動を響かせ、彼の周囲に流れ落ちていった血液が、まるで意思を持ったように水流のように集まり、彼の体内へと注ぎ込まれていく。

ウイリアムに血が流れ込んでくるうちに、彼の青ざめた顔は紅潮し

活力を得ていく。

無論、こんなものは治療行為とは言わない。自己輸血は医学的に可能ではあるが、地面に流れた血を掬ったところで、そこにあるのは汚れた血だ。体内に戻せば感染症や拒絶反応のリスクを負うことになる。

しかし、そんなことは問題にならない。ウイリアムにとって重要なのは今、この瞬間。この瞬間だけ、心肺機能が赤血球の増量によって回復すれば充分であった。

「……それも、死霊術か」

「本来、これは兵器に変えた死体に組み込む術式ですがね……」

言ったでしょう。と、ウイリアムは言う。

「決着をつける、これは私と貴方の総力戦です。だから全部使う。私はこの腕、血液、命……使えるものは全て使って、貴方から勝利を奪う」

「……最高だ」

ウイリアムの宣言に、アレクシアはポツリと呟いた。

「さっきの一撃で壊れたと思っていたけど……まだ、遊ばせてくれるのね」

「そんなの……当然でしょうっ！」

そう叫び、ウイリアムは地面を蹴ってアレクシアへと飛び掛かる。踏みつけるような飛び蹴り。間髪入れずウイリアムは身を反らし、アレクシアの顔面を踏んでいる自分の足を蹴り上げるようにして、もう一方の脚を振り上げ身を翻す。

軽業のような身のこなし。当然、二つの蹴りの威力自体はそれほどものでもなかったが、それはウイリアムの両方の靴が打ち合わさった瞬間に生じた爆発を度外視した場合での評価だ。

黒色火薬の科学反応を参考にし、靴を爆薬へと変えた錬金術である。

ウイリアムは爆破の反動で宙返りをし、裸足となって地面に降り立つ。

しかし、次の瞬間。爆煙から飛び出たアレクシアによって倉庫の壁

際まで突き飛ばされる。

防御は成功するも勢いは殺し切れずに地面を転がり、やつとの思いで勢いを殺し切った直後にはウイリアムは立ち上がり、口内へと溢れ出た血を吐き捨てる。そして、ダメージを無視して再度アレクシアへと走る。

それに応えてアレクシアは異形の右腕を天へと掲げ、腕から覗く幾つもの眼から次々に光線を放った。

倉庫の内壁を焦がす、幾重にも飛び交い重ねられた光線。それをウイリアムは掻い潜り、飛び越え、アレクシアへと跳ぶ。

身を縮めて宙から迫るウイリアム。アレクシアはそれに対し、左拳を握り迎え撃とうと身構える。

相打ちでも構わない。単純な火力なら、自分が上。

そう信じて止まないアレクシア。しかし、ウイリアムとてそれはとつくに理解していた。

故に、魔術師は小細工を弄する。

「雷鳴よ……」

ウイリアムはそう口遊みながら、腰に巻いていた大きめの革製ベルトに右手を添え、刀を抜くように右腕を振る。

ウイリアムのベルトには細工が……巻かれた革を鞘とするように、その内側に柔らかな刃物が隠されていた。

それは薄く鍛え上げることで、鞭のような柔軟性を帯びた剣。雷鳴の名を持つ、古代インドより伝わる暗器——ウルミである。

しかし、ウイリアムの魔術礼装は比喻でなく、本当に電流が走っていた。

アレクシアへと伸び、そして触れるなりスパークするウイリアムの剣。

アレクシアはその電撃に身を強張らせ、そのまま尻もちをついた。そして、ウイリアムはその手前で着地。目を見開く。

電撃……否、感電か。効果が見受けられた。

「ッ!? prana shift——」

細かく考察している暇はない。ウイリアムは引き抜いたばかりの

剣を脇へと放り捨て、詠唱する。

それは持ち得る中での、最大級の電撃。先祖より受け継ぎ、己の心象風景にまで刻み込んだ魔術を呼び覚ます。

「—w e r e — e l e p h a n t」

瞬間、ウイリアムを中心に雷光が走る。

その極太の放電はまるで大きな脚、あるいは象の鼻のようにアレクシアの胸を打ち、後方へと突き飛ばす。アレクシアは感電により硬直、そのまま壁に叩きつけられピンボールのように宙へと弾き飛ばされた。

「クソ……ッ!」

アレクシアは痺れた体で毒づいた。

次いで、気づく。ウイリアムが発生させた雷光は周囲へと飛び移り火花を散らせているが、彼本人は既に地上にない。

そして、宙を舞うアレクシアの背後を突こうと高速で移動し壁を駆け抜ける、燃え盛る豹の姿を異形の眼で捉えた。

「……………ッ」

アレクシアも、既にあの獣性魔術の負荷がウイリアムを蝕んでいることには気づいている。そんなものを、あれだけのダメージを負ったウイリアムが連発し、アレクシアを追い詰めようとしている。

つまり、ここがウイリアムにとっての勝負所。

一気に勝負を仕掛け、決着をつけようとしているのだ。

だが、見つけた。この異形の力が、その姿を捉えた。

アレクシアは痺れた唇を釣り上げ、叫ぶ。

「お前の負けだッ! 魔術師ッ!」

アレクシアは身を翻し、左腕に奇異な光を宿しながら振り返る。

そして、アレクシアは左の貫手で以って、眼前に迫っていたその燃え滾る豹の顔面を、一息に貫いた。

しかし、手応えがない。

その豹の姿……いや像は実体がなく、するりとアレクシアの腕を、体をすり抜ける。

「……………ッ!?!」

ただの幻影ではない……？

「眼」は、確かにコレに獣性魔術の神秘を……。

ならば、これは……？

いや、それよりも本人は……？

一瞬にして脳裏に浮かぶ、疑問の数々。

それは電撃に痺れたアレクシアの体を、更に強く拘束していく。

そして、アレクシアの混乱、これこそがウイリアムの狙い。

獣性魔術による神秘を纏うのではなく、離れた地点に投写する。

これこそがウイリアムの「とっておき」であった。

アレクシアの真下から、真上へと飛び抜けるウイリアム。

二人の姿が交差し、そして分かたれる瞬間。ウイリアムは灼光する右脚で以って、アレクシアの伸びた左腕をまるで温かいバターのように切り飛ばした。

「……僕の勝ちです。魔術使い……ッ！」

ウイリアムがそう告げた直後、腕を切り飛ばされたアレクシアは力なく地面へと落下、受け身も取らずに床に叩きつけられた。

「……………カッ!? なっ……………ハ……………!?!」

一方、街外れの商店街にて。

ミアは……血に濡れた視界の不快感を、横隔膜に押し上げられた肺の苦しさを、毒により骨から火が噴いているかのような激痛を。

それら全てを身に感じ、同時に自分がまだ生きていることを理解した。

「クソッ………なんで……ッ?!」

なんで、生きている。

その疑問を口にしながら、ミアは視界の上からカーテンのように覆っていく血を手で拭う。しかし、額を割かれているようで、何度拭いても血が溢れて視界は赤く染め上げられていく。

悪態をつきながらミアは片手で額を押さえ、もう一方の手で視界を確保する。そうしていると、ようやく赤いカーテンの向こうに見えてくる。自身の額を切り割った、キャスターの姿を。

「てめえ……キヤスターッ！」

「幕だ、ミア・ブロッケン」

キヤスターは刀に付いた血を払い落とし、ミアを見下ろす。

「死を確信した体は、しばらくは動かん。それに視界も奪い、立つこともままならん……もう、決着はついた」

「ああ？　ふぎけんなつ、殺して終わりだろうが！　こんな決着……クソツ、納得できるか！」

ミアはそう啖呵を切り、四肢に力を込めて仰向けに倒れた体を起こそうとする。

しかし、すぐに手足は痙攣し、地で滑って体は地面に転がってしまふ。

「おい！　……もう良い、充分だっ！」

立ち上がろうと必死に足掻いていたミアだが、背後でそんな声が響くや否や、ミアの肩は背後から抱かれ固定される。

声で分かる、一ツ目だ。彼がミアを羽交い締めにし、これ以上キヤスターに向かおうとするのを防ごうとしているのだ。ミアは暴れてそれを払おうとするが、今のミアにはそれも叶わない。

そして、ミアとキヤスターの間に、誰かが割って入る。

大きな背と、隻腕……ライダーのマスター——佐藤真波だ。

佐藤はミアを庇うように腕を広げ、キヤスターの前に立つ。

「……ライダーの、マスターかね？」

「貴方が言ったことだ。もう、決着はついている……そうでしょう？」

「ふむ……目的は最初から、君の回収だよ」

そう応えてキヤスターは刀を鞘に納める。その様子に佐藤は頷き、キヤスターへと歩み寄る。

「グッ……キヤスターアアアアアアアッ!!」

その様子に激昂したのは、他ならないミアだ。

その血を吐きながらの咆哮に思わず佐藤も振り返るが、キヤスターはそんな佐藤の脇を抜け、ミアと向き直る。

「……残念ながら、今のお前にはその青年を跳ね除けるだけの力さえ残っていない」

だが、最後の決死の攻撃は見事だった。と、キャスターはミアに言った。

「もうこの戦場で相見えることはないだろうが……また、力を付ける
と良い。お前がもし、世界を脅かすだけの力を備えれば……英霊はま
た、お前の前に現れるよ」

だから、そう泣くな。

そう、キャスターは子供に慰めるように、優しくに告げた。

「……………ッ！」

その言葉にミアは戦慄き、その言葉を最後にキャスターは踵を返す。

完膚なき敗北と、別れの言葉。そして最後の口上。

その全てを受け、ミアは顔をクシヤクシヤにし――。

「……………くっおおおおおあああああああああああああつ!!」

――言葉にならない、叫びを上げた。

身を仰け反らせて叫んだその声は誰かを、あるいは何かを呪うよう
に寒空へと届き、遠くどこまでも響いていった。

「ウイリアム君、こちらは無事に終わった。そちらはどうかね？」

「ええ、こちらも……王手と言ったところですよ」

ウイリアムは肩で息をしながら、念話によるキャスターの呼び掛け
にそう応えた。

それから、視線を上げる。アレクシアは今だ、仰向けに倒れ動かな
い。

「……………」

勝算はこれだけ。あの一撃に、この戦いの行方を賭けていた。

全ては積み重ねてきたもの、それら情報から導いた推測だった。

六日前――架け橋にて、ライダーを葬り去った地に残された、異様
な能力の痕跡を見た。それを使うにあたり必要な、莫大な魔力源を推
考した。

五日前――廃車置き場にて、アレクシアを目にして確信した。黒魔
術とは明らかに違う、その異形の姿。既にウイリアム一人では、まと

もに戦つても太刀打ちできないと悟つた。

三日前——小さな神社にて、アレクシアの負傷を確認した。ランサーによつて心臓を貫かれても死なぬ身体はつまり、心肺機能に依らない構造をしているということだ。異形な「なにか」と同化しつつアレクシアの身体は既に、代謝や心肺機能ではなく魔力で活動しているのではないかとウイリアムは考える。

二日前——そして、キャスターが見つけたアレクシアのアジトの一つにて、彼女のものと思わしき左腕が破棄されているのを見た。心霊医術を使えないアレクシアが、ライダーのマスターから奪つた令呪を、左腕ごと取り替えることで運用する気なのだと理解した。

アサシンを簡単に使い捨て、異形の力を奮うアレクシア。それが腕を切り捨ててまで、ライダー分の令呪を回収したという事実。

ウイリアムは、その矛盾から確信を得た。

アレクシア・ブロッケン。彼女の生命活動の基盤となる異形の肉体は、令呪による魔力をエネルギー源としている。

ならば、奪えば良い。令呪という魔力の供給源の全てを断ち切れれば、彼女は窒息したように、あるいは餓えたように死ぬのだろう。

だから指折り数えていた。彼女に残っている、令呪の残数を。

ライダーを屠つた現場から、彼女は二画の令呪を使つたと分かつた。

そして先ほど、彼女は異形の右腕を輝かせて、令呪を一面使つた……これで、彼女に残された令呪は三つ。左腕にあるライダーから奪つた令呪だけだ。

それを「とつておき」を使って惑わし、切り落とす。

「……………」

結局、彼女の敗因は左腕から令呪を移せなかつたこと。心霊医術の心得と設備がなく、容易に令呪の位置を悟らせてしまったことにある。

言つてしまえば、彼女はどこまで言つても魔術使いでしかなかった。

「…………二つの令呪を以つて顕現せよ。その身を以つて牢記せよ——」

その、はずであった。

苦しげに身を起こしながら、詠唱を始めるアレクシア。ウイリアムは思わず身構えるが、しかし、彼女には既に令呪はないはずだ。

死に際の混迷か、飛ばされた左腕との魔術的な接続を試みているのか。どちらにせよ見苦しい足掻きでしかないが、とは言えウイリアムにはどうすることもできない。ウイリアムが彼女を殺すには、エネルギーの枯死以外の手立てがないのだ。

「——これに至るは七十二の魔神なり」

そう、彼女が告げた時だ。

ズルリと、アレクシアの醜く膨らんだ異形の右腕が裂け、中から何かが飛び出した。

それは体液でふやけ、令呪の模様を光り輝かせた左腕であった。

「……………ッ!?! prana shift——were……」

「七の侯爵——焼却式」

次の瞬間、ウイリアムの意識は視界を覆う光によって途絶えた。

「まさか、これを触媒にして、キャスタークラスが召喚されるとは思いませんでした」

声が、聞こえる。

「……………不服かね?」

「いえ……………この程度の想定外で戸惑っていても、聖杯戦争なんかに参加する資格などありませんよ」

二人の、男の声だ。

「……………あつと、そうだ。これ、貴方にお返しします。大切な物でしょう?」

「いや、いい……………今の私は新選組ではない。それを腰に差すことも、誠の御旗を立てることも、私自身が許しはしないよ」

「そう、ですか。なるほど、なるほど……………あ、いえ。貴方という人物が、何となく分かった気がします。どうやら、私と貴方の目指す場所は異なるようです」

そうだ。

これは、彼と私の声。

最初の出会いの、あの時の会話だ。

「しかしこの時より……そして、僕らがこの聖杯戦争で勝つなり負けるなりするまでの間、私達の夢の旅路は交差する」

「……同志ではなく、交差する間柄か」

「ええ。私にも、貴方のは違う夢がある。けどそれには貴方が必要なんです。だからお互い、協力しあいませんか？ 友人としてお互いの夢に敬意を示し、助け合おうんです」

この交差点を過ぎ、離れゆくその時までには。

あの時、私はそう言っ、彼と握手を交わしたんだった。

あれから、もう一ヶ月近く経つ。

そうだ。

そうだった。

ウイリアムはゆっくりと、力なく瞼を開いた。

瞳に映るのは、魔女の姿をした怪物だ。右腕を不気味にクネらせ、左腕を新たに生やしている。

耳に届くのは、崩壊していく倉庫の悲鳴だ。燃えながら崩れていく建物の悲鳴は、遠く彼らのもとにも届くはずだ。

そして、心に響くのは彼の言葉だ。すぐに令呪を使って、そこに呼び寄せると叫ぶキャスターの声。

それ以外は、もう何も感じない。自分の手足の感覚も、魔術回路を流れる魔力の気配も、何一つ感じない。

獣性魔術が間に合い、どうにか命は繋げたが……どうやら、自分は負けてしまったらしい。

「……………」

キャスターを令呪で呼んで、彼女と戦わせる。

一体どうして、そんなリスクを彼が負う必要があるのだろうか。

「……………ふっ」

……心配するな。と、ウイリアムは笑った。

彼女に残された令呪は、残り一画。補充さえさせなければ、彼女は

もうあの召喚術を使うことはできない。

そうだと。

この勝負の決着は、自分でつける。

彼の夢は、彼の友人と誇る私が護ってみせる。

「三つの令呪を重ね、私が護る」

どこからか、叫び声が聞こえた。

構わず、ウイリアムは言った。

「キャスター、貴方は貴方の道を進んで下さい」

直後、微かに衝撃を感じた。

それと同時に、自分の右手から何かが抜け落ちていく。

「……………」

気づけば、倉庫の天井を見ている。

空から降っている黒い雨のようなものは、何だろうか。それに首回り、ずいぶん冷たい。

ああ、この雨はきつと、首を裂かれて噴き出した自分の血か。

しかし、それでも令呪は正しく、彼に届いたのを感じる。

一つの発見が、嬉しい。一つの達成が、喜ばしい。

見れば怪物が、自分を見下ろしている。中々にお怒りだ。

「……………」

ざまあ見ろ。

一人ぼっちの魔術使いよ。お前の夢は、これまでだ。

そう言おうとしたが、もう言葉を紡ぐのも億劫だった。

だから最期に、舌を出してみせた。

封印指定を受けた魔術師——ウイリアム・シン。

再び剣を握ったキャスター——永倉新八。

二人の目指すものを異なれど、その旅路は日坂の地にて交差した。

一方の道は娘によって継がれ、一方の道は友によって護られる。

そして、二つの旅路はウイリアム・シンの死を契機に、離れていった。

第二十九話 『最初の選択』

第二十九話 『最初の選択』

夢を見た。

私が主と呼ぶ彼の、古い、忌まわしい物語を。

——すぐに逃げろ！ 竜也！

——これを持っていきなさい！ 父さんも母さんもすぐに追いつく！

その景色は、日々を過ごしていた屋敷が燃え落ちる赤色をしていった。

——鏡宮さんの所へ向いなさい……早くっ！

——聖堂教会……奴ら投降した人間も殺すのかよ！

その音色は、死んでいく者達の希望と絶望が混ざった灰色をしていった。

そして、彼は生き残った。

全てを焼かれ、灰にされ、託された『欠片』を胸に立つ一人の少年。

——この光景を忘れるな、小僧。二人の苦しみを理解できるのはお前だけだ。

——竜也君、十年……十年、待っていないなさい。絶対に二人を連れ戻せる奇跡を用意してあげよう。

首から提げた『欠片』は、灰のように尽きた心の熾となり、黒い炎を宿す。

それが彼という物語の、始まりであった。

——人のままくたばるか、外道になって生き抜くか……道は一つだ。

全てを失ってから、五年の歳月が過ぎた。

少年は青年となり、一つの選択を迫られた。

「……………」

静かな河原に青年とその師である殺し屋、そして師が連れてきた少年が一人。

青年は少年と対面し、逡巡した面持ちで少年に銃口を向けている。標的を無感情で殺せるその自動拳銃は、それを握る者の心によって、カタカタと小刻みに震える。

その様子を見かねて、青年の隣に立つ師が口を開く。

「……どうした？　今のお前なら目を瞑っても殺せる相手だろう？」

「……………」

その言葉に、ビクリと青年の肩が動く。しかし、引き金に掛けられた指は未だ重い。

青年はこの五年、多くの技術を身に着けた。圧倒的に不利な戦いでも生き残る為の、知識と覚悟を身に着けてきた。

しかし、青年にとって、その少年は想定外の敵であった。

衰弱しきったその少年は目元を布で覆われ、椅子に縛り付けられていたのだ。

「お前が言ったんだろ？　俺の仕事を手伝うって」

「……何で、あの子を殺す必要がある？　あの子は何を……？」

その疑問を聞きながら、師はポケットからタバコを取り出し、ライターで火を点ける。

「それは、あいつを殺すのに必要な情報か？」

師は、紫煙を吐きながらそう言った。

慎重に言葉を選ぶ青年を、師は即答という形で追い詰める。まるで回答を決めている、あるいはとつくの昔にその質問を知っているかのように。

「殺し屋は、人を殺すのが仕事だ。だが誰を殺すかは雇い主次第だし、その何でって疑問も、この仕事じゃ足枷でしかない」

「……………」

「勘違いしているようなら教えてやる。俺は殺し屋だ、殺し屋は正義の味方じゃあない。殺し屋は、他人の悪意で人を殺す、外道の仕事だ」

だが、お前に必要なのはその技術だ。と、師は告げる。

『読水』の半端な魔術じゃ、化け物揃いの亜種聖杯戦争を生き残れる

のは無理だ。鏡宮のように目的を果たしたいって言うのなら、人のままでいようとするな」

「選べよ、読水竜也。」

師——雨井陽二はタバコを地面に捨てて、回答を迫った。そして、火を踏み消しながら次の言葉を吐き捨てる。

「人のままくたばるか、外道になつて生き抜くか……道は一つだ」

その言葉に、青年の相貌が険しいものになる。

数瞬の時を挟み、河原に乾いた銃声が鳴った。

それは産声のように、あるいは絶叫のように、どこまでも遠く、遠くへと響いていった。

ランサーが読水に夢の内容を伝えると、彼は食べていたカップそばを嘔き出した。

それは隠れ家の安アパートの一室。激戦となった魔女狩りの一夜が明け、一眠りついてからの遅めの朝食のことだった。

「買い置きしていた、最後のヤツだったのに……」

暫し咳き込んだ後、そんな泣き言を呟きながら、読水は吹き出された蕎麦を片付ける。

「……マスター。貴方がこの聖杯戦争の成り立ちに、深い関わりがあることは承知しておりましたが……」

と、ランサーはその手伝いをしながら、恐る恐る読水に視線を向けた。

「この戦いに参加したのは、十年前の復讐からですか？」

「……復讐、か」

その質問に、読水は顔を伏せる。その右手は無意識に、首に提げていた銀製のロケットペンダント、それを開けて中に入っている『欠片』を見つめた。

この亜種聖杯戦争に参加した意義、聖杯を求めて故郷に帰ってきた理由——その明確な答えを、読水は持っていない。

あの時、読水はまだ中学生だった。そして学校の帰りに、屋敷の用人が唐突に車で迎えに来てから、全てが変わってしまった。

父親——読水奏馬が、鏡宮悟と共同でこの『欠片』の探求をしているのは知っている。そしてその研究成果、あるいは『欠片』そのものを奪い取る為に、聖堂教会は読水家の屋敷を襲撃したと聞いている。全てはこの小さな木片——『欠片』から始まった。そして未だ代行者やバーサーカーのマスターまでもがこの『欠片』を狙うことから、読水はこの『欠片』が何であるかを、何となしに気づき始めている。

「……………」
つまり、この日坂聖杯戦争はその本質から言えば、十年も前からこの『欠片』を巡ってすでに始まっているということだ。しかし読水にとっては、鏡宮や聖堂教会が中心に見据えるこの『欠片』など、心底どうでも良かった。

今、読水の心の奥底あるものは……読水家の生き残りとしての使命感であり、家族を奪った聖堂教会への復讐心であり、十年前から続くこの因縁に決着をつけんとする意地だ。

いや、それ以前に……気に食わなかったのだ。
自分達だけが中核だと言わんばかりの、あの年寄り共の姿が。十年間ただただ隠れ潜み震えるばかりの、この腰抜けの姿が。

だから、読水はこの日坂の地に戻ってきた。

「……そんな単純なものでもねえよ」

ランサーの質問に、読水はそう答える。そして話は終わりだと言わんばかりに、テーブルに鞆を置き、荷物を確認し始めた。読水の背中を見守りながら、ランサーは悲しげに首を横に振った。

「ランサー、もう過去を振り返っている場合じゃないだろ」

読水はそう告げると、鞆を閉じて顔を上げる。

「今やるべきことは、あの二枚舌が何をやってのけたか、確認することだ……そろそろ現場に行こう」

考えている暇はない。そう、読水は自分に言い聞かせるように呟いた。

午前中、読水とランサーは運送会社が管理しているとある倉庫に、あのウィリアム・シンが死んだ場所へとやってきた。

「ガス漏れだつて」

「本当？ 君、この辺に住んでる子？」

「関係者に、ガス漏れだつて聞いたよ」

「本当に？」

「ガス漏れだつて、みんなそう言ってるよ」

立入禁止を示すトラテープの手前では、マスコミ達が偶々近くを通り過ぎた風を装っている女子高生にインタビューをしている。しかし彼女、実際は暗示を得意とした聖堂教会の作業員のだろうが、昨日もホテルの前で似たようなことを言っているのを見かけた気がする。

そんな連中の横を通り過ぎ、読水達は警官が立つ門を通って敷地内に入る。

「……凄まじいな」

「……はい」

コンクリートの外壁は割れ、黒い焼け焦げを残している。建物の外にも瓦礫は転がっており、アスファルトの地面には抉れたような破壊の爪痕を残していた。敷地内はただの火事、ガス漏れと呼ぶにはあまりにも凄惨な状態となっていた。

聖堂教会の職員（昨日も会ったはずだが、名前を忘れた）に案内され、建物の中へと入っていく読水達。周囲のザワつきを無視し、周囲を見渡しながら案内役の職員に聞く。

「あの代行者は？ もう帰ったのか？」

「シユウジ・アルバーニ神父でしたら……我々と同時刻にこちらへ。明け方には別の要件で出ていかれましたが……」

「あつそ……まあ、いないならいいで楽だ」

そう呟いて、読水は立ち止まった。

目の前にあるのは、この惨状の爆心地とも言える場所。そして、この地で戦い果てた、一人の男が最後を遂げた場所。

ウイリアム・シンが、死んだ現場である。

そこには花束が一つ、添えられていた。

「……………」か？」

「はい……遺体は既に回収しました。この場から逃走したアレクシ

ア・ブロッケンの方は、現在搜索中です。……それと、この花束は、我々が撤収するまでは置かせて頂いております」

黙って背後の職員を見やる読水。職員——早崎は直立不動の姿勢のまま、毅然とした声でこう続ける。

「任務に反する行いですが、我々も聖職者です。黙って遺体を運ぶ訳にもいきません……それに花を添えるだけなら、互いの教義や理念に触れることもありませんので」

聖堂教会と魔術協会、二つの溝は深い。一族の悲願を背に戦い、散った魔術師にとつては、聖堂教会からの祈りの言葉さえ侮辱になりかねない。

故に、許される範囲で死者を送る。黙って花だけを添えるその行為こそ、聖職者である彼らなりの矜持なのだろう。

「……そっか」

隣のランサーは、黙って頭を下げていた。それを咎めるほど、読水も意固地にはなれなかった。

読水はそして、意を決して花の前で膝を折り、屈み込む。

祈る為ではない。読水は魔術師であり、またウィリアムも魔術師だった。祈りの言葉など必要としない。

「ランサー、周囲を見張れ。『辿跡術』で、戦闘の経緯を探る」

「承知しました」

そう、読水がやるべきことは、この戦いの跡から生き残ったアレクシアを討つこと、その為に現場に残る情報を掬い取ること……ここからは、魔術師の領分である。

「……ああ、それと」

と、意を決して痕跡を辿ろうとしていた読水だが、ふと背後の早崎に聞く。

「……なあ、本当にキャスターはまだ消滅していないのか？」

「ええ。霊器盤では、キャスターの消滅は確認できていないようです」

その回答に、読水は顔をしかめる。

昨夜、シテイホテルでウィリアムに謀られたことを悟った読水は、彼が言及した残る二ヶ所の一つ、寂れたシャッター街へと急行した。

しかし残っていたのは刃物によって切断されたアダムの人形や戦いの痕跡ばかりで、そこにはキャスターも、捕らわれている佐藤もいなかった。

そして、シユウジが駆けつけた倉庫……こちらにはウイリアムの死体だけが残されていた。状況証拠的には、ウイリアムとキャスターは別れ、ウイリアムがこの倉庫にてアレクシアと対峙し死亡、キャスターはシャッター街で人形と戦うもマスターの死亡により消滅……と考えるのが自然なのだが、問題は佐藤の存在だ。

「……それと、これは内密にお願いしたいのですが」

「何が……？」

と、早崎も屈んで読水に耳打ちする。

「ウイリアム・シンの遺体には、令呪を三画使用した痕跡がありました」

「……確かか？」

黙って頷く早崎。

「……………」

嫌な予感がする。

見れば、ランサーもまたこちらを見ながら目を細めていた。

マスターという、現世に留まる為の楔を失ったサーヴァントは消滅してしまうのが常だ。しかし、令呪で以ってマスターの死後も生き永らえるという事例は複数ある。それにマスターが失っても、必要な魔力を確保し化け物のように現世にへばり付いていたサーヴァントも読水は見たことがある。

そして、やはり鍵となるのは佐藤の存在だ。

魔術師でもない彼女は無自覚なのだろうが、あのライダー——大英雄の従者、若獅子の導き手、あのイオラオスのマスターだった。その現界に足る魔力を確保できていた女だ。

キャスターは令呪の力で生き長らえており、そして佐藤がウイリアムに代わるマスターとして再契約すれば、即座に復帰できる状態にある。

ランサーの真名を知っているというキャスターは、まだ終わってな

いのだ。

「……………」

面倒だな。と、ついに読水は口に出して呟いた。

その頃。

佐藤とキャスターは、郊外に設置されたパーキングエリアの脇、山沿いに設置された高台の東屋にいた。

椅子から露出した金属部が冷たかった為、佐藤は木製のテーブルに直接腰掛け、自販機で売っていた惣菜パンを齧る。

そんな彼女を見ながら、東屋の柱を背に地面に座り込むキャスターは愛刀を肩に立て、何か思案するように寂れた無人のパーキングエリアに視線を移したり、ぼんやりと寒空を見上げたりしていた。

そんな様子のキャスターを、佐藤は紙パックのジュースに直接口をつけて飲みながら横目で観察していた。しかし業を煮やしたように、紙パックを横に置き。

「……………」

「ん……………」

「これから、どうするの?」

そう質問し、テーブルから飛び降りる佐藤。今までの疲労からか、彼女が座っていたテーブルには空になった飲食品がレジ袋に纏められ置かれていた。ここに辿り着いてから四半日ほど、佐藤は失った体力を取り戻すように食い、眠り、食べた。

「それが問題だ」

キャスターは応えながら、老体をゆっくりと立ち上がらせた。

「ウィリアム君……………私のマスターは死んだものの、彼の機転によって私はこうしてこの世界に留まれているが……………消滅は時間の問題だろう」

そうキャスターは言ってから、口端を上げた。

「だが、それはあの魔女も同じだ」

あの魔女。その単語に反応し、佐藤の顔は険しいものになる。

「先の戦いで、奴の手元に残った令呪は一つだけとなった。サーヴァ

ントすら屠るあの常軌を逸した力も、その能力を体に宿しているのも、元を辿れば令呪の膨大な魔力があつてこそ。そう、ウィリアム君は確信していたよ」

「……だから、私の令呪を腕ごと奪った」

失った腕を庇うようにして、佐藤は言う。その言葉に、キャスターも頷いた。

「しかし、我々の令呪は奪うのには失敗した。サーヴァントも部下も失い、さらには令呪の大部分も失った奴は今や、飛車角落ちの状態だ。残された道は他のマスターから改めて令呪を奪い再起するか、残る令呪を玉砕覚悟の一撃に使うくらいだろう」

「……なら、彼女はきつと奪う方に出ると思う」

佐藤はそう意見した。厳密に言えば、残る令呪を惜しみなく使い、彼女は令呪の強奪に出るはずだ。

何でも使う、というやり方でこの世界から欲しい物を奪う。それが魔女、アレクシア・ブロッケンだ。彼女にとってはあの妹分のようなミア・ブロッケンも、サーヴァントも、自身すらも等しく、奪う為の手駒に過ぎない。令呪を出し惜しんで、令呪を使わぬまま死を迎える彼女の姿など、あの怪物性を見た佐藤には想像できなかつた。

「……私も、同意見だよ」

キャスターは椅子に立て掛けていた刀を手にし、腰に差しながら佐藤に背を向ける。

「私も近いうちに、最後の戦いの為、行動を起こす……起こさねばならない」

「……うん」

そんな気はしていた。キャスター——このサーヴァントとは出会ってまだ二日と経ってないが、彼のマスターに対する義理堅さ、英霊としての矜持については佐藤も察していた。

「その時、あの魔女もその混乱に乗じて行動を起こすだろう。恐らく、ランサーかバーサーカー、どちらかのマスターを狙うはずだ」

キャスターは懐から財布を取り出して振り返り、佐藤の前のテーブルに置く。

「紙幣で、それなりの額が入っている。本来は私のマスターから渡されていたものだが……それで君はここを離れ、令呪を渡さぬよう動いてほしい」

佐藤は黙ってその財布に視線を落としていたが、やがてクツクツと笑い。

「私が、その頼みを聞くって保証は？」

と、悪戯な笑みをキャスターへと向けた。

「聞き入れるとも」

キャスターも、その挑発に目を細める。

「私のマスターになるかは迷うだろうが、あの魔女に関しては是非もない。あれだけの屈辱を喰っておいて、そのままあの魔女を野放しに逃げるようなタマではなからう？ ……つと、失礼」

そう言つて、キャスターは苦笑しながら頭を下げた。その様子に佐藤も釣られて吹き出す。この物言い……これがキャスター本来の気性、我武者羅の新八と呼ばれた永倉新八の口調なのだろう。

「分かった。こつちは任せて」

ひとしきり笑った後、佐藤は頷き財布を手取る。

そして踵を返し、ここを颯爽と立ち去ろうとパーキングエリアへと続く階段を降りるが。

「……ねえ、キャスターは聖杯戦争に勝ち残ったら、何を聖杯に望むつもりなの？」

振り返って、佐藤はキャスターに問いかけた。

その言葉に、キャスターは首を傾げて頬を搔く。

「……今を生きる君にとつては、下らんものだよ。ただ、過去の影に過ぎぬ者にとつては、正したい偽りというものもある」

「正したい、偽り……」

「勝てば官軍、歴史は勝者が作る。しかし忘れたくないこと、忘れて欲しくないことは、敗者にだってあるのだよ。……それが友のことならば、尚更に」

「それって……」

その真意を聞こうと、佐藤は思わず片足を登りの階段に掛ける。し

かし、キャスターはそう言うで一礼し、霊体化してしまった。
「……………」

佐藤はしばらくの間、黙って彼が消えた場所を見ていたが、やがてその足を戻し、そのまま階段を降りていった。

昼過ぎ、読水達は調査を区切り倉庫から出ることにした。

「あの、何か分かりましたか？」

「教えねえ」

聖堂教会の職員、早崎の質問にそう応え、読水はさつさと崩壊しかけの建物から出る。

その時、読水は一人の神父とすれ違った。

その初老の男に対し、読水は何の意識もしていなかった。そのままここを立ち去ろうと、歩を進めていた時だ。

「…………君が、ランサーのマスターかね？」

そう、神父の方から呼び止められたのだ。声を掛けられた為に読水は立ち止まり、振り返る。

「そう言うあんたは？」

「マリオだ。この亜種聖杯戦争の監督役を任せられている…………だから、そう身構えんでも大丈夫だよ」

「…………チツ」

読水は、分かりやすい舌打ちをしてみせた。しかしその初老——マリオはとりあわず、笑みを浮かべてこちらへと歩み寄る。

「君とライダーのマスター、そしてこの騒ぎを起こしているアサシンのマスター…………この三人は正式に参加を表明していなかったからね。もう開戦から二週間近く経つのに、初めての挨拶となる」

「…………自己紹介なんざ無意味だろ、聖堂教会」

その社交辞令に、心底うんざりしたように応える。

「それとも…………初日から俺に代行者を送っておいて、俺がここに来るのを知らなかつたって言いたいのか？」

「ふふ…………それは私の管轄の外で起こったことだよ」

「…………下らねえ」

読水はマリオを睨み、そう吐き捨てる。それで話は終わりだと言わんばかりに背を向け、ランサーを連れて歩き出す。

「読水、読水、読水……そうだ、思い出したよ。確か、十年前に死んだ一族の当主も読水と言ったか」

しかし、その歩みはマリオの一言で止まる。

「この日坂市で、鏡宮と共同で研究をしていた一族だったかな。そうか……君がその跡取りという訳か」

「……………」

「……マスター」

歯噛みする読水に、早く行った方が良く、ランサーは主の肩に手を置いた。しかしマリオはそんな二人に言葉を畳み掛ける。

「私だよ。十年前の、あの日……襲撃の指揮をしていたのは」

その告白に、読水は心の奥底に消えていたはずの黒い炎が燃え立つのを感じた。

「マスター……ッ」

「ついに正体を表したな……なあ、おいッ!」

静止しようとするランサーを押し退け、読水は殺気立って振り返る。

その剣幕に、周囲の聖堂教会の職員は横合いから二人の間に割って入る。そんな周囲の騒ぎをどこ吹く風と、マリオは笑みを浮かべ、口を開く。

「……あの『欠片』は、まだ君が持っているのかね？ それとも鏡宮に尻尾を巻き、預けてしまったか？」

そう聞くマリオの目は笑っていない。獲物を狙う猛禽類のように鋭く、読水を見つめる。

対する読水は黙って胸元からペンダントを取り出し、犬歯を剥き出しにしてマリオの眼前へと迫った。

「……………こいつは、この聖杯の欠片は読水の物だ。誰にも譲る気はねえぞ、クソジジイ……ッ!」

第三十話 『日坂聖杯戦争』

第三十話 『日坂聖杯戦争』

その『欠片』には、血塗られた歴史がある。

中世ヨーロッパで発見されたそれは、見つかった時から既に一欠片の木片でしかなかった。しかし当時からそれは、聖杯の一部であると伝えられていた。

第二百七十四号聖杯。聖堂協会はその『欠片』を、そう命ナンバリング名した。ヨーロッパ諸国は、この『欠片』を巡って幾度の戦争を起こした。現在では後継者争いとして記されている戦争や謀略の中で、『欠片』は持ち主を変え続けた。

そうして長い、長い時を重ねて『欠片』はドイツ第三帝国の手に渡った。しかし、第三次聖杯戦争にて『冬木の大聖杯』をダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアに奪われたドイツ第三帝国は大戦末期、他の遺産を失うことを恐れ世界各地にそれらを秘匿した。

戦火の火種であり続けた『欠片』は、多くの遺産の中に埋もれるようにして南米へと渡り、欧州の歴史からは退場することになった。

しかし、『欠片』は新しい聖杯戦争に再び姿を見せる——1992年、南米にて行われた亜種聖杯戦争が開戦、『欠片』はによって、触媒として使用されようとしていたのだ。

隠された聖遺物を手に入れんという陰謀によって起こった、あるべき規定が無視された灼熱の激戦。そこで『欠片』は、触媒のレンタル業を行っていた野心ある二人の日本人——鏡宮悟と読水奏馬の手に渡ったという。

彼らはそれから亜種聖杯戦争に関わることを辞め、故郷である日坂市にこの『欠片』を持ち帰った。

そして2008年12月25日、第八秘蹟会のマリオ・アルバーニによって『欠片』の奪還作戦——『クランプス作戦』が計画、上位組織の聖堂協会の承認を待たずに強行された。

「……しかし、計画は失敗。『欠片』は読水奏馬の息子、読水竜也と共に姿を消した、か……」

そう呟くと、シユウジはホテルの簡易なテーブルについたまま伸びをした。

シユウジ達は早朝にウィリアムの死を確認すると、すぐにホテルへと戻り、シスター・セレネントーラから渡されたデータを目にした。

十年前、この日坂市で起こったこと——聖堂協会が隠蔽している真実を、調べてほしい。

かつての同僚からの、無茶な依頼。それを現役を退いたとは言え、死徒を相手取っていた諜報戦のエキスパートのセレネントーラはたった二日でデータにまとめあげてくれた。

無論、彼女が如何にエキスパートであっても、たった二日での情報量を調べ上げるのは到底無理だろう。

つまり彼女は、事前に調べていたのだろう。あるいは……情報を流している、別の存在がいるのか。

しかしそれは、考えても仕方がないことだ。今シユウジにとって重要なのは、友である彼女を信じ、情報を精査することだろう。

それは同時に、マリオ神父——養父との決別、組織への裏切りを意味する。

「……………」

養父の教えに、組織に、この十年に背く。

しかしシユウジの心は未だ凪いだように静かで、冷たい。

シユウジは溜息をつき、ノートパソコンから窓へと視線を移す。気がつけば、すでに昼過ぎだ。朝から食事を取らないままランチタイムが過ぎてしまった。

「亜種聖杯戦争としては異例の、七騎揃ったの召喚。これで合点がいったな」

と、そう言うのはソファアに腰掛けてグラスを揺らし、揺れる赤ワインを見下ろすセイバーだ。こちらは疲れた様子のシユウジと比べると、ずいぶんとリラックスしている。

そんな彼を一瞥し、シユウジは瞼を指で指圧しながらこう続ける。「彼女の調べによると、この日坂は本来、英霊を七騎揃えるだけの霊脈は存在しないらしい。ということはセイバー、お前が現界できているのも、恐らく……」

セイバーは肩をすくめ、皮肉そうに笑みを浮かべた。

「聖杯戦争……ハッ、なんてことはない。これも俺が生前、散々見てきたものの一つという訳だ」

まったく、嫌になる。そう苦笑し、セイバーはシユウジを見つめる。

「それで、お前は何だ？」

「ん……」

「この亜種聖杯戦争が、その第二百何番って聖杯の霊力によるもので、主催者であるアーチャーのマスターも、お前の養父である神父も……あの読水竜也も、十年来の因縁があるのは分かった。しかし、そんな中でお前は何だ？ どう関わりがある？ なぜ十年前、お前は代行者の任を負えるに足る力を手に入れてしまった？」

「……………」

シユウジは正面に向き直って押し黙り、ジッと手を見る。そして、掌に落としていた視線を、彼は目の前のモニターに、まだ目に通していないデータのフォルダへと移した。

——『第二百七十四号聖杯、霊力回収と聖杯復元について』

シユウジは答えを求め、静かにカーソルをそのフォルダへと合わせた。

キヤスターと別れてから数時間、佐藤は交通機関を乗り継ぎ、読水達の隠れ家へと向かった。

佐藤は自分以外乗客のいないバスを降り、徒歩で郊外の古い一軒家へ、読水の隠れ家へと向かう。

アレクシアに拉致されてから、既に三日と半日。もう読水達があの隠れ家を使っているとは思えないが、しかし佐藤は読水の他の潜伏先を知らないし、あそこに置いたままの自分のケータイを回収したかった。

あれさえあれば、どうにでもなる。佐藤はキツと通りの奥に見える一軒家を覗んだ。ケータイには、読水の連絡先が保存されている。あれさえ回収できれば、読水に直接会わなくてもアレクシアへの警告を行うことはできるのだ。現代日本に生まれ、不自由なく高校生活を行ってきた佐藤は、ここに来て文明の利器の有り難みを痛感していた。

焦る気持ちを殺し切れず、佐藤は隻腕の身体に苦勞しながら小走りで家屋の手前まで来た。

そして、途中で気づく。平屋と、その周囲の異様さに。

平屋の玄関は外され、立入禁止を示すトラテープが張り巡らされている。敷地を囲うブロック塀も叩き割られたように砕けた箇所が見られた。それに、家屋の手前の道路は何が起こったのか、地面が爆発したかのように砕け、未だアスファルトの破片がそこかしこに確認できた。

「…………ツ」

佐藤は確信した。あの後、戦闘があつたのだ。

相手はアレクシアか、またはバーサーカーか。いずれにせよ、相当激しい戦闘だったのだろう。読水とランサーは、無事だったのだろうか。

「あ……読水、さん……っ」

思わず、口から溢れた言葉。佐藤はテープに手をかけ、破壊された家屋の奥へと入ろうとした。

その時だった。誰かが背後から佐藤の肩に手を掛けた。

不意の接触到、佐藤の心臓は跳ね上がる。反射的に、佐藤は背後へと振り返った。

そこには、野暮ったいジャージに身を包んだ大男がいた。彼はサングラスで人相を隠していたが、サングラスの下には満面の笑みが浮かんでいる。

「……………」

「お元氣？」

硬直する佐藤を他所に、大男は煽るように言って、佐藤の肩を強く

掴む。そう、まるでもう二度と逃さぬように。

以前、遠目に見たことがあった。あれは、確かこの亜種聖杯戦争が、本格的に始まった頃であったか。

佐藤を掴んだ大男は、あのバーサーカーだった。

「あれだけの騒ぎになって、よく無事に帰って来られましたね」

「再配線層の監視役が公然と参加者を襲うなんて、常軌を逸してる。あそこで仕掛けられないのは、向こうも同じだ」

その頃、読水達は佐藤が向かった場所よりずっと都市部に近い、日坂駅周辺のビジネスホテルにいた。

数時間前、二人はウィリアムとアレクシアが激闘を行った倉庫で、この亜種聖杯戦争の監督役を務めるマリオ神父と出会った。そこでマリオは読水を挑発し、読水もまたマリオが狙う『欠片』を見せつけたが、結局そこで十年来の因縁に決着がつくことはなく双方押し黙ったまま別れる形となった。

「……そんなことより、今はアレクシアだ」

読水はそう言うと、安っぽい机に鞆をドスンと置き、身につけていたガンホルダーも外してその脇に寝かせる。

数時間前、読水はコンテナで、読水家伝来の魔術——辿跡術を行い、戦闘の経緯を探った。

そうして、掴んだ。ウィリアム・シンがアレクシア・ブロッケンとどう戦ったか。あの天才が、怪物を相手にどんな勝機を見出していたのか。

「あの強大な異形と同化しつつある為に、生命維持だけでも英霊以上の莫大な魔力を必要とする……その魔力源が、まさか召喚術の際に使っていた令呪とはな」

そして肝心なのは、現存する勢力でこの情報を握っているのは誰か、ということだ。

アレクシアの弱点を看破したウィリアムらキャスター陣営は、マスター亡き今、聖杯戦争を生き残るのは絶望的と言っている。そしてどうにかこの世界に留まっているキャスターはこの情報を託せる仲間

はいないだろうし、あのウィリアムがこの情報を誰かに漏らしているはずもない。

そう、アレクシアの弱点と残りの令呪とを鑑みて、彼女が既に起死回生の一手を打たない限りは人知れず自滅していくという事実を利用できるのは、読水達だけということになる。

「散々辛酸を舐めて、今日で十四日目……いや、十年と十四日か？」
ようやく、運がこつちに向いてきた。と、読水は口端を上げ、笑わずにはいられなかった。

しかし、準備は怠らない。読水は机の上の鞆を開け、中から鈍い光を放つ銃弾を横一列に並べていく。銃弾は読水が持つ拳銃より遙かに長く、大きかった。

「マスター、その弾丸は……」

「ああ。ホテルで拾った……そんな苦い顔するなよ」

そう指摘されたランサーは、それでも苦々しい顔を浮かべ、読水が並べている銃弾を睨んでいる。無理もない、彼女は昨夜この銃弾に何度も撃たれ、苦戦を強いられたのだ。

「7. 92×94……古い対戦車ライフルに装填されていたのに、弾頭がホローポイントハンドロードになっているな」

どうみてもアダムの手製だ。読水はそう呟き、苦笑いを浮かべて銃弾の一つを手取る。

彼が言うように、銃弾の弾頭部分は先端が尖っておらず、真ん中に空洞が開けられている。これは読水が使っているマグナム弾と同様、銃弾が目標に命中した際に効率良く衝撃が与えられるよう加工されたものだ。

「……流石アダムだよ。代行者相手に効果の薄かった俺のマグナムに對し、しっかりと最適解を残していきやがった」

「しかしマスター、その弾を使うには、銃の大きさが……」
「その点は考えてある……正直、やりたくはないけど」

ランサーの疑問に読水はそう答えながら、手にした銃弾を手のひらで転がしたり、握り込んだりを繰り返す。

「……でも、用意してきた魔術礼装はほとんど失った。もう、なりふり

構ってられない」

「……………」

「…………ランサー」

「は…………はいっ」

「…………勝つぞ」

読水は銃弾を机に置き、ランサーに向き直った。

「聖堂協会相手に大見得切って、確証が得られた…………聖杯はとつくに、俺達の手にある」

そう言つて、読水は胸元のロケットペンダントを開け、中に収められている木製の「欠片」をランサーに見せた。

「これからは、俺と、お前と、そしてこの『聖杯の欠片』、この三つを守れ。あのアレクシアが暴れ回って、連中の共食いが終わるまで生き残ればこの戦争…………俺達の勝ちだ」

「…………はいッー」

ランサーの覇気ある応じに、読水は頷く。

そしてカチャンと音を立て、ペンダントを閉じた。

カチャンと、レオポルディーネが置いたティーカップが長い沈黙を破った。

「…………なるほど。じゃあ、貴方はキャスターと別れて、読水竜也について警告しようとおそこに行つた訳ね？」

レオポルディーネの言葉に、佐藤は頷く。

バーサーカーに捕まり、佐藤は都市部にある彼のマスター——レオポルディーネ・ミローネの屋敷へと連行されてしまった。そして現在は、レオポルディーネに自身が経験したことと、そしてアレクシアのこれからの行動についての予想を彼女に話している。

しかし、佐藤にとってこれは予想外ながらも悪くない展開だった。キャスターの考えでは、アレクシアが令呪を狙う相手は現段階で生き残っている参加者の中で比較的弱い部類に入る読水か、彼女——レオポルディーネだったのだ。

貴方は弱いから、アレクシアに令呪を狙われるかもしれない。そう

真正面から言わず、自白という体裁でバーサーカー陣営に警告できたのは行幸と言える。

「だからミローネさん、アレクシア・ブロッケンにだけは注意してください。アサシンも仲間も失っているけど、彼女は彼女だけで、サーヴァントだって倒せる」

「そう……ありがとう、佐藤さん」

レオポルデューネは佐藤の言葉に、ニツコリと笑った。しかしその笑顔は、若干引きつっている。寝間着の下に包帯を巻き、ベッドに腰掛ける彼女の容態が原因か。いや、きっと違うだろう。

「つていうか……」

そして、レオポルデューネの身体が小刻みに震える。いや、それ以前にカップを持つ彼女の手先がとつくに震えていたのに、佐藤は気づいていた。

いよいよかと、佐藤は口端を曲げて覚悟を決める。

「バーサーカアアアッ！ 何で相談もなく連れてきたあッ!？」

レオポルデューネは堪えきれないようにテーブルにその小さな拳を叩きつけ、部屋の隅、壁に背を預けて座り込んでいるバーサーカーに叫ぶ。

「……はあん?」

「Huh? じゃないのよ、このバカッ！ 何が警告よ！ 人のベツドルームに敵かどうかも分かんないの連れてきてーっ！ 首根っこ持って部屋に入ってきた時は正気を疑ったわよ!？」

「狂化Eーのバーサーカーだよ……行方不明だったライダーのマスターを確保してやったんだぞ！ 文句を言われる筋合いはねえ！」

「文句しかないわあ！ ただでさえ事が上手くいってない時に、こんな不安要素拾ってくんじゃないわよー！」

「だあもう、うっせーッ！ 要らねーなら奴隷にでもして売れば良いだろッ!!」

「倫理的にアウトじゃオラッ、このクソヴァイキングーッ!!」

「アーツ!？」

声を張り上げ立ち上がるバーサーカーと、そこに怒りのドロップ

キックを叩き込むレオポルディーネ。瞬く間に二人は取っ組み合いの喧嘩を始めた。

「……すみませんね」

呆然とその様子を見守っていた佐藤にそう謝るのは、椅子に座る佐藤の左脇で跪くこの屋敷の使用人らしい男性——轟木だ。

「あ、いや……あの、もう帰って良いですか？」

佐藤の言葉に、轟木は笑って首を振る。どうやら主人に代わって、彼は佐藤をまだ警戒しているらしい。

「アレクシア・ブロッケンは今呪を狙っている、この警告は有り難く頂きますよ。その御礼と言っては何ですが……ほら」

できました。と、終わったとばかりに工具を置き、轟木は立ち上がって数歩下がる。

その様子に、佐藤はしばらく見ないようにはしていた左側——取り付けられた義手を見る。

オレンジ色に塗装された、金属製の筋電義手。佐藤はそれを見つめながら、取り付けられた義手の手を動かしてみた。

「……痛みや、重さを感じたりは？」

「いや……訓練もなしに、こんな風に動かせるんだ」

夢中になって左手を動かす佐藤に、轟木は微笑み答えた。

「元々、亜種聖杯戦争に参加されるお嬢様の為に用意した物ですので、すぐに物を掴めるくらいのことではできるよう作られています」

何なら、頭部以外ならご用意できますよ。と轟木は両手を広げる。

その言葉が冗談か判断しかね、佐藤は曖昧に笑った。

「ただまあ、お嬢様のサイズに合わせておりますので、少しサイズが合わないかとは思いますが……」

「それでも、ないよりずっと良いよ。本当にありがとう」

「いえいえ……それと、お探しだった貴方の携帯電話ですが」

轟木はそう言って、佐藤の前にポリ袋を見せる。佐藤は一度右手を伸ばし、それを受け取ろうとするが思い直し、左腕でそれを受け取ってみせた。

ポリ袋の中には、佐藤のケータイが入っていた。瓦礫にでも押し潰

されたのか、画面が割れ、真ん中の辺りで曲がってしまっている。

「ああ……」

佐藤は悲痛な声を上げ、半身のようにさえ感じていたケータイを袋から取り出す。また腕の一本でも、失ってしまったような気分だった。

「鞆も回収できましたが、我々があの家屋から見つけた時には、こちらはご覧の有様でして……ご要望でしたら、データの復元だけでも致しますが」

「お願いします……」

佐藤は悲痛な声でそう言うと、頭を下げた。

「心中お察し致します。魔術師は電子機器を軽んじる傾向にあります。が、私はこの通り普通の使用人ですので……とところで」

轟木はそう言うと、ジツとこちらを見る。

「キヤスターの方ですが、彼はいつ、最後の攻勢に出ると？」

「……それは」

分からない。そう言おうと、佐藤は口を開く。

その時だ。首筋に鋭利な……刀のような刃の冷たさを、佐藤は感じた。

「……ッ!?!」

目を見開き、窓を見やる佐藤とバーサーカー。反射的な二人の行動は、ほとんど同じタイミングだった。

直後、遠雷のような音がカーテンの向こうで響く。そして音は振動となり、ガタガタと窓を揺らす。

バーサーカーはレオポルディーネを押し退けて窓へと向かい、カーテンを開け放った。佐藤は遠く見える郊外の一画から、稲妻のように青く輝く光が溢れ出しているのを発見した。

それはまるで……色こそ違えど、幼少期、十年前に佐藤が見た大火事の遠景のようだった。

「あの方角……」

佐藤は気づき、窓辺へと駆け寄る。あの方角は、数時間前にキヤスターと別れた方角と一致している。

「……キャスターか？」

「方角は合って……ううん、間違いない」

佐藤は窓に手を当ててその光を凝視し、バーサーカーの言葉に応じた。あの光の根源こそ、キャスターがいたパーキングエリアだ。

「そうか……くくつ、始まるのか」

「……」

佐藤の言葉にバーサーカーはクツクツと笑い、レオポルディーネは腰に手を当て不安そうに唸った。

「……キャスター」

そして佐藤は歯噛みし、窓枠を軽く叩いた。

始まってしまった、読水達と再開することなく。

佐藤は確信していた。今の時間が、この聖杯戦争の最後の安息である。

しかし、その時間はアレクシア達のテロから一日と待たず、終わってしまった。これから再び、戦いが始まる。そして今回こそ、この戦争の決定打を与える気で仕掛ける戦いとなる。

「キャスターツ、早すぎるよ……ッ！」

十年の時を経て、再開された日坂聖杯戦争。

模倣の陰に隠れ、聖杯の欠片を求める真の聖杯戦争。

十と三つの夜を超え、残存勢力は尚も多い。

セイバー陣営——国土回復の英傑、ロドリーゴ・ディアス。奇跡の

代行者、シユウジ・アルバーニ。

アーチャー陣営——迷妄の弓手、逢蒙。復讐の主権者、鏡宮悟。

ランサー陣営——龍の守護者、ランサー。〃欠片〃の運び屋、読水

竜也。

キャスター陣営——妄執の魔狼、永倉新八。

アサシン陣営——異形、アレクシア・ブロッケン。

バーサーカー陣営——鬼才のベルセルク、エギル・スカラグリーム

スオン。イタリアのルーン魔術師、レオポルディーネ・ミローネ。

そして第八秘蹟会——監督役、マリオ・アルバーニ。

そして元ライダー陣営——若きヘラクレイダイ、佐藤真波。
これから始まるは、日坂聖杯戦争最大の戦い。一夜限りの大戦争。
生き残りが保証される者は、もう誰一人としていない。

マスターデータ集 『第30話時点』

名前：読水竜也

英語表記：Tatsuya Yomimizu

年齢：24歳

誕生日：11月2日

血液型：A型

身長：173cm

体重：60kg

特技：マルチリンガル（日本語、英語、中国語、フランス語、スペイン語）

好きな物：史跡巡り

苦手な物：機械整備

天敵：聖堂協会

魔術属性：水

イメージカラー：鉄色（くろがねいろ）

@製作者コメント

復讐でなく、10年間迷い苦しんできたものの決着を求め、故郷へと舞い戻った主人公の1人。弱く、痩せ衰え今にも死にそうだけど、目だけはギラついていて「何かしでかすかもしれない」と期待してしまふような狼のイメージが彼の原点でした。

愛銃のコルトローマン（単銃身のマグナムリボルバー）は、クラシックな鞆を常に持った運び屋という彼のビジュアルを損なわず（リボルバーで）、魑魅魍魎とした魔術の界限を生き抜く上で必要な火力を有し（マグナムで）、職業柄起こり得る不意の戦闘こそ活きる手軽さ（単銃身）を合理的に考えた上での遊び抜きな代物……。の、はずですが師匠分が出てきて随分とイメージが変わりました。やーい！お前の師匠、HENTAIガンマン！

名前：シュウジ・アルバーニ（旧名：沢尻周路）

英語表記：Shuji Albani

年齢：27歳

誕生日：11月1日

血液型：O型

身長：181cm

体重：75kg

特技：パルクール

好きな物：車、バイク

苦手な物：酸っぱい食べ物

天敵：言語の壁

魔術属性：不明

イメージカラー：銀色（しろがねいろ）

@ 製作者コメント

読水があくまで個人的な思いで戦うのなら、ライバルは世界観を見つめる役割を、ということでも生まれた代行者の主人公。現役復帰した代行者というプロットだったので、最初はもっと年齢が上だったので、話を詰めるうちにこれくらいの年齢に落ち着きました。

換気扇の音に苦しめられたりカップ麺を食べていたりする読水と対象的に、彼は外車を背に封書を読みホテルでノートパソコンを操作したり、セイバーと騎士道について語ったりと・・・どこか泥臭さのない、気取った描写を常に意識しています。泥臭いのは読水にお任せ！。

名前：佐藤真波

英語表記：Manami Sato

年齢：17歳

誕生日：10月10日

血液型：B型

身長：175cm

体重：67kg

特技：お菓子作り

好きな物：音楽鑑賞

苦手な物：アクションゲーム全般

天敵：魚貝類

魔術属性：火

イメージカラー：鉛色（あおがねいろ）

@製作者コメント

聖杯戦争における一般人枠であり、Fateシリーズの二次創作として必要であろうティーンエイジャーの目線でこの聖杯戦争を見ていく主人公の1人です。とはいえ血統や土壇場の爆発力からして「この人、ルートによつてはテーマ曲が処刑用BGMって呼ばれていたんじゃない?」と思わせてしまうような才能を秘めた女性です。

キャラクターのビジュアルはまさに『現代のヘラクレイダイ』といったところ。ライダーの性能含め、初期に葬らないとヤバい超大型ルーキーでした。しかし、彼女は囚われのお姫様枠を経て成長してしまいました・・・今後の彼女の活躍に、ご期待下さい。

名前：鏡宮悟

英語表記：Satoru Kagamiya

年齢：49歳

誕生日：10月31日

血液型：A型

身長：170cm

体重：67kg

特技：クロースアップマジック

好きな物：調度品鑑賞

苦手な物：カラオケ

天敵：機嫌を損ねた愛妻

魔術属性：水

イメージカラー：紫金色（しきんいろ）

@製作者コメント

日坂聖杯戦争の主催者にして、ナイスミドル枠。そして、この聖杯を巡る物語の裏主人公です。「常に机に両肘ついて、意味深なこと言っていたら良い人」というのが最初のプロットですが、今や「お屋敷絶対出ないマン」、「お電話いっぱいするマン」と化しています。

『黙る顔からドラマが見える人』、『黒が似合う男』を目標に、名だたる日本のナイスミドルを見まくってイメージを固めてきたキャラクターです。とはいえ、彼の見所はもう少し後な気がします。頑張ってますぞー！

名前：レオポルディーネ・ミローネ

英語表記：Leopoldine Milone

年齢：20歳

誕生日：4月5日

血液型：O型

身長：150cm

体重：42kg

特技：アコースティック・ギター演奏

好きな物：ピクニック

苦手な物：敬語

天敵：自分より背の高い人

魔術属性：地

イメージカラー：ミントグリーン

@製作者コメント

いわゆる三枚目、この物語のお笑い枠です。『主催者が事前に用意した傀儡マスター（ほぼほほ言うこと聞かない）』というコンセプトだけで始まり、他のマスターの個性が軒並み遊びのないものになる中で「ネタ枠、やります！」と手を挙げたのが彼女でした。グラッツェ。

上記している通り、他と比較するとかなり遅れて（というかほぼ最後に）キャラクター像が決まった人です。「一般人枠の佐藤のサーヴァントをバーサーカーにするか、ライダーにするか」という迷いの後、最後のバーサーカー（この時点で真名も今のものでした）を押し付けられ、それならとバーサーカーと対比になるようなやビジュアルと、相乗効果があるような性格のレディにキャラクターが決まりました。縦ロールはお嬢様の証。

名前：ウィリアム・シン

英語表記：William Singh

年齢：36歳

誕生日：8月15日

血液型：AB型

身長：168cm

体重：59kg

特技：紅茶のブレンド

好きな物：ブレンドした紅茶を振る舞うこと

苦手な物：脂っこいもの

天敵：話を聞いてくれない人

魔術属性：火、水、風

イメージカラー：ディープブルー

@製作者コメント

聖杯戦争における正規の魔術師枠。当初から『魔術師同士で壮絶な戦闘を繰り広げるマスターの片割れ』というプロットがあり、とは言えテンプレな傲慢で貴族主義な魔術師にしては面白くないなど、異端な経歴と真摯な意志とでバランスを取った曲者として描いてみました。

ウイリアム自身や獣性魔術に関しては明確にモデル、モチーフがあり、俳優のトニー・ジャーさんとその野性的なアクションを随分と参考にさせていただきました。あと随所に見られるウイリアム・レイ表記は誤字です・・・いつか直します・・・いつか・・・いつか・・・(逃走)。

名前：アレクシア・ブロッケン

英語表記：Alexia Brocken

年齢：33歳

誕生日：5月1日

血液型：A型

身長：183cm

体重：66kg

特技：裏切り全般

好きな物：相手を驚かすこと

苦手な物：波の音

天敵：正義の味方

魔術属性：火

イメージカラー：デュープレッド

@製作者コメント

物語の中盤を支える『魔術師同士で壮絶な戦闘を繰り広げるマスターの片割れ』。魔女と悪魔をモチーフに作られた(大嘘)、トンデモ系魔女です。聖杯を得るため、令呪やサーヴァントを躊躇なく使い捨

てることを念頭にキヤラクターを考えていったが為に、こんな怪物になつてしまいました。

長身に、赤を基調とした衣装。戦闘の際、所々使われる貫手・・・モチーフは言わずと知れた英国淑女に従えるスパー吸血鬼です。今はもう腕が肥大化しすぎて有名ゾンビゲームのボスキヤラみたいになつてますが・・・。

第三十一話 『斯くして来たれり』

第三十一話 『斯くして来たれり』

その男の生涯は、劍と共にあった。

男は劍を愛し、劍もまた男を愛した。

男は劍を愛するが余り、家を捨て脱藩までした。江戸にて劍を学びだけで飽き足らず、友と共に武者修行の旅さえ行つた。そして激動の時代、その終焉まで劍を振るい続けた。

劍は男を愛するが余り、天与の物を男に与えた。その劍は多くの劍客に見込まれ、如何なる戦場でも武功を上げさせた。そうして武士の時代、その終焉まで男を生かし続けた。

一つの時代が終わり、同士を喪い、身体が老い衰えても男は劍と共にあった。男も劍も、互いに互いを手放そうとはしなかった。

それはまさに、運命に他ならなかった。

そして、男は死の二年前、若き頃に仲間達と描いた戦いの軌跡をある記者に話した。それは回顧録として当時の新聞に記載され、彼の死後には名を変え出版もされた。

男は、時流によつて悪と乏された同士達の名譽を守つた。そして彼が生涯に渡つて行つてきた同士達の顕彰は実を結んだのだ。

しかしその実は、いびつに歪んでいた。

口伝による誤解、記録による曲解、他の資料との擦り合せ——結実した名譽は同士達の肖像を捻じ曲げ、本来の姿とは似て非なる姿が人々の心に残されてしまった。

……そう、全てはこの記録によつて歪んでしまったのだ。

僅かな街灯だけで照らされた、人気のないパーキングエリア。キャスターはその中央に立ち、懐から一冊の古書を取り出す。

『新選組顛末記』——キャスターが新選組の亡霊達を召喚させる為に用いる宝具であり、その後の時代を生きる人々から本当の新選組の姿を遠ざけた忌々しい記録である。

これらの間違った記録が、人々の心中に残された英雄の姿を歪ませた。その経歴も、実力も、信念も、性別すら……。

生き残った数少ない仲間の中には、それを良しとする者もいた。誉れるべき過去を黙して語らず、絶えず変化する時代に適応していくあの男にとつて、その変化も誤りも、また許容し利用すべき事柄なのだろう。

しかし、キヤスターは許せなかった。他でもない、自分自身が蒔いた種であるが故に、間違いは正さねばならぬと決意したのだ。

キヤスターは聖杯にその望みを託した。この世界に広く深く残された、新選組への間違った記録を正す——それこそが、キヤスターがこの聖杯戦争に挑む目的だったのだ。

だが、その煮え滾るような野望も今や塵と消えようとしている。マスターであるウイリアム・シンは死に、キヤスター自身も彼の令呪三画の魔力によって辛うじてこの世界に留まれているに過ぎないのが現状である。

「……ふん」

皮肉なものだ。

今や頼れるべきものは、この刀と……捨て去ろうと躍起になっているこの宝具だけとなったのだから。

キヤスターは自嘲して目を閉じ、本を宙へと放る。

「竹ゆがみ 夢幻伸びゆく 武士の——」

次いで、口遊む。その宝具に秘められた神秘を、全力で開放する為

に。キヤスターの詠唱に、その古書は柔らかい光を灯して宙に留まり、ページはひとりでにパラパラと捲られる。

「——浮世に残せ 竹の花影」

その言葉が合図だった。本に灯っていた光は爆発的な勢いで溢れ出し、暴風を生む。その光は本から外れたページを伴って本を中心に大きな渦を作り、その範囲を伸ばしていく。

その眩い光は澄んだ夜空を煙らせ、煌々と実像を惑わしていく。

そして、キヤスターは衣服をはためかせながら、影さえ差さぬその

狂気の光の中に立つ。

……否、もう一人ではない。彼の背後には、彼自身の妄執が召喚した亡霊達が、武装した幾多の新選組の隊士達が各々武器を携えて立っていた。

またキャスター自身にも、変化があつた。彼の身につけていたハンチング帽は暴風によって飛び、袖口をダンダラ模様になく染め抜いた浅葱色の羽織——新選組の象徴とも言える羽織を肩掛けにしていた。

そして、彼ら壬生狼を中心に周囲の土が土墨と盛り上がり、五芒星の壁を創り出す——永倉新八が参戦することのなかつた新選組終焉の地、幻想の五稜郭が空間を歪めて浮かび上がってきた。

「……ウイリアム君。君がくれた、奇跡の一夜だ。私は、私の道を進むよ……どうか軽蔑しないでくれ」

キャスターは左手に持っていた日本刀を腰帯に差しながら、今や亡き友にそう告げた。

そして、開眼する。その相貌は狼のように鋭く、眼光は魔のように朧げだ。

「もう悔いは残さない……くたばるまで、殺し続けよう」

一月二十九日、午後九時三〇分。

日坂市郊外、無人のパーキングエリアにてキャスターの宝具『夢幻妄執城塞 五稜郭』が解放された。

秘されるべき宝具の、大規模な展開。この事態を重く見た監督役——マリオ・アルバーニ神父は連絡のつく亜種聖杯戦争の参加者全てに事態解決までの戦闘を禁止、キャスターの打倒を要請した。

また聖堂協会は昨日のテロ事件とこの騒動を関連付け、爆薬が仕掛けられたというダミー情報を流した。その情報を事由にパーキングエリア周辺の立ち入りの一切を規制。対テロ部隊に扮し大規模な境界を張った。

これにより、日坂市と他市を繋ぐ高速道路は封鎖、突然の騒ぎで混乱していた通行車両はそのままに、乗車していた一般人は皆強制的に退去された。

そうして、事態発生からおよそ一時間後……要請を受けた代行者と、そのサーヴァントが現地へと到着した。

脅威で張り詰められた静寂を低く唸るようなモーター音で切り裂き、乗り捨てられた車の間をマシンの性能とテクニクで駆け抜ける。

シユウジはモトクロス用に設計されたバイク、ホンダ・CRF450Lで現地へと急いでいた。

現地までの移動手段として聖堂協会から支給されたバイクだが、それに乗る彼自身は上着であるキャソックだけを脱ぎ、あとはフルフェイスヘルメットを被っているという乱暴なものだった。

「……………」

車線を踏み越え、時には前後の車両とクラッシュしている。乗り捨てられ放置されている車両は文明が、理性が残した抜け殻のようにシユウジは感じていた。

ならばここに残るのは、野蛮な暴力だけだ。

シユウジは光溢れるパーキングエリアに充分近づいたと判断し、ブレーキターンでバイクを急停止させる。霊体化した状態でシユウジと並走していたセイバーも、彼のすぐ脇に降り立つと同時に実体化した。

「まったく……次から、次へと……ッ」

「それが戦争というものだ。落ち着け、シユウジ。まずは受け入れろ」

毒づくシユウジに、セイバーはそう助言する。

「それが強者の姿勢だ。受け入れて……そこからどう動き、そしてどこまでやれるかということだ」

「……まずは、キャスターのこの暴走を止める。だが……あのアレクシアが、この混乱を利用しないはずはない」

「同感だな。しかし、今からあの魔女を探している時間はない」

それに。と、セイバーはチラリと背後の様子を伺う。

「どうやら、向こうも大人しく待ってくれやしないようだ」

何のことだ。そう聞く前にシユウジはバイクを停車させ、そこで気

づく。

バックミラーに映った光景と、その異音。金属製の防音壁を重い刃物で引つ掻く、本能に訴えかけてくるような不快な音。そして、手にした斧を壁に押しつけ、垂直に下ろすことで掻き鳴らす大男の姿を。

「バーサーカー……」

シユウジはバイクから降り、ヘルメットを取ってバイクの上に置く。その隣でセイバーが肩をすくめた。

「ハハッ……気づいてもらえず、嫉妬してしまっただかな？ バーサーカー」

長剣を実体化させ、煽るセイバー。対してバーサーカーも、口元に浮かべた笑いをさらに凶悪なものへと変貌させ、肩を震わせる。

「……騎士様に似合わぬ、無礼な物言いだ。嗚呼……こう虐められちまったら、詩の天才であるこの俺様もなあ」

理性が、利かなくなる。

狂戦士はそう言うのと、握っていた斧を横薙ぎに振るう。

腰を切らぬ、片腕での荒い一振り。その一撃だけで、金属製の防音壁は引き裂かれ、悪魔の角のような大きなバリを壁に残させた。

「面白」

セイバーはシンプルにそう言うが、その剣先は未だ地面へと下げられたままだ。その態度が気に入らなかつたのか、バーサーカーは一步、また一步と、こちらとの間合いを踏み犯していく。対してセイバーも、シユウジから戦いを遠ざけようと横に歩いていく。

「ちよつ……ちよつと待ちなさい！ バーサーカーツ！」

そして、そんな彼を止めたのはやはりというか、彼のマスター——レオポルディーネ・ミローネだった。彼女は路肩に停めていた車から飛び出て、英霊達の間割って立つ。

「話、聞いてた!?! 今は協力して、キャスターだけを狙うって……というか、何でも『狂化』ランク上がったんよ、おいコラァ！」

「……ケツ、こんなの、ただの挨拶だよ」

「挨拶で『狂化』ランクを上げんじやないわよ！」

主人の怒りをどこ吹く風と嘯くバーサーカーと、自身より遥かに強

大な英霊に蹴りを入れるマスター。

そんな光景に笑い、それをシユウジは咳払いで隠した。

それから、目に留まる。レオポルディーネの車からもう一人、女性が降りているのが。彼女はこちらに軽く会釈すると、この状況に臆することなくキツとキャスターの光を睨む。

「……………」

一目で分かった。行方不明になっていたはずの、ライダーのマスター——佐藤真波だ。

“…………どうやら、ウィリアム・シンの戦いも実を結んでいたようだな”

いつの間にかこちらへと戻ったセイバーが、佐藤を見ながらそう念話で告げる。その言葉に、シユウジも黙って頷いた。

それに…………この目で彼女を見たのは初めてになるが、彼女を取り巻く雰囲気、気配にシユウジは驚かさられていた。

この聖杯戦争に巻き込まれた、ただの女子高生。そう聞き及んでいたが、どうやらそれは、経歴の上でのことらしい。彼女の体格、佇まい、眼光…………左腕に取りつけられた義手さえ霞むほどに、彼女が並ではないと思わせる情報が多い。

「……………」

それと、あの連中——読水竜也とランサーは来ていないようだ。

話すべきこと、渡すべきもの、色々あったが…………しかし、この状況下で連中は逃げ隠れするつもりか。あの運び屋め、ふぎげやがって。何が、行けたら行く、だ。

「……………」

と、そんなことを考えていたシユウジのポケットで、ケータイが鳴る。電話だ。

取り出して画面を見る。電話の相手は読水ではなく、鑑宮だった。

「…………もしもし?…」

「私だ。まったく…………大変なことになったね、代行者殿」

通話した途端、そう言う鑑宮。他人行儀なその言葉に、シユウジは一変に顔を曇らせる。

「こんな状況です。要点を」

「ああ、そのつもりだ。今、監視カメラの映像から、そちらの様子と向こうの様子を確認している。どうやら例の新選組の亡霊が、大挙してそちらに押し寄せてきている……それも、完全武装だ」

鑑宮の言葉に、シュウジはパツと光の方向を見る。その状況を察したのか、あるいは既に気づいていたのか、セイバーとバーサーカーは高速道路の通りに立ち塞がるように並び立つ。

「数分と待たず、カーブの向こうから姿を見せるはずだ。しかし、ここでそれを無視すれば、連中は街へと向かってしまう……それだけは、させる訳にはいかない。そうなれば、聖杯戦争の体裁は一気に崩れる」

「……ここにいる我々に、その大軍を相手取れと？ 一般人である、ライダーのマスターもいるんですよ？」

「落ち着いて聞いてほしい。私は、キャスターの真名と宝具の性質を掴んでいる」

「……………」

予想外の発言だった。

それと同時に、合点がいく。ウイリアム・シンの鑑宮に対する行動が弱かったのは、これを予測してのことか。

聖杯戦争とは過去の英霊を使役し、共に戦い勝ち残りを目指す。その為に亜種聖杯戦争の序盤は……否、始まる前から既に、敵の英霊の正体や弱点を看破する為の情報戦が重要とされる。

誰よりも前もつての準備ができ、誰よりも情報を收拾しやすい主催者という立場……ウイリアムにとつても先立って倒すべき、探りを入れるべき脅威だったはずだ。

「映像による精査、それとアーチャーによる偵察の賜物だよ。私も、何も今の今まで自宅に籠もっていた訳じゃあない」

「どうだか。と、シュウジは心のうちで毒づく。シュウジは既に、元々地方の一魔術師に過ぎなかった鑑宮が、触媒のレンタル業で力を持ったことを知っている。」

意図的に流したのか、あるいは売り手から情報を得たのか、鑑宮は

ウィリアムがサーヴァントの召喚に使った触媒が何であるかを事前に知っていたのだろうか。

……いや、ひよつとすれば彼自身がウィリアムに直接売り渡した可能性だってある。あのウィリアム・シンが、主催者である彼と一切の協定がないと、誰が信じるだろうか。

「なら……貴方がキャスターを討つと？」

「いや、キャスターの能力の根底にある核……宝具の破壊を、アーチャーにやらせるつもりだ。宝具さえ潰せば、この騒ぎも沈静化できる。君達に頼みたいのはそれまでの足止め、そしてキャスター本人の相手だ」

君との共闘は、いつぞやの協定で禁止しているからね。と、鑑宮は言つてのける。その言葉に、シユウジはムツと顔をしかめた。

「……それを、あのバーサーカー陣営が呑むと——」

「彼女らは、既にこの提案を呑んでいる」

「……………」

手が早い。それとも、あの二人もまたこの男の手駒の一つなのだろうか。

シユウジは目を閉じ、外部からの刺激から遠のき考えた。この提案、受けるべきか、拒否するべきか。

シスター・セレネントーラからのデータにより、この男がどれほど危険な存在かは理解している。この男の聖杯への執念は並大抵のものではなく、きつと聖杯を手に入れる為なら、持つべき社会的理念をかなぐり捨てるはず……それが魔術師というものだ。

しかし、現在後方に控えているであろう聖堂協会に、このキャスターの暴走やアレクシアの打倒を一任するのも危険だ。それでは、十年前の悲劇以上の被害が起きる。それだけは駄目だ。

「……………」

分かっている……そう、分かっている。

セイバーのマスターとして、この聖杯戦争の参加者として、代行者として。

そして、この土地で生まれた男として、全ての脅威と立ち向かえ。

そう、心は決意している。

「分かりました」

シュウジはそれだけ答えると、電話を切った。

「セイバー、まずは前方の敵を掃討するぞ」

そしてセイバーに指示を与えつつ、英霊らの隣へと歩いていく。もう視界の先には、あの新選組の亡霊らが、鉢金や胴、籠手などの防具を施し、隊列を組んでこちらへと行進するのが見えていた。

「了解した、我が主」

セイバーは笑みを浮かべてそう応えると、横に立つバーサーカーを見上げた。

「よお、共同戦線だな？」

「……チツ」

「ちよつと、うちのサーヴァントはキレやすいのよ？」

そう口を挟むのは、バーサーカーのマスターであるレオポルディーネだ。

「淑女の前で、つまらない言い争いは止めなさい」

「フツ……失礼した、お嬢さん」

分かれば宜しい。と、彼女はふんすと鼻を鳴らし、それからシュウジと同じように英霊と並ぶ。そして腰に手を当てて胸を反らし、敵を限界まで見下した。

「こつちも暇じゃないのよ……バーサーカー、さっさと片付けるわよ？ 佐藤さんは隠れてなさい。貴方はもう、無関係なんだから」

「ミローネさん、まだ……そうと決まった訳じゃない」

佐藤はそう言うのと、揉むように義手の調子を確かめながら静かにレオポルディーネの横に付いた。

「確かめてみるよ、自分の命でね……」

「……そう。じゃ、私から離れないで」

レオポルディーネの言葉に、佐藤は頷き左手で拳を握る。

そんな様子をシュウジは横目で見て、それから正面を見据える。その脇に立つセイバーが、口を開いた。

「かくして、我ら来たれり……」

そして剣先を敵陣へと突きつけ、高々と叫ぶ。

「堂々の参上だ！ 征くぞ、キャスターツ！」

「——九時、三〇分頃発生しました、事故により、全ての列車の運転を、見合わせております。運転の再開は、現在未定となっております」

「……………」

「……………」

「——九時、三〇分頃発生しました、事故により、全ての……………」

「駄目っばいですね、これは……………」

「……………駄目、っばいな」

シユウジら各陣営が集結し、キャスターとの戦いを開始した頃。読水とランサーは未だ日坂市の中心から離れられないでいた。

元より、彼らと合流しキャスターと戦う気などなかった。ケータイでこちらの動向を確認してきたシユウジには、行けたら行くという、玉虫色の返事を返してやった。

しかし、読水は出来る限り近場まで接近するつもりだった。そうして状況を確認して、千載一遇の好機というものを待つつもりだったのだ。

それが、これだ。読水は地下鉄の改札の前で舌打ちし、運行停止の文字を左から右へと流していくモニターに背を向けた。

「聖堂協会の奴ら、手が早すぎるんだよ。こっちまで動けなくさせやがった」

「意図して、ですかね？」

「分かんが、とにかく公共の交通機関は全部駄目だ」

念話でそう結論づけると、読水はランサーと共に地上へと歩いていく。

「地上に戻って、移動手段を探すぞ」

「……………よろしければ、抱えて走りましょうか？」

「いや流石に目立つだろ、それ。その辺に停めているバイクでも盗むさ」

読水は階段を登り、上階であるデパートの玄関口から出て、目ぼし

い移動手段を求めて夜の街を歩く。市内でテロ騒ぎが起きているにも関わらず、周囲には未だ人が多い。しかも皆、異様な興奮状態にあるように見え、読水はその様子はどうにも気に入らなかった。お陰で、路駐の車両を盗むのにも心が傷まなさそうだ。

……しかし、キャスターの方から動いたか。それもこんな早く、大掛かりに仕掛けるか。

と、私服姿のランサーと路地などを歩きながら、読水はそう心の中で舌を巻いた。

マスターを失ったキャスターか、サーヴァントを失ったアレクシアか。共に起死回生の一手を必要とする以上、このどちらかが動くとは思っていた。しかし、ウィリアム・シンがアレクシアと戦い死んだのは昨日のことだ。

おそらくは、令呪の魔力で辛くも現世に留まっているであろうキャスターだ。一分一秒も無駄にできないことは分かるが、この行動の早さとやり方は予想外であった。

……これならば、昨日の今日で負傷が癒えないアレクシアは動けないかもしれない。読水がそんなことを考えていると、突如ケータイが鳴る。

あの代行者か。と、読水は苦い顔をしながら、画面の確認もせず電話に出る。

「……何だよ、嫌味の一つでも言いたいのか？」

「……あの、読水さん……ですよね？」

「……その声」

ライダーのマスター——佐藤真波だ。画面を見れば、彼女と以前に伝えられていた電話番号が表示されている。

「無事だったのか？ キャスターは？ 今、どこにいる？」

「……何とか、キャスターから逃げてきました」

歩くのを再開し、立て続けに言葉を述べる読水。その喧騒にランサーも状況に気づき色めきだちながらも、黙ってそれに続いた。

対して佐藤は疲労によるものか、反応が薄い。

「……………」

「……おい、大丈夫か？ とにかく合流するぞ。どこにいる？」

「はい……読水さん、今、どこですか？」

「……」

読水は赤信号によって交差点で止まり、そのまま耳を澄まして電波の向こう側の状況を探る。聴覚に意識を集中すると、途端に頭上から流れる歩行者注意の擬音が耳につく。

嫌な予感がしたからだ。

電話口の、佐藤の反応。言葉の数々。向こうからの質問。どれを取っても違和感がある。

「……ああ、もう良いですよ」

読水の疑いを他所に、彼女は素っ気ない言葉を呟いた。

「もう、見つけましたから」

その言葉は、すでに佐藤の声色ではなかった。

「マスターッ！」

ランサーが声を上げ、それと同時に読水も因果線を通じて気づく。交差点の向こう側。対岸の人混みに紛れ、長身の女がケータイを片手にこちらを見ていた。

炎のように揺らめいた赤髪が印象的な女だ。細く長い体のラインを損なわない黒衣を纏い、その上にトレンチコートを着ている。以前会った時は右腕が肥大化、異形のものとなっていたが、それが通常のサイズへと戻っている。

み、つ、け、た。

そう、彼女——アレクシア・ブロッケン唇がゆっくりと動き、ケータイを手元から地面へと躊躇いなく落とす。

そして、両岸を隔てていた信号が青色となる。

最早、周りのことを気にしている余裕なんてなかった。

読水は懐からリボルバーを引き抜くと、向かい側の信号機に向かって発砲。青色に光る灯器を破壊した。

一瞬遅れて悲鳴が上がり、周囲はたちまちにパニックとなった。

「走れ、ランサーッ！」

歩道も車道も関係なく逃げ去ろうとする者達をそのままアレクシ

アの視界を塞ぐ壁とし、読水は隣にいるランサーに向かって必要以上に大きな声で叫ぶ。

「ここじゃマズい……地下だ！ 地下鉄に戻るぞっ！」

「……………っ!? 承知しました！」

……………聞こえたな？

と、読水は駆け出しながらも、一瞬アレクシアの方へと振り返る。

そう、ここじゃマズい。ここでは、巻き込まれる人があまりにも多すぎる。

運行されていない地下鉄のホームや路線内なら、死ぬ人間も少なく済むはずだ。

読水とランサーは反応が遅れた人々の中に飛び込み、そのまま人混みを掻き分けてデパートの玄関へ。人気のない地下鉄を目指して、遮二無二に走り出した。

第三十二話 『盾の矜持』

第三十二話 『盾の矜持』

逢魔ヶ時。

「……………ッ！　ぐっ……………ゲハ……………ッ！」

骨の芯から、水気を帯びた炎が熾こっている。

骨に纏わりついた肉から、何かが炙り出されている。

生きる為に必要な体液が、限界まで絞り出されていく。

どこにでもある住宅街。

どこにでもある一軒家。

そこで、何か得体の知れないモノが生まれようとしていた。

昨夜、ウイリアム・シンとの決着をつけたアレクシアは、場当たり

的に決めた一軒家の一つに侵入し、隠れ家とした。

「……………ッ!!」

この変化が起こったのは、ここに身を潜めてからどれくらいの間
が過ぎてのことだったか。

体内を満たしていた万能感、肉体に潜んでいた力の源。

それらが一斉にアレクシア・ブロッケンという人間に牙を向き、彼

女の全存在を蝕んでいた。

洗面台の前で、アレクシアはかれこれ三時間は呻き、肢体を震わせ
ていた。

「……………ゲボッ」

この苦しみの原因、アレクシアは察していた。

封印指定された「時計塔」の魔術師——ウイリアム・シン。

彼との戦闘は苛烈を極め、多くの損傷をアレクシアに残した。

そして同時に、彼はアレクシアが狙っていた令呪——アレクシアと
融合しつつある異形を支える上で必要な魔力源を守り切った。

戦闘で失った魔力。そして幾多のダメージを癒やすのに絞り出さ
れていく魔力——アレクシアの体内は、完全に魔力の枯渇状態にあっ
た。

右手に残された一面の令呪、今ここで使う訳にはいかない。異形は、肉体の外側から魔力を補充しようと藻掻き、その藻掻きは飢えとしてアレクシアを襲った。

この家屋に住んでいた「肉」、取るに足らぬ三人ほどの魔力をアレクシアは食らったが、しかし、そんなものではまるで足りない。

故に異形は、肉体の内側までも食らい始めた。

食らうは先ほどのものよりずっと上等な、甘美な、魔女の血肉。

元は別の存在とはいえ、アレクシアは融合した異形——己自身に食い殺されようとしていたのだ。

「くくっ……自食作用、と言ったかしら……?」

飢餓状態に陥った細胞が、自身の生存に必要なタンパク質を分解することで生命活動に必要なエネルギーを作り出す。一個体の生命を賭けエネルギーを生み出すという、文字通り命がけの行為だ。

そして、もう一つ。

自食作用には、重要な役割がある。

「……分かる、食い潰しているのを感じる。お前のこれまでが……私の、記憶を……!」

アレクシアの脳裏に、見知らぬ光景が走馬灯のように浮かんでは消えていく。

「ビースト……人理、焼却……」

自食作用にはエネルギーを得ると同時に、古くなった細胞を栄養源に新しい細胞を生み出す役割も担っている。

そう、アレクシアと体内に潜む異形——二つで一つであるこの個体は、新しい境地へと至ろうとしていた。

残る問題は、それまでこの肉体が持つか。

そして、その主導権は誰が握るかだ。

「そうか……分かってきた」

お前が、この肉体を奪おうとしている理由。

この世界を焼かんとしている理由。

人間が不完全ながらも歩んできた歴史を否定し、零から正そうとする人智を超えた所業。

それは、アレクシア・ブロッケンが受け入れるには大きすぎる怒りであり。

それは、一人の人間の心を砕くには充分すぎる憐れみであった。だが……。

「負け犬が……なんて、虫唾が走る遺志だ」

彼女の心は内側に入り込むそれを、真っ向から否定した。

「良く聞け……この人外の、化け物が……！」

アレクシアは目の前にあつた鏡に手を置き、自身の顔を睨む。垂れ下がった赤髪の合間から覗く、既に人非ざる妖光を帯びたその瞳を、人間であるアレクシアは睨む。

「不完全であるが為に、人は苦しむ。だがこの苦しみは、私達だけの苦しみ……私達だけの、未来へと繋ぐ渇きだ」

「……………」

「お前の憐憫などいらぬ。人類は、この渇きによって強くなる…………ツ！」

「……………」

次元を超えて注ぎ込まれる膨大な情報に飲み込まれながらも、アレクシアの脳裏にはある光景が焼き付いたまま残っていた。

それは十九年前——ルーマニアの空に見た、幻想的なあの光景。エンディング

幼き頃に恋焦がれていた邪悪な竜が、人類の夢を抱えて飛び去っていく。あの最後を、仲間に裏切られ黒海を漂っていた彼女は見た。

置いていけ。と、若き頃の魔女は叫んで手を伸ばした。

当然、声も手も、届きはしなかった。

しかし届かなかったからこそ渴望し、いずれはと、宙を目指すのだ。そしてアレクシアは、その渴望を満たす為には手段を選ばない。

だから。と、アレクシアは目の前の異形を睨みながら頬を釣り上げる。力無く鏡に添えられていた手は血管が浮き出るほどに脈動しており、その指先は鏡面にヒビを入れていた。

「搾り取らせて貰う……ツ！ 醜く飛散したお前の残り滓、全てを喰らって私は……私が、アレを手に入れるツ!!」

駅前の人混み。

所々で報じられるテロで沸き立つ異様な熱気。

その中で、銃声は大きく響き渡り。その事實は、弾発的に上がる悲鳴によって速やかに広まり、小波のように揺れて震え、やがて事実以上の大渦となる。

読水が引いた銃弾は、瞬く間に駅前の大通りを大混乱へと引きずり込んだ。

「地下鉄だ！ 行くぞ、ランサーツ！」

周囲の混乱に負けぬように叫び、人混みを掻き分けて読水は地下鉄に通じるデパートへと走る。その後ろをランサーが、読水の盾になるよう後方を気にしながら追う。

周囲の通行人は、読水が事の発端である銃声を放った張本人であることを認知していない。読水達は既に発砲した交差点から五〇メートルも移動している、周囲の人間は銃声ではなく波のように迫った混乱に恐怖し、さらなる混乱を生んでいるに過ぎない。

デパートの中へと入り込めた。

地下鉄への道は、ロビーを直進し飲食品を扱った区画を横切った先だ。しかしこの辺りの人間は未だ現状が分からず逃げて来た人々を好奇に満ちた目で見ていたり、ケータイを構えてカメラで現状を撮影していたりしている。

「……チツ」

ウザったい。と、読水は拳銃を見せつけるように上げてみせ、そのまま天井に向かって発砲。ほんの数秒後には、読水を中心に新たな混乱が広がっていた。

パニックに陥った人間の反応は様々だ。周囲に視線を巡らせその場に留まる者、周囲の頼れる何かに縋る者、ただただ大声で叫ぶ者、混乱のない地点目掛け走る者……読水は運び屋としてこうした環境を利用し、幾度も敵から逃げ切ってみせた。英雄だろうが極悪人だろうが、この混乱から特定の人物を追うのは難しい。

そう、だから、ゆっくり来い。目的地は伝えているんだから。

読水はそう嘯きながらロビーを小走りで走り、こちらへと歩み寄っ

ているであろうアレクシア・ブロッケンを思う。

運行が停止している現在の地下鉄なら、この戦いに巻き込まれる人は最小限に抑えられる。アレクシアを振り切るのは、その後でも良い。そう、読水は考えていた。

しかし……それは思い上がりに過ぎないことが直後、分かった。

後方から紫色の光が瞬く、直後、音と風が読水の背中を打ち、さらに店内の奥へと突き抜けていった。

「おわっ……」

思わず声が溢れ、体を折って身を縮める読水。そのままの覚束ない足取りで、彼は横に逸れ商品棚の方へと身を隠した。

何があったか。商品棚を背に、振り返ってみれば、既に破片などから守ってくれたのであろうランサーが通路を仁王立ちしており、その向こうには、先ほどいた出入り口が魔力によって吹き飛ばされているのが見えた。自動ドアの外枠が内側へと押し折れており、そして床には、あの爆発に巻き込まれたのだろう。正面玄関から読水から逃げようとしていた数人が砕けたガラスと共に転がっている。

「…………ツ」

劇的な破壊の光景に体を硬直させる読水。その目に、地に伏したまま呻く彼らの姿が映る。その体には、幾つものガラス片が突き刺さっていた。

「…………あの、野郎ッ！」

躊躇なく、ブツ放しやがった。

読水の首筋から頭にかけて、ドクドクと熱いものが込み上がってくる。それに比例し、読水の硬直していた体が解されていくのを感じる。

「マスター、あいつが来ます！」

ランサーからの、因果線ライオンでの警告。読水はハツとし、玄関口を睨む。アレクシアだ。破壊された石膏の破片で煙る正面から、不敵な笑みを浮かべてデパート内部へと入ってきた。

「読水竜也……運び屋、か」

実に良い物を運んできた。と、アレクシアは眩き笑う。

「……アレクシアッ！ てめえ！ これだけの事をやっておいて、どうなるか分かっているのかッ!?」

「今更だろう？ 運び屋」

彼女はそう嘲るとズイツと前へと踏み入るが、そこでランサーが十字槍を実体化させ、中段に構える。アレクシアは最初、その槍に気圧されるように歩みを止めたが。

「……今更だ」

そう改めて告げると、グツと身を沈める。

そして、一息にランサーへと飛び掛かった。

その迫力に目を見張るが、肉薄するアレクシアにランサーは対応。戦国時代以前の槍兵がそうしてきたように、槍先を敵に突きつけ片膝立ちになり、迎え撃つ。

しかし、アレクシアの突進は騎兵の突進以上の突破力があつた。両者は激突するや否や、ランサーは呆気なく横へと跳ね飛ばされる。

槍を取り落とし、床を転がるランサー。そんな姿を見つけると、アレクシアは息をつく間も与えずにランサーへと向かう。

両手を床につけ、ガバつと顔を上げるランサー。そこへ、アレクシアは躊躇なく頭上から貫手を打ち込む。

それに対しランサーは、四足の体勢を起こしながら自らアレクシアへと飛び込む。

ランサーが腕でアレクシアの貫手を受け流し、アレクシアの懐へと潜り込んだ。その瞬間だった。

「シイエいつー！」

気合の掛け声と共にランサーが身を翻したかと思えば、アレクシアの上半身が彼女の頭上を乗り越え、両足が天井へと跳ね上がった。そして、アレクシアの長身がランサーの真下へと引き落とされる。

柔道の、背負落という投げ技だ。現代でも使われている技だが、武に疎い読水には、実戦で使われるそれが超人的な技法のようにしか見えない。

「……………ッ」

受け身すら取れず、まともに背中を打ちつけたアレクシア。しか

し、その笑みは未だ崩れてはいない。それを確認し、ランサーは素早く立ち上がるとバックステップで距離を取り、印を結んで槍を回収し身構える。

「……楽しませてくれる」

目を血走らせて、後頭部に手をやりながら凶悪な笑みを浮かべるアレクシア。ランサーはそんな彼女を前に、どつしりと槍を構え呼吸を整えていく。

再び、アレクシアが獣のようにランサーへと迫り、その凶手を奮う。ランサーはアレクシアの攻撃を槍の穂先で受け流し、槍の柄を両手で操作——柄を器用に使って前へ前へと迫るアレクシアの体を引っ掛け、立ち位置をくるりと入れ替えた。

思わぬ絡め手に体勢を崩し、アレクシアはそのまま数歩ふらつき、壁に両手を突いてしまう。ランサーは歩法で素早くそんな彼女の背後に付き、槍を中段に構え……そして、振り返ったアレクシアを滅多突きにした。

そう、ランサーにはこれがある。読水は思わず拳を握る。

戦場の勇者と評されたセイバーと戦った。

人間であるかさえ分からぬアサシンとも戦った。

古の巨人のような力を持つバーサーカーとも戦った。

いずれも、ランサーや読水の常識を超えた能力を持った、正に英霊であった。対し、ランサーの槍は地に足の着いた術技によって裏打ちされている。

故に、異形と化したアレクシア相手でも揺るがない。じゃんけんのような相性がないが為に、絶対的不利には決して陥らない。

「フツ……」

小さく呼吸を吐き、槍を打ち込むランサー。

喉、心臓、肺、肝臓、大腿部。

人体の活動を停止させる上では一撃で事足りるそれらの急所、しかしそれでは最早この怪物は止まらない。

故に、八つ裂きにし徹底的に破壊する。

ランサーは腰を据え、槍を奮ってアレクシアの体を潰しにかかっ

た。

それは、まさに電動式ガトリングによる制圧射撃のようであった。本来ならば、一瞬で肉塊となる高速の連撃。

だが、アレクシアの身体はそれに耐え、あまつさえその速度に対応した。

一本の槍を音速に近い速度で突き、手元に引き、また突き込むランサーの乱れ突き。

その槍の引き際に合わせ、ズタズタになった顔に笑みを浮かべてアレクシアはランサーへと迫った。

ボールでも投げるような、アレクシアの大振りの一打。ランサーは身を反らしてその殴打を辛くも躲す。

続く二打目、三打目と、アレクシアはテレフォンパンチを間なく繰り出す。その度にランサーはそれらを掻い潜り、その度にデパート内に陳列された商品の数々が舞い飛び、棚が音を立てて倒れる。

そうしてランサーとアレクシアは、本格的な乱撃戦を繰り広げていく。

「……………」

読水は商品棚から身を乗り出し、その戦いを見守っていた。この様子じゃあ援護は愚か、ランサーと地下鉄に逃げ込むのは困難だ。

周囲にはもう人気もない。ここで戦っても他に被害が及ぶことはないが、ここでは読水が考えていた作戦は実行できない。

どう手を打つべきか。と、読水は背を棚に預け天井を仰いだ。そこで、ふと近くに転がっていたモノに気がつく。

それは、人間の左腕だった。

「……………」

皮膚の張りから察するにまだ若い者の腕のようだ。その人差し指の付け根にはタコができておりヒビ割れた皮膚が幾つも重ねられていた。

読水にはそれが、この腕が作り物でない、名も知らぬその誰かが確かに生きてきた証にも見えた。

その腕の主は、きつと先ほどの爆発で腕を飛ばされたのだろう。積

み重ねてきた過去の一つを地面へと落とし、未来は奪われた。

あいつが、奪ったのだ。

佐藤真波——彼女の時のように。

許されるべきことではない……否。

「……許して、溜まるか」

読水はそう呟くと左手で握った鞆を地面に置き、がばつとそれを開いた。

同時刻。

キヤスターを止めるべく高速道に集った面々は、キヤスターが作り出した新選組の亡霊と戦鬪を繰り広げていた。

しかし、それは一方的な蹂躪に他ならなかった。

銃列の一斉射撃を受けながら前進し、後退し遅れた隊士達を蹴散らしていくバーサーカー。

一斉に斬り掛かってくる隊士達を、横薙ぎ一閃でまとめて斬り伏せてしまうセイバー。

英霊二騎を中心に、前線は膠着することなく押し上げられていく。

「圧巻ね」

そんな光景を目にし、その後方で『人払いのルーン』を刻んでいたレオポルディーネは、腰に手を当て溜息をつく。

「そろそろ前に出るわよ。佐藤さん、警戒をお願い」

そう言って彼女は愛車——ファイアット500Cへと乗り込む。彼女の隣にいた佐藤は、言われた通りにこちらへと迫る敵がないかを確認していたが。

「……ミローネさん、もう車は置いていって良いんじゃないですか？」

と、口にできていなかった疑問を、ここでようやくレオポルディーネにぶつける。

戦いが始まって十数分、幾度も前線が進み、彼女はその度に車を前へと移動させていたのだ。

「このまま移動する度に車に乗るの、面倒じゃありません？」

「佐藤さん、言いたいことは分かるけど、そうやって面倒を嫌って物事

を簡単にしては、いざって時に備えていたものは使えないわ。それに……」

「それに？」

「大切なものは傍に置いておかなきゃ。愛車を壊されちゃ、堪らないわ」

「……………」

「どうやら戦術的な価値以前の、個人的な拘りらしい。論破しようもない。」

呆気にとられている佐藤。しかし隊士が足元まで転がつてき、それに驚いて飛び下がることで正気を取り戻した。

「油断しないよう。彼らであっても、この数を全部相手にはできない」
と、そう言うのはセイバーのマスター、シユウジ・アルバーニだ。彼はどうかやら手にしている直剣——黒鍵を投擲し、佐藤に斬り掛かろうとした隊士を倒したらしい。

「あ、ありがとうございます………」

「……………それにしても、少し妙ですね」

シユウジはそう話題を変えると、前線の方を見る。そして腕を撓らせて黒鍵を投げ、複数の隊士を消滅させてしまう。

「こちらと一戦交える気でいたキャスターが、サーヴァント相手にただ数に物を言わせて戦っている……本人も来ていない」

「まだ、何かある？」

「そう考えるのが妥当でしょう。だからこそ、気をつけてください」

シユウジの予想は、的中していた。

「出てこいよ、キャスター！」

隊士の胸ぐらを掴んで自動車の天部へと叩きつけたバーサーカーは、そう息巻いた。

「こんなじゃ夜が明けちゃうぜ！ いい加減隠者の仮面を外し、その首、俺の前に晒してみせろ！」

天に吠えるバーサーカーを取り巻き、攻め入れないでいる隊士。しかし彼らの円の後方から、一人の剣士がバーサーカーへと歩み寄り、

隊士達は道を譲るように左右へと割れていった。剣士はそうしてバーサーカーへと近づきながら、徐々に歩を早めていく。

「へッ、今度の奴は手応えのあ……おわっ!？」

調子づいていたバーサーカーだが、その言葉を最後まで言い切ることはなかった。

加速し、地面を蹴って飛び込んでくるその剣士が、弾丸のような速度で突きを放ってきたからだ。

咄嗟に地面を蹴って、突きを躲すバーサーカー。剣士が放った突きは車に当たる。その衝撃は凄まじく、既に天部がへしゃげていた車は横までくの字に曲げ、う裏返しになってしまう。

——左片手一本突き。

その技の意味するところをバーサーカーは知らぬが、その剣士が他の隊士とは比較にならない使い手であることを、その一撃で理解した。

「……面白えー!」

バーサーカーはそう叫ぶと、手にしていた斧を両手に持ち直し、体を上下させリズムを取り始めた。

一方、セイバーもまたこれまでの隊士とは一線を画す存在と会敵していた。

二合目、三合目と、セイバーのロングソードと隊士の日本刀が打ち合わさり、火花が散る。セイバーと切り結ぶ隊士の両手には大小がそれぞれ握られていた——二刀流だ。

これまでの隊士達は、全て一撃で屠ってきたが、この大柄な隊士は三合目も斬り合ってみせた。

その技量に敬意を抱くも、それでもセイバーは容赦なく攻めた。難攻不落な二刀の守りを突破し、隊士の横を飛び抜け胴を払う。

しかし、隊士は倒れない。隊服から切られた鎖帷子の一部を落としながら、ギリギリと身を反らしてセイバーへと振り返る。

「……ほう」

その様に、セイバーの口端が上がる。

横一文字に剣を切り払い、敵が二つと割れなかったのはいつ以来

だったか。セイバーは改めて敬意を剣にて示し、隊士と向き直った。

佐藤とシュウジは、そんな二人の戦いを後方から無言で見っていた。

「……マズいな」

先に口を開いたのは、シュウジであった。

「二人がアレに掛り切りだと、押し切られる」

佐藤も黙って頷く。数で勝る新選組に対しこれまで優勢でいられたのは、サーヴァントである二人の尋常でない戦力があつたからだ。その二人が動けないとなると、残ったマスター達であの数を押し止めなければならぬ。

強敵と戦っているセイバーやバーサーカーの脇を抜け、隊士達がぞろぞろとこちらへ前進してくる。その光景に、佐藤は息を呑んだ。パツと見ただけでも、三、四十の武装した亡霊が、こちらへと迫ってきているのだ。

やれるだけ、やってみるか。と、佐藤は義手となって左腕の感触を確かめる。その冷たい手には、本人の意思に反し汗一つかいていないのが逆に不気味だった。

「……ここはお任せを」

そんな様子を見てか、シュウジが黒鍵を手に前に出た。

「あの……」

「佐藤さん。貴方は後ろの彼女と、何か手を打ってください。それまでは私が食い止めます」

シュウジの言葉に、佐藤は背後のレオポルディーネを見る。愛車に乗っている彼女は今、電話で誰かと話しているらしく、彼女の興奮した声がこちらにも聞こえていた。

「……大丈夫、でしようかね……って」

シュウジに向き直った佐藤は、そこでシュウジが佐藤の返答待たずに前へと駆け出してしまうことに気づいた。

「……………」

「佐藤さん、ちよつと！ ちよつと来てー！」

「……………」

協調性の欠片もない。溜息をつく佐藤だったが、窓を開けてこちらへとブンブン手を振っているレオポルディーネの声にもう一度溜息をつき、それから彼女のもとへ駆け寄った。

「何ですか」

「轟木からの電話よ、緊急の」

「いや、これ以上の緊急事態であるんですか？」

「いいから出て？」

「……もー」

根負けし、佐藤は差し出された彼女のケータイを手取る。

「……轟木さん、佐藤です」

「佐藤さん。状況が状況ですので、要件だけお伝えします」

電話に出るなり、ミローネ家の執事、轟木はそう切り出した。

「貴方の携帯電話のデータを復元したのですが、データは空っぽでした。どうやら中身のSIMカードを入れ替えられたようです」

「SIMカード……つまり、ケータイは壊されたんじゃない、盗まれてる？」

正式名称こと知らないが、現代に生きる女子高生だ、SIMカードがケータイのデータを管理している記録媒体であり、契約者個人を識別しているものだということは理解している。

「ええ……恐らく、あの魔女の仕業です」

「アレクシア……」

「携帯電話を破壊したのは、データを奪ったことを悟らせない為の工夫でしょう」

佐藤さん。と、轟木は改めてそう呼び、こう続けた。

「貴方が持っていた携帯電話のデータを使って、彼女に何ができるかをお考えください」

その言葉に、佐藤の血の気が引く。

そうだ。奪われたデータには、読水と交換した連絡先が、彼の電話番号もあったはずだ。

また、あいつにやられた。

佐藤は歯噛みしながらレオポルディーネにケータイを返し、街の方

を見やる。アレクシアへの警戒を、キャスターと約束したのに……まんまと利用されてしまった。

「……………」

しかし、まだ手はある。

佐藤はそう考え、拳を固める。こちらには、彼らがいる。その為に、佐藤はリスクを犯して、彼らと接触し行動を共にしているのだから。

「シユウジさんッ！」

佐藤は意を決し、その名前を叫んだ。

息をつく間もないランサーとアレクシアの乱打戦は、苛烈の一途を辿った。

元より、フィジカルが違う。技量で勝るランサーに対し、アレクシアの身体能力は最早サーヴァントを凌駕している。

故に、乱戦になればなるほど、アレクシアは有利となる。作戦や意図も通らぬ速度と混乱の中で、ラッキーパンチの一つでも入れば状況を一転させられるからだ。

そして、その時は遂に訪れた。

アレクシアの右拳が、ランサーの腹部を捉えたのだ。

「ゴ……………ッ!？」

その一撃にランサーの顔が歪み、動きが止まる。

右拳に続く、アレクシアの左。蛇のように伸びるその手からは逃げられず、ランサーは首を捕まれ次の瞬間には体を宙へと浮かされてしまった。

「く……………」

ランサーは左腕一本で持ち上げられながら、アレクシアを睨む。対して、アレクシアは返す刀を求むように小首を傾げた。

そんな中で、槍でズタズタに破壊されたアレクシアの体が治癒されていく。

切れた皮膚からは、赤光する眼球が覗く。そして、まるで涙に代わるように煙が上がり、傷口は目が閉じるように完治してしまう。

その光景は、まるでランサーの奮戦を嘲笑うようで。

この結果は、サーヴァントとの戦闘という無謀を否定するには充分すぎる成果であった。

そしてアレクシアは、そんな結果の仕上げに取り掛かる。

「……流石のサーヴァントも、首をもがれれば死ぬだろう？」

そう言つて、左腕に力を込めていくアレクシア。

しかし。

「油断しすぎだ、ブロッケン」

いつの間に近寄つたのか、先ほどまで隠れていたはずの読水がアレクシアの横に立ち、彼女へと右腕を向けている。

読水の右腕は魔術的な光によって鈍色に包まれ、長い銃身を構築している。まるで腕そのものが、銃そのものになったようだ。加えて読水の右手には、掌に収まらぬほどに長い銃弾が握られていた。

アレクシアはランサーを持ち上げたままの姿勢で、そんな読水を横目で見ると、それからゆっくりと、口を開いた。

「……運び屋、お前の——」

「撃鉄、うちがね点火——！」

聞く耳を持つ。そんな余裕など、読水には欠片もなかった。

読水は躊躇なく、投影魔術によつて作られた銃身を用い、弾丸を射出させた。

重々しい発射音。

殺意敵意を以つて籠められた火薬が弾ける。

衝撃が、空気の壁を叩き割る。

凄まじい反動で、読水の体は後方へと仰け反つた。

そして、アレクシアの体が掴んでいたランサーを置き去りにして真横へと飛ぶ。地面に体を打ち付け、バウンドして商品棚に直撃する。

読水はアレクシアが商品棚と一緒にゆっくりと倒れ込んでいき、音を立てて落ちたのを見送つてから、衝撃によつて迫り上がった横隔膜に押し潰れた肺に酸素を送るよう呼吸を再開した。

「……ハア、ハア……よし」

読水は尻もちを付いたまま、息を切らしながら右腕の得物——既に全身にヒビが入っている銃身に術を通し、霧散させていく。

「マスターッ！」

そんな読水のもとへ、自由を取り戻したランサーが駆け寄ってきた。

「ランサー、無事か!？」

「はいッ！ 助かりました……！ しかし、その腕……」

「分かってる！」

読水はそう声を張り上げ、自身の右腕を睨んだ。その手は並ならぬ反動によって痙攣を起こしており、指先には火傷も負っている。

「……一発で、コレか」

リスクは予想通り、大きかった。

しかし、読水の唇の端は上へと向く。右腕の痛みだけでは、覗く犬歯を隠すことができない。それだけの悦びが、読水の神経を高ぶらせていた。

効果ありだ。と。

読水が発射した銃弾は、7. 92×94ホローポイント弾。貫通力を求められる対戦車弾の弾頭を、衝撃力を対象に加えようとする真逆の方向性を持ったホローポイントに取り替えたキワモノだ。

アダム手製のホローポイント弾と、人間と同等の体重でありながら人体を遥かに凌駕した対象の強度。それらが激突して引き起こされる効果は、ランサーが昨夜、実際に食らって証明されている。即ち、あの弾ノックバックの飛びだ。

それに、読水自身がアレクシアにあそこまで接近できた。という情報も得難いものだ。やはりあの目は飾り、見えてはいない。少なくとも、あの眼球が捉えた情報はアレクシアの脳内には届いていない。

「マスター」

「ああ……大丈夫だ。今のうちに逃げるぞ。アレは吹っ飛ばしはできるが、ダメージはそう多くはない」

「承知しました。さあ、立って」

そんな掛け合いをしながら、読水はランサーの手を貸してもらいながら立ち上がる。そして顔を上げ、読水は逃げ込む予定だった地下鉄へ続く階段を見据える。

次の一手だ。

「あつちだランサー、地下鉄に戻るぞ」

「分かりました」

「そこで、奴を殺す。ケリを着けるぞ」

「……はい」

痺れる右腕に苦慮しながら、読水は階段を降りる。その背中を守るようにして、後ろではランサーが槍を構えて後方を警戒していた。

このまま、地下鉄まで辿り着ければ御の字だ。読水はそう思わずにはいられなかった。騒ぎを聞いて他の陣営が駆けつけてくるなら、神だって信じて良い。

しかし読水の思いは、彼の予想通り容易く裏切られる。

階段を降りきり、読水は広い空間に出る。地下にはまだ数人のグループでまとまった通行者が見え、その向こうには……地下鉄の改札口が見える。

「走るぞー」

そう叫び、読水は駆け出した。

その瞬間であった。突如、閃光が読水の眼を潰す。それから一瞬間を置いて、巨大な音の塊が読水の鼓膜を貫いた。

両足を支えていた地面の感触が、強すぎるくらい室温で調節していたデパート内の暖房を感じていた肌の感触が、全身を打つ強い衝撃の後にフワリと消える。

それから、気づけば読水は仰向けに倒れ込んでいた。

どうやら、目の前で爆発があつたらしい。読水はすぐさま立ち上ろうと手を地に着けたが、地面は手を着いた途端に沈み込み、グニャグニャと歪んでいく。

「……………ッ」

典型的な脳震盪の症状だ。霞んだ視界と、キーンと不快な音が耳奥で響く聴覚、全身に泥が纏わりついたような重さ、頼りない平衡感覚。それらと戦いながら、読水は虚を掻き、地面から這い上がる。

それから、ようやく周囲の状況を視認した。

砕け大きな穴を開けている天井、そこから重力を無視しているよう

に、ゆつくりと降りて来るアレクシア。彼女の体のラインは時折、蜃気楼のように歪んでいく。まるで、体内に宿す何か物理法則という境界を犯しているかのように読水には見えた。

そして、読水の前に立ち、ランサーはその怪物と対峙する。既に彼女の姿は本来の和装へと変わっていた。

「ラ、ンサー……！」

「マスター、お任せください。貴方は先に」

「……死ぬ気か!? ダメだ、ランサーッ！」

読水は壁を支えに立ち上がり、ランサーを睨んだ。しかし、彼女は振り返ることなく息を大きく吸い。

「行ってくださいッ！ 私の役目は読水さん、貴方を護ることですッ！」

そして、叫んだ。

「大丈夫！ この三吉慎蔵、必ず貴方のもとへ戻ります！」

彼女は名乗りあげた。

己の真名を。

その意味するところを、読水は理解する。

その思いに、矜持に、覚悟に、投げかけようとした言葉が詰まる。

「……グッ、クソオオオアアアアッ!!」

読水は唸り声を上げながら上着の下に隠したガンホルスターからリボルバーを抜き、アレクシアへと発砲する。その銃撃をアレクシアは避けようとすらしなかったが、読水は射撃を挟みながら改札口から地下へと走り去っていった。

——そういえば、あの時もこんな感じだったか。

——あの時も、嘘について彼を先に逃したのだったか。

腹に気を溜め、地に降り立った異形へと一気に肉薄する。

——彼女を先に逃し、それから彼を。そして一人、槍を奮った。

——あの時は何とか生き残ったが、すぐに腹を切ろうなんて泣き言も言ったっけか。

何合目かで、突き出した槍を掴まれる。

咄嗟に片手を離し、印を結ぼうとするが、その指まで掴まれ押し折られた。

——しかし、今度ばかりは助かるまい。相手は、この世のものではない。

弾き飛ばされ、壁に叩きつけられる。口から血が漏れた。

それでも壁の縁を掴んで、倒れるのだけは拒む。

——才能を認められて、何度も名を変え、後世に残す写真すら偽った。

——研鑽したものを盾と変え、価値ある誰かを護る。

——それが私の人生だった。

——それこそが、野心も夢もない私が持つ、唯一の矜持……酔狂だった。

異形が笑う。傷口から覗く瞳に、人ならざる光を宿す。

構いやしない。左拳を見せるように強く固め、飛び掛かった。

——そして今度も、やることは変わらない。

——愚直に生き、不毛に死ぬ。英雄など、そもそも柄ではない。

——何かを得るのは、残るのは、彼らで良い。彼らでいてほしい。

——あの時も、彼らであって欲しかった。

放った右の肘鉄を事も無げに頬に受けた異形が、肩を掴んでくる。

そして鋭い衝撃が胸から入り、背へと突き抜けた。

体内で脈打つ鼓動が弱まり、やがて聞こえなくなっていく。

——嗚呼。

——今度はこの命、捧げることができただろうか。

「今度、先に逝くことができましたよ……坂本さん」

随分と手こずらせた。

そう、アレクシアは舌打ちをし、足元……血溜まりの中に沈む、ラ
ンサーを見下ろした。

最後の戦闘……ほんの二、三分ほどで決着がついたが、明らかに
サーヴァントの性能が上がった。

切っ掛けは、あの言葉——サーヴァントが、自分の真名を口にした

時からだろうか。

アレクシアも聞いたことがある。真名開放。サーヴァントが持つ宝具の真価を發揮させるには、隠すべき真名を曝す必要がある……そんな宝具も中には存在すると。

「……三吉、慎蔵」

アレクシアは彼女の真名を口にする。

その名を持つ彼女が何者であるかを、アレクシアは知らない。名前からして日本人なのだろうか、そこまで名が知られた英霊ではなかったのかも知れない。

しかし、それでも彼女はアレクシアに挑んできた。

「……………」

その決死の覚悟に、感じるものがあり。

それでいて咄嗟に戦術を変える、自暴自棄に陥らないその冷静さに、震えるものがあつた。

「……………フン」

最後の令呪を使うことなく倒せたのは、幸運だったのかもしれない。

ともあれ、今はあの運び屋を追おう。まだ消耗を感じてはいないが、この体が保たなくなる時は、恐らく一瞬のことだ。

それまでに、奴が持つアレを奪う必要がある。

そう結論をつけ、アレクシアはランサーに背を向ける。

その時だった。運び屋達が使った後方のものでない、通路の隅に設置された非常階段の扉が音を立てて開かれた。

男が、ゆっくりと扉の角から姿を現す。

男は立ち止まって、通路前方の惨状を見るが、しかしそれに怯えることなくこちらへと歩み寄ってきた。

気でも狂っているのか、あるいは自分は殺されまいとも思っているのか。

「……………見世物じゃあない。邪魔よ」

アレクシアはそう告げると、読水を追う為に歩を進め、男を横切っていく。

「死にたくなければ、さっさと……」

アレクシアの喉が、言葉を最後まで言い切りことなく詰まる。

男が立ち止まり、被っていたフルフェイスヘルメットを取り、顔を見せたからだ。

そこで、ようやくこの男が何者であるか、気づいたからだ。

「……………」

なぜ一瞬で気づかず、ここまでの接近を許したのか。この男が、ヘルメットで顔を隠していたことを。そしてこの男が、現状最も警戒すべき、あの男だということ。

男は札——『摩利支天の偽装札』が貼られたヘルメットを手に引上げ、真横にいるアレクシアを怒りに満ちた目で睨む。

「許しを乞え」

そして、男——代行者、シユウジ・アルバーニは静かにそう告げた。

サーヴァントデータ集 『第32話時点』

クラス：セイバー

【真名】：エル・シッド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）

【アライメント】：秩序・中庸

【性別】：男性

【身長・体重】：182cm・90kg

【ステータス】

筋力：B+ 耐久：B 敏捷：A 魔力：D 幸運：C 宝具：A

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【保有スキル】

・カリスマ：C+

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

レコンキスタの英雄でされながらも、異教徒の者とも親交を持つカリスマ性を生前に示した。

・軍略：C+

多人数を動員した戦場における戦術的直感能力。自らの対軍宝具行使や、逆に相手の対軍宝具への対処に有利な補正がつく。

・カンペアドール：A-

戦闘時に発生した判定の多くにボーナスを加える。反面、非戦闘時の行動、とりわけ他陣営との交渉などにペナルティがかかる。

数多の武勲を立て、生前から叙事詩を作られるほどの英雄だったエル・シドの固有スキル。ただし、その輝かしい経歴故に付き纏った確執などからペナルティが付き纏う。

・神々の寵愛：E

神々の寵愛により、幸運を除きランダムにステータスが上昇する。

・千里眼：C+

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

神々の寵愛との重ね合いによって暗闇での狙撃も可能とする。

・反骨の相：C

一つの場所に留まらず、また一つの主君を抱かぬ気性。自らは王の器ではなく、自らの王を見つける事ができない流浪の星。同ランクまでのカリスマを無効化する。

【宝具】

・尊射日（リップオフ・フォール・サン）

ランク：C 種別：対軍宝具

レンジ：1～99 最大捕捉：9人

大英雄后羿の射日伝説を模した宝具。

后羿が帝俊より賜った赤い弓と白い矢を蓬蒙が奪い取り、師の伝説を基に九本の矢を射る。

射った矢は流星のような速度で飛び、掠めるだけでも突風により周囲を破壊する驚異的な威力を有する。しかし天賦の才で技を模しているだけに過ぎず、伝説の再現には程遠い。

・逢蒙殺羿（リナウンス・ジ・アーチャー）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：1～50 最大捕捉：1人

大英雄后羿を桃の木の棒で暗殺した際の逸話から具現化した宝具。

后羿が討った多くの魍魎や神獣らの念をもって木の棒を変質させ、大木の枝や根を思わせる高密度の一撃を放つ。一撃は誰かに裏切られた経験を持つ者に対し、致命的な効果をもたらす。

*

クラス：ランサー

【真名】：三吉慎蔵

【アライメント】：秩序・善

【性別】：女性

【身長・体重】：164cm・58kg

【ステータス】

筋力：D 耐久：D 敏捷：B 魔力：E 幸運：A 宝具：C

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

【保有スキル】

・心眼（真）：C+

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

ランサーの場合、特に誰かを護衛する際にプラス判定が加わり、自身の代わりに護衛対象の防御力を上昇させる。

・仕切り直し：B

戦闘から離脱、あるいは状況をリセットする能力。機を捉え、あるいは作り出す。

また、不利になった戦闘を初期状態へと戻し、技の条件を初期値に戻す。同時にバッドステータスの幾つかを強制的に解除する。

【宝具】

・恩義返報（おんぎへんぼう）

ランク：E〜B 種別：対人宝具

レンジ：― 最大捕捉：1人

生前の忠義心や義理高さの逸話から具現化した宝具。

対象に対する恩義の大きさによって、一時的にステータスを上下させる。また幻惑や支配等の魔術に強い抵抗を得ることができる。

・龍の守護者

ランク：C+ 種別：対軍宝具

レンジ：― 最大捕捉：100人

寺田屋事件での逸話をランサー単騎で具現化させた常時発動型の宝具。

周囲の物体を念動力によって総動させ、防衛に用いる。飛来する物体に魔力的能力はなく、あくまで防衛の為の宝具である。また宝具を発動している際は、片手で印を結ぶ必要がある。

*

クラス：ライダー

【真名】：イオラオス

【アライメント】：中立・善

【性別】：男性

【身長・体重】：180cm・77kg

【ステータス】

筋力：C 耐久：D 敏捷：B 魔力：D 幸運：B 宝具：A

【クラス別スキル】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗：―

騎乗の才能。宝具『大獅子らの運び手』の代償に失われている。

【保有スキル】

・英雄の介添：D

英雄を勝利に導く性質がスキルとなったもの。

魔力を同調させ、対象が行うあらゆる判定にプラス補正を与える。

・勇猛：B

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

・友誼の証明：C

敵対サーヴァントが精神汚染スキルを保有していない場合、相手の

戦意をある程度抑制し、話し合いに持ち込むことができる。

イオラオスは生前、自身達の正当性をマラトンにて主張し同盟を勝ち取った。

【宝具】

・大獅子らの運び手（ヘーロース・チャリオティア）

ランク：B 種別：対人（自身）宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人

ヘラクレスが達成した12の難行に同行する中で身に付けた操法。

あらゆる乗り物を使いこなし、宝具等の特異な能力を除き、その性能を最大限に引き出せる常時発動型の宝具。また乗り物に乗っている際は御者への一切の状態異常を防ぐ。

・消されぬ功績（レルネー・フロガ）

ランク：A 種別：対人宝具

レンジ：1〜5 最大捕捉：1人

ヘラクレスとのヒュドラ退治で用いた、再生封じの松明。

再生する首を焼くことによりヒュドラの不死性を封じ、ヘラクレスのヒュドラ退治の功績を支援した。

あらゆる再生や治癒、増殖を焼くことによって封じることができ。その過程として魔術回路の焼き塞ぐ為、発動状態にない宝具や魔術師の魔術、あるいは幻獣種のブレス等を防ぐことも可能になる。

・ヘラクレス殺し（ヒュドラー・デイリテイリオ）

ランク：A+ 種別：対人宝具

レンジ：0 最大捕捉：1人

怪物ヒュドラより取り出され、多くの英雄や神を殺した毒。

イオラオスが生前より持っていた物で、そして一度足りとも使用されず、記録に残らなかった宝具。

解毒方法が未だない毒であり、毒を受けた者はAランク以上の耐久を誇る者でさえ苦痛で悶え苦しむことになる。

・ ■ ■ ■

ランク： ■ ■ ■ 種別： ■ ■ ■

レンジ： ■ ■ ■ 最大捕捉： ■ ■ ■



*

クラス：キャスター

【真名】：永倉新八

【アライメント】：秩序・悪

【性別】：男性

【身長・体重】 174 cm・60 kg

【ステータス】

筋力：E 耐久：E 敏捷：C+ 魔力：EX 幸運：A 宝具：

B

【クラス別スキル】

・陣地作成：―

本来魔術師ではない為、魔術師の工房は作成できない。

・道具作成：―

本来魔術師ではなく、道具作成の逸話も持たない為このスキルを持ち合わせていない。

【保有スキル】

・心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

・勇猛：D

威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、格闘ダメージを向上させる。

永倉新八としての本来のランクは更に上であるが、キャスタークラスとしてランクダウンしている。

・戦闘続行：E+

戦闘を続行する為の能力。決定的な致命傷を受けない限り生き延

び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。「往生際の悪さ」あるいは「生還能力」と表現される。

勇猛と同様、現界したクラスからランクダウンしている。

【宝具】

・龍飛剣

ランク：■■■■ 種別：対人魔剣

レンジ：■■■■ 最大捕捉：■■■■



・新選組顛末記

ランク：B+ 種別：対軍宝具

レンジ：— 最大捕捉：76億

キャスターの口述による回顧録記録。今日の新選組のイメージが形作られる契機となった、現在の新選組への信仰の原初。

現在の大衆のイメージなどに基づく、『ステレオタイプの新選組』の召喚を可能とする。

これは座に存在する他の新選組所属の英霊召喚ではなく、あくまで創作物——いわば使い魔、あるいは幻霊——の類に過ぎない。

・夢幻妄執城塞 五稜郭

ランク：B++ 種別：対軍宝具

レンジ：100～1000 最大捕捉：9500人

宝具『新選組顛末記』の全力開放により作成される、幻想の城塞。

箱館戦争で新選組を含む旧幕府軍が拠点とした五稜郭を、キャスター自身の新選組に対する妄執を基に作成、地上の空間を押し広げ最期の陣地として敷く。

五稜郭内には宝具で作られた新選組が控えており、侵入者を迎え撃つ。陣地はキャスターの妄執と宝具『新選組顛末記』を核としており、どちらかの破壊により陣地は崩壊する。

*

クラス：アサシン

【真名】：カルキノス

【アライメント】：混沌・善

【性別】：不明

【身長・体重】：150cm・45kg

【ステータス】

筋力：C | 耐久：E | 敏捷：B 魔力：D 幸運：E 宝具：

C

【クラス別スキル】

・気配遮断：—

保有スキル 『気配操作』を得た代償によって失われている。

【保有スキル】

・無辜の怪物：EX

生前の行いからのイメージによって、後に過去や在り方を捻じ曲げられ能力・姿が変貌してしまった怪物。本人の意思に関係なく、風評によって真相を捻じ曲げられたものの深度を指す。このスキルを外すことは出来ない。

カルキノスの場合、その有名とは裏腹に結果が伴わなかったこと—
—ろくに敵とも認識されず、ただの一撃で殺害されたイメージが発現している。

自身の真名を看破された時点で、その相手に対し常にステータスのマイナス補正がかかる。

特に筋力は自身の放つあらゆる攻撃に毎に判定を行い、失敗した場合ダメージ判定において100%のダメージ削減がかけられてしまう。

耐久に至っては、いかなる攻撃に対してもダメージとは別個に即死判定が働く。

・神性：E

その体に神霊適性を持つかどうか、神性属性があるかないかの判定。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。より肉体的な忍耐力も強くなる。

アサシンは生粋の魔獣であるが、死後その勇気を称えられ、最高位の女神によって天に召上げられたことで低ランクながら発現した。

・気配操作：A

アサシンの唯一と言ってもよい名譽的なエピソード——かのギリシャ神話の大英雄ヘラクレスに対し、奇襲攻撃を与えてみせた逸話によるユニークスキル。

アサシンの持つ気配遮断の効果を変質させ、気配を消すだけでなくアサシンの存在しない場所にその気配を投影する。敵対者は例えアサシンを真正面に捉えていたとしても、背後や上空と言った死角に存在する感覚を打ち払えない。

【宝具】

天空の星影（イストリア・カルキノス）

ランク：C 種別：対人宝具

レンジ：― 最大捕捉：―

カルキノスの死後、星座に召上げられたことで発現した宝具。自身と同一視されるかに座を介して発動する。

カルキノスの消滅後もマスターまたはその同盟者が存在する限り、その脱落が把握されない。この為マスターは令呪をはく奪されず、アサシン陣営として聖杯に認定され続ける。

*

クラス：バーサーカー

【真名】：エギル・スカラグリームソン

【アライメント】：混沌・中庸

【性別】：男

【身長・体重】：195cm・82kg

【ステータス】

筋力：B 耐久：A 敏捷：C 魔力：C 幸運：E 宝具：B

【クラス別スキル】

・狂化：E―A

保有スキル『ベルセルク』により不安定な状態にある。

【保有スキル】

・ベルセルク：EX

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化、格闘ダメージを向上させる勇猛スキルと、狂化スキルを複合させたスキル。

血筋により得たスキルである為、エギル自身もスキルを掌握できておらず、狂化スキルが変化する原因となっている。

・ルーン魔術：C

北欧の魔術刻印ルーンの所持。ルーンを使い分けることにより、協力がかつ多様な効果を使いこなす。

・黄金律：B

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

エギルは死の直前まで隠し財産を親族に話さず、死の間際にその存在を告白して一時の騒乱を楽しんだ。

【宝具】

・歯と舌（スカルド・サガ）

ランク：B 種別：対人（自身）宝具

レンジ：0～10 最大捕捉：100人

生前のスカルドとしての才能が昇華された宝具。歯の表面にそれぞれ刻まれた先天性のルーン文字を用いた魔術。

文字を刻むことで真価を得るルーン魔術を、詠唱することで発動させることができる。口に出す音で即時発動するルーン魔術である為、事前に用意することが不可能な上に複数のルーンを重ねることが困難になっている。

またこの宝具は、理性が奪われることによって使用が困難になり、狂化Cランク以上になった場合は一切使用できなくなる。

・狂狼の魔剣（アイツツボウク・クヴェルドウールヴ）

ランク：B+ 種別：対人（自身）宝具

レンジ：― 最大捕捉：―

『宵の狼』と呼ばれた狂戦士の血統そのものを具現化させる宝具。自身の流血を自身の武器を固着させ、自身と一体化した強力な異貌の武

具を作り出す。

宝具発動には狂化Cクラス以上の理性の喪失が必要であり、発動後の判定に失敗すると、狂化のランクが際限なく上がっていく。また宝具解除には魔力切れか周囲の破壊対象が一切なくなる必要がある。

バーサーカーの場合は先祖から受け継いだ剣『ドラグヴァンデイル』を模した武器を右腕に固定させる。

第三十三話 『震え』

第三十三話 『震え』

「許しを乞え」

地下。

改札口前。

倒れる龍の守護者——ランサー。

異形を喰らった魔女——アレクシア。

そして、男——代行者、シユウジ・アルバーニは静かにそう告げた。直後、アレクシアの頭部が横殴りに弾け飛ぶ。

対応は愚か、反応する時間さえ与えず、シユウジは手にしていたフルフェイスヘルメットを彼女のこめかみに叩き込んだのだ。

アレクシアはバランスを崩して後ずさり、自動改札機へと背中から倒れ込む。

こめかみへの強打、しかしそんなものでは彼女の五体を麻痺させることはできない。アレクシアは改札機に手を付き、眼前のシユウジへと手を向け……。

そこから間髪入れずに迫ったシユウジによって首を掴まれ、アレクシアは改札機の機械部へと単純な力で押し込まれてしまった。

「……………ッ」

まるで巨大なクツシヨンに身を預けたように、硬い機械へと身を沈ませるアレクシア。

彼女は驚き、同時に悦んでいた。

その常軌を逸した、シユウジの筋力。作戦、策略、そんなものを微塵も感じない、苛烈な攻撃性を。

「……………ククッ」

嬉しいな。と、機械に体を振じ込んだままアレクシアは頭上のシユウジへと笑いかける。

「……………」

しかしその凶悪な笑みも、その唇に容赦なく打ち込まれたサッカー

ボールキックによって、醜く歪んだ。

彼女の長身は機器の破片を巻き込みながら跳ね上げられ、後方にあつた壁に背中から打ちつけられる。

そしてそのまま、アレクシアはズルズルと床へと座り込んだが……。

「……………気に触ったのなら、謝ろうか？ シュウジ・アルバーニ……………代行者」

と、アレクシアはこれまでのダメージなどなかったかのようにそう呟き、顔を上げた。

シュウジはそんなアレクシアから目を逸らすことなく、壊れていない改札口にICカードをかざし自然体で駅構内へと入っていく。

「……………サーヴァントはいないようだな？ 今更、たった一人で私に……………」

無駄口を叩けるのは、そこまでだった。

会話に一切応じないシュウジが地面を蹴る。

そして袖から黒鍵の柄を引き出し、刃を生成するや否や、全力の大振りで斬り掛かったからだ。

フワリと、アレクシアは風に吹かれたタオルのように横合いへと舞い飛びその一撃から離脱。壁に描かれた巨大な爪痕を確認しながら、その不自然な挙動のまま階段下へ、駅のホームへと一息に飛び降りた。

「……………しかし、実に興味深い」

アレクシアはそう呟いて、階段を降りてくるシュウジを赤い瞳で覗く。

「今のお前の、その英霊の如き膂力、英雄の如き激情……………」

「……………」

「ひよつとしたら……………今はあの欠片じゃなく、お前が本体か？」

「……………」

その言葉に、シュウジの歩みが一瞬止まった。

その一瞬をアレクシアは見逃さなかった。

右腕を振る、腕から尾を引くように複数の光球が現れ、シュウジへ

と迫る。光球は階段口で瞬く間に爆発、階段全体を爆炎で飲み込んだ。

「……ふん」

人間なら、確実に始末できた。

しかし、アレクシアの顔は冷ややかだ。

「速さまで、英霊並とは……」

爆発で髪をなびかせながら、アレクシアは階段に背を向けた。

彼女には見えている。彼が高速でその爆発から逃れ、そればかりかホーム内を三次元的に駆け跳ね自身の命を狙っているその姿。

彼女は顔を伏せて両目を閉じ、両腕を広げていく。それに動きに呼応し、なびいていた髪は外部からの物理的影響を無視し下へと垂れ下がる。

「関係ねえよ、代行者……ッ！」

その言葉を同時、彼女の眼が開かれる。

瞼から、額から、腕から胸から腹から腰から脚から……全身に見開かれた異形の赤目が彼を凝視し、妖光を放つ。

瞬間、その眼の数だけの禍々しい魔法陣がホームの壁に描かれ、次の瞬間には破壊の光柱が魔法陣から噴き上がった。

アレクシアが取った手は、ホーム全体を範囲とした魔術攻撃。駅構内を埋め尽くすほどの、魔力と破片の嵐であった。

衝撃で弾け落ちる天井板、爆圧で砕け散る床のタイル、熱で爆ぜ散る蛍光灯。生身の体に一発でも直撃すれば、否、爆風や破片だけでも充分に致命的な威力だ。

シユウジは目を血走らせながら、それら全てに対応していく。光柱を躲し、破片を防ぎ、目標へと一歩でも迫らんと挑む。

「っ……アレクシアアアアアアッ!!」

シユウジは激昂して叫び、アレクシアの脇を背後から飛び抜けた。その刹那、背を向けたまま身を躲したアレクシアの上体は更に深く捻じれ、髪は衝撃に逆立つ。シユウジは飛び掛かった体勢から立ち直ることができずに床に転倒、エレベーターのガラス壁にぶつかって盛大にガラス片を被った。

シユウジの全力での突進、そのすり抜け際、腹部に斬撃用の黒鍵を突き刺した。その威力によるめくアレクシアだったが。

「最高だよ……お前っ」

アレクシアは髪を振り乱して顔を上げ、うつ伏せに倒れるシユウジへと振り返った。その胴体には未だ黒鍵が突き刺さったままだが、彼女の口端は三日月のように釣り上がっていき、同時に衣服を濡らし広がっていく血も瞬く間に体内へと戻っていくが……。

「……ゴフッ」

と、口から血の塊が溢れ出て、アレクシアの体はくの字に折れ痙攣する。常軌を逸した速度で治癒されていた傷口は再び開かれて血が溢れ出て、その顔は苦悶の表情に変わる。

「……」

シユウジはガラス片を被ったまま目を見開き、その様子をジツと観察していた。

——黒鍵。

シユウジが得物にしている、代行者の概念武装。その真価は物理的な破壊力でなく『概念』の上書き、不老不死の存在に『寿命』や『死傷』といった自然法則を体内へと与え滅すると言った代物だ。

……死なないなら、殺せる体に戻せば良い。その身に持たない概念を与えてやれば良い。

それが、概念武装の力だ。

そして、それは異形と同化したアレクシアにも効果があった。

「……ッ！」

激情に駆られるままに攻撃し、そこから見出した一つの光明。アレクシアという人智を超えた存在への、一つの理解。

それを得てからのシユウジの行動は、素早かった。

足元のガラス片を踏み割って、アレクシアへと駆け出す。その両手の指の合間には、既に黒鍵がそれぞれ握られていた。

そこからは、まさに刹那、一瞬の出来事であった。

右手のオーバースロー、それから左手のアンダースロー。合計六本の黒鍵を、くの字に体を折り曲げたアレクシアへと投げ込む。

超至近距離からの投擲。それでもアレクシアは両腕で二本、黒鍵を叩き落とすも、残りの四本をその身で受ける。

そして、その衝撃は二人の行動からワンテンポ置いて伝播し、音として地下全体に響き渡る。アレクシアは四本の黒鍵を受け線路側へと吹き飛び、コンクリート壁へと叩きつけられた。

「……フーツ」

衝撃に碎け、積み上げられていく瓦礫に埋もれていくアレクシア。その光景を油断なく睨みながら、シユウジは息を整える。

自分でも驚いていた。

普段の自分では発揮できぬほどの速度、膂力、体力、そして何よりも強い衝動。しかし、それらは何も初めての経験ではない。五年前、吹雪くシベリアの夜に死徒『灰羽のニペラ』を討った時にも、コレはこの身に満ち溢れていた。

そしてシユウジは、この力の根底にあるのが自身の能力によるものではないことを確信していた。それはより自分と繋がった何かから、言うならば、神懸かり的なもののはずだ。

「……………」

家族や幼馴染を奪った事故から一人、奇跡の子として生き残った。身に宿した魔術回路を代行者として使う為、血と汗を流してきた。

戦って、戦って、失い続けた。

それでも戦い続け、生き残ってきた。

そうして苦しみ迷い、それでも祈り続けた。

そうして力は与えられ、それ故に戦い続けた。

けれども……なぜ、自分だけなのか。

その答えだけは、一度だって与えられなかった。

「……………」

シユウジは黙って、しかし力強く握った拳を震わせる。

腹の底にマグマのように溜まり、今にも溢れんと打ち震えている感情——それが怒りであることを、シユウジは理解し始めていた。

「ハッ……奇跡の力ってことか」

対して、瓦礫から異様な力で以って浮き上がるように出てきて、再

び駅のホームへと降り立つアレクシアは、口から血を流しながらクツクツと肩を震わせて笑う。

「何ともムカつく力だ。だが正直……羨ましいね」

「……アレクシア」

「ずっと望んできたものを……こうもあつさりと、無自覚に……この私に向けてくるとはな」

その力をあの時、私がどれだけ望んだか。と、アレクシアは告げる。そして前に垂れ下がった髪をゆっくりと掻き上げ、彼女は呟いた。

「……殺してやる」

それは持たざる者による、正当性の欠けた殺意。与えられた者を害し、否定したい。ただそれだけの、薄暗い復讐者^{ルサンチマン}の言葉。

「……アレクシア」

それは、シユウジから見れば酷く正当な感情であり。

ただただ与えられることで生きてきたシユウジにとっては、そのただただ純粹な闇が眩しい。

しかし。

——真の強者とは、自身の正義や美学を守ったうえで戦いに勝てる者だ。

シユウジの頭に過ぎるのは、かつてセイバーに告げられた言葉、英雄の教えだ。

——お前は強い、下らん意地や見栄に悩める自分をもっと誇れ。

そうだ。と、シユウジは確信した。

俺はまだ、投げ出していない。

だから、こんなにも震えるのだ。

だから、きつとここまで強く在れたのだ。

「欲しけりゃこんな力、全部くれてやる……！」

シユウジは黒いシャツの袖に手を入れ、引き抜くようにして斬撃用の黒鍵の刃を一気に生成させ、吠える。

「だが何を手に入れてもアレクシア！ 堪えることを知らない貴様は、何も満たされはしないッ！」

「そう、だから強いのか……祈り与えられることしかできない無能ど

も！ 黙って私の生贄になれッ！」

シユウジの糾弾にアレクシアは微笑し、心に渦巻く渴望を表現するように両手をシユウジに向け伸ばし、虚空を搔く。

そうして二人は身構え、一步、また一步と己の敵へと歩を進め。

そして一気に、再びに互いを否定し合う殺し合いへと身を投じた。

「……そうか。ついにあの悪魔と、雌雄を決する時か」

日坂駅の地下にて、シユウジ・アルバーニとアレクシア・ブロッケンが死闘を繰り広げている頃、監督役のマリオ・アルバーニは教会の事務所にいた。

日坂市の経済活動の中心地である日坂駅から、少しばかり離れただけの教会だ。マリオは窓部に立って外の様子を伺い、机に広げられた各種資料に時折視線を投げながら、背後にいる部下から報告を受けている。

「セイバーは現在、キャスターへと高速で向かっている。もう間もなく、サーヴァント同士の戦闘が始まるはずだ」

「……読水竜也と、ランサーは？」

「ランサーはアレクシアとの戦闘で敗北したと報告を受けている」

そう答えるのはマリオ神父直属の部下、中年のエンジニア——エンツォだ。

「読水竜也は、現在アレクシアから逃走中、まだ地上からは出ていない」

「なるほど……」

マリオはそう唸って、机に置かれた霊基盤に視線を落とす。その様子を見ていたエンツォは、指示を促すように口を開いた。

「……神父、読水の監視には早崎が就いている。近くにリコもいる。

二人に任せれば、“欠片”は回収できる」

いや、まだだ。と、マリオは部下の申告を制した。

「まだ早いよ、エンツォ。我々は十年待ったのだ、焦る必要はない……」

君は引き続き、監視のサポートを続けてくれ」

「……了解」

エンツオは落胆しながらもそう応え、事務所から退室していった。
「……………ふむ」

エンツオは有能だが、堪えることを知らん。マリオは扉を後ろ手に閉める往年の右腕に肩をすくめ、窓にまた視線を向ける。

“欠片”。正式名称、第二百七十四号聖杯——この亜種聖杯戦争の魔力源であり、古くから続く『聖杯戦争』の根底にある聖遺物の欠片だ。

それが十年前、聖堂教会による奪還作戦、『クランプス作戦』によって暴走した。“欠片”に蓄えられていた霊力は日坂市の土地広域に撒かれ、土砂崩れという災害まで生んでしまった。

しかしその暴走はシュウジ・アルバーニ——後天的に魔術回路を植えつけられ、さらには魔力源が第二百七十四号聖杯の魔力と直結しているという奇跡の子を生んだ。

そして時を経て、今まさに子は聖人として完成しようとしている。

「……………」

彼は分かっている。と、マリオはそつと右拳を握る。

聖堂教会が信仰心によって護り続けた、世界で最も古い魔術基盤。

それによって生まれ、“欠片”と砕けた聖杯の復元。

そして、十年前から新たに進行している計画。

それこそが、願望機として使えるほどの聖杯を魔力源とする聖人の誕生。

彼は分かっている！ と、マリオは固く握り締めた右拳を震わせる。
る。

聖杯の復元と聖人の誕生——この時を十年待った。ついに、この時が来るのだ。

聖杯が完全な形として復元され、彼が聖人として完成すれば、聖堂教会の悲願である全ての異端の排除も夢物語ではなくなる。

故に、今は祈り堪える時だ。そう固く決意し、マリオは夜の街を、シュウジが戦っている日坂駅の方を見つめる。

完成前の、それも中身のない“欠片”など気にかけている暇などない。本当の奇跡は、この瞬間にも形を成そうとしている。

……そう。

固く握られた、私の掌の中で。

余談の許さぬ死闘の渦中、シユウジはしかし、それらの危険とは全く別のものが意識に流れ込み、感情に心を支配されていった。

それはこの駅を中心に広がる――。

瞳に映るものより鮮明な光景――親しき者の死を嘆く姿。

鼓膜に届くより強烈な音響――己が傷みに苦しむ声。

――その、いずれでもない。

それは、運命そのもの。

目の前で気炎を吐く魔女に蹂躪されてきた者達の運命であり、これから蹂躪される者達の運命。

これまで神に祈り、死んでいった者達の運命。

こんな体験は、シユウジにとっても初めてのことであった。

「……………」

救いを求める、その哀しき叫びに、その痛ましき祈りに。

シユウジの脚が、ついには止まる。

故に、魔性の光と炎が、その身を包んだ。

しかし、彼の肉体が完全に滅びることはない。感じる運命の結末と違い、傷を負いながらも致命傷に至らない。

そう、まるで……十年前の、あの時のように。

五年前の、あの時のように。

「……………うっ、うっうっ……い！」

――神よ。我が信ずる神よ。

彼は支え切れずに両膝を折り、激痛に苛まれた頭を抱える。

しかしそれでも尚、問うた。

――何故、彼らを見捨てられたのですか。

「あああああ……っ！」

吹き荒れる破壊の渦の中で呻き。

そして彼は、天へと叫び声を上げた。

「うおおおおあああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

その時。

世界が震えた。

十年もの間、その力を代行し続けた者が。

十年もの間、祈り続けたものへ。

思いの丈を叫びに変え、世界を震わせた。

その震えは地に広がり、天へと響く。

地上に生きるものの多くはその震えに、無意識に空を見た。

それから時を待たずして、日坂の地に真っ白な雪が降り始める。

何かが、目覚めた。

夜空から降る柔らかな白雪を見つめながら、キャスターはそう確信した。

あの震えを感じたのは、ちょうどキャスターが複数の隊士を連れ、幻想の城塞である宝具『夢幻妄執城塞 五稜郭』から高速道の方へと出陣した時だった。

「……………」

彼……か？

彼か、彼女か。どっちが先に目覚めるか計りかねていたが……やはり、彼であったか。

と、立ち止まりジツと空を見ながら、キャスターは考える。

彼は、やはりアレクシア・ブロッケンと対峙しているのだろうか。彼女から何か伝えられ、セイバーと共に後方へと下がって行ったところまでは隊士達を介して確認している。

——それならば、良い。

——それなら後顧の憂いなく、俺は狼に戻る。

「…………俺も行くか」

キャスターはそう呟くと、羽織の裾とマフラーを風に舞わせ、再び敵を求めて前へと歩き出す。

確認できている敵は、現在……一騎と、二人だけ。バーサーカーと、そのマスターである魔術師。そして彼女の傍にいる、佐藤真波だけだ。

それと、ランサー——彼女については、キャスターが展開しているこの戦闘自体に参加していないように思える。あのマスターからして、傍観しているのか、あるいはアレクシア側の戦闘に参加しているのだろうか。

——つまり問題は、姿をまったく捕捉できていないアーチャー陣営だ。

そう結論づけると、キャスターは行き先をアーチャーらの拠点である鏡宮邸へと決めた。陰に潜むアーチャーを追うことは難しい、ならばマスターの邸宅を襲い、表に引きずり出すまでだ。

「……………」

しかし願わくば……ウイリアム・シン、亡き我と話題に上げたあの男を討ちたかった。

キャスターはそう惜しみながら、それでも迷うことなく歩を進める。

しかし数分後、キャスターの願いは凶らずも実現することとなった。

雪が積もり始めた高速道。

キャスターは雪の白さと夜の闇を割いて道を進んでいると、その暗がりから一人の剣士が立っているのが見えた。

三十代ほどの、大柄な偉丈夫だ。肩に届くほどに伸びた茶髪に、貫禄のある笑みを浮かべた髭面。チェニツクの上に鎖帷子を着た大きな体を赤いマントで包むその姿は、往年の騎士を彷彿とさせる。

「……………セイバー」

瞠目したキャスターは、震える声で呟いた。その震えは驚きか、歓喜によるものか。本人でさえ、それは分からなかった。

「待っていたぞ、キャスター」

その反応に満足した笑みを浮かべ、歓迎するようにセイバーは両腕

を広げた。

直後、キャスターの背後にいた隊士達がキャスターを守るように前へと展開し、各々の武器を構える。

しかしキャスターは、そんな隊士達の武器を下げるように指示し、彼らから前へと出てセイバーと対峙した。

「……マスターを置いて、お前だけ来たのか？」

キャスターがそう告げると、セイバーは笑う。

「ああ。向こうは我が主に任せた。俺は……止めにきた」

「止めに？ 私をか？」

「ああ、お前をだ。新選組二番隊組長、永倉新八」

その言葉に、キャスターの眉が微かに動く。しかし、幾つもの皺が刻まれたしなめ面は、それ以上の驚きを見せようとはしなかった。

「……調べはついているのか」

「以前、俺達はどうして顔を突き合わせているだろう？ 互いのマスターが偶然出くわし、俺達も実体のまま相対してしまった」

ライダーが脱落した、あの時か。と、嘆息するキャスター。そんな彼に、キャスターは得意げにタイプを打つ真似をする。

「インターネットというものは凄いものだな？ 新選組の主要人物を調べれば、あつと言う間にお前の顔に行き着いたぞ？」

もう一度、キャスターは溜息をついた。

……世の中というものは、本当にままならない。悲願であった新選組の記録は容赦なく捻じ曲げておいて、この顔だけは正確に残しているやがる。

「……それで、止めに来たというのは？」

「……おや？」

自覚はないのか。と言うように、セイバーは首を傾げ、一步だけキャスターへと詰め寄った。

「この国では武士道というのだったか？ こんな、英霊にあるまじき暴挙を犯しているお前も、本心では分かっているのだろうか？ 街の民草を人質に決着を強いる……こんな真似、剣に生きた者として恥ずべきことであると」

「……………」

「剣を手放せぬ俺達が、人として守るべき規範や正義つてやつを手放しちまったら……終わりだ」

そうなっちまったら、もう本当にただの人殺しに墮ちる。と、セイバーは真つ直ぐに前を見つめ、キャスターに告げた。キャスターはその言葉を受けて顔を伏せ、しばらくの間反応を示さなかったが。

「……だから、どうした？」

キャスターは、そう言つてセイバーの言葉を拒絶した。

「俺は目的を成し得るなら、人の死肉を喰らう狼で良い。浅葱色の旗と剣を啜えた、ただの薄汚い壬生狼で良い」

ゾツとするほどに低い声。その冷たく残忍な返答に、セイバーはやれやれと首を振った。

「そうかい、残念だ」

そして、セイバーはこう言った。

「ならばお前がまだ手放していないもので、その真意を問おう」
「手放してないもの、だと？」

「ああ……」

剣士はそう頷き、右手に得物を……刀身に木目の模様を持ったロングソード——彼自身の伝説を彩る名剣『ティソーナ』を实体化させた。

「剣で語ろう」

「……………」

「腰の物を抜けよ、永倉新八……お前の本性を見せてみる」

「……セイバー」

「安心しろよ、アーチャーなど目じゃない。俺は、俺となら……きつと誰よりも楽しいぞ？」

「……ふん」

——有り難い。

キャスターの目がスツと細くなり、一瞬だけ頬が緩んだ。

それからキャスターの顔は険しいものとなり、背後の隊士達に下がるよう指示をする。そして左腰に差していた日本刀を抜いて前へと進み、セイバーと改めて対峙した。

ニツと、快活な笑みを浮かべ、セイバーは片手のまま剣を中段に構える。対するキャスターも、しかめ面のまま両手で握った刀を中段に構えた。

「ビバール村、ロドリーゴ・ディアスだ。戦場の勇者、我が主……そんな風にも呼ばれてもいるがね」

「新選組二番隊組長、永倉新八……これより他の名を、呼ばせる気はない」

——征くぞ。と、剣士は告げた。

——応。と、魔術師は受けた。

そして研ぎ澄まされた刃が、互いの血を求め揺れ動く。

第三十四話 『攻撃性』

第三十四話 『攻撃性』

「……ハツ……ハアツ……クソツ」

これで、何度目の悪態か。

地下鉄のホームから線路に下り、暗がりや壁伝いに進む。

激しい動機と、息切れ。読水の足取りは重く、既に歩みに近い速度だった。

それでも、前に進むしかない。

自身を犠牲に読水を逃した彼女——ランサーについて因果線で把握できているのは、彼女がアレクシアに心臓部を穿たれたことだ。

背後では重い衝撃音と、振動が響いている。今ここで読水が戻ったところで、ただただ犬死するだけだろう。

「……」

……本当に、そうなのだろうか。

読水は壁に肩を押しつけ、息を整える。そして、ポトポトと汗を落としながら、ジツと右手の甲に視線を落とす。

——人のままくたばるか、外道になって生き抜くか……道は一つだ。

また、脳裏にあの台詞が蘇ってくる。

それは五年前、師に贈られた言葉。夢の中、逡巡の中で、何度だって聞いた人非ざる……男の台詞だ。

——選べよ、読水竜也。

「……違う」

読水は被りを振った。

「……もう、選んだんだ。俺は……五年前に、選んだはずだ」

……それだというのに、これは一体何度目の迷子だ。

読水は拳を握り、迷いを振り切るように拳を壁に叩きつける。

固く握り締めた右拳、しかしコンクリート壁の前ではそれは柔らかい血と肉に過ぎない。

しかし、だからこそ痛みと共に取り戻せる。一〇の危険も一〇〇の損害も覚悟して、欲した一、ただそれだけを掴み取る……そんな自身の破滅を厭わない攻撃性。読水竜也という凡庸の中に潜む、一番強い部分を。

「欲しいのは聖杯じゃあない……決着だ」

——俺は人として、この運命に決着をつける。

壁を殴ることで得た、骨にまで伝わる甘い痺れ。その痺れがなくなるのを待たずに読水はゆっくりと顔を上げ、再び力強い光をその眼に宿した。

——新選組二番隊長、永倉新八。

——その真名に行き着いた時、生真面目なマスターの手前であつても尚、悦びを隠すことができなかつた。

片手でロングソードを突き出すセイバー——国土回復の英傑、ロドリゴ・ディアス。

両手で日本刀を構えたキャスター——妄執の魔狼、永倉新八。

研ぎ澄まされた刃が、互いの血を求めて揺れ動く。セイバーが剣先を上下に揺らしつつ一歩前に出れば、キャスターは影のように引いて攻めるタイミングを狂わせてくる。

そんな駆け引きの中で、セイバーは眼前の敵を見据えて思いを馳せる。

——江戸幕府が終焉の時、最後まで幕府側として抗った侍。

——セイバーというクラスにおいて、侍という言葉はひとつの地位ブランドとして認知されている。

——その侍が生きた最後の時代、その中でも最強と称された一角がこうして、己に牙を向いている。

一瞬、互いの剣先が触れる。

瞬間、セイバーとキャスター、二人の手が高速で駆動。剣を通じて相手の姿勢を崩さんと剣が絡まる。それは一瞬の閃きとガラスが割れるような音を響かせ、弾かれるように離れて未遂に終わる。

「……フフツ」

セイバーは、思わず笑った。

——肌に受ける、この圧力と引力。芯に響く、殺意と技量。

——魔術師ながら、セイバー相手に一騎打ちを受ける胆力。

——これが侍、これが新選組。これが、永倉新八なのだ。

——素晴らしい。

——聖杯戦争ならではの妙。彼の者を失い果たされぬと思われているサーヴァントとしての本懐は、今ここに極まった。

セイバーは顎をしゃくらせ、背筋をグイと伸ばして自身の剣を脇へと押しのとけると同時、頭からフワリとまるで酔いが回ったようにキャスターの間合いへと踊り入れた。

「……………」

間髪入れず、キャスターは刀を突き込む。

狙いは喉。上半身を捻った左片手突きによる、踏み込みも予備動作もない高速の一突きだ。

セイバーはそれを足先だけのステップで楽々と横へと躲す。

そして、スナツプを利かせた剣の振り上げ、腰を落としての振り下ろし、そして深く踏み込んでの突き。片手打ちながら、顎への撥ね切り、縦一文字、胴を狙った串刺し——都合、一撃必殺を三連撃。電光石火の如き剣撃をセイバーは奮った。

しかし、キャスターは未だ立っている。見れば突き込まれた剣を刀で横へといなし、こちらをジロリと睨んでいた。

セイバーは即座に次の手を打つ。

刃を返し、剣先をキャスターの背後、そのより遠くへと伸ばす。

そうすることでセイバーは剣先を回り込ませ、キャスターの退路を塞いだのだ。

それは突いた剣は即座に手元に引き寄せるべきという定石に反し、それどころか更に手元から遠ざけてしまっているという剣術の常識を完全に無視した無茶な戦術である。だがその常識外れな一手こそが、キャスターの読みを上回り彼を瞠目させた。

「ぬんっ!!」

そしてセイバーは片膝を地面に下ろしながら、剣を右から左へと振

り落とす。キャスターを己の剣と腕で抱え込んだラリアット——普通ならこちらの手首が負荷で壊れかねないような力技で彼を地面に引き倒そうというのだ。

手応えは、あった。

セイバー軽い老人の体重を、右手に確かに感じた。

このまま剣を振り抜けば、キャスターは地面に叩きつけられるはず。セイバーはそう確信した。

しかしその手応えは、次の瞬間には消失。力が空転した。

気づけば、セイバーはキャスターを片膝立ちとなり、剣を地面に振り下ろし切っていた。

頭上には、キャスターがいる。

いつ、どうやってあの絡め技から脱出できたのかは分からない。

だがこの一瞬で最も重要な事実は、その脱出したキャスターの白刃が、無防備に首筋を曝け出したセイバーの首へと振り下ろされようとしていることだ。

「つくお……!?!」

セイバーは片膝立ちの姿勢から真横に飛び跳ね、振り落とされた刃を飛び躲す。そしてその大きな体を積もった雪の上で滑らせ横転。身を翻して立ち上がると同時に剣を腰だめに構えた。

「……………」

セイバーはビシリとした構えに相応しいその険しい顔つきを、やがてゆっくりと破顔させた。額から一筋、汗を流す。

身の危険に地面へと躊躇なく転がり、しかも反射的に身構えた。

先程の自分に、いつもの余裕などまるでない。そこまで追い込まれたのだ。そのスリルに、思わず笑みが溢れてしまった。

その様子を見つめながら、キャスターは静かに刀を持ち直し、深く息を吐きながら中段に構え直した。

——問題は、先程見せたあの妙な技だ。

と、セイバーは剣を構えながら思索する。

セイバーのロングソードの攻撃を、手にした日本刀の側面で押すことで軌道を逸らし、攻撃を捌く。

剣で受けるよりは高度ながら、技自体はそこまで珍しいものではない。しかしキャスターの場合、その技の精度、そして反応速度が常軌を逸している。

取り分け最後……あの互いの剣が触れ合った状態で、全力で振り抜かれた横薙ぎの一撃を、しかも一撃の最中で行動を決意し実行に移すなど……あれなどは、セイバーであっても不可能だろう。それこそ、令呪で速度を強化してようやく到達できる境地の神技だ。

——つまり、この私に対する勝算は、あの剣技にこそある訳だ。

セイバーはそう確信すると、剣を振って気持ちを改めた。

——よし、攻略すべきものは分かった。

そしてセイバーは、歩くことで必殺の間合いまで残された空間を踏み潰していく。挑むべきものが分かった以上、後は真つ向勝負でそれを叩き切るだけだ。

戦いは、まだ始まったばかりだ。

高速道に沿うように建てられた電線が、定期的に来る振動によってユラユラと揺れていた。

「オウツラアアアアアアアッ！」

狂戦士は咆哮と響かせ一人、新選組の隊士達を相手に己が役目を全うしていた。

雄叫びを上げ、飛び掛かる。斧で切り払い、拳で叩き潰し、ルーン魔術を宝具『歯と舌』で使いこなす。バーサーカーの直線的ながらも多彩な暴力性は嵐のように隊士達を巻き込み、蹴散らしていた。

しかし、そんな嵐であっても生半可には倒せない敵が複数いた。

「オラアッ！」

周囲の隊士達を指揮している様子の隊士へ一気に肉薄し、その胴に強引に斧を突き込み貫通させる。しかしその隊士は、一瞬取り落とそうとした刀を再び握り、バーサーカーの肩口に刃を食い込ませた。

不意の一撃に、バーサーカーは歯噛みする……名前付きだ。

レオポルディーネの予想が正しければ、これまでの隊士達と宝具の全力解放によって生まれた隊士達の霊体はここが違う。これがある

から、やり辛いのだ。

しかしバーサーカーは次の瞬間には隊士の顔面に平手を打ち込み、停車してあった車両へと隊士を突き飛ばした。

自動車のドアを凹ませながら、隊士は背中を強かに打ち付ける。そしてその背中がドアから剥がれ落ちるよりも速く、自ら突進してきたバーサーカーによって隊士は車両にめり込んだ。

まるで交通事故。突進の衝撃で車を横転させながら、バーサーカーは口に溢れた血を地面へと吐き捨てた。

「……………」

都の治安維持、反政府活動家の弾圧を行っていたという新選組……その中には、名の知られた武士が多くいると聞いている。先程、相打つようにバーサーカーを斬ってきた隊士も、恐らくそんな連中の一人なのだろう。

「……次はどいつだ。それとも、まとめてかかってくるか？」

皆殺しだぜ。と、啖呵を切って斧を大仰に構え直すバーサーカー。しかし……………」

「バーっ！ サーっ！ カーっ！」

因果線で結ばれたマスター、レオポルディーネの念話での叫びがバーサーカーの興を一気に削いだ。

「…………お前。おまえ空気読めよ！ 今、結構良いところだったろ！」

“

“知るかあ！ あんた、さっきのでまた狂化スキルが上がったわよ！ もっと制御して戦いなさい！”

“それこそ知るかあ！ それができりや狂戦士なんかで召喚されるか、このバーカ！”

“なあん…………今私のことバカって言ったかあ？ バカって!?”

ちよつとコラあ！”

“…………バーカッ！”

“なああああッ!?”

北欧の巨人の血を引く、ベルセルクのバーサーカー——真名エギル・スカラグリームソンの狂化スキルはEーランクと低い状態では

あるが、そのランクは変動し最大でAランクまで上昇する。

それはランクが上がった分だけ理性は溶け、彼の能力は飛躍的に上昇することを意味するが、その分マスターに供給される魔力は上昇する。しかもCランクに達してからは令呪なしには上昇が止まることを知らない諸刃の剣なのだ。

こちらの喧嘩などお構いなしに攻めてくる隊士達を足蹴にしながら、バーサーカーはレオポルディーネと念話を続ける。

「バーサーカー……さつき、Dランクまで上がってたわよ。これでCランクになったら、復帰にはもう令呪を使わざるを得ないわ。そうになったら……」

「……チツ、分かってるよ」

「本当に分かってるんでしょね？ 残る令呪は二画。私達の計画には、この二画は小出しにはできない」

「だから、分かってるっての」

これくらいの狂化なら、お前の五月蠅い声で充分目が覚める。そう言いくるめると、バーサーカーは話題を変えた。

「で？ そっちはどうだ？」

レオポルディーネと佐藤は、シユウジと共に街へと戻る決意をしていた。つまりキャスターはセイバーが、キャスターが街へと侵攻させている隊士達はバーサーカーが、キャスターの宝具はアーチャーがそれぞれ対処し、背後の街で暗躍している魔女アレクシア・ブロッケンはマスターら三名が駆けつけるという布陣だ。これならばサーヴァント達が対する敵は最悪でも五分、マスターはいざという時に令呪でサーヴァントを瞬時に呼び戻すこともできる。

しかし……。

「到着には、まだ時間がかかるわ。乗り捨てられた車が邪魔なのよ。しかも雪で視界も悪くなってる……あの神父みたいにバイクなら、間をすり抜けられて行けたんだろうけど」

「というか、もうすり抜けて先に行ったんだけど……。と、レオポルディーネはボソリと呟く。その様子にバーサーカーは、使えねえ、と舌打ちした。」

“行きに散々どけてやったろ”

“……後ろにポイポイ、放り捨てていたでしょ”

“……あー、んー……”

なら、しかたないな。そう結論づけるバーサーカーに、レオポル
デイーネは溜息をつく。

その合間にも、敵は次々とバーサーカーへとやってきて周囲を取り
囲んでいくが。

“ちよつと、大丈夫なのよね？ そっちは……”

“心配すんな、レオ”

こいつら如き、素面で充分だ。

バーサーカーは敢えて口に出して、そう告げた。

「……おい、聞こえたか？ 雑魚ども……h a g a l a z z !」

バーサーカーは宝具『歯と舌』を発動、手に握られた氷の礫を、ま
るで散弾のように敵へと投げつける。

その氷の弾雨を掻い潜り、セイバーと戦っていた二刀流の剣士と槍
の使い手が迫る。

バーサーカーと打ち合いながらも一步も引かぬ二人の隊士、そして
その二人との攻防に意識を集中していると、背後からの左片手突きが
腹を抉り、片肺を切り裂いた。

「………ッ!？」

不意の一撃によって起こる硬直。体をくの時に曲げたバーサー
カーへ、槍使いや二刀流の剣士だけでなく、周囲を囲んでいた隊士ま
でもがバーサーカーへと迫り、次々と得物で彼を刺していった。

幾つもの得物によって胴を突き刺され、血を溢れ出させ静止する
バーサーカー。

しかし。

「クッ……へへッ、へへハハハッ!」

バーサーカーは天へと顔を上げると、壊れたように体を震わせ掠れ
た笑い声を上げた。その度に、片肺のダメージからか空気が漏れるよ
うな奇妙な音が口から吹き出る。

直後、バーサーカーの体からルーン文字が浮き上がると同時、その

体はアスファルトの土人形となって崩れ落ちる。

バーサーカーを得物にて刺し貫いたと思っていた隊士達は、事態の変化に戸惑いバーサーカー本人を探すべく周囲を見回す。

そんな彼らが見たものは、四方からこちらへと迫る鉄の塊——ルーンによって操作された、この高速道の至る所で乗り捨てられていた自動車の群れだった。

そう、神秘薄き時代に生まれ、魔術を知らぬまま散っていった彼らはあまりに無知であった。

ルーン魔術は本来、文字によって神秘を発言させている。

詠唱など……ましてや叫ぶ必要など、一切ないのだ。

「!?」

驚愕する隊士達を、暴走する牛の群れのように自動車は次々に撥ね飛ばしていく。

バーサーカーの片肺を潰した、片手突きを得意とする剣士。彼もまた、次々に突っ込んでくる車両を躲していた。右に、左にとヒラヒラと車を回避していたが、ついには背後から突っ込んできた軽自動車によって空中へと跳ね飛ばされる。

グルグルと回転する剣士。

そこへバーサーカーが狂気を剥き出しに迫る。

車両を蹴りつけ、飛び超え、途中の敵は残らず殺し……脇腹に流れる血潮を尾に引きながら凶暴な笑みを露わにして、バーサーカーは剣士に飛び掛かる。

そして……着地を待たず、通り抜け際に斧で以って剣士を両断した。

「へッ……どうだ、おい」

口から血を零しながら、二つになった状態で空から落ちる雪のように霧散していく剣士の最後を見送りつつバーサーカーは着地する。

“おい、見たかよレオ。なあ、おい?”

裂かれた腹部に手を添え、魔術で回復しながらバーサーカーは、自慢気にマスターであるレオポルディーネを呼びかける。

レオポルディーネはそんな彼に対し最初は無言であったが、やがて

イライラと念話を返した。

“……あんた、今のでまた狂化スキルが上がったわよ……オマケに割と致命傷”

“……すいませんでした”

バーサーカーは令呪で殺される前に、素直に謝ることにした。

それは彼が生前、調子に乗った挙げ句に拘束され、そんな状態で『血斧王』と呼ばれたバイキングとその妻である魔術師の前に突き出された、あの絶体絶命の時以来のことであった。

均衡を破ったのは、一発の弾丸だった。

破壊されてゆく地下鉄のホーム。

その破壊の中心点にいるのは聖人と変貌しつつあるシユウジ・アルバーニと、異形と化したアレクシア・ブロッケン。二人の戦闘は、正に神話の戦い。聖と邪、剣と魔によるせめぎ合いであった。

そこに、357マグナム弾が割って入り、アレクシアの側頭部を揺らした。

硬い音が鳴り、弾丸は明後日の方向へ弾き飛ばされる。アレクシアに対したダメージはないが、その鉛玉はシユウジを殺し合っているアレクシアの意識を一瞬、弾丸の方へと誘導させた。

その一瞬を逃すシユウジではなかった。

アレクシアを中心に円を描くように駆けていたシユウジは、タイルを踏み割って行動を変える。連続で側転しながら宙へと飛び跳ね、天地を逆さまにした状態で天井を両足で踏む。そしてシユウジは天井を踏み台に身を翻し、跳び蹴りをアレクシアの肩口に叩き込んだ。

アレクシアの正中線に対し鋭角な線を描いた飛び蹴り。その衝撃に、アレクシアは地面でバウンドし、後方へと地面を転がる。

「おい！今のうちだ代行者ッ！」

「……ッ!? あいつ馬鹿か……っ!?」

ホームより外れた、トンネルの方から叫ぶ読水。その様子にシユウジは思わず声を上げた。

なぜ、まだ逃げていないのか。幾つもの疑問が浮かぶが、しかし今

は聞いている余裕もない。シユウジは運び屋の手招きに従い、トンネルの暗がりへと走った。

「今のうちに距離を稼ぐぞ、走れ！」

「当たり前だ、運び屋あつ！ もっと急げ！」

シユウジは怒声を投げかけながら、先導するように走る読水を援護するように時折背後の振り返りながら走る。それでも尚、シユウジの方が速い。

「それに、何故お前がまだここにいる!? 逃げたんじゃなかったのか！」

「うるせえ……こつちだつて、色々あるんだ!!」

「お前の都合なんて聞いちやいない！ 大事なのはお前が運んでる〃欠片〃だ！」

思わず出た言葉だった。

しまった。そうシユウジが思った時には、読水の顔は見る見るうちに険しいものになっていく。

「知っていたのか？」

「……いや、知ったのは今日のことだ。聖杯のことも、十年前のことも、任務を受けた時は何一つ聞かされてはいなかった」

「……」

「それに私自身、どうやらマリオ神父の計画の一部に組み込まれているらしい」

「……………？ それ、どういう……」

その言葉の意味を読水が問い詰めようとした、その時だ。

背後から伸びてきた光線が二人の頭上を掠め、そして前方へ抜けていく。そして閃光が止んでから、凄まじい衝撃波が体を叩く。

「あぁっ……クソッ！」

読水は毒づいて左手に持っていた鞆を担ぎ、後頭部を守るようにしてその場で屈む。衝撃波はトンネルの壁を伝わり、一直線に抜けていく。

シユウジは衝撃が収まるのを待たず、読水を立たせて走らせる。

「何やってる!? 走るんだ運び屋！ わざわざこんな……碌に障害物

も何もないこんな狭い空間に案内して……勝算はあるんだろうな!」

「ある! ……あるが、今は逃げる!」

「なにい……っ!? お前、何を言ってる……」

「ランサーが目を覚ますまでえ、逃げるって言ってるのお!」

物分りの悪い子供を諭すように、口調を荒げながらそう告げる読水。シユウジはその怒声に毒気を抜かれ、少し冷静になって言葉を返す。

「……逃げるのに夢中で、気づいてないのか? ランサーはもう、アレクシアにやられている。改札口の前で倒れているのを見たぞ」

「……」

シユウジの言葉に、読水は黙って右腕を突きつけてきた。

彼の手の甲には、黒い波紋のような紋章——残り二画分の令呪が、確かに残されていた。

「令呪……じゃあ、ランサーは……」

「念話の呼びかけには応じない。だが令呪が消えてない以上、ランサーはこの世界から消滅してはいない」

あいつはまだ、生きて……ッ!

そう読水は、自分に言い聞かせるように小さな声で、だがしかし、強い語気でもってそう宣言した。しかし続く第二の光線とその衝撃波に転倒してしまう。

シユウジはそんな読水に駆け寄って、立たせようと彼の両脇に手を入れる。

「立つんだ! 走れっ!」

「……代行者、前に言ったよな? 例え聖杯に近づけるのだとしても、お前と組むのはゴメンだと……あの言葉、撤回するぞ」

「この状況で何言ってるんだ、お前は……!?!」

迫る脅威から遠ざかせようと読水を立たせようとするシユウジを前に、読水は声を荒げて彼に掴みかかった。

「あいつがこれまでしてきた事を、許す気はない……あいつをブチのめす! その作戦もある! お前だって、あいつにムカついているはずだ……っ!」

「…………っ」

「なら、黙って手を貸せ！ 代行者！」

「……シユウジだ」

「ああ……!?!」

「シユウジ・アルバーニだ。協力して欲しいなら、今度からそう呼べ！」

シユウジはそう言うと、掴まれた読水の手を払う。

その拍子に支えを失った読水は尻もちをつくが、シユウジは構わずにアレクシアが迫る背後へと振り返った。

「ランサーを待つまでもない。さつき言っていた勝算を教えろ……俺がお前の剣になってやる」

「…………」

「俺達で、あの化け物を狩るぞ……っ！」

読水は呆然として殺気立ったシユウジの横顔を見ていたが、やがて意を決して同じ方向に体を向ける。

「俺の相棒は『槍』だ、シユウジ・アルバーニ……読水竜也だ」

「ああ、知ってる」

……嫌になるが、良く知っている。と、シユウジは天井を仰いで咳く。

……クソ神父が。と、その嫌味に対し読水は悪態をついて、下を向く。

そして僅かに口端を上げた二人は改めて正面を睨むと、無言でそれぞれ武器を抜いた。

第三十五話 『魔剣』

第三十五話 『魔剣』

脱藩の数日前。

長倉新八は神道無念流の師である岡田助右衛門に呼ばれ、道場へと赴いた。

「剣の道を極めるべく、脱藩する……と、聞きました」

十年以上に渡って新八を指導し、十八歳にして本目録の腕にまで育て上げた岡田は神前の前に正座して待ち、新八が来るや否やそう切り出した。

「間違い、ありませんか？」

「……はい」

老体であっても衰えることのない、優しげな顔の奥底に光る鋭い眼光。新八は顔を上げてその両眼を見つめ、師の言葉を肯定した。

「………」

「………」

それからどれだけの時間、見つめ合っていたか。新八は決して目を背けまいと腹を括ると同時、ここで斬られるかもしれないという予感が足から心の臓へと這い上がっていくのを感じていた。

「ただ剣術を極めたいが為に、脱藩までしてしまう……」

岡田はそう呟くと、意を決したように太ももを両手でピシヤリと打ち、脇に置いていた刀を引っ掴む。

「立ちなさい、新八君。そんな君だからこそ、私はこれを君に贈りたいと思う」

岡田はそう言いながら立ち上がり、新八の反応を確認するでもなくその脇をすり抜け道場の中央へと歩いていく。

新八もまた立ち上がって師に従って道場に中央へと進むと、そこには据物斬りで使われる巻藁が三本、横並びに立っていた。

「先生、これは……？」

「これから見せるモノを、目に焼き付けなさい」

岡田はそう言うのと左足を一步分引いて身構え、刀の鯉口を切った。しかし、刀を抜かない。そのまま右手を柄に添え、顎を引くだけだ。……立居合だ。新八はぞくりとした気配の直後、鳥肌が立っていくのを感じた。お辞儀をするように身を弛めるこの型は、見たことがない。

「……新八君」

岡田は人知れず瞑目していた目を細めに開ける。

「これは当流派に属さない。ましてや、後世に伝えられる剣技でもない」

そう、岡田が言った。

その直後、新八の若い目は三本の巻藁の中心部へと走る残光を目にした。

そして、岡田の刀は既に振り抜かれ、既に残心の型へと入っていることに気づく。

「……ッ!?!」

まさに、閃光の如し。

その速さに驚愕していると、左右の巻藁を残し、中央の巻藁だけが真つ二つに両断され床に落ちた。

「そんな、馬鹿な……ッ」

型の途中、ましてや師の演武の前であるというのに新八は巻藁へと駆け出し、右、左の巻藁と交互に手を触れた。

そして、触ってみて確認する。横に薙いだ一閃。中央に置かれた巻藁は切断されているのにも関わらず、確かに左右の巻藁は斬られていない。

「これは、戻し斬り……ですか?」

新八の動揺を見て、笑いながら納刀する岡田は被りを振った。

「いや、斬ってない。左右の巻藁に本身が触れている間だけ、飛ばした」

「と、飛ばした……?」

「言葉で分かるようなものではないよ」

新八の食いつきをどこ吹く風と、岡田はそう笑いながら屈んで、両

断した巻藁の断面を確認し始める。

「魔を備えなさい、新八君」

岡田は屈んだまま、背後に立つ新八に告げた。

「それは、誰もが習熟できる剣術の外側。第三者による再現も、型として継承することもできない魔の領域だ」

「魔剣……」

ふふ……と、岡田は微笑を浮かべ、新八を一瞥する。

「剣は戦乱の中でこそ、その真価が問われるもの。私はね、年甲斐もなく心が踊っているよ。黒船が浦賀に来航して早三年……動乱の兆しあるこの時代に、新八君、君という若者がこうして脱藩を決めたことにだ」

「先生……」

「じゃあ、新八君。今見たことを忘れず、風邪にだけは気をつけてお行きなさい」

岡田はそう言って立ち上がり、用は済んだというように身支度を始めた。元より、掴みどころのない性分の持ち主なのだ。

「……しかし、楽しみだ。君ほどの天才がいずれ来る動乱の最中、魔を見出すのなら……」

それはいつたい、どれほどの……。

そう、岡田は呟き、可笑しそうに肩を震わせた。

「——魔剣『無影龍飛剣』。言うなれば、後の先の極致だ」

闇空から降り落ちる雪を眺めながら、キャスターは口を開いた。

「相手の一撃を受け捌く、最善の型というのがある。この魔剣は、その型までの時間的、空間的な制限を掻い潜り……迫る一撃に最善の形で備える」

「……」

あの時代——剣林弾雨の幕末で、永倉新八は最善の剣技を求め続けた。

幾度の戦場、死線。同じ剣の才を持つ仲間との死別、決別。生涯に渡る鍛錬と自問自答。

「そうして、答えを得る。」

光の下で尚、影すら残さぬ剣捌き、体捌き。

学者らの論じる物理とやらを超越した動きこそ、戦乱の魔に相応しいと。

「故に、私はあらゆる物質的な一撃に対し、後の先を取れる」

「……………」

「君は私より強く、そして速い。しかしそれらはこの魔剣の前には、何の有利にもならない」

「……………」

「…………聞こえているかね？ カンペアドール 戦場の勇者」

と、キヤスターは空から視線を落とし、眼前のセイバーを——血溜まりの中に両膝を落とし、剣を支えに上体を支えている偉丈夫を見た。

「もう耳も遠いと言うなら……………ここでその首、貰い受け……………」

「…………聞こえているさ。お前と違って、まだ耄碌してはいない」

「……………」

キヤスターの言葉を遮り、セイバーは血に濡れた顔でそう笑いかけた。そして、ゆっくりと立ち上がる。

「馬鹿だなあ、お前。自分で自分の奥の手を解説するとは……………既に勝った気でいるのか？」

鎧の隙間、あるいは鎧を貫通するほどの強打で負ったダメージを回復させながら、したり顔でそう告げるセイバー。その態度にキヤスターは嘆息した。

「話したところで、お前の剣ではどうすることもできない……………これを攻略できるのは、これを真正面から突破できる『猛者の剣』か、魔の意識さえ狂わせる『無敵の剣』か……………」

いずれにせよ。と、キヤスターは刀を中段に構え、ダメージから立ち直ったセイバーへこう言った。

「セイバー、この魔剣を超えられるのであれば……………お前はあの二人に並ぶ剣の腕という訳だ」

「そらまた、光栄の至り」

その言葉に、セイバーは首を左右に傾け、気怠げに首を鳴らした。
「……それにしても、だ。早かろうが強かろうが、あらゆる攻撃に対し、必ずカウンターが取れる。まさに究極の剣術……『理想の剣』つてところか？」

ハンッ。と、セイバーは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「まあアレヤコレヤと考えたがる。人を斬ることに、そこまで理屈を並べなきやいかんのかね？」

「……セイバー」

「あのランサーにも言ったが……」

キャスターの意も介さずそう言つて、彼は左手にもう一本剣を实体化する。

二刀……否、双剣の型というべきか——それも右手に『テイソーナ』、左手に『コラーダ』。叙事詩『わがシッドの歌』にて語られる名剣二振りは今、キャスターの前に現れる。

「覚えておけ……そういう小技の及ばぬところに、強者は君臨している」

「……」

そして……この男——。

遠い地、スペインの英雄。国土回復の英傑たるあのエル・シッドが今、キャスターの前に立っている。

「良いだろう……っ」

キャスターは刀を引き寄せ、霞の構えを取った。

「来い、セイバー」

そんなキャスターに対し、セイバーは構えも取らず、棒立ちのまま顎をしゃくらせた。

「それだ。永倉」

「……何がだ？」

「……この聖杯戦争じゃ、セイバーは俺だつて話だ」

「……」

「……新選組だか、魔剣だか知らんが」

言葉の意味が分からないように聞き返したキャスターの言葉に、セ

イバーは苛立った様子を隠さずに一步、また一步と足を進める。

「その俺が……道から外れた貴様なんぞに……それもまさか剣で……っ！」

そう言葉を区切りながら、両の剣を下げたまま一步、また一步とキャスターとの間合いを詰めていくセイバー。

そして。

「負ける訳には、いかぬであろうがッ!!」

そう告げた——目を剥いて犬歯を剥き出しにし、全身から戦意を滾らせたその姿は、普段の不敵さなど微塵もない。

彼はまさに剣士としての本性を露わに、眼前の魔狼に相對していた。

それが、その事実が、キャスターには堪らない。

「……来い、セイバー」

魔剣を得物に、老いた壬生狼は改めて言葉にした。

「いざ、尋常に……」

しかし、口上を最後まで口にはできなかつた。

鼻面を叩く、重い“圧”。

目が見開き、喉は締まって口上を押し潰す。

そして目の前には、こちらの懐へと飛び込み、今まさに右の剣を振り下ろさんとしているセイバーの姿があつた。

「……………ッ!?!」

地面を蹴って後方へと下がったのは、反射的なものであつた。

キャスターの顔面、その寸での距離を絶対的な一撃が掠める。宙で静止した一撃はしかし、その風圧だけで地面に積もつた雪を舞い上げる。

血の気が凍るほどに鋭く、重い剣撃。しかし魔剣によって全ての剣撃を捌けるキャスターにとって、回避行動自体がする必要のないものだつた。

なのに、剣士としての本能が、その行動を咄嗟に選んだ。

不可解……。と、キャスターは己の取つた行動に疑問を抱く。

「ぬおアッ！」

続くセイバーの強い踏み込みが、キャスターが引いた分の間合いを潰す。そしてそこから繰り出される横薙ぎの一撃。

「――」
キャスターは圧縮された時の中で、左の剣を使い、右から左へと振るうセイバーの一撃……その一連の動きを見定めていた。

これに魔剣を以って対応すれば無論、その速度も威力も関わらず捌くことは可能……可能なはずなのだ。引く必要はない。

「――ッ!?!」

しかし、キャスターは身を伏せるようにして辛くも躲す。身体が、躲してしまふ。

そして、再びキャスターの足は積もった雪を蹴散らすようにして後退していく。

「……ハッ」

セイバーの呟きが、耳に入る。

……何が尋常に、だ。

「……ッ」

その言葉が、キャスターの芯に触れた。

猛攻を続けているセイバーは、さらに右の剣を縦一文字に振り下ろさんとして、足を踏み出し前進している。

そこに先ほどの二撃との違いはない。

しかし剣士としての矜持が三撃目から逃げることを拒み、キャスターの足を前へと飛び出させた。

そして――。

互いの前進が、両者を繋ぐ間合いを潰し。

互いの刀剣が、両者の頭上で結ばれ。

互いの激情が、両者の眼前で激突した。

そして――。

直後、発生した衝撃波が空からチラついていた雪を、地面のアスファルトを、取り巻いていた亡霊らを、置き去りにされていた車両を彼方へと吹き飛ばす。

膨れ上がる破壊の波に削られ現れたクレーターの中、低い姿勢で睨

み合う二人。両者の合間には剣と刀が絡み合った状態で地面へと叩きつけられていた。

魔剣『無影龍飛剣』——都合、三度目にして再び成功せり。

「……ぬんッー」

セイバーが、体勢そのままに左剣を振りかぶる。

しかし剣への一撃が加速するより前にキャスターの刀が時間の概念を置き去りにその初動を抑え込み、次の瞬間にはキャスターは肩でセイバーに体当たりを行って彼を後方へと退けさせた。

セイバーはヨロヨロと後方へ下がっていく。しかしその口元は、好戦的な笑みを浮かべていた。

そんな彼を目にして、キャスターはようやく忘れていた呼吸を再開し、大量の冷や汗を流し始めた。

これがセイバー、エル・シドと呼ばれた男か。

そう、キャスターは戦慄した。

彼を真に強者たらしめるものは、手にする武具や能力といった可視化、数値化できるものではない。その根底にあるものは、気概や自負、あるいはそれらを培ってきた経験そのもの……この男は、エル・シドという人生を背負っているが為に強者であるのだ。

認めるしかない。と、キャスターは口をすぼめて息を吐き、呼吸を整える。

彼が本物——この聖杯戦争最強の座に君臨する、剣士のサーヴァントであることを。

「宝具開放——」

十分な距離を開けると後退していた足を止め、セイバーは右手に持つ『テイソーナ』を天に掲げた。すると刀身が白熱し、光炎を纏っていく。

そしてセイバーは、今や誰の目にも明らかかなその宝具の名を、厳かな口ぶりで告げた。

「——『ラ・ルース・テイソーナ秤り威示す炎の剣』……決着の時だ。新選組二番隊組長、永倉

新八」

「……………」

今のキャスターなら、理解できる。

その刀身と光炎は、正義と信仰によって燃え盛り。

それを操る肉体は、美学と勇気によって支えられている。

故に、これが騎士であるセイバーの宝具。

人生の一部、逸話を切り取った宝具ではない。自身の生き様、人生全てを剣に込め、道から外れた悪を打ち払う……あれは、そんな宝具なのだ。

そして……。

それを見る己の顔は、一体どんな顔をしているのだろうか。

「……ああ」

と、キャスターは頷き、刀を中段に構え直した。

そして、改めて口にする。

「互いの手札は開かれた……ロドリゴ・デياس、戦場の勇者よ」
いざ、尋常に勝負だ。と。

第三十六話 『抑止力』

第三十六話 『抑止力』

地下鉄。

等間隔に配置された照明が、本来は人の通らぬ線路上を照らしている。

そこを我が物顔で進む異形——アレクシア・ブロッケン。

彼女の歩みはふと止められ、立ち尽くす。

自身から五〇メートル程前方で、柱の陰から姿を現した二人の存在に気づいたからだ。

一人は黒いキャソックスを身に包んだ、長身の男——代行者、シユウジ・アルバーニだ。その右手にはまだ刃がないものの、アレクシアが今最も警戒すべき得物が握られている。

もう一人は痩せた体を着古したハンティングジャケットで包んだ男——運び屋、読水竜也。左手に鞆を持ち、地面へと下げられた右手には掌に収まるほどの小さな拳銃が握られている。

「……………」

聖堂教会と、魔術師。

世界の歴史に潜み、幾度となく衝突を繰り返してきた二つの大きな影たち。本来相容れぬ二つが今回、肩を並べてこちらに敵意を向けている。

その事実が、堪らない。

「…………クツ」

アレクシアは閉じていた口端から、白い犬歯を覗かせる。

——その奇跡をこの手で穢し、我、聖杯を奪わん。

そう誓い、異形は止めていた足を動かす。時計の秒針のような躊躇の無さで、彼我の距離を詰めていった。

「…………来た。来るぞ、おい来るぞ」

「分かってる……………今だ、読水」

仕掛ける。と、右手に握った黒鍵の柄から刃を生成しながらシユウジはそう吐き捨て、両膝をグンと曲げ全身を撓ませる。

その言葉を聞き受け、読水は踏ん張るように腰を落しながら右腕を上げ、短銃身のリボルバー——コルト・ローマンの銃口から火を噴かせた。

西部開拓時代にガンマンが行ったフアニングショットのような、速度重視の閃光のような速射撃ち。

命中精度を度外視したその射撃は、リボルバーに装填されていた、375マグナム弾を散弾のように散らせながらアレクシアを襲う。

アレクシアはそれら弾丸を一つずつ目で確認すると、その顔は不意に左を向けられていく。そんな彼女のすぐそばを銃弾が掠めていき、中には頬や胴に着弾し火花を散らす。

しかし、そんなダメージは彼女にとってはどうでも良かった。

たった六発で行われた短時間且つ低密度の弾幕、その合間にアレクシアの真横へと滑り込んできたシユウジ・アルバーニという存在の驚異に比べれば、そんなものはまるで問題にならない。

自身へと向き直るアレクシアに対して、シユウジは手にした黒鍵を彼女の心臓部目掛け投げ打つ。

極近距離からの、代行者による黒鍵の全力投擲。音の壁さえ突き破るその一撃に、アレクシアは左の貫手を突き出す。

黒鍵の刃先とアレクシアの貫手がぶつかり、二つの絶対的一撃はその衝撃で火花と血潮を散らせながら横へと逸れる。

防御ではない。攻撃によって相手の一撃を狙いから外させる。それこそが、アレクシアが狙った回避行動であった。

しかし当然、それだけで両者の攻防が済むはずがない。

新たに生成された黒鍵によって閃く鋭利な剣戟と、人知を超えた力と魔力により奮われる重厚な魔手。目まぐるしく体を入れ替えながら、二人の白兵戦は激化していく。

「……………」

読水はそんな二人の戦いを睨みながら手にした銃をホルスターに収める。

目にも留まらぬ高速戦闘、目を凝らしてそれを見ていた読水は一度何かを諦めたように溜息をつき、次いで右掌で両目を覆う。

読水は両目に魔力を集中させる。そうして強化魔術によって人並み外れた動体視力と遠距離視力を一時的に得る。そこまですらないと、二人の戦いは観察することさえできないと悟ったからだ。

読水は右手を下ろし、二人の動きを追い、表情を観察する。そして、捉える。

シユウジの斬り下ろしを、後方へ飛び下がることで躲すアレクシア。その顔は終始眼前の敵を見ているが、その腕の表面に大小様々に開かれた魔眼の全ては、読水を——シャツの上に敢えて覗かせてみせた「欠片」を見つめていることを。

……予定通りだ。

ゾクリと背筋を走る悪寒と、無意識に釣り上がる口端。

読水はポケットから鈍く光る長大な銃弾を取り出す。7・92×94ホローポイント弾——古い対戦車ライフル弾にアダムが手を加えた、ハンドロード手製の弾丸だ。

「鉄筒、かなづつ撃鉄、うちがね成型開始——」

読水は銃弾を右手に握りながら、詠唱によって右腕に鈍色の銃身を形作っていく。そして乾き切った口端を舌で舐め、震える足に鞭打つて二人の所へ……いや、自身を狙う異形へと近づいていった。

「欠片」を餌に、アレクシアに読水を狙わせる。そうすることで、シユウジが致命打を放つだけの隙を作る。

それが、読水が提案した作戦だった

「あいつの体は今や不死どころか、ほとんど不滅に近い」

数分前、作戦を説明する際にまず、読水はそう切り出した。

「常軌を逸した耐久性、負傷への再生力。秘めた神秘や魔力だってサーヴァント以上……代行者お得意の概念武装で殺したところで、死んだ上でまた復元される可能性すらある」

「死んだ上で、復元する？ そんなこと、あり得るのか？」

「莫大な魔力を通じて世界の裏側にある『何か』と繋がり、外傷により

死んでも存在を概念的に維持できる。それがウィリアム・シンの見解だ……生物学的にはもう、あいつは生きていないんだ」

強い光によって映し出された影法師のように、外界に存在する『何か』の力によって自己を成り立たせている。

それは生きているというよりは炎のようなプラズマや、嵐のような自然現象……あるいは、魔術基盤で以ってより強大になる魔術そのものに近い。

読水の説明に、アレクシアが来るであろう正面を向いたまま腕を組んで唸るシュウジ。光明を見出そうと思案する彼に、読水はこう続けた。

「だけど、だからこそ弱点がある。あいつはこの世界に存在するだけでも、莫大な魔力が消費されているはずなんだ。それこそサーヴァント以上の」

その言葉にシュウジは顔を上げ、読水を見やる。

そうだ。と、読水はこう補足した。

「そして戦闘や再生に使う魔力なら、それ以上……死んで蘇るなら、さらに……そこに付け込む」

「……つまり魔力が尽きるまで、黒鍵で浄化し続けなければ……」

「ああ。魔力が枯渇すれば、『異形、アレクシア』という現象は発生できなくなる」

読水は力強く頷く。

封印指定された「時計塔」の魔術師——ウィリアム・シン。彼はアレクシアが魔力源としている令呪を狙い、失敗した。

だから読水は、そこは狙わない。向こうの令呪を消費させ、こちらの令呪を奪わせない……ある意味で正面突破、そこに勝算を見出す。

そこまで考えた読水だったが、すぐにその顔を曇らせた。

「で、問題はどうか殺し続けるかだ……」

「そこは決まっていらないのか!?! おい、もうあれこれ考える時間はないぞ!?!」

「分かってる……なあ、『摩利支天の偽装札』……あー、お前と最初に会った時に俺が使った札はどうした?」

「……ん？」

「いや、あれならアレクシアの裏をかけるかも知れないから……」

『摩利支天の偽装札』——貼られている場所がどこであれ貼られていることに違和感を与えず、また貼られている対象の印象を薄くする。読水が持つ魔術礼装の中でも最も高価な代物だったが、この聖杯戦争が始まる直前、シユウジとの接触で読水はこの礼装を落としてしまっている。

それをシユウジが拾っていれば幸いと、読水はシユウジに確認を取って見た訳だが……。

「……あれは、ここにはない」

そう、シユウジは抑揚のない声でそう告げた。

「そうか……くそっ」

「……すまないと思ってる」

能面のような顔で謝るシユウジを他所に、焦燥に駆られ足踏みをしながら考えに耽る読水。やがて読水は、意を決しこう呟いた。

「なら……やつぱりあいつの作戦で行くか」

「あいつ……？」

「ウイリアム・シンの作戦だ……囹は、俺がやってやる」

一か八かだけだな。と、読水は呟くと、右手の親指を使い、
“が入ったペンダントをシャツの上へと引っ張り出した。

その一瞬は、何の前触れもなくやってきた。

眼の前のシユウジからアレクシアは意識を逸し、彼の放った袈裟斬りをマトモに受ける。しかしその負傷に構わずアレクシアは身を翻し、地面を蹴りつけ、読水へと駆け出した。

「……………ッ!？」

——来た。読水の体がビクツと震え、前へと進んでいた足が止まる。読水は魔力で右腕に取りつけた巨大な銃身を持ち上げ、目を剥いて迫り来るアレクシアへと向けていく。

装填している弾丸は一発だけ、時間的にも外せばそれで終わりだ。腕を上げる一瞬の動きさえ重く感じる永い時の中、読水は歯噛みしな

がら肉薄するアレクシアと対峙する。

それは誰の目にも明らかな蹂躪の瞬間、その一瞬前。読水には意識すら出来ぬその一瞬にさえ愉悦を覚え、アレクシアが嗤う。

しかしその顔は不意に襲った衝撃に固まり、やがて歪む。

その背中には、アレクシアと同様その一瞬を捉えることができる逸材——シユウジによって投擲された黒鍵が突き立っていた。

黒鍵によって縫い留められたアレクシアの硬直は数秒、実に僅かな時間だ。

「撃鉄、うちがね点火——!!」

しかし、それは読水がアレクシアへと銃口を向け、詠唱により弾丸を発射するには十分な時間であった。

地下トンネル内に、壮絶な爆発音が響き渡る。

大口径の銃弾を顔面に喰らい、殴り飛ばされたように後方へ弾け飛ぶアレクシア。

その背中へ、シユウジが潜り込んだ。

シユウジは背中に刺さっている黒鍵の柄を両手で掴み取り、力任せにアレクシアを上空へと投げ飛ばした。

アレクシアは、抵抗の意識さえ生まれる間もなく、トンネルの天井へ……電圧にして一五〇〇ボルトが流れる棒状の電線——剛体架線が待つ天井へと体を打ちつけた。

その瞬間。

真っ白なスパークが、薄暗いトンネル内を照らした。

皮膚表面に流れていた血液を通し、皮膚の表面を感電によって焦がしたアレクシアは、重力に従い落下する。

しかし。

アレクシアは着地の際に両手足を使い、四足の獣のように地面へと着地。

その光景に、読水の目が驚愕に見開かれる。

しかし、それだけだった。

「……グッ……ガッ……」

アレクシアはそこから立ち上がることはない。焦げ臭い煙を上げ

ながら、着地の姿勢のまま動かなかった。

「…………ツ」

如何に概念的な不滅性を持っていると言えど、彼女の身体は筋肉や神経、動物的な組織構成のまま。サーヴァントのような霊体ではなく、ましてや魔術的な疑似神経や、概念によって動いている訳ではない。

故に、だからこそ――。

「効いてるぞシユウジいッ!! 行けえッ!!」

「オオオオオオ!!」

射撃の反動による激痛さえ忘れた叫びに、吼えて応える。

両手に複数の黒鍵を握り、電撃に痺れた異形へとシユウジは飛びかかった。

手を伸ばせば届くような距離からの、代行者による全力投球。

それはアレクシアの体に黒鍵を打ち込み、異形の体から血が飛び散る。

黒鍵が突き刺さった衝撃で、上半身が跳ね上がり壁へと叩きつけられるアレクシア。そこにシユウジは、続けざま何度も、何度も黒鍵を投擲する。

そうして長い、長い数秒間の後。

「…………」

フー。と、黒鍵を投げ終えたシユウジは息を吐き、無数の黒鍵で刺し貫かれたアレクシアを見据える。

打ち込んだ黒鍵は十一本。残っていた投擲用の黒鍵、全てを使った。

しかし。

「グ…………グアガ…………」

異形アレクシアは未だ、二本の脚で立っていた。そしてフラフラと歩き、壁から身を離す。

「…………ツ―」

その姿を確認するや否や、間髪入れずシユウジは腕を後方へと振り斬撃用の黒鍵を生成、彼女の首を狙い横に薙ぐ。

だが一撃は、不発に終わる。

アレクシアの首へと黒鍵が触れる直前、彼女の腕が、横へと振るうシユウジの手首を捕らえたのだ。

万力のような力で握り込まれる痛みと、猛攻の阻止に、シユウジは顔が歪む。そんなシユウジの苦痛に、一切の余裕がなかったはずのアレクシアの顔に悪意が満ちていく。

そして次の瞬間には、シユウジの体は掴まれた腕を強引に振る舞わされたことで横へと飛び、シユウジは柱へと叩きつけられる。

「ふっ、ふっ……グア……アアアアッ!!」

身を捻りさせ、横合いの柱へとシユウジを投げつけたアレクシア。彼女は呼吸を整えながら刺さった黒鍵に手を伸ばし、絶叫と共にそれを引き抜く。

そこへ、背中をコンクリートに打ちつけたシユウジが再度襲う。彼は打ちつけられた柱を蹴って果敢にアレクシアへと飛びかかった。

迫るシユウジに合わせて、貫手を放つアレクシア。

シユウジはその魔手を薄皮一枚切らせてギリギリに躲す。そして左手で刺さったままの黒鍵を掴むと、そのまま体ごとぶつかるようにして黒鍵をさらにアレクシアに深く押し込む。

「……………ッ!?!」

胸に突き刺さった黒鍵が、シユウジに加えられた力によって乱雑に捻り込まれ、身を引き裂く。

その衝撃にアレクシアの顔は歪み、口からはゴボリと血が溢れ出る。

「……代、行者あー!」

「終わりだ、アレクシア……!」

「アッ……」

更ならダメージにアレクシアの体はガクガクと痙攣し、歯を鳴らし震える顔が頭上へと向けられていく。

それは一目で分かる生の臨界、死への道程。

それでも。

「……………ッ!」

しかしそれでも、彼女はアレクシア・ブロッケン。彼女はそれでも、押しつけられた運命を否定する。

アレクシアは痙攣する肉体を歯噛みと共に押さえつけ、目の前のシユウジを手で突き飛ばした。

尻もちをつくシユウジ。アレクシアはそんな彼の前で両腕を広げ、自身の背を中心に魔法陣を展開する。

アレクシアを中心に空間が張り詰めていくような、圧倒的な異形の魔力。自身を殺さんと展開されていくその圧倒的な魔力に、シユウジの顔に死相が浮かんだ。

そんなシユウジの顔を見下ろし、アレクシアの歯噛みした頬が釣り上がっていく。

そう。

その額に、375マグナム弾が撃ち込まれるまでは。

パツと花が咲いたように額から血が爆ぜ、アレクシアの長身が棒きれのように

なく後方へと倒れる。魔法陣も、彼女が倒れる中で霧散していった。

シユウジは振り返り、血を滴らせ震えた腕で拳銃を構えている読水を見た。

「……読水竜也」

「いや、まだだ……下がれシユウジ」

すでにこんな拳銃弾の一発で倒れてしまうほどに、彼女は消耗している。

だが、まだそいつ……異形アレクシアは終わっていない。

読水はシユウジにそう警告しながら、左手に持った鞆を地面に下ろして片膝立ちになり、弾切れとなったりボルバーの再装填を行う。

静まり返った地下鉄で、息を切らした男達の息遣いと、薬莢が地面を落ちる音だけが静かに響く。

「アレクシア……俺は、お前みたいに成りたかった」

そんな時だ。読水は銃弾をシリンダーに込めながら、そう吐露した。

その声には抑揚がなく、彼はただ滔々と自身の思いを語る。

「俺は……お前みたいなの、他人なんてどうでも良い。やり方も問わず目的を果たせられる……そんな獣に成りたかったんだ」

「……………」

シウウジはそんな読水の台詞を聞きながら残された武装を確認し、彼を守るべく隣に立つ。

「だけど俺には、お前みたいな非情さが足りなかった……だからお前の前に立っている。獣に成れなかった人間だから、俺はお前のやった事が許せない」

それは、読水竜也という男が抱えていた思い。

自分が選べなかった道を選んだ人に対する、正直な憧れと憎悪だった。

そして。

「……………ククツ、ハハハハハ……………」

倒れたまま、その思いを聞き受けたアレクシア。

彼女は掠れた声で、そんな読水を嘲笑う。

「足りなかったんじゃない。運び屋……お前は、捨ててないだけさ」

……人間は誰だって、私のような化け物に成れる。

アレクシアはそう断言しながらゆっくりと上体を起こし、読水を見つめた。

その額に開いた穴からは蒸気が溢れ出ており、やがて異形の瞳が穴から覗く。

「お前は一線を超えられなかった。だから私の前にこのうのと突っ立っている」

奪われる為に。と、彼女がそう断言した次の瞬間。

ドブツ。と、異形の左胸から腕が一本、血潮と共に表皮から飛び出てきた。

それはドス黒い血に濡れた、人間の左腕。その左腕の手の甲は、淡く光り輝いていた。

そう。

佐藤真波から左腕ごと奪い取った、アレクシアに残された最後の令

呪である。

「……ッ!? 読水、逃げ……ッ」

「——これに至るは七十二の魔神なりッ!!」

シユウジの叫びを掻き消すほどの声で、アレクシアは絶叫。最後の令呪を魔力源に、詠唱を行う。

「七十二の伯爵——焼却式ッ!!」

危険を察知したシユウジが、読水を後方へと突き飛ばす。

後ろへと勢い良く突き飛ばされた読水は、自分を庇ったシユウジが天井を焦がすほどの光に呑み込まれるのを、確かに見た。

そして、次の瞬間には圧倒的な力の奔流が地下トンネル内に満たされ、読水の聴覚は音圧によって無の領域へと弾き飛ばされた。

読水は無音の中で、爆風によって何度も床や壁へと体を打ちつけ、視界は回転と暗転を交互に繰り返す。

そんな視界に、異形の姿が映った。

溢れる光、渦巻く破壊の中で胸に生えた腕を引き抜き、アレクシアは真つ白に壊れゆく世界を踏み台にしてこちらを駆けている。

今や、読水の世界は天も地もない。鮮烈な『真つ白』の中に自身とアレクシア、近づく二つの存在が結ぶ、その間の空間だけが読水の知覚する全てであった。

……否、違う。そうではない。

読水はアレクシアを睨み、爆風に身を翻弄されながら。

その口で、自身の耳にさえ届かぬ言葉を。

ただ一人の相棒に向けて、叫んだ。

アレクシアの魔手が、読水へと伸びる。

それは最早読水の、人間の反射速度では反応できないほどであり。読水の背後から空間を跳躍し現れた第三の存在。

ランサー——龍の守護者、三吉慎蔵がその動きに対応できたのは。ひとえに彼女が誰かを護る為に戦った、英霊だからこそであろう。交差する魔手と十字槍、しかしランサーの槍が先んじてアレクシア

の肩口に穂先を打ち込まれ、アレクシアの攻勢が崩れる。

そして世界は広がり、感覚を取り戻す。

異形を後方へと弾き飛ばすランサー。アレクシアは既に瓦礫と化していく壁に背を打ちつけ、派手な音を立ててコンクリートをさらに細かく砕き割った。

しかしその体は溢れ出る魔力によって力強く支えられ、その全身に開かれた異形の瞳は全て、突如として現れたランサーの姿へと向けられている。

そんな恐ろしい異形の前に立ちほだかり、鋭く息を吐いて彼女は槍を油断なく中段に構える。

その眼には一切の恐れも焦りもなく、決意と気迫に満ちている。

そう、もう二度と、背後にいる己が主を失わないように。

朝でも夜でもなく、太陽もなく月もない。

淡い極光^{オーロラ}だけが空を覆う、いつでももなく、どこでもない世界。

そんな中で彼女は身を丸め、疲れた様に目を瞑っていた。

彼女の脳裏には、かつてこの五感で感じた全てのが、泡のように浮かんでは消えていつていた。

それは大切なものを守り続けた過去、忠義の記憶。

恩義返報と称した、思い出の数々。

……我ながらよく戦い、よく守った。

激動の時代に生き大業を成し遂げる者達。磨いてきた槍の腕は彼らを守り、大業の一助となれたはずだ。

彼女は思う。

……誠に満足、なれど……。

……何故、この手は槍を手放さずにいるのであろうか。

「ここで何してんだ？ さっさと起きろよ、ランサー」

幽かに響く声。

彼女——ランサーは薄めを開けその声へ、薄い影が揺らめく方向へと視線を向ける。

「ライダーか……」

「よう、元気そう……じゃあ、ないわな」

ボロボロだ。と、揺らめく薄い影から鮮やかに色付く青年の姿——
ライダーは足元に寝転ぶランサーを評し、腰に手を当てた。

「愚直に身を鍛え、一心に技を磨き、真摯に知識を増やし……そうして積み上げた多くのもので、たった一つの道を進み続ける。そんな一途なお前でも、今回ばかりはお手上げか？」

「……………」

ランサーの無言に、ライダーは笑った。

「……違うよな？ 違うから、こんな半端な所にいる。お前はまだ戦うことを、あいつを守ることを諦めちゃいない」

「……そう、みたいだ」

ランサーはそう告げると、実体のない大地に片手を付け、ゆっくりと身を起こしていく。しかしその体は震え、完全に立ち上がることが出来ずに膝を地に落としてしまう。

「必ず戻ると、そう言ったんだ……約束したんだ、竜を守ることを……！」

——私は今度こそ、約束を守ってみせる。

そう、ランサーは気炎を吐いた。

その意地が、英霊である彼女が現世に留まる理由。霊体の消滅を退ける、霊格の中心にまで通った一本の槍であった。

「……そうか」

彼女の言葉にライダーは心底嬉しそうに微笑み、両腕を頭上へと突き上げた。

そして、告げる。

「——イロアス・アニステイミ宝具、神よ、今一度力を」

「……………ッ!? ライ、ダー……………ッ!?」

「思いは聞かせてもらった……ランサー、俺の最後の宝具をくれてやる。お前自身が選んだ道を、運命を、全うしろ」

その言葉に、ランサーは驚きライダーへと顔を向ける。しかしライダーは微笑みながら、宝具を開放しその体を淡く輝かせた。

「ついでに全回復、全盛期にまで復帰させてやるぜ。サービス良いだ

ろ？ …… 凶に乗ったあのバケモンに抑止力を、英雄の力を見せてやろうじゃあねえか」

ライダーは茶化し、腰に手を当てた。

そして、彼は小首を傾げ白い歯を見せた。

「……ライダー」

「嬢ちゃんを頼む……なあライダー、知っていたか？ 俺は大英雄の従者にして、若獅子の導き手……」

——格好良いヒーローを助けるのが大好きな、お節介野郎なんだぜ？

その台詞を最後に、ランサーの意識は美しい靄に包まれていった。

——今一度、神々に願う。

死したはずの英霊の詠唱が、厳かに囁かれる。

その詞を、ランサーは重く苦しい、ズタズタに引き裂かれた身体で聞いた。

気がつけば、ランサーの意識は元の場所へ——地下鉄の改札口の前で地に伏した身体へと戻っていた。

ランサーは四肢を動かそうと意識を体に集中させるが、破壊され尽くした体は既に身動き一つ取ることすらままならない。

そんな中でランサーは、確かに見た。暗転と覚醒を繰り返す視界の中で、上階に続く階段、通気孔等を伝って改札口へ……風に吹きつけられたかのように自身へと押し寄せてくる、美しい靄を。

——英雄の背は空に瞬く星の如し。それを見上げる若者は生まれ、次代の英雄となる。

靄は地に伏したランサーを洗うように覆っていった。そうして失った魔力、活力へと置き換わっていく。

ランサーは自身を中心に吹き荒れる靄の中、手で地面を掴んだ。そして長い髪を魔力の奔流に靡かせ、ゆつくりと立ち上がっていく。

——願わくば、彼の背中に焦がれ従った、あの青春の力を……再び。

美しい靄は。フワリと風に煽られるように散った。そしてランサーが、吹き去った靄の中から直立不動の姿勢で現れる。

その体にはもう傷の一つさえ存在せず。衣装は腕の手甲はそのままだが、黒を基調とした洋式の軍服に、獅子と龍とをあらわした刺繍が施された陣羽織を纏い、足はブーツとこれまでの和装とは異なっていた。

そしてランサーは、その呼び名の由来となっている十字槍を手に、ゆっくりと伏せられていた顔を上げ、決意に満ちた両眼を開いた。

その眼には一切の恐れも焦りもなく、決意と気迫に満ちている。

そう、もう二度と、背後にいる己が主を失わないように。

そしてランサーはここにいます。

アレクシアを退け、読水を守るように背にし、槍を中段に構えている。

その背を見開いた目で見つめる読水。マスターとしての彼の目には、彼女が紛れもなくあのランサーであること、そして彼女のステータスが数値が上昇し以前より強くなっていることは分かる。

しかし一体、その身に何があったのか。事の経緯の一切が分からない。

「……………」

こんな状況ではあるが、気配すら感じさせず突然現れた自身のサーヴァントに、その全てを聞きたい気持ちはある。

しかし相も変わらず腰を落とし、中段に槍を構えるその愚直な背中に、読水はたった二言だけ、言葉を投げ掛けた。

「遅いぞ、ランサー……………もう二度と、死なせない」

「……………」

その安堵と決意に、ランサーは振り返ることなくこう返報した。

「はい……………もう二度と、死なせはしません」

……………挨拶は済んだか。と。

そんな二人の間に割って入るように、壁から背を剥がし終えたアレクシアがこちらへと歩み寄りながら言った。

「まさかここにきて……………ランサー、この聖杯戦争で最弱のお前が立ち塞がってくるか」

「……………アレクシア・ブロッケン」

「……見えているぞ」

黙って槍先を突きつけるランサーに、アレクシアは異形の瞳を向ける。

「その魔力、お前自身のものじゃあないな？ ライダーの宝具を使って、自身の全盛期へと霊体を再構築したか……ククツ、絞り尽くしてやった気でいたが、まだ私の邪魔をするか」

その言葉に、ランサーの顔が不快そうに歪む。

「……ライダーのマスター、彼女をどうした？」

「さあ？ 今となつては、もうどうでも良いわ。戦うべき抑止力も、奪うべき聖杯も、全てはここにある」

アレクシアがそう答えた時、アレクシアの背後から瓦礫が崩れる音が響いた。

見れば、光の奔流に飲まれたはずのシユウジが瓦礫の山から出てきて、黒鍵を片手にアレクシアを睨みつけている。

そんな彼を一瞥したアレクシアだったが、ふと自身の手に視線を落とす。

その手は僅かだが震え、腕から覗く異形の瞳は乾いてゆっくりと閉じつつあった。

そう、令呪を使う度に異形と同化していったアレクシアの肉体は、今やほとんど異形と同じになっていた。それは七十三柱目、独立した一柱の悪魔になったに等しい。

故にその消耗は、令呪一画で補えるようなものではない。

異形、アレクシア・ブロッケン。彼女の肉体は、急激に乾きつつあった。

「……このままいけば、結果は二つしかない」

前方を読水とランサー、後方をシユウジに挟まれたアレクシアは横を向いて後退りをする。そうして両陣営を自身の左右に置き、乾きに震える両腕を迎え撃つように左右へと伸ばした。

「私が世界を食い尽くすか、世界が私を食らうか……」

アレクシアは顔についた人間としての両眼を閉じ、スウッと深呼吸をしながら天井を仰いだ。

「どっちだろうと構わない。結果がどうであれ、私が納得して選んだ道の末路だから……見せつけてやる」

——これが、私の人生だ。

餓死寸前の状態で左右を強敵に囲まれ、尚も彼女はそう呟く。

その顔には一瞬異形としての険しさが消え、これまでの全てを誇るような微笑があつた。

そして。

異形と化した魔女は眼を開け、その瞳に悪意を燃やす。

「……さあ、私か世界か、どっちかを終わりにしようじゃないか」

第三十七話 『閃光』

第三十七話 『閃光』

午後十一時三〇分。

日坂市郊外、パーキングエリアにて開放された宝具『夢幻妄執城塞五稜郭』の城廓を、一人の狂戦士が突破した。

それは、高速道にて真選組の隊士らを相手取る役割を担っていたバーサーカーであった。

作戦が変わった訳ではない。彼が当然の如く、さも自分の存在意義であるかのように約束を破っただけだ。とは言え、ここに来るまでにいた隊士達は、軒並み片付けてきた。街へ侵入しようとする敵と戦っている中でここまで来たのだから、誰も文句は言えないはずだ。

「ハーハッハッハッハッ！ 来たぜえオイ！」

故に、彼に微塵の迷いもない。

天高く笑い声を上げながら敵を蹴散らし、水堀を魔術で走り抜け、土塁を健脚で駆け上がり、そして底なしの度胸で城塞の中心へと躊躇なく跳び下りる。その姿はまさに敵地へと侵攻し、我先に宝と名誉を求め駆けるバイキングそのものだった。

こちらの侵入に気づいた手近な隊士らを手始めに蹴散らし、バーサーカーは周囲を見渡し――。

そこで、気づく。

「……あの野郎、どこにいやがる？」

この城塞の長、キャスターのことではない。

バーサーカーの頭上で輝く本、この幻想の城塞の核である宝具の破壊を任せていたアーチャーのことだ。

「……クソつたれ」

バーサーカーは狂ってはいるが、愚かではない。敵味方を問わず、相手をやり込め、そして期待を裏切ることに関しては、むしろ優秀な部類だ。

だからこそ、気づく。

「……クソツたれ」

バーサーカーは自身を包囲していく隊士を他所に、苦笑いを浮かべもう一度呟いた。

「どうやら、先を越されたみたいだぜ……我が主様よう」

ランサーとシユウジを左右に置き、アレクシアは両腕を広げて構える。

「……………」

あの日。

あの日夜明けの空に見た、幻想的な光景。

手を伸ばしても届かず、遙か彼方へと消えた――。

――美しい宝物。奪えるなら、全てを投げ出すに値する。

――愛おしい敵。殺せるなら、全てを捧げるに値する。

それら全てが、この薄暗い地下に…………。

この、最後の最後に…………。

これだから、世の中は堪らない。

「堪らないなあ…………」

不敵な笑みを浮かべ、ポツリとアレクシアは呟いた。

「…………なあ？」

そう呼びかけ、全身の異形の瞳を…………今や死にゆくように閉じつつ

あった全身の眼を見開いて、二人の方を見やるアレクシア。

「…………ツ―」

「シ…………ツ―」

その呼びかけに応えるように、ランサーとシユウジは同時に動いた。

突き出される十字槍と、シユウジの黒鍵。二つを同時に認識し、アレクシアは左右の腕で受ける。

一瞬の拮抗の後、左右の得物は異形と化したアレクシアの膂力に弾き飛ばされる。しかし二人は間を置かずに彼女に飛びかかり、戦いは高速の乱撃へと変わっていく。

アレクシアは文字通り生まれ変わったランサーと、聖人へと至らん

とするシュウジ、二人の攻撃を躲し、弾き、時には敢えて受ける。

「アレクシアあッ！」

低い姿勢から、アレクシアの首へと黒鍵を突き出すシュウジ。アレクシアはそれを手で掴み取ると、体を半回転させてシュウジを強引に後方へ投げ、コンクリートの柱へと叩きつけた。

背中を強かに打ちつけ、苦しげに呻くシュウジ。しかし彼の目は一瞬後に見開かれて前を睨み、横へと飛び込む。

直後、アレクシアが右から左へと鞭のように振るった左腕が、シュウジのいた柱を抉り取る。

受け身を取って立ち上がるシュウジに、アレクシアは凶悪な笑みを浮かべながら振るった腕を天へと掲げる。すると、彼女の掌を中心に魔法陣が出現し、蛍火のような光球が無数に浮き出てくる。

アレクシアの攻勢にシュウジは歯噛みし、黒鍵を構え直した。

しかし、その光球がシュウジを襲うことはなかった。

アレクシアの横合いから、ランサーが槍を中段に構え間合いへと踏み込んだからだ。その接近に気づくと、アレクシアはランサーへと振り返り、間髪入れずシュウジに撃ち込む予定だった光球を放つ。

しかしランサーは腰を落とした堅実な構えから一転、槍を振り上げ、バク転するように上後方へと跳躍してその光球を跳び躲す。さらに跳び際、十字槍を右手で押し出すように投げ、アレクシアの肩を引き裂いた。

その挙動は正に一瞬。全身のバネを使って空中へと跳ねる姿は、武人というよりは体操選手のそれだ。

「……………」

流石、という他ない。

アレクシアは姿勢を崩しながら、舌を巻く。それでも彼女は、隙を突いて斬りかかってきたシュウジを蹴りで横に払い追撃を回避する。

優れた槍の名手であり、しかし決してそれに固執しない。

激情家ではあるが、それは破滅の淵まで。致命的な危機を避けるだけの理性は手放さない。そしてその個性は、彼女を相手取る者にとつては戦い辛さとなって表れる。

それと、厄介なことがもう一つ。

「ランサーッ！」

槍を投げ、得物を失ったランサーへと叫ぶ読水。

その右腕は再び魔力によって構成された銃身となっていた。

「使えッ！」

「……ッ！　お願いしますー！」

ランサーが右手で印を結んだ直後、詠唱によって、読水の腕から対戦車用のライフル弾が放たれる。

「——ッ!!」

ランサーの形相は険しくなり、顔に幾つもの青筋が立つ。

そのライフル弾は鋭角な射線を描きながら、アレクシアへと襲いかかった。

「……………」

こめかみ、頸椎、心臓、肝臓、肺、鳩尾……バイタルゾーン人体急所に弾を何度も打ちつけられる中で、アレクシアの異形の瞳は見ていた。

ランサーの宝具の正体……ライフル弾を啜え飛ぶ、真つ黒で巨大な蛟の姿を。

そう、全て見えている。令呪を使い顕現させてきた異形の力を、アレクシアは今や完全にモノにしていた。

洋装へと姿を変え、その力を最盛期へと戻している煙……その背後にいるライダーの姿も。

籠手に隠された、ランサーの右手に潜む竜の紋章……そこに秘められるの力も。

そして……。

「この……………」

一体、何人掛かりだ。と、推進力の失ったライフル弾を手で払い落とし、アレクシアは舌打ちをする。

その直後——。

「ゴブツ……………」

不意に、アレクシアの口からドス黒い血が溢れ出た。

予測はしていた。分かり切っていたことだ。強敵二人を彼女の体

が、ここにいる誰よりも早く、消耗していることは。

異形アレクシア、その身体は膨大な魔力を消費することでこの世に存続している。そのエネルギー源は通常の代謝では追いつかず、彼女の生来の魔力と一画分の令呪……残る僅かな魔力で以って賄っている。

そしてそれらも今、爆ぜるような勢いで消えつつあった。
しかし。

「……ハッ、悪魔の契約による代償、ビーストとの融合……！ 英霊との戦闘……！」

それがどうした。

「そんなものじゃあ、私は死なない……私は、強い！」

アレクシアは口から流れ落ちるドロ黒い血をそのままに、気炎を吐いた。そしてランサーに守られる読水を、彼の首に下げられたペンダントを、その中に納められた「欠片」を睨む。

「もうすぐ、もうすぐだ」

もうすぐで、決着がつく。と、彼女は血を零しながら犬歯を剥き出しに笑みを浮かべ、獲物を捕らえんと決意するように両腕を左右にゆっくりと広げていく。

そう。

どれだけ追い詰められようと、守りには入らない。

魔女と呼ばれた赤髪の女は、その最期の時まで獲物へと手を伸ばす。

市内に入った佐藤とレオポルディーネは車を捨て、シユウジ達と合流しようと街中を走っていた。

街中で起きている戦闘は、聖堂教会の介入によって大規模なテロ、あるいは事故として市民に伝わっている。その為に随所で交通規制が行われており、二人は車での移動を諦めざるを得なかったのだ。

「……ちよ、速い！ 待っ……佐藤さん、ペース落として！」

息を切らし、そう叫ぶのは佐藤の後方でヨタヨタと走るレオポルディーネだ。ロングスカートをバタつかせ、腕を左右に振るように走

る姿はぎこちない。明らかに走るのが苦手な感じだ。

「ミローネさん、ひよつとして運動ダメな人ですか!？」

「ダメって言うか嫌いよッ!」

「でもゴメン! 頑張って!」

「むひいッ!」

変な鳴き声が漏れるレオポルディーネ、それを尻目に佐藤は周囲の様子を確認する。

シユウジが向かった場所が、この街で一番栄えた場所である日坂駅の辺りであることは把握している。そしてその情報が、誘導されるままに歩く避難者の方向からも正しいと佐藤は思案していた。それでいて、避難先とは逆方向に走る佐藤達に誰も声をかけないのは、ヘトヘトになりながらも行っているレオポルディーネの魔術がしっかりと働いているお陰なのだろう。

「あ、ミローネさんこっち! こっち近道です!」

「……あ、ちよつと待って佐藤さん!」

後方のレオポルディーネに手招きし、投げかけられる言葉を無視して路地へと入っていく佐藤。

ここを通り抜ければ、後は通りを真っすぐ進むだけだ。もうすぐアレクシアのもとへ、読水達の所へ辿り着ける。

しかし。

「……そこで止まれ」

「……っ!」

その言葉と、皮膚を叩く正面からの殺意に佐藤の脚は止まった。

しかし、路地には誰もいなかった。佐藤はジツと、目を凝らす。すると隅の壁の暗がり屈む、弓を携えた青年の像を捉えることができた。

「……へえ、見えるのか」

「……アーチャー」

「見えるなら、見えるで良い……」

暗がりには潜んでいた青年——アーチャーは憂鬱な表情で笑みを作り、佐藤の正面に立ち塞がって矢を番えた。

「ライダーのマスター、俺と一緒に来てもらうぞ」

——どうして、こんなことになったのだろう。

レオポルディーネ・ミローネはへ口へ口と走りながらも、疑問に思わずにはいられない。

十四歳の時、父親や鏡宮悟といった大人達の策謀に呑まれる形での亜種聖杯戦争に参加したのが、そもその始まりだった。次期当主の座を約束する、という父の甘い言葉に惑わされたのも否定できないが……目上のおっさん共が交わした、下らない盟約とやらに自分の意志は流された。とにかくアレが、ケチの付け始めだった。

しかしあの頃はまだ、自分は都合の良い人形に過ぎなかった。鏡宮の指示に従ってこの亜種聖杯戦争で戦い、死ぬなり生き残るなりすれば良いだけ。ある意味、気楽なものだった。

それがバーサーカーと出会い、事情を見透かされ、戦いの中で盟約を破棄する決意をし……そして今、こうして雪の積もる街中を走り回っている。

「……あー、まったく」

息は切れて苦しいし、体中の血管が脈打って気持ち悪い。

自分はずっと冷静沈着な……我慢の利く人間だと思っていた。こんなブチブチと文句を浮かべて走り回るのはガラじゃあないはず。一体誰のせいであんなったのやら……。

……道を選び直した、私のせいか。

「まったく……まったく、だわ」

「おいコラ、何一人ご満悦になつてやがる！ 人の話聞いてんのかレオ!？」

念話でそう叫ぶのは、因果線の向こう側にいるバーサーカーだ。

「聞いているわよ。アーチャーがいないって話でしょ？ なら、ちやつちやとその宝具、あんたが壊しなさいよ」

「馬鹿チビが……そのアーチャーが、取り決めに無視してどこに行ったかが問題だつて言つてんだよ」

「ねえ今、私のこと馬鹿チビつて言つた、あんた……？ どこつて

……”

佐藤の後を追うだけで精一杯なレオポルディーネに、そんなことが分かるはずがない。

「あ、ミローネさんこっち！ こっち近道です！」

「……あ、ちよつと待って佐藤さん！」

後方で念話を行うレオポルディーネに手招きし、静止の声を無視して路地へと入っていく佐藤。

レオポルディーネは慌ててそれを追いかけて――。

――そして、路地に立ち塞がる、臨戦態勢のアーチャーと遭遇することになる。

“……あ、ここか”

“納得してる場合か、おい！”

思わず叫ぶバーサーカー、しかし納得してからの動きは素早かった。レオポルディーネは身構え、腰に差していたナイフを逆手で引き抜く。

「待ってくださいー！」

しかし、彼女の咄嗟の行動を佐藤は制した。

「目的は私みたいです！ ミローネさん、私は大丈夫です！ ここは……」

「ここは!? ここは貴方の陰に隠れてろって!？」

「その通りだ。レオポルディーネ・ミローネ」

アーチャーはそう言って頷き、ズイと前へと詰め寄る。

「これは鏡宮の指示だ。使いつ走りの魔術師、ここは引いてもらおう」
「……………ッ」

逆らえば、間違いなく死ぬ。このアーチャーによって、一瞬で殺される。

その覆し難い事実気圧され、レオポルディーネは歯噛みしながらも一歩退く。

“……レオ、令呪を使え”

結果の見えた睨み合いが続く、そんな中でバーサーカーが念話でそう提言した。

“佐藤が前に立っている以上、弓は使えない……令呪を使うだけの時間は稼げるはずだ”

“……いえ、ダメよバーサーカー。それじゃあ……”
それじゃあ、令呪はあと一画になってしまう。

狂化スキルが不安定なバーサーカーにとって、スキルを制御可能にする令呪は正に生命線と言って良い代物だ。

ここで一画を失えば、レオポルディーネ達はこのアーチャーとの戦い……そして全ての令呪を使い切ることになってしまうだろう。

それはつまり、この戦いで二人は亜種聖杯戦争から脱落することを意味する。

“それじゃあ……ここで終わることになるわよ”

“構うものかッ！ やれッ！”

“バーサーカー……！”

隊士らと戦いながら、念話ではここで終わっても構わないと叫ぶ狂戦士。

それに対し、その主は身の危険を前に、あくまでも理性的に判断を下すべきだと、怒りを抑え込み握り拳を震わせる。

「……おい」

そんなレオポルディーネを見て、アーチャーは声を投げかけた。

「どうした？ 一体、あいつと何を話している……？」

バーサーカーと念話を行っているのだろうと察知したアーチャーは、何か算段があるのかと警戒心を強め、敵意にその黒い長髪をやら逆立たせていく。

しかし。

「いい加減にしろ、アーチャー！ 私は、ついて行くと聞いたんだ

……ッ！」

その時だ。

佐藤が声を荒げ、アーチャーを睨んだ。

「それでも彼女を殺す気なら、私は死ぬまでお前と戦うから……ッ！」
「……………」

冷水を浴びせた、というのは相応しくない。

その威圧、言葉で、佐藤はこの場の空気を支配したのだ。

「……分かった。ついて来い」

毒気を抜かれたように構えを解いてしまったアーチャーは頷き、踵を返して通りの方へと歩き出した。

その背を睨みつけ、危険はないと判断した佐藤は振り返り、先ほどの気迫に呆気にとられていたレオポルディーネを見た。

「いつか、この戦争を起こした人には会わないと思つてたんです……だから大丈夫ですよ、ミローネさん」

ありがとうございます。と、彼女はそう言つて微笑む。

「あ……」

その言葉に応えようと、口が開く。しかし出てきたのは、様々な感情に震えて言葉にならない音だけだった。

そんな様子のレオポルディーネに軽く頭を下げ、彼女は遠くへ……通りの曲がり角へと消えていってしまう。

レオポルディーネは、何もすることはできなかった。ただ黙つて俯き、止めどなく湧き出てくる激情に体を震わせていた。

「……この戦争の終わりは近い」

そして、そんな彼女にアーチャーは告げる。

「精々……身の丈に合った振る舞いをすべきだな、小娘」

その言葉が、切つ掛けだった。

「——ッ！」

パツと顔を上げ、見開いた両目を不気味に維持したままアーチャーらが消えた通りへと駆け出す。

しかし通りへと出たものの、二人の姿は既がない。積もる雪にさえ、それらしき足跡さえ残されてはいなかった。

「……………ッ!!」

追跡は不可能と理解した彼女は、体を震わせながらギュツと目を瞑る。

怒り、後悔、不甲斐なさ……様々な感情の矛先を失い、それらの感情はレオポルディーネの身体で暴れまわる。

気づかぬうちに、彼女は唸り声を上げていた。言葉を持たない幼子

のように何度も、何度も感情を声にして漏らす。
それでも尚、身に焦がす激情が体内から消えることはなかった。

決着の時だ。そう、セイバーは宝具を開放し、告げた。

ああ。と、キャスターは剣を構え直し、応じた。

キャスターとセイバーは、雪積もる高速道の真ん中で対峙していた。

宝具を開放し剣を天へと掲げるセイバー。対し、キャスターは基本に忠実な中段の構えを取る。

しかし本当は、構えは必要としない。

魔剣『無影龍飛剣』は時間的、空間的な制限を掻い潜り、迫る一撃に最善の形で備える究極の後の先。故にあの宝具に対し、構える必要などない。

だが、必要だった。

己を初心に立ち返らせる為に。剣が好きで好きでしようがなかった、あの頃の自分に今、淡い夢の一つが叶ったことを知らせる為に。

「指、震えているな」

そんなキャスターに、セイバーが声をかける。

「宝具の完全開放、魔剣の連続使用……流石に無理しすぎだ」

そう、セイバーの予測は正しい。キャスターにはもう、時間がない。マスター、ウィリアム・シンを失い魔力の供給は絶え、今や令呪三画の魔力のみでキャスターはこの世界に留まっている。

そんな中で宝具を使い、その宝具もバーサーカーに破壊されようとしている。さらには、この亜種聖杯戦争で最強の座に君臨しているセイバーと戦っているのだ。その霊体は既に限界に近づきつつある。

「だが、もうすぐ……あと少しだけ、堪えてくれよ永倉新八。俺に弱り動けぬ老人を斬らせるな」

騎士の本懐を、遂げさせてくれ。と、このまま消耗戦に持ち込めば勝てる戦いの中、圧倒的優位に立つセイバーは恥ずかしげに笑って懇願する。

「……ああ」

その言葉に、キャスターは苦笑して応える。

「俺も同じ気持ちだよ、ロドリーゴ・ディアス」

朗らかな、一瞬の和解の後。

二人の間に、分厚い気配が張り詰めていった。

「……いざ」

と、キャスターは微かに俯き、目を閉じた。

「——ッ」

そして、開眼。

決着の時……最後の戦いが、始まる。

目を開けたキャスター。その眼前に、剣先があった。

キャスターの眼は、波のように巻き上がった雪の先端、左剣の切っ先が突き出ているのを見た。セイバーは雪面をただ全力で蹴って、キャスターの眉間を真っ直ぐに狙ったのだ。

……なれば。

極限にまで圧縮され、止まったようにさえ見える空間。

その空間を、キャスターという霊格だけが、その只中で思考し、動く。

キャスターの体は剣の軌道から僅かに身を外し、手にした刀身が切っ先を逸らすだけの、充分な体勢を整えていく。

この星の全ては、未だその動きを観測できていない。

否、そもそも動きなど存在しないのだ。

静止した世界、連続した刹那の進みさえない中で、影なき存在、キャスターという情報だけが実体を置き去りにし、動く。

世界がそれを認識する時、情報と実体が乖離しているというパラドックスは物理的な因果を超えて修正され、初めからキャスターはそこにいた”という、この世界にとって最もダメージが少ない事実が残される。

抑止力の修正を要とした、連続した時空間からの飛躍。それが魔剣『無影龍飛剣』のからくりだった。

魔剣によってキャスターが動けるのはほんの僅か、それこそ身じろぎに近い。

だがこの身じろぎに、一体どれだけの時間を捧げたであろうか。師の類稀なる発想と、弟子の常軌を逸した修練。二つを重ね今、老剣士は時間と距離を超越する。

しかし……。

空気の壁を突き破り飛来する、セイバーの突き。対しキャスターはその突きを完璧に対応する構えを取る。

……突きを刀で逸らしつつ、返す刀で胴を横薙ぎに払い斬る。

……これが突進気味に打ち出される突きに出来る最善手、キャスターの最速の反撃だ。

しかし……。

それが外れることも、キャスターは悟っていた。

……超音速で突き進むセイバーの突進。それはキャスターの剣戟を真つ向から飛び抜け、二人の位置は交差しすれ違って行くのだから。

そこまで理解できるが、それ以上の返し手はない。時間的、空間的束縛なく相手の攻撃に対し最善の反撃を取れる魔剣はしかし、彼我の技量、力量の如何によつてその効力は大きく弱められる。

そう。

反撃すら追いつかぬほどの速力を持った突撃、疲弊したキャスターでは捌くことが精一杯。セイバーも、そこは把握しているはず。散々刀で斬られ、彼はこの対策を見出したのだろう。

そう。

……なればこそ、ここからが勝負。

「——うや」

それは、無影の境地。

世界さえ認識していない音なき世界で、呟かれた。

剣士の言葉。

そして、世界は修正される。

難いだ剣筋は空を切り、永倉新八の左横を、ロドリーゴ・ディアスが炎の尾を引いて飛び抜けていった。それこそ予想した景色を、なぞるかのよう。

その姿を追うように永倉は振り返り。
そして、目撃する。

目の前にいるロドリーゴが、天へと掲げたまま残していた右剣——
宝具『秤ラールりルス威ステイ示ソす炎の剣』。

突き進む身をそのままに振り返り、後方へと振るい放つ最強の一撃。

白熱した炎の横薙ぎ、眩し過ぎるその剣撃を。

「——ッ」

——いぎ。

永倉は再び無影の境地へと至り、その中で刀を振り被る。

——いぎ、尋常に。

……かの一撃を受けるは悪手。

……あの炎は、受ければ全てを呑み焼き払うだろう。

……ならば最善手は、振るわれるより速く倒すこと。

……勝利の道は初動を押さえた、唐竹割りのみ。

永倉の影なき存在は剣を振り上げ、一步、踏み込んだ。

——いぎ！

そして、世界が修正された時。

「——ッオオオオオオアアアアアアアアアアアア!!」

時空を飛び越え現れた永倉新八は狼の如く吠え、上段に構えた魔剣を振り下ろさんとしていた。

それに相対するロドリーゴ・ディアスもまた、気高く雄叫びを上げて聖剣を薙ぎ振るう。

そして二人の剣士は離れながらも、剣閃を交差させた。

そして先に閃いたのは、横薙ぎの……。

自身の命さえ武器に敵を殺し、焼かれながら渴きを満たす。

その生涯は、燃え盛る炎のようだった。

そんな彼女——読水によって災害と称されたアレクシア・ブロッケンに残された時間も、最早僅かとなった。

既に令呪を使い果たし、体内に残された魔力も瞬く間に消費してい

く。それでもアレクシアは残る力で以って、ランサーとシユウジ、読水と真つ向から戦っていた。

「……ハッ……ハッ……」

肩で息をしながら、素早いフットワークで奇襲を狙うシユウジに对処し、粘り強く正面に陣取り挑んでくるランサーの槍を相手取る。

しかし、以前に見られた圧倒的な力を見る影もない。時折身体は言うことを利かなくなり、ランサーの速度に追いつけず、度々その身に十字槍を打ち込まれていた。

だが、それでも彼女の心は華やいでいた。

「……ハッ……ハアッ……ランサあああーッ！」

アレクシアが戦いの歓喜に吠える。

その時だ。彼女の右腕が、血の塊となって爆ぜた。

「……ッ!?!」

限界を迎えた、と一瞬ランサーの動きがアレクシアの前で止まる。思わずとってしまった、不意の停止であった。

その様子に、アレクシアは頬に浴びた血をそのままに、ヒクヒクと口端を釣り上げる。

「この……素人が……ッ！」

アレクシアは異形の瞳を妖しく光らせ、自身を中心に魔法陣を展開。動きを止めたランサーを、魔法陣から噴き上がる光柱で吹き飛ばす。

身を庇いながらも、光に吞まれるランサー。その力は、これまでアレクシアが令呪を以って行ってきた異形之力——焼却式に匹敵するものであった。

その光の奔流は空気中に炎を生み、吹き荒れる爆炎となった。

そしてアレクシアは炎の中から飛び抜け、爆炎がよりも速く駆け出す。向かう先は彼女が守っていた男、その首に下げられたペンダントだ。

「……届くッ！ 奪える……ッ！」

崩壊した右腕をそのままに地面を蹴り、目を血走らせ自分に言い聞かせるように呟くアレクシア。先ほど吹き飛ばしたランサーがどう

なつたかなど、もう頭の片隅にさえない。全てはこの為、あの“欠片”を奪う為にやった死の淵まで消耗し戦い抜いたのだ。英霊の一人や二人、気にする必要はない。

「……………ッ！」

爆炎を伴って突っ込んでくるアレクシアを見て読水は、拳銃をガンホルスターから抜き、連続して引き金を引く。

しかし数発撃つと、カチンカチンと撃鉄が虚しく音を立てた……………弾切れだ。

「寄越せ運び屋あああああッ!!」

絶叫するアレクシア。

それに対し、身を守る術を失った読水は……………。

「終わりだ魔女……………ッ」

恐怖に顔を引きつらせつつも、隠していた攻撃性を露わにし歯を見せた。

時を同じくして……………吹き上がる爆炎から飛び抜け、アレクシアの背を狙う代行者の姿があった。

シユウジは宙へと飛び跳ね、手にしていた最後の黒鍵を投擲。斬撃用に調整された黒鍵は投擲に向かず、クルクルと回転しながらアレクシアに迫り、それでも彼女の心臓を背中から貫いた。

“欠片”を餌に、アレクシアに読水を狙わせる。そうすることで、シユウジが致命打を放つだけの隙を作る。

ランサーが合流する前に、読水が提案した作戦。それがここに来て、功を奏した。

しかし。

「……………ガアッ！」

致命傷を負うも、アレクシアは止まらない。一瞬意識を失ったように呆けた顔を見せたが、すぐに凶悪な形相を取り戻し、走る勢いそのままに左の貫手を読水の胸へと突き出す。

「おわ……………ッ!?!」

読水は咄嗟に鞆を盾にして、貫手を防御した。鞆はグシヤリと砕け散るも、貫手は上に逸れ、その一撃は頭の真横を突き抜ける。

その際、読水は確かに見た。

圧縮された時間の中で、ロケットペンダントの紐が切れ「欠片」が宙に舞うのを。

直後、読水とアレクシアの体は激突。そのまま二人は背後からの爆炎に煽られ宙を舞う。

読水は鞆の中身や破片と共に地面へと転がり、レールの合間に背中を埋めるようにして倒れ込んだ。

そして鞆を失った左手で、首筋に手を当てる。右肩口から首筋に痛みを感じるが、今はそれどころではない。問題は、そこにあるべき紐の感触が……「欠片」がないことだ。

……俺の十年が、終わる？

右の顔を血で汚しながら目を見開き、読水はそう想起する。

この十年、この戦争の為に備えてきた。

この戦いの為に十年、ただ生き恥を晒してきた。考えられる全てのことに加え、乏しき才能を磨き、この身と鞆に十年の思い全てを詰め込んだ。

それが今、己の無力さによって終わろうとしている。寝る前の暗がり、ずっと消えることのなかったあの不安の通りに。

膨大な感情に縛られ動けずにいる読水の頭上、点滅しながらも地下の暗闇を照らす照明を覆う影が現れた……胸に黒鍵を突き刺されながらも、ユラユラと頭を左右に揺らしながらこちらへと歩く魔女、アレクシアだ。

「……………」

人間であれば……いや、彼女の現能力を鑑みても十分に死ぬであろう状態でも、生き続ける。五年前に読水が成れなかった、外道の姿であった。

——人のままくたばるか、外道になって生き抜くか……道は一つだ。

かつて師に示された、二つの道。

……彼女が外道としての生き残るのであるなら、人の道を選んだ俺

は……。

理性さえ溶けた瞳で、アレクシアはこちらを凝視する。弾切れとは言え、手にしている拳銃を向けることさえできず、読水はただ息を呑んだ。それはアレクシアの執念に気圧され、死を予感させた瞬間であつた。

彼女はゆっくりと息を吐き、ズイッと屈んでこう言った。

「……私の、勝ちだ」

そう告げて、ゆっくりと読水の首へと左手を伸ばす。その手には魔力が込められ、陽炎のようにその周囲を揺らめかせていた。

既に読水の首には、「欠片」は存在しない。故にこれは、その運び屋であつた読水への勝利宣言。彼を殺す為の行動だ。

……俺の十年が、終わる？

……彼女が外道としての生き残るのであるなら、人の道を選んだ俺は……。

死を予感した読水の感情が、因果戦を通じて伝わる。

「——ッ！」

それだけで、充分だった。

傷つき朦朧としていた読水のサーヴァント、ランサーは覚醒する。ランサーは壁に貼りついていた背中を引き剥がし、歯を食いしばって瞳に光を灯す。

そして次の瞬間には、彼女は閃光のように瓦礫の中から飛び出していった。

「ウオオアアアアアアアアアッ！」

咆哮を上げ、ランサーはかつてない速度でアレクシアへと横合いから飛び掛かる。アレクシアの異形の瞳はその決死の特攻に気づき振り返るも、避けることは叶わずに槍を胴に受け、体をくの字に折った。ランサーはアレクシアの胴を十字槍で突き刺したまま、常軌を逸した速度で柱へと激突した。しかし勢いは止まることなく、柱を砕いてそのまま地下鉄の横壁の向こうへと突っ込んでいった。

あまりの出来事に驚く読水。しかしランサーらが消えた一瞬後、二

人の方へと吹き抜ける突風が巻き起こり、読水から思考を奪い去る。ランサーとアレクシア。二人は顔を間近にして睨み合いながら、線路上の地下空間から別の地下施設へと飛び込んでいく……それは、どこまでも突き抜け破壊していく一筋の閃光のようだった。

そして二人は読水達を残し、崩れ行く瓦礫の中へと投げ出された。破壊の渦に体を翻弄されながら二人の体は離れ、そのまま瓦礫の中へと吞まれていく。

第三十八話 『裏切り』

第三十八話 『裏切り』

暗い地下。人工的な明かりが硬いコンクリートを照らす。

そんな冷たい世界を、得体の知れないものが呼吸もなく這いずって
いた。

「……………」

朽ち果てた身体を精神で引きずって、壁に手を付きながら一歩、また一歩と前へ進む。

ランサーの一撃を受け、崩落するトンネルの瓦礫へと呑み込まれたアレクシア。

あれからどれだけの時間が経ったか、アレクシアは瓦礫の中から這い出し、どここの施設とも知らぬ地下空間を彷徨い歩いている。その身体
の中心部はランサーの一撃によって大きく穿たれ、傷口が再生する
心配はない。さらにも皮膚の表面から覗いていた異形の眼も、既に白く
濁って動かず、呼吸さえ失って久しい。

満身創痍、という言葉では最早足りない。魔力を枯渇させた彼女の
肉体は今、死滅しようとしていた。

しかし。

……………まだだ。まだ、終わってない。

それでも彼女自身の瞳には、未だ消えない渴望が燃えていた。

……………こんな薄暗い、何も無い世界で。

……………こんな所で、独り終わって堪えるものか。

途切れ、地面へと吸い込まれそうになる意識。アレクシアは壁に付
けた五指に力を込め、その感触で落ちようとするモノを繋ぎ止める。

……………十九年前には、手を伸ばしても届かなかった。

……………そして先程は、届く前に横合いから阻まれた。

……………だから、今度こそ。

「……………いや、今度こそ終わりにしよう。アレクシア・ブロッケン」

乾いた銃声が、冷たい世界に響き渡った。

その銃声が自分を狙ったもので、心臓部に受けた衝撃が銃撃によるものだと思つづくのに、アレクシアは少しの時間を要した。

「……………」

その銃弾は、魔力を纏っていた。銃撃による痛みはなく、ただ衝撃が内部へと浸透する。

アレクシアは壁に付けていた腕から力を失い、バランスを崩して肩から壁へと打ちつけられる。

その拍子に、感じた。

繋ぎ止めていた大切な——不可逆的な何かが、体内から外へ、暗闇へと零れ落ちたのを。

「……………」

……………終わるか。と、アレクシアはゆつくりとした所作で前へと垂れ下がった赤髪を掻き上げ、前方を見つめる。

そこには、こちらへと向けた回転式拳銃の銃口から硝煙を燻らせ、出口の照明を背に影となった者の姿があった。霞んだ視界では見にくいのが、どうやらスーツに身を包んだ男のようだ。

この姿には、覚えがある。アレクシアは目を凝らし、その姿を凝視した。そう、たしかアサシンが、佐藤真波の令呪を腕ごと切り落とした時、彼女の殺害を謎の拳銃の名手に妨害されたと聞いている。

あれ以来、その姿を見聞きしたことなかったが……………

「そうか、お前がああの時の……………」

アレクシアは体内に、また赤黒く沸き立つものを感じた。同時に、自身の赤髪がゆつくりと逆立っていく。

「マスターのいない八騎目だと思っていたが……………お前は運び屋の……………」

口に来たのは、そこまです。

三度、銃声が冷たい世界に響き渡る。その銃弾にアレクシアは膝を折り、身を屈めた姿勢で地面へと伏した。

「……………君にもう選択肢はない。君には……………君は、やり過ぎたんだよ」

だから、君はここで終わりだ。

男は告げながら一歩ずつアレクシアへと歩み寄っていく。ここで

完全に、トドメを刺すつもりだ。

「……………」

アレクシアはモゾモゾと身を振らせ、何とか上半身を地面から引き剥がす。次いで壁に起こした背を預け、ゆっくりと近づいてくる男を正面から睨んだ。

異形の力を奪い、その瞳を宿したアレクシア。

だからこそ、分かる。

この男の姿を見たことで、全てを見通せた。

この日坂聖杯戦争の渦中で、残されたままであった幾つかの謎。それがこの男という存在によって、まるでパズルのピースがはまったように次々と意味を成し、完成された一枚の答えとして浮かんでくる。

……それなのに。

アレクシアは眼前に銃口を向けられる。次の一撃で、この完成したパズルを汚すことも、誰かに披露することもできずに死ぬことになるのか。

「…………ハッ、あーあ……………」

魔女は観念し、口端を上げて溜息をついた。

「これからもっと、面白くなる所なのに……………」

乾いた銃声が、冷たい世界に響き渡った。

その音に気づいた者は、誰もいなかった。

聖堂教会と魔術師協会双方に忌み嫌われたブロッケン魔女にして、世界を焼却できるほどの力を手に入れた異形——アレクシア・ブロッケン。

その最期を見届けた者は、この広い世界でただの一人。

一月三十日、午前一時二〇分

霊器盤の反応が、ひとつ消えた。

消えた反応はアサンクラス。それはサーヴァントが失っても尚、アサンクの宝具のお陰で聖杯戦争に居座り続けたアレクシア・ブロッケンの死を意味する。

「死んだ、か……………」

鏡宮は邸宅の自室でそう呟くと、鏡宮は燃え尽きるままに任せていた煙草に口をつけた。

そして瞑目し、自室の天井に紫煙を上らせていく。

……アーチャーの真名を知り、しかもサーヴァントを失ったというのに、令呪を魔力源に暴れ散らす不快な異形、アレクシア・ブロッケン。

……聖杯戦争からは脱落したものの、奇異な運命によって生き残り続けているライダークラスのマスター、佐藤真波。

……彼女らが、本当に邪魔で仕方なかった。

そう、鏡宮は疲れた瞼を指圧しながら、黙考する。

……アレクシアの死亡と、佐藤真波の確保。

……この部屋で、それこそ気の遠くなるような思いで、この時を待っていた。

……これで何の憂いもなく彼を殺せる。本来はキャスターの消滅も待つつもりだったが、それも結局、好機となった。

鏡宮は閉じていた瞼をカツと見開くと、煙草を既に吸い殻でいつぱいになった灰皿に押し込んだ。そして椅子から立ち上がり、部屋のカーテンを開け放つ。郊外に立つ鏡宮の邸宅からは、アレクシアが散々暴れていた都市部の様子がよく見える。並び立つビル群は、今や半分近くが停電しており、その混乱が見て取れた。

彼が黙ってそんな景色を見つめていると、部屋の扉がノックもなしに開かれる。振り返って見れば、アーチャーが佐藤を連れて扉の前で立っていた。

「連れてきたぞ、鏡宮……」

アーチャーはぶつきらぼうに言うのと、佐藤を部屋へと突き飛ばした。

「ああ……ではアーチャー、あとは計画通りに」

佐藤はその対応にアーチャーを睨むが、鏡宮は先立ってそう応える。アーチャーは顔をしかめ、さっさと霊体化し見えなくなってしま

う。

「あ、ちよつと……!」

「さて、佐藤君……彼の非礼は、私が詫びよう」

怒気を含んだ声で叫ぶ佐藤を呼びかけ、鏡宮はカーテンを閉めて佐藤と向き直る。

「……貴方が、アーチャーのマスター。亜種聖杯戦争の主権者……」

「その通りだ……初めまして、私が鏡宮悟。君が思うところの、諸悪の根源というやつだな」

「…………ツ」

「その義手はミローネ君から貰ったのか？ 怪我はもう、大丈夫なのかい？」

佐藤は険しい顔で僅かに腰を落とし、いつでも飛び掛かれるように身構える。しかしその様子を見ても、鏡宮は戦う気はないというように両手を軽く挙げながら、佐藤に語りかけ続ける。

「……貴方は」

「ああ、何か飲むかい？ あの高速道から、ずっと動きっぱなしだったのだろう？ 疲れているなら、そのソファで休んでも良いんだが……」

「貴方は……一体何を企んでいるの？」
「……………」

……この年頃の子は、正直苦手だ。まるで距離感が掴めない。芯の強い子は、特に……。

鏡宮は佐藤の質問に口ごもり、鼻を鳴らして手をポケットに入れそっぽを向いた。佐藤はさらに質問を続けてくる。

「聞きたいことが、たくさんあるから……だから私は、ここに来た。だけど貴方が、私をここへ連れきた理由は何？ 殺したいなら、ここに連れてくる必要なんてない」

「あー……勘違いしないでくれ。佐藤君、私は君に手荒な真似をしたくないから、ここにきて貰ったんだ。まあ、その対価として、君の要望には可能な限り応えるつもりだが……っつと」

言葉の途中で、鏡宮は念話でアーチャーが配置に着いたことを知る。

時間だ。

鏡宮は会話を中断し、待ってほしい、と片手を挙げる。

「すまない。少しだけ待ってくれ。ちよつと……電話をしなきゃならない」

「電話って……待って、貴方は一体……」

佐藤の問いかけには答えず、鏡宮は机に置いていたケータイを手にし、電話をかける。

そして無言で電話に出た相手に、こう告げた。

『暖炉に火を入れた』……そうだ。サンタから、プレゼントを奪いに行こう」

読水竜也含む四名の消息が途絶えてから、もう一時間が経過してしまつた。

早崎は電子端末で時間を確認し、焦りで体を揺すつた。

地上は現在、完全に混乱状態にあつた。電灯の多くは消え、水道やガスも止まつている。そして今も起こる大きな揺れと情報の錯綜に、市民の動揺は極限に達していた。

周囲の地元公務員は、数時間も前から早崎そつちのけで避難誘導に動いている。砦のように固められ放置された数台のパトカーの赤色灯に照らされながら、早崎だけがただポツンと電子端末を手にオロオロと焦っている。

……何年もかけて固めた聖堂教会による管理、指揮系統も何もあつたものではない。完全な失態。そう失態だ。

亜種聖杯戦争の監督役の一人として、ランサーのマスター——読水竜也を監視する。それがマリオ神父より与えられた任務だつた。

しかしキャスターの暴走に、アレクシアによる都市部での虐殺。さらに地下鉄での戦闘によるトンネル外壁の破壊と大崩落。被害は他の地下施設に留まらず水道管、電線等のインフラにも……まるで冬木の聖杯戦争さながらの被害損失だ。

……もう、一個人の監視どころではない。

……それなのに上からの指示は、未だ読水竜也の監視から一切更新されない。

……一体、何が起きている？

焦燥感と不信に苛まれながら、早崎は苦しげに白い息を吐いた。本音を言えば、早崎も彼らと共に市民らの安全を確保したいし、この異常なほどに大規模な亜種聖杯戦争の実態を知りたい。しかし聖堂教会の末端に過ぎぬ早崎には、いずれも過ぎた行いであった。

「……おい」

そうしていると、連絡係の同僚——横田がトボトボとこちらへと歩いてくるのを見つけた。

きつと次の指示だろう。それを心待ちにしていた早崎は横田へと駆け寄った。そう、期待に胸を膨らませていた早崎は、顔面蒼白の彼の様子には気づけなかったのだ。

「お疲れ様。で、上はなんて……？」

「いや……そうじゃなくて……」

「……横田？ お前……どうした？」

声を震わせ棒立ち状態の横田の様子に、流石の早崎も異常に気づく。そして横田は、ポツリと報告した。

「こっ……詰め所の連中が、何故かみんな殺されている」

「えっ……はい？」

予想外の報告に、早崎は呆然とその言葉を聞き返した。

「いや……殺されてたんだよ、銃で……っ！」

「だから、何で……!？」

「俺が知りてえよお、そんなの！」

状況が分からず、二人は無為な押し問答を繰り返していた。

「……見つけた！ まだこんな所にいたっ！」

そんな時だ、女子高生姿の先輩エージェント——リコが怒声を上げながらこちらへと駆け寄ってきた。その姿は普段の飄々とした姿とは程遠く、必死の形相をしていた。

「リコ先輩……え？」

「横田も……この、馬鹿ッ！」

今は先輩って呼ぶな。

本来であればドスの利いた声でそう釘を刺すであろうリコであつ

だが、今はそんな余裕もなく、彼女は早崎の両肩を掴みもたれ掛かるようにして息を切らしている。

そこで、早崎は気づいた。彼女の腹部が、血で染まっていることに。

「……せ、先輩……」

「何してんの、早く身を隠しなさい……っ！」

「身を、って……いや先輩、お腹から血が……」

「止血はしてる。ここは駄目……ここは、見晴らしが良すぎる……」

「リコさん、何があつたんスか！ 状況を……」

「殺されるぞッ！」

二人の動揺を、リコはそう一喝し黙らせる。

その次の瞬間だ。三人の横顔を照らすように、真っ白な閃光が広がった。直後、耳を聳する轟音が響き渡る。

「うわっ……爆発!?!」

「あそこって、ちよ……嘘だろ、詰め所の方角じゃん!?!」

「横田、あんた……本当に運が良かったね……って、「r b:情報戦

> こつち」も駄目か……」

爆発を同時期に、早崎が手にしている電子端末から短文による指示が次々と送られてきている。二人は爆発のショックでそのことに気づかなかったが、リコだけはその妨害工作に気づき舌打つ。

とにかく。と、リコは二人を見やつて声を荒らげた。

「誰かが『に』奇襲を仕掛けてきている。とにかく移動しよう」

「りよ、了解です。肩、借しましょうか?」

「ありがと……いい」

二人の了解を確認し、リコは人混みのある方へと歩き出す。横田と共にその後ろに従いながら、早崎は口を開いた。

「けど……一体誰がこんな……」

「……決まってるでしょ」

自身の調子を確認するように手を開いたり閉じたりを繰り返しながら、リコは呟いた。

「聖堂教会に喧嘩を売る連中なんて、何時の時代も化物と、魔術師くらいなものよ……ああ、それと早崎?」

「あつ、はい。傷の治療ですか？」

「違う……さつき、私のこと先輩って言ったか？」

「……………」

……少なくとも、先輩がここで死ぬことはなさそうだ。

当分、地面の下には行きたくない。

シユウジは重い足取りで階段を上り、地下鉄の出口から地上へと出た。

アレクシアによって繰り返された爆発。そしてランサーが放った一撃が決め手となって、地下鉄はものの見事に破壊された。

シユウジは崩落によって読水達と逸れ、一時間と時間をかけたものの、何とか地上へと脱出することができた。

そして……今のシユウジには、直感的に把握できた。あのアレクシアが、既に死んでいることを。彼女から漂っていた禍々しい気配が、どこにも感じられないのだ。

「……アレクシア・ブロッケン」

何が起こったかは、流石に分からない。読水の思惑通りに事が進んだのか、あるいは……いずれにせよ、彼女は敵を作り過ぎた。数々の恨みを買った彼女は消耗し、人知れず闇に葬られたのだ。

「……………」

とにかく、彼女の件は一旦置いておこう。シユウジは空を見やり、念話によってサーヴァントに連絡を取った。

“……セイバー、こっちは片付いた。そっちはどんな様子だ？”

“おうシユウジ。勝敗は決したが……すまん、宝具で遠くに吹き飛ばしてしまった。霊核は確かに潰したが、消滅にはもう少し時間が掛かるはずだ”

獣の生命力は侮れんからな。と、セイバーは茶化す。その様子にシユウジは苦笑し、負傷した身体の調子確かめる。

“なら、今夜の騒乱の根本はどうにかなったな。後は…………”

後は……『あの件』。養父との決着をつけ、この日坂聖杯戦争を終わらせるだけだ。

そう決意を固めるシユウジ。対しセイバーは、訝しげに鼻を鳴らした。

「だがシユウジ、街の方は何が起きている？」

「……どう意味だ？」

「今、キャスターを追って街へと戻っているが……銃声が聞こえる。何か、妙な事になっていないか？」

セイバーが疑問を呈した、その時だ。真つ白な閃光が電灯の死んだ街を照らし、直後には爆発音が響き渡る。

「な……っ!？」

崩落による轟音ではない、明らかに爆発だ。

それにセイバーの言う銃声というのも、爆音に痺れた鼓膜が正常に戻ってくる、どこからともなく聞こえてくる。しかし音の聞こえる方角からには、サーヴァントによる魔術的な気配は感じられない。

「サーヴァントによる攻撃じゃない……誰がやってる!？」

「予想はつくが……シユウジ、とにかくそこは危険だ。すぐに……」

“

セイバーの念話による忠告は、途中で遮断された。

忠告を閉ざす雑音……いや衝撃に、シユウジの両足は空へと投げ出され、視界が上回りにぐるりと回転する。その衝撃はシユウジの胸を突き抜け、次の瞬間には彼の前方にあったビルのショーウィンドウを碎き割る。

シユウジの体は力なく地面へと身を打ちつけられ、砕けたガラス片を轟音と共に被る。

「……………」

地面へと倒れ伏したシユウジ。突然の事態はあるがそれでも、彼は確かに見た。

自身の胸を貫き、そばのビルへと飛び込んだそれは……一本の矢であつた。

パン！ という高い音を、シユウジは耳鳴りの中で拾った。

弓を弾いた時にでる音——弦音だ。

倒れたまま、シユウジは全身の筋肉をバネにして地面を横へと跳ね

転がる。それは正に、本能的な行動であった。

一瞬間をおいて、シユウジが先程まで倒れていた地面へと矢が当たる。その刹那、圧倒的な魔力でもってタイルは砕け、地面を穿つ。その破壊の余波で、シユウジの体は再度吹き飛ばされ、車道の方へと転がっていく。

「……しぶといな」

起き上がることなく、倒れたままのシユウジ。そんな彼に、苛ついた声が掛けられた。そして、シユウジの前に襲撃者が上空から降り立つ。

それは、引き締まった体を黒い衣装で包み、漢服を片肌脱ぎに着崩した青年——アーチャーだ。

「本当なら、背中からの一撃で死んでいるはずだ……お前、本当に人間か」

アーチャーはそう言いながら、長い艶のある黒髪を後方へと撫で付ける。そしてモゾモゾと身を揺らしてアーチャーから離れようとするシユウジの姿に、舌打ちをした。

「足掻くな……セイバーのマスター、お前は、ここで終わりだ。せめて……」

……せめて、醜態を晒さず死んでいけ。

そうアーチャーは告げながら矢を番え、シユウジの背中へと狙いを定め弓を引いていく。

しかし——。

「……醜態を晒したのは、どちらだアーチャー？」

「——ッ!？」

深く、静かに響く男の声。

アーチャーは咄嗟に後方へと跳び、上空へと飛来した男を……その剣の一撃を躲した。

アーチャーは二歩、三歩とステップを踏み、後方へと引いていく。飛来した男はそれを横目に確認しながら、ゆったりとした動作で片膝立ちの姿勢から立ち上がっていった。

「何時ぞやの不戦協定を断りなく破棄し、マスターを背中から襲い、し

かも殺し切れぬとは……」

アーチャーはその偉丈夫を知っている。鎖帷子を着た大柄な体軀を鮮血のような赤いマントで包み、強者として圧倒的な気配を相貌に漂わせたその男は……。

「セイバー……ッ！」

「醜態を晒したのは、一体どちらか……なあ？ アーチャー……ッ！」
齒噛みするアーチャーと、怒りを押し殺せずに語尾を荒らげるセイバー。

セイバーの背後では、シユウジがゴロリと身を転がし仰向けになっていた。地面に付け上半身を支えているその右手の甲からは、これだけの局面を乗り越えても尚、三画あった令呪の内の一画が消えていた。

シユウジは焦点の合わぬ目でセイバーを確認し、浅い息を繰り返しながら掠れた声を漏らした。

「……協て……は、破らっ……た」

「……ああ、そうだなシユウジ。お前の所為じゃない」

セイバーは振り返ることなく、シユウジに優しげにそう告げる。

そして、両手に握られた剣のうちに一振り……右剣のテイソーナの切っ先をアーチャーに向けて叫んだ。

「……さあ、命じろ！ 我が主ッ！」

「ああ……や、れ……っ」

主君を背中を守り、戦いの許しを得た騎士を止められる者はいない。

憤怒の形相を浮かべながら、セイバーはアーチャーへと斬り掛かっていった。

第三十九話 『連鎖』

第三十九話 『連鎖』

ここから、始まった。

美しい月夜を隠すように、赤い炎と黒い煙が上がっていたのを覚えていた。

南米で行われた、非公式の亜種聖杯戦争。

世界大戦の亡霊——年老いたドイツ人が率いる、人造英霊兵団。

聖戦の暗躍者——タカ派の神父が指揮を執る、第八秘蹟会。

新時代に群がる商人——亜種聖杯戦争に好機を見出した、商業連合。

夢を継ぐ魔術師——かの土地を愛するが為に身を投じた、あの少年。

英霊全てが出揃うよりも前に決着を迎えた不正規、非合理的な聖杯戦争。

その、最後の夜。

英霊と魔術による洗練された闘争とは程遠い、血と硝煙に塗れた泥沼の殲滅戦。制圧は時間の問題となった、人造英霊兵団の本部。

そこに、鏡宮悟と読水奏馬はいた。

「おい急げ急げ急げ！ 時間ないぞー！」

「お前はちよつと落ち着け鏡宮！ でも、マジで急げよー！」

前線が近づいてきていることが、音と揺れで分かる。二人はここが戦場で滅茶苦茶に破壊される前に本部へと忍び込み、盗みを働いていた。

互いに声を掛け合いながら、優美に整えられた部屋内に踏み入り、目につく調度品や資料を手当たり次第にリュックサックや手持ちの鞆へと無理やり詰めていく。全ては時間との勝負だ。

「鏡宮！ これどう思う!?!」

「知らん！ とにかく持ってけ！」

「おい、何だこの黄金の銃!？」

「盗め盗め!」

よっしゃあ! という叫びの直後、ガラスケースを叩き割ったような音が響く。興奮状態の二人は普段以上の粗暴さで、彼らが積み上げてきた遺産を奪っていった。

鞘の模様が美しい、切っ先の折れた由来分からぬ短剣。

金細工が贅沢に施された、ヴィクトリア王朝時代の懐中時計。

櫛で作られた箱に納められた、古いスペイン語で書かれた本。

時折価値のありそうな保管物を見つけては、他の部屋を荒らす相棒と意見を交換し、バックの品と入れ替える。

そんな中、鏡宮が荒らしていた部屋の扉が勢い良く開かれる。

サラ——現地で知り合い、後に読水奏馬と結ばれることとなる日系ブラジル人の女性だ。彼女の手にはサブマシンガンが握られており、背負ったダツフルバックは中身が入っていないのかペシヤンコに潰れていた。

「来るぞ! いつまで荒らしてる!？」

「運び屋! あとどのくらいだ!」

「もう目の前! アダムをやつ、私達を置いて逃げかねないぞ!」

「……分かった! 撤収しよう!」

「ソーマは!？」

「あー……多分一階だ!」

「あの馬鹿……おいソーマ! どこ行った!？」

「あ、そのバック置いてけ!」

「うるさい! 早くへりに戻ってろ!」

サラはそう吐き捨てると、後に結ばれる男の名前を呼びながら一階へと走り去ってしまった。

「……まったく、お幸せに……!」

鏡宮はそう皮肉ると、最後に何か持ち去れないかと部屋を見回し彷徨く。

「……あつ」

どこからか、空を裂く音が聞こえた。

そう思った次の瞬間、爆音と共に屋敷が激しく揺れる。

「……おおっ!？」

咄嗟に鏡宮は頭を抱え床へとしゃがんだ。衝撃で窓ガラスが割れ、部屋を飾っていた調度品が次々に落ちていく。

「ああ……クソっ」

ロケットか、迫撃砲か……あるいは奴らか。詳細は分からないが、こちら側に飛んできたということは商業連合による攻撃だろう。

……彼女の言う通り、急いだ方が良さそうだ。

そう判断した鏡宮は気の抜けた四肢を叱咤し、立ち上がろうとする。

その時だ。机に掛けた右手が何かに触れ、無意識にそれを掴んだ。

「……………?」

鏡宮は立ち上がったから、手に掴んだそれを確認する。

「……………何だ? 木の、欠片?」

それは透明な材質で出来たハードケースで、クッション入りの中には小さな欠片が収められていた。

切断されたものではない。何か強い衝撃で砕け散ったような、角の立った欠片。

一瞬、あるいは数分か、鏡宮は時間を忘れ、ケースに収められたその欠片に視線を落としていた。

「……………」

一族により代々研ぎ澄まされてきた魔術、あるいはただの直感か。

しかし確かに、鏡宮には感じていた。渦を巻くように翻弄される多くの者の運命。そしてそれら運命が向かう果て……鏡には決して映せぬ渦の中心、ブラックホールのような特異点が。

……これが、いや、この先こそが……。

「……や! ……鏡宮!」

「……………っ」

耳に入る、親友の声。それが放心状態の鏡宮を現実へと呼び戻した。

「おい、どこにいる!? さっきので死んじゃったのか!」

「……大丈夫だ！　すぐ行く！」

鏡宮はそう叫ぶと、手にしていたケースをポケットに押し込んだ。

ここから、始まった。

聖堂教会から第二百七十四号聖杯と命ナンバリング名され、南米にて年老いたドイツ人が再構成を試みた「欠片」。

それは鏡宮らの手に渡り、日坂の地は聖杯戦争の戦禍に見舞われた。

第八秘蹟会、マリオ・アルバーニ。彼が立案、指揮した作戦により読水奏馬も、サラも死んだ。鏡宮が創設した研究組織も壊滅させられ、人員も資産も、全てを失った。辛酸を嘗めて守れたのは家族と、読水家の跡継ぎである読水竜也と、そして自分の命だけ。充分だった。

戦争をまた始めるには、この身一つ、この憎しみ一つで充分すぎる。そうして鏡宮は十年の時を、この戦争の為に費やした。そしてそれが今、決定的な展開を迎えようとしている。

日坂聖杯戦争。

本来敵同士の鏡宮とマリオが共謀し、始めた亜種聖杯戦争。

それは亜種聖杯戦争を経て、第二百七十四号聖杯の復元とシユウジプロジェクトという聖人の誕生を目的とした計画。

しかし鏡宮にとって、それは……。

「……先を越されたな」

それが、報告を受けたマリオ神父の第一声だった。

——アーチャーのマスター、鏡宮悟が聖堂教会を裏切る。

月明かりだけの、照明が灯っていない教会の聖堂。そこでこの事実を報告したエンツォは、至って冷静なマリオの反応、そして第一声に疑問を抱いた。

「……先を、か」

それはつまり、マリオ神父もまた鏡宮を裏切る気だった、ということだ。

マリオは頷き、傷の刻まれた顔をしかめ、腕を組んだ。

「他の人間ならまだしも……エンツォ、君なら鏡宮がいつか裏切ることも、私がいずれ彼を始末する気であることは分かっていただろう」
「……………」

エンツォは二十七年、南米にてあの地獄のような戦争を経験している。そしてそれ以来、十年前のクランプス作戦、シウウジの監視役とマリオの計画に深く関わってきた。

故に、マリオの言葉には肯定せざるを得ない。マリオと鏡宮、そして第二百七十四号聖杯……これらの因縁に、妥協という言葉などないのだ。

「しかし先を越されたというのが分からない。今残っている四騎のうち、セイバー以外は全陣営が鏡宮の息がかかっている……裏切るには良いタイミングだろう」

「優勢であるからこそ、奴には余裕がある。裏切るのは、聖杯が完成したタイミング……裏切るだけのメリットが、目に見える形となった時……そう、考えていた」

“欠片”から聖杯への復元。

それが成されれば、その聖杯を巡って奪い合いが始まる。そこでの戦いを見越して、マリオは戦力を分けて配置していた。

しかし、それが仇となった。手元に戦力を置いておかなかったが為に、このような奇襲を受ける結果となってしまった。

「……………認めよう。今回は読み負けた」

マリオはそう呟き、しばしの間聖堂内をうろつくように歩く。そして、ふと顔を上げ、こう告げた。

「……………日坂市を包囲していた騎士団を招集させる」

「……………っ!? 神父……………っ!」

「監督の補佐として集められた第八秘蹟会の面々には、各自退避の指示を出す。エンツォ、君は……………」

「待ってくれ、神父! それは越権行為が過ぎる! ……ここを……………この街を再び戦場にする気か……………っ!」

聖堂騎士団——聖堂教会が保有する武力の一角にして、代行者と異

なり、多集団戦を得意とする軍団だ。マリオはそんな騎士団の一部、シプレス碑炎騎士団——マリオの私兵と言っても良い集団を、正規の手続きなしに日坂市周囲へと派遣させていた。

しかし、騎士団の派遣はあくまで亜種聖杯戦争の枠を超えた、言うなれば最悪のケースに備えてのもの……その弁明でようやく、首の皮一枚繋がる。それだけ危険な差配だったはずだ。

「彼らをここに呼べば、もう誤魔化しは利かなくなる！ 聖堂教会にはいられなくなるぞ!？」

「組織の為ではない」

エンツオの必死の抗議に、マリオは毅然とした態度でこう言い放った。

「エンツオ……我々は神への信仰の為、これまで手を汚してきたはずだ……違うか？」

「…………ツ」

「今更、身を切ることを怯えて何になる？」

……止められないか。

エンツオの諦めを見て取り、マリオは静かに頷いた。

「私はここで各方面に指示を出す、君は今からシュウジの回収に向かってくれ」

「…………了解」

……保護や護衛でなく、回収ときたか。

その言いように、さらに深く顔をしかめるエンツオ。しかし、その不快感は自分がシュウジに対し情が湧いてしまっているからこそ。弱くなった証左だ。

「気をつける。我々として、ここからは聖杯戦争の駒に過ぎない。奴は直接殺しに来るぞ」

だが、彼は違う。

エンツオの様子に気づかず、瞑目しながらそう言って顔に刻まれた傷に触れるマリオだけは、あの南米の戦争から何も変わっていない。

マリオは閉ざしていた眼を開き、呟く。

「誰にも邪魔はさせん……全ては聖なる使命の為に」

その眼光は既に、人道を説く聖職者のものではない。それは信仰を灯火に、神なき闇の中を誰よりも長く進んだ……そんな者に宿る、獣の眼光であった。

「オオオオオアアアッ！」

満身創痍の状態で吠え猛り、アーチャーへと肉薄してくるセイバー。その様子を見て、アーチャーは早々に察した。

セイバーが見た目の通り、万全の状態ではないことを。

魔術師クラスでありながら、白兵戦において無類の強さを誇ったキヤスターとの戦闘は、この日坂聖杯戦争最強の座に君臨していた剣士を充分に消耗させたようだ。

……全ては鏡宮の予定通りって訳か。気に入らねえ……。

こちらへと迫るセイバーに、アーチャーは後方へとリズミカルにステップしながら白い矢——師より奪った、彗星の如き威力を秘めた矢を番え、セイバーの一撃が来る瞬間に備えた。

……こいつは言うなれば、手負いの獣の激昂。残された力の全てを使って脅威を払い退け、危機を打破しようとする試み。

……その渾身の一撃を避けつつ、カウンター気味に矢を急所に打ち込めば……終わりだ。奴は食らった攻撃が何かも分ならず消滅する。

「アアアガアッ！」

……そうら、来た！

セイバーが強く地面を踏み込んだタイミングを見計らい、アーチャーは両膝を曲げ、身を縮める。そしてセイバーが左剣を振るうその直前、アーチャーはバネのように一気に後方へ跳ねた。同時に全身の力で弓を引き絞る。

セイバーによる、勢いも余力も込めた渾身の横薙ぎ。

アーチャーによる、射撃動作を兼ねた全身での回避運動。

互いの一挙動が、圧縮された時間の中で緩やかに行われる。

踏み込んだ足から剣へと連動していく、セイバーの一撃。アーチャーはその過程を見ながら、冷静に矢先をセイバーの心臓部へと狙いを合わせていった。

保有スキル『千里眼』による動体視力……より厳密に言えば、見るべきタイミングで目標に焦点を合わせる瞬間的な意識力。生前のアーチャー——逢蒙の生来の力。太陽を撃ち落とした后羿の弟子足り得た才能だ。

草陰に潜む獣、周囲に溶け込む鳥、擬態する虫……ただ視力が良い、動体視力が良いというだけではそれらから欺かれる。真の狩人は、自然から微かに覗く身体の一部や痕跡から、獲物の輪郭シルエットを捉えるのだ。そう、アーチャーはずっと見てきた。

いずれ倒すべき剣士の動き、戦い方を、この戦争が始まった時から。だからこそアーチャーには、セイバーの動き、その一撃の瞬間を見極められる。

……阿呆が、外れだ。

アーチャーはセイバーの剣の間合いから離脱しながら、彼の白刃が空を切る光景を目で捉えていた。

そして剣が空を切り、胴の守りがガラ空きとなるタイミングで矢を放つ。

宝具——『尊射日』リップオフ・フォール・サン。魔力によって流星のような光を放ち、絶

対的な破壊をもたらす九本の矢。

その一矢が凄まじい衝撃波を生みながら二人の間を結ぶ空間を飛ぶ。矢が心臓部へと飛来するまでの時間は一瞬、音速さえ超えた刹那の間だ。

「——ッ！」

その刹那の時の中で、アーチャーは確かに見た。

絶対的な一撃を前に、セイバーは外した横薙ぎの勢いを殺さずに腰を切り、右剣を振り上げるように振るうのを。

そして剣が、矢を横から叩く。瞬間、閃光が放たれた。

音を置き去りにした閃光の直後、矢は横からの衝撃によって軌道がズレ、セイバーの肩当てを掠るようになって当たる。余波でセイバーはたたらを踏むが、矢はそのまま後方のビルへと飛んで行ってしまい、ビルの壁面を破壊するに留まった。

「な……ッ!?!」

左右の回転の速さで攻撃の隙を埋め、一撃の重さで宝具の軌道を逸らされた。

師より奪ってから、多くの戦士や魔獣を射殺してきたこの赤い弓と白い矢。稲妻や彗星にも例えられるこの一撃でさえ『守り』に徹せられ、避けられたことや受けられたことも時にはあった。しかし、『攻め』の姿勢でもって、力技で抑えられたことなど……。

「フツ……ぬぁッー」

驚愕に顔を歪ませるアーチャーに、余波で頬に擦過傷を負ったセイバーは笑みを返す。次いで体勢を立て直すや否や前進、右剣で突きを放った。

アーチャーはそれを横に跳んで避け、二撃、三撃と続く連撃を躲す。精彩を欠いた、荒い連撃を繰り返すセイバー。アーチャーはそれを確実に躲していくが、反撃に矢を放つことはない。

……完璧なタイミングだった。それなのに……それなのに、それをこいつは正面から凌いでみせた……。

アーチャーはすり足でリズムカルに後退していきながら、矢筒に右手を触れる。

……矢は残り六本。

……無駄には、できない。

無理な攻め込みを繰り返すセイバーに打ち込む隙は幾つもある。しかし先程の失敗から立ち直れずにいるアーチャーは、精神的な動揺とプレッシャーにより二の矢を放つことができずにいた。

「……クソッー」

苛立った声を上げ、アーチャーは後方へと大きく跳躍。雑居ビルの屋上へと飛び降り、セイバーを睨みつけた。

「ふう……ククッ。連戦はキツイな、流星に……」

対しセイバーは、両膝に手をつけ前屈した体勢で息を整える。しかし腸が煮えくり返っているアーチャーとは対象的に、その口端は上がっている。

「アーチャー、何をしている……話が違うぞ？」

と、そこへ鏡宮がアーチャーへと念話で声をかけてきた。

「『弓』を使うのはマスターだけだ。セイバーに対しては、必ず『木棒』を使え……そう言ったはずだ」

鏡宮……いや、問題ない！ あの野郎はこのまま弓で殺す！」

「いや、駄目だ……お前の弓では、そのサーヴァントには勝てない。勝つにはマスターを狙うか、木棒を使うしか道はない」

「黙っている魔術師ツ！ これは俺と奴の戦いだ、横から口を挟むな！」

「……………」

分かっていないな。と、鏡宮は失望混じりの声で呟いた。そして――。

「アーチャー、令呪を以って命ずる――宝具『リナウンス・ジ・アーチャー逢蒙殺羿』でセイバーを殺せ」

令呪――自身のサーヴァントへの、三画の絶対命令権。

それを鏡宮は、ここにきて躊躇いなく切った。

「……………か、鏡宮……………」

「これはお前の戦いじゃあない。これは私の戦い。私の復讐の、戦争だ」

「鏡宮あああああああッ！」

アーチャーが声を張り上げ、矢筒に添えられていた右手が腰帯に指していた木棒を引き抜く。

それは師を裏切ったことで名を残した英霊の、裏切りへの絶叫。そして弓手の弟子としての矜持を捨てた、忌むべき物語の具現だ。

「アアアアアアアアアアアッ！」

アーチャーは絶望の声を上げながらビルの屋上から飛び降り、木棒をセイバー目掛け真上から振り下ろす。

瞬間、真つ直ぐな木棒は変質。巨木の如くに膨れ上がり、根のように枝分かれした。

「これは……………ッ!？」

その異様さに目を見開いたセイバーはその一撃を避けようと腰を落とすが、しかし、道路の横幅を埋めるほどの肥大化した一撃はセイバーの周囲……マスターあるシユウジにまで範囲が及ぶことに気づ

き、飛び退けるのを躊躇う。

そして次の瞬間には、振り下ろされた宝具の一撃はアスファルトへと突き刺さり、一瞬の間を置いて、幾つもの巨大な根が地面を掘り起こし破壊していく。

そしてアーチャーが隆起した地面へと着地、木棒を地面から引き抜き身を起こした時には……既に、周囲は宝具の木によって侵食され、破壊された破片と積雪、そして木の幹が混じり合った廃墟と化していた。

宝具——『逢蒙殺羿』。

それは鏡宮がアーチャー——真名、逢蒙を自身のサーヴァントに選んだ理由。彼の師である后羿が討った多くの魍魎や神獣らの怨念により形状を変質させ、大木の枝や根を思わせる高密度の一撃をもたらす宝具だ。

その一撃は、誰かに裏切られた経験を持つセイバー——故国の王によって二度とも三度とも呼ばれる追放処分を受け、戦場にて幾多の裏切りを受けたエル・シッドのような者に対し、致命的なものとなる。しかし。

「……なるほど。どうやら主に裏切られ、令呪で望まぬ戦い方を強いられているようだな」

破壊の限りを尽くされたビル街に、セイバーの声が響く。同時にアーチャーの眼下、陥没した地面の下から眩い光と熱が伝わってきた。

「……………」

「ならば、悪いな……ここからは二対一だ」
均衡が崩れたな。と、剣士はそう告げる。

そこには廃墟となった壁を背に座るシウウジと、それを守るようにアーチャーに対峙するセイバーの姿があった。彼は体中血塗れだが、その足取りは以前のものよりずっと確かであり、さらには右手に握られた剣の刀身は白熱、光炎を纏っていた。

アーチャーはすぐに気がついた。セイバーの体は宝具を受けた先程より治癒が進んでおり、あのキャスターを破った宝具

『ラ・ルース・テイソーナ秤り威示す炎の剣』の解放ができるまでに魔力が回復している。

……この急激なまでの回復。答えは明白だ。

うつ伏せのまま倒れた、シユウジの右手——さっきまで二画の令呪が刻まれていたはず手の甲には、また新たに一画分の令呪が消失していた。

おそらく、シユウジは二画目の令呪を使用しサーヴァントの魔力を一気に回復させることで、宝具の使用が可能な状態にまで治癒させたのだろう。

それに……アーチャーは気づいてしまった。

シユウジが身動きすら取れぬほどに瀕死の状態でありながらも、それでも眼だけは大きく見開き、こちらをジツと見つめていることに。

……こいつ、まだ意識があるのか。

背筋にヒヤリとしたものが走るアーチャー。

そう、セイバーは決して一人で戦っているのではない。積雪に顔を半分埋めながらも、そして今も、シユウジはずっとアーチャーとの戦いを見ていた。だからこそ、アーチャーが宝具を使用した際には迷わず令呪を使い、その危機を脱することができた。

……まさに、不撓不屈。

……決して諦めるという選択を選ばぬ、その姿はまるで……。

「……………ッ」

ざり。という音と、小さな石片を踏んだ感触で、アーチャーは自分が知らずに一歩、後退したのを知った。

「……………どうしたアーチャー。来いよ……………それとも、こつちから行くか?」

「ぎ、貴様らあ……………っ」

状況は以前アーチャーが圧倒的に優勢であるが、それでも戦い、生き残っている二人に、アーチャーは気圧されつつあった。

「ククッ……………鏡宮よ、アーチャーを通し知るが良い……………令呪の使用と
いうのは、マスターとサーヴァントというのは……………英雄とはッ!! 斯
く在るべきなのだ!」

セイバーが気炎を吐き、力強く跳躍。アーチャーの真横へと降り立

つと、間髪入れずに左剣を薙ぐ。

アーチャーはそれを真上に跳んで躲し、再び宝具の力を解放。膨れ上がった呪いの力で空を真っ黒に覆い、大地へと振り下ろしていく。「ぬあッー」

アーチャーの周囲諸共を破壊する宝具の一撃に、セイバーもまた宝具で応える。彼は解放した右剣の宝具を振り抜き、白熱した光炎の一撃で巨木を焼き切りにかかった。

木棒と炎剣。

呪いと信仰。

黒と白。

二つのせめぎ合いが天と地、その狭間を結ぶようにして始まる。

「……うわあ」

「何だか、スゲエことになってるな……急いで離れるぞ」

「承知しました……マスター、もう少しこっちに寄ってください」

「ん……」

一方。

読水とランサーは、セイバーらの戦闘が繰り広げられている大通りから少し離れた所にある裏道を歩いていた。

アレクシアとの戦闘から一時間と十数分。読水達もまた、這々の体で地下から脱出していた。そして一度復活してから洋装へと姿が変わったランサーに支えられながら、読水は周囲から聞こえてくる正体の掴めぬ戦闘音——雷鳴のような、耳を聳する轟音から離れようと移動している。

「なんて音だよ、まったく……こっちはもう、ボロボロだったのに……」

「ええ……流石に今は、逃げに徹しましょう」

読水は、既に満身創痍であった。アレクシアとの戦闘による全身の切り傷、打ち傷等の軽傷に加え、地下鉄の崩落の際には瓦礫が当たったことにより右足首を負傷。右脚を引きずるようになっただけで歩けなくなっていた。

失ったのは身体だけではない。アレクシアの一撃から身を守る為に、長年愛用していた鞄とその中身——魔術礼装を失った。

そして……あの“欠片”。この聖杯戦争の中心にあると睨んでいたあの『聖杯の欠片』も、収納していたペンダントごと地下の瓦礫の中へと飲み込まれてしまった。そう。

他勢力の思惑から外れ、『運び屋』読水は人知れず、この戦争で最も重要な存在を手放してしまっていた。

「……マスター、すみません」

そんな読水に肩を貸しながら、ランサーはおずおずと口を開いた。

「その……あのペンダント。それにマスターも、私だって……命令通りには守りませんでした……」

「……」

「ライダー……先程伝えた通り、彼の助力なしには私はあの時点で終わっていました。不甲斐ないばかりです……」

「確かに、五体満足とはいかなかった……何か見た目も、ステータスも変わってるし……まあ、あれ相手に生き残れたんだ。良くやったさ」

異形——アレクシア・ブロッケン。

あの地下にいた読水達や、シユウジだけではない。彼女はこの世から消滅したはずのライダーを始めとするこの世界の全てを敵に回していた。しかし、それでも彼女は全てを食い物にする気ではなかった。

そんな超一級の獣を相手に、こんな三流の魔術師が生き残れた。読水からして見れば、それだけで充分に奇跡だ。

それに……。と、読水は言葉を濁しながら、ペンダントがかつてあった胸元で拳を握る。

……それに、あの“欠片”が自分の予想通り亜種聖杯戦争の覇者に与えられる賞品……『願望機たる聖杯の器』であるなら、この戦争の最後には必ず姿を見せるはず。

幸運にもランサーは、彼女の言い分によれば最盛期の姿——ランサークラスとして本来の能力に戻った。逆に自分は満身創痍、鞄も魔術礼装も失ったが……令呪が残り一面に、拳銃もまだ残っている。

……まだ、戦える。

……最後の決着の、その時まで……戦ってやるさ。
押し黙りながら、決意を新たにす読む。

その時だ。読水を支えながら歩いていたランサーの足が、不意に止まった。

「……どうした？」

「……キャスター」

「は？」

呆然と呟くランサー。読み水は顔を上げ、彼女の見つめる前方を見る。

そこには、ビルの壁に背中を預け、白い息を吐きながら頭上を見上げる老人の姿があった。影となつて良く見えないが、その姿は血にも塗れてボロボロであり、しかし手にはキラリと光る白刃が……刀が握られていた。

「……………ッ!?!」

その姿は初めて見る。だが、この亜種聖杯戦争のマスターである読水はすぐに察知した。この浅葱色の羽織を纏う老人こそ、あのウィリアム・シンが終ぞ姿を見させなかったサーヴァント。あの新選組の霊体を操っていたキャスターだ。

「ランサー……いや三吉慎蔵さん」

待っていた。と、キャスターはこちらへと弱々しく笑う。

「貴方は……まさか、永倉さん？」

ランサーの真名を口にしたキャスター。ランサーもまた、その老人の姿を見て動揺しながらもその真名を言った。

その二人の様子と言動で、読水はウィリアムのこれまでの行動に合点が行った。

永倉新八——新選組二番隊組長にして、沖田総司、斎藤一らと同様新選組最強の一角と語られる男。維新の後は、新選組の生き残りとして後世にその活躍を伝え残していったという。故にその名や姿は、現代においても他の新選組隊士以上に広く知られている。

その為、ウィリアムはキャスターの姿を隠し続けてきたのだろう。

取り分け、ランサー——かつて長州藩士として同じ時代に生きた、三吉慎蔵には。

「三吉さん、君を待っていた」

寄り掛かっていた壁から身を離し、キャスターはこちらへと相対した。それを受けて、ランサーはそつと読水を壁際へと避難させてから前へと歩み出る。

“……ランサー”

“いえ……マスター、彼はもう……”

読水らの念話に気づいてか否か、キャスターはゆつくりと手にした刀を中段に構える。しかしその剣先はガタガタと震え、やがて両膝がガクリと地に落ちてしまう。

「その姿……」

「はは、あのセイバーと戦って、この様だ……もう、長くは保たん」

「……………」

「負けたことに後悔はない。だが……どうやらアーチャー陣営がセイバーのマスターを奇襲し、疲弊したセイバー諸共殺しにかかっているらしい」

「シユウジが……?」

その報告に読水は反応し、その反応にキャスターは顔を綻ばせる。

「これも戦争だ。ランサーのマスター、どうするかは君に任せる」

「……分かった」

「だが、その前に……眼の前の敵をどうにかすべきだろう」

なあ、ランサー? と、キャスターへと声をかける。

「……………」

ランサーは黙って振り返り、読水の顔色を伺う。そして読水が頷くのを確認してから、ゆつくりとキャスターへと歩み寄った。

「待っていてください。今、楽に……」

介錯の申し出。しかしその歩み寄りを、キャスターは平手を突き出し止める。

「そうじゃない。言っただろ? 眼前の敵をどうにかすべきと……今回
は最期まで、俺は新選組のまままで戦い切りたい」

ランサーはそう言うのと、ガクガクと体を震わせながら、それでも剣を支えに立ち上がっていく。

「……永倉さん」

「なあ？ 長州藩士、三吉慎蔵……」

「……壬生狼」

再度口される、ランサーの言葉。

その声は期待と悦び、そして畏敬に震えていた。

ランサーは足幅を広げて腰を落とし、槍を中段に構える。キャスターもまたそれを見ると破顔一笑、刀を上段へとゆつくりと持ち上げていく。

「……」

静かに戦いへと臨む二人を、読水は黙って見守るしかない。

マスターもおらず、既に消滅は免れない瀕死のキャスター。そんな彼との戦闘に付き合う理由などない。しかし自分が新選組と長州藩士、敵として激動の時代を生き抜いた二人の間に立つことなどできないのも、また事実だ。

故に、信じるしかない。ランサーのマスターとして彼女の實力を

……例え、キャスターの剣の腕が新選組最強と呼ばれていようと、だ。

「……」

……何でいつも、いつも、いつもこんな目に合うんだ？

そう、思わなくもないが……今だけ、このいつ何が引き金となるかわからないこの緊張感の中では、文句さえ喉の奥から出てこない。

刀を上段に構え、今にも飛びかかりそうなキャスター。

腰を据えて槍を中段に構え、それを迎えるランサー。

二人の間に、歪みさえ見えるような重苦しい空気が漂う。

しかし……

「……ぐっ」

その緊張が、キャスターの呻きと同時に切れる。

そしてキャスターの膝が笑い、ガクリと地へと……

「——ッ!？」

瞬間、待ちの姿勢であったはずのランサーが前へ出た。

次の瞬間には、槍の穂先はただ真つ直ぐにキャスターの胸を貫いていた。

「……………」

読水の目に映ったのは、そんな一連の光景。ただランサーの槍が、キャスターの急所を突き、それが当たったという呆気のない結果だ。しかし。

「流石です……………」

それでもランサーは嘯く。最期まで戦い抜いたその好敵手に、称賛を送る。

「流石……………流石は新選組二番隊組長、永倉新八！」

「……………嗚呼、有り難い……………な」

これであろうやく、あの頃の俺に戻れる。と、心臓部に位置する霊核を破壊されたキャスターは力の抜けた顔で眩き、刀を地面へと落とす。

そしてその体は、淡い光となって静かに消滅していく。

その両膝は貫かれた槍に支えられ、最後まで地面に落ちることはなかった。

キャスター——妄執の魔狼、永倉新八。

彼の消滅により、都市部へと向かっていった新選組の亡霊達は消滅。郊外のパーキングエリアにて展開されていた宝具『夢幻妄執城塞五稜郭』もまた時間をかけ崩壊していった。

同時にこれは、監督役による各陣営との戦闘禁止令の解除を意味していた。

しかし、その事実を確認している者など、もうどこにもいない。

二つの人影が、雪舞い散る月夜を飛ぶ。

人影から伸びる巨大な呪木に、それを焼き切る光炎を操る人影。

人工的な灯りを失った街の空で繰り広げられるその戦いは、まさに神話の光景。文明が影を潜めた、神秘の一夜。

「ぬあッ！」

巨大な三つ首の龍のように枝分かれし迫る、木棒から伸びる三本の巨木。

ビルの壁や天井を蹴って空を飛ぶセイバーはその一つを左剣で刺し止め、残る二つを右剣の炎で焼き尽くす。

「セイバあああああッ!!」

憎しみの絶叫をあげるアーチャーは、地上へと焼き落ちていく巨木を足場にセイバーへと跳躍し、月を背に何度もその木棒を振るう。

宝具——『リナウンス・ジ・アーチャー逢蒙殺羿』。

宝具——『ラ・ルース・テイソーナ秤り威示す炎の剣』。

高ランクの宝具通しがぶつかり合う戦闘、日坂聖杯戦争始まって以来最大の宝具の応酬。

しかし、その戦闘は必ずしも拮抗してはいなかった。

「ハア……ハア……ッ」

ビルの屋上に着地し、セイバーは荒い呼吸を繰り返す。その足元は夥しい傷口から流れる血によって、あつという間に赤く染められる。

それも、そのはず。アーチャーの宝具『リナウンス・ジ・アーチャー逢蒙殺羿』は誰かに裏切られた経験を持つ者に対し、致命的な効果をもたらす。

だからこそアーチャー、師を殺した迷妄の弓手——逢蒙を鏡宮はサーヴァントに選んだのだろう。

……元々、俺の触媒はランサーのマスターが用意したという。

……とは言え、どうせそれもあの鏡宮という男が仕組んだことだろう。

……即ち相性という点で、キャスターとの戦いが無くとも……。

「……ハッ」

それがどうしたと言わんばかりに。

それでも強者は笑い、血塗れの剣を握り直した。

その態度に、アーチャーはますます怒り、青筋を立ててこちらを睨む。

「……………」

……例え勝機の見出だせぬ戦いであっても、守るべき正義や美学がある。

それが真の強者としての証であるとばかりに、セイバーはその怒りを真っ向から受けて立ち、左剣の切っ先をアーチャーへと向け不敵に笑った。

「全てはそう……準備だった。この日、この復讐の為の……」

鏡宮は窓を背にし、佐藤にそう告げる。

彼の背後の街並みには街灯が消え、断続的に閃く光が破壊されゆく建物のシルエットを浮かばせる。

「亜種聖杯戦争の準備、聖堂教会との協力体制、聖堂教会が危険視するであろう魔術師らの誘致、竜也君と『欠片』を守る為の最強のセイバー、エル・シドの触媒……そして、そのエル・シドを討つ為に用意されたアーチャーの触媒」

全ては準備だった。と、鏡宮は再度、佐藤に告げる。

疲れたように下げられた、鏡宮の視線。事の経緯を聞いていた佐藤が、そんな彼に質問する。

「……全部、全部復讐の為に、これだけのことを……？」

「命懸けで勝ち取った聖杯の力でも、死んだ人間を完全な形で蘇生することはできない……ならば、この聖杯戦争そのものを利用しようと思っただんだ」

復讐の為にね。と、鏡宮は抑揚のない声で呟き、佐藤を見た。

「聖杯を求め、人類はずっと殺し合いを続けてきた。亜種聖杯戦争の切っ掛けとなった、第二次世界大戦前夜に行われたという冬木の聖杯戦争も……あの年老いたドイツ人も、商業連合の連中も、あの少年も……読水も、サラも皆、聖杯戦争という連鎖の犠牲となった」

「……」

「……だから殺してやる。第八秘蹟会の奴らも、シュウジ・アルバーニも、聖杯も……あの男が求めるモノは全て、連鎖の中に沈めてやる」
鏡宮はそこまで言うと、再び佐藤に背を向けてケータイを操作し、部下に指示を送る。

「聞こえているな？ プランBだ……ああ、アーチャーでは時間が掛かる。狙撃班を配置に……そうだ、こちらの合図を待て」

鏡宮はそれだけ伝えようとケータイを切り、佐藤に向き直った。

「さて……君が聞きたいこと、話せることは全て話した」

「鏡宮さん、貴方は……ッ！」

佐藤が食い縛った歯の合間から声を漏らし、殺気立つ。どうやら動けないシユウジを狙撃しようとしていることに気づいたらしい。

「……………」

髪まで逆立ったその激昂は、やはりただの女子高生とは程遠い。

しかし、どれほどの才能を秘めているようと彼女はこの聖杯戦争とは関わりを持たない。それが鏡宮の結論だった。

「……私や、そして恐らく竜也君が君に危害を加えないのは、君が先程話した連鎖とは無関係の立場にあるからだ」

それでも……。と、鏡宮は一步佐藤へと歩み寄り、静かにこう続けた。

「それでも、君がこの聖杯戦争のマスターとして私と立ち会うというつもりなら……容赦はしない」

その時だ。彼が机に置いたケータイが鳴り、液晶に光が灯る。

鏡宮は机に一瞥し、そこで一瞬動きを止める。

「……………失礼」

鏡宮は、待つて欲しい、と手のひらを佐藤に突き出す。次いで佐藤が飛び掛かってこないのを確認すると、ゆっくりとケータイを手に取り。

「……………君、視力は良い方かい？」

と、液晶部分を——掛かってきた電話の相手、それが読水竜也であることを、佐藤に示した。

第四十話 『ブラックアウト』

四十話 『ブラックアウト』

鏡宮悟——この日坂聖杯戦争の開催者でありながら監督役である聖堂教会のマリオ神父を裏切り、日坂の都市部を戦場へと変えた男。彼は、たった二回のコールで読水からの電話に出た

「やあ、竜也君……無事かね?」

「ええ。鏡宮さんも……」

言いたいも、聞きたいことも沢山ある。

しかし、今は時間がない。

「鏡宮さん、単刀直入に言います。俺はシュウジ……代行者の彼を助けます」

「……そうか」

読水の宣言に、鏡宮は一度大きく深呼吸を入れた。

「それは、私との協定を破棄するということかい?」

鏡宮が口にした協定。それは最後の二組になるまで互いに交戦をしないというものだ。しかしその協定が結ばれたのは十年前、しかも口頭での約束に過ぎないものだった。

……これだけの事態を引き起こして、律儀にそこは守ろうとするのか。

読水は口を曲げ、彼の手を振り払おうとしている自身に一抹の嫌悪感を覚える。聖堂教会と渡り合う賢しさを有しながら、泣き叫ぶ子供と交わした口約束を律儀に覚えている。そんな不器用な彼だからこそ、読水は鏡宮を一人の大人として尊敬していたのだ。

しかし、言わねばならない。

「ええ、そうなってしまいます」

「……なるほど。理由を聞いても?」

それは……。と、読水は冷たい外気を吸い込みながら目を閉じ。

——人のままくたばるか、外道になって生き抜くか……道は一つだ。

そして、告げる。

「それは俺が、人のままくたばる『運び屋』だからです」

戦いの不義に裏打ちされた、神に誓った正義。

戦いの醜悪に磨き上げられた、自分だけの美学。

それらはいずれも、この世界では守り難く、貫き難い。

どれだけ綺麗ごとを叫ぼうと、この世界が大きく、そして人は本質的に矮小であることには変わらないからだ。

だからこそ正義も、美学も、守ろうとすることで初めて価値あるものとなる。

そしてそれらを守り抜くことで、真の強者としての道は開かれる。

「……だから、こそ」

セイバーは呟く。そして自身の声に反応し、彼はハツと意識を取り戻す。

そうして、セイバーは自分がビルの屋上の金網に指をかけ、意識を混濁させていたという事実に気がついた。

「……何か言ったか？ 死にぞこない」

そう吐き捨てるのは、頭上にいるアーチャーだ。彼は宝具で生み出した巨木に立ち、息を切らしながら憤怒の形相を浮かべてこちらを見下ろしている。

「いや……何でもないさ」

……どうやら宝具に弾かれ、意識を飛ばされていたらしい。

倒れなかったのは、せめてもの救いか。と、セイバーは自嘲し、引っかけていた指を金網から外し、屋上の中央へと歩み出る。

「……………」

しかし膝から崩れ落ち、タイルへと両膝をつけてしまう。セイバーは一瞬呆けたように驚くも、しかしすぐに戦意を取り戻し、両膝を地につけたまま右剣の先をアーチャーに突きつけた。

その様子に、アーチャーは顔を歪める。

「いい加減に……いや、もう終わりだ」

そして止めと、彼は宝具を振り上げる。

まさに王手。最序盤での協定から始まり、奇襲によって大詰めを迎えた二陣営の戦い、その勝負の行方が決まった状況であった。

しかし、そこにあるはずのない横やりが入った。

セイバーの眼上に立ち、今まさに宝具を振り下ろそうとするアーチャー。その真横から、何かが閃光のような速度で飛来した。

アーチャーもその飛来を察知し、息を呑んで横を向く。そして次の瞬間にはアーチャーは体をくの字に折り、遠くへと弾き飛ばされていた。また高速で飛来した者も、アーチャーが咄嗟に振るった宝具との衝突で生じた凄まじい反発力で後方の宙へと跳ね飛ばされる。

……いったい、何者か。

セイバーは跳ね飛ばされたその姿を追い、そして目撃する。纏った武装こそ知るものとは異なるが、木の幹に左手を掛けて落下を防ぎ、下方へと落ちたアーチャーを力強く見据えるその横顔は。

「ランサー……!」

「すまんが、マスターの命だ……邪魔をするぞ、セイバー」

「……ふ、いらん気を使うな! 助かったぞ、ランサー」

セイバーは気を吐くと、剣を杖にして一気呵成に立ち上がった。希望があれば、人は苦境の中であっても耐えられる。そして人類史に名を刻んだ英霊であれば、希望ひとつで死の淵から這い上がることもさえる。

「さあ、潮目だぞ」

セイバーは齒軋りするアーチャーに剣を突きつけ、吠える。

「どうする、アーチャー……ッ!? 鏡宮あッ!」

五年前の、あの日。

拘束され動けない少年を、読水は撃てなかった。

そんな読水を見限り、師の雨井陽二が代わって引き金を引いた。夕焼けの空、どこまでも遠く響き渡ったあの銃声。

あれが、読水の奥底で眠っていた、『殺し屋』としての断末魔だった。そう、五年前の、あの日。

あの選択があつたからこそ、読水は道を違えない。

「鏡宮さん、俺は他人の意思に従って引き金を引ける外道じゃあない。この十年で、その道を選べないと思い知った……彼には借りがある、だから助けます」

「……………」

「貴方も……今、聖堂教会に直接的な攻撃を仕掛けていることは把握しています。貴方もそんな非道な真似は、もう止めてください」

読水の言葉、そのひとつひとつを噛み砕くように、鏡宮はジツと黙っていたが。

「ここで彼らの息の根を止めねば、君がこの聖杯戦争を勝ち残るのは難しくなる……両親のことは、諦めたのかい？」

口を開く時には、あらかじめ用意されたかのような鋭い言葉が発せられた。

「貴方は十年前に言った。二人を連れ戻せる奇跡を用意する、と」

しかし、それは読水も同じだ。十年もの間、考えなしに生きてきた訳じゃあない。

「けど俺も……もうそんな夢に縋りつくガキじゃあない。聖杯では……どんな魔術だって、人を生き返らせることはできないと知っています」

「そう……例え失われたとされている冬木の聖杯であっても、死人を蘇らせるのは無理だろうね。しかしそれを可能とし得るのがあの『欠片』だ」

「……………どういう意味ですか？」

「あの時私は、君に嘘をついた訳ではないよ」

思いもしなかった鏡宮の返しに、読水は焦りを忘れて疑問を口にす。鏡宮はその疑問にこう答えた。

「彼の者は一度死んで、そして復活した……分かるかい？ 『欠片』に残された膨大な神秘を辿れば、いずれはそこに辿り着けるはずだ」

「鏡宮さん、それは……………」

「死人を完全な形で復活させること……もちろん、そんな奇跡はこの聖杯戦争に勝ったところで得られるものではない。だけど復元された聖杯が君の物になれば……夢想到等しい奇跡は、手を伸ばせるだけ

の希望になるはずだ」

『欠片』——第八秘蹟会がこれだけの犠牲を払ってでも求める聖遺物。そこに残された奇跡の残滓を辿り、書物の多くに記されたあの奇跡を成す。

理屈は読水にも理解できる。それはあまりに無謀な話、荒唐無稽と言っても良い行いに思える。だが、その無謀に挑むところこそが根源を目指す者、魔術師のあるべき姿であることも否定できない。

しかし……鏡宮が見ているもの、目的は、そこではない。

「しかし貴方は、その為に必要なこの聖杯戦争を今、滅茶苦茶にしている」

「……………」

「それだけの希望が見えているのに、なぜ貴方は、復讐を選んでいるんですか？」

そう。

鏡宮はキャスターやアレクシア、亜種聖杯戦争の規定を超えて暴走していた存在が消えたと同時に、監督役である聖堂教会そのものに牙を剥いた。その行動はキャスターやアレクシアと同様、聖杯戦争そのものを頓挫させかねない破滅的なものだ。

「今回の騒動に乗じてセイバーや、そのマスターを狙う。それだけなら理解できる。けど俺には、鏡宮さん……貴方が聖杯でなく、ただ聖堂教会への復讐だけを目的に行動しているように見えます」

「……………」

読水の推論に、彼は暫しの間、無言であった。

そして……。

「……先に謝っておこう。『欠片』の回収目当てに十日前、バーサーカー陣営をけしかけたのは私だ」

「え？」

「だから君が私との協定を破ることに、罪悪感を覚える必要なんてないよ。ああ、それと彼女……ライダーのマスターだった佐藤真波は、こちらで保護した。もうこの戦争には関わらせないと誓おう」

「いや……ちよつと待ってください。鏡宮さん、いったい……」

君の推論は正しい。と、鏡宮は読水の戸惑いの声に被せるように言った。

「私は復讐という連鎖に導かれ、この戦争を引き起こした。聖杯や未来に、もう興味はないんだ。マリオ・アルバーニ……奴と刺し違えること、それだけが私の望みなのだから」

「……………」

読水は言葉を詰まらせる。こちらの反応を他所に語る、鏡宮の淡々とした言いよう。そこには、何者にもその意思を覆させないという凄味を感じられた。

「積み上げてきた全てを、奴に奪われた。君の両親の命や、君の人生さえ……竜也君」

告白しよう。と、鏡宮は続けてこう告げた。

「あの時……生き残れたはずの君の両親を、保身の為に私は売った」
「……………」

その告白に、読水は自身の肌が総毛立つのを感じた。

言葉も出ず身を震わせる読水に対し、鏡宮は自嘲したように声をうわづらせて言った。

「君には明日を夢見てほしいが、私にそれは選べない。君や、ここにいる佐藤真波や……君の両親のように、綺麗な道を選ぶ資格など、もうないんだよ……この復讐と破滅が、私の運命だ」

その時。

雪降りしきる夜空に銃声が響き渡るのを、読水は耳にした。

それは五年前の夕焼けに響いたような、何かの断末魔にも聞こえた。

そして最後になるであろう鏡宮との通話は、その音を境に途切れていた。

数分前。

プランB——代行者シュウジ・アルバーニを抹殺すべく配置についた狙撃班は、照明の消えたオフィスビルの一室で鏡宮からの合図を待っていた。

狙撃班は狙撃手、観測手、護衛の三名からなる。うち狙撃手と観測手の二人は周囲の警戒を護衛に任せて、窓辺へと無理やり寄せた才フイス机から上半身を乗り出し狙撃態勢を取っていた。

そして頭上では、今も尚頻繁に轟音が鳴り響き、ビル全体を揺らす衝撃が響いてくる。

「……何分経った？」

その問いに、観測手のロバート・^{オウル}梟”。ロックスは静かに白い息を吐き、暗視装置付きの観測用スコープから目を離して腕時計を見る。狙撃位置に付いてから、既に五分も経過していた。

「五分だ」

「連絡は？」

「いや、まだだ」

分かった。と、狙撃手のサリム・^{ガイゴイル}榎嘴”。シモンは呟く。

その語気には僅かに苛立ちが見えるが、しかしそんな僅かな感情をひとつ見せただけで、彼は再び呼吸さえ感じられぬほどに静かになる。

もうずいぶんと古い付き合いになるが、この「榎嘴」というが付けられたほどの冷静さにはいつも驚かされる。

雪に体半分を埋め、倒れる目標との距離は240メートル。

「榎嘴」が手にしているボルトアクション式の狙撃銃は、数年前に市場に出たばかりの静穏性と携帯性に特化した市街地用ライフルだ。メーカーが推奨している射程距離は150メートル弱……240メートルという距離はそれからずいぶんと超えてしまっているが、冷静沈着なエキスパートである彼なら、弾道降下も計算に入れ難なく当てられるはずだ。

「クソッ、撤収まで一〇分もないぞ……おい、大丈夫なんだよな？」

冷静な「榎嘴」に対して、現状に酷く狼狽し焦りを見せているのが護衛の「^{ハンマー}槌」だ。チームを組んだのはこれが初めてで、本名も聞かされていない上に、戦闘用ヘルメットと暗視ゴーグルのお陰で顔すらまともに見ていない。しかしこの若い傭兵は、どうにも実戦での経験は浅いように思える。

「落ち着けよ、若造。回収班は、俺達を置いて逃げたりしないさ」

「ホントかよ……上じやあ漫画に出てくるような連中がやりあってんだ……ここにいりや俺達、巻き添え食ってビルと一緒に消し飛ぶかも分かんねえんだぞ……？」

「ああ、そうかもな」

ビル屋上より遙か上空では、この聖杯戦争の中心である英霊が戦っている。その中には、雇い主である鏡宮の『弓兵』もいると聞かされている。

「……空戦の下にいる時や、雷雨の中みたいなものさ」

「は？」

「狙いが俺達でない以上、結局は運次第ってことだ」

「梟」はそう「槌」を言いくるめながら、再びスコープを覗く。

そして、気づいた。

「目標を見ている奴がいる。通りの右端、クリーム色のマンションの下……トレンチコートを着た男だ」

「梟」は隣にいる「槌」に報告。同時に手にしたスコープの倍率を切り替え、より多くの情報を集めようと周囲に視線を巡らす。すると、「槌」が舌打ちをした。

「……知っている顔だ。エンツォ、マリオの部下」

その言葉を受け、「梟」は改めて男の顔を確認する。そしてそれが彼の言う通りの男であることを確認すると、「梟」は心臓が強く脈打ち、凍えた全身に熱いものが走るのを感じた。

「来やがった……」

それは、長い年月を重ねて育てられた復讐心。衰えを感じつつある身体をそれでも戦場へと駆り立てる、殺意の熱だった。

鏡宮より命じられている目標は、代行者シュウジ・アルバーニ。そしてその合図は、未だ来ない。だが目標の救助にやって来たあの男は、現場の判断で殺しても構わないはずだ。

「……他に仲間はいない。サリム、やるぞ」

「ああ」

十年前の、仇討ちだ。

と、〃樋嘴〃は白い息を吐きながら体を揺すって射撃体勢を改めて整え、気炎を吐いた。

トレンチコートの子——エンツォは建物の陰から顔を出し、倒れ伏すシユウジ・アルバーニの周囲に敵がいなかを確認するように周りを見ていたが、顔を上げてこちらの方を見るや否や通りへと飛び出した。

「気づかれた……ッ！」

現状、この地域は鏡宮によって電力が落とされ、街の照明器具は機能していない。月に照らされた野外ならともかく、照明の消えたビルの一室から見ているこちらを裸眼で見えるなど通常不可能だ。

しかし、〃梟〃はスコープ越しに確かに感じた。

エンツォがこちらの方を一瞥し、そして視線が合ったその瞬間を。

……条件は同じ、ということか。

「目標の240メートルに、真つすぐに接近中。風はない、撃て……！」

……殺せ！

〃梟〃の殺意が伝播したかのように、〃樋嘴〃は間髪入れずに引き金を引いた。

パスツ。という掠れた射撃音。そして消音器から僅かな発火炎もなく、その弾丸は発射された。

・ 300 AAC Blackout弾——〃樋嘴〃が持つ狙撃銃、そして〃梟〃や〃樋〃が手にしている短銃身のアサルトライフルは同じ弾薬を共有している。

世界に広く普及されている5.56mm口径弾は近年、防弾性能の向上に対して威力不足が指摘され、また発射時に弾丸が音速を超える為に発生する破裂音が問題視されていた。300 AAC Blackout弾は銃身さえ取り換えれば使用している銃器はそのままに、これらの問題を解決するよう設計、開発された二種類の弾薬だ。

〃樋嘴〃が発射したのも、その弾薬のうちの一つ。弾頭を通常より重くし、弾速を遅くすることで静穏性と衝撃力を両立させた亜音速弾だ。

その初速は秒速300メートル程……我々にとって馴染み深い5.56mm口径弾の3分の1くらいの速さしかないが、それでも発射から0.8秒後には、奴の急所に食らいつくことができる。

しかし、それでは遅すぎた。

狙撃の直前、エンツオは走りながら体勢を大きく沈め、獣じみた動きで横へと飛び跳ねる。放たれた亜音速弾が彼の横を掠め、積雪を弾いたのはその一瞬後のことであった。

「躲された……!?!」

驚く「梟」。対して「樋嘴」は射撃後間を置かずにボルトを操作、薬室に新しい弾薬を装填する。

「見ている……」こちらが撃つタイミングを、目で計っているんだ」

「……化物め」

「樋嘴」の推測に「梟」は毒づき、再度スコープを覗く。目標とエンツオとの距離は、もう目前にまで迫っていた。

……弾薬を変更する暇はない。

「梟」はスコープを机に置き、意を決し口を開く。

「次弾、奴が避けたら撃て」

「……」[「rb:了解」>「ダコール」]

「梟」の指示に疑問を挟むことなく、「樋嘴」は了承する。

返事を聞くと「梟」は机に立て掛けていたアサルトライフルを引っ掴み、勢い良く立ち上がる。そして光学照準でエンツオを狙うと、単発で矢継ぎ早に銃弾を見舞った。

掠れた発砲音が次々に上がり、亜音速の弾丸が夜空を漂い落ちる雪を弾きながら飛ぶ。

エンツオはそれら銃撃を知覚すると、積雪を蹴ってジグザグに駆けた。

「梟」による銃撃は、エンツオの常軌を逸した視力と機敏さによって避けられる。しかし、そこまでは「梟」の目論見通りだった。

エンツオは銃撃を躲しつつ、そしてついに代行者の目前にまで迫った。しかし彼の体が突然衝撃に震え、動きが止まる。

「……命中」

隣の「樋嘴」が、そう呟きながら次弾を装填する。

狙い通り、彼はエンツオが「梟」の銃撃に意識を回している隙に乗じてその動きを学習し、動きに合わせた狙撃を成功させたのだ。

……やってくれた。

「梟」は緊張を解すように息を吐き、白い歯を見せる。

その瞬間だった。

膝から崩れ落ちたエンツオの四肢に、再び意思が宿る。彼は両膝立ちの姿勢から飛び前転で即応的に撃ち込まれた「樋嘴」の弾丸を躲すと同時にシユウジのそばへ辿り着き、再度地面を転がるようにして代行者を肩へ担ぎ上げた。

レンジャーロール——意識を失った要救助者を素早く担ぐ為に考案された、ファイヤーマンズキャリーの高等技術だ。

そうして代行者をエンツオは肩に担ぎ、そればかりか、いつの間にか抜いていた拳銃をこちらに向け、右腕一本で発砲してきた。

恐らく9mmだろうが、拳銃弾の有効射程など彼我の距離の半分だつてない。しかし音速で放たれる鉛玉は、こちらへと届くだけの運動エネルギーは充分に有している。

最初に一発。その後、数発とエンツオは銃弾をこちらへと撃ち込んでくる。カン、カンと、ビルの壁や机に銃弾が着弾し、「梟」は反射的に身を屈めてそれら銃弾から身を守ろうとする。そんな中でも「樋嘴」は姿勢を変えずにスコープを覗き続けていたが、エンツオは踵を返して代行者を運び、素早く横道へと逃げ込んでしまった。

「ダメだ……やられた」

「……逃がすか。追うぞ!!」

「梟」は机に置いていた装備や弾倉を荒々しくバックにしまい、ヘルメットを被った。

「樋嘴」も同意見のようで、手にしていた狙撃銃のストックを折り畳むと、バックから入れ違いに9mm口径のサブマシンガンを取り出す。そのサブマシンガンは近接戦闘用のレーザーサイトは付いているが、消音器が装着されていない。もちろんこれは隠密性を作戦の主軸に捉えていた鏡宮から支給された物ではなく、彼が無断で持ち込ん

だ私物だ（理不尽な規則に散々文句を言いつつ従うのが自分なら、黙って規則を破るのが“槌”という男なのだと“梟”は解釈している）。

「おい本気か……時間がないぞ!？」

二人の意気込みを他所に、そう叫ぶのは“槌”だ。

「俺達の任務は、回収されたあの代行者の抹殺だ……クソ、鏡宮の野郎」

……鏡宮の合図を待っていたせいで、この様だ。

「今更……何を怖気づいてやがる」

“梟”は苛立ちながらアサルトライフルの動作確認を行い、それから時計で時刻を確認する。

……回収まで、時間がない。応援を呼べれば良いが、キャスター陣営とアサシン陣営による襲撃のせいで人手も足りなくいのが現状だ。

……だから、こっちの不始末はこっちで片づける他ない。

「“槌”、先に回収地点に向かえ。目標は二人で片づける……もし回収時刻を過ぎても戻らなかつたら、そのままこの区域から逃げろ」

「……あんたらを、置き去りにしろと言うのか?」

「相手が悪すぎる。もうプラン通り、動けない相手を始末するだけの状況じゃあない」

分かるだろ。と、“梟”は脇を通り過ぎる。近接戦闘用に武装を整えた“槌”も狙撃銃が入ったバックを“槌”の胸へと投げ渡し、呆気に取られている彼の肩を叩いてから“梟”に続いた。

二人はヘルメット上部に装着していた暗視ゴーグルを顔へと引き下げ、足早にオフィスから出ていった。

空では雷鳴のように光が瞬き、一瞬の間を置いて叩きつけるような衝撃波が大地を襲う。

天地に鳴り響く、人類史に名を刻んだ英霊三騎による決戦。ただただ見上げるしかないような戦いの最中、最新の火器を手に、己の戦いを繰り広げる者達がいた。

“梟”と“槌”は代行者と、彼を救助したエンツォを追って幅の

狭い裏通りを進んでいた。その足取りは迅速そのもの。周囲への索敵も最低限に済ませ、ただ目標が雪に残した足跡を追う。

鏡宮による聖堂教会への裏切り。日坂市都市部のインフラを一時的に麻痺させ、マリオ神父管理下の施設、人材を襲撃。そして、この亜種聖杯戦争の参加者である代行者シユウジ・アルバーニを暗殺する。

この十年前の『クランプス作戦』への報復は一時間以内に襲撃の終了、そして二時間以内に作戦区域からの脱出することが計画されていた。当然、狙撃チームが脱出する為に用意された車両も、全てその計画に従い時間が組まれている。

その回収予定時刻が、残り五分を切った。

「……………」

……………構うものか。

「梟」はもう、時計を見ない。脱出すること、この作戦での生還を、彼は既に諦めていた。

…………十年前の屈辱。あの家族を守れなかった思いを晴らせるなら、ここで終わっても良い。

「梟」は「樋嘴」より先行し、角から微かに顔を出して通りの様子を伺う。そしてエンツォがいないと判断するや銃を構えて飛び出し、代行者を抱えたエンツォを追う。

雪が積もる地面に残された足跡からは、少量の血痕、エンツォが万全での状態ではないことが見て取れた。時折酷く乱れるその足跡は、「樋嘴」の狙撃がしっかりとエンツォにダメージを与えたことを教えてくれた。

…………このまま、代行者を担いで逃げることはできないぞ。

「梟」は徐々に近づいているはずの標的に舌なめずりしながら、心の中でエンツォに語り掛ける。

…………先手はくれてやる。いい加減に来い！

そしてその瞬間は、裏通りから出て、多くの自動車が放置された交差点へと辿り着いた時に訪れた。

不意に、先行していた「梟」の頭部に衝撃が襲う。

カン、という乾いた音と共に真横から殴られたような衝撃が走り、暗視ゴーグル越しの視界が火花と共に弾け飛んだ。

撃たれた。

そう判断する時間もなく、〃梟〃は本能的に頭を下げ、視界ゼロのまま遮二無二駆け出す。しかし胴へと続く第二、第三の衝撃に、〃梟〃は足をもつれさせ地面へと倒れた。

「〃梟 ツ!!」

雪面を前のめりに滑るよう倒れながら、〃梟〃は戦友の叫びを耳にした。そしてその叫びは、続く銃声に掻き消される。

おそらく、背後にいた〃樋嘴〃がこちらを撃ったエンツオへと発砲し、牽制してくれているのだろう。〃梟〃は夢中になって腕をバタつかせて地面を掴み、撃たれる直前までに把握していた遮蔽物——放置された自動車の陰へと転がり込む。

「……ハッ！ ……ハッ！」

息が苦しい。空気の吸い方が間違っているように思える。

世界が回っている。四肢で触れているはずの地面が恐ろしく頼りない。

今生きている以上、ヘルメットや防弾プレートによって致命傷は免れているはず。とはいえ頭部や腹部を襲った銃の衝撃は恐怖で〃梟〃の体を縛りつけ、本来の負傷以上の症状を体に与えていた。

「……アアアクソッ！」

〃梟〃は被弾し壊れてしまった暗視ゴーグルを戦闘用ヘルメットごと外し、ようやく忘れかけていた呼吸を再開した。途端に視界は緑系統の明瞭なものから黒一色、暗闇へと塗り潰される。

しかしそんな暗闇も、次の瞬間には発砲による発火炎によって照らされる。

そして〃梟〃は見た。身を隠した自動車より十数メートル先、〃樋嘴〃からの銃撃によって自動車の裏へと身を隠したその影。反撃の発火炎によって一瞬照らし出される、血に濡れたエンツオの顔を。

……見つけた！

〃梟〃の瞳孔が、まるで本物の梟のように開かれる。

代行者はどこにいるのか。

自身の負傷は、どれほどのものか。

そういった疑問や恐怖を殺意で塗り潰し、「梟」は唸り声を上げながら体を地面から引き剥がした。そして車の陰から別の車の陰へと移動するエンツオに銃口を向け、断続的に発砲しながら彼を追う。

近間の「梟」と、遠間の「樋嘴」。二人による火器の猛攻に対し、エンツオはしきりに遮蔽物を変えながら手にした拳銃で応戦していく。その動きは以前にも増して素早く、荒々しい。まさに手負いの獣そのものだ。

それと比べて、「梟」と「樋嘴」の動きは機能的で、合理的であった。

後方でブロック塀に身を隠しながら、サブマシンガンを撃ち続ける「樋嘴」。「梟」はその援護に動きを合わせながら放置された車の合間を縫うように移動し、一定の距離を保ちながらエンツオを追い込んでいく。

互いをそれは長い訓練と実戦を経て培われた、獣を追い込む狩人の手法。

しかしそれでも、エンツオという獣を抑え込むには不十分だった。

「……………」

エンツオが戦術を変えた。彼は車両の陰から飛び出すと、一息に駐車場の外へ、「樋嘴」のもとへと走り出す。

二人はその行動に反応し、前後挟みでの十字砲火を浴びせる。しかしエンツオはそれらの銃撃から身を隠そうともせず、全速で「樋嘴」との距離を詰めた。

そして十秒と経たず、エンツオは「樋嘴」に肉薄した。

手にした拳銃で発砲しながら迫るエンツオに、「樋嘴」は急遽ブロック塀へと身を隠す。しかしエンツオは拳銃を下に提げ、走る勢いをそのままに、まるでボールでも蹴るかのように足を振り上げた。

次いでブロック塀へと繰り返し出される、エンツオによる蹴り。それは積み上げられたブロックをたやすく蹴り碎き、鉄筋をひしゃげさせた。

そしてその蹴りはそのまま、塀の向こう側に隠れた「樋嘴」を打ち抜く。

「……ッ!？」

「梟」の目に、まるで交通事故のように道路へと弾き飛ばされた「樋嘴」の姿が映る。

彼は雪面を転がり、倒れ伏したまま動かなくなる。

エンツオはそんな「樋嘴」を、複数の銃弾を受けたダメージを負った肉体を息づかせて見下ろしていたが、やがて反撃はないと判断し、「梟」へと向き直る。

「この、野郎……ッ!」

「梟」は激昂し、再び銃口から火を噴かせる。

しかしエンツオはそんな銃弾をもともせず駐車場へと戻り、素早く標的を「梟」の方へと変えて発砲してくる。

「梟」も負けじと打ち返すが、数で優っていた状況は既に変化している……暗闇の中、ドッグスポーツに参加する犬に銃弾を当てるようなものだ。しかもその犬はこちらと同様、銃を持っている。

「ハー……ッ! ハー……ッ!」

「梟」は肩口に銃弾が掠めたのを機に、自動車の陰に身を隠す。次いで荒い息を整えながら、残弾の分からぬ弾倉をライフルから外した。

どんなにタフな奴であっても、銃に撃たれば人は傷つき、最後には倒れる。

それが嫌なら、とつとと戦場からオサラバすれば良い。

それが長年戦場に身を置いてきた、「梟」の経験則だった。

……こいつもまた、同じはずだ。必ず殺せる。

……こいつはここで、あの代行者も必ず見つけ、俺達の手で殺してやる。

「梟」はそう改めて決意すると、血で濡れた手で弾倉を交換した。その弾倉は、これまでの物とは違い青いテープが巻かれていた。

「……エンツオオッ!」

背中を守っている車両から響く、着弾の嫌な音。弾丸が頭上を掠め

る風切り音。それらが止んだ瞬間、〃梟〃は車からエンツオの射線上へと躍り出た。

そして弾丸が、銃口から閃光を伴って放たれる。それらフルオートの銃声は二発目からこれまでの掠れた小さな音と打って変わり、空気を叩く甲高い音に変化した。

エンツオは急に攻勢に出た。〃梟〃に対し、再び車の陰へと身を隠す。しかし、〃梟〃が撃った弾丸は、薬室に残っていた一発を除いた全てが車体を貫通し、貫通した一部の弾がエンツオの肉体に食い込んだ。

これが・300 AAC Blackout弾として作られた、もう一つ弾薬。静穏性と衝撃力に優れた亜音速弾に対し、超音速による高い貫通性能を秘めた高速弾である。

そう、〃梟〃は静穏性や二次被害への考慮をかなぐり捨て、弾倉を亜音速弾から高速弾へと切り替えたのだ。

「終わりだ……聖堂教会の犬野郎っ！ てめえはここで終わりだっ！」

銃弾を受け、地面へと崩れ落ちた気配を車体越しに感じ取った。〃梟〃。彼は殺意を露わにし、引き金を引きながらエンツオが隠れる自動車へと接近する。

ここで殺せる。

〃梟〃は、そう確信を得た。

しかし、その確信が為に彼は判断を誤った。エンツオという怪物じみた運動能力を持つ男に、あろうことか自ら接近してしまったのだ。

「……オオオオオッ!!」

突如、エンツオが吼えた。

悲鳴や呻き声とは違う、周囲の空気を震わすようなその咆哮に、〃梟〃の足が止まる。そして、〃梟〃は気づいた。エンツオが隠れている自動車が軋み音を上げながら、徐々にこちら側へと傾いてきていることに。

……まさか、持ち上げているのか？

〃梟〃がそう予感した直後、自動車が一気に跳ね上がり、こちらへ

と迫ってきた。

「う……ッ!?!」

「梟」は咄嗟に踵を返し、ひっくり返って倒れる車体から逃げるように飛び退いた。

重い轟音がビル壁に反響して響き渡り、雪煙が駐車場を包む。

「梟」は前のめりに倒れる。しかしすぐに体を反転させ、手を地面について態勢を立て直そうとした。

しかしその腹部を、拳銃の弾が二発撃ち込まれる。

痛みを口にする間もなく、「梟」は再び倒れ伏す。そして薄れゆく雪煙から出てくるように、エンツオが彼の横合いから歩み出てきた。

「……ッ!?! フッ……フーツ! フーツ!」

……横腹、プレートの間隙を狙われた。

「梟」は激痛に顔を歪ませ、呼吸とも言えぬ音を口から出す。しかし数秒の後には奮起して身を起こし、呻き声を上げながらライフルを持ち上げる。

しかしその必死の行為はエンツオによつて封じられる。手にしていたライフルはエンツオに蹴りつけられて遠くに弾き飛ばされ、次いで利き腕は足で踏みつけられる。

まさに絶体絶命。今や「梟」は、ただ仰向けのままエンツオを睨むことしかできない。

「……ッ」

しかしそこで「梟」は気づいた。

無言でこちらを見下ろすエンツオ。絶対有利な彼はしかし、「梟」以上の負傷を負っていることに。

最初の狙撃による、胴体への銃撃だけでない。「樋嘴」が撃った拳銃弾や先ほど見舞った高速弾、大小様々な銃弾を彼はその身に受けている。

それでも、彼は立っている。全身を血に染め、致命的な傷を幾つも負っているにも関わらずに。

「フー……ッ、フー……ッ」

気がついたら、もう英霊達による闘争の音も、仲間達の襲撃音も聞

こえなくなっている。静けさを取り戻した雪夜で、ただ繰り返される
「梟」の荒い呼吸だけが聞こえる。
そう。

こちらを見下ろすエンツオ。彼の形相からは瞬きばかりか……白
い吐息さえ、確認できなかった。

……ひよつとしてこいつ、もう……？

「梟」がそう察した、その時だ。

「○○○○ッ!!」

若い男の汚い叫び声が、冷たい雪夜に響いた。

エンツオが声のした方へと顔を向けた次の瞬間。彼の肉体表面が
銃声と共に爆ぜ、たたらを踏む。

見れば、既にこの区域から離脱したはずの「槌」が、こちらに駆け
寄りながらライフルをエンツオに向けてぶつ放していた。

しかしエンツオは片膝を地に付きながらも、「槌」に向けて拳銃を
発砲。胴体に命中させた。プレートで防がれただろうが、銃弾を受け
た「槌」は路上の雪に足を取られ、彼は情けない悲鳴を上げながら転
倒してしまう。

呆気のない、「槌」の救援。

一瞬で終わってしまった彼の奇襲は、しかし……数々の負傷を抱え
たエンツオの、最後の一押し足りえた。

突如、エンツオの手がガタガタと震える。

そして彼は、手にした拳銃を地面へと落とした。

「……………」

エンツオは地面に落とした銃を少しの間見下ろしていたが、やがて
何かを決断したように踵を返し駆けだす。

どうやら近くの雑居ビルに逃げようとしているようだが……その
動きはぎこちなく、これまでの動きと比べてずっと遅い。

「エンツオっ!」

逃がすものかと、「梟」は叫んだ。次いで痛む体に鞭打って立ち上
がり、拳銃を太ももに付けていたガンホルダーから引き抜いた。

……ここでどつちかが死ななきや、何も終わらないんだ。

手の震えを抑えながら「梟」はスライドを引いて薬室に銃弾を入れ、照準をエントツオの背に合わせる。

……だから、お前がここで死ね。

そして、血に染まった人差し指に力を入れた。

その瞬間だった。

「梟」の拳銃から火花が散り、横殴りの衝撃が走った。不意のシヨックに拳銃は脇へと跳ね飛び、積雪の中へと落ちてしまう。

敵の増援か。と、「梟」は反射的に銃弾が飛んできた方向を睨む。

「梟」が見た先……そこは十字路の傍にある小さな路地であり、そこから一人の男が回転式拳銃を手に、右足を引きずるようにして近づいてきていた。

二十代前半の、痩せた体を着古したハンティングジャケットで包んだ男だ。荒れた生活を送っていたのか、髪はパサついており、垂れ目だが顔もどこか張り詰めたような雰囲気がある。

「奏馬……いや、まさか君は……」

「梟」は、その男を知っていた。もう長いこと顔も見てなかったが……今その顔には、父親の面影があった。

「……………」

「梟」の呼びかけに、男は一瞬足を止める。そしてゆっくりと、銃口を下した。

しかし、二人の邂逅は長くはなかった。

「○○○○ッ!!」

態勢を立て直した「槌」が、叫びながら男に発砲。銃弾が彼のすぐ近くを掠め、コンクリート壁から土煙が上がる。

「…………ッ!? 撃つな!!」

「梟」が「槌」に叫ぶ中、彼は身を屈めながら路地へと引き返し、そのまま路地から逃げようと駆けだした。

「待て……待ってくれ!」

「梟」は追い続けるような声を上げ、男を呼び止めた。

しかし彼は数度こちらへと振り返りながらも、そのまま路地の暗がりへと走り去ってしまう。

「待ってくれ……誂水ッ!!」

「梟」は必死に彼の背を追う。しかし瀕死の体には最早力は残されておらず、数歩も歩かぬうちに両膝が地に落ちてしまう。

「俺は……俺達はただ、お前に謝りたくて……!」

「ロバート。もう良い、動くな……!」

そう言葉を投げかけられ、「梟」は背後から肩を掴まれる。

「梟」はハツと振り返り、背後にいるのが「樋嘴」であることに気づいた。

「……無事だったのか」

「ああ……見ろ、奴らも逃げた。だがこの傷じゃあ、あいつも助からんだろう」

その言葉に、「梟」はエンツオが逃げた雑居ビルの方を見る。既に彼の気配はないが、彼が通った雪面には足跡と一緒に夥しい血痕が尾を引くように残っていた。

「「樋」が回収班を待たせてくれたらしい……回収地点に行こう」

「樋嘴」はそう告げると、「梟」の肩を叩いた。そして駆け寄ってきた「樋」に、瀕死の「梟」は担ぎ上げられる。

「……」

「梟」は「樋」に抱えられて移動しながら、落ちた視線で茫然と雪に流れ落ちる自分の血を見ていた。

「……なあ、サリム」

しかしふと顔を上げ、隣で歩く「樋嘴」に言った。

「さっきの男……あいつは……」

「やめろ。もう、良いんだ」

「樋嘴」は被りを振って、「梟」に言った。

「もう充分だ。ロバート、もう……終わりにしよう」

俺達の復讐は、ここまでだ。

「樋嘴」は静かにそう言って、ボロボロになった戦友の肩を再び叩いた。

……これが、『運び屋』としての君の道か。

鏡宮はケータイで部下から報告——シユウジ・アルバーニ暗殺の失敗とその経緯を聞くとため息をつき、疲れた様子でノートパソコンを閉じた。そして椅子の背もたれに全身を預ける。

……いや、それも彼らしい。彼らの息子らしい、正しい選択だろう。間違うのは、いつだって自分の方だ。

「……分かった、もう時間切れだ。アーチャーを帰還させる。残っている人員も、随時撤収させてくれ……ご苦労だった」

鏡宮はそう指示すると通話を切り、ケータイを机に置いた。そして、魔術で眠らせ、ソファーに寝かせた佐藤を……より厳密には、彼女の手の甲を一瞥する。

……残る陣営は四つ、令呪が再分配される気配もない。

鏡宮はぼやけた視界を解すように瞼をマツサージしながら、現在の状況を再確認していく。

……そしてマリオの方は、飛車角落ちだ。

暗殺には失敗したが、今回の襲撃でセイバー陣営のマスターは瀕死の負傷。マリオが監督役として使っていた部下や設備も、ほぼ全てを使い物にならなくしてやった。

加えて日坂市のインフラを落としたことで、この土地を包囲していたマリオの私兵、シプレス碑炎騎士団の到着は間違いなく遅れる。想定外に降りしきるこの雪も、妨害の助けになるはずだ。

……これで、もう数日は保つ。

まだ第二百七十四号聖杯も、奴が造ろうとしている聖人も……。

そしてマリオ・アルバーニも、まだこの世界に残っている。

私の復讐は、まだ終わっていない。

……竜也君とはこれでお別れだろうが……涙で枕を濡らし、夜闇に眠るような真似はできない。

今回の襲撃に参加した部下の撤収。街の被害確認。市民の救助に避難誘導。G行政への口止めとマスコミ対策……多くは事前に指示しているが、それでもやれることは山のようにある。

鏡宮は気怠げにコーヒーカップを手取る。そしてすっかり温くなってしまったその黒い液体を胃に流し込み、彼は改めてノートパソ

コンを開いた。

「マスター……ッ！」

「……ん」

寒く暗い白闇の中に響く、ランサーの弾んだ声。

その声に引き戻され、半ば沈みかけていた読水の意識は覚醒した。そして壁に背を預けたまま、路地の向こうからこちらへと駆け寄るランサーを一瞥する。

「無事で良かった。お怪我は？」

「……お互いにな。アーチャーは？」

「私の参戦後、すぐに退きました。セイバーも主のもとへ……」

「そうか……まあ、お前も無事で良かった」

「しかし、消耗も激しいです……どうぞ、肩を貸します。とにかく、どこか安全な場所に……」

「ああ、佐藤も無事らしい。今は、ここから離れて……」

「……あの、マスター？」

ああ。と、読水は軽く返事をし、差し出された手をそのままに、ただ力なく顔を上げる。

その表情は、酷く臍気だった。

応答こそするが、会話が成り立っていない。尋常ではない読水の様子に、ランサーは顔を強張らせて彼へと詰め寄る。

「マスター……!?!」

そして、気づく。彼の脚——右の太ももが服地ごと裂け、血で染まっていることに。

「……いや、掠っただけだ。全然平気……何でいつも右脚なんだろうな？ それに、ほら……」

ランサーの剣幕に、読水は軽く笑いながら応じる。しかし、そのままズルズルと壁を背にしたまま地面へと座り込んでいってしまう。

「汗、かいてるのに……何か……寒いんだ……」

「マスターッ！」

「大丈夫。ぜんぜん……平気……」

読水はうわ言を言いながら、そのままスウッと白い息を吐いて瞼を閉じる。

そしてその意識は、再び寒く暗い、白闇の中へと消失してしまった。

一月三十日、午前二時三〇分。

キャスターの宝具解放より端を発する、五時間にも渡る長い戦闘が終わりを告げた。

この戦闘による被害は過去最大のものとなった。後々『大規模なテロ』として処理されるこの事件は日坂駅周辺の都市部に被害が集中しており、交通インフラやライフラインの寸断、建物の崩壊、そして百人近い死者が公的に記録されることとなる。

しかしながら、これら設備の被害と比較すると死者は極めて少なかった。

今回のテロによる重傷者は多かったが、行政機関や匿名の市民による救助活動、そして医療従事者の懸命な治療の甲斐あってか、奇跡的に一命を取り留めたケースが後を絶たなかったという。

また、この『大規模なテロ』により、行政は非常事態宣言を発令。日坂の市民は一週間ばかりの不自由を強いられたが、複数の奇妙な噂を除き、テロによる人的被害はその後記録されていない。

そう。この亜種聖杯戦争による戦いは、再び暴走から秩序だった本来のありようを取り戻す。

しかしその戦争は、まるで夜明けの暗闇のように静かに、そして確実に終わりへと近づいていた。

血塗られた歴史を持つ『欠片』——第二百七十四号聖杯。
その復元の時は、近い。

F a t e / r e s e l e c t 番外『ドラゴン学校』
三学期

私はどこにでもいる無気力系天才美少女、佐藤真波！

ある日、いつもどおりの日常を送っていると左手に不思議な痣が浮かんだ！

そしてそれは、日常の終わり・・・非日常の、始まりの合図だった！！

それから、私は死霊術師に誘拐されたり、ライダーを召喚したり、亜種聖杯戦争に堂々参戦したり、調子に乗って同盟を作ろうと提案したり、左腕をチヨキチヨキされて死にかけたり、目が覚めたらライダーを失つてたり、

魔女に誘拐されたり、キャスターに救出されたり、バーサーカーに誘拐されたり、アーチャーに誘拐されたり……。

佐藤「街を滅茶苦茶にしてる中年の話が聞かされたり……」

ドラゴン先生（以降、D先生）「……………」

佐藤「なーんてたのしい、非日常なんだろうーって……………はっはっは」

D先生「……………」

佐藤「……………笑えよ、先生」

SS『ドラゴン学校』くこれで君も亜種聖杯戦争マスターにく」

D先生「という訳で、今回はいよいよ日坂聖杯戦争の核心。『欠片』を巡る物語をダイジエストに纏めるよ」クワー

佐藤「ついにこの謎時空も三学期かあ……………」

D先生「さあさあ、佐藤さんも席について。時間がないからパパッと始めるよ！」

佐藤「はい。この聖杯戦争も終盤、そろそろ私達の出番が来るってことですね……あれ？ いま私、催眠アプリってやつで寝かされてるんだっけ？」チャクセキツ

D先生「アプリじゃなく魔術……いや、まだ気づかないでね？ そういうの……」

『第三回、ダイジェストで語る日坂杯戦争　く反省しろ、おじサーく』

D先生「ではまず物語の鍵を握る聖杯の『欠片』……聖堂教会が言うところの第二百七十四号聖杯について解説していくよ」カツカツ

D先生「第二百七十四号聖杯は中世ヨーロッパで発見された、ひとかけらの木片だ。そして人々はそれを、長い時の中で砕けた聖杯の一部であると信じていた」

D先生「だから人はその『欠片』を聖なるものとして信仰し、求め、奪い……殺しあったんだ」

佐藤「何かのつけから、血生臭い話になりましたね」

D先生「人類史に刻まれた、血で濡れた歴史のお話だからね。けど、そうやって積み重なった歴史があるからこそ、『欠片』という聖杯は、強固な魔術基盤と神秘を有するに至ったんだよ」

佐藤「なるほど。『欠片』が本物かどうかはさておき、その効果は本物並みということですね。鰯の頭も信心からってやつですね」

D先生「うーん、その例えは世界の多くを敵に回すからやめておこうか。しれっと流してるけど、この時点で数千、数万の屍を築いているだろうしね……まあそんな『欠片』だけど、第二次世界大戦の末期、色々あつて南米に渡ったんだ」

佐藤「先生、色々って？」

D先生「それはね……」スウー

D先生「第三次聖杯戦争でダーニック・プレストーン・ユグドミレニアに『冬木の大聖杯』を盗まれしかも戦争に負けそうなドイツ第三

帝国が、世界中から掻き集めた遺産まで他国に奪われるのを恐れ亡命先に遺産を持ち去り秘匿したからだよ（早口）「カツカツ

〃元を辿れば、やっぱりダーニツクおじさんが悪い〃

佐藤「ダーニツクおじさん……前の話にも出てましたね。亜種聖杯戦争といい、この世界線の元凶過ぎない？ この人……」

D先生「その辺は、前回の話を読んでね」

『第三回、ダイジエストで語る日坂杯戦争　くナンバリングがゼロとかになる倫理観ゼロのヤツく』

D先生「それから時は流れ、西暦1992年！ 戦火の中へ消えたと思われた『欠片』は、南米にて行われようとしていた亜種聖杯戦争で再び姿を見せることになる！」

佐藤「おお、ハイテンション……50年近く、ずっと誰が持ってたんですか？」

D先生「ある、年老いたドイツ人……だそうだよ。そして彼はこの非公式の亜種聖杯戦争で、あろうことか『欠片』を英霊召喚の触媒として使用しようとしたらしい」

佐藤「触媒って……あれ？ それってつまり……」

D先生「そうだね……実際、彼が英霊として何を召喚しようとしたのか。そしてそれが成功したかはさておき……この南米で行われた亜種聖杯戦争はね、件の老人が率いる人造英霊兵団、タカ派の神父が指揮を執る第八秘蹟会、亜種聖杯戦争に好機を見出した商業連合という三つ巴の戦いによって開戦宣言すらくなく終わったらしいよ」

佐藤「え……聖杯戦争すら成立せずに終わったんですか？」

D先生「破壊工作に暗殺、買収やら裏切りやら……色々あったみたいだねえ」カツカツ

“言えそうなことは大体ドンパチ 想像のヤツと大体同じ”

佐藤「酷すぎる……!」

D先生「そんな訳で、この聖杯戦争は勝者どころか参加者すら曖昧なままご破算。それを機に『欠片』も焼失……だったらまだ良かっただったんだけど、実はごたごたの最中に二人の日本人が回収したんだ」

佐藤「……それって」

D先生「そう。『バルーンスパロー（ふくら雀）』という、触媒のレンタル会社をやっていた若き二人の魔術師……鏡宮悟と、読水奏馬だよ」カツカツ

佐藤「……」

『第三回、ダイジェストで語る日坂杯戦争 く悪に墜ちる。聖杯のため。』

D先生「さて……南米での火事場泥棒で『欠片』を回収した鏡宮悟と読水奏馬は、故郷の日坂市に戻り『欠片』の研究を開始したそうだ」

D先生「当初、その『欠片』の正体は掴めなかっただろうけど……それもすぐに分かる。自分達がどれだけの物を手にしたか、どれほど危険なものを故郷に運び入れてしまったかを理解するのに、時間はかからなかったろう」

D先生「話によると、読水は数年で『欠片』の研究から離れ、逆に鏡宮は『バルーンスパロー』の事業拡大と研究にのめり込んでいったらしい」

D先生「読水奏馬が鏡宮から離れたのは、鏡宮の強引な事業拡大と……子供が生まれたことが理由だそうだよ」

佐藤「……それが、読水竜也さん？」

D先生「そうみたいだね……」

佐藤「……」

D先生「ちなみに鏡宮の方は、それから数年後に結婚してる。夫人……旧姓、弓口青音（ゆみぐち あおね）さんは『バルーンスパロー』設立の出資者で、且つ社名の命名者らしいけど、当時は何と中学生だったそうだよ」

佐藤「……ほお、なるほど」

D先生「……ちなみに、結婚についてはそれなりに揉めたらしいよ？」チラツ

佐藤「ふむ……あ、いや、その辺は聞かない方が良いかな？」

D先生「そうだね」ザンネン！

D先生「あ、それと鏡宮が研究を続けているこの時期に、さつき話に出てたダーニックおじさんはこの世から退場するよ」カツカツ

佐藤「結構長生きでしたね、おじさん」

D先生「しかも『冬木の大聖杯』までこの世界から消え去っちゃう」カツカツ

〃2000年、しかもその光景を海上にいた魔女が目撃する〃

佐藤「……アレ？ ナンダロー。補足的な解説だったのに、左腕が疼くのナンデダロー」フニャ

D先生「ナンデダローネー……？」ソツポムキ

『第三回、ダイジエストで語る日坂杯戦争 くイ・ピ・カ・イ・エ（ブチ切れ）』

D先生「そんな訳で鏡宮悟が研究を進めていた『欠片』だけど、2008年……日坂亜種聖杯戦争の10年前に大きな事件が起きる」

D先生「南米での聖杯戦争に関わっていた第八秘蹟会のマリオ神父が『欠片』の行方を知り、独断で強奪に踏み切ったんだ」

D先生『『クランプス作戦』と名付けられたその奪還作戦は、聖堂教

会の承認を待たずに強行された。クリスマスで賑わうはずだった1月25日の夕方、マリオ神父率いるシプレス碑炎騎士団が山中に建てられた研究所（工房）を襲撃。結果、無関係な民間人を含む多くの死傷者を出した……既に無関係な立場であった読水奏馬、その妻の読水サラを含むね」

佐藤「……………」

D先生「ただ、この作戦は完全に失敗だった」

D先生『欠片』こと第二百七十四号聖杯は、戦闘中に内包していた霊力を放出してしまったんだ。霊力は日坂市全域に散らばり、山の麓まで続く大規模な地滑りまで起こった……つまり『欠片』は聖杯として機能しつつも、肝心の霊力が空っぽのただの器となってしまうた訳だよ」

佐藤「ざまーないですね……けど、何でそんなことが起きたんですか？」

D先生「聖堂教会も色々仮説はあげてるみたいだけど、真実は定かじゃないみたいだね……」

D先生「……ただ時を同じくして、地滑りに巻き込まれながらも奇跡的に生還した少年がいたそうだよ。彼は後の調査で、後天的に魔術回路を獲得していたらしい」

佐藤「……奇跡的に、ですか。それがあの、セイバーの……」

D先生「……そうだね。その少年は後にマリオ神父の養子となり、聖堂教会の代行者シユウジ・アルバーニとして生きることになる。しかもマリオ神父は彼の特別さに気づいており、その覚醒を狙っているそうだよ」

佐藤「……………」

D先生「何はともあれ、十年前に行われた『クランプス作戦』は失敗。『欠片』は生き残った読水奏馬の息子、読水竜也に託され国外へと持ち出された」

D先生「その頃、襲撃から生き残った鏡宮の方は神父と取引し、聖杯戦争を通じて『欠片』を復元することを提案していた。そうして後十年と続く関係を作り上げたんだ」

佐藤「つまり……えっと、今回の亜種聖杯戦争の魔力源は『欠片』にあつた霊力で、その目的も『欠片』を聖杯として復元する為に行われているってことですか？」

D先生「花丸大正解。少なくとも、主催者と監督役の間で結ばれた取り決めのうえではね。もちろん二人とも、そのうえで色々な思惑なり感情なりがあるんだろうけど」カツカツ

〃復讐とか、聖人のこととか〃

佐藤「うーん。この……この……絶対仲良くできないのに、どうしてこういうことするのかなあ!？」

D先生「政治の世界じゃあ、よくあることだよ……まあ、勝先生のようにはいかなかったみたいだけどね」

佐藤「……?」

D先生「おっと……本編へえ、続くう！」クワツ

佐藤「えー……」

『第三回、ダイジェストで語る日坂杯戦争 く放課後く』

D先生「ここまでが日坂亜種聖杯戦争以前に起こった『欠片』に関する出来事だね」

佐藤「先生ー、本編までの経緯が長すぎると思いまーす」

D先生「誠に申し訳ございません……！」ビシイ

佐藤「まさかのマジ謝り!？」

D先生「……」

佐藤「そして、何て綺麗な平謝り……」

D先生「……」

佐藤「……えっと、先生？」

D先生「……こうして夢の中で毎度授業を行ったのは、君のこれからにどうしても必要な知識だと思ったからだ」

佐藤「え？」

D先生「君はこれから、大きな選択を求められる。それは君にとって……そしてこの日坂聖杯戦争の結末を決める上でも、とても大きな選択となる。僕も、相応の覚悟が必要にだろう」

佐藤「……………」

D先生「さ、今度は本編で会おうか……あ、これ見て見て」

佐藤「え？」

D先生「今だ！ スマホで催眠解除!!」シユビビビ

佐藤「ニッ ユアッ アッ アッ アッ」クワッ

D先生「うわすっごい声」

佐藤「(。ω。)」ガバッ

鏡宮「うわびつくりした……」ビクッ

佐藤「(。ω。)… ……」

鏡宮「あ、いや……よく眠れたかね？」

——卒業式に続く